



AC
145
G855
1939
v.11

Gunsho ruiju

East Asia

PLEASE DO NOT REMOVE
CARDS OR SLIPS FROM THIS POCKET

UNIVERSITY OF TORONTO LIBRARY

昭和四年八月出版

羣書類從

第拾壹輯

東京

續群書類從完成會



AC
145
G855
1939
v. //

群書類從第十一輯目次

和歌部

卷第百六十三

爲尹卿千首和歌應永二十二年……………冷泉爲尹……………一

卷第百六十四

千首和歌太神宮法樂天文十一年二月九日……………四二

卷第百六十五

白河殿七百首文永二年七月七日當座……………八三

七百首於禪林寺被行之

後嵯峨院

前左大臣

民部卿爲家

五條前

大納言實季

侍從中納言爲氏等

卷第百六十六

龜山殿七百首……………一二二

後宇多院

忠房親王

前藤大納言爲世等

卷第百六十七

堀川院御時百首和歌康和年中……………一四二

稱太郎百首

藤原公實

大江匡房

源國信

源師賴

藤原顯季

源顯仲

藤原仲實

源俊賴

源師時

藤原顯仲

藤原基俊

永緣

隆源

前齋院肥後

高倉院一宮紀伊

前齋院河內

卷第百六十八

永久四年百首永久四年十二月廿日……………一八〇

號次郎百首

源顯仲

藤原仲實

源俊賴

源忠房

卷第百六十九

久安六年御百首……………一九九

是第二度也

初度者題同堀川百首

崇德院

中納言公能

參議教長

左京大夫顯輔

前備後守季通

降季朝臣

尾張守親隆

右馬權守實清

丹後守顯廣

散位清輔

堀小大

逆川

卷第百七十

正治二年第二度百首和歌……………二三八

後鳥羽院

範光

雅經

具親

信實

家長

長明

季保

卷第百七十一

宮內卿越前神主康業(慈圓隱名)……………二六七

內裏名所百首建保三年十月廿四日……………二六七

女房(順德院)

僧正行意

參議定家

俊成卿女

兵衛內侍

宮內卿家隆

從三位家衡

卷第百七十二

弘長百首……………二九五

稱七玉集

前太政大臣

藤原基家

藤原家良

卷第百七十三

丹後守爲忠朝臣家百首……………三一二

藤原爲氏

藤原行家

藤原信實

入道民部卿

藤原爲忠 藤原忠成 藤原俊成 源仲正
藤原爲業 藤原爲盛 藤原盛忠 源賴政

卷第七十四

木工權守爲忠朝臣家百首 三三二

木工權頭爲忠 勘解由次官親隆 加賀守顯廣
兵庫頭仲正 伊豆守爲業 散位爲盛
備後守爲經 散位賴政

卷第七十五

句題百首 三五二

稱五玉集

賴阿 良守 良春 賴宗 周嗣 賴阿點

卷第七十六

俊成卿文治六年五社百首 三七〇

太神宮 賀茂 春日 日吉 住吉

秋日陪社壇同詠祈雨百首和歌

津守國冬 三三八
京極爲兼 三八七

爲兼卿鹿百首

春日社法樂 一條兼良 三九二

卷第七十七

道助法親王家五十首和歌 三九七

道助法親王 右大將公經 春宮權大夫實氏

藤原保季 藤原雅經 藤原知家 藤原家隆
藤原信實 藤原行能 幸定 範 藤原家隆
藤原光經 藤原孝繼 藤原秀能 俊 孫等

卷第七十八

新古今和歌集竟宴倭歌 元久二年三月 四二三

續古今和歌集竟宴倭歌 文永三年三月 四二六

文治六年女御入內御屏風和歌 三條右大臣 四三〇

後法性寺攝政 後德大寺左大臣 右京權大夫隆信

後京極左大將 從三位季經

左近權少將定家等

昭慶門院御屏風押色紙和歌 四三八

最勝四天王院障子和歌 建永二年 四四一

御製 慈圓 大納言通光 俊成女

藤原有家 藤原定家 藤原家隆 藤原雅經

源具親 藤原秀能

卷第七十九

句題和歌寬平六年四月廿五日 大江千里 四五二

三月三日紀師近曲水宴 四五九

三百首和歌 宗尊親王 四六〇

七夕七十首 藤原爲理 四六九

群書類從第十一輯目次終

群書類從卷第一百六十三

檢校保己一集

和歌部十八千首四

爲尹卿千首和歌

春二百首

立春朝

紀の海や春は長閑に立かへて今朝聲となし興津白波

立春天

とは、やなすめるは空と成しより霞も春もたちやそめしと

立春日

あら玉の春や外山の朝日影先さしむかふ空そのときき

立春風

春やはや立ける波の岩こすけそれもなひきて河風そ吹

立春霞

あさもよひ木々の梢のうす霞分來る春やしなりしつらむ

立春雲

横雲のわかるゝきはも見えわけてかすめる山の初春の空

立春雪

亂れちる雪をはいかに春のけふこんといふなる嶺の松風

立春氷

御吉野や氷にむすふ瀧の糸を岩ほにみたす春は來にけり

立春水

けふといへは春の岩井の朝氷まつ若水にくたきつる哉

都立春

今朝は又都のてふり引かへてちひろのみしめしつか門松

早春山

下もえの若草山の雪とけにそれも見え行谷のむもれ木

早春關

春やはや木幡の關の朝ほらけ都のなつみやゝかすみぬる

早春河

氷とく涙こそあらめはやせ川はやくも春のたちにけるかな

早春湖

春のきる霞の袖に成にけりな花は枯しまののうらなみ

早春浦

今ははや浪ものつけしおふの浦に舟のりしてや春のきぬらん

野子日

賀茂山のすそののあふひそれならて今も二葉の松やひかまし

子日松

藤原爲忠 藤原忠成 藤原俊成 源仲正
藤原爲榮 藤原爲盛 藤原盛忠 源賴政

卷第七十四

木工權守爲忠朝臣家百首 三三二

木工權頭爲忠 勘解由次官親隆 加賀守顯廣
兵庫頭仲正 伊豆守爲榮 散位爲盛
備後守爲經 散位賴政

卷第七十五

句題百首 三五二

稱五玉集

賴阿 良守 良春 賴宗 周嗣 賴阿點

卷第七十六

俊成卿文治六年五社百首 三七〇

太神宮 賀茂 春日 日吉 住吉

秋日陪社壇同詠祈雨百首和歌

津守國冬 三三八
京極爲兼 三八七

爲兼卿鹿百首

春日社法樂 一條兼良 三九二

卷第七十七

道助法親王家五十首和歌 三九七

道助法親王 右大將公經 春宮權大夫實氏

藤原保季 藤原雅經 藤原知家 藤原家衡 藤原家隆

藤原信實 藤原行能 幸定 範 藤原範宗 昭

藤原光經 藤原孝繼 藤原秀能 俊 孫等

卷第七十八

新古今和歌集竟宴倭歌 元久二年三月 四二三

續古今和歌集竟宴倭歌 文永三年三月 四二六

文治六年女御入內御屏風和歌 三條右大臣 四三〇

後法性寺攝政 後德大寺左大臣 右京權大夫隆信

後京極左大將 從三位季經

左近權少將定家等

昭慶門院御屏風押色紙和歌 四三八

最勝四天王院障子和歌 建永二年 四四一

御製 慈圓 大納言通光 俊成女

藤原有家 藤原定家 藤原家隆 藤原雅經

源具親 藤原秀能

卷第七十九

句題和歌寬平六年四月廿五日 大江千里 四五二

三月三日紀師近曲水宴 四五九

三百首和歌 宗尊親王 四六〇

七夕七十首 藤原爲理 四六九

群書類從第十一輯目次終

群書類從卷第百六十三

檢校保己一集

和歌部十八千首四

爲尹卿千首和歌

春二百首

立春朝

紀の海や春は長閑に立かへて今朝聲となし興津白波

立春天

とは、やなすめるは空と成しより霞も春もたちやそめしと

立春日

あら玉の春や外山の朝日影先さしむかふ空そのときき

立春風

春やはや立ける波の岩こすけそれもなひきて河風そ吹

立春霞

あさもよひ木々の梢のうす霞分來る春やしなりしつらむ

立春雲

横雲のわかるゝきはも見えわけてかすめる山の初春の空

立春雪

亂れちる雪をはいかに春のけふこんといふなる嶺の松風

立春氷

御吉野や氷にむすふ瀧の糸を岩ほにみだす春は來にけり

立春水

けふといへは春の岩井の朝氷まつ若水にくたきつる哉

都立春

今朝は又都のてふり引かへてちひろのみしめしつか門松

早春山

下もえの若草山の雪とけにそれも見え行谷のむれ木

早春關

春やはや木幡の關の朝はらけ都のたつみやゝかすみぬる

早春河

氷とく浪こそあらめはやせ川はやくも春のたちにけるかな

早春湖

春のきる霞の袖に成にけり花は枯しまののうらなみ

早春浦

今ははや浪ものつけしおふの浦に舟のりしてや春のきぬらん

野子日

賀茂山のすそののあふひそれならて今も二葉の松やひかまし

子日松

袖ふれていくとせなれんうつしてもいまそみとせの梅の初花

紅梅

心して誰かゝれとはうへそへし柳のいとにむめのくれなゐ

落梅

よしやたゝおこたれ庭の朝きよめ梅うちちりてかほる春風

柳露

朝みとりぬきたる露の玉柳こほさぬ風は吹としもなし

池柳

これやまたつゝみのうへのさし柳ならひの池に春風そふく

岸柳

立田川きしの柳やうかふらむみなかたふちの色に見えつゝ

門柳

さほ姫の柳のかみやくらふらん門のゐつゝになひく春風

河柳

雨ふかき淀の川浪こえにけり今はと中の岸の青やき

路若草

冬かれのもととのよもきもましりつゝむらゝ青き道の芝くさ

岡早蕨

さすか又おりのこしけり道よりは遙におくの岡の早わらひ

樵路早蕨

初わらひ先おりそへて山人の歸るつま木やすくなかるらん

山春月

引わたす春の霞のひとへ山月やそなたにかけにほふらん

關春月

相坂の關の杉まを出てたに清水にうとき月をかすめる

江春月

はやしほや春の霞のなかれ江に猶かけとまる夜半の月哉

春曉月

月は猶霞のそこになもりつゝかれの音すむ明かたのそら

春月幽

更にまたかすめるほととのしらるゝは袖にうつらぬよ半の月影

朝春雨

朝戸明にしのふの露やみたるらんふるにもまさる軒の春雨

夕春雨

遠近の入相のこゑのうちなもり長閑き空そ雨に成ぬる

谷春雨

水音のまさる計もなかりけり谷の木くれの春雨の空

野春雨

あをみゆくふるからなのゝ春雨にまた枝さひし柏木のかけ

庵春雨

絶てすむ心よいかにかやか軒かゝる葛屋のよはの春さめ

春駒

春駒のたけにもたえぬ程みえてなかやかくれにあさるのへ哉

岡雉

焼すてしかたなをか野への夕霞またやけふりとさす鳴らん

野雲雀

しはしたゝ行人すくすほとなれや野へにもちぬ夕ひはり哉

路雲雀

すきいれし野田の芝生やのころらんゆくてのつゝみ雲雀鳴也

落イ

歸鴈知春

うかりけるそのならはしや思ふらん鳴てそかへる春の鷹かれ

曉歸鷹

涙さへとまらさりけり春の鷹鳴すてて行あかつきの空

夕歸鷹

聞佐ぬ友はさきたつ春の鷹一二のゆふくれのこゑ

夜歸鷹

我がたによるとおもはてみよしのの田面の月に歸るかりかれ

歸鷹連雲

うきて行そなたの雲のあとに又したひてかへる春の鷹かれ

峯歸鷹

天津かり春やあらぬと思ふらん雲こえかぬるこしの大やま

海歸鷹

を舟こくうなかみかたの朝ほらけ興めかりかれ波になくなり

歸鷹似字

うす霞下行鷹や玉章のうらまてとほるよそめ成らん

歸鷹幽

はかせにもはらひかれたる夕霞をのれそきえて歸る鷹金

遠歸鷹

さすが又山をはこえぬ程なれや霞にのこる鷹の一行

春山

今は又花のかまへのほともし雪うちきえず春の山さと

春野

紫のねはふよこのはこゝかとよゆかりの色にすみれさくなり

春關

東路やその名に聞し關越て霞を分るむさし野の原

春河

水上の雪けの水やまさるらん氷を越るはるの川なみ

春海

伊勢の海や波たかき浦は名のみして霞むじよりの興のつり舟

野遊

あきつの薄みしかき面かけのつはなぬきつゝけふも暮しつ

遊絲

永日の空にみたれておたまきのくりかけてけり春のいとゆふ

待花

なにとなく雨にはならぬ花曇り咲へき頃やきさらきの空

栽花

梢こそ中々見えぬ櫻花まやのあまりにちかくうへつゝ

尋花

あくかるゝ心のまゝにこえきつゝかへるさ遠きはなの山ふみ

初花

さきねともよそのうはさはさきさきりつひまある比の庭の初花

見花

かたとほり先やみ山の花のかけやすらははまた暮もこそすれ

翫花

あさおきの夕くれまてはめかれせず月にも又や花のしたふし

折花

くたり行山路の雲や里人の花おりかさしかへる成らん

交花

嵐吹尾上の花も入あひも袖におちたるしかの山こえ

曉華

朝花

さてははや花成けりな山かつらかけもはなれぬしの、めの空
花の色のあさゐる雲の立田山ゆふつけとりの聲にあげつゝ

夕花

問人はかへりすみゆる山里のはなに音なふ入あひのかれ

夜花

明は見む梢の櫻ちらすなよ春の一夜の床のやまかせ

山花

常よりも山のよそめや近からむ花にしらめるはるの明ほの

嶺花

あらし吹きそ山櫻ちりにけり峯にとたえの雲のかけはし

谷花

由かせに花のうは波かけこして櫻にしつむ谷のしははし

岡花

花見つゝことたりぬへき夕暮に月もむかひの岡のへの里

杜花

あまのすむなきさの森の櫻花さすかしほ木に残しをきけり

野花

有とみし野中の櫻咲にけり山にもそはぬ雲そかゝれる

關花

逢坂や梢の花を吹たてて關にとまらぬ春の夕かせ

瀧花

布引やおちくる瀧のそれならてよそにちらすや花のしら波

禁中花

鳥の聲花のかほりもたゝならす雲井の春の明ほのの空

社頭花

神垣は花咲にけりうれしとも今こそ御戸のあけほのの空

古寺花

初瀬山ひはらの嵐おちにけり花にたまらぬ入相のかれ

故郷花

あはれたかもとの軒はの跡ならん櫻ふりぬる浅茅生のやと

里花

花さかはつけんといひし音信のほとふるさとのみよしのの奥

山家花

白雲のまきたつかたと人や見む軒はかすまぬ花のゆふはへ

庭花

さきおもる花の下枝のしつみきて散ぬも庭の苔の上哉

閑居花

今そしる竹のひとむらめくりつゝおくある花の道のみえぬか

花雲

さそひたつる風の宿りそしられぬる松よりなひく花の薄くも

花雪

しはしたゝ風のかしたる程見えて松の葉うすき花の白ゆき

花枝

枝はみなえたにかゝりてさきなもり庭にうつまぬ花の白雪

花梢

梢こそ冬の本立に成にけれふかきは庭の花のしらゆき

花本

引わたす霞のうへの花さかりいつくかさても木かけ成らむ

花根

鳥はまたよそなる谷の櫻花ねにかへりても山かせそふく

花挿頭

はつせめのこれやかさしのおりのこしなよふ計は見えぬ花散

花手向

いくたひか心ならひの手向しつ花にはあかす神やおもふと

花麻

おしやけに神路のさくらおほぬさのとりあへす吹春の夕風

花袂

さは姫の春の袂やかすむらんうす花そめの明ほののそら

花衣

木のものに柴すり衣それなから花もみたるゝ山風そ吹

花鏡

歸るさやはや暮ぬらん櫻かり野守のかゝみ月そうつれる

花錦

しはしまた引とめて見るこま錦花成けりなあけほのゝ山

花匂

そことなくうきたる花の匂ひ哉櫻にたかき春の山かせ

花色

暮やらぬ遠山もとの花の色にわくれてひゝく入相のかれ

花使

筆は猶かきりありとや咲花のさかりをつくるつかひ成らん

花主

つくくゝと花に心をすまず哉人こそとはれやとの夕くれ

花面影

面影そなわうとみえぬ櫻花散はうかりし春の山風

花形見

たか植し花そとたにもいはれはやみて忍ふへき人はなくとも

惜花

これそとよ待し日數のつもりきて程なき花の庭の白雪

落花

さてははやみ山さくらばちりにけり花もかさゝて歸るさと人

殘花

今まではまてはや風ものこしけめくれる山のそはの櫻木

三月三日

さらは又三月の三日の月の影はやさしそへよ桃のさかつき

桃花

しはしたゝ此まゝ見はや夕日影なこり色あるもゝの花その

梨花

さてははや軒のつまなし散にけり葎の門をとちてみえつゝ

山田苗代

たれはまつこゝにやひたす小山田のたゝ一町の苗代の水

路苗代

あせをこす苗代水のほとみえて道のぬかりのかはく間もなし

河・苗代

三輪川の水せかけて今や又ふるの山田の苗代のころ

夕蛙

暮ふかきいりの堤の下水に聲うちそへてかはつなくなり

田蛙

雨かゝるあれ田のさゝめ末ふして水のあさみに蛙鳴なり

野莖

御馬草のかるてにもれしつは葦今こそ野へに花咲にけれ

庭 葦

野すちやる庭にうつして葦草秋待花のすさみにそみる

摘 葦

露ながら袖にすみれを摘いれて歸れはしたふのへの月影

松下躑躅

ころそあらぬつゝしは松の下紅葉しくれめきたる風渡る也

躑躅紅

あはれたかきぬかさ岡の岩躑躅それもあかもの色にみえつゝ

池杜若

ちらてたに花こそうかへかきつはたみさひをはらふ池の夕風

澤杜若

水よりも遙にうへのかきつはたけにあさ澤のほとやみゆらん

欸冬露

影うかふ井手の河かせ吹にけりおちても水の山ふきの露

夕欸冬

やとりとりしはしも見はや夕暮のまかきは山の欸冬の花

路欸冬

行やらて花にしはしそせかれぬる川そひみちの山吹のころ

池欸冬

池水のひしのうき葉にとちられて影みぬ岸の山吹の花

河欸冬

はし姫のきぬの色なる山吹に波おりかくるうちの川かせ

鳴欸冬

咲にけり月のかつらの花ならて又河嶋のやまふきの比

岸欸冬

朝日山きしの山ふき咲にけり花の下行宇治のしは船

里欸冬

よしとはしさてもいはての里の名を花にみせたる山吹の比

庭欸冬

春をへて猶所せく成にけりうへし垣れの山ふきの花

籬欸冬

さきおもる花もさまてにみたれぬは籬にかゝる庭の山吹

夕 藤

さゝかきの夕はへふかき色そへてみとりのうへの春の藤なみ

岡 藤

たちならふなかへの松のひまとちて梢にたむる藤のむらさき

池 藤

せりなつむ袖かと見れば紫の藤さきかゝるはるの池水

江 藤

しほのひく江河の末のそなれ松又こえて行春の藤波

浦 藤

多枯の蟹のこれはかつかね藻屑かとそこにも藤の波や立らん

岸 藤

柚川やおとす筏にかゝるなりうちはへさけるきしの岩ふち

松 藤

岩代の松のたくひに見えぬへしむすひかけたる藤の花ふさ

春欲暮

花鳥の色音をせめて残さなん春の日かすは限りありとも

暮春月

名残をはいかにせよとて三月山かすみてかゝる有明のつき
暮春雲

暮春霞

さてははや霞のみ尾に舟出してかへるか春のすゑの白波

暮春鐘

あちきなくれ覺もつくす心哉三月いまはのあかつきのかれ

留春不留

何方にすてゝか春のくれはとりあやしやさては行衛とはゝや

惜三月盡

かひなしや心は春にそふとてもかへりみもせぬけふの別ち

三月盡夕

限りあらは秋の涙もかゝらめや春よいまはの夕暮のそて

三月盡夜

なれゝて花の面かけ鳥の聲夢になせとや宵のうたゝれ

閏三月盡

三月猶もとの日數のまゝならば今日まで残る花もあらまし

夏百首

首 夏

谷の戸にかへりし鳥の聲とちて花の行衛の夏の山かせ

朝更衣

袖にこそ先かへてけれ夏きてもまた音にたてぬ蟬の羽衣

更衣惜春

今日の袖たちかふるとも花染も猶みそかけに影やとゝめん

餘花

なをかりし限りも今は山櫻花なきころの花にむかひて

新樹

なにとなく軒はにうへし若かへてまたかけあさき夏木立哉

路卯花

すみ焼しその比分し雪よりも卯花ふかきなのゝかよひち

籬卯花

まかきなる竹より下の花うつ木うつみし雪を見せて咲けり

田家卯花

おなしくは月なもよとせ卯花のその田にかゝる雪の下水

卯花似月

いりはてぬ月は影をや残すらむ卯花山のあり明のそら

卯花似雪

玉川の里の垣ほの袖すりに雪こほれます卯花のころ

葵

なのつかからくるあふひや袖ながら又うき草のかもの川なみ

待郭公

つれなさも限りやあらん郭公小雨のゆふへ月の明ほの

尋郭公

行衛なくしたひ來にけり時鳥花の所はさたかなりしを

人傳時鳥

時鳥それこそあらめ鳴つとはさたかになとかきかせさるらん

初聞郭公

せめてたゝひと聲まてと思ひしをいつはりになす郭公かな

時鳥未通

き、つはやそなたはいかに時鳥一むらさめのすゑの里人

月前時鳥

月見てもなくさみぬへきやすらひにそれさへき、つ山郭公

雲外郭公

時鳥うす雲かけて行月のあと又したふ一聲のそら

雨中郭公

軒をうつ雨のまきれの時鳥さそ忍ふ音も今もらすらん

曉郭公

横雲はわかるゝかたの郭公をのれそとまるやまのはの聲

曙郭公

かくてこそ聞ともきかめ郭公月は残りてあけほのゝこゑ

朝郭公

もし人のおさいするとやおもらんしのひれ^{「マ」}もらす時鳥哉

夕時鳥

出にけりゆふ山こしの郭公まだまたるへき月をのこして

夜郭公

もしやとてよひの手枕敷かれてねに聞つる郭公かな

山郭公

夕雲の木ふかき嶺の時鳥一むら雨のふりいてゝなく

杜時鳥

月にほふけしきの森の郭公いかにつれなき音をおしまし

岡郭公

うき身には人うとくとも時鳥なれたにせめてかたらひの岡

野郭公

いつくよりさても出らん郭公山にはとなきむさしのゝ原

原郭公

伊吹山さしも待つる時鳥あなのか原をやすくすきぬる

關郭公

鈴鹿路の關にとまらぬ郭公山田の杉に今夜鳴らし

浦郭公

郭公せとの入しほ落やみてをのれまかはぬあかつきの聲

渡郭公

村雨の今は山田の渡りして月にきゝつる時鳥かな

夢中郭公

夢とのみおもひやはてん時鳥あくる枕にこゑなきかすは

れ覺郭公

曉の目さまし草のれをそへて涙露けき郭公かな

獨聞郭公

忍ひ音を今宵そもらす郭公枕ならへぬ程やしるらん

郭公幽

くゑなかとおもふれ覺の郭公それにさたまる一聲も哉

田家早苗

十代にもたらぬ庭田のさなへ哉^ひいのでまいる程たにもなし

急早苗

小山田のかたなるあぜの一町もけふのこさしと早苗とるなり

早苗多

うちむれて千町のさなへとるならし此一村はすむ人もなし

池菖蒲

池水に一もとすてしあやめ草軒ふくほとにことしなりぬる

沼菖蒲

今は早かりてつかれんあやめ草ぬまのぬなはの先むすひつゝ

刈菖蒲

かりこむる露の行衛を尋来てあやめに契る軒の月影

蘆橋蕪風

むかしとてとなくはゆかぬ夢なれや匂ひにさむる風の立花

雨中蘆橋

雨をもき花たちはな枝たれて匂ひにちかき軒の下ふし

簷橋

昔たかうへし軒はの朽木にて花たちはなにのこる夕かせ

櫓

花の春紅葉の秋も何ならずあふちうちゝるもりの夕かせ

夜五月雨

さすが又月の夜比の五月雨の明ぬにしらむ軒のたま水

山五月雨

けふいか猶五月雨のふるはたをなたれて埋む山のしる柴

柚五月雨

柚川のをのつからなる山くたし筏にならふさみたれの比

橋五月雨

五月雨は下ゆく舟もなかりけり橋までをよふうちの河波

江五月雨

鷺のある江川におほふし柳いまは波こすさみたれの頃

瀧五月雨

水上の目ころなかりし瀧津瀬の今をちこちの五月雨の比

河五月雨

梓弓生田の川の瀬をはやみ鳥もうかはぬさみたれの頃

湖五月雨

まのゝ浦やまさる汀の五月雨に薄も今は波のした草

浦五月雨

海士のすむ磯邊に近く波越てしほひも見えぬ五月雨のころ

古宅五月雨

しのふ生る軒のいと水それなからみたれそへたる五月雨の頃

夜水雞

すゝむ夜の横の戸口のあけとなしさてやたゝかぬ水雞成らん

夏夜

月の名のかつらしけれる追風にせめてとすゝむ夕やみの空

雲間夏月

短夜の頃をやいそく夕雲にちかひて出る山のはの月

水上夏月

夏刈の草をあらめ澤水に移れる月のみしか夜の空

樹陰夏月

ならの葉の今やかけゆくほとならん袖にしはしは夏のよの月

夏月涼

いく夜まてたゝ此まゝに明ぬらんやり水ちかき月のうたゝれ

夏月易明

すゝむとてあたりの友をよひたてゝふりさけみれば月の曙

瞿麥露

たくひなやまかきにしのふ姫ゆりのそひふしたる床夏の露

夏瞿麥

露のうへゝなひかぬ花もうつろひて苔に色つく庭の撫子

夏草露

杜夏草

花さかぬ夏野の草にむすひてやこと色からぬ露とみゆらん

野夏草

あはれたか花にかよひし跡ならんしけりなくるゝ森の下草

徑夏草

さをしかのなかなはかりそ夏ふかき薄なかやのをのゝ夕かせ

庭夏草

露ふかみ夏野の草のかたふきて分ぬにみゆる道の一すぢ

夏山

はなをそきそれこそあらめ月影をへたてゝ茂る軒の下草

夏野

これや見し櫻の山の青木立おもかけうとく茂りあひぬる

照射

茂り行野への高かや青つゝらそれさへかゝる露の下道

鵜河

いつかたの草ふしならんともしにもよる程をそき嶺のさを鹿

夜螢

暮行はやかて見ゆるや上かつら前の瀬のほるかゝりなるらん

橋螢

ともし火のすき間にもゆる光かとみゆるや窓の螢成らん

水上螢

しはしまた河せのほたるとたえして橋の下行夕やみの空

池螢

池の面にうかふ螢のほし月夜水くらからす更に見えつゝ

夕闇にことに螢のみたるゝは月に光やかるのいけ水

江螢

おほくらの入江の月の跡に又光残してほたるとふなり

澤螢

月ははや松をへたつる深くさのふしみの澤に飛螢哉

浦螢

海士人の夜鹽くも間もけちやらていそやのかたにもゆる螢火

草螢

なかや原薄にきえて飛ほたる又あらはるゝ道柴のうへ

螢似露

飛螢みたるゝ露もそれなから草のすゑ野に夕風そ吹

螢似玉

草の糸に玉ぬく露の數そへて螢もすかる野への夕闇

蚊遣火

をちかたや煙つゝかぬ蚊遣火にすくなき里のよそにみえつゝ

垣夕顔

なをさりの竹のあらかき末こして夕顔うつむ道のへのやと

池蓮

池水にもふしのふなやみたるらん蓮の浮はのゆるき立ぬる

水室

いつれなかけふはそなへん松が崎うた野も近き水室なれとも

夕立風

風さはく林の鳥もたちうかれあらくも過るゆふたちの空

夕立雲

玉水の音は残りて夕立の跡すむ軒のむら雲の月

山夕立

夕立ははや山しなのおく晴て音羽になひくうき雲の空

河夕立

ふりにけりきふねのおくの夕立に一のせまさるかも川波

夕立易過

白雨の水まさ雲のはやすみて涼しくうかふ三日の月影

杜蟬

鳴蟬の聲一しきり雨かけて雫はいつかもりの下かけ

樹陰蟬

川そひの汀の浪もうつせみの柳にかゝる夏のゆふかせ

松下泉

松陰やよりゐる岩に先ひえて清水はやかて結ふ共なし

夕納涼

山影やすみにきぬる瀧のもと花にもかゝる夕なりしな

樹陰納涼

日ころより朽木の柳かけあさみむすふし水そぬるく成ぬる

納涼忘夏

まとあけてはしぬすしき夕暮にこぬ秋うかふ松の下風

六月稜

ふけぬとてかはらに出ぬ里人やたゝもとの御稜しつらん

秋二百首

立 秋 異

さそふらん一葉も見えず朝またき木かけに遠き秋の初風

立秋天

秋は、やけふたつ波の天の河ほしあひちかくなりける哉

立秋日

朝戸明のめにさやかにも見えてけり日影にむかふ初秋の空

立秋風

萩に吹まくすにふれて今朝ははやいつしかなれや秋の初かせ

立秋露

いつしかとあさちかうへに結びけり秋くるよひの露の手枕

初秋曉

なにとなくれ覺の枕物さひし秋此比のはつ鳥のこゑ

初秋夕

秋よたゝ日數がされはいかならんいまたに涙ゆふくれの露

初秋夜

夕月夜それこそあらめ夢をたにさても見はてぬ初秋のそら

初秋雲

今はまたしくるゝまてはなけれ共秋のならひのうき雲の空

初秋衣

小夜衣がされもあへす吹にけりまたあきつはの袖の秋風

待七夕

一とせをくらすたにある柵機のいま此きはにこゝろつくすな

七夕雲

夕雲の立ゐにさこそいそくらめ契りしまゝの星合の空

七夕霧

しのひけり霧間をとほるよはひ星天の河原の夕暮の空

七夕橋

なた巻のくりかへし猶ちきれとやふみきの橋の星合の空

七夕衣

棚機の海士の羽衣引かされうらみもさこそまたはむつこと

七夕舟

さてもまたこそわたりやこれならんうつろふ月の天の河舟

七夕後朝

なとさらにかちもかくさて徒然にけさかくすらん天の河舟

曉露

明ぬより手向にとりつ朝島うれ野のいもの露ものこらす

朝露

朝あけの月は空にそのこりける露のやとりも草に捨つゝ

夕露

見るまゝに夕日かくれのあさち原露になるかと末をもちつゝ

夜露

夜なゝに月こそかれす問てけれ人は分こぬよもきふの露

野露

あつま野の空には雲の晴ぬれと袖にしくるゝかやか下露

原露

月そまつ分行袖にみたれるしのふかはらの露の秋かせ

徑露

あはれたかもすそにかけし跡ならん露かはきゆく道のさゝ原

故郷露

枕にも袖にも月のあひやとり軒はやあれて露のふるさと

庵露

雨そひし野分のゆくゑ猶見えて露所せき岡のへの庵

庭露

みたすへき草葉の風もなかりけり露のしらすの庭の月かけ

草露

中垣をこえたる萩のねわたりに一もと分るあきのしら露

淺茅露

明かたに行野の末や成ぬらんあさちか露に月のかゝれる

苔露

かたきしにあまれる露のさかり苔玉ゆらふく下風

袖露

秋はたゝ露も涙もわかさりきおほえすそての雫をちつゝ

枕露

うちしほれいと露しけきれ覺哉かならず草の枕ならねと

夕萩

夕しめり軒はの萩に吹風のみたるゝほとは音なかりけり

夜萩

風の音のふくれは庭にしつむ哉露にしかるゝ夜萩原

江萩

あしへよりこなたにみゆる萩原も鹽の入江に打なひきつゝ

庭萩

さのみよもしけくはうへし月のいるそなたの窓の萩の一むら

簷萩

軒ちかく見ても聞てもなくさむは梅の紅葉に萩の上かせ

野萩

なく露の朝ゆく鹿もみえぬへしもとあらに咲野への萩原

行路萩

あふ人の袖なる露の花すりに末野の萩の比そしらるゝ

河萩

散ちらすま萩みたる、立田川紅葉やまたぬ錦なるらむ

崎萩

小舟こく野嶋か崎の海士人の袖になよはぬ萩か花すり

庭萩

宮城野の秋のさかりもかゝらめや小萩こぼる、庭の夕かせ

女郎花靡風

さても又たか秋風にをみなへし結びもとめぬ露こぼるらむ

野女郎花

なく露のはやおちにきや女郎花さか野の風にうちなひくなり

徑女郎花

衣々の面影みせて女郎花さ、分る野の露に咲なり

岡薄

片岡の岩もと薄ほに出てとふ人まねく秋かせそふく

原薄

こゝまでも又さゝ波のをよふかと尾花を見ゆるあはつの、原

徑薄

分とまる尾花か袖にうつる目のなちかたのへに秋風そふく

刈萱亂風

里人の所々にかかるかやの残るもすこきのへのゆふかせ

岡刈萱

岡のへの松の下かけはれにけり誰るかやのあとのゆふかせ

庭刈萱

さひしやなたゝさはかりの風ふれて一ほ出たる庭のかるかや

蘭薫風

ななさりの花かとみれば藤はかまひと野に匂ふ秋かせそ吹

蘭露

ねれてたゝほすかとそみる藤はかま吹たつ風に露はこほれて

野蘭

藤はかまそのゝつゝきに咲萩の花のよそめはいつれともなし

籬槿

いかならん花の千種もよしやたゝ籬にかゝる露のあさかほ

曉虫

草に猶あれぬと見えて有明のもらぬ軒はに鈴虫のこゑ

夕虫

夕露のまかきの草に聞ゆなり月のやとりなまつ虫のこゑ

夜虫

霜をかぬ軒の下草したひきてまかきにうとき夜半の虫の音

野虫

小鷹狩それにはあらて鈴虫の聲ふりたつる野邊の草村

原虫

草よりもそれにそうつむまゆみちるあたちの原の虫の聲々

徑虫

分こほす露もさながら道もせの草にかけたるはたなりの聲

庵虫

あはれなる草の庵のれ覺哉雨そほふりて虫もなくなり

庭虫

庭の面のよもき淺茅のそれにしも猶音をそへて虫の鳴也

聞虫

身をこふるそのともし火の虫ならて枕のうへに聲を聞ゆる

聞虫

村雨のなひく草葉にうつもれてしはしはしつむ虫の聲哉

曉初鴈

有明の月もいのはの雲のうへにをちて亂るゝ初鴈の聲

夕初鴈

なにとなく木の葉色つく夕暮の空に時雨て鴈は來にけり

夜初鴈

山のはの月出る比の浮雲をこなたにみせて渡る鴈かれ

雲間初鴈

天津空をのか羽かせやはらふらん雲にわかるゝ初かりのこゑ

山初鴈

やかてはやそはの水田にうかふ也山のはこゆるかりの一つら

嶺初鴈

つくはれの峯飛越て來る鴈やこのもかもの小田に落らん

遠初鴈

いまはまた渡る小鳥の程なれや遠よる鴈の夕暮のそら

近初鴈

守小田のれ覺の枕夢たえて袖こす鴈のあけほのゝこゑ

初聞鴈

めつらしやけふは八月のたのにもやかならず鴈の渡り初らん

初鴈幽

聲きえて後こそしらめ夕暮の雲か鴈かの山のはのそら

朝鴈

野分せしそなたのわかや露とちて朝ゆく鹿の聲とまる也

夕鹿

月はまた夕の山を出やらのへに先たつさなしかの聲

夜鹿

おなしくは月を涙にやとさはやしかの音がよふ秋の手まくら

山鹿

山かせのそれはとたえて椎柴やなさゝ分よるさなしかの聲

谷鹿

川波も鹿のなく音もさらにたゝみ山おろしの底にきゝつゝ

岡鹿

なをさらに誰か聞らん夕月夜むかひの岡のさなしかの聲

野鹿

有明の月のほそみちほのゝと小野より出る小男鹿の聲

原鹿

さなしかのつまとふよはのうす霧に月もこもれる春日のゝ原

海邊鹿

舟いたすいそ山もとの明ほのにをのれも鹿もかひよとそなく

田鹿

さひしさも哀も今はすゝみけりむろのかり田のさなしかの聲

野鵲

深草の野へもつゝきてをのつからうつらや床にふしみ成らん

江鵲

入江なるまのゝ浦舟こく袖と尾花をみてや鵲立ちらむ

里鵲

かり人のこなたや分る程ならん末野の里にうつらなくなり

曉鵲

鳥はたと八聲に數をさたむらんさは田の鳴は百羽かくなり

澤鵲

あはれをばたゝ夕暮とおもひしを鳴立澤の晨明の月

田 鳴

水ほしてをしれ刈つる跡なれやそなたにやかて鳴のふすらん

秋田風

鹽風やこえて吹らん湊田のほなみ波よる秋の夕くれ

秋田露

露は袖月は枕になれにけり軒はみしかき小田のかり庵

秋雨

山もとのうすき夕日にもす鳴て梢にはるゝ秋のむらさめ

山 霧

松ひはらさのみなかりし山なれやあらしはらはぬ峯の夕霧

野 霧

わけてななたゝ一むらの夕霧や野中の森をこめて立らん

關 霧

あれぬとも月やはもらぬ不破の關秋の夜霧は軒に立つゝ

河 霧

水無瀬河ありても見えぬ波のうへに霧をそなかつ秋の夕風

浦 霧

和田のはら嶋かくれにはなられとも行舟見えぬなみの夕きり

駒 迎

けふはまた雲井の庭の引分に逢坂いそけ望月のこま

八月十五夜

わたつ海の最中にすめる我からや今宵の月のなにしあふらん

夕 月

夕日影なを色とまろうす雲のこなたに出る三日月の空

夜 月

さのみまたふけさりけりな月影は軒はを過ぬ秋の夜の空

曉 月

つく／＼とおほえすみつる月影におりうらめしきは鳥の聲

山 月

富士の根の雪より出る秋の月水やくたく田子のうら波

峯 月

月はゝやこなたの松にかゝる也かきなる山の嶺をつくして

谷 月

横ひはらしけれる山の水の間よりおちてすくなき谷の戸の月

杣 月

さひしさの限りなりけり杣山のこやさす月の有明の空

岡 月

いつかたにあくかれ出る程ならん里しつかなるをかのへの月

杜 月

月さゆる森の梢に聞ゆなり雪のしたなる夜からすの聲

野 月

月はゝやいはたの小野にかたふきぬ山路の末や有明の空

原 月

水音のいりのつゝみの秋風に月影なひくたのゝしのはら

關 月

月影のすまの關路にあくかれて中々人やとよらさるらん

徑 月

玉鉾の道の行てにむら立て人音すまぬ月の夜すから

橋 月

さ、波やうち出のはまに月さえて一すし曇せたの長はし
水邊月

名なとへはこれこそ月の都鳥角田川原の秋の夜の空
池月

山鳥のなさきの池の秋の月さてやか、みをかけてすむらん
澤月

かけははや伏見の澤にうつろひてなかる、月のうちの山かせ
沼月

所せき岩かき沼にやとりてもおなし空なる秋のよの月
江月

月影のかたよりしてそやとりける汀にかゝる水のみさひ江
瀧月

明かたに夜はなりにけり鳴瀧やにしの河瀬におつる月影
川月

月影や田上山を出ぬらむ水をこえる宇治かはのなみ
湊月

いり舟のいなゝの湊にうかふなり柴山出る秋の夜の月
湖月

月はまたとなかに見ゆるよこの海の明ぬにしらむ波の上哉
浦月

和田のはら八十の嶋はもみえてけり浪にくもらぬよはの月影
濱月

下なれなきかぬはかりそ月影は松をのこさぬ雪のしらばま
磯月

引しほのあとそとみえてさゝ嶋のいそへにとまる夜半の月影

汀月

崎月

嶋月

瀧月

泊月

渡月

田月

都月

禁中月

社頭月

古寺月

古郷月

村月

早瀬川となかの波のたゝみきて汀にかゝる夜半の月かけ

興津浪ゆらのみさきの霧晴て夜わたる月に秋風そ吹

松嶋や小嶋の海士のひまとへはいさりに出ぬ月の一ころ

鳴海かたしほのうきすにとまる也月をためたる海士の捨舟

松陰の遠あさかけてとまり舟月見むためと今そしらるゝ

しかの浦や舟出やらぬやすらひに先さしむかふ月の影かな

今はたゝほなみそかけぬ刈てたに跡も水田の秋のよの月

しら川もかつらもいさや月影はいま中空のほとにすみつゝ

なく露の猶それよりも萩の戸のあくればうつる袖の月影

住吉の松の秋かせ夜や寒き行あひの間に月もふけつゝ

昔おもふ橋寺はさもあらてかはらの松にあり明の月

月ばかりすむそとおもふふるさとの萩よりおくに人音のして

月や見る餘所にやさてもあくかるゝ戸口かためぬ里の一村

里月

花の比かならずそれは音信しよしのゝさとを月にとはゝや

山家月

よしさらは月はとへとや思ふらん柴のかた戸をたて残しつゝ

庵月

いまは又月見んためとしられけり軒はふきさす草のかりいほ

庭月

月にたゝくまあらせしのためとてや草木もうへぬしらす成寛

井月

月は猶そこにとまれといた井つゝ袖にもおなし影やとりけり

閨月

雨の音のうかりし程はなかりけりあれてねやもる夜半の月影

隣月

野分して皆中垣はふし柴の庭ひとつなる秋のよの月

閑居月

さらにたゝ月やとれとの住居哉むくらの垣はよもきふの露

舟月

松原のこなたに月やいり海の興まで出ぬあまのつりふね

惜月

ふけまさる我よはなきて秋の月かたふく空を侘つゝそみる

夜擣衣

宵の間はあたりの友もよりきてや人なとしけく衣うつらん

里擣衣

生駒山月や出らん衣うつ戸口はなへて秋しのゝさと

聞擣衣

有明の月をなしたひてうつ衣にしのつまにそ音の聞ゆる

遠擣衣

しつのめかときあらひきぬうつなれや川を隔て音の聞ゆる

近擣衣

こなたまで音とゝろきて床ちかくあなかま夜半の衣うつなり

秋夜長

をしかへし夢もね覺もしけゝれと猶のこりある有明の月

野分

あらかりし野分の行衛月晴てなひきしまゝの軒の高かや

葛風

吹かへす風のまゝにやむすふらんうらはにかゝるくすの夕露

徑葛

こと草もみなとちまぜていとゝなを分こそかぬれのへの葛卷

牆葛

月をさへかきほにいまはかけてけり露ほしはてぬ葛の秋風

野草欲枯

なにとなく尾花か袖も物さひし初霜かれのなのゝしの原

栽菊

これも又山路よりこそうつしけり千代へん宿の白菊のはな

菊露

うつろはぬ程そとみえて置露のわのか色なる庭の白菊

山菊

散ちらすなかるゝ菊の下水に月くみまする秋の山人

谷菊

たえ／＼にさゝれとめゆく谷川のうは波さはく菊の夕かせ

水邊菊

天津空うつれるかけも廣澤に星の敷そふきしの白きく

尋紅葉

暮ぬとはさてもおほえす紅葉々の色てる山の入相のかれ

初紅葉

露やまつしほそめのうす紅葉しくれもまたぬ秋の山本

薦紅葉

太山ちや秋にさひたる梢哉つたの紅葉に横のたちかれ

柞紅葉

はゝそ原うすきならひを忘れつゝ時雨にかこつ秋の山こえ

櫨紅葉

山かせの霧ふきかくるほとなれやちらぬにはしの色そきえ行

山紅葉

立田山越つる跡も遠けれと霧におくある木々のもみち葉

嶺紅葉

暮るゝとやおもはさるらん日なのこす紅葉の影の峯の山人

谷紅葉

秋ふかき嶺の木立のうつろひて紅こゆる谷のかはなみ

岡紅葉

いかにして時雨分ける途ならん松にならひの岡の紅葉々

杜紅葉

生田川そなたは月に成ぬれと色くれはてぬ森の紅葉々

行路紅葉

分くたる山のかたその下紅葉おしても袖になれにける哉

瀧紅葉

紅葉はや中なるよとにうつらんおちてもそむる瀧の白いと

河紅葉

柚河や紅葉の枝の谷わたり紅くゝる秋のいかなし

岸紅葉

立田川みむろの岸やうかふらん紅葉にしつむ有明の月

古寺紅葉

泊瀬山もみちに暮ぬ色なからさてもきゝつ入相のかれ

遠村紅葉

紅葉々の色うつもれて薄霧のそなたにけふる里の夕暮

里紅葉

そこたなき霧の立枝の櫨紅葉誰里見えぬ秋の夕暮

牆紅葉

うちはへて薦の紅葉のかこふ哉我とあれゆく庭の松かき

庭紅葉

村時雨そむるもあさき梢哉山路にとなき庭の紅葉々

簷紅葉

いとゝななしのふのすゑのしたる哉かゝれる軒の薦の紅葉に

松間紅葉

村時雨ぬるてもはしも見えわかす松よりおくに色をこめつゝ

竹間紅葉

山もとのいさゝ村竹打なひきちらぬ紅葉に夕風そふく

紅葉増雨

村時雨杉たつ山の下紅葉そめぬ梢も色をそへけり

紅葉映日

紅葉はもおなし日影の色見えて霧はれのほる遠の山もと
紅葉移水

さらに又つたはふまゝの色なれや垣ねなかるゝ庭のやり水
紅葉如錦

山姫のこれや錦のたちさしと紅葉うち散夕かせそふく
暮秋風

したはゝやかきほにはへる葛の葉のかへるか今は秋のゆふ風
暮秋雲

あちきなく有明の月も打時雨秋も今はのうき雲のそら
暮秋露

行秋の露のなさけもとめしとや草葉を風のほして吹らん
暮秋雨

空たにも一時雨そと見えつるに涙久しき秋の暮かた
暮秋霜

秋はゝや末野の月の霜くもり名残もうすき明かたの空
九月盡夕

月の夜は紅葉のかげの餘波までかきあつめたる今日の暮かな
九月盡夜

ぞめてたゝ夢にもなして忘るやとねなまし物を秋の別ち
九月盡曉

秋も又限りなりけり衣々にしたひなれにししのゝめの空
冬百首

初冬曉

山風やまゝの葉かつら打散てくる冬しるきしのゝめの空

初冬朝

むすびつる霜夜の夢の朝明に風音信て冬は來にけり
初時雨

今はゝや袖にふるやの初時雨さて玉水の音とまりけり
山時雨

そのまゝや夕の空に成ぬらん時雨てかへるみれのうき雲
嶺時雨

立のほる雲またかけて遠方や嶺に峯そふ時雨降なり
谷時雨

さゝれ行谷の水音それなからしくれてくたる山風そふく
杜時雨

村雲のうきたの森のみしめ繩暮るゝと見れば時雨降なり
關時雨

逢坂や時雨は杉の下露の又袖ぬらす關のやまかせ
野時雨

風ませのしくれになひく程なれやぬれて露なきのへのかや原
河時雨

山さきやむかひの雲の一むらは淀の河瀬に時雨來にけり
里時雨

めにかけて里までいそく一時雨跡こそ月にはや成にけれ
閨時雨

いつの間にさてもれやの村時雨音はとまりて月の明ほの
曉落葉

さひしさは夕になれしまゝなれや木葉音なふ窓の明方
朝落葉

今朝さそふ程もしられて置霜のうへに紅葉を散す山風
夕落葉

山本のそれもあらしやさそふらん木葉につるゝ入あひのかれ

落葉隨風

吹たてゝしつみもやらぬ落葉哉木の下めくる庭の夕風

落葉混雨

落葉たに聞侘つるをはては又時雨に成ぬ軒の木からし

山落葉

日影たにもらすとみえし太山路の落葉にはるゝ木枯のかせ

谷落葉

梢こそ今はうつられ山かせの落葉にうつむ谷の下みつ

路落葉

落葉かく程成けりな吹かせのひまにもそよく森の下道

橋落葉

山人の跡に嵐や送るらん木の葉みたるゝ谷のかけはし

庭落葉

一となりたむる木葉にしられけり垣れやこえぬ嵐成らん

野霜

吹しほる程よりもなをものさひし風もゆるかぬのへの霜あて

田霜

霜かゝる山田のくろの村薄秋のほなみにまたかへりつゝ

庭霜

今は又霜こそうつめ昔にとち落葉は軒の松の下かけ

草霜

駒たにもすさめぬ杜の下草ものこらす成ぬ霜枯の頃

篠霜

霜かれの草葉のほかのあさみとりをさゝかはらは風そよく也

谷寒草

冬かれの草こそあらめ谷かけの松の落葉の色たにもなし

岡寒草

さしもこそひまなく見えし葛垣の霜に荒たる岡のへのやと

野寒草

更にたゝあまるみとりの色もなしみな霜かれのをのゝしの原

原寒草

なく霜の朝の原の草枯にあとも行衛も道みえてけり

庭寒草

庭にまつあまれるかたは冬枯て風ひとへなる軒の下萩

池寒蘆

ひまもなく汀にめくる蘆原のかるればみゆるこやの池水

江寒蘆

なく露の玉江にみえし蘆の葉も霜にそいまは結ひかへぬる

湊寒蘆

みなと田の一ほも今はのこらぬに霜をきみたす蘆の夕風

谷水

水上の氷にとまるはとみえてさゝれに成ぬ谷川のすゑ

瀧水

岩ほにやかゝりてこほる程ならんしたまて落ぬ瀧の白糸

湖水

白波はこほるとみゆる濱松の梢にかゝるしかのうらかせ

田水

下樋もる山田の水とちあけて月さへ影をかさなりにける
懸樋水

軒はもるかけひの朽めいまみえて所々にたるひゐにけり

冬寒月

野へは霜もりには雪をつもらせて更にくまなき冬枯の月

冬月牙

なへてみな木葉残らぬ冬枯に月もたまらぬ山風の聲

曉千鳥

あはちかたや、月影も明かたになるとの千とり聲渡る也

夜千鳥

みつ鹽に月のうきすの小夜千鳥しはしうかれて浦つたふなり

川千鳥

淀川や水の煙の明くれに立きえて鳴むら千鳥哉

浦千鳥

鳴海かた興の月影曇り來てしほひにちかく千鳥鳴なり

濱千鳥

おほとものみつの濱邊の夕千鳥松かせさへに聲添てけり

池水鳥

曇り來て空にはみつるあちむらのすむとしもなき廣澤のいけ

河水鳥

こ、は又よとそとみえて川舟をなしの一つれやゝくたるなり

夜網代

宇治川のあくらにねふる網代が波のよるなやかされさぬらん

網代寒

山風にまつふき落て宇治川や網代に氷る瀬々の白波

竹霰

葉をかばす竹のさ枝にゆりためてもるほとなそき玉霰哉

篠霰

時の間の眞砂のうへのを篠原風のためける霰成けり

柏霰

梢はや散しく庭のもとかしはうつすもちかき霰降なり

屋上霰

窓たゝく音はとまりて一しきり篠屋の霰風にちる也

れ覺霰

霰ふり荒つる空の行衛ともおほえぬ月のれ覺とふらん

初雪

へたつらんかたなはしらす山のはの見ゆる限りは今朝の初雪

山雪

へたてこし遠山鳥の尾上まで雪にまちかき明ほのゝ空

嶺雪

こなたなる松よりうへに顯はれてつもらてつもるみれの白雪

谷雪

降雪の谷の柴橋跡たえて妻木はかりの道はありけり

杣雪

山人の嶺の杣木のとりのかし又かすそふる雪のしたなれ

杜雪

松ひはらそれもましらぬ柏木の森の梢そ雪にさひしき

野雪

千種さく野への面かけ露もなし雪ひといろの明ほのゝ空

關雪

をのつから關をは越てふる雪のふきしとまる不破の中山

河雪

むら／＼につもると見るや白雪のふる川水の瀬たえ成らん

湖雪

雪はまたあさつま舟にふりつまでかろげにみゆる浦風を吹

浦雪

しほかまの煙をよはぬ松なれや風ははらはて雪のあき明

濱雪

これのみそうつろふ色はなからまし雪の花さく菊のなかはま

嶋雪

海士人のこれもしほ木に成ぬへしとを嶋松の雪のかさなれ

田雪

鳴のゐし秋よりさひしかきたれてふるの田面の雪の朝あけ

都雪

春のみと何おもひけん降雪の花の都のあけほのゝそら

禁中雪

九重のさくら橘更に又はなにかへてふれるしら雪

社頭雪

いかにせん雪のふる日の宮めぐりこれをは神の跡やをしまん

古寺雪

ふりおもる河原の松は見えわかつて雪より出る入あひのかれ

故郷雪

さゝ波やふるき宮木は埋れて又このころの雪のはなその

里雪

雪よとて窓引あくる明ほののとなりのおとも人音のして

閑居雪

夕からす音信て行それたにも聲うちむもる雪の山さと

松雪

降むもる雪にややかてかゝるらん下おれとまる軒の松かえ

竹雪

雪にみな垣ほの竹やふしぬらん軒あらはなる岡のへの里

杉雪

ふる河の外なる杉の雪さけに又ふたもとゝなりてみゆらん

檜雪

雪はまたつもり定めぬほとなれや峯の檜原にふゝく山風

狩場風

みかり野やはやひとよりとみえてけり毛花を散す雪の夕風

夕鷹狩

暮ぬとや友よひたてゝかへらまし鳥のおほえを野へに残して

野鷹狩

けふは又遠見までにはつれねはや山までゆかね野へのかり人

炭竈煙

すみやきの市に出たる跡なれやたゝすかれたるうす煙かな

遠炭竈

いかばかり山よりなくの炭かまの暮ぬにうすき煙なるらむ

爐火

落葉にもくぬ木のかれ枝焼ませてさてやほとある跡の埋火

神樂

今はゝや神樂おもてのならふ哉庭火しろくともよほさせつゝ

佛名

鐘もすみ夜明かたに成にけり三世の佛のかすとなへつゝ

年内早梅

いまは、や春のへたてや程ちかき花になりゆく庭の梅かき

年欲暮

年もはやいまはの末のくたりやみ松火ふりたて人いそくなり

夜歳暮

いくたびかれさめてきけと里人のいとなみたえぬとしの暮哉

山歳暮

ゆつり葉やしたとりそへて行しつに山ちも年の暮は見えけり

路歳暮

年の暮さもいそかしとあふ人のたゝひと言に行わかれぬる

河歳暮

年もはや流にせまる河波のやすくそ春にたちはらまし

歳暮松

さまゝの松つみなきて道のへや子日ににたるとしの暮哉

山家歳暮

是を只いとなみそとて山里のとしなつま木につみやそへまし

閑居歳暮

さはらすや年は越まし冬枯のむくらのかきのいたくあせつゝ

老後歳暮

いつかたにさても忍はん老らくにかされて春のいまも尋れば

惜歳暮

一とせの名残よいかにはなの春おほる月夜はめくりあふとも

戀二百首

寄天戀

空にすみ枝に並はん語らひのそれもいかてか世にはもりける

寄日戀

山のはに入日の影をいそく散くればといひし契りはかりに

寄月戀

これさへに袖のわかれなにかにせん月のそひれの明かたの空

寄星戀

心をそしるへにきつる星月夜さてもくまある道のさゝはら

寄風戀

忘れてもさてありぬへき夕暮の心すゝむる軒の松かせ

寄雲戀

待なれし夕のまゝの浮雲にやかて涙のひとしくれして

寄煙戀

さてもそのしめしにほひの煙よりひとりのはいや空に立けん

寄霞戀

いとゝなを霞に成てへたて行あはれいもせの山のなもうし

寄霧戀

あちきなや人の契りのあさかへり行衛も霧に隔てはてつゝ

寄露戀

起わかれ出つるまゝのしのゝめのたもとになりぬ道芝の露

寄雨戀

いさとはんまのあまりの雨そゝき立ぬれてこそ情見えまし

寄霜戀

秋ふくる浅茅かす点のはつ霜に契りのやかて枯ぬへき哉

寄雪戀

待侘る涙の玉の緒もとけて霰みたる、ゆふくれのそら

寄雪戀

それも又わすれぬつまと成ぬへしいとふか、りし雪の通路

寄稻妻戀

玉ゆらの人の契りはさもあらていなつまかよふよひの手枕

寄曉戀

よそにのみおもひし物を横雲に袖の別のしの、めの空

寄朝戀

衣々を、くりてかへるそのまゝやあさと口には丸ねしつらん

寄晝戀

草のうへの露はひるまともゆれ共袂そいたくしほはてぬる

寄夕戀

人は又我音信を待やせん契りし暮とまつしらせはや

寄夜戀

恨侘れなまし物とおもへともまたさりけりと人やかこたむ

寄山戀

もろこしの吉野はしらすあら熊のすむなる山も我はをしれし

寄峯戀

うき人の袖ふる山の峯の雲猶面かけにたちて戀つゝ

寄谷戀

あさかりし世々の契りのすゑなれや同じ瀧むすふ谷の下みつ

寄岡戀

風かよふ岡のやかたの眞葛原れてのあさけにたれかへるらん

寄柚戀

うかりけるみほの柚木のいつ迄かかくふしなれぬ契ならまし

寄杜戀

おなしくは思ふあたりにいてもせよとても浮名の森の言の葉

寄野戀

色かはる野もせの草の秋風にわか身ふけぬる契をそしる

寄原戀

分みたすしのふか原の夕露を袂にかけてきえかへりぬる

寄關戀

あちきなやとはんとのみはおもへとも我をなこそその關の夕暮

寄徑戀

したへたゝ此世ならすときくそかし袖ふりかはす道の行衛も

寄橋戀

涙こそ猶ふる道にまよひぬれいたゝの橋のかけもはなれす

寄水戀

とはゝ人ともに月見むためなれやうき草はらふ庭の遣水

寄池戀

いかゝきくならひの池のなしの聲わかたらはて明かたの空

寄沼戀

いかにして淺香の沼の草の名のそれしもつまにひかれきぬ寛

寄江戀

今は又いかなるえにかかゝるらん我身こかるゝ床のうら舟

寄瀧戀

泪こそ大井におつれとなせなる瀧も袂のうへをこえつゝ

寄河戀

いとけなきそのかたらひになくきみぬつらき行衛の中川の宿

寄淵戀

つれなくは身を沈めんとかこつよのそなたの月よな入その淵

寄瀬戀

しのふとも月ともなしに淀舟のたかたにかは瀬をくたす宛

寄湊戀

うきれするいな湊に思ふ哉さてもいくたのむかしかたりな

寄海戀

たのますよ人の心はおほうみのかた行舟の風にまかせて

寄浦戀

かたゝの又おもひてと成やせし月こゝもとのすまの浦波

寄濱戀

かけていまおもひも出ようと濱の沖のかたほの夕くれの空

寄磯戀

つれなさはあまのしほ木のこりもせてはては恨のいその松風

寄汀戀

ふしつけしよとの汀の魚の名のこひする身とや人にいはれん

寄崎戀

忘るなよゆらのみさきを出舟のほのかたらし波のうきれな

寄嶋戀

その名けににほふかほりに橘のこしまの浪のうちの川かせ

寄瀉戀

涙なを袖はひかたもなかりけりうらみに出るあまのつりふれ

寄泊戀

同しくは人の手なれのからことの泊りに今宵うきれなやせん

寄渡戀

夜をふかみ淀のわたりなする舟やみつの、妹かきぬゝの空

寄岸戀

名におふる忘れにけりな住吉のきしもせぬよの獨れをして

寄石戀

あた浪のかけつる跡のしつく石のたちろくけなき人も恨めし

寄沙戀

吹上やまさこにたてるまつよひもはや過ぬとて浦風の聲

寄巖戀

とことは更にふかしてきくもうし岩ほに松のおふのうら風

寄田戀

思ひ出よともにもふしみの月をみていなほにかゝる露も忘れす

寄都戀

さてもその尾花をかりの契りしてうちの都に秋風そふく

寄禁中戀

とにかくに心のとまるつまなれや春の藤つほ秋の萩の戸

寄社頭戀

おなしくは人の心もかゝれかし風うちなひく御戸のゆふして

寄寺戀

人もいとほゝとふへき比そかしりあひきをふ軒の松風

寄里戀

明石よりうつろひきても月の名のかつらや人の住ひ成けん

寄庵戀

刈てふく軒はも今はさゝかにのいと戀しきといかてしらせん

寄門戀

あはれたかしつまるほとを待かれてかためぬ門に立忍ふらん

寄戸戀

忍ひつゝ車をよするつま戸口しはしほそめよ人もこそみれ

寄塙戀

いかにせんかきほの葛はさてなきて人の心のいろのかはらは

寄籬戀

はなを見る籬の露のあきおきと人のあやめはこたへこそせめ

寄庭戀

人や見む庭のあさちの一となり分てかへりし露の行衛を

寄井戀

涙こそむすはぬさきの雫なれいた井の水のあさき契に

寄屋戀

うかれたつ人は音せぬ夕暮のまやのあまりに物そかなしき

寄柱戀

あはれとも見つらん物を横はしらすき間にいりし人の言のは

寄簾戀

なさけなく人は軒はに秋ふけてしのふにかこつ夜半の月影

寄窓戀

さりとともとちめぬ窓のそれもはや明かたに成しのゝめの空

寄床戀

もしも来て袖なや人のしかすると枕もそへぬ床のさむしろ

寄間戀

夢にたにやかと別と成にけりわひつゝねやの明かたの空

寄隣戀

きぬのなとの猶こそしのへ中垣の我がいまみや人のしるらん

寄簾戀

つてにみしさてもすこしの面影の涙をさへにかけそふるかな

寄初草戀

いさや又むすひそめぬる初草の露の契の行末のそら

寄忍草戀

これさへにつらきつまにそおもはるゝ人を忍ふのうち亂つゝ

寄忘草戀

ことのはゝ又かきたえつ草の名のわすれやしつる夕暮のそら

寄思草戀

契らすよ月は入野のおもひ草尾花かもとに露かゝれとは

寄月草戀

歸るさのたか快にかうつるらん袖に有明の月草のつゆ

寄下草戀

せめてその涙の行ゑ月もとへうかるゝ野への袖の下くさ

寄葵戀

引かへて又たかゝたにあふひ草その神かけていひし心に

寄菖蒲戀

後にしもかゝる契やなからましあやめのまくら月にかほりて

寄薦戀

ちきらすよあれ田のさはに刈こもの思ひ亂れて袖めらせとは

寄菅戀

いとゝなを人の心のますけ原露もあはれといふときかれは

寄葛戀

面かけはたゝ立そひて葛かきの人うらめしき夕くれの空

寄萱戀

つれもなき人の心のかゝれかしさもおれやすきかやか下風

寄淺茅戀

かけとめよ人の契のあさち原せめては露のなさけ也とも
寄蓬戀

さすか又木立わすれぬ前わたり車をとむるよもきふの宿

寄芝戀

かゝらすは猶きぬ／＼にうからまし月のしのゝめ道芝の露

寄苔戀

いとゝ又涙まきれすみえぬへし袖にをよはぬ苔の通ひち

寄蘋戀

いかにしてさそひも出んうき草のさこそは淺き瀬によとむ共

寄藻戀

なけくそよあまのかるものうち亂れたゝひとりの床の浦風

寄沼繩戀

忘なよその江に生るれぬ繩のなかき世までといひし契を

寄海松戀

いつまてかあはての浦にうきみるのみるめ計に袖ぬらさまし

寄松戀

せめてけにそれそなくさみおき別いなはの山の松はうけれと

寄椿戀

いくかへり八尾の椿さくまてにかはらぬ世にと契りおかはや

寄櫛戀

乙女子か玉くしの葉のなひかしと祈らは神のそれやうけまし

寄杉戀

相坂の名なたのみてもいたつらに幾とし月か杉の下みち

寄檜戀

秋をやくひはらの山の紅葉々の我もこかるゝ色をみせはや

寄櫛戀

今ははやこなたに人をおもひたて眞木の梢の夕雲の空

寄桂戀

なにゆへに涙の袖にたまらんしあなをひろふ山の下風

寄桂戀

人ゆへのその言の葉はちらはちれ月のかつらの夜半の秋風

寄檜戀

雨かもしとき／＼かけて檜の葉の人は音せぬ夕暮の空

寄柏戀

袖はたゝさしもしくるゝ夕暮に雫もおちぬならのはかしは

寄桐戀

あちきなや桐の一葉のおちそめて人の秋こそやかて見えけれ

寄梓戀

いかさまにいはいはたのなのゝはゝそ原あさき色には人の見る共

寄櫛戀

もすのゐし行衛もつゝきはし紅葉あとかたもなき秋風を吹

寄楸戀

いもかりとゆくてのひさきうち散て河かせ寒み夜は更にけり

寄常盤木戀

色かへぬときはの杜とおもへともうき身契りの秋は見えけり

寄柚木戀

いつかたに心ひくらん月影のいつみの柚木ふしもとをさす

寄宿木戀

有明の月は梢にやとり木のあらぬくまそふかけもうらめし

寄鹽木戀

鹽木つむあまの小舟のなにとたゝかれてこかるゝ心なるらん

寄朽木戀

うき契さてもくち木のたくひかなその言のはの行衛たにみす

寄埋木戀

うき人よ身は埋木のくすをれて思ふとたにもいかてしらせむ

寄鶯戀

さてもうき誰心にかならふらん花にうつるふうくひすの聲

寄雉戀

我も又涙にかへる衣々のあさのゝきゝすれをや鳴らん

寄郭公戀

思ひ出よともこれぬ夜の手枕に山ほとゝきすかたらひてゆく

寄水雞戀

これまでもふかしけるよと今更に我心さへくゐなくななり

寄鴈戀

人はたゝ音信たにもかきたえて空飛鴈の夕くれの聲

寄鶉戀

尾花しくまのゝ濱風秋ふけてとはれぬ床や鶉鳴らむ

寄鳴戀

鳴のたつ荒田の澤の忘れ水誰かためにかは袖のぬるらん

寄鵲戀

聞もうし人の心の秋されはもす啼おつる山のしたみち

寄鳩戀

身をしほり物おもへとのわさなれや鳩ふく秋の夕暮の空

寄千鳥戀

明かたになるやかなしき手枕をかはすの千鳥音信てゆく

寄鳩戀

かた淵のにはのうきすのそれよりも人の心や下かよふらん

寄鶯戀

今は又名残を鶯の聲すなりたかわかれちの床の山川

寄鴨戀

なかれても末にたつ名をいかにせんはやせにうかふ鴨の川波

寄鶉戀

しるや人鶉舟の手纏くゝる夜を待ほとなそき思ひ有とは

寄鶯戀

となさかる名残も見はや鶯のたつむつた河原の夕くれの空

寄鶉戀

うき契身をしる雨も降ぬへし曇夜月のかさゝきの聲

寄鶯戀

つれもなき人こそあらめなとてかく木居とる鷹の渡りかぬ覽

寄山鳥戀

さすかはや恨も今は山鳥のをのつからにやおもひしるらん

寄鶉戀

別ちの鐘をはいかゝ空れそとゆふつけとりはまきらはすとも

寄鶉戀

身を秋のさもしき忍ふ薤田に人のかされぬ鶴の毛ころも

寄熊戀

人すまはかよはん物をうつほ木のたつきもしらぬ熊はあり共

寄虎戀

くるしさはそれも戀路になよはめや虎かる山の夕暮の空

寄馬戀

かるき名にさも立ぬへし駒とむるうちの渡りの忍びかよひは
寄猪戀

うき契り我もねられすかるもかくゐなのさ、原風そよきつ、

寄鹿戀

とは、やな誰きぬくにならふそとさ、分る野のさを鹿の聲

寄蝶戀

花にのみうつるてふ名のあらはれてしのふにかゝる夕暮の空

寄蛙戀

物おもふやとのやり水せきとめてかはつも聲をすまず夕暮

寄螢戀

しのふ中月出ぬまと人とへはそれもうかれてほたるとふなり

寄蜚戀

ゆか近くなれこそなるれきりくす人にはうとき夜寒なれ共

寄松虫戀

開侘めつらき契のかきくれて軒はしくる、松むしのこゑ

寄鈴虫戀

あらかりし野分のませもみたれつゝ露かふ庭の鈴虫の聲

寄織促戀

くりかへし物おもふ身に聞もうし誰かゐた巻のはたなりの聲

寄蛛戀

かことにもつけたる文は見えもせて荻ひき結ふさ、かにの糸

寄繭戀

袖おほふれ亂れ髪の繭こもりおやのかふこのたくひなられと

寄我病戀

われからそ人の心のうなはらやもにすむ虫のたくひなられと

寄玉戀

海人の汀にひろふたまゝくによるもとまうてかへる浪かな

寄鏡戀

我にうき人の契の朝かみ涙ながらそをしのこひつる

寄匣戀

たか方にふたとりちかへ玉くしけあふこともなき身とは成劍

寄櫛戀

さしくしの曉かたになるかとよあはれわかれの名残かなしも

寄髮戀

たちちのおやめきながら玉髪かけはなれてや思はさりけん

寄本結戀

うき名又なちふれやせんもと結のすへり心はきめにたまらず

寄枕戀

しるといふ枕にさらはかこつけて今宵は人の袖をしかはや

寄席戀

逢と見る夢のそひれのさむしろにさもとところある床のうへ哉

寄衾戀

此まゝの夢をも見はやさよ衾なこやか下に枕かはして

寄裳戀

暫しまた人のもすそをひかへてもたゝ一言をいかてきこえん

寄衣戀

やかてまたそれとみせしとをしこめてきかへ衣の曉のそら

寄組戀

さしもこそ心な人にいれひものいはせしかひもなき契り哉

寄帶戀

あちきなやこれはいもゑと云なして解んともせずよはの下帯

寄書戀

引かへしそれまで見よとはしかきに言葉をつくす人の玉章

寄繪戀

かた／＼にとり合せたる繪をみてすまのうらみや猶殘る覺

寄視戀

人心これやうき世のさか石の筆もすみなもつくしはてつゝ

寄筆戀

いくたひかさてもかきやる水莖の哀とたにもいふ人のなき

寄笛戀

これそとよたとへは今はこま笛のこちよる音さへ明かたの空

寄箏戀

ものゝ音をつくすむ月のしらへとも猶共ことやもりて聞えし

寄弓戀

いつまでか人に心をつき弓のゆるふかたなき物おもはまし

寄箭戀

あつさ弓はや波かゝる生田川その瀬のとりのたつ空やなき

寄扇戀

とりかへしさてもさくらの三重かされいとゝ心や移りはて劍

寄簀戀

おき別出つるかたの一夜つゝ涙か雨かみのゝなかやま

寄笠戀

忘れめやいまこそ三輪の市め笠たゝななさりの姿なれ共

寄糸戀

あさ衣たゝときすつる糸くつの心みしかく待そ侘ぬる

寄錦戀

唐錦二むら山の紅葉々に秋の袂は涙しくれて

寄挿頭戀

さしかさし紅葉も菊も折からのたゝえならすや心とめけん

寄手向戀

宮あするいつくはあれと契をやむすふの神に手肉しつらん

寄被麻戀

さていかに人の心はおほぬきのひきもとめえぬ別ちのそら

寄木綿戀

風吹は御戸のゆふしてうちそよきなひくた人の心とも哉

寄四手戀

逢事をさのみきゝけんやしろかと所せきまで四手かけてけり

寄注連戀

くすかゝる田中の杜の御注連繩さてたか秋の行ふなるらん

寄車戀

心なやしはしとおもふ戀々に車をよせて人をとなふ

寄舟戀

手枕にむすひもはてす初尾花袖の別のまゝのうらふれ

寄櫂戀

さらに又まかちしけぬきひまもなし誰松嶋の興津舟人

寄帆戀

嶋隠れはるかの興にゆく舟のほかけたたにも見せしと思ふ

寄碇戀

碇おろす興のとまりなしりもせてさそ松かけの浪のうかれめ

寄篷戀

秋ふくる蘆屋の澳にうきれて筈もる月も袖ぬらしけり

寄網戀

いざなとるあみの浦人涙さへめにもたまらぬ夕暮の空

寄泛戀

恨つゝおもふかきりや石見かたうけひく海士のうけひかす共

寄筏戀

あさ瀬なみ猶こしかれて此暮も杉の筏のさはりきぬらん

寄篝火戀

人心うふれの篝いまは又ほのめかしつるかひやなからん

寄網戀

人よたゝあらたつ駒にさす網のひかれはすると心ゆるさし

寄繩戀

いつ迄か海士のたく繩なからへてたえしとはかり猶慕はまし

寄澱盡戀

しるや人難波のみつのみほ盡ぬれてほす間もなき名立とは

寄貝戀

しゝみとる聖田の浦の海士人よこまかにいはゝかひそ有へき

寄斧戀

うかりけるつま木のなのゝ音絶てこりはてにきや夕暮のそら

寄笠葺戀

わかなつみ根せりをいれし後も又人のかたみそ身に成にける

寄燈戀

見ぜはやな袖口いたく焼しめて人まちふくるともし火のかけ

寄鐘戀

入相もれよとの鐘も聞すみていまは心をつくすばかりそ

雜二百首

山櫛

神かきの外とは見えす三笠山みなさかきはなさしてみえつゝ

嶺椿

久しさもたゝあひおひにみえてけり椿にならふ峯の松かえ

雲晴・淵嶺

雲晴るゝ峯もさなからうつり來て嶺の數そふ谷の下水

麓柴

たもとにやおつる嵐をうけぬらんかるてそよかぬ山の下しは

柚檜

とりつくすあなたの柚の程みえて檜原くもらぬ嶺の明ほの

杜柏

下草の露やさまてになかるらん雨うけなかつ森のかしは木

岡椎

月残るむかひの岡の椎のはに山風しらむ明かたのそら

濱楸

波やまたをよはさるらん濱ひさき久しく苔の色もかはらす

磯松

海士の子のうらな戸口の出入のいそやにちかき松のねあかり

門杉

をのつから前なる杉を門にしてかきはめくる山のそはいほ

窓竹

萩の葉にいくほとならず見えてけり窓にならへるいさゝ村竹

籬草

野へよりも花のかすこそ猶見ゆれまかきの草はかる人もなし

庭 苔

草ふかく野と成庭はせめてたゞ苔にや道の猶残るらん

簷忍草

つたひゆく玉水となく成にけりしのふにかゝる軒の村雨

岸忘草

住吉やこそ床夏それなから岸のゝ草のはなも忘す

野 篠

露分て先立人やなかるらむ月こそこのれ野への篠原

路 芝

小車のわたりはかりやいまも又うち野のしはのしけらさる覽

沼 葦

あしつゝのひとへ計に刈なしてひまこそみゆれぬまの月影

江 菅

夕しほの入江にしける眞菅原からぬに見えぬ波やかへらん

河 藻

ぬくみうつ河瀬の水のなかれ藻のかけとめてけり夜はの月影

名所山

雲や今うつまさるらんかひかれのさやかに見ゆる明ほのゝ空

名所嶺

くれゆけと猶あらはれて風こしの峯をや雲のうつまさるらん

名所岡

里人の往來の岡の小篠原風もいくたひわけて吹らむ

名所杣

斧の音の聞ゆるまでもなかりけりいまや朽木の杣となるらむ

名所杜

下葉ちる生田のもりの秋風にさゝたおとこの行衛とはゝや

名所野

旅衣夕風立ぬあつま野のそてにしくるゝかやか下つゆ

名所原

高嶋のかちのゝはらに行暮てやとりとるへき方たにもなし

名所關

伊勢路にと又いそきけり旅人のふはの關より行分れぬる

名所路

是やまたせたにもかゝる道ならむいまうち出の濱のうきなみ

名所橋

猶ぬれぬ雨もこほれてふる路のいたゝの橋の夕くれの空

名所池

こすけかる跡ぞと見えて汀まで月になり行まのゝ池みつ

名所澤

松陰のふしみの澤やうき草にあらぬみとりの色をみすらん

名所沼

下水のあさゝは沼は名のみしてひしのはしつむ雨そかゝれる

名所瀧

岩にかけ河せに音やあまるらむ雨さへそひてふるの瀧なみ

名所河

鳥の名をとほはともとまる心哉すみた河原の月の暮かた

名所湊

さゝ波の山のあらしなをひてにてしかのみなとを出る舟人

名所海

興津風吹ぬと見えていせの海や波は梢のあの、松はら
名所湖

山風はなよはぬかたのさ、波に木の葉の浦の名をちらすらん
名所浦

松原の今やかけ行程ならんかたはかりをみほの浦ふれ
名所濱

よせかへる高師の濱の松風に聲をあらそふ興津白波
名所磯

薄墨のふしまか磯もくれにけりなるとのかたや夜舟ならまし
名所汀

こゝは又みきはの浪や早からむまつ、なてこすよとの河舟
名所崎

あたらしや花露のころならて霞の崎の明ほの、そら
名所嶋

もしほくむ程かと見えてしはし又あみをはひかておくの嶋人
名所瀉

あはちかたせとの入しほおちすみてかもめいさよふ曉の空
名所泊

今やまたしほのと、あの松かけにならふうきれのとこの浦舟
名所渡

おほ嶋のなるとな過る程なれや夜舟にちかき松風の聲
名所田

さかこえてそのめかゝりも程とをしあへの田面の明ほの、空
名所里

玉嶋の里のあるしやそれならんあゆつる岸の夕暮のそら

けふ暮ぬあすかの市にいそけ人うきははふる事のありやと
名所市

いそきてもこゝまで木曾の坂口のおくは五百重の雲の遠方
名所山

さらに猶かさなる峯と見えつるや今分すくる跡のうき雲
名所嶺

とまるへきすへ野の里の夕煙めにかけてたにはるか成けり
名所野

山はまたこえぬ友さへ隔てけり道のすへなる野への松はら
名所原

とめすともやすらひぬへし旅人のみな行なやむあしからの關
名所關

鳴海かたしほのひかたのすく道にみな打まれて人いそくなり
名所道

分てその苦のむすともよもみえし草ふみ渡るさの、舟はし
名所橋

あつま路や心なかけて渡る哉波の花よる關のふし川
名所川

月はまたなそかりぬへし松たてるかけの湊の夕やみのそら
名所湊

難波なるあまの浮れもいかならんかせかし今宵こやのかた橋
名所海

草津より濱に出たるかたなれやはやめにかゝるしかのうら波
名所湖

名所浦

心こそ猶ひかれぬれ朝ほらけゆく舟みゆるしほつすかうら

霧中濱

さきたつもをくるゝ友も見えてけり又かけもなきこしの白濱

霧中磯

清みかた磯うつ浪も聲をへてはるかにをくるいりあひのかれ

霧中汀

行すみて又友もなき夕暮の汀につるゝ川なみのこゑ

霧中嶋

あまた友あれともさひし雨かゝるたみのゝ嶋の夕マくれ空コ

霧中瀉

月残るしほひの跡のあさかゝた見せはや人にかゝるなかめを

霧中泊

此暮は同じとまりに入舟のゆらのとなみにこきならへつゝ

霧中渡

しはしたゝまたイをくるゝ人を待ほとゝいたしもやらぬ淀の舟さし

霧中里

山よりはこなたと見てもまた遠しとまらん里の夕暮の空

山家春

焼すつる眞柴の後も山里のそらのすゝけやかすみ成らん

山家夏

夏そかしとてもすゝまん柴垣をなに夕風のひまはありとも

山家秋

山里のかゝるすまゐを人もとへかきはつたに軒の紅葉は

山家冬

柴の戸はいとゝ落葉に猶あれてあらし立いる山陰の庵

山家曉

鳥の聲かれにもうとき山陰のねさめはなにのおとろかすらん

山家朝

朝手あらふそれにそかけのならひぬる我獨ゐの柴の戸のうち

山家夕

薪とる程こそ友より人をかへしてとまるいはのゆふくれ

山家夜

月のため松かけよりははなれ庵うときあらしや夢むすふらん

山家風

岬はなる松よりあまる山風のやかてをさゝかうへになりぬる

山家雲

雨しほる音なをさひし夕暮の雲にしくるゝ軒の山かせ

山家煙

かすかなる煙をみてもおもひやれあまたはすまぬ庵成けり

山家雨

山陰やいまなら柴の音もなし雨ふりしめる夕暮のには

山家路

とふ人のおもひよろしと柴の庵うしろの山に道つけてけり

山家水

水むすふたよりやとなき谷こしの軒に簀をかけてみえつゝ

山家庵

なのつからめくれるかやをたてをきてかきほと頼む山の下庵

山家草

さひしさや軒の下草うちなひき松ほと風の音はなけれど

山家苔

是や又久しくする庵ならん苦こそ庭に道をなしぬれ

山家木

心ありてたれすむならん大かたの岩木のほかの庭のうへまつ

山家鳥

雨の日のうちむもれてそ聞えぬるいほより下の谷の鳥の音

山家虫

月をそき山下庵のかやかきのほのめきあかす蜚かな

田家春

暮ふかき門田の面の苗代に霞のみなゝまつ引てけり

田家夏

かり庵のあれにし跡に夏ふかみ田中の清水又むすふ也

田家秋

さひしさなとりあつめたるれさめ鶯鳴のはれかき鹿の遠聲

田家冬

小山田のひたのかけ縄引絶て残るひつちはもる人もなし

田家風

雨かゝる山田の庵のこもすたれ吹まく風のなもけなる哉

田家雲

なへてはや岡田のいなは刈てけり枕の月のうすくものそら

田家煙

あせかよふ道もそなたのほそ煙おき出の庵の夕くれの空

田家雨

降雨のすこかいなやの夜もすぢもりぬしほりぬれん方もなし

田家鳥

いほりさすなちの田面のすへ晴て山本わたる秋のむら鳥

田家虫

いなむしろ露まともます聞ゆなり野田のつゝみの松虫の聲

春夜夢

梅かほり月かすむ夜の手枕にいかなる夢のしゐてみゆらん

夏夜夢

すゝむとてたゝうたゝれのまとなれや水音ながら夢を別るゝ

秋夜夢

月にはやふかしけるこそしられぬれこひは夢の明かたの空

冬夜夢

川音も氷にとまる冬の夜の夢をさへこそむすひそへぬれ

曉夢

鳥のこゑ枕のかねにさはかれてみえつる夢そいやはかなゝる

短夢

やかて見えやかてさむるに思ひれも少なき夢の程そしらるゝ

夢驚

かきこしのあなたの人夢かたり我もれさめにやかて成ぬる

山眺望

いつかたにさて横雲はわかつらん松のみ残るあけほのゝやま

野眺望

夕日影あさちか原にやゝ消て遠方人の野路の行すゑ

海眺望

雲のなみ八重たつ方のおくの海も今あらはるゝあさなきの空

雨中懷舊

物そおもふひろはぬ軒の玉水の雲にあかす雨の夜すから

深夜懷舊

過ぎつるたゝそのかたを思ふにもあかつきまたね寢覺成けり

庵懷舊

引むすふ草の庵もふることのたゝしのはしきつまとなりけり

閑居懷舊

つくゝと獨おきある窓の中にあはれ昔のさしむかひぬる

夢中懷舊

おほえずも枕にたまる涙かなむかしを見する夢の行衛に

寢覺懷舊

あはれなる我寢覺かないにしへのおほゆる程なとふ人もなし

懷舊淚

いかにせん袖の涙のかたおちにふるきあとそといふ人もなし

獨懷舊

かたゝにおもひ出るもかなしきは心ひとつのむかし成けり

老後懷舊

過ぎつるかたゝにいまは一むかし猶そのかみの事をきかはや

懷舊非一

今はたゝ心にかけて聞ばかりすまの浦なみ八はしのあと

寄日述懷

曇りなき御代そと更に仰く身にやふしなわかぬ日影もらすな

寄月述懷

さらに今めてこしかたを驚くは我身ふけぬる夜はの月影

寄星述懷

せめてよし月待ほととの頼み哉空にはれたる夕つゝのかけ

寄風述懷

君もしれ家の風をはふかせても猶待ことの身に殘るとは

寄雲述懷

いつかけに心はれてもおもはましたゝかきみたす浮くもの空

寄煙述懷

いかにせんをのゝ山柴ことたらて猶たてかぬる宿の煙を

寄露述懷

きえぬ世に光あり共おもはゝや我道芝の露のことは

寄雨述懷

數ならぬ身をしる雨のうちそゝき人をうらみぬ袖そしほるゝ

寄霜述懷

ことの葉の猶色そへて初霜のふるきあとをはいかにてみえまし

寄雪述懷

おもひ出の心にとまるかすなれやうす雪降て明ほのゝ空

寄山述懷

あらましは杉たつ山のかけの庵たれかはさてもすみなれに劍

寄關述懷

なに事も心とめしとおもへとすゝかの關のふりもすてえす

寄道述懷

ともすれば道の便にまよひつゝすくにはゆかぬ事をしと思ふ

寄橋述懷

おもふ事つるには末やとならましはしとたえの橋にあり共

寄沼述懷

ひきゝの沼のあやめは見ゆれ共いかてみくりの猶殘るらん

寄江述懷

思ふ事しるしもあらは深き江の身をつくしてはさのみ歎かし

寄河述懷

おほけなき身の、そみにもあらしかしいつか結はん細河の水
寄瀬述懐

みたらしやその瀬の波にいくたひか憂身かはらぬ御被しつ覽
寄海述懐

ひかれはと思ふ計のたのみ哉しほせにかゝる海士のうけなは
寄浦述懐

いかにせんおなし宮屋の月たにも我身に曇る鹽かまの浦
伊勢

更に今岩戸のむかし思ひいつや神路の山の明ほの、空
石清水

濁りなき世にかくしこそいはし水たえぬなかれの今か今まで
賀茂

河原をは唯はや過よいもゐにはそれを結ふかものみたらし
松尾

爰かとよあけの玉かきほの見えて一むら曇る松の尾のみや
平野

難波津の風の音をや殘すらんひらの、松にうち時雨つゝ
稻荷

山人のいまうちむれて歸り坂その初むまのおもひ出つゝ
春日

おもふ事いまはやさらはみつや河なかれをしらは春日野の神
布留

あけは又みとりになりぬいくとせを布留の神垣苔のむしつゝ
大原野

神かきそあらはにみゆる大原野をしほの小松たけもしられて

住吉

日吉

梅宮

吉田

祇園

北野

貴布禰

出雲

三輪

玉津嶋

熊野

如是相

如是性

わきて猶あふきやせまし敷嶋の道まもるてふ住吉の神

日よしとてさもたのみこし跡そかし哀をかけよしかのうら波

名もしるしなみ木の梅の宮居して所々にまじる榊葉

程ちかき吉田の宮のかくら岡さて松風の聲しほりけり

山よりもこなたにとまるからす羽に神のそのふは早暮にけり

神や又まもるしるしの杉間とて北野の森にまつあふくらん

鞍馬より又山こえの貴船河玉ちる計おちたきりつゝ

つまこめしその八重垣の名をとへはいつもの宮の夕暮の空

やまとちやその名もしるき神垣の杉も老木の三輪さすらん

神もさて心とめけり玉津嶋入江の月の明かたのそら

おちたきり岩うつ瀧のなうちこもりさても心は猶やすむらん

あともなきたゝうき雲のそのまゝに緑の空そあらはれにける

風わたる池のうき草とたえしてすみける物を夜半の月影

如是躰

これはさはきえし霞の行衛かはやかて卯月の光りをそみる

如是力

岸なたれ岩にもたるゝふし松のこれより後は風さはくとも

しほろイ

如是作

水こえし河そひを田のかたあらしなこせやさらは末を頼みに

如是因

苗代のあせぬりたてゝまくほとに早苗とるへき頃もみえけり

種イ

如是縁

はしらかす興津舟人今はゝや風をしるへの江にやよろらん

如是果

秋ふかみ落る木かけの柴栗のこのみをしほる山風そふく

如是報

此世にて人の心になはゝやむくひあればそあまり物うき

如是本末究竟等

草の原葉のほる露をやかて又雪に見せて月をちにけり

大日

あまつたふ光の及ふ草も木もおのかさまゝあらはれにけり

阿彌陀

是も又花のうてなのためとてやまつあつてなく十聲成らん

釋迦

世にちらすわしの高れの御法こそ木のはにうつす行衛也けれ

聖觀音

すくへかしはちすの糸に引結びよしかはさきのそこゐなり共

千手觀音

數の手に露の恵をそゝかすはなにをかさてもくゐのやちたひ

馬頭觀音

頼むそよひまゆく駒のをこたりもその玉の緒に引やむすふと

十一面觀音

あらましくひはらからたち吹かせに露うちそゝく小初瀬の山

准泥觀音

たのめ人その名もしるく聞ゆ也花の外なる入相のかれ

如意輪觀音

色々のあまの羽衣引かされ心まかせのひかりをそみる

二乗

一かさり花にふゝきし山風の聲をうつして木のは散也

寄天祝

あふくへし行かふ雲もみたれなくおさまる御代の久方の空

寄日祝

天の原いくめぐりとも限りなき日影や君かためし成らん

寄月祝

いさゝらは君か御かけにくらへ見む空にかはらぬ月のゆく末

寄星祝

曇りなく空にみちたる光哉星のはやしの夕闇の空

寄雨祝

苗代や又水無月のてる頃もおもふばかりの雨くたるなり

寄風祝

花もみちのとかに御代のしるし哉枝吹風の音も聞えず

寄國祝

御調物のほろよほろのいさむにも國ゆたかなる程やみゆらん

寄郡祝

ふるはたものこらすうちの郡より昔にかへる御代そしらるゝ

寄郡祝

長閑なる月の都のすまゐとて道のよこふえうたふ聲々

寄道祝

數嶋の道のことわさしけきにも長閑なる代の程はみえけり

寄水祝

池よりもしたなる小田の千町にもことたる水をまかせつる哉

寄巖祝

さゝれ石のなれる巖のそれよりも猶うきなき御代にも有哉

寄苔祝

苔むしろ敷て久しき跡ふりぬ碁をみしこれや山ち成らん

寄竹祝

とはゝやなこゝらの竹の林にもいかにかしき人の住らむ

寄松祝

萬代に千世又そへて龜の尾の山松かえはならふなりけり

寄椿祝

あつさ弓八尾の椿さきにけりいさ引うへんときはかきはに

寄椿祝

榊葉のいつくはあれと分て猶名にあらはるゝ四の神垣

寄杉祝

いくとせを杉のふる枝の是も又松にやなよふ色をみすらん

寄鶴祝

沖津波それはなさまる朝なきのしほひにかよふ鶴のもろ聲

寄巖祝

さらにたゝ蓬か嶋を庭にして汀の龜の萬代のやと

和歌の浦に玉もましらぬ藻鹽草いにしへ今の數をとめぬる

這千首可三詠進之由去八月廿四日從三室町殿一勝堂院蒙仰同
月八日持參之

應永二十二年十月十日

右爲尹卿千首以百花庵宗固本校正畢

群書類從卷第百六十四

和歌部十九

千首和歌太神宮法樂天文十一年二月九日

第一

立春

出る日に向ふ神路の山高く雲ぬも同じ春や立らん

春日

代々かけて引しはいつの子の目とてわか松原色もかはらぬ

霞

久かたの天のうき橋いくめぐりかはらぬ春に立かすみかな

鶯

鶯の心も今はうちとけて聲のとななる春や知るらむ

若菜

長閑なる霞とゝもに立いて、野への若菜に日をや摘まし

残雪

立春の空とは知るく霞む日もかたへは残る雪のひとむら

梅

のとななる時そと見えて咲初る梅か、匂ふけさの春かせ

柳

吹かせも治る御代のけふ毎にくる春しるき青柳の糸

早蕨

常盤木のかけも春とやさわらひの崩る烟の霞そむらん

櫻

幾春のかさしなれとか雲の上に咲や櫻の千世ふかき陰

春雨

草も木もうるふ緑の春雨のあまれき露を今やみすらん

春駒

のとななる風の行衛にいはいてや手馴のこまも春を知らん

歸雁

世にしたふ心は知るや春の雁ふりぬる道の跡とめてゆく

呼子鳥

それとしもわかす太山の春の色まつあらはれて呼子鳥哉

苗代

秋をまつ心の色やかつみえむまたあら小田の水のなほしる

菫菜

すみれ摘む野へは霞の袖はへて薄むらさきの色そ匂へる

杜若

紫のゆかりの色に今咲て夏もへたてぬかきつはたかな

藤

ときはなる松もさなから春にあひて猶色そふる藤浪の花

右衛門督

藤中納言

左衛門督

伯二位

廣橋中納言

三條大納言

前内大臣

甘露寺大納言

新大納言

高倉三位

内大臣

中務卿宮

萬里小路中納言

藤原氏直

中院宰相中將

飛鳥井大納言

宣治朝臣

歎 冬

春風のけき吹立て川水にうつる影さへに 四辻宰相中將

三月盡

ほふ山ふき

行春をまたこん物としたふにも思へはとほきけふにそ有ける

更 衣

雅教朝臣

夏きぬと大宮人の白かされ櫻かさせる匂ひたになし

卯 花

廣橋中納言

賤の女かさらせる布や懸てほす垣れつゝきに咲る卯花

葵

左衛門督

末かけてふたはも同じ葵草日かけにむかふ露の涼しさ

郭 公

基孝朝臣

待えての心も知らず時鳥何おしむらん夜はの 甘露寺大納言

菖 蒲

高倉三位

けふにあひて曳やあやめいくとせの長き根をへて深き澤水

早 苗

新大納言

小山田に早苗やとりしけさみれば濁りておつる谷の下水

照 射

前内大臣

ともしさすさつおの眞弓男鹿ふす野山の露やあかね短夜

五月雨

中務卿宮

降そむるけふ五月雨の天津風吹とちけりな行雲もなし

蘆 橋

三條大納言

うつし植したかのきはより橋のむかしを忍ふ香に （マ）

螢

三條大納言

光らして玉藻にましる螢もや清き渚の心をはしる

蚊遣火

藤原氏直

夕まくれ月待ほとすきみとや宿をあまたの蚊遣なくらん

蓮

右衛門督

たれも見よ濁りにしまぬ色に出て清き心を池の蓮は

水 室

飛鳥井大納言

あとたれし昔なとへは氷室山そなへきにけり 千世も盡ぜし

泉

雅教朝臣

涼しさの心や秋も結ふらし庭のいつみになつをわすれて

荒和菰

飛鳥井大納言

つもりにし心のちりと御菰川なかしてさらす神や頼まむ

立 秋

藤中納言

いつのまによものなかめも秋きぬと夕の山の霧の一むら

七 夕

飛鳥井大納言

かさねこし雲の衣の千夜も又うら珍らしきほし合のそら

萩

前内大臣

江の水にあらふときし唐錦ほしあへぬ露や秋にみすらん

女 郎 花

内大臣

風わたる霧のまかきの女郎花へたと見るもなひく色哉

薄

内大臣

吹むすふ風の色よりちる露のよそに亂れぬ糸すき哉

荊 萱

宣治朝臣

終夜月はやとりなかるかやの露もよすかの光りそへつゝ

蘭

藤原氏直

かせさそふかをなつかしみ蘭きてみるからにあかね色かな

萩

甘露寺大納言

きけはまた忍びになるゝ風の音もまたき秋しる萩の聲哉

雁

基孝朝臣

秋かせのなとも淋しき夕くれの月に聲すむかりの一つら

鹿

新大納言

あき深き草のとはその明かたに妻こひ侘てお鹿鳴也

露

歌欠

霧

廣橋大納言

吹わたる風のあとよりさやかにも山見えそむる霧のうち哉

槿

中務卿宮

咲出しよの間はしらす槿の朝日に移るはなのほとなさ

駒迎

四辻宰相中將

えにしありてけふは雲ゐに逢坂や駒のあしなみいさみてそ引

月

左衛門督

曇なき空をうつして海原や二見の浦のなみの月影

搦衣

中務卿宮

はらふともけぬへき物が白妙のきぬたにおもき月のはつ霜

虫

前内大臣

思ひ残すこともあらしの吹すさふ野を松虫の所えて鳴く

紅葉

甘露寺大納言

色深く染るもみちに立ならふ松ひとしほの秋の山里

菊

中院宰相中將

白きくの千年の秋を花の上に今朝置く露の先みする哉

九月盡

三條大納言

なにをかもけふしたふらむ紅葉ちり菊も移らふ秋の行衛は

初冬

中務卿宮

今朝は猶冬にしくれの秋の雲ほしあへぬまてうつる空哉

時雨

萬里小路中納言

そめ置し後いくめぐり夕時雨おちはか上におもき山かせ

霜

置そふも空にそ知るき初霜の残る夜ふかき鐘のひゝきに

霰

ふる音はまなく聞えて一村はたか玉さゝのたま霰かな

雪

内大臣

埋るゝ雪には何をみをつくしまつをしるしに立波もなし

寒蘆

新大納言

霜寒き入江のあしのかればにも波よせかへる浦風そ吹

千鳥

飛鳥井大納言

鈴鹿川かはなと高く月更て聲もすみ行友千鳥かな

氷

廣橋中納言

をのつからみれはおち葉なしからみにかけて小川や氷初らん

水鳥

甘露寺大納言

氷る夜はなしのふすまを重れてもさそな寒けき池の水鳥

網代

高倉三位

瀬を寒み明行波のあしろ守袖にはさそなよるの川風

神樂

萬里小路中納言

天津かみ恵ひくよのこも枕たかせのよとの聲を添ゆく

鷹狩

左衛門督

はしたかの上毛の雪を打拂ふ手ふるひ寒きけふの狩人

炭竈

三條大納言

雪なから松よりのほる夕烟とき知らぬ風や峰の炭かま

爐火

さえく／＼て松のあらしの更る夜もよそにしらてや向ふ埋火

除夜

前内大臣

行としをよすからあかすこもるとは關こゆる松も空に知らむ

初戀

左衛門督

それとなき野への初草はつかなる俤をしもしたふわりなさ

不逢戀

甘露寺大納言

いかにして扱も逢みむとはかりの心ことはも人にかひなき

忍戀

前内大臣

身をしれは涙もさそなほさりに思ふ絶まにもりや初けん

初逢戀

内大臣

したひきて知る夜もあれや初草の露のかことを袖の物とは

後朝戀

廣橋大納言

さらてたに思ふなこりを移りかも消えなて暮ふけさの俤

逢不會戀

中院宰相中將

甲斐なしや夢はかりなる俤もこよひ定めむうつゝならねは

旅戀

雅教朝臣

仇に置くつゆとないひそ草枕むすふ契は千世の一夜を

思

四辻宰相中將

秋かせも拂らはぬまゝのやへ葺しけき露より思ひ亂るゝ

片思

伯二位

かくはかりなと慕ふらむわりなくも我のみ深くくゆる思を

恨

今更に身をこそたと何故と人にはるけむ恨とこゝろも

嘆

前内大臣

しるへせむ鐘はきくにもとくおそし我れさめ社時をたかへに

松

萬里小路中納言

立そはむ枝にかそへは君が代の千世はかれてもわか松はら

竹

前内大臣

窓の内に夜ふかく月もさし入れとしつえなすかず竹の涼しさ

苔

中務卿宮

稀にきて心やのへむちりもなく清き岩ねの苔の庭に

鶴

内大臣

空にみついくよの霜の翅をもわすれすたつの聲の長閑さ

山

中院宰相中將

守るてふ誓ひもしるし神路山やまとそ高き君か齡は

河

飛鳥井大納言

時し有とふりさけみれはいすゝ川ゆたかにすめる波の春風

野

萬里小路中納言

うつりくるいつれはあれと春秋の俤かはる野への夕暮

關

雅教朝臣

たれに今心とゝめて夜もすから月も清見か關路もるらん

橋

四辻宰相中將

夜をこめて遠かた人やわたすらむ霜に跡みる谷の板橋

海路

伯二位

數々の御調もさそなわたつみの末はるかなる舟のかよひち

旅

高倉三位

うち出てはるけき末の山のはも麓になれる雲をわけつゝ

別

宣治朝臣

立別れ歸らむと思ふ契たに歸るさ遠き旅こゝろもかな

山家

藤中納言

淋しさも身にはいとほし柴の戸にすむな心の山のゐの水

田家

守捨し跡とも見えず假庵に遠やま賤の殘すかよひ路

懷舊

身にしのふ共ふることは年をへて老に數そふ物にそ有ける

夢

行々てしらぬさかひもみし夢に殘るを思ふ 小夜の手枕

釋教

神かきのうちともおなし光り哉さかひふたつのもとの悟りは

述懷

道しあれや誰もなへての家の風傳へしまゝの代々にまかせて

祝

いやつきに神もそ守る天地も動きなき世の時を待えて

第二 九日

立春天

明てけふ霞にたてる春ならし天つたふ日の影もへたてす

立春日

曇りなき雲をさして出る日の光りにしるき 四方の春哉

立春水

吹かはる風もあつまの空かけて波に立そふ 春の池みつ

立春風

治れる御代も知られて吹風の音ものとかに春はきにけり

立春雲

宣治朝臣

なのつから雲も霞に立かへて今より春の色はしるしも

山霞

伯二位

雪消えぬ山ちもなへて長閑なる春の色そと立霞哉

關霞

内大臣

いかに見て心にとめん霞のみへたての關のはるの明ほの

橋霞

飛鳥井大納言

月雪にかけても知らず霞しく濱名のはしの春は忘れし

湖霞

中院宰相中將

そことなく霞む汀ははるかにて波の音のみしかの辛崎

海霞

中務卿宮

よるとみし春の海邊は波もなく霞やよそも立かはるらむ

岡殘雪

萬里小路中納言

くさも木も花し匂はゝ岡のへの道なしとても春のしら雪

谷殘雪

四辻宰相中將

山はみな霞こめても白雪の殘るに谷の深きをそしる

杜殘雪

前内大臣

下草の駒の心をりのかけ人もすさめぬ春の淡ゆき

嶋殘雪

右衛門督

うつる日の光りもおそき嶋かけに猶きえ殘る雪の色かな

庭殘雪

甘露寺大納言

山ちにはさそふかゝらし都たにまた村きえの庭の白雪

舊巢鶯

飛鳥井大納言

春寒き雪のふるすを出入て花も盛となくひすそ鳴

初鶯

寒かへり雪もふるえの梅の花まつひらけたる鶯の聲

谷 鶯

さきさかぬいつこの谷の鶯も花の都といて、鳴くらん

竹 鶯

いろかへぬかけを宿りと春にまつ竹のうてな、鶯の聲

聞 鶯

しのゝめの宿も霞める朝な／＼なれてくるてふ鶯の聲

朝子日

とし寒み後あらはさむ千世の色を子の日にくむるのへの朝霜

野子日

野へに出て子の日の小松引植む君かちとせの限なき世に

子日松

若みとり春に立そふ小松原千世よろつ代のためしにそ引

子日友

れの日する野への小松の引つれて心へたての袖はみゆらむ

子日興

子の日する松にひかれて歸るさも知らぬ岡への春の長閑さ

原若菜

萬代を祝ふ心は松原もおなしみとりにつむわかなかな

澤若菜

ひまみゆる山澤水のうす氷心もとけぬ若な摘なり

尋若菜

いさ行かむめくむ若菜はそこしもまた白雪のかすかの、原

摘若菜

うちむれてわかな摘の、花かたみめならふ人を雪まにそしる

若菜多

中院宰相中將

知るしらす行かふ袖や花かたみかたみに野へのわかな摘らん

餘寒霜

藤中納言

春なからさえかへる頃の色みえてまた霜深きのへの草村

餘寒風

さえかへり吹盡してよさかぬまの花にはきかん嵐なりとも

餘寒水

藤原氏直

春寒み宿や雪けにかへるらむあらしもこほる山川の水

山居餘寒

前内大臣

朝夕にむすひなれても山のゐに春また浅き水をそみる

二月餘寒

新大納言

吹風のあらしも寒くきさらきの宿牙かへりふれるしら雪

梅始開

三條大納言

なへて世の匂ひになりぬ咲梅の枝より出て風や吹らむ

梅有遅速

咲梅のおなしえながら吹かへて朝露寒き北の山かせ

馨 梅

前内大臣

ふりぬとも香をたにとめよ梅の花軒の忍ふは拂はてそみん

梅薫袖

雅教朝臣

なのつから軒はの梅の香をとめてつ、む匂ひそ袖に餘れる

依梅待人

甘露寺大納言

告やははなと問はさらむ待てこそ梅咲ころの心をも見め

江 柳

雅教朝臣

つのくまね玉江のあしの浦かせもまつみたれぬる青柳の糸

岸 柳

三條大納言

遅くとき柳か枝は河きしに朝日ゆふ日の色やわくらん

門柳

左衛門督

行人のしはし休らふ門の前に露も宿れる 青やきのかけ

隣家柳

高倉三位

中垣のへたてともなき春の色やこなたかなたの青柳の糸

遠村柳

飛鳥井大納言

陰しけき川そひ柳打けふる遠の一村くるゝ空かな

麓早蕨

左衛門督

ふもとより先おり取りて薪こる道にや残す峰の早蕨

岡早蕨

四辻宰相中將

行人もまつ立よるや岡のへの木の下蕨おりなしる頃

樵路早蕨

同

咲花のかけみとめきて山賤のやすらひかてらおれる早蕨

野徑早蕨

萬里小路中納言

折そへてたれも行きの袖の色は同じみとりの野への早蕨

岩根早蕨

廣橋中納言

春そとはをのれいはれの早蕨のもゆるけふりや先霞らむ

深夜春月

右衛門督

天津空かすみなからも更る夜や月はさすかに光りそひ行

曉更春月

三條大納言

稀にあふ花をや口そふ月たにもかたふきやらぬ春の曙

旅宿春月

高倉三位

霞む夜は草の枕の空としも思ひもあへぬ月のあけほの

春月憶昔

内大臣

昔見し宿はとゝへは月ひとりありしもあらず影霞らん

春月言志

三條大納言

さやにみぬ曉月夜のみしかさはたかあやにくに慕ひ馴けん

社頭春雨

内大臣

神ち山さらに木のめも春ふるを恵みなるへき雨の色哉

古寺春雨

四辻宰相中將

入相の聲も霞て初瀬寺檜はらくもる春雨の空

草庵春雨

頃ははるたれかは草の庵しめて静けき雨の限りをも知る

旅行春雨

萬里小路中納言

こえは又浦の笛や夜の夢露けきかけむ春雨のそら

苗代春雨

廣橋中納言

せき入るゝ苗代水も豊なる行末しるき春雨のそら

水邊若草

甘露寺大納言

春の色の先うるほふや行水の岩れの小草緑ことなる

故郷若草

中務卿宮

故さと人めにかへる春やみむ垣れの草の下萌てゆく

山家若草

基孝朝臣

萌出るみとりも見えて山里の垣れ色そふ春の若草

野亭若草

甘露寺大納言

春秋をいかに見らん置えたる野守の庵の露の若くさ

垣根若草

藤中納言

かこふともみえぬ垣れは春といへはかつ萌出る庭のわかくさ

飯雁知春

内大臣

朝なく春はなとなき浦なみに立こと安き雁の一むら

飯雁連雲

甘露寺大納言

聲たてゝ行たにそれと見も分ぬ空もひとつの雁の別路

飯雁成字

左衛門督

たか方につてやもうの玉章のこたへをかいまみ歸る雁かれ

飯雁越峰

中院宰相中將

峰高みこえけんかたもしら雲に心やしるへ歸るかり金

飯雁幽

したはれて春に心はひく琴の音に通ひて雁歸るらん

待花

内大臣

待つてことしの花やいかみむ忘れかたきは盡ぬ物から

栽花

雅教朝臣

萬代なかれてうへ置く山櫻はなも常盤の春や契らん

遠花

廣橋中納言

思ひこし心の色やさくら花雲こそかゝれ遠の山のは

近花

中務卿宮

色も香もちかまさりする花の上に心を染て置る露哉

馴花

置る露哉

年をへて色にやそめし唐衣馴にしほとの花の木の下

落花隨風

内大臣

けふそ思ふ心とちれる花の色はいとひし風のうらみともなき

落花似雪

内大臣

訝かへる程とやみらん木の下にまたふり積る花のみ雪は

落花難駐

飛鳥井大納言

木のもとに心つからと散る花も慕ふなすか思ふとはしれ

落花盈庭

前内大臣

雪と見は心もとめし散る花の梢にゆるす庭の朝風

落花埋路

伯二位

分入て散らぬ梢を尋はや花に埋める春の山みち

朝莖菜

雅教朝臣

日影さす野へのすみれの露をおもみ淺紫の色そこほるゝ

夕莖菜

高倉三位

摘袖もこゝにすみれの名をとめて花の宿りの袖や頼まん

莖菜露

廣橋中納言

紫のゆかりの色やつほすみれ露深くとも摘て歸らむ

野莖菜

前内大臣

散もせし野へのかくれのすみれ草木高き枝の花になさはや

籬莖菜

右衛門督

賤かすむ垣れのすみれ春にあひてうら紫の色に出らん

河邊歎冬

花とみてせくやよし野の川水にえもゆふはへのやへの山吹

里歎冬

新大納言

いはぬ色に花は咲とも山吹の盛り告こそ井手の里人

人家歎冬

宣治朝臣

見る人に春もいまはの色ふかく咲やまかきの山吹の花

歎冬盛

中務卿宮

咲そふや匂ひこほれて山吹の下行水も花の淵せに

歎冬散

三條大納言

山吹はかるく散へきたくひとや秋の朽はの色に咲らむ

池藤

甘露寺大納言

のとかなる世に立かへる春の色を花にみせたる池の藤浪

瀧邊藤

藤原氏直

松かえにかゝれる色も岩はしる瀧ついはれの藤浪の花

松 藤

右衛門督

千とせふる池の汀の松高く梢はるかに咲るふちなみ

折 藤

前内大臣

めもはるに見てもかひなし紫の色こき藤は折て歸らん

暮春藤

行春にしはし手おらん藤浪にこえたる花の枝はあらしな

三月盡夕

高倉三位

したひてん夕山こえて行春の霞の衣たちもかへらは

三月盡夜

中務卿宮

行とまるゆくゑを思ふ彌生山なこり夜ふかき鐘に向ひて

三月盡鐘

高倉三位

惜と思ふ空にれよとの鐘の音はしたふあすかの春のよはかも

惜三月盡

兼てより三月の春のかきりとは聞しにまさる鐘の聲かな

三月盡祝

中院宰相中將

月も日も違へぬ空にけふ行やよにも道ある君か代の春

第三 九日

歲中立春

内大臣

みとりたつ松もいくよかふる年のみきりの春を更に向へて

山 霞

右衛門督

なとは山春に成り行色みえて今朝は霞の峰にかゝれる

春 雪

廣橋中納言

花をおもふ梢に春の風さえて俤見するけさの雪哉

朝 鶯

新大納言

雪はまたふるすなからの谷のとに春とやけさは鶯の鳴

澤若菜

右衛門督

雪消て道しある世と諸人の野澤のわかな今や摘らん

餘 寒

四辻宰相中將

霜氷とけしはいつら山里のこのめも春に訝かへるそら

梅薫風

新大納言

咲花の立枝も見えぬ春の夜にあやなく匂ふ梅の下風

行路柳

内大臣

行袖もなひきあひてや世は春の風に治る青柳の糸

春 雨

中務卿宮

ふり出る空をも分けて行末の袖にかすめる春の雨哉

若 草

高倉三位

ひまもゆる芝生の雪のあさみとり物にまきれぬ草は成らん

春 月

左衛門督

風かほる花に光をとられてや残る月よの春の曙

歸 雁

甘露寺大納言

年々にいへは更なる名殘今有とたに知れ歸る雁かれ

初 花

雅教朝臣

世に匂ふこと葉の花も咲そむる色かにこもる山櫻哉

見 花

甘露寺大納言

見てもあかね心を染んよしや猶花ちる跡の春は有とも

翫 花

三條大納言

春いくかけふ諸人の逢にあひて花もかさしの色香をや思ふ

惜 花

三條大納言

よしさらは盛はまたし移はん日數にちかき花はあやなし

落花

中院宰相中将

籬山吹

萬里小路中納言

咲のころやへ山吹や行春のせきしまさしき笹なるらむ

松藤

前内大臣

かけそめし契も深し藤波になみの聲ある松のしたかせ

暮春

飛鳥井大納言

くれて行春しもあやし菅のれの長き日いかていかに過けん

首夏

飛鳥井大納言

わすられす春を思は皆人の衣に夏そおとるかれぬる

待郭公

飛鳥井大納言

初聲は忍ひもあへし夕やみの月待てとや山ほとゝきす

聞郭公

飛鳥井大納言

待し夜の恨をつくす時鳥きくもなこりのいれかての空

早苗

前内大臣

取のこすは草も見えずゆく水の早苗こす波露の涼しさ

谷五月雨

中院宰相中将

谷のとは明ゆく空も晴やらぬ雲まに分ぬ五月雨の頃

夏草

前内大臣

拂はれは草のみ高き岡のへの小松の縁夫としもなし

夏月

飛鳥井大納言

見るほととの影もとゝめす天の川早瀬に成りぬ月の短夜

水邊登

新大納言

草深き澤への螢よるゝはもえて思ひに身をこかすらん

夕立

中務卿宮

なる神は夏にしるして夕立のふりこむ空ないかに聞覽

六月杳

前内大臣

諸人の千わきに分て思ふことけふみな月に残いてゝむ

早秋

甘露寺大納言

詠やる夕あやしき秋はいまこゝろのほかになく色もなし

乞巧奠

萬里小路中納言

かゝけなく庭のほかけも星合の明る夜しらむ露の玉琴

萩風

前内大臣

れさめして今こそ永き夜はの月見よとすゝむる萩の上風

萩露

飛鳥井大納言

なぐ露の匂ひにあまる枝もはもとあらの小萩花に咲ぬる

秋夕

左衛門督

いつはあれと夕の空のわきてなと秋の寂しき物と成りけん

初雁

中院宰相中将

秋かせの光も清くすむ月の空にさやけき初雁の聲

秋田

三條大納言

幾千里いなはの雲に雨風も口にまかせたる門田守らん

夜鹿

中務卿宮

山鳥のよるの思ひをさなしかのおのへ隔てゝねには鳴らん

曉虫

内大臣

草のとに思もそふやおりゝのれさめの友の松むしの聲

山月

宣治朝臣

ふもとよりのほると見えて澄む月にかゝらん峰の雲霧もなし

湖月

萬里小路中納言

あま人もひろふ計やさゝ波によりくる月の秋の見るめは

野月

廣橋中納言

置露に光かはらて草深き野守か庵も月やすむらん

渡月

内大臣

くまなさは波にもみえて御渡の秋更る夜の月をしそ思ふ

庭月

前内大臣

あふくなりかきほの中に海山をうつせる月の光あまれき

關霧

甘露寺大納言

おき出る關の戸さしは明る夜を何殘すらん霧こめてけり

聞擣衣

伯二位

吹かせの音うちそふる麻衣よその哀はおもひしらすや

重陽宴

甘露寺大納言

折かさす菊も千歳の秋のまゝにけふみきたまふ秋はかはらし

杜紅葉

藤中納言

露しくれ染てし木々の紅葉々を何といはせの松の下かけ

河紅葉

河なとはよるのまくらによるの雨あすの紅葉の幾しほかみん

九月盡

雅教朝臣

うき秋といひならひしも暮て行名殘にけふの袖の露けさ

初冬時雨

三條大納言

わきて知る心も怪し神無月秋にきゝしもおなし時雨を

落葉

同

心からもろくて散やさそふらむ嵐のまゝの木のはともなき

寒草

左衛門督

かれわたる野への草はも霜にけさ又さく花の色をみる哉

淺雪

古き世の跡かはらすは初雪の淺きこゝのへの庭

積雪 廣橋中納言

白ゆきの積るか上に運び上てつくりなしたる山をみすらん

池水 伯二位

池水の深き氷のよを重れ床したひつゝさはくをしかも

豐明節會 右衛門督

賢きや豐の明りの小忌衣袖をつらぬる雲の上ひと

冬月 四辻宰相中將

更る夜のあらしも晴れて行月の影は氷らぬ庭の池水

湯千鳥

曉の潮のひかたのしらむより千鳥も波に別れてやたつ

歲暮 中務卿宮

名殘なをしくやはあらぬ一年の身に行とまる數を知にも

寄月戀 同

こぬ人においてやと思ふ山のはの月もつれなき光見せつゝ

寄雲戀 内大臣

雲のみになくへんもいさ心のみ思ふ色には行かへるとも

寄雨戀 甘露寺大納言

わか涙雨となりなはうき人のはれまありとも見えぬ物かは

寄風戀 左衛門督

おとつれをまつに残して吹風のだよりもわれになと恨むらん

寄烟戀 前内大臣

涙せく袖は鹽木のこりもせぬ思ひの烟けつゝかたもなし

寄關戀 高倉三位

程は只關のあしかきへたつれとまとをにもあらぬ中に戀つゝ

寄瀧戀

淵せとも涙せきあへぬ袖の上やしからみもなき瀧はおつらん
中院宰相中將

寄原戀

年をへてあふのまつ原待よひも猶つれなさの色そかはらぬ
雅教朝臣

寄橋戀

つれなさな何とか人にいは橋のくちね思ひに年はふりつゝ
藤中納言

寄湊戀

うき名のみおふの湊による舟のあふ瀬をなみにこかれ侘つゝ
藤原氏直

寄木戀

忍ふへき心の色もこからしのもりてあまれるわか思ひかな
宣治朝臣

寄草戀

蓬生のかれも果なてなく露のなさけもかゝる年もふりけり
廣橋中納言

寄虫戀

いひ出は哀とししれ夏虫の音にたに立すもゆる思ひな
雅教朝臣

寄鳥戀

人しれす君もやくると呼子鳥聲にはたてし忍ふ心な
基孝朝臣

寄獸戀

よそにても哀ときは秋の夜に我もなしかのねにや立へき
四辻宰相中將

寄玉戀

人めには猶やひろはむ玉露袖にきゆるは涙とも見し
飛鳥井大納言

寄鏡戀

おとろふる鏡の影に人のうき數の外なる思ひ添ひぬる
甘露寺大納言

寄枕戀

あふとみし夢さへうとし儘に丸木の枕まろれせよとや
三條大納言

寄衣戀

よしさらは夢にはなさしうらもなくよるの衣を今は頼まん
右衛門督
寄弓戀
問はて又待夜も明ぬ梓弓たか方にかは引たかふらむ
曉 鷄
さらぬたにれさめかちなる曉を何おとろかす鳥の聲々
藤中納言
夜 燈
鳥かれもまた夜ふかきを床の上に雨はさゝせの灯の下
萬里小路中納言
嶺 松
千世よはふ雲あかはらす通ひきて幾年みれの松風の聲
飛鳥井大納言
里 竹
一村に心かはしてすむ里や竹のはやしのいにしへの友
中院宰相中將
磯 巖
あら磯の波にも蓍の色そへて高きいはほのかけそふり行
三條大納言
鳴 鶴
四方の波音たに立すあきつ鳴雲井の鶴の聲計して
飛鳥井大納言
岡 篠
故里を思ふ岡へのさゝ枕一夜の夢もかれしと思ふ
伯二位
江 蘆
よせかへる浪にひまなく打そよく入江の蘆の一村のかけ
浦 船
うきわさと思ひながらに行歸る浪もしかまの浦の釣船
廣橋中納言
柚 山
それとのみ絶々斧の音はしてたゝよふ雲の三保の柚山
岸 苔
むす蓍のちりも拂はし庭清み動かぬきしの水のみとりに

山家水

内大臣

たれかすむ宿もる水の末々も又たくひなき山の下道

山家嵐

左衛門督

やま深く思ひ入にし心より峰のあらしもしつかにそきく

田家雨

前内大臣

晴くもる曇の行きゝも程ちかき山田の軒にくらき雨かな

旅行

飛鳥井大納言

夜をこめて旅たつみちは遠くみしけふの野山を兼て問つゝ

旅宿

前内大臣

行末をいそきたつとてふかくみし宿の情も知らす貞なり

旅泊

甘露寺大納言

きゝ馴はなをさりならぬ浪枕おなしつらさの浦風を吹く

海眺望

藤原氏直

波の上ものとかに見えていせの海や渚にさらぬ友鶴の聲

寄社祝

中務卿宮

跡たれて守る内外の宮はしら動きなきよの下つ岩れに

寄日祝

四辻宰相中將

代におほふ君か恵みは久かたの天てらす日も同じ雲ゐに

第四 九日

歳暮立春

前内大臣

歳の内はさすか日影も朝熊の山をへたてゝ春を霞める

山霞

雅致朝臣

春はまた冴る朝けの風の上に絶々かすむ遠近の山

海霞

高倉三位

海原やわかぬ霞の色なから紅くゝる沖のしら波

舊集鸞

宣治朝臣

谷の戸をまた出やうて鸞の聲やふるすにあらたまらん

澤若菜

基孝朝臣

長閑にも澤邊の水のにこりなくわかな摘つゝ千世もへぬへし

松残雪

春寒みしはしは雪のうち散も下葉にまじる軒の松風

庭梅

左衛門督

長閑なる色に今はた咲やこの花の香霞む庭の朝風

野梅

四辻宰相中將

さして行かたは有とも春の野のむめ咲宿や分て問まし

朝柳

新大納言

朝またき長閑き風に青柳の糸も亂れす露や置らん

故郷春雨

三條大納言

人めなき律の門は春の雨に跡見え初る雪のむらきえ

春月

春はたゝ霞そわきて浮雲は風をそ待し秋の夜の月

曉飯雁

中務卿宮

思ひなく花に都の名残もや有明の月に雁かへるなり

待花

甘露寺大納言

待ほとをさかりとやいはん咲はちる花に心のやすけくもなし

尋花

廣橋中納言

尋れ侘ね問てやみまし呼子鳥花ある方のしるへ也せば

見花

内大臣

千早振神かきかけて咲やこの櫻の宮の花のしらゆふ

折花

飛鳥井大納言
ちるをおし花もしるらし見ぬ人の爲にと手折ならひ有世な

惜花

藤中納言

しるへとも移るふ色の山さくら猶こりすまの花の下ふし

里歎冬

中院宰相中將

あかす思ふ心の色は山吹のはなの上にやいてのさと人

池藤

飛鳥井大納言

すむなしのなのか毛色も紫の藤なみかくる池の春かせ

暮春

藤原氏直

くはゝれる春の日敷や花鳥の外に盡せぬ名殘成らむ

里卯花

右衛門督

うの花の咲る里もや問てまし鳴すはあらしやま時鳥

挿頭葵

中院宰相中將

あふひ草月の桂のえたそへて今や手にとるかさしにはせん

杜郭公

萬里小路中納言

子規ちよなならせる聲なれや杜の梢の松高きかけ

關郭公

三條大納言

きかてもや山時鳥せき守のうちぬる程の夢の通ひ路

岡郭公

雅教朝臣

しけるらん岡の葛葉のかへれとは人のあきにや鳴ほとゝきす

五月雨久

中務卿宮

けふ幾日めくる日影もしら雲のしらすかさなる五月雨の頃

田邊登

内大臣

露のほる小田の早苗のひま毎にかけ顯れて飛螢かな

浦夏月

内大臣

浦なみのよるともわかぬ月影やよひのまゝなる空の涼しさ

水邊納涼

四辻宰相中將

むすふ手は猶いか計松かけにしるもすゝしき瀧ついばみ

遠夕立

前内大臣

あふきもて月ならば生まれきてむ夕立すらし雲の涼しさ

早秋朝

甘露寺大納言

色みえぬ秋なしれとや露たにも置あへぬけさの萩の上風

七夕夜深

高倉三位

更行か露なきそへて河なみに今宵みてぬる鵲の橋

野萩

飛鳥井大納言

いとはずよ朝露分て遠き野は袖も千もとの萩か花すり

萩風

左衛門督

きのふけふ軒の下萩そよ更に秋とはしるき風のなとかな

薄露

飛鳥井大納言

さそへとも契は秋に絶せしとおはなにすかる露の夕風

夕鹿

藤原氏直

暮て行秋の思ひなゆふは山ひとりおしかのれに立て鳴

初聞雁

雅教朝臣

秋になる今はたきつゝ雁金はいなはの風や音つれやせし

草虫

雅教朝臣

さやかなる月にはなれも鳴出て虫いれしけき庭の草村

川霧

内大臣

さす舟の袖より立て薄くこく川瀬うつろふ浪のうき霧

秋田

内大臣

ふりかはる露霜なから小山田のいねすも秋の夜を明すらん

禁中月

甘露寺大納言

雲の上の秋になれては名にしおふ所も月に忘れてそみる

社頭月

高倉三位

もれさらむ千々の手向のことは露をもてらせ月よみの宮

古寺月

前内大臣

峰高み月の桂にならふ樹の寺こそ秋を光なりけれ

山家月

飛鳥井大納言

谷かけは軒はの山を出そめてもりくる影も月のしたいほ

閑居月

萬里小路中納言

夕まくれ心かはさは澄月のみやこも同じ浅ちふのかけ

隣擔衣

三條大納言

小夜衣うつや人けのまちかきはうれしきもの、夢路くるしき

岸菊

四辻宰相中將

をく露も淵とやならむ川波のよするとみゆる岸の白菊

嶺紅葉

新大納言

露しくれ分て染てや立田山峰の紅葉の千しほ成らむ

谷紅葉

萬里小路中納言

染あへぬ梢にも哉谷川の音はしくれのたえまなきそら

九月盡

廣橋中納言

かきりある日數にくれて長月はたゝ偽の名にこそありけれ

行路時雨

左衛門督

こと岡にふるとはみえし道のへの行きさはらぬ初時雨かな

橋落葉

飛鳥井大納言

山かけやわたせる橋に散しきて霜の落はゝ風も拂はす

寒草霜

同

朝な／＼置そふ霜は深草のくさはみなからかるゝいろかな

湖水

高倉三位

浦かせの氷もゆくかさゝ波のこゑはみきはの松にのこりて

冬月

空清くあたりの雲を吹なして嵐の上にさゆる月かけ

湊千鳥

中院宰相中將

ゆく舟もよする湊の浪風になれも鳴たつ友ちとり哉

朝雪

前内大臣

夜のほとは降かされてもおき出るけさ社雪は光そひけれ

夕雪

廣橋中納言

くれゆけは埋もれ果て松風の拂ふやいつら雪の木高さ

夜雪

中務卿宮

うは玉のよのまの雪も知るはかり松にしつまる山風の聲

歲暮

内大臣

いかにをしみいかななかもむ行年の光の影を名残なる空

寄山戀

同

朽ぬとは思ひ入てもまたしらぬ山分ころもたれかかされん

寄嶺戀

廣橋中納言

仇にこそ心もかれてみれの雲おもひきゆともかひやなからん

寄杜戀

四辻宰相中將

つゆしくれ染なす秋のかひそなきはゝその杜の薄き契は

寄關戀

三條大納言

關守は鳥かれなれやあふ坂を人にゆるさぬしのゝめの空

寄岡戀

又もこむなこりをとめて初霜のれての朝けの岡こえの道

寄野戀

袖の上に移ろふからや分入しはるけき野への露の心よ

寄原戀

前内大臣

たえずふる涙も染よこぬ人をまつ原檜原色もつれなき

寄川戀

飛鳥井大納言

心のみへたて果すは中川の中に流れてたえず頼まん

寄江戀

廣橋中納言

あふ事は袖のみぬれてみしま江のしけれる蘆の一よたになし

寄沼戀

甘露寺大納言

思ふともかつ見し行衛いかならん淺かの沼の名にたくへなは

寄澤戀

藤中納言

いひよらむたよりも波の澤水の心あさくも人や見てまし

寄池戀

中務卿宮

かくなからうき名なりとも池水のいひ出てたに口もらさなん

寄瀧戀

新大納言

せきあまる袖にやみせん物おもふ瀧つ心を水かみにして

寄橋戀

甘露寺大納言

かけて思ふ長柄のはしの中絶は扱もやいか、戀わたるへき

寄海戀

内大臣

わたつみも深きかきりは有つへし思ひの淵そそこひしられす

寄浦戀

三條大納言

いかにしてぬる、袖しの恨をはいひもつたへむ遠つ舟人

寄濱戀

宣治朝臣

ほし侘ぬ浦のはまゆふへたてをきて重れぬ中の夜の衣に

寄瀉戀

宣治朝臣

今更にうしともいかにいはいはみ瀉立よるなみのほともあらしな

寄湊戀

左衛門督

つゝめとも袖にみなとの涙しもさばく心ないかにとかせん

寄鳴戀

前内大臣

ひとりれの鐘つく嶋を思ひにて答へもきかぬ世をつくせとや

曉寐覺

伯二位

きぬの空にはつらき鳥かれを寢覺の友ときゝもなさはや

谷松年久

年高くかたふく松に仙人の名をやとゝめし谷のかけくさ

籬竹

四辻宰相中將

栽おきて今や千ひろのかけならん籬の竹のよゝなこめつ、

路苔

新大納言

いかにして分やは入らむ山深き岩間かくれの苔の通ひち

蘆間鶴

前内大臣

霜雪を上毛に拂ふたつのふむ跡より蘆もうら枯やせん

羈中送日

甘露寺大納言

都出し春の霞を立かへて行袖しめる秋きりのそら

羈中懷都

右衛門督

旅の空月よ花よとみる中も都の外のなくさめそなき

旅泊重夜

左衛門督

すむ月に磯への浪の打もれすいくよあかしの浦の友ふれ

海邊眺望

内大臣

暮ぬまないそくや釣にともす火の影ほのかなる浦の初嶋

寄夢述懷

いさむるもありしなからにたらちれのいく度夢の昔をかみし

寄老述懷

伯二位

さらてたにしたふ昔を老か身の上には猶そ思ひ知らるゝ

寄世述懷

中務卿宮

思へたゝ今をみるにも古にかへるはおなし道としらすや

寄情述懷

高倉三位

情あらはなと問さらむもとこしを待にはたかふ雨のつれく

寄涙述懷

右衛門督

おもほえず身はいたつらに涙川なかれて早く年を積れる

寄身述懷

新大納言

さりとともと思ふ心のあらましようき身忘れて年をふる哉

寄櫛神祇

廣橋中納言

櫛はのさかゆく御代や鈴鹿山ふるきにかへる道守るらん

寄鏡神祇

雅教朝臣

君守る神の恵は曇なく鏡にてらす御代そかしこき

寄水釋教

伯二位

愚なる身にわかつてたに行水の濁らぬ末や法のことわり

寄燈釋教

中院宰相中將

をのつから心の月の晴しより光そひゆく法のともし火

祝言

甘露寺大納言

岩戸明し光かはらす出る日の曇なき世や君かまにく

第五 九日

早春

甘露寺大納言

打なひく色にもみはや春はまた遠山のみの朝かすみ哉

隣霞

新大納言

見てもなをあかすそ思ふ春の色を霞の袖にえやはつゝまん

聞鶯

四辻宰相中將

朝日さすかたへの梢うつりきて聲ちかくなるそのゝうくひす

子日

立出る野へもはるけき小松原引手あまたの春やみゆらむ

若菜

雅教朝臣

朝日さすなのゝ白雪かつ消てわかなもとむる人の袖ふり

殘雪

前内大臣

重れる上より消て春は今ふり初し色に殘る雪かな

餘寒

右衛門督

頃日は嵐も空に訝かへりたれこめてすむ松のしたいほ

春月

萬里小路中納言

霞む夜も思ひまきれし梅かゝに月の桂の花の春かせ

春曙

飛鳥井大納言

おき出て見る程しはし山のははかすむ夜ふかき曙の空

岡梅

高倉三位

立よらむ影はわすれぬ花のえに思ひ岡へのやとの梅かゝ

飯雁

かへるさの道にといそく一連はなくれぬ雁の峯の白雲

春雨

雅教朝臣

かけろふのあるかなきかに有草の下蒨いそく野への春雨

遠柳

左衛門督

風ならてなひく柳のすかた□や雨に成行をちの一村

春草

藤原氏直

山里は垣れの草のはつかにも雪まに見えし春の色かな

山花

中務卿宮

咲花をつゝむ霞の袖のかも洩いて、匂ふ春の山かせ

杜花

内大臣

春の色は霞にもれて一村の杜の木立も匂ふ花かな

水上花

宣治朝臣

よし野川ちりかふ花の下水やとまらぬ春の行衛ならまし

欸冬

新大納言

色深きやへ山吹やうつり行かけまてにほふきしの下水

路藤

中院宰相中將

玉ほこのたよりにみえし藤波やかへるさ慕ふ春の夕暮

暮春

藤中納言

彌生山そことも分すくれて行霞そしるへ春やしたはん

更衣

藤中納言

霞こし空はいつしか夏衣うすき一夜やへたて成らむ

卯花

四辻宰相中將

ふり積る雪にまかへて卯花のかきは有とも見えぬ山里

神祭

前内大臣

珍らしき假れののへの露けさをけふはあふひの上にみせけり

時鳥

右衛門督

宵々はまつにつれなき時鳥あり明の月やおき出て見ん

菖蒲

飛鳥井大納言

こよひしく枕のみかは軒にふくあやめも長きためしになひけ

夏雨

甘露寺大納言

あつき日をへたつる雲のしく／＼に降出て涼し夕くれの雨

夏夜

三條大納言

更ぬるか月の木かくれ涼しさは夕日の名残あとのこらて

鵜川

新大納言

鵜舟さす川波となく入月のあとを光のかゝり火の影

蚊火

左衛門督

假そめもすまれぬものに蚊遣たく賤か家ぬは見るもいふせき

夏草

高倉三位

夏の野に末葉の松は下草の先おひのほる程を見えける

叢筍

廣橋中納言

草のはの露もみたれて光有と見えて涼しく飛はたるかな

氷室

三條大納言

今も猶木のしたさえて氷室山夏としもなき風のなと哉

夕立

飛鳥井大納言

山かせの時雨の雲や歸るらむ梢を分るゆふたちの空

納涼

伯二位

日も洩らぬ杜の木陰の涼しさの風はいつくを傳ひきぬらん

夏稜

中院宰相中將

水上も猶いさきよき川波に心すゝしくなかつ麻の葉

立秋

前内大臣

今朝よりは置そふ露の涼しさを心に萩の秋のはつ風

七夕

甘露寺大納言

鳥は猶はれなならふる空にしも星の契のいかに稀なる

萩風

中務卿宮

毎もきく風のひゝきのかはり行萩なやとりの秋かあらぬか

對萩

中務卿宮

女郎花

三條大納言

かはすむれさしもゆかし女郎花れたる眞萩の同し色に

原蘭

三條大納言

ぬれてこし袖の香深き藤はかま分る野原の露は拂はし

薄滋

高倉三位

夕かせの吹たつ野への村薄そゝろに秋や袖かへすらん

悲露

藤原氏直

たか秋のゆふへの袖にせきとめて露はあたる名には立らん

霧深

三條大納言

山もとは雲もましりて立霧の埋まぬかたや入相の聲

秋夕

左衛門督

身にしめて思ふよりこそ虫のねもたゝならぬ秋の夕暮の空

庭虫

内大臣

庭の面は露の染けり萩かえに錦おるてふ虫の聲々

野鹿

藤中納言

くれわたる遠山もとは身に寒くしめ野の露に小鹿鳴也

初雁

廣橋中納言

かこつへき春の別れのつらさゝへ忘れてそきくはつかりの聲

待月

右衛門督

出ぬまの月にいく度立よれば心いられの秋のそらかな

見月

しらしかし千尋の底にふかめても月のみるめにおよふ物かは

惜月

飛鳥井大納言

なれてみし秋はいくかもあらし吹峰ゆく月をしたひ侘つゝ

擣衣

高倉三位

都にはまた秋風も吹あへぬなとは山への衣うつらむ

菊移

萬里小路中納言

待人もわすれん花の匂かは色そめかへすきくのしら露

紅葉

高倉三位

秋きてはかたへに見えし太山木も花にけたれぬ峰の紅葉々

暮秋

甘露寺大納言

なへてうき物とはいへとさすか又名残なきにはあらぬ秋哉

初冬

内大臣

山高み朝けはしく木からしも吹たつ四方に冬はきにけり

時雨

藤中納言

しくれ行うき雲見えていく度かはるゝもやすき山風の空

落葉

雅教朝臣

染盡す時雨の後の梢より嵐も色にふる木のは哉

寒草

中院宰相中將

色々に露は染にし野への霜千種におなし花や咲らん

千鳥

新大納言

満しほの夕波高き浦かせに友なし千鳥うらみてそなく

水鳥

萬里小路中納言

うす氷むすひも果ぬ池水の月明かたやをしのむら鳥

谷氷

甘露寺大納言

なかれ行なとを風に吹かへてほとなく氷る谷の下水

冬曉

霜水かさなる夜半のおもほえすれ覺に成りぬ有明の空

鷹狩

中務卿宮

かり衣木あなもわかし簪たかのしらふにまかふ雪の下道

聞 霰

内大臣

玉さゝの上にはしるや聞の内にくたくる夢のよるの霰は

初 雪

同

珍らしと見そめし空にかつ散りて雪けの空やまた氷るらん

深 雪

基孝朝臣

日數へてふりつむ雪にとひゆかん里のしるへもわかぬ遠方

爐 火

伯二位

さえまさるよはの嵐は音すれと春もや通ふ埋火のもと

炭 竈

飛鳥井大納言

訝くらし此頃たえずやく炭のけふりは峰の雪そくもれる

歳 暮

前内大臣

身の上に積らぬ年のくれならはさのみおしまし春を向かへん

初 戀

甘露寺大納言

しかしなこたへせすともかくてのみ思ひやむへき我心かは

忍 戀

左衛門督

たれ故と人々とかめむ軒の草忍ふにあまる袖の白露

尋 戀

右衛門督

分佐る賜の草くきそれならてまよふやおなし心なるらん

契 戀

甘露寺大納言

また馴ぬほと社あらめ契てもかゝる思ひのあちきなのや

待 戀

高倉三位

れたしとは思はしいはし住吉のまつてふ色のかはりやはする

逢 戀

高倉三位

たまさかのあふ夜ながらも手枕の上に残らん思ひともなし

別 戀

新大納言

又いつの契もしらて鳥かれにおきわかれ行きぬの空

久 戀

右衛門督

年月は恨にたへてほとふるもつめの情を心にそまつ

絶 戀

中務卿宮

末終にかゝらんとてやおりくもならはしきつる絶まなる寛

恨 戀

雅教朝臣

はるけても又いかならんことわりの外にわりなき恨み所は

朝 戀

前内大臣

しらしかし人の心そ朝またき消えぬ露とも身を歎くとは

晝 戀

前内大臣

あちきなく暮しかれてはしたひけりよるは夢にも見えし俤

夕 戀

廣橋中納言

さりともとたのむ心や偽も思ひもしらぬゆふくれの空

夜 戀

前内大臣

忍ふ夜の徒ふしをあやむしろあやめはいかのへもやるへき

曉 戀

四辻宰相中將

うき事もしらてや雲のかへるらむわかきぬくの曉のそら

岡 松

中院宰相中將

さしそふや岡への松の深みとり常盤ながらに春をしろらん

岸 竹

左衛門督

旅ころも行袖さひし雪ちりて川風なひく岸の村竹

映 猿

四辻宰相中將

秋の雲はる、梢に啼さるや山のかひある月をみるらん

林 鳥

甘露寺大納言

いつよりかれくらと頼む鳥ならん人もゆるさぬ木々の梢な

浦鵲

難波かたつのくむ蘆へはるくと汐干しらるゝ蘆たつの聲

淵龜

内大臣

君か齡くらへは山も龜の上すむてふ淵のはかりもそなき

瀬魚

前内大臣

たれもみな數ならすとも瀧つせにのほれる魚を心とやせん

磯波

あしかりし名殘もなみの磯つたひ又漕よせてあかね友船

沼水

三條大納言

あひにあふけふの手向やかくれぬの埋れも果ぬ水莖の跡

巖苔

萬里小路中納言

動きなきたくひにや見むす苔の緑をうつす巖なりせは

山家

中務卿宮

のかれきてすめは住ぬる山としもしらてや人の言とふもなき

野亭

前内大臣

名にしおほ茂る本草をたよりにて緑のへをすむかけにせん

海村

藤原氏直

夕日さす浪の釣舟數そひぬかへる海邊の松の一村

水郷

廣橋中納言

藻しほやく烟とのみや難波人かすむもしらぬ春の夕暮

關屋

右衛門督

治れる君か御代をも守るてふ鈴鹿の關や名にも知かな

第六 九日

早春霞

飛鳥井大納言

水とけ波やはらくる春の日のいすゝ川原は霞そむらん
早春雪 三條大納言

春やときこほす計にふるもたゝしはしの程のえたの淡雪

山早春 長閑なる春に千里の外はあらしい重の山もわかやまと國

海早春 しほみちて氷もしらぬわたつみの波はいつより春と立ちらむ
高倉三位

早春鶯 谷の戸もけさより春に明そめて霞をいつる鶯のこゑ
左衛門督

白梅盛 にははすは猶たとらまし訝返り雪見る頃の庭の梅かえ
伯二位

紅梅遅 雪の内に咲てふ花も紅に匂ふや遅きやとの梅かえ

隣家梅 軒ちかき梅吹ちらす笛ならはふるきを思ふ聲はやめてよ

折梅花 とはるへき便に植し梅かえをあやなく手折る人や恨みん
甘露寺大納言

梅浮水 咲初て先影うかふ色もかも散る迄なみむ梅の下水
同

都春曙 吳竹の都の春の空なれや縁に霞む明ほのゝやま
中院宰相中將

岡春曙 明ほのゝいつはあれとも駒なへて春をそとはん岡の邊のやと
萬里小路中納言

崎春曙 辛崎や松も千しほの霞より汀にまさる春の明ほの

春曙雁

折にあふなめもさそな雁鳴て霞める月の明ほの、山

春曙眺望

藤原氏直

橘雲も残れる月の影うすく霞にしらむ明ほの、山

漸待花

雅教朝臣

とけそめて誰にかみえん花の紐心につけし春の契は

松隔花

内大臣

花の香はいつくもれまし深みとり松に立そふ朝霞かな

花参差

新大納言

おなし枝も咲みさかすみ櫻花いつを盛りの梢とか見ん

未飽花

飛鳥井大納言

咲つくもあかれやはせん櫻花はるに春そふ日数なりとも

花隨風

廣橋中納言

おしむとも思ひしらてや山機風の心にまかせはつらむ

暮春雨

宣治朝臣

おしと思ふ空も今はた暮て行名残そそふる春の雨かな

暮春躑躅

右衛門督

くれて行春をおしとや岩つゝしいはても花の色に出らむ

暮春歎冬

前内大臣

わかうへにこえ行春といひかほに遅くも花の咲る山ふき

暮春藤

中務卿宮

くれぬとも立や歸らん咲藤の花のしなひの松に見えなは

惜暮春

内大臣

暮て行春の色かよわつかなる霞のうちに残る鶯

首夏郭公

飛鳥井大納言

したひつるきのふの春の名残をも聞てなくさむ時鳥哉

朝郭公

廣橋中納言

朝と出てそれかとたとる一聲の行衛もつらき山ほと、きす

杜郭公

雅教朝臣

時鳥き、しはそれが玉鉾の道の行手の杜の下かけ

嶋郭公

甘露寺大納言

夕波にうちはへて猶時鳥をちかへる聲を松か浦しま

郭公稀

飛鳥井大納言

とひたえてなと待るらん時鳥をちかへり鳴く去年の古聲

岸夏草

内大臣

あらはなるかきれにしける夏草は人のかこはぬ隔とそみる

岸夏草

基孝朝臣

岸かけやよせかへる波の下草を夏のやとりに數しのふらん

原夏草

前内大臣

ひととほり吹とはみえて草の原露のしけみを分る夕風

夏草露

四辻宰相中將

夏の夜はしのひにをける露のまのふ色もみゆる艸の上哉

夏草滋

飛鳥井大納言

庭のおもにしけりそふとも夏草をからてそ秋の花もみるへき

初五月雨

左衛門督

降そめしけふを五月のなが雨と思ふ日数ないかに送らん

岡五月雨

藤原氏直

五月雨の晴まともみしも人とはぬ夕淋しき岡のへの露

瀉五月雨

比

川五月雨

中務卿宮

さゝら波みきはまさりて歩人のわたるせ遠き五月雨の比

五月雨晴

前内大臣

雲のみか晴行けさは五月雨の川邊の水もかつすみにけり

五月蟬

新大納言

さみたれの晴まの露に啼せみの聲もおちくる杜の下陰

山路蟬

雲かゝる梢の蟬のれに立てちる露すゝしは山しけ山

林頭蟬

前内大臣

九重のみはしまちかく空せみの羽の林をやとめてなくらん

瀧上蟬

廣橋中納言

落瀧つみたれてかゝる山風の梢にさはく蟬のもる聲

故郷蟬

高倉三位

拂はてや置そふ露の故里は梢の蟬も聲まさるらし

鵜川螢

萬里小路中納言

飛ほたるをのか光りや川浪の鵜舟の篝けつとしもなき

古溪螢

高倉三位

朽やらて草うちける谷水のなかれもあへす飛ほたる哉

池螢

四辻宰相中將

秋のこゑ波に通ひて池水のおしまほのかに行螢哉

湖螢

中院宰相中將

さゝ波にうかふ螢や螢なふれ漕行あとの漁火の影

晩夏螢

よなくくにひかりもうすぐ行螢つゝむ袂に近き秋風

初秋風

吹音もさしてそれとは白雲の夕のそらや秋の初かせ

初秋萩

白露もまたなきあへぬ萩のはに先をとつるゝ秋風の聲

初秋萩

いとはやも花もてはやす萩の戸の明る光は露の白玉

初秋薄

秋も今はつ花すゝき吹風になひく末のゝ露みたるらん

初秋虫

月になる夕の雲の末のより早秋しるき虫やなくらむ

野秋夕

分行も秋は末のゝ夕くれに淋しさそへてきりゝすなく

浦秋夕

前内大臣

うき秋の夕は波の上にたになかめかれてかかへる釣ふれ

山居秋夕

雅教朝臣

堪てすむ身は山陰のものなから哀も深き秋の夕暮

旅秋夕

内大臣

また馴ぬ秋の夕の旅衣ひとへに露や身にはしむらむ

秋夕述懷

三條大納言

うき秋はなき名也けり見る人の心にかはるゆふへなりせは

月迎秋明

藤中納言

曇なき光もわきて萬代の秋をしらす雲の上の月

遊子待月

伯二位

おもはすもそはれいてゝ行人の月みかてらに誰をとふらん

釣夫棹月

三條大納言

釣の糸のおさまる風をすむ月に待出てけりなうたふ舟人

樵客歸月

内大臣

はるかなる里なもいはす歸るさを待えたる月にうたふ山人

曉月厭雲

中務卿宮

思はすよすみまさる夜の月に又遠山かつらかけてみんとは

開搗衣

廣橋中納言

しらてこそ衣うつ□め更る夜の月におきゐて袖ぬらすとは

江邊搗衣

左衛門督

浦風に入江の浪も音そへてたゆむまもなく衣うつなり

搗衣誰家

萬里小路中納言

からころもうちめる聲はそことしも分ぬ千里の霜に覺ゆる

搗衣爲愁

宣治朝臣

いと、猶れ覺かちなる秋の夜に哀をそへて衣搗なり

搗衣幽

前内大臣

かけ高き松より落て萩に吹く風の絶々衣うつ聲

紅葉未遍

中院宰相中將

秋に先そむる心を立田姫また世にしらぬ紅葉成らん

紅葉山錦

藤中納言

七夕の手ににもまさりて山姫や色なる秋の錦をるらん

霧籠紅葉

藤中納言

きのふみし梢はいつら朝霧やしはし立田の山のもみちは

露添紅葉

甘露寺大納言

なきそふとみしはきのふの薄紅葉またき染なす露の山かけ

紅葉秋深

甘露寺大納言

山姫の染しは深きもみちはに及ふ色なき常盤木のかけ

初冬時雨

雅教朝臣

冬きぬといつしか残るときは木のかけも淋しく降時雨かな

田家時雨

新大納言

露のもるを田のかりほにたとつれて又袖ぬらす夕時雨哉

霧中時雨

高倉三位

降出て時雨をすくす宿りさへなれぬる旅の行衛をそ思ふ

寐覺時雨

中院宰相中將

ほともなきれさめの空にいく度か過る時雨の枕とふらん

袖上時雨

甘露寺大納言

はらはしよ露も時雨も紅葉ちるかけになれこし名残なりせば

嶺落葉

左衛門督

嶺高み染し千しほの秋のはなきそふ嵐の行衛とそみる

里落葉

内大臣

散々て行跡もなし山里は朝夕霜の落はなからに

關落葉

萬里小路中納言

明めとて行空そなきあふ坂やおちには埋む關のとさしは

窓落葉

中務卿宮

稀に明て月にそ向ふ窓の前おちはなつくす山風の跡

落葉深

前内大臣

ちりひちのなれる山をも風の跡に積れる落はにそしる

寒夜霜

同

明てみんわかうちとけてふしかぬる夜寒は篠の霜深き宿

竹間霜

伯二位

冬かれの草木にわきて呉竹の青葉の霜の色そ珍らし

笈上霜

中務卿宮

さし下す笈の棹のさはりある夕や床の霜拂ふらん

苦徑霜

甘露寺大納言

たえくの跡さへ見えぬ苔の上の霜のふる道誰にとはなん

鶴拂霜

三條大納言

蘆たつの拂ふ跡よりましらの濱松かれの霜の寒けさ

水路水

飛鳥井大納言

棹さしてそのこともえやはつなき舟渡るつ浪は氷果つ

湊畔水

右衛門督

みなと江の蘆まの氷閉そひて遠く成ゆくなし鴨の聲

蘆洲水

三條大納言

浅き瀬の白洲にたてる蘆つゝの一夜二夜にかつ氷つ

石間水

新大納言

行やうて水さへむせふ岩かれをたよりに閉るあさ氷哉

橋下水

雅教朝臣

風わたる谷のかけはしおと絶て氷れる水よそに知らる

庭初雪

新大納言

問ふ人の跡はいとはし庭の面に今朝珍らしきうす雪の空

雪似花

藤中納言

雲はるゝ夕の山は村々にさなから春のはなのしら雪

旅泊雪

四辻室相中將

波まくらいとはん物が玉くしけ二見の浦の雪の明ほの

雪埋竹

雅教朝臣

ほともなき垣れの竹も梅かも冬こもりせり雪深くして

歳暮雪

雅教朝臣

いつのまに移る月日としら雪の積るに見えて年の暮行

第七 十日

都初秋

新大納言

入たゝぬ秋のへたてや袖にふく風のなとはの山のうす霧

山初秋

左衛門督

秋にしもまた立あへぬ山のはの薄霧匂ふ三日月の影

杜初秋

基孝朝臣

今朝よりや杜の下露敷そひて月に成行秋の初風

岡初秋

藤中納言

けさよりや草はをしなみ白露の岡へに通ふ秋の初風

關初秋

宣治朝臣

旅人の袖にしられてけさよりや關吹こゆる秋の初風

野初秋

甘露寺大納言

草木にはまたわきかれつ秋の風色をみよとやのへの白露

田初秋

四辻室相中將

露もいまむすへは結ふ小山田の庭あまたに秋やしるらん

海初秋

三條大納言

打よする波も頃日濱萩のひゝきに成て浦かせそ吹

川初秋

中務卿宮

行まゝにいすゝ川なみ袖かけて涼しく成ぬ秋立ちしも

湖初秋

甘露寺大納言

鳩の海は色もかはらぬさゝ波の聲より秋や立はしむらん

七夕月

甘露寺大納言

此ゆふへ待つけかほのあふ瀬にや月もいさよふ天の川波

七夕風

甘露寺大納言

さそひつる風に残りて一筋の雲やとはりの星合のそら

七夕露

中務卿宮

ことの葉の數々うけよ手向とて草の露とるほし合の空

七夕霧

飛鳥井大納言

よなおしむ心しるらし彦星の別れもしはし天の川霧

七夕雲

雅教朝臣

別れ路のうき瀨をや思ふ天の川夜深き雲の立かさめとも

七夕橋

同

戀わたる年に一夜は七夕の契あやしきかさゝきの橋

七夕船

左衛門督

行末は雲にやつゝく彦星のけふの逢せの天の川舟

七夕扇

四辻宰相中將

天の川ふたつのほしの影みゆるあふきは秋もおかむ物かは

七夕枕

前内大臣

織女や天の川原の岩枕ならふる秋はかたき秋かな

七夕衣

左衛門督

たちねはね雲の衣も七夕にけふやすらん久かたの空

草花始開

藤原氏直

とくるより心やおかむ移らふも千種の露の花の下組

草花未遍

高倉三位

百草に思ひもかへし秋の花かつ咲ころの色の千しほは

草花盛

飛鳥井大納言

うへそふる心を花の苞には野への千種の色も及はし

移草花

中院宰相中將

なくさむは花の千種なうつし植て秋の錦にしく物そなき

折草花

露ながらおらては過し朝かほのあへす移ふ色は有とも

露滋草花

左衛門督

玉まぐや野邊の千種の花の上に今朝なく露の所せきまで

月照草花

飛鳥井大納言

露しけき花の千種の色々に月も光やわきて染らむ

月前草花

中院宰相中將

豐なる草のたもとは秋の風立てゐて見ん花の千種を

雨中草花

雅教朝臣

名残ある夜のまの雨になく露も花もうつるふ庭の秋萩

霧間草花

廣橋中納言

まぐの千種の花のほのかにも月さへくもる野邊の夕霧

三日月

飛鳥井大納言

夕附日のこれるほとは白雲のたえ間に今ぞ三日月の影

夕月夜

雅教朝臣

さやかなる空もほとなし夕月夜おほつかなくも誰恨むらん

弓張月

前内大臣

みる人の心も清し村雨の空に晴たる弓はりの月

十五夜月

中院宰相中將

ふしのねのけふりかは□るけふなしも秋に數へて月もみつ覽

不知夜月

廣橋中納言

山の端のくるゝ光もうす霧の雲ゐにしるさいさよひの月

立待月

甘露寺大納言

くれしより松のとほそに立待の月にわりなき山のほの雲

居待月

伯二位

秋風を光にやみむ霧晴るゝゐまの月の勾ふ山のは

臥待月

あふくにそわりなき程に思ふ設けふふし待の月のひかりは

廿日月

前内大臣

夏のうちは花に色こき深見草はつかの露は月や待けん

有明月

新大納言

くもりなきひかりなよみに仰きみよ世にあり明の月よみの杜

山居秋夕

藤中納言

とふ人そ今はあらしの山すみな月はわすれぬ秋の夕くれ

田家秋夕

夕露の外面にひろき千町田のなしれ色つく秋や淋しき

古寺秋夕

内大臣

小初瀬や峰のひはらの秋の色霧に深むる入相のこゑ

野亭秋夕

甘露寺大納言

拂ふともしらぬ野守が草かきは袖の外なる秋のゆふ露

水郷秋夕

三條大納言

身の秋もよしや難波の月のくれうきをわするゝ折も社あれ

關屋秋夕

中務卿宮

こよひたに枕やとらん闇こえはしらぬ山路の秋のゆふくれ

橋上秋夕

萬里小路中納言

川風に浮たつ霧やうち橋のたえま多かるゆふへ成らむ

江邊秋夕

飛鳥井大納言

わすれしな月に夕やすみのえに生てふ草の其名也とも

澤間秋夕

飛鳥井大納言

さらぬたに夕は秋の澤水にいかにせよとて

海路秋夕

右衛門督

秋霧も深き波ちの夕なきに海士の釣舟こき歸るみゆ

鹿聲始聞

雅教朝臣

山里はいと淋しき打つけにはや妻こひのさなしかのこゑ

鹿聲幽

山とほく月さしのほり空澄てなしか鳴也夜も明ぬへし

鹿聲近

さなしかの聲もふり行秋かせになれて淋しきを田のかり鹿

鹿聲繁

小田守のえやはまとるむ遠近に妻こふ鹿の聲ぞ隙なき

鹿聲僅涙

わか袖の夕にもあらずよなくの涙はしるやさなしかのこゑ

鹿聲増興

山かけの秋はさそなと思ひやる空をことほるさなしかの聲

鹿聲爲友

なれきつゝ哀をしかも音にたてつ秋のかくれの同し雲ぬに

鹿聲驚夢

いくれさめ夢も殘して長き夜の枕に近きさをしかの聲

鹿聲連夜

よなくに行かへる山は若草の嬌やこもれるさをしかの聲

鹿聲稀

かり殘すいなは一村霜をきて岡への道はさをしかの聲

曉虫

夜寒をやむしも侘らん聲々にれさめの枕ちかく鳴よる

朝虫

うらかれの草れにきけは朝露の日影によるの虫のこゑかな

夕虫

前内大臣

いろく／＼に紐とく花の夕露も聲にみたれてむしの鳴らむ
夜虫 高倉三位

なほさりにきけは社あれ松虫は霜より後の曙のそら
旅虫 廣橋中納言

草まくらわれこそまされ長き夜の恨なゝのか虫の聲々
籬中虫

はなちけんもとの垣れの庭もせに所もさらぬ松虫の聲
枕邊虫 萬里小路中納言

狩衣たゆむ夢路や虫のねもありしに成ぬ草のかり庵
床間虫 内大臣

いさとさも身にしる霜のことほに哀そひてや哉なく
月下虫 四辻宰相中將

わく／＼くもあらぬ野もせの露をたに月にたのめて松虫のなく
露底虫 三條大納言

かくなからかれすもあれな虫のねに朝夕露は霜と成るとも
初鴈一聲 内大臣

よそにきく空は有とも雲の上に鳴や名高き鴈の一つら
初鴈似字 高倉三位

雲間にもつくれる文字の墨かきはいく世の秋の初鴈の聲
初鴈交務 藤原氏直

ひとかたに待ともしらてうす霧の峰よりはるゝ初鴈の聲
初鴈連雲 前内大臣

見よや此けさくるからに鴈かれもつらなみたれぬ雲の上哉
初鴈横月 中院宰相中將

久かたの月をなめしに契てやかはらぬ空に鴈もきつらん

嶺頭鴈 藤中納言

はる／＼とこえてきつゝも初鴈のたかれの雲に迷ふ一つら
湖上鴈 中院宰相中將

にほの海の霧の上ゆく舟ならし聲をほにあげ渡る鴈金
關路鴈 廣橋中納言

秋風にたのむの鴈の玉つさは誰爲ならぬもしの關守
橋邊鴈 三條大納言

峰こえてけさくる鴈の跡なれや初霜白し谷のかけ橋
旅泊鴈 宣治朝臣

舟よするうきれの涙のかち枕夢もむすはぬ初鴈の聲
初紅葉 前内大臣

露しくれ松のあたりや染あへぬ色もめにたつ木々のもみちは
葦紅葉 飛鳥井大納言

山里のまた色薄さもみち葉にしくるゝ雲のおくや尋れん
遠紅葉 中務卿宮

世に知れぬとは山姫のかさしとや先染出す峰のもみちは
砌紅葉 伯二位

かく露の心や春のくれなゐにみはしの櫻秋をしる頃
紅葉曝錦 四辻宰相中將

山姫の錦やさらす夕日影移るもみちの色も更なり
紅葉留人

行つるゝ紅葉のかげは小車のやすらふ程に心見えけり
紅葉帶霜 左衛門督

村しくれいたらぬかたのもみちはな染やつくさむけきの初霜
紅葉移水 萬里小路中納言

かけひたす水の木のはや中絶ぬ錦をわたる秋の川風

紅葉欲散

新大納言

露しもにうつろひ初てもみちはのあすのあらしにまたぬ山哉

紅葉隨風

廣橋中納言

わきて猶名にさそはれて嵐山梢あらはにもみちちるらん

暮秋雨

内大臣

かれくの草木の露も長月の秋の末葉に時雨ゆくらん

暮秋嵐

三條大納言

霜寒きあらしの鐘の聲のうちに尾上の秋やくれんとすらん

暮秋木

伯二位

露時雨おちはなとつれ淋しくも暮行秋を木々にみる哉

暮秋草

新大納言

草木にはなをしたひみん暮て行秋の名残の露の深さを

暮秋鳥

内大臣

ゆく鴈やかすみ末の俣も残れる秋にまたしたふらむ

暮秋獸

甘露寺大納言

小萩さく野へになれつゝ暮て行秋やなしかの音にも立覽

暮秋衣

萬里小路中納言

袖の上の露にたにみむ且戸やる空にしはしの秋の名残は

暮秋鐘

中務卿宮

名残しも心やくたく秋ならん月おちかれの明かたの聲

暮秋興

右衛門督

行秋をしたふ心は隔なくましはりしるきけふのくれ哉

暮秋旅

行秋もたれことの葉に取そへて紅葉も菊も手向にはせん

第八 十日

曉立春

藤中納言

をしなへてまた夜を残す鳥かれに先あら玉の春はきにけり

谷餘寒

萬里小路中納言

山風も猶さえかへれ谷のとに花をあらはん雪けなりせば

檜原霞

廣橋中納言

初瀬山ひはらか末の暮初て霞にこもる入相のこみ

杜霞

甘露寺大納言

それとなき信太のりの朝霞霞も千重に立やそふらん

名所鶯

同

花にたにははれぬ滋賀の故里にかれぬ契や鶯の聲

若菜

中務卿宮

代々かけて鶴すむ春の澤へより若菜は君に摘もそめまし

草漸青

左衛門督

日影さす澤への小草春の色に顯はれそむる雪の村消

里梅

伯二位

名にしおふ梅津の里の梅の花往來の袖にふれて咲らし

門柳

四辻宰相中將

門のまへ植し柳のとしふりて露も老せぬ緑なそみる

初花

前内大臣

さきいてし其世もゆかしはな櫻何の色よりうつし初けん

朝花

前内大臣

露もれし柳は髪もみたれけりあしたのかほの花そ色こき

峰花

藤原氏直

くれやらぬ麓のかれの響にて花より匂ふ峰の春風
嶋花 基孝朝臣

白妙の色をふかめて咲花のそれかあらぬか波の遠嶋
殘花 三條大納言

散あとに雲たにうつめ日に近き一木二木を花に殘して
濱春月 右衛門督

霞み行うら波となく長濱の月にめてつゝ明す夜は哉
湖歸鴈 内大臣

唐崎や波はふもとの鏡山おもかけとめてかへる鴈かれ
松藤 内大臣

なそへなき梢つゝきの松かえにめくれる藤の色をそふらん
苗代 雅教朝臣

せき入るゝ苗代水に賤のをか心のたれもまきやそふらん
折山吹 伯二位

したひみる心の色はいはれとも手折てしるや山吹の花
暮春 飛鳥井大納言

ちり果て花のみをしと思ふまに日數おとろく春の夕かた
遅櫻 萬里小路中納言

夏かけて思ひし花は藤かえに又立ならふ山さくら哉
岸卯花 内大臣

行とくとやすらふ岸の舟道におる手すさみの卯の花もなし
待郭公 前内大臣

此みやは忍び果へき時鳥村さめ晴るゝ月のゆふへに
海郭公 前内大臣

わたつみの渚をかけてひろふてふ玉の聲して啼時鳥

遠郭公 中院宰相中將

雲に猶なきてやしたふ時鳥有明の月もなちかたの聲
瞿麥 甘露寺大納言

花もしれ咲なてしこに山賤の垣ほの昔おもひ出ぬる
岡邊早苗 中務卿宮

殘る日の岡への早苗涼しさはとりも盡さし松かけにして
樹陰照射

ともしさすほかけそしたひつくは山しるきか中也明る短夜
五月雨 前内大臣

ふり初し空の色にて朝をもくれをもわかぬ五月雨の雲
鶺鴒川 三條大納言

やすらはし月いてぬへし行々もはや河の瀬の鵜舟さすらん
簪廬橘 高倉三位

かつさくも近き守りの袖の香ははな橘のまた一重なる
旅夕立 右衛門督

こえわひし山のかひある夕立の袖にすゝしき旅の空哉
野螢 新大納言

夕露のみたるゝ野への草はにもひかりなそへて飛螢哉
納涼 飛鳥井大納言

あつき日をわするゝ水の山陰を人より先に行て涼まむ
六月夜 廣橋中納言

御被する川せの波のよるかけて麻の葉末になひく秋かせ
早秋 四辻宰相中將

吹かせのそれとはなしにきのふけふ衣手涼し秋や立らん
七夕別 三條大納言

年ありて星の別は別ちにあらぬ物から名残をや思ふ

秋風

前内大臣

おりしけと風こそ絶すしほりけれ波の音そふいせの演萩

籬萩

左衛門督

秋口のまかきの内はなを露の風もよきてやなひく萩原

行路薄

中務卿宮

玉ひかる糸かと思えて行袖に露をかけたる花すゝき哉

田上麴

四辻宰相中將

一つらのこゝにむれきて澤邊なるおくてのなしれ鴈あさる哉

外山鹿

雅教朝臣

吹くるや外山の風に鹿の音もれさめ淋しき床の上哉

原露

萬里小路中納言

咲まじる尾はなが袖の玉とみる露はなへての秋の萩原

夜虫

廣橋中納言

今宵しもよはると思ふ虫のれにおき初けりな秋の初霜

渡霧

新大納言

世なうみのみわたり遠く立霧も朝夕かせの神のまに／＼

駒迎

前内大臣

神かきに年ふる駒も迎へてし其望月の秋はわすれし

關月

甘露寺大納言

月ふくる身をはいかにと鈴鹿山越てうれしき關ち成けん

竹間月

藤中納言

吹風のはわけ稀なるくれ竹のよ床さひしき月の影かな

浦月

所から月に假寐をすまの浦のあまの笛やはいふせくもなし

古宅月

中務卿宮

あれ行もよしやと秋の月みてそ思ひまされし露のふる里

浪月

高倉三位

秋のよの光をちらす岩波は月よりおつる瀧のしら玉

搦衣

たかりもまされぬよはの寐覺哉秋の聲とはひゝく礎に

秋時雨

内大臣

夕かけみれにも尾にも行雲のいく時雨せしもみち成らん

江紅葉

三條大納言

散すなよ名にしおふえは吳竹の千ひろに深き秋のもみちは

九月盡

中院宰相中將

行秋のけふのわかれを花薄草の袂に猶まれくらし

初冬

藤中納言

山のはの雪はいつみむ冬きぬと池の汀はうす氷せり

瀧落葉

散りくるや水のこのはも岩そゝく瀧の白糸染かへすらん

庭霜

雅教朝臣

すむ月も雲るの庭はおのつから影白妙に霜そくもらぬ

柴霰

三條大納言

吹かへす葉風の色は雪なから霰おちくる峰の椎柴

峰雪

萬里小路中納言

神風や天の岩戸も明る夜のひとつ光をみれの白雪

杉雪

左衛門督

あふ坂や鳥かれ遅き關の戸も雪に明ゆく杉の村立

松雪

四辻宰相中將

拂ふへき嵐もまたてけさは先なれおきかへる雪の松かえ
枯 蘆 中務卿宮

波にふし霜に枯たつあしのはにおくあらはなるこやの程なき

柚寒月

あはれその名さへ朽木の柚山や霜よの月はみる人もなし

磯千鳥

右衛門督

あら磯のなみのよるくなれきてもまた立かへり千鳥啼なり

冬 曉

高倉三位

はた寒き空あかつきの山櫻打しく脊やかけやそむらん

川 氷

伯二位

ふる雪の水かさおちそふ山川の末は氷のとくるまもなし

鷹 狩

飛鳥井大納言

木のうつる鷹をしるへに狩人の鳥立いつくと行山ち哉

澤水鳥

前内大臣

日くるれば山風さゆる澤水のうきねわひたるをし鴨の聲

歳 暮

廣橋中納言

行年もさのみしたはしくれぬとも今より千世の春に歸らん

不逢戀

藤中納言

ひろひてもかひ社なれうつせ貝ありて恨の積る計は

切 戀

前内大臣

つゐにさてしらせてたゝにやみやせん思ひし事は言葉残して

遠 戀

右衛門督

はるけさもたか心なる行衛そと思ふにいと恨そひぬる

近 戀

三條大納言

隔てある思ひやそはんしゐて猶我れぬる夜のかへにみえなは

閑居戀

中務卿宮

とはぬをも堪てふる身や蓬生の露のちきりのかゝる所に

忍 戀

飛鳥井大納言

契のみ積る思ひの忍ふ草かれしとすゑを頼くるしき

片 戀

甘露寺大納言

人よいかに見えぬ心のほと計したふつらさのくらへくるしき

別 戀

四辻宰相中將

扱もうきわかれないかゝ年月のあはぬ思ひはかゝらざりしな

貢 戀

中院宰相中將

つれなさのかきりよ人にざりともと思ふ心の末はよりゆく

遇夢戀

中院宰相中將

思ひつゝぬる夜の夢のうき橋やとたえし中に又わたすらん

後朝戀

伯二位

手枕の袖のうつり香のこるとも猶したはるゝきぬの空

聞 戀

高倉三位

へたてうき人にきけとの聲やたゝことなしくさを心成らん

久 戀

中院宰相中將

たのめつゝ待とせしまにことのほの花も紅葉も移り行空

自地戀

内大臣

ことのほもとりあへぬよに一目みし行衛あやなき袖の上哉

恨 戀

宣治朝臣

つれなくてつもる月日を思ふにも心つからの身をや恨みん

祈 戀

飛鳥井大納言

いのりてもうけぬ契にいく度かつれなき人に神をかこちし

絶 戀

前内大臣

いひてみついはて恨みつ共程の月かは空に知らすつもりき
契戀 宣治朝臣

偽のある世成りとも神に今かけし契の末やいのらむ
偽戀 左衛門督

待てふなにかいつはりのことのはと思ひ果んも又さすか也
變戀 雅教朝臣

思ひきや結びし中の露のまに花田の帯の色かへんとは
寄衣雜 中務卿宮

昔青きいはほをみるも天乙女かけしはいつの衣なるらん
寄枕雜 左衛門督

假れする春の手枕みる夢も花におとろくあらし吹なり
寄花雜 飛鳥井大納言

靜なる柴の戸明て春ならは花とや峰にかゝる白雲
寄市雜 廣橋中納言

治れる道にたゝしき始とや分ても更にたつの市人
寄舟雜

末つゐに思よるへきさためおきて浪にさはらぬ遠つ舟人
寄橋雜 甘露寺大納言

うつゝとて何たのむらんみる事もうつれはおなし夢のうき橋
寄木雜 内大臣

今はとて宮造りせて山道にけつらしてたてむ木々もふりけり
寄苔雜

君か代は千世そと見えて動なきいはほの苔も縁そふらん
寄水雜 三條大納言

たえせしと契りし君か御裳濯やなかれての世の水のみな上

第九 十日

立春 廣橋中納言

朝かすみ日の本よりや立初てこま唐も春をしるらん
朝霞 左衛門督

鈴鹿川八十瀬の波も立つゝく末はひとつの朝霞かな
谷鶯 高倉三位

世はなへて春のそらとや谷の戸の明ほのしるくうつる鶯
殘雪

太山木の花とやみましなへて世の春のかたへに残る白雲
若菜 内大臣

もろ人の摘ともあかし雪消て廣き山田の里のわかなは
里梅 中院宰相中將

匂へ猶先咲うめの心よりいく里かけて風ものときき
簪梅 飛鳥井大納言

たき物に匂ひあはせて釣簾の内に春風ふかき軒の梅かえ
春月 四辻宰相中將

雲の上に立る櫻の花の香はへたてぬものを月そ霞める
春曙 甘露寺大納言

遠近の野山にかはる春霞又珍らしき明ほのゝそら
歸雁 三條大納言

みすてゝん波の春かは常盤なる松もこそあれ歸る雁かれ
春雨 藤中納言

靜にもふりくらしつゝ、春の雨の軒の玉水なかし日のかけ
岸柳 萬里小路中納言

春の色に明るみとりの糸ゆふもみたれてかゝる岸の青柳

待花 前内大臣

春寒き山に心を置初てことしも花や猶またるらん

初花 中院宰相中將

くもりなき春のひかりを雲の上に先咲花の色にみる哉

見花 萬里小路中納言

いくかへり花も櫻の宮はしら春にみしめの内外へたてし

花盛 中務卿宮

かくなからいく春か見む風吹ぬ櫻の宮の花をためしに

落花 内大臣

くはゝれる春かけてみむるもの□時を忘れぬ花には有とも

欸冬 廣橋中納言

心なき垣れともなし山吹の花もてかこふ玉川の里

池藤 四辻宰相中將

のとかなる春の心によせきてや水も動かぬ池の藤浪

暮春

くれにけりきゝしも見しも蝶鳥のうつるしらへの春の名残は

更衣 内大臣

ぬきかへて思ふ心の花染ものころ匂ひやうすき衣手

卯花 中務卿宮

卯の花に垣れの草は埋れて去年の雪みるをのゝ山陰

待郭公 甘露寺大納言

ほとゝきす積る夜かれをしひて猶人やりならず待もわりなし

聞郭公

ほとゝきすきたかに鳴て時しもあれ一夜を千夜の明ほのゝ空

郭公稀 飛鳥井大納言

かへり行聲のかきりは白雲のへたてゝうとき時鳥かな

故郷橋

吹つたへ風の□のみきりにははなたちはなの先かほるらむ

早苗 雅教朝臣

植わたす小田の早苗の末かけて水もみとりに澄る涼しさ

五月雨 左衛門督

さみたれの晴行雲に風過てあふちの木陰露かほる也

鵜川 中務卿宮

鵜かひ舟岩波高くさしのほるほとや篝の影みたれつゝ

蕨 前内大臣

露深く下はくちぬる蕨をかれなて近く飛蜚戦

夏草

とこなつの色かも見はや百草のしけみを分るはなの紅

夏月

さす舟の川風すゝし柳陰月に成行かたやとばまし

夕立 廣橋中納言

みるか内に早く移りてあま雲はよその峰こす夕立の空

杜鵑

かつそむる杜の下葉や鳴せみの羽におく露の秋をみすらん

夏稜

松に吹風も涼しく大淀のけふの御被を神やうけゝん

早秋

なとは山音こそかはれ都にはまたいりたゝぬ秋の初風

七夕

萬里小路中納言

年のはにしたふ心やつもりては淵と成へき天の川瀬か

萩風

中務卿宮

風わたる萩を枕のかたしきにねぬまを秋の夢や恨みん

萩露

三條大納言

おきながら露をこそ見め眞萩原うつろふ花の枝はなる共

女郎花

しるといへば枕はゆかしをみなへし誰爲ならぬ露にこそあれ

夕虫

左衛門督

待出る月影遅き夕くれをなくさめかほの虫のこゑく

夜鹿

妻こふる鹿の思に秋そ猶まさきのつなのよるや侘しき

初雁

新大納言

明わたる鳥羽田のいなは露みえて秋風寒み雁やきぬらん

秋夕

四辻宰相中将

うきことは山里もおなし秋の色を誰にかこたん夕くれの空

山月

月遅き心いらればちりひちのいつのふもとの山のはの雲

野月

うつろはん花咲野への草の上の露によかれす宿る月影

川月

中院宰相中将

未遠きいすゝの川の世々かけてすまん限りは大そらの月

江月

伯二位

沖つふれよりくる波の濁り江をすまして月の影そさやけき

浦月

右衛門督

たすさふもしほの烟空に消て月ははるく澄のほる影

雛菊

移ろひし笹の菊も霜の色に染て盛にかへる花哉

搗衣

前内大臣

袖にのみおくと思ひし秋の霜うつや衣の聲も寒けき

曉霧

萬里小路中納言

鐘の音もあけのそほ舟明る夜の沖つ小嶋や霧の一面

岡紅葉

宣治朝臣

夕日さす岡への松の下紅葉しくれにそめぬ色やみすらん

庭紅葉

内大臣

誰ありてすむらん秋の紅葉はのいはかきこむる影もみえつゝ

九月盡

飛鳥井大納言

月にめて紅葉になれし秋もけふわすれぬ物と暮て行らん

初冬

新大納言

ゆく雲の嵐もけさは吹かへて空にもしるゝ冬やきぬらん

時雨

内大臣

谷せはみ吹のほる風の山陰に落る瀧浪しくれてそ行

落葉

前内大臣

山風の空は時雨の晴てたにおちはくもれる木かくれの道

朝霜

行かよふ人より先におき出る鳥の跡のみふかき霜かな

寒草

廣橋中納言

常盤木の梢の色にとられてやいとゝ寒けき霜の下草

千鳥

鳥井大納言

立さはく哀よさむの友千鳥磯うつ波に聲をかはして

水鳥

けをふる翅の霜に夏かりのあしまを思ふなし鴨の聲
氷始結 甘露寺大納言

よなくの嵐も同しさゝれ水いかて氷のけさむすふらん
冬月 藤原氏直

降雪に思ひたゝしを更る夜の嵐に向ふ山のほの月
鷹狩 三條大納言

雪の上の行幸のみかは御狩野や□□□道も残らむ
野霰 内大臣

ゝあらし麓の野へに行はとやとなきは山の霰成らん
浅雪 伯二位

はけしくも猶吹そはん夕嵐またてつもるや浅きしら雪
積雪 中務卿宮

かきくらし積れるうちは松竹のけちめわかれぬ雪の庭哉
閑中雪 右衛門督

鳥の聲松のあらしもたとたえてつもれる雪にくらす閑けさ
歳暮 中院宰相中將

日數のみ重なる水のこほりには行としなみのよとむともなし
寄月戀 内大臣

たくへてもやかて待みは眞木の戸のよなく毎に物は思はし
寄雲戀 前内大臣

わすれしのたのみもうはの空の雲手をかへす間も知らぬ心は
寄露戀 藤中納言

かひなしやおきあわすれし忍草露の身にしも消ぬおもひは
寄雨戀

ほしやられてよしやみせはや契たにあらは逢よの袖の村雨

寄風戀 高倉三位

わすれきや打吹からに松風の音はなへての夕くれのやと
寄山戀 飛鳥井大納言

情あらは舍りもとらむ夕くれのまきは山と人にいひつゝ
寄閑戀 甘露寺大納言

いかにせんつらき人めの關ちのみ打ぬるひまのなとなかる覺
寄海戀 新大納言

しられめやみるめ計の契より猶あま人も袖しほるとは
寄原戀 四辻宰相中將

しられしよ拂はぬ露の小笹原わけし計の袖のうへとも
寄橋戀 左衛門督

懸そむる夜の契のためしにもたのめやおかん天のうき橋
寄木戀 中務卿宮

見しは其たくひもなしや山梨の雨にしなるゝはなは花かは
寄草戀 中院宰相中將

心なき草はも秋の夕くれはわきて置そふ露としらすや
寄鳥戀 三條大納言

思ふことよく物いはゝ心なき鳥にも告む恨成しな
寄虫戀 左衛門督

ななき夜もれぬに明ぬるわか床に思へばおなし松虫の聲
寄獸戀 雅教朝臣

いつかさて逢みてわれもいさみある心をみせん野への春駒
寄玉戀 前内大臣

衣々の明るあかりの一ときは玉にもかへぬ思ひとをしれ
寄鏡戀 廣橋中納言

わか中にかけし契は山鳥のはつなのか、み影もくもらし

寄枕戀

雅教朝臣

ひとりねの床にはちりの積る共人にはいつかつけのを枕

寄衣戀

前内大臣

我身のみおもひしなるゝしほ衣き馴ぬ道を恨み果てき

寄糸戀

飛鳥井大納言

ひとよさてよそに心を引糸のなかよりふしと成ちきり哉

浦松

内大臣

風のなとも松にきこえて絶またつ涙の隙なき浦の静けさ

窓竹

甘露寺大納言

灯はきえて夜ふかき吳竹の雪をひかりのまとのうち哉

山家風

三條大納言

静けさを山ともいはしあさ市の聲もさながら立あらし哉

田家

右衛門督

通ひちの近き門田のいなはにもかりほの庵にむすふとはなき

故郷

飛鳥井大納言

花にとひ月に行しも名を残す昔戀しき滋賀の故里

海路

かきりなきあなうな原の波の上雲もひとつの蜃の釣舟

羈旅

基孝朝臣

かり枕たひの衣の目にそへて分行野への袖の露けさ

述懷

中務卿宮

君か代の光をそ思ふ伊勢の海の玉にまされるちゝのことは

神祇

前内大臣

いのる世は色々ことに頼みなきにきてにみせて神そうくらし

祝言

雲のより雲井になるゝ老の鶴はおなし千年の聲きこゆ也

第十 十日

立春

三條大納言

山松のみとりにかへる春風や下つ岩れも氷とくらし

山霞

中院宰相中將

春に今おほうち山の朝霞動きなき世に立かへるらん

海霞

廣橋中納言

あらましき波風もなしせのうみやのとかに霞む春の曙

子日

若菜

新大納言

子日して友とはけふを二葉よりひかてそ松の千世はかそへん

朝鶯

甘露寺大納言

なきまとふ朝霜まよふ鶯の聲の色のみ春にきけとや

津梅

梅かゝのいつくはあれと難波つや名におふ花の春の一入

夜梅

飛鳥井大納言

さそひこし風いつくそと夢さむる夜はの枕にたとる梅かゝ

岸柳

中務卿宮

よる船に柳も釣のいとほへて浪にえなつく春のきし蔭

春雨

宣治朝臣

あかすのみ詠るからに長き日も猶くれやらぬ春雨のそら

春月

内大臣

春ふかく霞みなはてそ故里におもふ人とも 向ふ月かけ

郭公 中務卿宮

雲かすみあかぬ色哉山のはは紫たちてあけほの、そら

砌橘 たちはなのかけふむ道にちる花の色香は深き緑ともなき

海山もひとつ霞の中にしもしるへもありやかへるかりかね

早苗 ちちの門田の早苗青やかにとる手あまたの袖の涼しさ

栽花 前内大臣

沼菖蒲 あやめ草れさしかよは、沼水の雫もかほれ 萬里小路中納言

移し植つものあるしの情なはわすれてことし花はさかなん

梅雨 今よりははる、と見えて山風の雲吹かへす五月雨のそら

物の音もほころひ出て花にけふ匂ひくは、るこそすの春風

夕立 さそひこし山路の雲の行衛なもまたて足とき夕立の空

惜花 左衛門督

夏草 夏深み松見しまゝの縁なるひとつ草はやしけりやはせん

思ふそよ春のかきりはうつろはぬ色香を花に見るよしも哉

夏月 夏の夜にみるかうちにも月影やまた山のはにうつり行らん

萌いて、早青み行若草をなのか物とや駒いはふらん

壘麥 なきそへて猶こそ露のちるならは拂ひやせまし床夏の花

咲はなにくまゝ見えて山吹のやへの波ちをちの面かな

氷室 岩たゝみせき入し水の氷室山冬をもらさぬ松風そ吹

紫藤 伯二位

納涼 涼しさは山下水のさしくみに結びもあへぬいはまくらかな

水のおもにうつれるかけも紫の色にそ深き池の藤浪

夏衣 更衣 中院宰相中將

明ほのや月は霞みておほろけの春の日数もうつり行らん

卯花 夏衣大みや人の袖よりや先立かへて世にへたてなき

月雪のひかりに夏の涼しさの色にはあらて咲るうのはな

早秋 いさきよき心はひとつ川風も七瀬にかはるみそすらしも

萩か吹風はなとせてさそひちる桐の一葉に秋をみせけり

七夕

内大臣

又ことし昔の秋に迎へみんその夜もとなき星合の空

稻妻

三條大納言

朝かほの花のひかりもあらそふや露はつれなきいなつまの影

籬萩

飛鳥井大納言

淋しさの夕もしらすうへて見る笹は萩の風のなとつれ

隣槿

廣橋中納言

よそまでもいかにみよとか中垣にあまりてかゝる槿の花

葛風

前内大臣

なかき夜を秋くり返し今朝たにも風吹たえぬ葛のはかつら

野萩

中務卿宮

咲まじる花はありとも秋のゝ露はよはきの枝なからみん

路薄

道のへや穂に出る頃は行袖もまじるな花の露の秋風

曉露

誰かうへもはらひ盡して明方の秋のおもひの露は残らし

夕鹿

四辻宰相中將

里となきふもとの野への夕霧に妻こふ鹿の立やなれけん

初鴈

雅教朝臣

したはれし春の名残も今宵又思ひそいつる初鴈の聲

叢虫

基孝朝臣

露ふかき秋の末のゝ草むらにそことしもなき虫のこゑかな

崎霧

甘露寺大納言

行舟のほのかになりぬ霧わたるかれの御崎の秋の浦なみ

嶺月 高倉三位

すみのほる秋の空とは先しるき高れの月のそらにはのめく

湖月 前内大臣

月はたゞそののみるめも渚より鳴てる浪に月よせてみん

關月 新大納言

あふ坂の山路をこえて今宵猶更行月に關守もかな

濱菊 伯二位

波かせに匂ひも深し吹上の濱へに咲る秋のしらきく

擣衣 中院宰相中將

風の音も猶身にしむや麻衣打もれぬ夜の秋深き頃

黄葉 前内大臣

うすもみち時雨に染てあかれさす日影をよその色や分らん

暮秋

歌調

初冬 前内大臣

いつよりか身にはならさん昨日けふけしき計に開くうつみ火

時雨 飛鳥井大納言

散のころ山の木のはの風の花に染つくとや又しくるらん

落葉

しけりつる梢はいつく木枯におちはみたれてをける朝霜

枯野 廣橋中納言

秋せかの恨みし色か霜に今野へのまぐすはそれとしもなき

寒蘆 飛鳥井大納言

あしま行舟もあらはに湊えの霜の枯はの風の寒けさ

井氷 中務卿宮

冬のきて夜をも重ねぬつゝゐつのいつより氷むすひそめけん

千鳥

中院宰相中將

なく聲にしるくも君か八千世とはさして指出の磯千鳥かな

殘鴈

伯一位

春に猶かへらすも哉冬深き刈田の面にわたるかりかれ

網代

雅教朝臣

宇治川や波風あらく更る夜は猶よるひなの網代守らん

寒月

うは玉の夜わたる月は空の海や氷をしきて影そ流るゝ

庭雪

萬里小路中納言

村すゝめおきてゝみれば吳竹もとよる庭の雪の静けさ

炭竈

右衛門督

ふり晴るゝ雪にまちかく炭かまの煙も見えて明わたる空

埋火

甘露寺大納言

ほのみつゝかきおこさても霜冴る夜半社たのむ埋火のもと

佛名

左衛門督

唱へぬる三世の佛の名をきくにいかなる罪か有て残らん

歳暮

三條大納言

やすけくも暮てよ星のあふことの三といふなる今年と思へは

初戀

雅教朝臣

うちつけに戀の路芝ふみまよひ猶ゆく末や身にたとらまし

忍戀

新大納言

音にたに立すはいかて涌かへる心の瀧も人にしられん

聞戀

雅教朝臣

なとにのみ聞し計の恨をはいつかは人にいひもよらまし

見戀

尋戀

いかさまの限しらせよま近くもさすかに見るはつらき物から

祈戀

たつれこし名もあらはさて難波なるよしあしにのみ物思ふ覺

契戀

飛鳥井大納言

祈りこし誓はいつかきふれ河しらぬあふ瀬を神に任せて

待戀

かけおきし誓は神もかはらしの契を人に猶たのむかな

會戀

前内大臣

身におはぬ道をしらせよ今はとて待もよはらん宿の夕暮

別戀

右衛門督

いかてかは新枕の黒髪のあかね思ひのむすほゝるらむ

顯戀

三條大納言

契りおく人の心は白露の曉ふかくわかれゆくそら

稀戀

四辻宰相中將

しらすしてしたにも過る浮名さへ思ひしものを色に出ける

絶戀

内大臣

祈るてふしるしもあれなあふ事の稀なる中にかゝるゆふして

怨戀

藤中納言

いひ出てかすかく計水莖の人つてさへやうとみいつらん

舊戀

雅教朝臣

とにかくにつれなき人よ葛のはの恨むる程をしるよしも哉

山家

新大納言

ふるさるゝうき身軒はの忍草しのふにあまる露のみたれば

今はとて深き山路にすむ人も賢き御代にいて、つかへよ

田里 右衛門督

天地のふかき恵もしられけりたのもつゝきの民の家々

隣家 萬里小路中納言

へたてなき心はしるや中垣に花も紅葉も枝をかはして

閑居 雅教朝臣

折々はたゝ松かせのなとならてわかかくれ家そとふ人もなき

離別 甘露寺大納言

わすれしの其かれことも立別れ程へん旅のなくさめにせん

羈旅 左衛門督

旅にしもゆかすはかゝる海山の詠めはあらし明ほのゝ空

海路 廣橋中納言

御調物今はこふらし四の海波おさまれる君か御代とて

野宿 内大臣

とす火の影あらはなる一庵や野へのくまなる道のはるけさ

故郷 中務卿宮

吳竹のよゝにかはらぬ陰に社里はふしみの名にもものこらめ

眺望 萬里小路中納言

打出る波も千ひろの瀟風に曇なき世の日の御影哉

述懷

神代よりたのみこし身のうけつきて數は百枝の松もむつまし

懷舊 藤原氏直

かしこしな時いたりつゝ君か代の古にかへる道を思ふも

釋教 前内大臣

たのもしな世を祈れとてさためつゝ國に分てる寺の數々

瑞籬 三條大納言

川上やあまくたりにし道しより千々の社もあとをたれけん

祝言

雲の上のひかりもさらす天照す神の誓の千世もかはらし

右十百首丙寅之歲於ニ浪花ニ得レ之。頗雖レ有ニ不審ニ依レ無ニ
類本ニ不能ニ按合ニ矣

群書類從卷第百六十五

和歌部二十

白河殿七百首

文永二年當座七百首
於禪林寺殿被行ノ之

作者

御製後醍醐院

民部卿入道爲家

新大納言顯朝

侍從中納言爲氏

從三位行家

富小路三位中將公雄

忠繼朝臣

經任

禪信侍從入道

重名朝臣

賢阿伊賀入道

題者

民部卿入道

侍從三位

眞觀

文永二年七月七日於白河殿當座御會也

五十八首

前左大臣實繼

廿六首

七十九首

五條前大納言實季四十二首

四十五首

皇后宮大夫師繼

廿八首

百十四首

源宰相資平

廿七首

三十七首

右兵衛督爲教

廿五首

十五首

雅言朝臣

廿七首

廿三首

具氏朝臣

廿八首

廿首

眞觀右大辨光俊

四十五首

十五首

範忠朝臣

十四首

七首

資有

八首

十五首

春百三十首

年中立春

初れとはおもはさらなん一年にふたゝひきたる春のうくひす

都初春

同

もろ人の袖なつられてたちまふに春來りともみゆる宿かな

初春風

眞觀

かこ山の松風はやく春立て波にそかへる池のこほりは

子日祝言

重名朝臣

子日する松は千年ときゝしかと猶末遠き君か御代かな

子日松

御製

子日とてけふひきぞむる小松原こたかきまてをみるよしも哉

山霞

民部卿入道

山のはのみえぬを老にかこちても霞にけりな春のあけほの

野霞

重名朝臣

旅衣袖にさきたつ春風に猶末かすむむさしの、原

關霞

侍從中納言

春のきる霞の袖の色そへて衣の關のなにやたつらむ

里霞

同

霞むより春ぞしらるゝ、吳竹の伏見の里の明ほのゝそら

橋 霞

融 覺

鳩の海や霞てくるゝ春の日にわたるも遠し瀬田の長はし

瀧 霞

前 左 府

水上は雲のいつこもみえわがすかすみておつる布引の瀧

波 霞

侍從中納言

舟人の淀のわたりは明やらて春の夜ふかくたつ霞かな

湖 霞

御製
範忠朝臣

志賀の浦やおなし緑の松かえもいくとせ春のかすみきねらん

海 霞

御製
爲氏

久かたのあまの鹽くむ袖なれやかすみにかゝるおきつしら波

濱 霞

侍從中納言

沖津波高師のはまの松かれのあらはれかたくなつかすみかな

舊巢鷺

新大納言

あら玉の年かへりぬと鷺のふるすのはつれいまやなくらん

雪中鷺

忠繼朝臣

春きてもまた雪ふかき山里にをのれ時しる鷺の聲

竹 鷺

源 宰 相

きくからに聲なひくまで鷺のぬくらの竹に春かせそふく

寝覺鷺

侍從三位行家

春の夜の明行まとのくれ竹に夢もみしかき鷺の聲

夕 鷺

新大納言

大かたにかすむとみえて鷺のなくれのうちに日はくれにけり

春 氷

經 任

春風もまた吹とかすいかはかりむすひかされし氷なるらん

野若菜

前 左 府

消そむる雪まもあらはとふひ野にはやした萌の若な摘てん

原若菜

雅言朝臣

白妙の袖ふりはへて片岡のあしたの原に若なつむなり

澤若菜

御 製

うらやまし年はつめとも澤に生る草をは人の若なとそいふ

水邊若菜

皇后宮大夫

つらゝなし野澤の清水下とけて若なつむへく春めきにけり

殘 雪

重名朝臣

春日野の草はみとりにそめながら木陰さえたる雪のむらきえ

餘寒風

皇后宮大夫

春きても霞のま袖猶うすみさむさかはらぬやまおろしかな

二月餘寒

具氏朝臣

今ははや霞の衣たちぬれとなきさらきの袖そさむけき

依風知梅

三位中將公雄卿

咲にけり難波のみのつ梅花里のしるへの春かせそふく

里 梅

具氏朝臣

さきぬとはいはての里のいはれ共よそまてしるく匂ふ梅かえ

簷 梅

忠繼朝臣

うつしうふる宿こそ年はふりぬれと春しりそむる軒の梅かえ

古宅梅

新大納言

風吹は雪とふるやの梅の花おりによるととふ人もなし

梅薰枕

眞 觀

いかにせんれやもる梅の花のかにれんかたしらぬ夜半の手枕

暗夜梅

資 有

梅のはな夢にはまさる匂ひともやみのうつゝに尋れてそしる

梅移水

新大納言

咲日より花のかゝみとみゆる哉梅の下ゆく庭のやりみつ

梅香留袖

侍従三位

しのひにも折やしつらん梅かゝをありとなふきそ袖の春風

梅浮調水

御製

谷川の水上に梅のはなありとやこゝになかれきぬらむ

梅落衣

侍従三位

おれはかつ袖にそもろき梅の花老かくるやとかさすかひなく

柳露

源宰相

ぬきとむる玉かとそみる朝露にまた風たゝぬ青柳のいと

門柳

侍従中納言

青柳の春の梢のたか門に奥ゆかしくもよそにみすらん

行路柳

同

春風のたよりしられて道のへにまつなひきける青柳の糸

柳靡風

雅言朝臣

春毎に風や心にまかすらんなひくもしるき青柳のいと

河柳

具氏朝臣

立田川うきて波よる青柳のわたらはいとゝみたれこそせめ

橋邊柳

侍従中納言

古河のよとのつきはしそれならて春まぢわたるやなきかけ哉

田邊柳

同

遙なる田中の道の古柳春のみとりはよそにみえつゝ

春夕月

前大納言

なかし日のななくれやらぬ雲まよりまた影うすき月をみる哉

春夜月

眞觀

春のよはたかくれなまつ名残なごりとてくもるさへとも月のみる覽

春曉月

前左府

なかめても我身にあまる光哉花の木かけのありあけの月

故里春月

融覺

思ひいつる春や昔の月そとまたれにとはまし志賀の故里

浦春月

御製

ところから光りかはらぬ春の月あかしのうらはかすますも哉

歸鴈連雲

前左府

なこりこそ一かたならぬ鴈金の雲のよそなる春のゆふくれ

歸鴈幽

同

歸鴈霞のよそに鳴すてゝほとは雲井に遠さかかな

歸鴈似字

雅言朝臣

うす墨によみもとかれぬ玉章は霞の遠にかへるかりかね

峯歸鴈

前大納言

夕霞たちへたてたる高れより聲にしらるゝ春のかりかね

海歸鴈

賢阿

難波かたしほちはるかに聲たてゝ今は春へとかへる鴈金

待花

侍従中納言

かすむ日も花はつれなく咲やうて心つくしのきさらきのそら

草花

同

まちわふる心を花のしるへにて雲もいゝへの山ちこゆらん

栽花

融覺

心をはとめしと思ふ老か世にことしも春の花なうへつゝ

初花

禪信

けふよりそよしの、櫻咲そめておられぬ雲をよそにみる哉

見花

右兵衛督

春毎にあかすなれても山さくら花にやけふもなかくくらさん

翫花

侍従三位

花もまたあはれなかせ春の日のなかくもあかぬ心みえなは

交花

新大納言

芳野山このもかもの花さかりいつれとわきていか、眺めん

花忘老

前左府

老らくの道もさこそはまかふらめ身をわすれてもみつる花哉

折花

新大納言

飛鳥風あすもこそふけ櫻花おりてかへらんみぬ人のため

頭挿花

融覺

けふもまた大宮人の櫻花のとけき春のかさしにそさす

曉花

御製

是もまた有明のかけとみゆる哉よしの、里のはなのしら雪

朝花

融覺

朝な／＼櫻さきそふよし野山雲より外はめにめかゝらす

夕花

前大納言

山里の軒端の花の夕はへに大宮人はかへらさるなん

夜花

前左府

みてもなを夢かうつゝかむは玉のよる共花のかけはわかれす

花交松

融覺

高砂の松にかゝらぬ白雲はおなし屋上のさくらなりけり

竹間花

皇后宮大夫

木にもあらず草にもあらぬあたりまで千年を契る花さくら哉

花似雲

侍従中納言

さかぬよりよしの、櫻おも影にまつかゝりけるみれのしら雲

眞觀

木の本に送る日數のつもりなは故里人や花をうらみん

花下忘歸

御製

みる人の家ちわするゝ花さかりなとしもかへる春のかり金

依花待人

前大納言

都人いつかとはんと故郷の花のあるしにまかせてそふる

花未飽

雅言朝臣

なからへはなを行末の春もまたあかてそ花のかけにくらさん

絲櫻

皇后宮大夫

白河やちかきみ寺の糸櫻としのななく君そかさゝむ

八重櫻

侍従中納言

春の日の光もそひて九重にさかりひさしき八重さくら哉

禁中櫻

右兵衛督

吹風ものとけき春の九重にかさねてにほふはなさくらかな

社頭花

皇后宮大夫

神たにもあはれなのこせ三笠山花のよそなる我身なりとも

古寺花

前大納言

はつせ山屋上の櫻さきしよりけかれぬ花とたむけつるかな

山家花

雅言朝臣

人とはぬ山のかきほに咲そめて花のうきなになりぬへき哉

閑居花

侍従中納言

ひとりみる花を主とかこちても身のつらきにはとふ人もなし

志賀花園

同

すきにける昔の春のなこりまでさきてかはらぬ志賀の花その

山花

同

嶺花

經 任

高砂の尾上の雲の色そひて花にかさなるやまさくらかな

山櫻

新大納言

さきにけらしな春風のこすえに匂ふみれのしら雲

溪花

融 覺

くれかゝる谷陰しるくさく花をゆふへにかへる雲かとそみる

岡花

御 製

旅人のゆきゝの岡はなのみして花にとゝまる春の木のもと

野花

具氏朝臣

雪とのみふるからを野の櫻花な木の本はわすれさりけり

里花

新大納言

立かへりなをみてゆかん櫻花衣の里ににほふさかりは

杜花

融 覺

つれならぬ世のためしとや櫻ちる森を夢てふなにはたてけん

林花

具氏朝臣

咲にけり雲のたちまふ伊駒山花のはやしの春のあけほの

關花

前左府

さらてたに心をとむる白河の關路すきうき花さかりかな

池邊花

皇太后

吹風もおさまれる代にすむ池の花のかゝみはいつもくもらし

雲間花

御 製

まかふ共なにごそたてれ峯の雲うつろひやすき花のあたりに

霞中花

經 任

立かくす花をはしらす大かたのかすみそ匂ふ春のあけほの

春のりかすめる影のうつろひて花も臙のにはひなりけり

雨後花

侍從中納言

春雨にこぬれかくれて足引の山のこかけの花にほふらし

水上花

融 覺

春ふかくうつる日影も山水の花のかゝみのくもるにそしる

庭花

侍從中納言

君か代は庭の春風のとかにてちらぬさかりの花そひさしき

瀧花

融 覺

石はしる瀧つみなはの櫻花おちてもあはれかすまさりけり

落花如雪

皇后宮大夫

おしめともあひもおもはぬ櫻花心つからそ雪とふりける

苔上落花

融 覺

こけのむす庭の通路さらてたにあとなきうへの花の白雪

惜花

具氏朝臣

幾かへりことはりしらす惜むらんちるはならひの花の名殘を

殘花

融 覺

人しれぬみ山櫻はほかのちるのちとてたれか尋れてもみん

朝春雨

侍從中納言

はれやうて雲もわかれす朝霞たなひく山の春雨のそら

庵春雨

具氏朝臣

人とはぬみ山の庵のなかし日にさひしさをひて春雨そふる

旅春雨

三位中將

かへりみる都のかたはかきくれて朝たつ旅の春雨のそら

春曙

具氏朝臣

山田苗代

資 有

我のみと心ひきつる山里にまたなはしろの水もありけり

河邊苗代

賢 阿

山城のゐての川水せきかけて田面をみればしめはへてけり

路苗代

重名朝臣

み山路やたかなはしるとしられともゆきゝの人の水やひく寛

野 堇

眞 觀

淺茅生の小野のしめゆふ人もありとつまてはいかゝ堇さく也

庭 堇

雅言朝臣

數ならぬまかきにさけるつは堇をのれ時しる春の色かな

松下躑躅

御 製

さきましろ山のつゝしの春の色はいはれの松にかけてみる哉

鳴歎冬

眞 觀

さきにほふ小嶋が崎の山吹や八十氏人のかさしなるらん

河歎冬

融 覺

行春をいかてしるらんくちなしのいはぬ色の井手の川波

夕歎冬

御 製

くれねとも遠かた人にことゝはんいはぬ色なる花はなにそも

里歎冬

右兵衛督

里のなはいはてもしるしくちなしの色に出たるやまふきの花

籬歎冬

融 覺

行春もよるはこえしととまるらんくるゝまかきのやま吹の花

松 藤

侍從中納言

君がため松の千年をためしにてかゝるもひさし春の藤波

池 藤

前左府

さきかゝる松のみとりに色そひて底さへにほふ池のふちなみ

夕 籬

新大納言

たつれつゝいく田の森の藤花あかぬなかに日はくれにけり

岸 藤

源 宰相

手折とて袖こそぬるれ瀧つせのかた岸かけてさける藤波

浦 藤

御 製

心ある蛸や植けん春毎に藤咲かゝる松かうらしま

兼惜春

前左府

風ふけは残りすなくちる花にかれて物うき春のくれかな

春欲暮

御 製

たえてみる我をつれなく思ふらん春くれかたのあり明の月

惜春不留

融 覺

山川の花のしからみかけてたによとまぬ春はとまるせもなし

三月盡夕

前左府

悲しさは秋のゆふへと思ひこしなこりもたとる春のわかれち

三月盡夜

侍從中納言

慰むるかたこそなれくれはつるこよひ一夜の春のなこりは

夏七十首

首夏朝

右兵衛督

ひとへなるうすき袂のから衣けさたちかへて夏はきにけり

杜首夏

賢 阿

みな人の花の袂をかへしよりみにみゆる衣手のもり

谷餘花

三位中將

ななのころやよひのゝちの山櫻心ありけるたにの下かせ

岸卯花

前大納言

此河のきしの卯花さきしよりよせくる波のかへるとそみる

籬卯花

融 覺

卯花のまかきは雲のいつくとてあけぬる月のかけやとすらん

卯花盛

侍從中納言

人もとへさくやう月の花さかりこてふににたる宿のかきねを

待郭公

眞 觀

時鳥たのめてたにもつれなくはまつにつけてや猶うからまし

初郭公

忠繼朝臣

み山いつる道やは遠き時鳥さよ更てこそはつれきくなれ

聞郭公

眞 觀

たか世よりかくはき、けん時鳥いつもはつれと思ふはかりに

郭公一聲

範忠朝臣

時鳥た、一聲のなこりに雲のいつこにとなさかりぬる

曉郭公

三位中將

待人もいかにせよとか時鳥あり明まではつれなかるらむ

曙郭公

右兵衛督

あけわたる嶺のよこ雲たえ／＼に聲もほのめくほと、きす哉

朝郭公

同

夜な／＼はまてとつれなき時鳥けさ遠かたの雲になくなり

夕郭公

源宰相

月をのみまたぬゆふへの心とは思ひしりけるやまほと、きす

夜郭公

侍從中納言

待えてもきくとはなくて時鳥なくや五月のよはそほとなき

雲外郭公

眞氏
重名朝臣

雲のゐるみれたちはなれ時鳥ふもとのかたに聲ふるすなり

月前郭公

眞 觀

待ほとはつれなくみえし時鳥さもそ有明の月になくなる

雨中郭公

禪 信

くれかゝるたそれ時雨の村雨にぬれてもなる山ほと、きす

郭公幽

眞 觀

しはしこそそれかともきけ時鳥さかひはるかに聲やなりぬる

山郭公

範忠朝臣

時鳥山路も末になりぬればかたらふ聲にけふはくらさん

里郭公

新大納言

時鳥はつれはもらせしのふとはたゝ大かたの里のなゝらし

渡郭公

眞 觀

淡路かた沖こく舟のほかにもまたこれもとわたるほと、きす哉

關郭公

同

山陰の不破の關守とはれとも心となるほと、きす哉

岡郭公

新大納言

とゝめはや岡の椎柴しはしたにやすらはてゆく郭公かな

原郭公

右兵衛督

み山をは今や出らん郭公すそのゝ原のむらさめのそら

郭公稀

三位中將

今もまたはつれなられと時鳥まれなるころはまたれやはせぬ

盧橘初開

御 製

むかしへの匂ひとときけとたのまれすけさ開けたる軒のたち花

盧橘薫風

範忠朝臣

故郷虚橋

三位中將

これやまたくちし軒はのあとならん志賀の都にのこるたち花

沼菖蒲

資有

人とはぬかくれの沼のあやめ草なみのひくにそれは浮にける

池菖蒲

融具氏イ覺

なかきれをためしにひきてあやめ草千代もすむへき宿の池水

菖蒲

具氏朝臣

なのつかかりたにのこせ菖蒲草さひしかるへき淀の渡りに

簪菖蒲

雅言朝臣

山かつの軒のしのふにめなれつゝあやめわかぬ五月雨の頃

袖上菖蒲

經任

時しあれば五月の蟬のはころもの袂ににほふあやめ草かな

田家早苗

新大納言

岸ちかきたよりの水をせき入て門田の早苗いそきとるなり

急早苗

侍従三位

けふのみと急くやたこの手もたゆく千町の苗の節たゝめまな

嶺五月雨

皇后宮大夫

雲ふかき峯の椎柴しはゝもはれまなのこせ五月雨の空

袖五月雨

同

日にそひて水もいつみの袖川に宮木をなかすさみたれのころ

磯五月雨

侍従三位

汐みため近江の海も五月雨にいりぬるいそとなるころ哉

湖五月雨

融覺

かゝみ山かけたにみえさゝ波に雲もおりたつ五月雨のころ

橋五月雨

眞觀

みし人も袖やぬるらん五月雨になさへわするゝあき水のはし

船中五月雨

同

舟人はとまの雲に袖ぬれていく夜とまりのさみたれのころ

瀉五月雨

前大納言

湊川とをつひかたもなかりけり水まさりゆく五月雨のころ

閑中五月雨

御製

くもる日の五月雨しけき此ころはわか影たにのみえぬ宿かな

連日五月雨

雅言朝臣

きのふといひけふと暮せる五月雨に飛鳥の川の水まさるらし

五月雨欲晴

忠繼朝臣

五月雨は雲まかちにそなりにけるたえゝ月の影もみえつゝ

寢覺水鶏

侍従中納言

ねともなき夏のよのまの程たにもなにおとろかす水鶏なる覽

深夜鷓鴣河

御製

かたふけは山陰くらき大井河月にもくたすうふねなりけり

瀬鷓鴣河

禪信

大井川せゝに棹さすうかひ舟くたせばははやかゝり火のかけ

遠村蚊遣火

賢阿

蚊遣火のけふりたつなり里遠きゆつはの村に日はくれにけり

庭夏草

新大納言

しけれど、庭の夏草あともなく道ある御代はたとりしもせし

鳴夏草

御製

駒なへて野嶋をすくるかち人の弓末もみえすしける夏草

澤夏草

侍従中納言

うちわたす浅澤水の影をたによそにへたてゝしける夏草

隣瞿夢

皇后宮大夫

ちりをたにすへしと思ふ撫子に近きあたりのことのほそき

瞿夢帶露

忠繼朝臣

とこなつの花の白露かすくになく物からや色のみゆらん

行路夕立

三位中將

ゆふ立はよそにやすくる玉はこの道のゆくてに風そすしき

湊夕立

侍從中納言

おきつ波をと吹たてしほ風のみなとにかゝるゆふたちの空

野夕立

侍從三位

夕立の木の下風に露おちてなこりもすしみやきのほはら

名所夏月

雅言朝臣

待いつる月をなつみの河をともしさそふる山の下かせ

水邊夏月

具氏朝臣

みしか夜の蘆まの水にかけすみて明るほとなき夏の月かな

夏月似秋

融 覺

あけやすき夜のまならずは月影を秋の空とや思ひはてまし

樹陰蟬

侍從中納言

うつ蟬の身をいたつらにれをそなくしけき木かけの夏の夕暮

瀧邊蟬

同

嶺たかき瀧のひきに打そひて山下とよむ蟬のこゑく

叢端螢

前大納言

日なへつやしけり行草村にひかりかくれすとふほたる哉

螢過窓

侍從三位

みるまよにかれにけりな行螢あつめ窓をよそにしらせて

晚夏螢

侍從中納言

秋風や雲井はるかに通ふらんみそきにちかくゆくほたる哉

夏夜待風

前大納言

五月雨のはれ行空に月すみて雲吹はらふ風をまつかな

松下納涼

同

ゆふつく日さぬ岡への松陰に夏をわする風のをとかな

對泉避暑

融 覺

手にむすふ泉の水のすしきは秋をこえてや波もたつらん

河夏菰

御 製

河へなるあらふる神に御菰して民しつかにといのるけふ哉

秋百三十首

立秋曉

皇后宮大夫

御菰してかへりもあへす袖の露曉かけて秋はきにけり

新秋雨

經 任

秋たちていく日もあらぬ村雨にあさく木のはの色やそむらん

初秋風

新大納言

萩のはにいかなる色をつけそめて悲しき物そ秋のはつ風

早涼至

融 覺

いつのまに秋はきぬらんうたれの我衣手に風そみにしむ

山早秋

眞 觀

風のをとのふしみのくれにかはる哉秋やきぬらん小初瀬の山

田早秋

新大納言

いとやも雲とやみえん門田なるきのふの早苗秋はきにけり

待七夕

同

天川あすわたらんと思ふよりあふせをまたてぬる袖かな

織女契久

御製

七夕のあまの羽衣いはなて、つきめやけふのためしなるらん

二星適逢

新大納言

彦星のつまむかへ舟いかにしてまれに逢瀬をわたしそめけん

海邊七夕

眞觀

いせの海やあまの河原につゝくらんこよひなにあふ星合の濱

野外七夕

前左府

星合のひかりやこゝにうつるらんかたの、□□□天の河なみ

七夕別

右兵衛督

けふもまたたえぬ契をたのみにてわかればかなし星合の空

羈中七夕

侍從中納言

七夕のあふたくひこそしらければ一夜はかりのおなし旅れに

聞萩

同

人とはぬ庭の萩原をとたて、風のみ秋の夕くれのそら

遠萩

賢阿

遠かたや萩の葉そよくとす也たかすむやとに風わたるらん

近萩

侍從中納言

うたゝれのよはの秋風をとたて、枕になるゝ庭の萩はら

山居萩

前左府

それとなき草にやつるゝ山里は風にそしるき庭の萩はら

垣萩

眞觀

哀ともたれかはきかん我宿の垣ほにしける萩の上かせ

簷萩

侍從中納言

契りなく軒はの萩のたよりにもたのみかたしや露のかことは

萩驚夢

御製

さらてたにれさめかちなる老らくの夢なさましそ萩の上風

女郎花多

侍從中納言

あたにたつななは思はす女郎花おほかる野へに宿やからまし

野亭女郎花

融覺

庵むすふさかのゝ秋の女郎花心つからや露もたくらむ

渾女郎花

忠繼朝臣

おも影をうつしてとめよ女郎花野澤の水に秋はくるとも

原萩

同

さきそむる色たにふかき萩の花末そゆかしきむさしのゝはら

岡萩

新大納言

旅人の花すり衣きねはなしゆきゝの岡のはきさけるころ

行路萩

雅言朝臣

ななさりにおりてかさゝん玉はこの道の行ての秋はきの花

河邊萩

右兵衛督

影うつる色さへふかし秋はきの花にせかるゝ野路の玉川

萩盛

具氏朝臣

なへてはや色に出にけりはきの花いまや盛と人のとふまて

折萩

侍從中納言

うつろはん色をはしらす朝露にぬれて折つる萩はきのはな

萩欲散

同

おしめ共ちりやそめけんさなしかのむねわけにする秋萩の花

籬薄

皇后宮大夫

白露の庭もまかきも玉散て薄をしなみ秋風そふく

薄似袖

侍從中納言

ほに出来る遠かた野への花すゝきたか袖とてか秋かせのふく

薄隨風

同

一かたになひきにけりな花すゝき草のたもとの秋のゆふかせ

蘭麝枕

三位中將

ぬきすてしたかなこりとして藤袴夢の枕に今にほふらん

戸外槿

侍從中納言

山かつの柴のかきとのなし明に露もたきける朝良のはな

草花露

同

高圓の野へのしら露色そへて尾花にまじる萩か花すり

淺茅露

資有

風わたる岡の淺茅になく露のしはしのはとなやとる月哉

苔徑露

雅言朝臣

朝ほらけあとなき苔にたとりつゝ露わけわふる山の下道

朝露

具氏朝臣

朝毎におきてそみつる庭もせの草の葉末の露の白玉

夕露

新大納言

袖にさへ秋は夕をしらせてや草葉をかけて露のなくらん

袖上露

侍從中納言

いまそしる草葉にあらぬ我袖も露のやとりと秋はきにけり

尋虫聲

範忠朝臣

尋れきてそれともわかつ虫のれのおほかる野へに目を暮す哉

虫聲滋

眞觀

たか植し一村すゝきしけりあひておなし野原に虫のなくらん

雨夜虫

雅言朝臣

秋も今ふけ行夜半の急雨にしはれて虫の聲そうらむる

虫怨

源宰相

山陰の夕日かくれの葛かつらくるゝもまたてむしそうらむる

蕞思

侍從中納言

露ふかき草葉の末の蕞思ひのほとをなくれにそしる

秋夕雲

融覺

さらてたに心うかるゝ夕暮の雲のはたてに秋かせそふく

秋夕雨

侍從中納言

なかもとて夕は露の我袖をいかにかほさん秋のむらさめ

秋夕風

賢阿

いとしく袖にすゝしきゆふへ哉またれし秋の萩の上かせ

閑中秋夕

眞觀

身になれて年はへぬれと今更にあはれさひしき秋の夕くれ

古渡秋夕

同

ましてしはし何かはいそくわたし守こかのわたりの秋の夕くれ

嶺鹿

御製

夕くれは小倉の山の峯つゝき鹿もあはれにたへぬ聲かな

溪鹿

融覺

谷ふかく思ひ入ても鳴鹿のかくしやられぬ妻やこふらん

杣鹿

具氏朝臣

宮木引いつみの杣に鳴鹿はやむ時もなくつまやこふらむ

麓鹿

融覺

小倉山ふもとの鹿の聲きけは老のれさめもれこそなかるれ

麓間鹿

經任

小男鹿のよはにこふなり秋の野の草のしけみに妻やこもれる

田家鹿

侍從中納言

遙聞鹿

御製

あらし山嵐につけてきこゆ也ならひの岡の小男鹿の聲

鹿聲何方

侍從中納言

秋風のつてにきかるゝ鹿のれはいつかたとたにえやは別れん

旅宿鹿

融覺

こよひしも鹿のれきかぬ宿ならは都にかよふ夢はみてまし

寢覺鹿

右兵衛督

さらてたにれ覺の床のさひしきに何と尾上の鹿のなくらん

初鴈連雲

侍從三位

たえ／＼にそれかとそきく村雲の行衛にまかふ初かりの聲

風前鴈

具氏朝臣

たれか今秋風吹とつけつらんいとはや鴈の聲きこゆ也

雨中鴈

侍從中納言

天原秋風ふくとくる鴈のつはさしほるゝゆふくれのあめ

薄暮鴈

新大納言

嶺となくたつうす霧の絶まより入日かすかに鴈はきにけり

深更鴈

經任

小夜ふくる枕の上になとつれて雲井の鴈のいつちゆくらむ

鴈作字

同

かけてこそくとはきゝしか玉章をかきつられたる秋の鴈金

湖上鴈

侍從三位

鳩の海やなかれぬ水の上にたにかくははかなき鴈の玉章

湊畔鴈

侍從中納言

みつしほの湊はるかにこく舟の聲をほにあくる秋のかり金

葦邊鴈

源宰相

なく露の玉江の蘆にみかくれてたのれむれある秋の鴈金

關駒廻

具氏朝臣

いつよりか絶ぬためしに相坂の關のこなたにこまむかへせし

待月

侍從中納言

まちわふる心もしらすくるゝまの山のはなをそき月のかけ哉

月出山

禪信

山端にたなひく雲やはれぬらん出るにしろき十六夜の月

月契秋

忠繼朝臣

ななき夜は月みん人のためとてや秋をさしても契りなくらん

叢祠月

具氏朝臣

すみまさる秋のしろしのかけみえてみわの神杉月そさやけき

蕭寺月

侍從中納言

月影も更行まゝに初瀬山尾上のかれに秋風そふく

禁中月

侍從三位

雲もなき月をみる哉九重のうちはあらしの聲もきかれと

花洛月

眞觀

限りあればすまも明石もいかならん花のみやこの秋のよの月

草庵月

前大納言

かりそめの草のいほりの旅枕あかつきしるき月のかけ哉

庭月

範忠朝臣

庭の草をけはかつちる露なれと猶あとゝめて月そやとれる

遠郷月

前大納言

浦人やをのか物とやなかむらん明石の里の夜半の月かけ

野店月

侍從中納言

なをさりの野原の庵の秋風にあれまくしらすめる月影

關屋月

融 覺

あれにけるふはの調やの秋風にひとり影もる秋の夜月

いかかりすみわたるらん秋の夜のなからの橋の月の光りに
月前遠嶋 具氏朝臣

水郷月

經 任

秋の月いかなる影にすみそめてかつらの里のなにはたつらん

淡路嶋あはとみゆれとしほのまなめくらは月や遠さかりなん
月前福舟 皇太后宮大夫

池上月

御 製

大空の雲こそあらめ月すめは池をも風のはらふよは哉

波の上にうきななをかへし唐人も月みんとてや夜舟こくらん
月前行客 右兵衛督

海路月

前 左府

さしのほる三笠の山の月影やもろこしまてのしるへなるらん

老か身も心のとかにみつる哉おさまれる代の月のひかりは
閑見月 眞 觀

浦 月

侍從中納言

波の上に入まてはみん淡路嶋まつほの浦の秋のよの月

枕にもあとにも人のなきれやになきみてみつる秋のよの月
獨對月 御 製

磯 月

雅言朝臣

しほの山さしての磯の秋の月八千代すむへき影そみえける

みてもまた老となるみのかなしさに心にしたふ山のほの月
老惜月 忠繼朝臣

濱 月

侍從中納言

すみのほる月もひかりは増りけりおきつしほ風ふさあけの濱

里遠き夜半のれさめの秋風にそれがあらめか衣うつなり
擣衣幽 侍從中納言

瀉 月

同

浦風に雲もかゝらすなるみかた汐干にとなきあきの月影

松に吹風のまに／＼をとつれて岡への庵にころもうつなり
松下擣衣 範忠朝臣

江 月

範忠朝臣

古河の入江の水も底すみてのとけきよは、月そさやけき

秋風の吹につけてやしつのおかよな／＼れやに衣うつらん
連夜擣衣 右兵衛督

泊 月

同

高砂やふりにしとまり今とても月はかはらぬよはのなさを

秋風のまた身にしまぬ里人やなともたえ／＼衣うつらん
擣衣到曉 御 製

崎 月

具氏朝臣

曇りなきゆらのみさきの月影によるもしほひの玉やひろはん

ゆふつくよみかてらはいか、せんあかつきやみもうつ衣哉
山路菊 同

瀧 月

範忠朝臣

おちたきつ瀧の白糸よるといへと月に玉ぬく數そかくれぬ

きえぬまや千年なるらん朝毎に山ちの菊にをけるしら露
山路菊 同

橋 月

前大納言

おちたきつ瀧の白糸よるといへと月に玉ぬく數そかくれぬ

きえぬまや千年なるらん朝毎に山ちの菊にをけるしら露
山路菊 同

水邊菊

同

くみてこそ千年もかれてしられけれぬれてはすてふ菊の下水

菊久穂

侍従三位

露のまにいかで千年と思ふまで山路のきくの色そひさしき

遠村霧

經任

いとゝ又なかも遠し秋きりのたちへたてたる里の一むら

霧隔帆

皇后宮大夫

思ひやるかた帆の風はつれなくて霧かくれ行浦の友ふれ

霧底筏

右兵衛督

筏しや石まつたひは心せよまもとくらき霧のまよひに

驛路霧

侍從中納言

旅人のむまやつたひに聲はしてゆきゝへたつる秋の夕霧

梯霧

同

日影さす嶺の梯たえゝにあらはれわたる秋のゆふ霧

曙鳴

前左府

明わたる門田のかりほ打なひきをともしさひしき嶋のはれかき

初紅葉

雅言朝臣

しくるとも思ひもあへぬ梢たにいつしかけふは色かはり行

露染山葉

新大納言

白露も秋はいかにとなきかへて山の木の葉の色をそむらん

雨後紅葉

融覺

村雨はすきぬるあとの夕日影秋のもみちそ色ことになる

紅葉所々

資有

今も猶時雨しくれぬほとみえてもみちもみちぬ秋の山里

紅葉遍

前左府

山めぐりおりしる時の雨なればそめぬ草木の色をまれなる

松間紅葉

御製

ふかみとりひとつ梢とみし松のけちめことなる紅葉なりけり

杜紅葉

侍從中納言

秋はまつたれにかとはん紅葉するいく田のもりのよもの梢を

隣紅葉

源宰相

あしかきのへたてなからも隔てぬはよそのもみちの梢也けり

紅葉誰家

眞觀

しくるめりたかすむ宿としらす共ゆきてこそみめ秋の木末は

紅葉映水

御製

木のもとをかけはなれたる山のゐに移るも浅きうすもみち哉

秋徐暮

範忠朝臣

秋の色くれ行日影けふも猶かり田のをしれほしあへぬかな

暮秋霜

侍從中納言

暮て行秋の色さへうらかれて霜になりぬるをのゝあさちふ

故郷秋閑

同

故郷のあさちか虫もかれゝにあり明ちかき秋のくれかた

鐘聲送秋

雅言朝臣

いかにせんこの曉のかれてより心つきにし秋のわかれな

惜九月盡

三位中將

とゝまらぬ秋の日數は命にもまさりておしきわかれ也けり

冬七十首

山初冬

侍從中納言

あらし山みれのうき雲けさよりや神無月とはまたしくるらん

里時雨

同

神無月さためなきにもしられけり冬はしくれのふる里の空

時雨告冬

前大納言

冬きぬと空にしれとや曉のまやの軒はにしくれすくらむ

朝時雨

融 覺

いつとなくかはかね苔の衣手にけさそしくれて冬はきにけり

夕時雨

賢 阿

小くら山冬のきたるにさかなれはしくれくつてけふ暮ゆく

時雨易過

同

いつのまに曇るとみゆる山のはのやかてはれ行むらしくれ哉

杜時雨

御 製

つの國のいく田の森の夕時雨袖はぬるやと人のとへかし

嶺時雨

融 覺

峯わたる嵐の山のうき雲にふりもさためぬ村しくれかな

關時雨

侍從三位

雲まよふ關のあらしのしくるゝに世をすくすとや袖ぬらす覺

閨時雨

侍從中納言

神無月れやの板まのいたつらに袖ぬらせともふるしくれかな

旅宿時雨

融 覺

から衣はるゝきぬる旅れにも袖ぬらせとやまたしくるらん

山家時雨

雅言朝臣

とにかくに晴まもみえずしくるめり木のはおちそふ冬の山里

落葉殘秋

禪 信

秋の色もしはしそのころ山風のもみちふきしくつたの下道

落葉如雨

眞 觀

木のはこそさてもまかはめわか袖の涙よ何にまたしくるらん

庭落葉

融 覺

日にそひて庭の木のはもふる里は風こそはらへ人はかよはす

開落葉

侍從中納言

ほともなく時雨すきぬる檜のやになとは變らてふる木のは哉

落葉不待風

右兵衛督

音たてゝむへ山風はさそはれといかにしくるゝ木のはなる覺

冬田霜

忠繼朝臣

いとゝまたたれかふるへき足引の山田のひつち霜にくちなは

野外霜

融 覺

さらてたにうきはさかのゝ草の原人めかれねとなける霜哉

樵路霜

同

くれかゝる谷のつま木の追風に霜をかされてかへる山人

見殘菊

同

秋をゝきて色そめかふる菊の花みしにはあらぬかたみ也けり

垣根寒艸

新大納言

なく霜の垣根とわけてさゝれともれすも草のかゝるゝ比哉

淵寒草

眞 觀

さらぬたに霜なく草を朝なゝまたふみからす谷の山人

江寒蘆

雅言朝臣

難波江や蘆のかれ葉に降霜にはのみし秋の色そのゝこれる

枯野朝

具氏朝臣

けさみれば草の袂ゝ霜かれにすそのゝ原の色そさひしき

冬曉山

重名朝臣

霜しろく風もさえ行冬の夜はあくるもしるし天のかく山

冬夕嵐

具氏朝臣

いつも吹嵐なれともはけしさのなともゆふへそ寒まさりける

冬夜難曙

同

冬ふかき夜寒の床の明やらていくたびはかりれ覺しつらん

水初結

融 覺

夜のまにや冬はきぬらん足引の山下水そけさこほるなる

水氷無音

源 宰相

朝氷むすひにけりないまさらになとなし川の名にやたつらん

淵 氷

前 左府

風さゆるあすかの川のあさ氷きのふの淵もえやはわかるゝ

汀 氷

右兵衛督

よせかへる渚は波の音もなし氷とちしく志賀のからさき

石間氷

同

谷川の氷もいくへとちつらん石間の水のなとつれもせぬ

海冬月

前 左府

都にもかくやすむらん松嶋やあまのとわたる冬のよの月

泊冬月

眞 觀

浦かくれとまる泊のかちまくらうきねをさむみ月をみる哉

水郷冬月

融 覺

氷とやかつさえぬらん宿かりし天のかはらの冬のよの月

浦千鳥

雅言朝臣

風さむみ我すむかたをたつ千鳥こと浦にこそ鳴わたるなれ

戸渡千鳥

侍従三位

波のまに行衛もしらすゆらの戸をわたる千鳥の聲そきえぬる

寒夜千鳥

三位中將

さえこほる明石の浦の鹽風に月をおくりて鳴千鳥哉

池水鳥

侍従中納言

冬の池の上はつれなき氷にもしたにはやすくかよふ鳩とり

獨聞千鳥

新大納言

水鳥のうきれの床に鳴聲を枕ならへてきく人そなき

葦網代

融 覺

舟もかないさよふ波の音はしてまた夜はふかしうちの網代木

霰殘夢

侍従三位

行やらぬ夢のたゝちの關守をなのれすへてもふる霰かな

竹 霰

侍従三位

竹ちかく何そ夜とこれそよさらに霰たはしり朝あせられす

鷹狩日暮

侍従中納言

はし鷹の同しつかれのあととめて日影ほとなく狩くらしつ

岡邊鷹狩

融 覺

狩人のならしの岡のなら柴におなしとたちのなときこゆなり

初 雪

具氏朝臣

ふりぬらんと山はしらすこの里にけさめつらしくつもる雪哉

淺 雪

忠繼朝臣

消ぬまを人のとへかし降雪のたまるともなき庭のおも哉

積 雪

新大納言

よもすから軒はゝ雪のほとみえて砌にたかくけさはつもれり

雪中望

融 覺

年をふる老の身なからうつもれて道ふみわけの雪の山里

雪埋松

皇后宮大夫

色かへぬ名のみふり行白雪に松のれたくもうつもれにけり

依雪待人

同

さりとと思ふ日數そ積りぬるまたあとみえぬ庭の白雪

雪似花

侍從中納言

さかぬまは花かとそみるみよしの、山下かせにふれるしら雪

霧中雪

三位中將

旅衣日數もいがかさねきぬかちの、なの、雪の夕くれ

逐日雪深

經任

あすもまたさそかさならん冬の日のつもればふかき庭の白雪

深山雪

侍從中納言

思ひやれ鳥たになかぬ奥山のあらしにつもる雪のふかさな

原雪

御製

行駒のあしにまかせてみつる哉しらぬの原のけさのはつ雪

池岸雪

新大納言

池水にあとなくきゆる白雪のふるほとみゆるきしの松かえ

濱邊雪

御製

八十日ゆく濱の眞砂ちはる／＼とかきりしられすつもる白雪

崎雪

侍從中納言

ふりにけるおなし縁にしられけり雪につれなきから崎のまつ

嶋雪

同

雪にさへすきこそやられあま衣たみの、嶋は宿もなければ

磯雪

御製

波よする磯の洲崎のひとつ松梢はかりにつもる白雪

河邊雪

侍從中納言

降積る雪をかされてみよしの、瀧つ河内にこほるしらなみ

水上雪

右兵衛督

池水の上には残る色もなしさうてもふかき雪のあけほの

社頭雪

前大納言

ちはやふる神のみ室のみしめ繩しらゆふかけて雪はふりつゝ

古寺雪

三位中將

雪のうちに人こそとはれ初瀬山尾上のかれはしるへなれとも

炭竈烟

源宰相

なの山のまきの炭かまよそながらそことしらせてたつ煙哉

向爐火

同

埋火のあたりもいたくさゆる日は硯の水も猶こほりつゝ、

歳暮近

前大納言

くれはつる飛鳥の川の年波のいとふもしらすみにやつもらん

家々歳暮

侍從中納言

やとことにかはらぬ物は暮ぬとてこ年を急くならひなりけり

戀百五十首

寄天戀

侍從三位

空になる心のほとも我ながら物思ふ時になかめてそしる

寄日戀

同

こひしなん命はけふもたのまぬをあすの春日と何いそくらむ

寄月戀

三位中將

そのまゝになかきかたみとみるもうしありし別れの有明の月

寄星戀

侍從中納言

しるやいかに雨夜の星のみえすのみうはの空にも戀渡るとは

寄雨戀

忠繼朝臣

村雨に袖はぬれつといひなして心のまゝに人や戀まし

寄風戀

前大納言

人しれず物思ふ袖に音信て涙ふきほせ秋のゆふかせ

寄雲戀

融 覺

伊駒山へたつる中の峯の雲なにとてかゝる心なるらむ

寄霞戀

侍従三位

我妹子に霞の衣いさゝらはみたればてなんやま風そふく

寄霧戀

侍従中納言

川きりのうきて思ひの中空になにと心の末へたつらむ

寄露戀

眞 觀

人しれぬ袖の涙にまかへとて秋をく露やなさけなるらん

寄霜戀

侍従中納言

竹の葉によな／＼さて置霜のしみつくはかり人を戀しき

寄雪戀

源 宰相

うくつらく人の心のたくひとやあとたにみえぬ春の淡雪

寄霞戀

新大納言

玉といひていつれをわけてひろはまし霞かたしく袖の涙を

寄時雨戀

融 覺

涙のみ猶もふる哉神無月しくるゝころもたゆむ袂に

寄烟戀

同

いかにせん富士の高根の名にたにもたくはくるしき下の烟を

寄山戀

賢 阿

さりともしな下に心はかよふらんしのふの山の道となくとも

寄嶺戀

融 覺

唯ゆへといかにいふきの峯なればさしも思ひにもえ初めけん

寄杣戀

眞 觀

寄谷戀

侍従中納言

いたつらに戀やわたらんちはやふる神の杣木の年はへぬとも

寄岡戀

御 製

淺く思ふ契りもつらし谷深くみをすてゝたにいかてしらせん

寄杜戀

經 任

たのめなきし跡をたのみて水莖の岡のやかたに人をまつかな

寄野戀

融 覺

さてこそは袖もしほらめ思ふこといかていはせのりの下露

寄原戀

禪 信

もえこかれなげくもはてはいかにそと飛火の野守いさ尋みん

寄關戀

侍従中納言

かへるさのあしたの原と思はすはしたはふ葛の恨みしもせし

寄田戀

忠繼朝臣

うちもれぬよその人めをまち侘ぬよひ／＼ことのなかの關守

寄里戀

右兵衛督

思ふこと苗代水にことよせてうけひくほとの色をしらはや

寄市戀

侍従中納言

徒に人めはかりはたつの市のあふにはかへぬなこそつらけれ

寄河戀

前大納言

年へぬる古河のへにたつ杉のいつかは人にまたもあひみん

寄瀧戀

新大納言

せく袖の下にもりてや涙河猶をとなしの瀧となるらん

寄江戀

侍従中納言

難波江の蘆の下れのしたにのみつらき節をいはてやめとや

寄沼戀

御製

かくれぬに生るあやめは我なれやしけき浮れしる人そなき

寄池戀

眞觀

頼めたゝゝりの宮の池にすむこひこそ遠のしるへとはなれ

寄海戀

侍從中納言

わたつみにかつきする蜚よいかにして思ふ心の深さくらへん

寄浦戀

前大納言

から衣袖師の浦にみつしほのひろまをいつと君にとははや

寄濱戀

雅言朝臣

いとゝまたしほたれわふる袂哉思ひなくさのはまもかひなし

寄磯戀

眞覺

いくかへりうたて心のあら磯によせては波の身をくたくらむ

寄湊戀

眞觀

山のゐの湊わかれて行舟のあかても人にぬるゝ袖かな

寄汀戀

侍從中納言

いたつらに我身一つにくたけつゝあふ夜なきさによする白波

寄嶋戀

忠繼朝臣

我戀はうらの初嶋はつかにもしらせやそめんおもふ心を

寄瀉戀

侍從中納言

わたつうみもしほひの瀉はある物をほすましられぬわが袂哉

寄崎戀

融覺

ほのかにもみそめのさきの花の色にうつる心をしらせてし哉

寄橋戀

源宰相

いたつらになからの橋のなからへて戀わたれとも契やはせし

寄網代戀

侍從中納言

網代木にたゝよふ波の我はかり心くたけてものおもへとや

寄井板戀

侍從中納言

つれなくも戀わたれとや大井川めせきにこゆる波のうたかた

寄掛樋戀

融覺

名につらき人を掛樋の水なれとかよひたゆれば袖ぬらしけり

寄松戀

前大納言

かくはかりみにしむ物と松風をつれなき人にかてしらせん

寄杉戀

融覺

中絶て又もあひみぬ初瀬川ありてかひなき二本のすき

寄檜戀

同

頼めとも同じかさしのかひもあらし難面き儘の三輪の檜原に

寄眞木戀

侍從中納言

しられしな色に出れば横の葉の我つれなくもこふるこゝろは

寄桂戀

新大納言

あまつ空月の桂のいくめぐりなかわる袖になみたおつらん

寄柞戀

眞觀

さほ山の柞は霧のへたつともかくれぬ袖を色にいてゆく

寄檜戀

新大納言

うき人の心やゆきてそめつらんまつ色かはるならのはかしは

寄楠戀

禪信

ちかひなは神にかけつゝ楠葉のかはらぬ色のちきりをそまつ

寄柏戀

前大納言

片岡のはひろ柏に降雨のをとにたてゝや人にしらせん

寄紅葉戀

皇后宮大夫

木の葉さへ移ひゆくかあた人のわれをふるせる秋のしくれに

寄竹戀

侍從中納言

あふことは一よたになきむら竹のつらきふしなも猶忍ふかな

寄篠戀

侍從三位

なのつからさゝわけし袖をほさて社露はかりたに形み共みれ

寄菅戀

侍從中納言

年月を人こそしらね奥山の岩本菅のれにはなけとも

寄葛戀

眞 觀

いかにせんつゝきの岡の葛の葉の恨みて後はまたもかへらす

寄葦戀

融 覺

世々かけていひしにかはる契り故短き蘆のれをのみそなく

寄薦戀

侍從三位

つれなくは浅香の沼にかかる草のなさへかひなく戀やわたらん

寄菖蒲戀

御 製

いつ迄かあやめもしらぬ菖蒲草けふ顯はれてれこそなかるれ

寄蘋戀

新大納言

人心さもうき草のれをたえてさそふ涙のしるへたになし

寄沼繩戀

侍從三位

よをへては思ひますたの池に生るれぬなは戀のかきり也けり

寄藻戀

侍從中納言

いせしまや蜆のかるもの人しれすわれからつらき戀もする哉

寄海松戀

同

戀わひるかひこそなけれ朝夕にみるめもしらぬ志賀の浦波

寄葵戀

前大納言

あふひ草その名をけふと頼みつゝあすには聞す人とはなん

寄蓬戀

眞 觀

哀にもわれこそとはめとはかりを今やまつらん庭のよもきふ

寄苔戀

侍從三位

思ふともよしや岩れの苦むしろしきしのふれば色もみえしな

寄芝戀

新大納言

かへるさの涙や袖にあまるらんけさをきそふる道芝の露

寄淺茅戀

忠繼朝臣

涙こそ露となくなれ淺茅原とひこし人のあとたえしより

寄萱戀

新大納言

思ふとも人はしらしな霜枯のかやかしたおれしたにくちなは

寄忍草戀

賢 阿

君もさは軒端の草に思ひ出よしのふちきりは昔なれとも

寄忘草戀

範忠朝臣

つらき人わすれんと思ふ草のなの心にかゝる身のならひかな

寄月草戀

源 宰相

月草のうつろひやすき心ともかつしりなからなにうらむらん

寄鶯戀

重名朝臣

折からや鳴音ももろき鶯の春ひもなく戀やわたらん

寄郭公戀

雅言朝臣

時鳥をのかわくれといひなしてつれなき人にまぢそわひぬる

寄水鷄戀

範忠朝臣

よもすから人まちわふる櫛の戸をたゝく水鷄の聲を明行

寄鶉戀

忠繼朝臣

荒にける鶉の床も我ことやかくれもはてぬものおもふらん

寄鳴戀

融 覺

こね夜のみ數積りつゝれをそなくあくるあしたの鳴の羽かき

寄鷹戀

前左府

はし鷹のとかへる山をたつねとも同じこひちにかくは迷はし

寄千鳥戀

御製

よもすから友なし千鳥鳴侘ねわれはかりやはものおもふらん

寄山鳥戀

前大納言

山鳥のなのれとなかき秋のよをなとてかよそにふし習ひけん

寄鴛鴦戀

右兵衛督

誰もまたうきにはたへぬ獨れをつかはぬ鴛のれにやなくらん

寄鷄戀

經任

聲たつるゆふつけ鳥はよそながら我わかれちの心をやしる

寄蛛戀

融覺

豫てしるかひ社なけれさゝかにのいと、軒端にかき絶しより

寄螢戀

同

我はかり思ひしもせしかつゝに澤のほたるは身にあまる共

寄蜚戀

前大納言

きりくすなくやつゝりのさしもなと人に重れぬ袖となる覺

寄松虫戀

雅言朝臣

あた人の頼めもなかは松虫のなくれやよそのたくひならまし

寄蜻蛉戀

皇后宮大夫

侘ねれは猶やたのまんかけろふのあるかなきかの人の契りな

寄屋戀

前大納言

年をへて思ひみたる、蘆のやのいつかは人にこやといはれん

寄窓戀

眞觀

あちきなや窓うつ雨に袖ぬれていくよむなしく戀わたるらん

寄廂戀

皇后宮大夫

朽ぬとも雨降軒の板ひさしくしのふ我なもらすな

寄柱戀

右兵衛督

契りしもありしなからの橋柱たつなはかりに朽やはてなん

寄床戀

侍從中納言

あはてふる涙はかりや獨める床は草はと露けかるらん

寄庵戀

前大納言

今更にまつともとは、秋のよの草の庵のなきれさめを

寄門戀

同

我門の柳の糸のくりかへしたえすも人にあひみてしかな

寄戸戀

同

楨の戸を有明の月のさすまでに今宵も人めとはてすきぬる

寄垣戀

御製

年月をなかにへたつるしのかきの一よ二よもあふよしかな

寄庭戀

眞觀

つれもなき人もきたらはいかゝせん野となる庭の草の深さを

寄玉戀

皇后宮大夫

なにゆへに思ひそめけんしら玉とみえし涙の色かはるまで

寄笛戀

新大納言

笛による男鹿もさそなみにかへて思ひはたへぬならひなる覺

寄箏戀

侍從三位

身にそしむ玉のなことのしらへまで人の心の秋とさくより

寄弓戀

侍從中納言

心ひくかたなもしろて梓弓我をしかへしうらみつるかな

寄箭戀

融覺

いかにせんともやたはさむ武士のとおりあへぬ程に人の戀しき

寄簾戀

同

かけてやはしられやはせん簾簾こひぬまなくて年はへぬれと

寄笠戀

源 宰相

宮城野や笠もとりあへぬ露にたにかくは袂をしほりやはせし

寄蓑戀

融 覺

たつれきて田みのゝ嶋とたのめとも涙の雨も名にはかくれす

寄緒戀

侍従三位

絶ぬへきはてもはかなしうくらき戀のみたれてゆらく玉緒

寄被麻戀

融 覺

つるによる末もたのます大ぬさのひく手あまたは猶そ悲しき

寄鏡戀

御 製

かたみとてみるもはかなします鏡とまらさりける人のおも影

寄錦戀

侍従中納言

人しれぬ涙の色のからにしき戀をむる名やよそになつらん

寄衣戀

經 任

さよ衣かへしてみつる夢にたに猶うらめしき人こゝろかな

寄糸戀

眞 觀

かくはかり忍ふもくるしかはちめの手染の糸のいさ亂れなん

寄布戀

同

陸奥のけふのはそ布たか世にかつらきためしに織はしめけん

寄帶戀

侍従中納言

めくりあはん契りはかりな結びても花田の帯の中そしられぬ

寄紐戀

眞 觀

しゐて猶戀やわたらん下紐のとけしはかりな身のちきりにて

寄筵戀

御 製

いつまてかしき忍ふへきそのまゝに我ちり拂ふ床のさむしろ
侍従三位

寄枕戀

歎くとてうちもれられすなりしより枕もしらしよ半の涙は

寄臺戀

融 覺

玉かつらいかにれしよの手枕につらき契りのかけはなれけん

寄挿頭戀

侍従三位

哀とはなへてそおもふ乙女子が玉のかさしのさしもしらしな

寄櫛戀

忠繼朝臣

しらせてもかひやなからん思ふ事つけの小櫛のなを頼みつゝ

寄匣戀

經 任

いかさまに契りし中そ玉くしけ二たひあはぬ身となりにける

寄書戀

前大納言

玉章はことなつくさぬならひにて心の底はしる人もなし

寄硯戀

侍従三位

はてはまたいつれかつきん涙そふ硯の水とおもふこゝろと

寄筆戀

融 覺

こひしともかきもやられぬ水莖になかれておつる我なみた哉

寄扇戀

侍従中納言

手枕のれやの扇を露よりもいつれかたみと契りをかまし

寄繪戀

忠繼朝臣

おも影は繪にかきとめてみつれともしらぬは人の心なりけり

寄木綿戀

右兵衛督

人はいさ心もしらすゆふたすきかけしちきりは今もわすれす

寄四手戀

具氏朝臣

櫛さす杜のゆふして風すきてなひくとみはやつらきためしな

寄注連戀

侍從中納言

くり返しさのみはいかゝ恨むへきつらさいはての森のしめ縄

寄塵戀

前大納言

朝日さす光にみゆる塵よりもしけきは戀のかすにそありける

寄車戀

同

めくりあふたのみはかりにを車の年をかけても戀やわたらん

寄舟戀

侍從中納言

堀江こゝ蘆わけを舟しけくともかよふ心のさはらすもかな

寄櫂戀

忠繼朝臣

いたつらによを重れゆくかち枕さても恨みのはてをしらはや

寄碇戀

源宰相

朽はてぬあまの小舟のいかりなはさもうき人にひく心哉

寄筏戀

同

柚川やはやせの筏さすさほのうつりやすきはこゝろなりけり

寄簪戀

賢阿

山陰のう舟のかゝり我ことや人にしられてもえわたるらむ

寄燈戀

前大納言

曉のかへにそむける燈のきえすも物をおもふころかな

寄綱戀

三位中將

河舟のたかせによとむつなて縄引て數多をなけくころ哉

寄繩戀

源宰相

いせの海の蜃のたくなは一筋にくるしき物と人をこひつゝ

寄笛戀

融覺

人めもる山田の庵の笛をあらみぬるとなつけそ露も涙も

寄泛戀

侍從中納言

うらみてもかひこそなけれ年月のたえすくるしき蜃のうけ縄
源宰相

なきこふる涙の袖のみをつくしふかき思ひのしるしたになし
前大納言

早河のせにうつやなの波よりも袖の涙はよとまさりけり
雅言朝臣

いせの海の網の泛縄我かたに心もひかぬ人をこひつゝ
侍從三位

つゝめとも人めそしけき花かたみいかにかせましるゝ泪な
源宰相

夢をたにえやは待みん花うるしぬるともしらすもの思ふとて
賢阿

忍ふればよふかき鐘にわかれちを鳥よりさきに思ひたつ也
融覺

わすれ貝わすればさても身をすてゝおなし渚の波はかけしや
融覺

雜百五十首

社頭朝

前大納言

はふりこは早まつらんといさかはの神の宮居にぬさたむく也

社頭暮

融覺

あくるよりゆふかくるまでちはやふる神の宮人代を祈るらし

社頭神

融覺

くもりなく天照神のしるしとて玉くしの葉にみかくしら露

社頭水

源宰相

石清水猶萬代をかされても君かためとやすみはしめけん

社頭鷄

御製

昔たれ曉ふかくみそきしてゆふつけ鳥のなをのこすらむ

祈年祭

賢阿

春毎にぬさとりむけて宮人の年をいのれはむへもとみけり

石清水臨時祭

雅言朝臣

山あゐの袖になれにし櫻花春のかさは猶そわすれぬ

加茂祭

侍從中納言

神代よりけふにあふひのもろかつらかけてそ渡る君か爲とて

春日祭

眞觀

大野なる三笠の森に小夜更て神まつればや山ひくくらん

新嘗祭

御製

ちきりあれや神のすこもを打はへて新嘗まつる昔おもへは

古寺嵐

融覺

名にたかきあらしの山の麓とて入相のかれに松かせそふく

古寺鐘

前左府

千代ふへきかめのお山の向ひなる鐘のひきは何れつきせし

古寺瀧

資有

春ならは花とやみましみよしの、よしの、山の瀧のしらいと

古寺路

眞觀

かくらくのとよはつせちをわけ入は尾上^{行イ}の寺に雲そかゝれる

古寺苔

具氏朝臣

年つもる程もしられて初瀬山軒はにふかき苔のいろかな

御齋會

皇后宮大夫

代をいのる春のはしめの法なれば君か行幸のあともありけり

最勝譚

新大納言

仁王會

御製

百數やなきためしとき月まであらそふ法はわか君のため

維摩會

同

千々の人命のへけんためしよりもゝさのうへにとける御法そ

大乘會

新大納言

神無月時雨ふりなけるみのりとしてならの都に残ることのは

原上行入

融覺

かみな月かれすや法の花の人おりをもわかさなさへつむらん

嶋瀧客

雅言朝臣

夕日さすをのゝしの原吹風に旅行人の袖かへるみゆ

谷樵夫

經任

よをへつゝもゆる螢とみゆる哉嶋つたひ行あまのいさり火

市商客

忠繼朝臣

朝夕のかせのたよりに谷川のつま木の舟をたれかひくらん

船中遊女

前左府

しるしらぬ人はたつたの市なればたれをわきてか又も頼めん

心から哀あたる契り哉行かふ舟にかはすことはは

岸頭傀儡

侍從中納言

河岸の波のよるゝ契りにて妻まちわふるとま屋形かな

遊子越關

融覺

鳥のれに關の戸出る旅人をまた夜ふかしとなくる月影

隠子出山

經任

道ありと我君か代に出はてゝ山の奥にはすむ人もなし

老人夜長

源宰相

鐘のをともまた明やらぬ秋のよにいく度老のれさめしつらん

淨侶歸暮

侍從三位

暮ゆかは山路の苔の露わけて我すむ寺とたれいそくらむ

野行幸

右兵衛督

行幸せし昔のあとのなこりとて今もかひある千世のふるみち

山狩獵

御製

狩人のやの、神山身にかへて妻かくしぬと鹿をなくなる

曉遠情

前大納言

けふ山をいくへこえんと草枕曉おきに妻やちきらん

夕幽思

新大納言

かへりこめ昔を思ふ夕とや秋ともいはす袖はつゆけき

拜趨積年

右兵衛督

かくて今いくとせまてに成ぬらんつかふる道を君にまかせて

饑別欲夜

資有

旅衣たちなくれしとしたふまにたむけぬ月も影そいさよふ

眺望日暮

前大納言

なかもやるむかひの嶺のひとつ松夕ある雲のたちへたてつゝ

興遊未央

前大納言

千代をへて野へに引へき姫小松きしかたよりも末そはるけき

孤夢易覺

雅言朝臣

はかなさをなへて習ひの夢とに思ひもあへぬ程にさめぬる

披書知昔

御製

むかしへやいかなる繩な結びをきて今にその世の事をしる寛

羈中春

右兵衛督

急くともこゝにやけふもくらさましみてすきかたき花の下陰

羈中夏

融覺

夏ふかきうつつの山道越かれてつたの下葉に風をまつかな

羈中秋

融覺

うつりゆく日數しられて夏草の露わけ衣秋かせそふく

羈中冬

源宰相

降雪に野くれ山くれあとみえてけさ朝たつはわれひとりかも

羈中曉

忠繼朝臣

都人いく曉かなかめこし旅の空行ありあけの月

羈中朝

禪信

白露のおきてわかるゝ旅衣しほるゝ袖にのこる月かけ

羈中晝

皇后宮大夫

水ちかき松の木陰に駒とめて猶やすらはん日はたけぬとも

羈中夕

侍從中納言

嶺なかき夕日はよそにあらはれて木陰くれ行山の下みち

羈中夜

源宰相

行とまるやとゝさためて奥山の岩れの枕夜をかされつゝ

羈中風

禪信

すゝき野のお花わけ行旅人の袖ふきかへす秋の夕かせ

羈中雨

御製

急雨のすぐるをまたていそく哉とまるも遠き道とおもへは

羈中烟

新大納言

暮はまた行とまるへき里なれや山の遠方けふりたつみゆ

羈中山

經任

都出し日數のみかはたひ衣こえ行山もかさなりにつけり

羈中野

禪信

草枕かりそめとこそ契りしにいくよかへぬるむさしのゝ原

羈中關

雅言朝臣

秋霧の夜ふかき鳥のそられにていそきたちぬるあしからの關

羈中河

侍從中納言

すきにける日數につけて角田川都を遠くこひわたるかな

羈中船

御製

袖のかや猶とまらん橘のこしまによせし夜半のうき舟

羈中橋

侍從中納言

旅人はいくかをかけて東路のさの、舟はしまちわたるらむ

羈中衣

重名朝臣

行くれぬ草の枕のかり衣露をかたしく袖のうへかな

羈中枕

侍從中納言

かりそめにいく夜をすきぬ旅衣かさなる宿の草のまくらは

名所山

前大納言

よしの山雪にや道も絶にけん花のさかりは人もふるさす

名所野

侍從中納言

ふみそめし跡はかりたはたのむ哉草のしけみのむさしの、原

名所岡

前左府

假寝するならしの岡のなら柴のならはぬ夢はみるとしもなし

名所林

雅言朝臣

月は猶たのむこのまもいかならん雲の林のなにもかくれは

名所村

眞觀

いせち行人やとらん河上のいつはのかたも日はくれにけり

名所關

右兵衛督

清見かた波の關守とにかくにしはれてのみや年のへぬらん

名所驛

侍從中納言

ふり捨るなこりそおしき鈴鹿山關の驛も心とまれは

名所田

同

ほに出るいなは遙に打なひきふしみの田面秋かせそふく

名所瀧

御製

今も又ゆきてもみはや石上ふるの瀧つせあとをたつれて

名所河

侍從三位

つかへては君にひかれて萬代の行すゑたのむ關の藤川

名所堤

融覺

いくたひか道のためとて廣澤の池のつゝみを引かへるらむ

名所湊

侍從中納言

のとなるあさなきみえて水莖の岡の湊は波しつかなり

名所津

御製

今も猶冬こもりする難波津に昔おほゆる梅のかそする

名所海

前大納言

いせの海月影きよき鹽ひかたあまの乙女子玉ひろふらし

名所濱

眞觀

みてすきし昔も遠しきの國や吹上の濱の明ほのの空

名所磯

禪信

みつしほにひかれても又たちかへれさし出の磯の蟹のつり舟

名所崎

御製

唐崎のまつものいはことゝはん志賀の都の昔いかにと

名所嶋

皇后宮大夫

あま衣たみのゝ嶋の夕しほにしはなかつの聲そかくれぬ

名所湖

賢阿

みるめなき志賀の浦人なればしもなにをあさりて世を渡る覺

山家春 禪 信

うつり行月日もしらぬ山里に春のしるしとうくひすそなく

山家夏 融 覺

世のうさを慰むと思ふ山里も蟬の日くらしれそなけれける

山家秋 雅言朝臣

とへかしなかつた山陰のしはのいほさしもさひしき秋の氣色な

山家冬 融 覺

なにて、猶そさむけきあらし山あたりの里の冬のあけほの

山家曉 侍從中納言

小倉山かけのいほりの柴の戸に残るさひしき有明の月

山家朝 皇后宮大夫

たつれきて千代をそ契る朝つく日さすや岡への松陰の庵

山家夕 源 宰相

たれしかもたへてしのはん山里にならはさりせば秋のゆふ暮

山家夜 眞 觀

なれなはとなに思ひけん柴の庵にね覺ゆるさめ夜半の松風

山家雲 忠繼朝臣

月影は出ての、ちもまたれけり軒端にかゝる峯のしら雲

山家雨 源 宰相

山ふかき住家なれともさひしさを雨にさはらすとふ人もかな

山家風 御 製

風たにも一かたよりそかよひける山たちめくる麓なるいは

山家梯 同

かつらきの神にやこれもかこたまし人めもたゆる岩のかけ橋

山家岩 前大納言

山里のほかにもとめぬ岩かれにすかたもみえず苦むしにけり
山家水 三位中將

山里のかけひの水のなとつれば絶れはとてもさひしからすや

山家垣 御 製

心にはうき世へたつと思へとも猶ことしけし庭のさ、かき

山家戸 新大納言

柴の戸をさゝてや嶺の月をみんこよひと契る人しなければ

山家猿 侍從三位

山深みれ覺さひしきよるの雨に秋の思ひをましら鳴也

山家鳥 經 任

朝霧もふかきみ山の谷の戸に哀さひしき鳥の一、こゝ

山家經年 新大納言

すむ人のおも影とめぬ山のみにみ草もとらて年そへにける

山家待人 侍從中納言

山里はすみなれてたにさひしきなとはぬつらさと誰をまつ覽

窓 竹 前 左 府

友ときく物なりからさひしさはまとの北なる竹の下かせ

簷 忍 草 禪 信

しのふ草かならすたればまかれとも軒端にしける物と也けり

路 芝 前大納言

あさち原こなたかなたにふむ道をこれやいつちと問つゝそ行

潤 草 賢 阿

山本のかけのを草もいやおひに谷には春そふかくなりゆく

岡 篠 融 覺

露むすふむかひの岡の玉篠に光うつるふゆふつく日かな

岸忘草

源宰相

たれをかも忘るゝ草のたれとてか今はつもの岸におふらん

巖麥門冬

侍從中納言

こりしける岩れにおふる足引の山のやますけ色もつれなし

河玉藻

同

風わたる波にまかせて河のせになひく玉もの下みたれつゝ

沼葦

前左府

雨ふれはふかきもしらぬ沼水に菊人もなきあしのむら立

江菅

侍從中納言

みさひるる堀江の眞菅下にのみたへぬうきればしる人もなし

砌松

具氏朝臣

みる夢もやゝさめやすし軒はなる松の梢をわたるあらしに

庭合歡

同

晝咲て籬にたてるれふの木はくるゝよりこそ名にもしるけれ

山椿

同

かきりなきはこやの山はいく代ともしら玉椿しらす行末

嶺桂

侍從三位

きくからにあらしも今はたとすみて月の桂の嶺をさひしき

杣檜

具氏朝臣

しけりあふ檜原をみればいたつらに朽木の杣もなのみ也けり

杜杉

資有

たつねゆく杜のあたりになりぬれば梢にしるき杉のむら立

岡椎

前大納言

染つくす千入の岡の夕時雨猶もつれなくのこゝる椎しは

吹すさふみ山おろしも麓なるならのは柴になとなてつなり

濱楸

同

風ふかは波のよせくる濱楸いくしほまてと色をそむらん

磯檉

源宰相

荒磯や岩れにたてるむろの木の木立もみえずしほやみつらん

寄金述懷

侍從中納言

なとにきく陸奥山の岩こかれさもありがたき世にもふる哉

寄玉述懷

融覺

和歌の浦おなし渚による玉も世のためにこそまつひろひつれ

寄鏡述懷

前左府

うつしみるかゝみの内の影ならて庭のよもきにをけるしら露

寄錦述懷

侍從三位

かきつけてみれば名もおしから錦たゝまくしらぬ大和言の葉

寄絲述懷

新大納言

つかへきて色に出らしくれなぬのこそめの糸の深きこゝろは

寄布述懷

侍從三位

七夕のおるてふ布のけふは又ときにあひぬとたれかおもはん

寄衣述懷

侍從中納言

さかさまによるの衣を急きつゝ君につかふるみをはやすめす

寄紐述懷

侍從三位

ともすれは亂れておつる紐のなのゆふかひなきや我身なる覺

寄枕述懷

御製

我ひちを枕にしつゝ思ふかなけにたのしひはこれにすきしと

寄筵述懷

融覺

みなかくすみ山の奥の苔蔭しきしのへともうき世也けり

寄扇述懷

同

何としてつかふばかりの道ならん扇の風もいとはるゝ身に

寄燈述懷

侍從三位

みるまゝに残りすくなき老か世に思ひしらるゝ窓のともしひ

寄簾述懷

眞觀

秋風のすたれうこかす夕くれも心ことはにえやはあらはす

寄弓述懷

具氏朝臣

うきみをはひく人もなし梓弓春にあふへき時はきぬれと

寄箭述懷

皇后宮大夫

くるとあくとともやた挟むますら男も治まる御代は手すさひやせん

寄琴述懷

新大納言

いとへとも玉のを琴の引かへし猶すてやらぬわかこゝろかな

寄笛述懷

御製

末の世と思ふもひさしより竹はきりてそ笛のれをもたてける

寄車述懷

侍從中納言

思ひやるかたのなきこそかなしけれやふれ車のかゝる我身は

寄船述懷

經任

うき身世に立こそめくれ捨舟の引人なしとなにうちみけん

寄筏述懷

新大納言

筏士の棹とりみたる事にもあまりておほき思ひ也けり

寄天祝

禪信

天つ空ひさしき御代の行末をみまくのほしき我身也けり

寄日祝

侍從中納言

くもりなき嶺の朝日の影にこそ君に久しき萬代はしれ

寄月祝

範忠朝臣

おさまれる御代としるく照月の千年の秋は君そみるへき

寄星祝

皇后宮大夫

あきらけき星の林をかそへつゝ君かよはひのありかすにせん

寄雨祝

侍從中納言

降雨も時もたかへぬ御代なれば空にそあふく君か千年を

寄地祝

融覺

動きなくさためをきけるあらかれは萬代までも久しかるへし

寄國祝

新大納言

すへらきのおほやけ國とまもるらしあまくたります神の心に

寄郡祝

皇后宮大夫

君か代にあへるかひにや千年へんつるの郡のなをたのみつゝ

寄都祝

新大納言

いく春もさかへん君かためとてそ花の都となつてそめけん

寄道祝

忠繼朝臣

いにしへのあとを尋れて今もまた道ある御代とたれもしる覽

群書類從卷第百六十六

和歌部二十一

龜山殿七百首

作者

御製(後字多)

九十六首

勅點卅四首 此内清撰十八首
藤大納言點四十七首

彈正親王(忠房)

十三首

勅四 藤一

前藤大納言(爲世)

八十首

勅廿一 清撰七

富小路藤大納言(實教)

四十九首

勅六 藤八

中御門前大納言(經顯)

三十六首

勅十四 清撰七 藤十六
勅廿 清撰五 藤廿

中納言(實覺)

六十二首

勅三 藤四

富小路前中納言(季孝)

十九首

勅十九 藤十六

侍從中納言(爲曉)

六十八首

勅五 藤五

六條前中納言(有忠)

三十四首

勅一 藤二

吉田前中納言(隆長)

二十四首

勅一 藤二

左大辨宰相(公明)

二十一首

勅六 清撰二 藤十四

源三位(親教)

三十五首

勅六 清撰二 藤十四

右兵衛督(爲定)

十二首

忠守朝臣

藤一

爲親朝臣

二十首

勅二 藤三

爲明朝臣

二十首

勅三 藤三

有光朝臣

九首

勅一 藤二

經季

八首

勅二

爲冬

十六首

勅三 清撰一 藤三

以通朝臣

三首

勅一

光吉

十九首

勅三 清撰三 藤三

道我法印

十九首

勅二 清撰一 藤三

計里丸

七首

勅二 藤一

祇壽丸

四首

藤二

春百三十首

立春

御製

久かたのあまのかこ山かすめるそ春たつけふの空には有ける

立春日

前藤大納言

足引の山の端はれて春のたつ日影はけさもかすまさりけり

立春水

六條前中納言

年ことにけふむすふてふ若水は老せぬ君かためしなるらん

早春山

高砂の尾上の松の浅みとり色こそまされ春はきにけり

早春浦

いつのまにかすみたつらん春きても雪けに氷る志賀の浦波

子日松

いく千年君かよはひの限りなく松をためしにひく子日哉

嶺霞

龜山のみれの松かえ春をへてかはらぬ色になつかすみかな

野霞

春霞へたつる末はいつくともみてたにゆかぬむさしの、原

關霞

越てゆく限りもしらす逢坂や霞も關とみゆる山路は

橋霞

朽にけるなからの橋はいと、なを跡たにみえずかすみ春かな

江霞

あはれけに難波入江のあけほのは春の霞のたち所哉

河霞

大る川岩まの波のよとむせもあさくはみえずたつ霞哉

海霞

春は猶うちとの海そしられる霞へたつるあまのはしたて

湖霞

ふりにける春や昔のおもかけもかはらすかすみ志賀のから崎

嶋霞

はる／＼と春はへたて、波間にもみえずかすみ淡路しま山

渡霞

源三位

侍從中納言

富小路前大納言

中納言入道

光吉

爲親朝臣

侍從中納言

前藤大納言

中御門前大納言

侍從中納言

六條前中納言

左大辨宰相

前藤大納言

源三位

高麗さす行衛もみえずかすみ也よとのわたりの春のあけほの

谷鶯

計里丸

谷陰も氷とけゆく春風にさそはれいつるうくひすの聲

雪中鶯

爲定朝臣

鶯のなくねはかりに春はきて猶そらはれす雪はふりつ、

曉鶯

前藤大納言

ねさめしてまつそ聞つる軒ちかき竹のしけみのうくひすの聲

里鶯

御製

春きぬと今やきくらん里人も初音につくる鶯のこゑ

竹鶯

御製

鶯の千世の初音はさ、竹の大みや人にはるやつくらん

野若菜

前藤大納言

名にめつる老ないはて春日野の野守はゆるせ若なつみてん

澤若菜

爲親朝臣

里人はあさ、は水のうす氷とけあへぬまに若なつむらん

田若菜

爲明朝臣

我君のしけきめくみとつくはねのすその田井に若なつむ也

岡殘雪

吉田前中納言

外よりも跡をや殘す水くきの岡へにつもるこそこのしら雪

木殘雪

爲定朝臣

都たにさえぬ梢の雪折にみやまの松をおもひやるかな

餘寒風

經季

消かぬる尾上の雪に風寒て春をもしらぬ山のおくかな

餘寒氷

前藤大納言

立歸りさゆるあらしに二月やとけし氷もまたむすひけり

梅雪

同

梅かえに降かされては白妙の雪こそ花のいろなをへけれ

梅風

同

さきしより軒端の梅の匂ひなは花にもそへすさそふ春風

夜梅

前藤大納言

梅の花色はみえれと香なのみや閑にも袖にうつしとむらん

山家梅

御製

梅かゝの匂ふ春へは山里も物うからすそうくひすもなく

簾梅

同

我宿の梅咲ぬとはいはすとも人にはつけよ軒の春風

梅移水

同

春風のかたとめくれは谷陰にかゝみくらぬ梅の下みつ

梅薫袖

侍從中納言

さそひゆく匂ひそとまる梅のはな袖こそ風のやとりなられと

折梅

經季

山人の匂ひとそしる梅のはなたをれる袖にかよふはるかぜ

紅梅

中納言入道

白妙に雪のふるえも紅のこそめの梅のいろそかくれぬ

落梅

同

みるまゝに花の鏡そくもりゆく木の下陰の庭の池水

柳露

侍從中納言

青柳の糸のみとりも長閑にてちらさぬ風にむすふしら露

池柳

彈正親王

枝なそめ波なも染て青柳の糸にそかゝる庭のいけ水

行路柳

中納言入道

玉ほこの道行くらすななき日にあしたゆくくる青柳の糸

御製

いつのまにやくともみえぬ春日野のけふ萌わたる春の若草

早蕨

祇壽丸

春きぬとのへのさわらひ下もえて降つむ雪のとけやしぬらん

山春月

光吉

なかわれは長閑にかすむひかり哉都の山のはるの夜の月

關春月

富小路前大納言

鳥のれに添てそいそくあけやすき關のとさしや春の月影

江春月

前藤大納言

影うつす波もおほろに難波かた入江をかけてかすむ月哉

春曉月

侍從中納言

別つる雲ともみえず山端のはれぬ霞にあくる月かけ

春月幽

忠守朝臣

いつのまにかたふくまてになりぬらん霞のうちの春の夜の月

夕春雨

侍從中納言

春雨に霞もふかく成にけり立そふ雲のゆふくれの空

野春雨

御製

今いくか飛火の野守たち出ん若なはいそく春雨のそら

庭春雨

御製

心すむ老の涙にあらそふは草の庵の軒のはるさめ

春駒

富小路前中納言

をのれとやはなれもやらぬ若草に人はつなかな野への春駒

雉

爲定朝臣

草の原かすみもふかき春の日にありかそしらぬ雉子なく也

雲雀

爲冬

春の野のまたはつかなる草葉より空まであかる夕雲雀哉

歸雁知春

同

おもひたつたのかころとや天津空かすむよりゆく春の雁かれ

夜歸雁

同

むは玉の闇にあやなき春のよの雲路たとてかへるかりかれ

歸雁連雲

前藤大納言

歸る雁うはの空なる玉草をかすむ雲路にかきそつらぬる

海歸雁

御製

春ことにとまらぬ物かあまのすむ里のしるへにかへる雁かれ

遠歸雁

同

行末は雲路にとちてみえずともかすまてかへれはるの雁かれ

野遊

同

白妙の袖は霞にうつもれて春日をくらす野へのもろ人

遊糸

御製

春の野の駒にそまかふみわたせは霞のひまにあそふいとゆふ

待花

富小路前大納言

またきよりまつ白雲の立田山それかとみても花そまたるゝ

栽花

侍從中納言

君かへん御代のためとや櫻花植て千年の春をまたまし

尋花

前藤大納言

咲ぬやと越はゆけとも山櫻猶めにかゝる雲たにもなし

初花

源三位

けさみれば花咲ぬらししら雲のかゝりそめたるみよしのゝ山

見花

御製

春ことなきまきり行山さくらわれを老木と花やみるらん

翫花

彈正親王

山さくら手ことに折てかへるさも風をそいとふはるのたひ人

折花

中御門前大納言

ちらぬまにしはしかさゝん櫻花おるてにゆるせはるのゆふ風

交花

爲定朝臣

いとしくあかぬ心も山さくらなれてしらるゝ花のかけかな

曉花

忠守朝臣

ふかき夜の哀をそへて有明の月にいとはぬはなのしら雲

朝花

前藤大納言

山さくらへたつる嶺もとたえして梢をみするあさかすみ哉

夕花

侍從中納言

花をみる心ひとつにいとへとやよそにそいそく入相のかれ

夜花

前藤大納言

みぬまにもちりもやすると山櫻よるも心に花そかゝれる

山花

同

かつらきやよそにみえつゝ花ははや咲ぬとかゝる嶺の白雲

嶺花

六條前中納言

尋れ入まゝにそ花にあらはるゝよそにみえつる嶺のしら雲

谷花

富小路前中納言

今そみる谷の老木の櫻花風たにしらて春やへぬらん

岡花

左大辨宰相

旅人のたよりにつけてことゝはんゆきゝの岡の花はさくやと

杜花

侍從中納言

片岡のもりの梢の春ことにしけりてまさる花のいろかな

野 花

富小路前大納言

さく花なむけにそ折春日野やはこふあゆみに春をかされて

關 花

御 製

逢坂やゆふつけ鳥もなきわたり梢に明るはなのしら雲

瀧 花

爲定朝臣

みよしのよしの、河の瀧つせにたえずもかなと花をみる哉

禁中花

忠守朝臣

九重の雲井の櫻君か代にちらてさかへん春そひさしき

社頭花

爲明朝臣

さそひ行風にもあへす移る也神のいかきにさけるさくらは

古寺花

中御門前大納言

吹風ものとかなれとは初瀬山花のためにや猶いのるらん

故郷花

吉田前中納言

さかりなもちるなも誰かしたふらん花はかはらぬしかの故里

里 花

御 製

住吉の遠里なの、花さくら松にさそひてはるかそふく

山家花

富小路前大納言

中々に心やちらん山ふかみ花より外に人めまちえは

庭 花

中納言入道

花みてもかひこそなれたらちれの春をしらせぬ庭の訓は

閑居花

六條前中納言

人とはぬ春や昔の宿の花我身ひとりの友とこそみれ

花 雲

吉田前中納言

まかへとてたちのほれとも嶺の雲花になよはぬ色としらすや

花 雪

前藤大納言

庭にのみ積りかされて風さそふ梢はきゆる花のしら雪

花 梢

光 吉

なのみして山はあらしのふかぬ日に梢のさくら長閑にそみる

花 枝

爲親朝臣

さそはるゝならひもあらし咲花の枝をならさぬ御代の春風

花 本

前藤大納言

さきしより心とゝめて山櫻たちもかへらぬはなのこのもと

花 根

道我法印

山櫻あたにしちればねにたにも猶かへさしとはる風さふく

花 挿頭

左大辨宰相

櫻花君かかさしに手折てそ萬代ちらぬためしとはみる

花 手巾

計里丸

みわの山みれのさくらを手わりても手向におしき花の色哉

花 麻

道我法印

せめてなとぬさもとりあへず散花を神も心にまかせさるらん

花 袂

光 吉

袂にも移りにけりな人しれす心に染しはなのにはひは

花 衣

爲明朝臣

あたにのみちるてふ花のかり衣きても山路に日數へにけり

花 鏡

爲定朝臣

うたてなとつる鏡の池水にくもるをしらて花のちるらん

花 錦

計里丸

春霞たゝちかくせ風吹は花の錦のみたれもそする

花 匂

有光朝臣

匂はすはしらてやすき山櫻木のもとたとる春の夕暮

花 色

前藤大納言

山さくらあたる花の色をみていたつらにこそ我も老ぬれ

花 便

光 吉

花ゆへは風のたよりもつちければ人をもまたし春の山里

花 主

富小路前中納言

はなゆへに人もとひこは春ことになを植そへん庭のさくら木

花 面影

六條前中納言

おもかけをかくする雲にさきたてゝ櫻いろなるきさらきの空

花 形見

中納言入道

墨染の色になこりそとゝまらぬ昔の袖のはなのかたみは

惜 花

前藤大納言

とゝまらて散とも花の面影はおしむ心に猶やのこらん

落 花

中納言入道

散花のなこりはなへてしたへともふりゆく身をは人も惜ます

殘 花

富小路前大納言

今は身によそなる春のつらき哉一木か花もなこりある世に

苗 代

御 製

せきかくる苗代水のさまゝにわくるや人のこゝろなるらん

蛙

富小路前大納言

うき草のれを絶てなと池水のおなし汀にかはつなくらん

躑 躑

祇 壽丸

うすくこく岡部にさける岩つゝしいはれと春の色とみえけり

杜 若

前藤大納言

咲ぬれはうつれる池のかきつはたなのか影をもへたてさき見

歎 冬 露

左大辨宰相

朝ほらけ花のひもとく春風に露もこほれてにほふ山吹

夕 歎 冬

御 製

咲つゝく岸の山吹かけみえてなかれはゆかぬ花のゆふなみ

河 歎 冬

爲親朝臣

なく露のひまこそなけれ吉野川波うつ岸の山ふきの花

里 歎 冬

富小路前大納言

さかりとはいはて人も人にとはれけり里のなにさく山ふきの花

蘿 歎 冬

道我法印

くれてゆく春の形見と故郷のかきはにさけるやまふきの花

池 藤

富小路前大納言

咲にけり底にうつろふ影みればおなしすかたの池の藤波

江 藤

侍従中納言

松かえによせてかさなる住の江の波にも藤の色をやはみる

浦 藤

源三位

あまのかさしなるらし春ことに波もてかへる田子のうら藤

岸 藤

爲定朝臣

住の江の岸はいかて咲ぬらんよすともみえぬ春の藤なみ

松 藤

中御門前大納言

老か身に又もやありと君か代のめくみを松にかくる藤波

春 欲 暮

御 製

老か身を嶺の入口にたとへてもたのまぬ春のくれんとすらん

暮 春 月

同

有明のわかればやまひ今いくかくれなはなけの月の影かは

暮 春 霞

經 季

くれかゝる日敷しられて三月山うすくなりゆく春霞かな

三月盡夜

中納言入道

限りありて足もやすめす春やゆく夢までおしきけふの別れち

閏三月盡

御製

一年に三月かさなる時にこそふたゝひ春のもののおもふなれ

磐室篇三十八首

爲世

夏百首

首夏

侍從中納言

春とのみ猶したはれて心にもしらねぬ夏やけさはきぬらん

朝更衣

爲明朝臣

よとゝもに春のわかれをしたひきて明れはかふる花そめの袖

惜更衣

經季

けふかふる花の袂の移りかを春の形見と猶したふかな

餘花

中御門前大納言

ちりのこる花があらぬか夏山の青葉か下にかゝるしら雲

新樹

吉田前中納言

花さかてひとりさめにしまつか枝のおなしみにとりに茂る夏山

夕卯花

前藤大納言

山賤は夕くれことにうの花のまかきばかりに月やみるらん

夜卯花

爲親朝臣

夏のよの空にのこらぬ月影をかきれに埋むやとのうの花

河卯花

侍從中納言

山城のゐ手の玉川はるゝときしうつ波にさける卯の花

行路卯花

光吉

雪ならはわけつる跡もありなまし道たとるまでさける卯の花

山家卯花

中納言入道

老てすむ山のかきはのいかにして身を卯の花のさかりみす寛

葵

前藤大納言

もろは草かけてわたりし昔をは神もわするなかももの河なみ

待郭公

御製

郭公いまはまたしとまちかれてねなんこよひやなきてすく寛

尋時鳥

侍從中納言

一聲も鳴てしらせよ足曳のやま時鳥いつくなるらん

人傳郭公

富小路前中納言

なきぬとも我とはきかす時鳥人のかたるをおなしねにして

始聞郭公

御製

時鳥われは初れときくものをまた誰里になきてきつらん

郭公未遍

忠守朝臣

われにのみ猶も初れやおしむらん人傳にきくほとゝきすかな

月前郭公

前藤大納言

つれなしと思へはさすか時鳥有明の月になきてすきぬる

雲外郭公

同

おなしくは聞さためはや遠さかる聲は雲井の山ほとゝきす

雨中郭公

有光朝臣

降雨にぬれゝきてや時鳥はれぬ雲まにことかたるらん

曉時鳥

前藤大納言

よなゝはまたれてそなく時鳥いつもれ覺を聞とくにして

曙時鳥

中納言入道

きぬゝのうさもしらしな天の戸をなし明かたになく時鳥

朝時鳥

爲親朝臣

いつくよりなきていつらん朝戸明てなむる空のやま時鳥

夕時鳥

前藤大納言

偽の人こそあらめ時鳥まつ夕くれのそらなすこしそ

夜時鳥

中納言入道

やとりとる人や聞らんみしか夜の空もくらふの山ほと、きす

山郭公

爲親朝臣

時鳥たれにまたれて足引のやまをいつる聲きこゆらん

杜時鳥

道我法印

もらせな、しのふの森の時鳥きつとたにも人にかたらし

岡時鳥

六條前中納言

時鳥聞てそあかね誰にななしのふの岡のよはの、こゝろ

野時鳥

中御門前大納言

ほと、きすしはしなすきそむさしのは鳴て入へき山端もなし

原時鳥

御製

夏きてもけふみかの原泉川いつしかもなく時鳥かな

關時鳥

前藤大納言

一聲をなきて過れとほと、きす空にはとむる關守もなし

浦時鳥

富小路前中納言

しほたれてまつとはしるや時鳥心つくしのすまの浦人

渡時鳥

爲定朝臣

いつくにかやとをはからん時鳥さの、わたりを鳴てゆく也

夢中時鳥

中納言入道

思ひねの心つくしの夢路にはみれともきかぬ時鳥哉

獨聞時鳥

御製

人しれす我ためとてやほと、きすひとりね覺の枕とふらん

時鳥何方

富小路前大納言

行方をしのひやすらん時鳥た、一聲をそらになくなり

郭公幽

同

れ覺とふ雲井のよその郭公聞をも夢とおもひけるかな

田家早苗

御製

山里の門田のおもに水こえてす、しくけふは早苗とる也

急早苗

道我法印

かきくらし雨は降きぬ早苗とる山田の田子や猶いそくらん

早苗多

前藤大納言

けふもまた取手あまたにいそけとも山田の早苗猶もつきせの

沼菖蒲

源三位

君か代のながく久しきためしとて沼のあやめのねをやひく覽

簷菖蒲

前藤大納言

あやめ草何とふくらん五月雨はもらてあるへき軒端ならぬに

荳菖蒲

同

たか袖のものとはなしにおしなへてさ月の沼にあやめかる覽

曉虛橋

御製

曉のまくらに匂ふ立花は老のれさめのおりを知けり

虛橋風

前藤大納言

むかししる花橘のゆふかせにぬしきたまらぬ袖のかそする

故郷虛橋

爲冬

立花のにははさりせはふりにける昔なからのやとはしられし

櫻

爲親朝臣

露はらふ風をす、しきあふちさく外面のかけの夏の夕くれ

夜五月雨

左大辨宰相

あらし山くる、よりふる五月雨にふけてそ瀧の音はきこゆる

山五月雨

御製

日數へてかさなる雲のひまもなしくらふの山の五月雨のころ

山五月雨

吉田前中納言

宮木引山河に涙こえてくたすもはやき五月雨のころ

橋五月雨

富小路前中納言

人はいさかよひやすらん五月雨のふりて久しきまゝのつき橋

江五月雨

光吉

蘆の葉に波やこゆらん入江こく舟もさはらぬ五月雨のころ

瀧五月雨

源三位

五月雨のはれまもまたす山姫のさらしそへたる布引の瀧

河五月雨

中御門前大納言

五月雨にみかさまりて泉川いつはるへくもみえぬ空哉

湖五月雨

爲冬

さみたれにみかさやまさる音たて、打出の濱の沖つしら波

浦五月雨

侍從中納言

須磨の浦やあまの衣のほす日さへまとなにはる、五月雨の空

故宅五月雨

爲定朝臣

はれまなき程にもすきて故郷の軒端くち行五月雨の頃

水鶏

侍從中納言

つれもなきたか横の戸をあくるまてたゞきも捨ぬ水鶏なる寃

夏夜

富小路前大納言

夜をかされ秋にや夢も通ふらんかたしきすゝしうたゝれの袖

雲間夏月

御製

水邊夏月

御製

手にむすぶ水には秋のかよふとて月はすゝしくやとる也けり

夏月似秋

中納言入道

夏衣袂に月をやとしても秋のこゝろそいとゝわすれぬ

夏月涼

六條前中納言

村雲のたえまはうすき影ながら涼しくふくる短夜の月

夏月易明

御製

また宵と思ふものから夏のよのしらむか月の明やすき空

瞿麥露

爲定朝臣

ちりならて又やはらはん床夏の花のまかきになけるしら露

庭瞿麥

爲親朝臣

くれなゐの色こそまされ夕つく日さすやかきれのやまと撫子

夏草露

中納言入道

夏草のしけみにをけるしら露はしらぬ秋をみればさきたつ

杜夏草

侍從中納言

夏木立露も雫も數そへてしける三笠のもりの下草

野夏草

富小路前大納言

かち人のわくるもしるく吹風の絶まになひく野への夏草

徑夏草

前藤大納言

夏草はいかにもしれ我道のかさなる跡を誰かうつまん

庭夏草

御製

小田わけん人もたのまねみやまへの宿にはしけれ庭の夏くさ

夏山

中納言入道

いかにしてうきみかくさん夏山のしけき木陰に宿りとめても

夏野

計里丸

里人もなをたとるらん夏草のしけみか末のをのゝふるみち

照射

前藤大納言

短夜のおくるにつけては山なる嶺のともしの影そきえゆく

鶴川

爲定朝臣

大井川さてしもともすかゝり火に闇はあやなきうかひ舟かな

夜螢

侍從中納言

きえやすき思ひなるらし夏のよのみしかきほとにもゆる螢は

橋螢

御製

夏のはとふや螢の玉ちりてをたえの橋にみたれゆくらん

水上螢

中御門前大納言

水くらき蘆まにすたく夏虫はをのれもえてやよはは知らん

池螢

中納言入道

みれば又移ふかけも大澤の池のたまもに飛はたる哉

江螢

御製

蘆火たく煙はみえす難波かた入江のなみをやくほたる哉

澤螢

富小路前中納言

飛螢さはへの水にうつれはやもえても影のすゝしかるらん

浦螢

六條前中納言

螢のたく浦のあし火のよるゝは波にもゆるやほたるなる覽

草螢

源三位

よもすからすたく螢のひかりにて草葉の露のかつやみゆらん

螢似露

爲定朝臣

飛螢きえすはありとも人とはゝ野原の露と猶やこたへん

螢似玉

忠守朝臣

いせの海やきよき渚の夕波にひろはぬ玉はほたるなりけり

蚊遣火

六條前中納言

いと、猶にきはふ里の夕煙またたてそふるかやり火のかけ

夕顔

富小路前中納言

咲てこそ人にとはるれ夕虫の花はいやしきかきれなれとも

蓮

前藤大納言

吹風にうへこす池のさゝ波そはすのうきはの玉をなしける

氷室

侍從中納言

夏衣たちよる袖やうすからし山下風もさゆるひむろに

夕立風

中御門前大納言

空くもりたゝひとしきり吹風のをやむとみれば過るゆふ立

夕立雲

御製

なる神も雲のいつこになりぬらんよそにすきゆく夕立のそら

山夕立

中納言入道

なる神の音は高雄の山風に雨よりも猶雲そさきたつ

河夕立

前藤大納言

一しきりやまちにしつる夕立のすきてそにこる谷川の水

夕立早過

同

かきくれてやかてそはるゝ山端にかゝるとみつる夕立の雲

杜蟬

中納言入道

蟬の聲きけは秋こそいそかるれいつも常葉の杜のなゝれと

樹陰蟬

有光朝臣

夏ふかくしける木陰になくせみの聲もすゝしき庭のゆふ風

泉

左大辨宰相

すゝしさは水の心にまかせけり秋をともにはせきいれれとも

夕納涼

中納言入道

小倉山松の木陰の下すゝみゆふくれはかりかよふ秋かせ

納涼風

吉田前中納言

扇をもわするはかりに吹風を秋やゆふへとおもひける哉

納涼忘夏

爲冬

わすれては秋かと思ふ小くら山音もすゝしき峯のまつかせ

六月板

左大辨宰相

御被川ゆくせにうかふあさのはのをのつから吹風そ秋なる

秋百三十首

立秋朝

御製

今朝のまに袂すゝしき夏衣一夜にたちぬ秋のはつかせ

初秋風

經季

なとつゝ萩の葉よりも吹風のすゝしきにこそ秋はしらるれ

初秋露

前藤大納言

老か身は涙の露のいとゝしくほれやすきに秋をしらるゝ

待七夕

同

あふことはけふと思へと七夕のくるゝまつまの心をしる

七夕雲

爲定朝臣

かさねともおもはぬ物を七夕の雲のころもやたちわからん

七夕橋

前藤大納言

秋ことにけふをさしてや天の川わたしそめけんかさゝきの橋

七夕衣

同

あまの川こよひ逢瀬の秋風に雲のころものつまかへるらん

七夕船

御製

七夕のこよひとたのも影なれや夕の月のつまむかひふれ

七夕別

源三位

七夕の雲の衣もうちしほれけさかへるさはさそしくるらん

七夕朝

御製

七夕の五百機衣かされても今朝きぬくの袖をつゆけき

曉露

前藤大納言

草葉より猶そしほるゝれ覺する袖をさきにや露はをくらん

朝露

道我法印

露をたに結びもとめす旅ころもあさたつ袖に秋風そ吹

夕露

中納言入道

身を秋の涙や露にをしへけん夕はわきて袖ぬらせとは

夜露

前藤大納言

露や猶をきまさるらん野原なる草はもわけてよるそしほるゝ

野露

同

こぬ人をまれくにつけて花すゝき野原の露そ袖にとまらぬ

徑露

御製

諸人も道の露をやわけつらん鹿なく秋の君かなさけに

庭露

前藤大納言

露のみそ秋といふより朝ことにまかきの草にまつむすひける

萩風

中納言入道

時しもあれ萩のはむけのそよ更に空や秋なる風そ身にしむ

江萩

光吉

ほにいつる入江の萩のうは露に結びもはてぬ秋の浦風

野萩

中御門前大納言

萩か花咲そめしより宮城のゝこの下露にぬれぬ日はなし

河萩

左大辨宰相

はきか花ちらましくおしみ駒とめて影をたにみん野路の玉川

庭萩

中納言入道

いれかてに老の袖をそぬらしける獨ある庭のはきの白露

女郎花靡風

爲定朝臣

ひとかたになひくともなく女郎花おほかる野へは秋風そふく

野女郎花

富小路前大納言

幾年か秋のさか野の女郎花つかふる道になれてみつらん

行路薄

爲定朝臣

旅人の野へのゆきゝはしけからてひまなくまねく花すゝき哉

原薄

御製

わけいれはあしたの原の花薄ほにいつる秋そふかくなりゆく

蒔萱

中納言入道

我袖の老の涙をかるかやのおもひみたれて露そこほるゝ

蘭

侍従中納言

咲にけりたかぬきかけしふち袴きてこそとはめ匂ふかきりは

槿

前藤大納言

朝露のひぬまはかりなさかりにてまかきにかゝる朝顔の花

野虫

侍従中納言

つかふとてさかのゝ道はいそけとも聞すてらるゝ虫の聲かは

原虫

有光朝臣

夜さむなる野原のかせもふけぬとや有明月に虫のなくらん

徑虫

侍従中納言

よそなからさゝてやすきん秋のゝにわくれはたゆむ虫の聲哉

庵虫

前藤大納言

野原なる草の庵の夕露にたれにとへとかまつむしのなく

庭虫

中納言入道

老てすむ庭の淺茅生かれゝにとはれぬ宿のまつむしの聲

闇虫

六條前中納言

れやにいろ夜風もさむくなるまゝに枕になるゝきりゝす哉

聞虫

同

山かけはまつきゝそめぬゆふつく日さすや岡への松虫のこゑ

雲間初雁

前藤大納言

玉章の外にもなのかつはさには雲をもかけて雁はきにけり

山初雁

富小路前大納言

歸る山春そうかりし雁金のみやこにいそく道はかはらし

嶺初雁

中納言入道

霧のうちにまた玉章はみえれとも峯こえきたる秋の雁かれ

遠初雁

富小路前大納言

まちえてもさたかにはみす村雲のへたつるわちの雁の玉章

近初雁

道我法印

みこしちや遠き雲井の音信もたとてきぬる初かりの聲

初聞雁

爲冬

秋風の吹とせしまにさそはれて空にそきなく初雁の聲

初雁幽

源三位

おも影はそれとしもなし夕くれのみれとひこゆる初雁の聲

朝鹿

吉田前中納言

けさはまたいつくなかけとかくろらん猶妻こひの小男鹿の聲

夕鹿

左大辨宰相

小男鹿も妻を戀てやから衣日もゆふくれにれなはたつらん

夜鹿

富小路前大納言

妻こひのうらみをそへて眞葛原夜寒の風に鹿そなくなる

谷 鹿

爲親朝臣

おもひいる谷のかけはしかけてたにあはぬ妻戀に鹿やなく寛

岡 鹿

侍從中納言

鳴鹿のわか妻戀は難面てならひの岡に秋風そふく

海邊鹿

同

淡路嶋せと行舟のはやかたてきかはやしはし小男鹿の聲

田 鹿

富小路前大納言

もる人のまところむほとか秋の田の庵のあたりに鹿そなくなる

鶺鴒

六條前中納言

うれへある涙の露やかゝらん秋のうつらのころもての里

鳴

爲明朝臣

吳竹の伏見の澤にふす鳴の床もよさむに秋かせそふく

秋 田

中御門前大納言

遅くとき門田の稻葉打なひきはなみにかはる秋の夕風

秋 夕

中納言入道

此秋は老なそへてそなけきつるむかしよりうき夕くれの空

秋 雨

同

我はかりたれか身をしる袖はあるとはゝや秋の村雨の空

關 霧

同

關の戸はあけやしぬらん秋霧のなをたちこむるあふ坂の山

河 霧

同

なみかくるぬせきもみえず大ぬ川霧になかるゝ音はかりして

浦 霧

御 製

みすもあらすみもせぬ霧の絶まよりゆくゑさためぬ浦の舟人

駒 迎

中納言入道

今もかも絶せぬ物はとしことの秋のなかはの望月のこま

八月十五夜

祇 壽 丸

久かたのおなし雪井にすむ月も秋のもなかのひかりそひけり

夕 月

前藤大納言

またれしとまたくれはてぬ山のはをひかりうすくて出る月哉

夜 月

侍從中納言

いれかてに秋はこよひと大空のくもらぬことに月をみるかな

曉 月

有光朝臣

空はまた霧のみふかくたちこめてかすかにのこる有明の月

山 月

前藤大納言

しはしなを嶺をはいてゝしけりあふ松をそこえぬ秋のよの月

嶺 月

六條前中納言

いとゝなを雪にひかりそさえまさるふしのれ出る秋のよの月

谷 月

光 吉

流行なとはのこりてすむ月の影のみこほる谷川の水

柚 月

同

月のすむ泉のそまの宮木をもくもらぬ御代のためしにそひく

岡 月

爲定朝臣

れてあかす人やなからん水くきの岡のやかたの秋の夜の月

杜 月

中御門前大納言

身をしれはかたふく影そあはれなる老その森の月をみるにも

野 月

中納言入道

すみれつみし春を忘れて秋のよも野をなつかしみやとる月哉

原 月

同

秋のよは小野のしの原をく露にあまりてやとる月の影哉

關月 御製

昔よりすまの關守せきとめて秋は月夜のなかりき也けり

徑月 道我法印

わけせめし小野の故道いまも猶たとらぬばかりすめる月哉

橋月 中御門前大納言

しなのなる木曾路の橋のあやうきも月はやすくや澄わたる覽

水邊月 爲明朝臣

しけりあふ秋の野中のわすれ水たえ／＼みえてやとる月かけ

池月 侍從中納言

よとゝもに影もくもらぬ大澤の池こそ月のかゝみなりけれ

澤月 中御門前大納言

秋風やみかきそふらん廣澤の池の玉もにやとる月かけ

沼月 侍從中納言

はるゝ夜は岩かき沼の秋の月底もへたてぬかけやみゆらん

江月 前藤大納言

秋の夜はひかりもきよく住の江に月をうつして松風を吹

瀧月 忠守朝臣

白玉のかすさへみえてかめの尾の瀧津岩れにすめる月かけ

河月 侍從中納言

落瀧津よものゝ河のはやくしもあけぬよのまの月そやとれる

湊月 同

あかしてもいてこそやられ湊舟波まの月の夜はのうきれに

湖月 爲親朝臣

さゝ波やにほてる浦の秋風にうき雲はれて月そさやけき

浦月 御製

明石がた猶たつれみん秋のよのこと浦にすむ月もかくやと

濱月 侍從中納言

かす／＼によのまの月や照すらん八百日ゆくてふ濱の眞砂な

磯月 御製

浦風にあら磯波のくたけつゝ玉ちる月のかけそさためぬ

汀月 忠守朝臣

浦風に影もさためす白波のよするなきさの秋のよの月

嶋月 源三位

鹽風に夕霧はれてみほか崎松原となくすめる月かな

嶋月 六條前中納言

くもりなき蓬か嶋の秋の月老せぬかけは君のみそみん

瀉月 爲定朝臣

難波かたみちくるほといそかれてしほひに遠き月の影かな

泊月 源三位

まところまで波のまくらに明石かた鹽瀬くまなき月をみる哉

波月 爲明朝臣

彥星の逢瀬はしらす天川このわたりには月そなかるゝ

田月 富小路前大納言

あかすもる小田のかり庵の稻庭露しく床のふくる月影

都月 同

もろともにひかりなそへよ君もすむ花のみやこの秋のよの月

禁中月 爲定朝臣

なへてよにあまれき影と成にけりくもらすてらす雲の上の月

社頭月 中御門前大納言

君かよをさしてそいのる三笠山月に千年の秋をちきりて

古寺月 道我法印

住なるゝ我古寺の昔までこゝろにうかふ秋のよの月

古郷月 吉田前中納言

七よへて又かへりこし故郷の月にむかしのあととよとふらん

村月 同

河上のゆつのはの村の秋の夜は波まなかけて月やすむらん

里月 中納言入道

月をみてつもりし老にこりはてゝ桂の里も住うかれにき

山家月 御製

秋をへて月もいく夜かすみにけんわれもふりぬる山のおく哉

庵月 爲冬

むすひなく柴の庵のしはしたに月みぬよはゝえやはすまれん

庭月 左大辨宰相

色かはる庭の淺茅生秋更て夜寒の月そ霜とみえける

井月 同

山の井のむすひし水に影みればあやにくにすむ秋のよの月

閨月 吉田前中納言

山里のれやの板まはあれぬとや心のまゝに月そもりくる

隣月 爲明朝臣

へたてこし宿ともみえぬあれまくにおなしまかきと月や澄凜

閑居月 忠守朝臣

きゝわひぬ夜寒の月の影ながら音さへすめる庭の松風

船月 富小路前中納言

入かたにとまりやとはん清見瀉月の出しほに出る舟人

惜月 同

秋をへてかたふく影のかはらずは我をもしたへ山のはの月

里擣衣 前藤大納言

きけはまた音を絶せぬ誰里か夜さむの衣うちまさるらん

聞擣衣 中御門前大納言

衣うつをとは時しもわかれとも老のれ覺はあはれにそきく

遠擣衣 御製

里人は打もたゆまぬさ衣の絶まはかせそさはさりける

秋夜 前藤大納言

秋はたゝれ覺の後も明やらず我ためはかりななき夜半哉

野分 同

あたしのゝ千種なからの花の色は野分の風に露も殘らぬ

葛 同

露なから色かはるより秋風の吹をうらむる野への葛はら

栽菊 六條前中納言

幾秋も植てちきりやむすはましときしる露の玉の村さく

菊露 御製

ちきりなく露も千年につもりてや老せぬ菊の淵となるらん

尋紅葉 同

はるかなる嶺のもみちのかくれれば尋ねる道も迷はさりけり

初紅葉 六條前中納言

さかの山西こそ秋と露やまつ初しほそむるもみちならん

山紅葉 中御門前大納言

もみち葉の千入のうへを立田山いかにそめんと猶しくらん

岡紅葉 計里丸

夕日さす岡へのもみち染はて、遠さかりゆく初時雨かな

杜紅葉

爲定朝臣

いつよりかしくれそめけん神なひの杜の梢の色まさりゆく

河紅葉

左大辨宰相

大井川昔のあとを思ひいて、もみちやいまも御幸まつらん

松間紅葉

爲冬

立ならふ松のみとりのつれなさもまさる紅葉の色にこそしれ

雨後紅葉

富小路前大納言

かつはる、日影にみれば村時雨そめける木々の色そわかれぬ

紅葉映日

吉田前中納言

時のまも移ろふ色のふかき哉はれて入日のみれのもみちは

紅葉如錦

侍從中納言

もみち葉は立田の川の水のあやに重れてなれるにしき也けり

暮秋雲

同

月はかつのころもみえぬ村雲にしぐれていと、秋やくれなん

暮秋霜

富小路前中納言

蘆かきのかれ葉は冬もちかしとや秋のとなりとをける霜哉

九月盡曉

御製

おしめとも今つきぬなり曉のかねをかきりの秋のわかれち

群集點三十首

爲世

冬百首

初冬曉

前藤大納言

吹おろす峯のあらしの音までもれ覺はけしく冬はきにけり

初冬嵐

同

小倉山けさ音たかく松に吹みれのあらしも冬をしりけり

初時雨

爲冬

晴くもるほとたにみえず初時雨ふりあへぬまに冬はきにけり

時雨雲

源三位

時雨つゝ夕日はもりて山のはなたえくめくる雲のかけかな

風前時雨

侍從中納言

山たかみ空にのみして吹風のめにみえぬかたにゆくしけれ哉

山時雨

前藤大納言

神無月よそなる雲もやかてまた山端こえてふるしけれかな

嶺時雨

同

あらしふくみれのうき雲とにかくに立もさためする時雨哉

杜時雨

御製

そめわたすしのたの森の夕時雨千枝もちしほの色そまさらん

關時雨

中御門前大納言

清見瀉なみの關守ひまはあれと猶袖ぬらす夕しけれかな

里時雨

中納言入道

立よらんかさまの里の近ければしくる、雲のはれままつほと

閨時雨

富小路前大納言

れ覺とふ間の板まの村時雨月影ならてもるもいとはず

時雨過

六條前中納言

さそはる、涙は袖に残れるにはやくも過るむらしくれ哉

曉落葉

源三位

風にちる木のはより猶曉のれ覺にもろき我なみたかな

夕落葉

六條前中納言

夕されは又さそひゆくあらし哉人ははらはぬけさの木のはな

夜落葉

吉田前中納言

山里にさそふあらしの音たて、木のはふるよは夢もむすはず

落葉隨風

左大辨宰相

もろくちるもみちなよに吹たて、風のまゝなる村時雨哉

落葉混雨

侍從中納言

そめなれし杜の木のはに神無月ちれとふりそふむら時雨哉

谷落葉

爲定朝臣

谷ふかき妻木の道やうつむらん朝夕風にちるもみちかな

路落葉

富小路前中納言

梢をはさそふ嵐も山路まではらはてつもる木々のもみちは

河落葉

爲定朝臣

立田川わたらぬころとなりはて、紅葉はなかる瀬々のしら波

橋落葉

前藤大納言

ちりかゝる谷のかけはしうつもれて木の葉の上をわたる山人

庭落葉

富小路前大納言

梢にそ冬はきにけるもみちゝる庭のさかりを秋とみるまで

野霜

忠守朝臣

かれのこる野への草葉もなきものなあかすや霜の猶結ふらん

田霜

中納言入道

秋はてし蒔田のくろになく霜のたゝいたつらに消ぬへき身を

庭霜

御製

庭のおもに有明の月の白妙に残るとみえてをける霜かな

草霜

彈正親王

山里にわけし人めはかれはて、霜のみむすふみちのしは草

篠霜

侍從中納言

かれはてぬ物からなとて小篠原よのまの霜に色かはるらん

谷寒艸

彈正親王

山水の雲なからやこほるらんなく霜さむき谷のかけ草

杜寒草

中納言入道

この葉ちるいはせの杜はいつのまに下草かけて霜のなくらん

岡寒草

御製

水莖の岡の萩原秋すきてかれ葉にのこる冬のゆふかせ

野寒草

吉田前中納言

秋の色もはてなくみえし武蔵野の草はみながら霜枯にけり

原寒草

左大辨宰相

かれはつるあしたの原をきてみればのこる小篠の霜の一いろ

連寒蘆

御製

水鳥の青には冬もかれれともあし寒行池のおもかな

江寒蘆

同

なさわたる入江のたつの聲さえて蘆やそ冬のかけはみえける

水郷寒蘆

中納言入道

蘆そよく難波のみのつ浦風によるゝいとこほる波かな

氷初結

同

我庵の竹のかけ樋のよのほとにこほりそめてや音つれもせぬ

瀧氷

同

龜の尾の瀧のしら玉こほる也とけてや千代の數もかそへん

湖氷

侍從中納言

さゆる日はにほの浦波とちそへてこほりのひまをわたる舟人

田氷

爲明朝臣

春きてはまつせきわけし苗代の田中の井ともこほるころ哉

掛樋水

御製

きくまゝにかけひのなとも絶ぬ也夜のまにこほる谷川の水

杣冬月

同

光そふ月のかつらはかれもせてわかつ杣を猶さかふへき

河冬月

吉田前中納言

大井川さらてもきよき月影を冬はこほりや猶みかくらん

冬訝月

御製

月影も更行まゝに霜そなくさゆるは冬のなりひなれとも

豐明節會

中納言入道

乙女子か袖ふることのわすれぬは豐のあかりのむかし也けり

寒夜千鳥

御製

夜を寒みさほの山風さえまさり河瀬のなみに千鳥鳴也

磯千鳥

有光朝臣

更行はやとるもさむき月影を友とや磯にちとりなくらん

渡千鳥

光吉

泉川わたりを遠み月さえて氷のうへにちとりなくなり

河千鳥

爲定朝臣

立波のまなくもなくか友千鳥さほの河瀬のさゆる霜夜に

浦千鳥

六條前中納言

つかへこし跡に残りて浦千鳥あるかひもなきれをのみそなく

曉水鳥

爲定朝臣

影やとす有明の月を池水のうきれこほると鴨やなくらん

池水鳥

侍從中納言

池水につかはぬ鶯はれぬなはのくるよもなしとれをや鳴らん

江水鳥

爲明朝臣

わひつゝはつかはぬ友と頼むらしおなし入江の鶯のひとりね

尋網代

道我法印

立よりていさみにゆかんものゝふの八十氏河のせゝの網代木

夜網代

中納言入道

袖ぬれてあしろにひなのよろゝは宇治の橋姫契りまつらん

朝霰

左大辨宰相
富小路大納言

いつこより霰ふるらんかきくもる朝けの空は雪けなからに

夜霰

左大辨宰相
富小路前大納言

宵のまはしくれてすくる聞のうへにまたなとかへてふる霰哉

竹霰

御製

訝る夜のれ覺のとこになとつれて竹の葉そよきふるあられ哉

篠霰

同

道のへのしのゝ小篠に降あられ一むらすきて玉をみたるゝ

屋上霰

御製

板ひさし竹の柱のかりの世にうちおとろけとふるあられ哉

初雪

同

冬もきぬさひしさまさる苔の庭はたれにふれるけさの初雪

山雪

富小路前大納言

あらし吹末の松山いくかへりくたけてこゆる雪のしらなみ

嶺雪

爲定朝臣

よそなからわくともわかし嶺たかみ雲もひとつにつもる白雪

谷雪

富小路前中納言

山人のつま木の道もあとたえて雪にあやうき谷のかけはし

杣雪

彈正親王

みわ川や消てなかるゝ白雪はくたす杣木にふりやつむらん

杜雪

爲定朝臣

降雪のかさなる色も白妙の袖とやみえんころもてのもり

野雪

富小路前大納言

ふる雪に道ふみまよふかち人のあともはてなきむさしの、原

關雪

前藤大納言

ふかくのみつもる關路^{わひい}をわけかれて雪に心と、まるたひ人

徑雪

同

雪ふかき野原の道もさきにたつ人のあとにそまよはさりける

湖雪

侍從中納言

ひらの海や氷も波もうつもれて降そふ雪に山かせそふく

浦雪

六條前中納言

浦遠くあまの戸明てなかむれは雪降にけり淡路しま山

濱雪

侍從中納言

降雪はつもりにけりなすみよしのいてみのはまの冬の明ほの

嶋雪

爲親朝臣

みわたせば浦のはつ嶋はつかにも雪より外の色そのくらぬ

都雪

前藤大納言

きのふまで外山はかりにふるとみし雪そ都にけふつもりける

禁中雪

彈正親王

九重の梢の雪をたちなれしみはしの花のかけかとそみる

社頭雪

富小路前中納言

ふりにける都の北野わきてしも雪まや神のあとをたれけん

古寺雪

經季

鐘の音やしるへなるらん初瀬山ひはらもみえずつもる白雪

故郷雪

爲親朝臣

咲花の面影のこす白雪をとほぬもつらし志賀の故里
中御門前大納言

里雪

通ひこし家路もみえず白妙につゝきの里の雪の明ほの
中御門前大納言

山家雪

ふりつみてこ山の道の絶しよりつま木にたのむ松の雪おれ
御製

田家雪

雪ふれは門田の稻もかりにしを又くもをなす有明の空

閑居雪

同

山里の雪のうちこそしつかなれとふへき人もあらしと思へは

松雪

同

消なくに又降つもる松の雪かゝれる枝をさらにおれふす

竹雪

同

あとたえてまかきの山もうつもれぬ音さへさひし竹の雪折

杉雪

同

三輪の山杉のしろしもなかりけりみとりをうつむ雪の白ゆふ

狩場風

爲明朝臣

夕くれは淀の河かせ身にしめてかたのゝを野をかへるかり人

夕鷹狩

中納言入道

いくつかれ空とる鷹のおち草もみえずなりぬる野への夕暮

野鷹狩

六條前中納言

はし鷹のこゑにかゝりてたつ鳥のおち草なひく野への夕暮

炭竈煙

前藤大納言

冬寒みぢる日を猶すみかまの煙は空に立まさりけり

遠炭竈

中御門前大納言

とはゝやなをのゝすみかまをのつから通ひし道は雪深くとも

爐火

爲明朝臣

身の春なされてもちえは埋火の埋もれはつる名をはのこさし

神樂

爲親朝臣

白妙の霜をかされてさゆる夜にあか星うたふ雲のうへ人

佛名

中納言入道

つくりける罪も残らしけふしはや三世の佛の御名をとなへて

年内早梅

中御門前大納言

難波人蘆火たくやの雪のうちに春やなそしと匂ふ梅かえ

山家歳暮

中納言入道

たかためかあけなん年を松の戸に春しらぬ身は住かひもなし

閑居歳暮

同

おしみえぬ今日の暮こそしらぬれ八十の年を送りむかへて

老後歳暮

前藤大納言

哀なり昔にもすのとかにて老てそ年のくればはいそかぬ

惜歳暮

吉田前中納言

四十あまりつもれる年のいたつらに近つく老に春もまたれす

路歳暮

御製

世中よいそくは年のならひにて行ともしらぬ老らくの道

河歳暮

富小路前大納言

世をわたる人こそいそけ早瀬川はやくなかるゝ水のとし波

除夜

中納言入道

としははやふくれ竹と思ふにも一夜ばかりに惜むかひなし

戀百二十首

初戀

光吉

こひそむる初山あるの下衣したの心をしる人そなき

忍戀

爲明朝臣

いとせめてくるしきものは君にさへもらさしとする涙也けり

不見戀

御製

吹風のなとにはきけといたつらにめにみぬ中に年そへにける

見戀

御製

しられしな思ふ心はわたのそこみるめにやかてゆるゝ袖とは

不聞戀

有光朝臣

をのつからつてに通ひし言の葉のつらかりし世そ今は戀しき

聞戀

侍從中納言

かけふかき麓のかねのなとなれや聞よりやかてくらす心は

詫戀

六條前中納言

戀しなはまよはん闇のはてもうしたゝ此まゝにとはゝ答へよ

尋戀

侍從中納言

こたへしな杉の下陰ふみまよひ教の道にゆきかへるとも

祈戀

侍從中納言

わればかり祈そかくる神垣にひくしめ繩のなかきちきりを

誓戀

同

戀しなんことたにせめておしき世をあたにも人の誓ひける哉

契戀

彈正親王

同し世にかはるをみんなもつられれば契しまゝに戀やしなまし

語戀

爲冬

いかばかりあひみんなはを重れてか我むつことの限しられん

頼戀

前藤中納言

いさやまたともに心のかよはれは我はたのめと人はたのまし

不憑戀

吉田前中納言

僞のいくゆふくれになりぬらんわれもたのまぬ心とをしれ

思煩戀

前藤大納言

いつかたに思ひ定めてたのまゝしこの夕暮のまこといつはり

僞戀

侍從中納言

あたにわかたのみける身はつらからてたか僞を猶たのむらん

疑戀

爲冬

かれてより人の心もしらぬよにちきればとてもいかゝ頼まん

馴戀

富小路前大納言

なるゝは厭はぬ物をみても又みまゝほしさの後はしらねと

不逢戀

爲明朝臣

憂身にはまたきなき名もよしやさはそのたに中の契と思はん

待戀

御製

夕暮をなになけきけんまつよはの更行空は猶そかなしき

不來戀

中御門前大納言

蜚のすむ里とはきけと興津波たちよるまでもなき契り哉

逢戀

富小路前大納言

こよひたにいかで忘れんあふ事のあるにつけてもつらき別な

不留戀

中納言入道

とゝまらぬならひもうしや思ひ川流れあふせの又もなければ

別戀

爲定朝臣

秋をたにまたてそやかてうらみつるうきわかれちの葛の下風

逢不遇戀

爲明朝臣

わけなれしならひそつらき今更に行てはかへる道のさゝはら

欲顯戀

爲親朝臣

朽ぬへき袖にまかせてすくすかな今は心にあまるなみたわ

顯戀

爲明朝臣

たへてしもつゝみはてしと歎ても昨日はみえし袖の色かは

疎戀

六條前中納言

つれなさを馴てもいはゝいたつらに憂年月はよそにつもらし

切戀

富小路前中納言

戀しなん後そうからん後の世と契りてかはる人のつらさは

驚戀

前藤大納言

きゝてまた人も哀といふばかりおとろかさばや萩の上かせ

増戀

富小路前大納言

人までもうしとはいはし數ならぬみには數そふ思ひなりとも

變戀

侍從中納言

わすれ行心とまてはきかしはやいひしはかはる契りなりけり

隱戀

爲親朝臣

おなし世に猶なからへてあるとたにしられぬ人ななに忍ふ寛

爭戀

侍從中納言

ちきらずと聞にそたれも迷はまし忘れぬへき言のはならは

厭戀

御製

わすらるゝ身を浮雲のありはてゝなきたる空に眺めわひつゝ

悔戀

源三位

契りけん末もくやしき中そとはいはぬ物から人そつれなき

春戀

侍從中納言

人しれぬ谷の鶯うくてなをかすめる中にねをのみそなく

夏戀

源三位

逢ことはけに夢なれやはかなくもまた宵ながら明るわかれち

秋戀

富小路前中納言

しめて猶すゝるに人のまたるゝや秋の夕のこゝろなるらん

冬戀

高小路前中納言
源三位

とけてれぬ契りもつらし埋火のあたりもこほる霜のさむしろ

曉戀

前藤大納言

ありし世につらしときゝし鳥の音そあはてわかれの曉もうし

朝戀

御製

袖になく露をは秋と思ひしにあくるあしたのなみた也けり

晝戀

爲親朝臣

物思ふ涙の露をゝきそへてひるまもしらすぬるゝ袖かな

夕戀

六條前中納言

いかにせんあたにたのめてまつ人のこてもやと思ふ夕暮の空

夜戀

前藤大納言

夜半ことに思ひねにみる夢にたに心かよはてあかす中哉

老戀

中納言入道

今はよも逢にもかへしいたつらにおしまてすてん老の命は

幼戀

有光朝臣

つらくとも猶や心にかけてましふりわけかみの姿ならすは

遠戀

前藤大納言

一筋にたのみこそせめはるゝともろこしまても心かよはゝ

近戀

爲明朝臣

かくはかりまちかき申を蘆かきのへたてぬ中のちきりとも哉

隔戀

吉田前中納言

蘆かきは荒ゆくひまもありぬへしつらき心そうきへたてなる

旅戀

富小路前大納言

戀しきはなへて都を旅衣かへさは人のあやしとやみん

思戀

同

あちきなく人を思ひのいかなれば心ひとつに身をこかすらん

片思

爲定朝臣

心かへする世なりともかくはかりわれをは人のえやは思はん

夢戀

六條前中納言

今も猶さめてうつゝに悲しきは心にのこる夢のおもかけ

稀戀

吉田前中納言

いかなれば七月のけふと契られと逢夜のおなし恨みなるらん

舊戀

彈正親王

今更におとろかすともいかならんあひみしことの昔かたりは

久戀

中御門前大納言

年ふりて波の下なる濱びさきくちぬる袖はとふ人もなし

絶戀

侍従中納言

池水の汀の波のあさ氷かへらぬ中にむすほゝれつゝ

忘戀

左大辨宰相

いかなればおなし軒端に生る草の人の爲なるたれとなりけん

恨戀

爲明朝臣

ひたすらに恨てもまたいかゝせんつらき限のなからましかは

寄大戀

祇壽丸

夕くれのうはの空なる思ひこそ我身ながらも行衛しられね

寄日戀

侍従中納言

朝日影さしてもしらしくるとあくとはれぬ思ひにくたく心は

寄月戀

中納言入道

思ふともこふとも人につけなくにまつしりにける袖の月かけ

寄風戀

御製

色かはる人の心になく露の身を秋風にちるなみたかな

寄雲戀

中納言入道

よしさらは夕の雲のあともなくおもひ絶なほものはおもはし

寄煙戀

中御門前大納言

ちきりきなわれも忘れし時しらぬふしの煙はたゝすなるとも

寄露戀

吉田前中納言

消やらぬ露のかことのなかりせば何をたのみの命ならまし

寄雨戀

中納言入道

あひみても思ふ心のはれやらて身をしろ袖の雨をかひなき

寄霜戀

中納言入道

よしさらはわかれしまゝの秋はてぬ心なくへきみち芝の霜

寄雪戀

前藤大納言

あはれとは人はおもはしいたつらに春ふる雪の思ひきゆとも

寄山戀

中納言入道

あちきなや人に心をつくは山はやまのしけき道にまよは

寄谷戀

左大辨宰相

あさき瀬のまたいつかたにせかるらんとたえ勝なる谷川の水

寄杜戀

以通朝臣

大あらきのもりにし袖の露よりや下草かけて色にいつらん

寄野戀

富小路前中納言

よしなしやあたの大野の草枕たゝかりそめにむすふ契りは

寄關戀

御製

しのひつゝゆるさぬ中のへたてにて人をなこそその關守そうき

寄橋戀

左大辨宰相

かつらきの神もうけすや成ぬらんくめちの橋のなかに絶ぬる

寄水戀

侍從中納言

ともすれば岩まつたひに行水のとゝこほりてもぬるゝ袖かな

寄江戀

六條前中納言

いたつらにあた波かけて逢事はいなさほそ江の恨みとそなる

寄川戀

中納言入道

いたつらになつなはかりはかひもなし憂身を川のせゝの白波

寄海戀

彈正親王

契りても心をは猶おくの海やふかくは人なたのむものから

寄忍草戀

同

をのつから忘るゝことのたれもかなしのふ計は草のなもうし

寄忘草戀

富小路前大納言

うき人の心にいかゝまかすへきわするゝ草のたればありとも

寄葛戀

道我法印

つれもなき人の契りも葛かつら絶にし日より秋かせそふく

寄蕨戀

侍從中納言

浮草のうきたる中と思ふにはいふにもたへぬれこそなかるれ

寄海松戀

中御門前大納言

かひなしな袖のみ濡て蜚のかるみるをあふにて年はへぬれと

寄松戀

侍從中納言

逢ことをまつとしならは言の葉もかはらぬなかの契りとも哉

寄杉戀

同

よそながら古川野へに立杉もまたあひみしと契りやはせし

寄桐戀

御製

契りしもたかはさらまし桐の葉をきさみし人の有世なりせば

寄鹽木戀

中納言入道

いつまてか蜚の鹽木のこりもせてからき思ひに袖ぬらすらん

寄埋木戀

御製

人しれぬ谷のうもれ木年ふりて心ひくともいかてしらせん

寄雁戀

計里丸

戀わふるれ覺の床もいとゝまた涙數そふ初かりのこゝ点

寄鳩戀

御製

我中のにほの通ひちそれならは池のこゝろも下にたのまん

寄鶯戀

同

つらからしうらやましくもなし鳥の羽をはかはせる契也せば

寄山鳥戀

爲明朝臣

かひなしや遠山鳥のよそにのみしられぬ中にねをはなくとも

寄馬戀

六條前中納言

黒かりし駒もつかるゝ山吹のいはぬ色こそくるしかりけれ

寄猪戀

爲親朝臣

我をたにまつときかは尋ねみんふす猪の床のすまゐなり共

寄鹿戀

經季

なのつから物を思はぬゆふへたにたへてやきゝし小男鹿の聲

寄螢戀

左大辨宰相

色みえてむせふ思ひを人とはゝもゆる螢をこれとこたへん

寄螢戀

爲定朝臣

しられしな親のかふこのひきまゆの心にこむる思ひありとは

寄我柄戀

源三位

はかなくも我から人を戀そめて藻にすむ虫を哀とぞ思ふ

寄玉戀

道我法印

いく度か涙の玉のなゝよはみ消かへりてはものおもふらん

寄鏡戀

六條前中納言

山鳥のはつ尾にかくるますかゝみをろかに人をこひん物かは

寄匣戀

光吉

なのつから逢夜もあらは玉くしけ明ゆく空も歎かれなまし

寄蠟戀

忠守朝臣

せきあへぬ袖の涙の玉かつらかけてもしらしたきつこゝろを

寄本結戀

爲定朝臣

よるゝは我もとゆひの霜ならて結びもをかね契りをそまつ

寄枕戀

前藤大納言

はかなくもよるはすからにおきゐつゝ枕たにせて人を戀ける

寄席戀

彈正親王

なのつから思ひたにやれ戀わひてひとり片しく床のさむしろ

寄衣戀

富小路前中納言

うき中をしのふのみたれ限りなく誰身にふれし衣なるらん

寄帶戀

以通朝臣

むすほゝれ猶やいのらん常陸帶うちとけかぬる人のこゝろを

寄繪戀

富小路前中納言

我思ふ人なかたみにしのふともうきおも影をうつしとゝめし

寄硯戀

道我法印

水莖のたよりとみても石硯かたきちきりのはてそかなしき

寄筆戀

侍従中納言

徒にかきもつくさぬ水くきはあとをつけてもかひやなからん

寄笛戀

前藤大納言

あちきなくいさ現れて笛竹のれにたてゝたにさそときかれん

寄弓戀

中御門前大納言

いかてかく思ひそめけん梓弓我心ともひきかへさはや

寄箭戀

中納言入道

梓弓ひきもとむへき別れちをやといひしにもかへらさるらん

寄扇戀

侍從中納言

我中は秋にあふきのかせなれやうきみた人のならずよもなき

寄葭麻戀

爲定朝臣

大ぬさのよるせあらはとまちしまにひくて數多の數やそふ覽

寄舟戀

前藤大納言

いたつらにあはての浦によるへなき我身そ今はあまのすて舟

寄網戀

侍從中納言

ひくかたはありとしられてあみ繩のめにたに人をかけぬ比哉

寄鐘戀

同

あけぬとていとひしものを獨寐にきくとしもなき鐘のをと哉

已上三十四首 此内清輝朝臣九首 無案點十九首 爲世

雜百二十首

名所山

御製

春ことに匂ふさくらに蘆かきのよしのゝ山なちかくみるかな

名所岡

忠守朝臣

いく年か猶もさかへん君か世に影をならひの岡の松かえ

名所柚

源三位

かしこきは泉の柚木ひけと猶つきぬためしの御代にそ有ける

名所杜

侍從中納言

ふりにけるしのたの森の恵あれば千枝にちえそふ時やきぬ覽

名所野

同

我道のためしとそみるむさしのや猶ゆくすゑの限りなければ

名所原 六條前中納言

東路に通ひし道はわすられて今も心にうきしまかはら

名所路

彈正親王

今も猶みゆきはたえしさかの山君かすみかの千代のふる道

名所橋

御製

老らくの昔ながらの身はふりて世にわたらぬはしつか也けり

名所池

同

くみてしる水の心やふかゝらんちかくなれたる大澤のいけ

名所澤

光吉

廣澤の流れをうけて法の水萬代までも君そすむへき

名所沼

侍從中納言

花かつみかつみるかたもなかりけり淺香の沼のあさき心は

名所江

爲定朝臣

さらぬたにみたれやすきを難波江の蘆の末葉に浦風そ吹

名所瀧

富小路前中納言

雨はるゝむかひの山のちかければとなせの瀧のをとを聞ゆる

名所河

御製

駒とめてしはしすゝまんうちわたすひのくま川の水のしら波

名所瀨

光吉

世々ふとも流はたえし松浦川七瀬のよとも末をふかめて

名所湊

源三位

世をわたる道はこれまで哀也ゆらのみなとをいつる舟人

名所海

經季

よさの海や松のあなたは雲はれて夕日にすける天の橋立

名所湖

爲明朝臣

さ、波やしかのから崎かみさひて千代ふる松にあらしく也

名所浦

六條前中納言

わきも子かふなのりしつゝまの、浦の入江の波に小菅かる覽

名所濱

同

行とまるやとはいづくそ山越て道もとをつのはまの眞砂地

名所磯

前藤大納言

旅衣波のたよりに東路の大磯小磯ともにみしかな

名所汀

左大辨宰相

よる波の音はかはらすからさきの渚の松はとしへぬれとも

名所崎

爲定朝臣

きの國やゆらのみ崎に日かすへて數かきりなく玉ひろふ也

名所嶋

富小路前大納言

かこの嶋よせくる波のさゆる日は日影をつたふたつのもる聲

名所瀉

六條前中納言

うらみしよ月は有明になるみ瀉しほのみちひを空にしるとは

名所田

富小路前大納言

ゆたかなる年そ重ねん雲をなすとは田のおものゆくすゑの秋

名所村

爲親朝臣

すみのほる光をそへよ名にたつる玉井の村のやまのはの月

名所市

光吉

みわの市我道たつるしるしあらは扱も賤しき名をやかふへき

名所都

侍從中納言

さ、波やしかの都はふりぬれと昔にかへる御代にあふらん

名所津

有光朝臣

我君のめくきもひろきなけれ哉秋津の嶋の波の外まで

鷲中曉

侍從中納言

鳥の音もいそかれぬよそなかりける草の枕のかりれと思へは

鷲中朝

中納言入道

行末を猶こそいそけ旅の空朝ふむ駒のあしにまかせて

鷲中晝

左大辨宰相

今しはし夕影まちて山こえん清水すゝしきあふ坂の關

鷲中夕

中納言入道

そことなき里のしるへの夕煙たちもとまらぬ旅の空かな

鷲中夜

御製

みしかさも旅れはわかす夏引の手引の糸のよるそかなしき

鷲中嶺

同

行末もいくへ越なん岩れふみかさなる嶺のあとのしら雲

鷲中泊

左大辨宰相

うき枕波のとまりはかはれともおなし都にかよふゆめかな

鷲中里

中納言入道

けふいく日ゆくを限りに行暮て里をはわかぬ旅れしつらん

鷲中渡

道我法印

打わたすみつのわたりはよなこめて末は淀の、明ほの、そら

鷲中關

以通朝臣

故郷をしのふにつけて秋風のいと、身にしむしら河の關

鷲中情

前藤大納言

日數のみへたてゆくとも心をはみやこにかけてこゆる山みち

鷲中夢

同

思ひれの夢をたよりに草まぐらかりねにちかく都をそみる

鷲中思

中御門前大納言

したはる、我故郷のことつてはなきも都の人そまたる、

騷中涙

前藤大納言

遠さかる都を戀て旅衣袖にかゝるはなみたなりけり

騷中別

忠守朝臣

此ころは道ある御代に逢坂の關はゆきゝの人もまよはし

騷中枕

中御門前大納言

れられれは夢はさたかにみえもせて露社むすへ草のまくらに

騷中席

爲冬

草枕むすひかされて小薙にころもかたしきいくよかもねん

騷中衣

富小路前大納言

わけきても幾へになりぬ旅衣かさなる山の雲をたよりに

騷中船

同

こきとむる湊の舟のいまもまたしらぬとまりにかゝる夕なき

騷中鐘

御製

けふも又かさなる山を越くれて雲のそなる入あひのかれ

山家路

中御門前大納言

行歸り千代のふる道踏わけてつかふるさかの身とそなりぬる

山家橋

吉田前中納言

たれかまたわたしそめけん山里のあやうき道の谷の柴橋

山家水

彈正親王

龜の尾の山の岩れにせきとめて千代のかけみる庭の池水

山家庭

富小路前大納言

秋をへておとろかぬまで成にけりまかきになるゝさを鹿の聲

山家草

同

誰かまた山のかけ草おいねとも人にしられぬ身をかくすらん

山家苔

中御門前大納言

山里の岩れにむせるこけ薙たれいにしへをしきのふらん

山家木

侍従中納言

山陰はたつめる人もあらはこそ杉のしるしをみてもとひこめ

山家鳥

爲冬

さま／＼になきてそなるゝ鳥のれのきこえぬ山も有てふ物を

山家虫

同

秋もなをさひしとおもふ山里も身にしられぬるむしの聲哉

山家獸

御製

としふればふすゐの床もへたゝらてなれぬる山のおくの庵哉

山家春

中御門前大納言

我門の苗代水やまさるらん小田の蛙の聲しきるなり

山家夏

源三位

あくるより門田の早苗とりそめてくれ行までに猶いそくかな

山家秋

中納言入道

よたあきの田中の庵のありしとてかゝる處に身をすてぬる

山家冬

吉田前中納言

冬くれは田面のひつち霜とちて人なき庭に月そもりける

山家風

六條前中納言

今よりはあれにし庵やかこはまし稻葉かきわけ秋風そふく

山家雲

前藤大納言

庵むすふ田面のかせに吹しきていなはの雲そ立ものほらぬ

山家煙

中納言入道

あはれともけふりの末を人はみよ田つらの庵の心ほそさは

山家雨

計里丸

まはらなる小田のかりいほもる雨に涙をそへてぬる、袖かな

田家露

爲明朝臣

よもすから露もおきあて秋の田のいほもる袖をしほるころ哉

田家霜

侍從中納言

もるとせしかりほの庵もあとふりぬ田面の霜の冬の朝あけ

曉夢

中御門前大納言

曉はおとろきやすき時しもあれなそいにしへの夢にみゆらん

短夢

道我法印

さめやすきならひもかなしぬるかうちの夢計こそ慰みもすれ

夢驚

御製

むなしくて一夜の夢はおとろくなかき迷そさむるかたなき

寄風無常

光吉

風の音に秋とはかりはおとろけと夢のうちなる月日也けり

寄露無常

御製

あたしの、露はちりても又そをなく消てあひみぬ人そはかなき

夢中懷舊

富小路前大納言

夜とゝもにれてもねぬにもみる夢は心にかへるむかし也けり

懷舊淚

御製

老ぬれはもろき涙のくせとてやむかしなきけは袖ぬらすらん

獨懷舊

御製

わきてその戀しきことはなけれとも昔わすれぬひとりれの床

老後懷舊

源三位

むかしとて思ひ出もなき老かみに君かめくみを猶あふく哉

懷舊非一

中納言入道

身にすきし昔をいへは思ひ出の数にもすきてわれを老ぬる

寄月述懷

御製

なかつゝ老とやつもる秋ことに我身ひとつの月ならねとも

寄星述懷

富小路前大納言

君か代にあふ嬉しさをこよひわれ七夕つめにくらへてやみん

寄關述懷

同

きみか代に今相坂の關ならはきゝていそかん鳥のれもかな

寄瀨述懷

道我法印

さりともと深くそたのむ石清水うきせに沈む身とはなきしな

寄木述懷

吉田前中納言

年月はよそにみてのみ過しかと昨日の木こそ身のたくひなれ

寄草述懷

左大辨宰相

ふみなるゝおとろの道の行末は神のめくみにまかせてそみる

寄鳥述懷

六條前中納言

いたつちに音をこそなめ飛鳥のあすかと迄も頼みなきみな

寄虫述懷

侍從中納言

あひにあへる時とはしるや松虫のまつにかひある御代の恵を

寄玉述懷

中御門前大納言

ふりまさる老の涙のたまゝもかはくましらぬわかたもと哉

寄鏡述懷

中納言入道

昔にはうつろひかはる世なれともかゝみの影そ我身なりける

伊勢

爲明朝臣

君か代にあふく内外の宮柱千たひかへても猶やまもらん

石清水

富小路前中納言

君すめはすむとこそきけ石清水神も昔の世をやまぢりん

賀茂

中御門前大納言

思ひ出るかものみあれのもろかつら昔をかけてぬる、袖かな

平野

御製

今も猶民のかまとの煙までまもりそすらん 我國のため

春日

中御門前大納言

君か代に契りありてそ春日山しかもさかへん北のふし浪

大原野

吉田前中納言

君か代なさをまもららん大原やたしき道を神はうけつゝ

住吉

前藤大納言

住吉の神しまらは敷嶋やたしき道は今もかはらし

日吉

富小路前大納言

雲の上をてらす日吉のかげなればつかふる身をもさそ守る覽

北野

爲定朝臣

跡たる、神の北野のみしめ縄なかき世かけて君まもららん

玉津嶋

侍從中納言

ことの葉にひかりなそへて玉津嶋神代なからの道てらすらん

不殺生戒

富小路前大納言

うら／＼のあまのうけ縄なかきよの後も苦しき物としらすや

不偷盜戒

爲定朝臣

里人の心もしらすかくとたにいはてはおらし井手の山ふき

不邪淫戒

源三位

逢まてとしゐても人なしたはすはくらき道には迷ひしもせし

不妄語戒

六條前中納言

なのつかまかひし雲も晴ぬれば嶺のさくらの偽そなき

不酤酒戒

侍從中納言

瀬にかはる道をはらし古のなさはたきの名をなかつとも

不説四衆過罪戒

道我法印

ことの葉をよそにもらすな吹風はよもの梢を猶さそふとも

不自讃毀他戒

同

我宿の一本はかりとおもふなよいつくもおなし花の匂ひな

不慳貪戒

道我法印

あかすみる庭の櫻の一枝をおるともいかゝ人におしまん

不瞋恚戒

御製

消れた、富士の煙の空にのみむれの思ひは跡もなきまで

不謗三寶戒

光吉

高野山なくなる鳥の聲までもみのりときけはあふき社せめ

寄天祝

左大辨宰相

岩戸あけし昔に今もかはらぬはおさまる御代の月日也けり

寄日祝

富小路前大納言

玉くしけはこやの山の朝日影つかへつゝ身をてらす世もかな

寄雨祝

侍從中納言

道しあれば日數のまゝに降雨のめくみやよもの海にみちなん

寄國祝

爲冬

いか計民のかまともさかふらん國ゆたかなる御代をまちえて

寄都祝

富小路前大納言

君にこそさかりはみゆれおさまれる花の都の萬代のはる

寄道祝

爲定朝臣

敷嶋の道さかへてそしられる君と神とのすてぬゝろは

寄松祝

富小路前大納言

君かためさかへこそませ龜の尾の岩れの松の干代をかされて

寄竹祝

六條前中納言

我君の萬代ふへき竹のよのはしになりてもつかへてしかな

寄鶴祝

光吉

西川や行幸のあとなかされても千世とそ契る鶴の毛衣

寄鶴祝

吉田前中納言

名にしおふ龜の尾山のかひありていく萬代も君のまに／＼

私云

已上十八首 此内清撰御點七首 御案點□□□□首 爲世

勅點分百五十九首。於ニ別御草子ニ被レ染ニ宸筆。其内五十二首有ニ御合點ニ清撰是也。依ニ書寫之煩。加ニ兩點一畢。

藤亞相點。已上百五十八首。本爲ニ墨點。勅點爲ニ墨點ニ之間以レ朱替レ之。

元亨三年七夕。於ニ龜山殿ニ有レ之。已一點始レ之。黃昏詠訖。秉燭以後春部被レ講。講師經季。及ニ半更ニ各退出。九日被レ下ニ短尺於藤大納言續ニ進之。十三四日。予陪ニ御前ニ清ニ書之。十六日爲ニ御使ニ持ニ向亞相亭。勅定云。續進之間被レ著レ名。不レ依ニ貴賤ニ可レ被ニ點進ニ之由被ニ仰下ニ云々。先レ是。勅點百五十九首。別有ニ御書寫。此内清撰御點五十二首也。彼御草子不レ可レ及ニ荒涼之披露。由。雖レ有ニ御沙汰。依レ有ニ披閱之煩。移ニ加勅點於此本。輒莫レ免ニ許外見ニ而已。

光吉

朱墨點正本無レ之。重以ニ類本ニ可ニ考付ニ也。

文安四年三月十七日書寫之ニ訖。

群書類從卷第百六十七

和歌部二十二百首一

堀川院御時百首和歌

稱太郎百首
康和年中

題

春二十首

立春	子日	霞	鶯	若菜
殘雪	梅	柳	早蕨	櫻
春雨	春駒	歸鴈	喚子鳥	苗代
堇菜	杜若	藤	歎冬	三月盡

夏十五首

更衣	卯花	葵	郭公	菖蒲
早苗	照射	五月雨	盧橘	螢
蚊遣火	蓮	冰室	泉	荒和稜

秋二十首

立秋	七夕	萩	女郎花	薄
蒹葭	蘭	萩	鴈	鹿
露	霧	槿花	駒迎	月

掃衣 虫 菊 紅葉 九月盡

作者

正二位行權大納言兼春宮大夫藤原朝臣公實卿
 正二位行權中納言大江朝臣匡房卿
 正二位行權中納言源朝臣國信卿
 參議正三位行右兵衛督源朝臣師賴卿
 從三位行修理大夫藤原朝臣顯季卿
 散位正四位下源朝臣顯仲
 正四位下行越前守兼中宮權大進藤原朝臣仲實
 從四位上行木工頭源朝臣俊賴
 從四位上行右近權少將兼備中權介源朝臣師時
 散位從四位下藤原朝臣顯仲
 散位從五位上前左衛門佐藤原朝臣基俊
 權少僧都永緣
 阿闍利傳燈大法師位隆源
 前齋院肥後
 高倉一宮紀伊
 前齋院河內巨金花

春二十首

立春

春宮大夫公實

春たちて梢にさえぬ白雪はまたきにさける花かとそみる

權中納言匡房

氷ぬし志賀の唐崎打とけてさゝ浪よするはるかそふく

權中納言國信

みむる山谷にや春のたちぬらん雪の下水いはたしくなり

右兵衛督師賴

吉野山つもれる雪のきえゆくはまたふるとしに春やくらん

修理大夫顯季

うちなひき春はきにけり山川の岩まのこほりけふやとくらん

源顯仲朝臣

春たつといはせもはてす朝またき風のけしきそまつ變りける

中宮權大進仲實

朝またきゆるけき風のけしきにて春たちきぬとしられぬる哉

木工頭俊賴

庭もせにひきつらなれるもろ人のたちゐるけふや千代の初春

左近權少將師時

いかになく八聲の鳥の一こゑにとしに年をはそふるなるらん

藤原顯仲朝臣

いつしかと明行空のかすめるはあまの戸よりや春はたつらん

藤原基俊

よしの山ふともみえず春のそら霞のころもたちてきたれば

權少僧都永綠

きのふまで雪ふる年とみしまゝに今朝は氷をはるかそふく

阿闍梨隆源

うちつけに春立きぬとみゆる哉きのふにかはるけふの景色は

肥後

つらゝぬし細谷川のとけゆけは水上よりや春はたつらん

紀伊

春たては大宮人はそれながらあらたまりてもめつらしき哉

河内

春のくる夜のまの風のいかなればけさふくにしも氷とくらん

子日

れのひして二葉の松を千代ながら君か宿にもうつしつる哉

春霞たちかくせとも姫小松ひくまの野へにわれはきにけり

生初るはつれの松をひきつればけふこそ千世のはしめ也けれ

子日しにいそく也けり君か代の千年をまつ春のはしめに

君か代も子日の松もけふよりは千代のためしに引んとそ思ふ

いつしかと子日の松は春の野にさながら霞たなひきにけり

玉掃春のはつれにたなりもち玉の緒ながくさかゆへらなり

いはひつゝけふしも松をひきつればはつれそ千世の始也ける

子日すとよろつの人のひきつればは千年をのへ小松也けり

今年生の二葉の松をひき植てけふより後の千代なかとそへん

野へにいて、子日の小松引つれば二葉に千代の影そこもれる

春日野の子日の小松ひきつれて神にそいのる君かちとせを

野へにひく初子の小松さらに植てけふを千年の始とおもはん

雷

みい

野へことにけふひきそふる小松原（うい）おひ行末そかきりしられぬ
君か代の千年のへに子日して松のよはひをかせつくる

春霞しかまのうらなこめつれはおほつかなしやあまの釣舟
わきもこか袖ふる山も春きてそ霞のころもたちまざりける
をしなへて春の霞のたつ時はかゝみの山もくもるなりけり
石上ふるき都も春くればかすみたなひくたかまとのやま
みわたせば春のけしきに也にけり霞たなひく櫻ゐの里
賤の男かしはかりみたる鳥屋の野にけそ霞は棚引にける
ほそ川のいはまのつらゝとちながら花その山の峯をかすめる
なみたてて松のしつえなくもてにて霞わたれるあまのはし立
春霞たちわたりつゝかひかれのさやにもみえぬ朝（またき）ほらけ哉
谷かくれまた雪さえぬみよしのゝおなし山へにたつ霞かな
まきもくのひはらの山の麓まで春の霞はたなひきにけり
みわの山たつれそゆかん春霞しるしの杉はたちなかくしそ
梓弓春のしるしにいつしかとまつ棚引はかすみなりけり
東路の木曾のかけ橋春くればまつ霞こそたちわたりけれ
み渡せば春の霞にこめられていつこなるらんみよしのゝ山
いつしかとあしたの原に棚ひけは霞そ春のはしめなりける

鶯

春くればいつれの谷の鶯も花の都にきつゝなくなり
谷ふかみきゝふるすてふ山里になをめつらしき鶯のこゑ
いつしかとこと郷人にことゝはんはつ鶯の聲はきくやと
あられふりまた冬こもる山里に春をしらする鶯の聲

鶯の聲につけてや眞金吹吉備のやま人春をしるらん
山里の草（うい）のときしにことよせて心ほそきはうくひすの聲
冬すみしふるすは雪にうつもれて谷の鶯春とつくなり
かすならぬ身をうくひすと思へ共なくは人の忍はさりけり
いつしかと谷の鶯なくなるは山よりこゆる春のしるしか

まきの葉にすかるたるひの春風に打とけてなく鶯の聲
夜をこめて鳴鶯の聲きけは嬉しく竹を植てける哉
花さかぬ常葉の山のやまに春をしらす鶯のこゑ
谷ふかみ人尋ねしはの庵になとなふものは鶯の聲
人めこそかすかなれとも山里はたえずそきなく鶯のこゑ
われならぬ人きくらめやめつらしき朝の原のうくひすの聲
山里に家ゐをせすは鶯のけさの初音をいかてきかまし

若菜

野へにいて、春ひつめともたまらぬはまた裏若き若な也けり
たはるてふ若なはたちぬ同じくは春ひつみても野へに社へめ
いくはくのいへつともなき若なゆへ野へに立出て日を暮す哉
旅人の道さまたけに摘ものはいく田の野への若な也けり
若な生る野をやしめまし今年より千年の春をつまんと思へは
みそれ降を野のあれ田にゑくつめは誰かはきせん菅のを笠を
春日野の雪けの澤に袖たれて君かためにと小芹をそ摘
春日野の雪を若なにつみそへてけふさへ袖のしほれぬる哉
老せずときゝし若なのなにめてゝ誰かはつまぬ春の野ことに
鶯のゐるあれたのくるにつむ芹も春は若なの數にやはあらぬ
春山のすくろなさをかきわけてつめる若なに沫雪そふる

さえ残る雪まをわけて春日野につめとたまらぬ若なをそ摘
春はかたはなぬきいれて賤の女か垣根のこななをつまぬ目をそき
春たちてけふは七日に春日野の若なはまたき二葉なりけり
さそはれとかなみにそみる若なつむ心は野へに通ひけりとも
つきもせずつむへき程を遙なる千代なしめてし野への若なは

殘雪

さえ残る朝日かくれのしら雪はこそのかたみのたえぬ也けり
道たゆといとひしものを山里にきゆるはおしきこそ雪哉
春日野の下もえわたる草の上につれなくみゆる春の沫雪
春山の木下陰にむらきゆる雪こそそのかたみ也けれ
山里のかきれに残る白雪は草のもゆるにきえやはつらん
珍しきてらゐかうへにはかひせぬ片葉か下のこそふる雪
立かへる春のしるしはかすみしく小初瀬山の雪のむらきえ
あら玉の春たつ風のしるけはまた初雪のこち社すれ
むれてくる大宮人のふる袖に春さへはれすかゝるあは雪
春きては花ともみよと片岡の松のうは葉にあは雪そふる
春の目のうらゝにてらす垣れには友まつ雪そきえかてにする
春風に谷の氷はとくれともきえ残りたるみれのしら雪
むらきえし雪もほかにみえなくにしりへの岡は猶を残れる
東風のまたうちとけてふかれはや雪きえやらぬみ山への里
春きては日數へぬれと岩かくれ残れる雪はきえかたきかな
けぬかうへに春さへ雪の猶ふれはまた崩やらぬ煮くの若なも
梅かえを袖なつかしみたなるとてうらふれてなく驚のこゑ

梅

匂ひもてわかはそわかん梅花それともみえぬ春のよの月
つゝらおふる垣れの梅をしるへにて尋てそくる春の山里
今よりは梅咲宿は心せんまたぬにきます人もありけり
梅花ふきすきてくる春風にたかふる袖とおとろかれぬ
おらすとも梅の匂ひに袖ふれてみつとはかりを人にしらせん
くれなゐの八重咲梅にふる雪は花のうはきとみゆる也けり
梅花色をはやみにかくせとも香はもれてくるものにそ有ける
梅花にほふ垣れの宿守は人よりさきに春をこそしれ
春の夜の月にまかへる梅花たゝ香はかりをしるへ也ける
くれなゐに匂はさりせは雪きえぬ軒端の梅をいかておらまし
梅花たなるたものしるきまでけき吹風に匂ふなるかな
梅かえをおりつる袖のうつりかにあやな無名の立ぬへき哉
なつかしく吹くる風はたかしめし垣れの梅の匂ひなるらむ
待人はなのつからきぬ我宿の梅の匂ひの色しこけれは
梅かゝの匂ふあたりは關路かは人とめれともゆきそやられぬ

柳

朝またきふきくる風にまかすればかたよりしける青柳の糸
さほひめの打たれかみの玉柳たゝ春風のけつるなりけり
春風にしたり柳のかたよりに君になひけは國をさかへん
さは川の岸のまにゝむれ立て風に波よる青柳の糸
さは山に柳の糸を染かけて心のまゝにかせそふきくる
わか宿の一本柳春くれは吹くる風にかつみたれけり
あさみとり春のすかたにさは姫はしたり柳のかつらしてけり
もかり舟ほつゝしめ縄心せよ川そひ柳風になみよる
四方山の花のにしきをぬひにとやこゝらよらん青柳の糸

つなてひく川そひ柳春くれば水とゝもにそかせになみよる
 春風になみよるいとゝみゆるかな川そひ柳水にひかれて
 青柳の糸はみとりのかみなれやみたれてけつる二月の風
 河そひの柳の糸は打はへて波よることのたえすも有哉
 青柳の糸はみとりのかみなれやふきくる風のけつりかほなる
 風ふけは枝うちなひく青柳のいとこそ春のくるしるしなれ
 青柳のみとりの糸はかはれとくる春ことにめつらしき哉

早 蕨

春日野の草はやくともみえなくに下もえわたる春のさわらひ
 外山には年あけに巖の上のたるひもとけてもゆるさわらひ
 春の田を事ありかほにかへせともおれる蕨はたはれたになし
 武蔵野はまたやかなくに春くればいそきもえ出る下わらひ哉
 紫の塵うちらはひ春の野にあさるわらひのものうけにして
 春山のすそ野にもゆるさわらひはみれの霞や煙なるらん
 ふりつみし雪の下草いつしかとやくとみしまにもゆる早蕨
 春くれと折人もなき早蕨はいつかおとろにならんとすらん
 雨ふれと猶もえまさるさわらひや春のやけのゝしるしなる寛
 春たては雪けの水やぬるからんまつもえいつる下わらひかな
 みやま木のかけのゝ下の下わらひもえいつれ共しる人そなき
 飛火野にいまもえいつる早蕨のいつおるばかりならんとす寛
 野へみれはまたやかなくに早蕨のおとろの下にもえ出にけり
 飛火野にもえ出にけるさわらひややくときゝてや人のおる寛
 またきにそつみにけるはるゝと今もえ出る野への早蕨
 武蔵野にことしはもえよ紫のわらひは草のゆかりなられと

櫻

宿ならて遠にさけとも櫻花ちるをはよそのものとやほみる
 山櫻ちゝに心のくたくるはちる花ことにそふにやあるらん
 花さけは嶺にやへたつ白雲のはるゝたえまやちれるなるらん
 木の下の方の苔のみとりもみえぬまで八重ちりしけるやま櫻哉
 櫻花匂ふにつけてものと思ふかせの心のうしろめたさに
 くれなゐに匂ふ櫻のひとしほはみそめつるよりあく時そなき
 花のちる木の下陰はなのつからそめぬ櫻の衣をそきる
 櫻花さきぬる時はみよしのゝ山のかひよりなみそこえける
 春風に霞の衣ほころひてぬひさへみゆる山さくらかな
 高砂の麓の里はさえなくに尾上の櫻雪とこそちれ
 春をへて花ちらましや奥山の風を櫻の心とおもはゝ
 花さかり櫻かさゝぬ人そなきものゝ心をしるもしらぬも
 春ことにおなし櫻の花なれとおしむ心の年にまされる
 山櫻匂ふさかりはしら雲のやへたつ嶺と人やみるらん
 たくひなくみゆるは春のあけほのに匂ふ櫻の花さかりかな
 よそにのみみれはあかねが山櫻花のあるしになりてしらはや

春 雨

野へことにみとりそまさる石上ふる春雨のひましなければ
 よも山に木め春雨ふりぬれはかそいろはとや花のたのまん
 ふりかゝるしづくに花やたくふ寛うしろめたきは夜半の雨哉
 春雨の野へのみとりなそむれはやきのふにけふは色増るらん
 霞しく木め春雨ふることに花のたもとはほころひにけり
 さらぬたにぬるゝ袂を春のよのかりのさゝやは雨もたまらず

冬草とみえし春野のなさ、原やよひの雨にふかみとりなる
つく／＼と思へは悲し數ならぬ身なせる雨なをやみたにせよ
雨ふれは袂に色やうつるとて花のしづくにそほちぬるかな
春雨のしく／＼ふれは山も野もみななしなへてみとりなる哉
春雨のふりそめしより片岡のすその、原をあさみとりなる
岩の上の苔にたえぬ春雨に野への草葉のいかでもゆらん
春雨は色もみえぬにいかにして野への縁をそむるなるらん
つれ／＼とながめてそふる春雨のをやまぬ空の軒の玉水
ふりそむる春雨よりそい／＼の花の錦もほころびにける
石上ふる春雨のつく／＼と世のはかなさをおもひしらるゝ

春駒

つのくめる蘆の若葉をはむ駒のあるゝをみるやなにはえの人
とりつなく人しなけれは春駒の野への澤水かけもとゝめす
我ものとしめ野にかひし春駒の手にもたまらずあれまざる哉
春のゝの駒のけしきのことなるは澤への草やわか葉さすらん
とりつなく人やなからん春の野にいはゆる駒のあしけなる哉
よそめにもむらはむ駒の氣色にて春野の草の程そしらるゝ
小笠原すぐるにやくる下草になつまつあるゝ鶴ふちのこま
とりつなけ玉田よこのゝ離れ駒つゝしかけたにあせみ花さく
梓弓春の澤邊のはなれ駒やかてあれのみまさるゝこゝ哉
小笠原へみのみまきのはなれ駒いとゝ氣色そ春はあれます
なつくともいかゝとるへき草若みつつのみまきにあるゝ春駒
春駒のいはゆる音を聞ゆる美豆のまこもゝつのくみぬらし
むへしこそなつみし駒はいはひけれつのくみにけり萩の焼原
我せこかたなれの駒も澤にあれて春のけしきはあしけなる哉

美豆の江のまこもゝ今は生ぬればたなれの駒を放ちてそみる
冬枯になつみし駒も春くれはいはゆるはかりになりける哉

歸鴈

鴈かれは霞をわけてけふよりや八重雲かくれかへりゆくらん
越路にはたかことつてし玉章を雲井の鴈のもてかへるらん
春ことにうはの空なる心もてものわすれせすかへるかりかれ
玉章を雲井にむすふ鴈かれの花をみすてゝなにかへるらん
人ならはとはましものをちりぬへき花をみすてゝかへる鴈金
はかなしやいつくも鴈のすまゐをはなと中空にゆきかへる鴈
いかなれば草の枕にゆきかへる鴈のやとりにとまるゝろそ
春くれはたのむの鴈も今はとて歸る雲路に思ひたつなり
かへるらん行衛もしらす鴈金の雲のかよひ路霞こめつゝ
鴈金の春たちかへる越路にはみやこにまさる花やさくらん
世中はいつくやいつく歸る鴈なに故郷にいそくなるらん
鴈金はかへる空なく思ふらんみれともあかね花をみすてゝ
限ありて春もなかはになりぬれば越路にかへる鴈そなくなる
さよふけて雲井はるかに歸る鴈うはの空にや宿をかるらん
散花をみるやわひしき年へて春しも都かへる鴈金
うかりけるならひなるかな春くれは花をみすてゝかへる鴈金
喚子鳥
もつ人あかて歸りぬよふこ鳥猶よひかへせなかなたのまん
思ふこと干枝にやしきよふこ鳥信田の春のかたになく也
立かへる道もはるけしよふこ鳥ことありかほに人なとかめそ
つれ／＼と春の夕暮なかめやるおりにしもなくよふこ鳥哉

さよなかにみゝなし山の喚子鳥こたふる人^もはあらしと思ふ
 こたへする人なき山のよふこ鳥ひとりなきてや春をしるらん
 常よりもなはつせ山のよふこ鳥聲むつまじきこゆなる哉
 東路のなこそその關のよふこ鳥なにつくへき我身なるらん
 人影もせぬものゆへによふこ鳥なにとかゝみの山になくらん
 鳴たひにたちしとまれは春山の道さまたけのよふこ鳥かな
 おほつかな誰よふこ鳥なきつらんこたふる人もなき山中に
 小夜更ていはせの森の喚子鳥山ひこのみそこたふへらなる
 答へぬになにとよすから呼子鳥聲たえもせずなくにかある覽
 こぬ人をまちかれ山のよふこ鳥おなし心にあはれとそきく
 またしらぬ道ふみまよふ山里によふこ鳥こそしるへなりけれ
 鳴とてもたれかはとまる喚子鳥いさやかひなきなにもある哉

苗代

苗代にほそくまかする水なれはしめの外にはもらさゝらなん
 苗代の山田の小田にしめはへてまかする水や雪けなるらん
 賤の男^がの苗代かきをあせなきて今そたなぬにたれおろすめる
 小山田のゑくの若なを打かへし苗代水をひきそまかする
 小山田にたれまさすてゝ苗代の水の心にまかせつるかな
 おほつかなたれかもるらん里遠み谷かくれなる小田の苗代
 谷水をせく水口にくしたて五百代小田にたれまさてけり
 秋かりし室のなしれを思ひ出て春そたなぬに種^ををかしける
 けふこそはあれ田の澤にれせりつめ苗代水をまかせかてらに
 しめはふる山田の小田の苗代に雪けの水をせきそかけつる
 我妹子か門田^{まぐ}にうふるはやわせの苗代水ないかにひかまし
 白露のなくてかるてふ小山田になに苗代ないそくなるらん

くはゐ生る野澤の荒田打かへしいそけるしるは室の種かも
 み渡せば小田の苗代しめはへて種まくほとになりけるかな
 賤の男か苗代水もひきくにあはれなにかいそくなるらん
 あればてゝしめたにはへぬ小山田は苗代水をひく人もなし

莖菜

むかしみし妹か垣れはあれにけりつはなましりの莖のみして
 はこれ山うす紫のつほすみれふたしほみしはたれかそめけん
 こよひれてつみてかへらん莖生る小野の芝生は露しけくとも
 淺茅原むらさき深くなりけりいさや乙女にすみれつません
 きゝすなく岩田の小野のつほすみれしめさす計なりける哉
 枯たてる蓬かふるれかきわけて澤田のくろにすみれ花さく
 ひはりあかる飛火の原に我ひとり野もせにさける莖をそつむ
 我妹子か花の袂をかたみにてつめるすみれそ心ことなる
 草枕旅れしつゝそひとりつむ伏見の野へに生るすみれ^は
 あさちふのあれたる宿のつほ莖たれむらさきの色にそむらん
 春野のつはなかもとのつほ莖しめさすばかりなりけるかな
 老ぬれば花の都にありわひて山にすみれをつまんとそおもふ
 あれにける宿の外面の春の野に莖つむとてけふもくらしつ
 故郷の淺茅か原におなしくは君とすみれの花をつまはや
 すみれさく春の野へにはさしてゆく道さまたけに心とまりぬ
 おもふとちならひの岡のつほ莖うらやましくも匂ふ花かな

杜若

花かつみましりにさける杜若たれしめさしてきぬにするらん
 風吹は岩かき沼の杜若浪のおるにそまかせたりける

花はよしなそかひもなき杜若春のせきともなるときかれは
杜若あさはぬまの沼水に影なならへてさきわたるかな
東路のかほやか沼の杜若春をこめてもさきにけるかな
東路やかほの沼の杜若袖のつますり色ことにみん
鳩鳥のかつく池へのかきつはたこれこそ夏のへたて也けれ
鳩とりのかつくみ沼の杜若人へたつへきわかこゝろかは
むらさきの色にそみゆる杜若池のぬなはのはひかりつゝ
住吉のあさ澤沼の杜若あかね色ゆへけふもとまりぬ
狩人の衣するてふ杜若花咲ときになりそしけるかな
池水をへたてゝさける杜若波をこさしとおもふなりけり
みくりはふ澤へしめたる杜若くる人ことにめてすやはある
もろとも伏見の里の杜若心ばかりはへたてさらなん
ふかき色の心ことにそにほふめるたかすむ宿の杜若そも
杜若おなし澤へに生ながらなにをへたつる心なるらん

藤

なつかしきいもかころもの色にさく若むらさきの池の藤なみ
みきはより底まで匂ふ藤の花いかなる雲のかけかみゆらん
打なひく風の気色はのとけに松のうら葉にかゝる藤波
墨江の松にかゝれるふちの花風のたよりに波やおるらん
松陰のみとりをそめし池水にむらさきふかくかゝる藤波
濱松のしつえにかゝる藤波はみる人さへそかへらさりける
紫のしき波よるとみゆるまて田子の浦藤花咲にけり
春きては心の松にかゝりつる藤の初花さきそめにけり
年ふれと老せぬ松の梢よりさかりとみゆる藤のはな哉

春日山おなしき氏の宿なればわきてそ藤の花は咲けり
むらさきの糸よりかくる藤の花この春雨にはこほにけり
柴の庵の西の高根のふちの花明暮れかふ雲かとそみる
住江の岸にかゝれる藤波のかへらぬ色を人にみせはや
すみえの松にかゝれる藤の花たれかかきしに波のおるらん
藤の花岸のしら波あらへとも色はふかくそ匂ひましける
むらさきにいくしほそめし花なれば色ふくらん池のふち波

秋 冬

我宿をゐての里人きてもみよおなしやへさく山ふきの花
春ふかきゐての川水色そはいくへかみへんやまふきの花
岩根こす清瀧川のはやければ浪折かくるきしの山吹
蛙なくみつの小川の水さよみ底にそうつる岸の山吹
秋冬の花さく宿は春ことにおらまほしくもおもほゆるかな
岩間よりかけつゝ浪はあらへとも色もかはらぬきしの山吹
蛙なく眞野の池邊をみ渡せば岸の山ふき八重咲にけり
風吹は波うちかけてかへりけり岸にはうへし山吹の花
玉のゐにさけるをみれば山吹の花こそ春のさかりなりけり
行水に岸の山吹うつれとも底のにはひはなかれさりけり
秋冬の花咲にけり蛙なくゐての里人いまやとはまし
山吹の花しきさかすはなにゆへにうらやまれましゐ手の里人
さきぬれば人をとめるか山吹の小嶋か崎にあらぬやとにも
折てこそ匂ひもまされもるとにもゐ手のわたりの山吹の花
やま吹の花みし人や昔よりこゝをゐてとはいひなかしけん

三月盡

くちなしの色にさはやは山吹のえもいひしらぬ匂ひなるらん
 ゆく方もしらぬ春としりなから心つくしのけふにもある哉
 常よりもけふのくるゝなをしむ哉今いくたびの春としらねは
 あさましや日數ゆくともおもほえて春の今夜になりける哉
 さもこそは春のくれなは一枝の花のかたみをとめなかなん
 花のちることをなけくとせし程に夏のさかひに春はるにけり
 なにとてかかくのみけふの惜からん花も留らぬ春としるゝ
 つかのままとまらて行としりなから猶こりすまにおしき春哉
 我宿をいとふかところ思ひつれ野へにもけふそ春はくれぬ
 櫻花山路もみえず散にけりこれより春は暮ゆくかとよ
 あやにくに歎けはくるゝ春かとしてけふ惜まれと立とまらず
 春霞たちとまらねは入日さす山さへけふはうらめしき哉
 もろともに我もいなまし春のゆく今宵の道をしれる身ならは
 花もちり鳥さへ雲に入ぬれば空をあふきておしむけふかな
 春はたけふなかりとさくものな心ほそくもくるゝ空かな
 けふのみと空にくれ行春なればとむる關もかひなかりけり
 けふ暮ぬ花のちりしもかくそありしふたゝひ春は物を思ふふ
 夏十五首
 更衣
 けふよりは心さへこそ涼しけれうすきにかふる花のなもとほ
 夏衣花の袂にぬきかへて春のかたみもとまらさりけり
 すてゝいにし春はうけれと夏衣いつしかかへん事をしと思ふ

夏衣たちきるけふになりぬれば心にしみし春はわすれす
 いつかとけふたちきつるから衣ひとへに夏はみゆる也けり
 つるはみの衣の色はかはらねと一重になれはめつらしき哉
 おしみかれ花色衣ぬきかへてけさより風のたつなまつ哉
 夏衣たちきるけふのしらかさねしらしな人にうらみなしとは
 ぬきかふる花色衣おしき哉春のかたみをたつとおもへは
 いろゝの花の袂をぬきかへて夏の衣にけふそなりぬる
 けさかふるせみの羽衣きてみれば袂に夏はたつにそありける
 山吹の花の袂をぬきかへてせみの羽衣けふそきるめる
 春とても花の袂にあらぬ身は衣かへうきこともなきかな
 あかさりし花になれたる唐衣心の外にかふるけふかな
 身にしみて花色衣おしければひとへにけふはぬきそかへつる
 うすきなたちそめてけり夏衣きるより人や心をくらん
 卯花
 袖たれておれともぬれぬ白波は卯花さけるかきねなりけり
 夏はきのをちの垣れのうの花はよるさへ布をさらす也けり
 うの花やさかりなるらん白河の渡に波のたつとみゆれば
 卯花の青葉もみえず咲ぬれば雪もてゆへる垣れとそみる
 手玉ゆら賤機布を折かけてさらしたるとみゆる卯花
 卯花のさける岡へなこえくれば雪まをわくる心地こそすれ
 うの花のしらゝにさける夕暮は賤か垣れそ月夜也ける
 卯花も神のひもろきときて梟とふさもたはにゆふかけてみゆ
 我妹子か門ならねとも卯花のさける垣れはすきうかりけり
 卯花のさける垣れは布さらずいづ野の里の心地こそすれ

やみなれと月の光そさしてける卯花さける小野のはそ道
舟岡のわたりにさける卯花は汀によする波かと思ひ
たれにかばきてもみよとはつけやらん我身のためと咲る卯花
卯花のさける垣は冬こもり友まつ雪の心地こそすれ
山かつの垣はなそとふ卯花のおりにとのみも契らさりしな
卯花の垣は雪の心地して冬の氣色にみゆるやま里

葵

神山のけふのしるしの葵草心にかくるかさし也けり
大空の日影になひく神山のけふのあふひやひかりなるらん
葵てふはかなき草のなはかりや神のしるしにかけてかへらん
日影山生る葵のうらわかみいかなる神のしるしなるらん
昔よりけふのみあれに葵草かけてそたのむ神のちかひな
葵草祈てかくる人ことになひかめかみはあらしと思ふ
神山のその、葵をくさりつゝけふのみあれにかさしつる哉
けふくれはしとろのみゆる山かつのおとろの髪も葵かけたり
かけまくもかたしけなきは千早振神のみあれにあふひ也けり
はふり子かいはびてとれる葵草かけてそたのむ神のしるしな
葵草てる日は神の心かは影さすかたにまつなひくらん
けふことに葵のかつらする人は神のしるしをおもふなるへし
神山のしるしと思へはけふ毎にあふひのかつらせぬ人そなき
もろ人のかさす葵はちはやふる神にたのみなかくる也けり
年をへて松の小山の葵こそ色もかはらぬかさしなりけれ
葵草いのりかけてしことの葉をあたのかさしと思はさらなん
郭公

われもさはいりやしなまし時鳥山路にかへる一聲により

我妹子かぬくたれかみの五月雨にあげてそきなく山時鳥
今年しもなかつてはやましものゆへに人苦しめのほとよきす哉
情なくすきにける哉時鳥まつ夕暮はしはしとまれ
郭公夏の夜さへそうらめしきた、一聲にあげぬと思へは

明かたのみそらほのかに時鳥たまのよこ山なきてすくなく
我宿の松のけしきやしるからん山時鳥おちかへりなく

五月こは篠田の森の時鳥木傳ふ干枝の敷ことになけ
久方のあまのかく山のほとよきす玉ゆらきなけ神のまに

あらてくむ賤か垣の時鳥なけともなれる聲はやつれす
一聲のきかまほしさに郭公おもはぬ山に旅れをそする

有明の月とよにもや出つらん山時鳥今そなくなる
思ひ出に人つてなれて時鳥まつ初聲をわれに聞せよ

山ふかくたつれきぬれば郭公しのふる聲もかくれさりけり
時鳥夏は山へに家おしてまちとなりし初音をそきく

夜をかされまつたはしらて時鳥いかなる里になきふるすらん
菖蒲

あやめ草淀野に生る物なればねながら人はひくにやあるらん
五月雨は宿につくまのあやめ草軒の雪にかれしと思ふ

長かれとひくあやめ故かりはやす真蓐をさへにねこしつる哉
かくれぬに生ふとはすれとあやめ草尋て引なかきねなれば

夜とともににかふ淀野のあやめ草けふたか宿のつまとなる覽
けふはみなしまへそ上るのほり舟つなてはひかて菖蒲を引

山へたて人もえしらぬかくれぬに生るあやめは波やひくらん

我宿は軒のしのふのしけ^し、れはふけるあやめもみえぬ也けり^{けふかない}
 さらぬたに草の庵となる宿にけふはあやめをひきそふる哉
 たはれ男が袂にかくるあやめ草れよけなりとや人のみらん^{よそなからみん}
 めつらしき君かよとの、あやめ草ひきくらふへき物のなき哉
 あやめ草なへてならぬを尋てそ世にたくひなき長き根はひけ
 年毎にひけとつきせぬものはさは菖蒲の長きれに社ありけれ
 菖蒲草けふはかゝらぬ軒そなき数しらぬまにひけるなるへし
 蓬生のふせやかつまのあやめ草けふひきわかすかけてみる哉
 逢事のひさしにふけるあやめ草たゝかりそめのつまと社みれ

早苗

急きとれ今は早苗もおいつらん田子のもすそは朝しめるとも
 早苗とる深田にわたす板舟^はのおりなつことのさもかたき哉
 暮ぬともけふ植はてよ早苗とる田子のでまへん事もかたけに^き
 なみたてる田子の袂は^{もすそ}そほちつゝ水口まつり早苗をそとる
 わきも子かすそわの田井に引連て田子の手まなくとる早苗哉
 小山田に今そ早苗^こは植てける乙女かもすそわれてかへりぬ
 こなきつむ深田の代はかきてけりいそきて植よ室のはやわぜ
 初苗にうすの玉かす取そへていくしまつらんたちつくりえに^{とるなり}
 五月雨にぬるゝもしらす此里の門田の早苗いそきてそとる
 生わたる早苗もおなし色なれば水のみとりのふたへなる哉
 雨ふれと急きてとらんけふすきは山田の早苗おいもこそすれ
 早苗とる田子は戀すとなけれとも苗代水に袖そぬれぬる
 残り田はそ代にすきしあすは只ゆひもやとはて早苗とりてん

照 射

田子のとる早苗をみればおいにけりもろてに急け室の早はせ
 なくれしと山田の早苗とる田子の玉ゆら裳裾はすひまそなき
 早苗とる田子のもすそにあらなくに濡衣をのみなとかさる覽
 五月山みれたつ鹿も心せよともしのせなもみたれいる也^{めりい}
 ともしする宮城か原の下露にしのふもちすり亂あひけり^{かはぐよなき}
 雲まなき五月の山のこの本はともしするにそ星はみえける^と
 ともしすと五月きぬれはますら男の幾夜山へに立あかすらん
 五月やみさやまの嶺^かにともしす火は雲のたえまの星かとそみる
 道遠みほくしの松もつきぬへし八重山こゆるよはのともし火
 あひつ山すそ野の原にともしすとほくしに火をそ掛明しつる^{てまふり}
 照射するは山のすそに立鹿のめもみせぬ夜をなけきつる哉
 名をたのみ鹿の隠るゝかひもなく小倉の山にともしなをそする
 五月やみ峯にともしのみゆる哉尾上や鹿のたちとなるらん
 五月やみともしする夜は我もしかめあはせても明しつる哉
 鹿のふす小倉の山のやま人は火をともしてそいとふなる
 ともしすと鹿にもあはぬもの故にこくれの下に夜を明しつる
 さ月やみ雲まの星とみえつるは鹿たつれいるともし也けり^{せし}
 ともししては山のかけに立鹿をまつとするまにいもや恨みん
 夜を重ね木のした露にぬるゝ哉ともしの鹿のめなもあはせて

五月雨

旅人の眞菅の笠や楞ねらん黒髪山のさみたれのころ
 わきも子か小屋のしのやの五月雨にいかてほすらん夏引の糸
 とけぬらん眞金なりとも五月雨のあまゝもみえぬ雲の氣色に

さみたれにぬまの岩垣水こえて眞薦かるへきかたもしられす
五月雨のいくかになりてせたえせしさの、中川舟かよふらん
ひまもなくふりもすさめぬ五月雨につくまの沼のみ草波よる
久かたのあまゝもみえぬ五月雨にみくまの苔も茹ほしかねつ
おほつかないつかはるへき侘人の思ふ心やさみたれのそら
いかにして眞薦をからん五月雨にたかせのよとも水増りけり
五月雨のはれせぬころは蘆のやの軒のいと水絶せさりけり
いとしく賤の庵のいふせきに卯花くたし五月雨そふる
五月雨のはれぬ限は早苗とる田子のさころもかはくまもなし
五月雨は日數ふれともわたのへのおほ江の岸はひたらさり見
もしは草ほすひまもなき五月雨にやかてやあまの鹽をたる寛
五月雨は入江のまこもかりにこし渡もみえすなりけるかな
五月雨のひまなき頃は水まさりあさかの沼もなにやたかはん
ととに花橋を匂ひける一木か末にかせはふけとも
さつきやみわかまつ人はさまされと花橋の香にそなくさむ
なつかしき花橋の移り香はさもあらぬ人のなもちろぬへし
五月やみ吹くる風の匂ひにそ花橋は人にしらるゝ
我宿の花橋や匂ふらんやま時鳥すきかてになく
夕間くれしたてる宿の橋の花さくほとになるそ嬉しき
あるかうへに花の咲そふ橋はさつきの玉にぬかんとめなり
橋のこの丸とかほる香はとはぬになる物にそありける
吹風のなつかしきかな此里に花橋のにはふなるへし
わかそのゝ花橋の色みればこかれのすゝなならず也けり

盧 橋

螢

昔みし人のかたみと折つれば花橋に袖をしみぬる
さらぬたにむかしの人の戀しきに花橋のにほふなる哉
軒かき花橋のうつり香につゝまぬ袖も人そあやむる
故郷は花橋の咲るにそかなしるへにて人もとひける
五月やみ花橋のかほるかにあやなく人のまたれこそすれ
なつかしき花橋の匂ひ哉思ひよそふる袖しなけれと
難波江の草葉にすたく螢をは蘆まの舟のかゝりとやみん
五月雨に草の庵はくつれとも螢となるそ嬉しかりける
蘆ふきの宿はまはらにかこひしててらす螢に聞もかくれす
草ふかき淺茅ましりの沼水に螢とひかふ夏のゆふくれ
大井川せゝにひまなきかゝり火とみゆるはすたく螢也けり
夜をてらす草の螢をあつめてもみぬ世のことをたつれしる哉
うさや川八十伴男のかゝり火にまかふはさよの螢なりけり
哀にもみさほにもゆる螢かな聲たてつへき此世とおもふに
五月雨に草袴にけり我宿の蓬か袖にほたるとひかふ
雨風にあれのみまさる野寺にはとしひかほに螢とひかふ
行螢夏の夜すからいかにして煙もたゝすもえわたるらん
いにしへはまにあつめし螢をも今は雲井の星かとそみる
なかれ行河へにすたく螢はいさこにましる玉かとそみる
ともしひとみゆる螢の光かなむへ玉章をかけてよみけり
風ふけは澤への草はみたるれとひかりきえぬ螢也けり
澤水にいれともきえぬ螢かないかはかりなる思ひなるらん
蚊遣火

蚊遣火の下にもゆれは味氣なくむかひの里をふすふるになる
 すゝたるゝ宿にふすふる蚊遣火の煙は遠になひけとそ思ふ
 をのれ社下にくゆらめ蚊遣火のかへりて我をふすふるやなそ
 蚊遣火の煙うるせき夏の夜は賤かふせやに旅れなはせし
 我妹子にいかてしらせん蚊遣火の下もえするは苦しきものな
 蚊遣火の煙のみこそ山かつのふせやたつめるしるへ也けれ
 山かつの宿にたえせずなくか火の下もえにのみすくる比哉
 世中をあくたにくゆる蚊遣火の思ひむせひてすくすこ哉
 雲かゝるとをちの里の蚊遣火は煙立ともみえぬ也けり
 柴のやのはいりの庭になくか火の煙うるせき夏の夕暮
 さらぬたに夏はふせやのすみうきにか火の煙のところせき哉
 人しれす思ふところは蚊遣火の下にこかるゝ心地こそすれ
 いなしきのとこそとはけにいひ乍蚊遣火たてぬ賤かやそなき
 蚊遣火をまちかくたてゝ山賤のなれ煙にむせふなにそも
 賤の男のそとにたてゝ蚊遣火の下にこかれて世をや過さん
 山かつの外面にたてゝ蚊遣火の下にこかれてやみぬへき哉

蓮

池水にうかふ蓮のうへにこそ人にしらぬ玉はなしけれ
 こひちにもけかれぬ花そあはれなる心のうちの蓮のみかは
 水はしるはすの浮葉のしつますてうらやましくも生のほろ哉
 乙女子か姿の池のはちす葉は心よけにも花さきにけり
 つとめてはまつそ眺むる蓮葉をつゐに我身のやとりと思へは
 むらさめに玉なすほと露のまも蓮の上をわすれやはする
 夏の池の蓮の露をみるからに心そことにすゝしかりける

雨ふれははすのうき葉たちイにある玉のたえずこほるゝ我涙哉
 はやことも小舟こさいさしよせかのみゆる嶋根の蓮おらまくもおし
 蓮葉はたへなる法の花なればまことの池の心にそさく
 浮世にはきえなはきえれ蓮葉にやとらは露の身ともなりなん
 いかにしてにこれる水に生さいなから蓮の花のけかれさるらん
 ふたつなき法のたとへにとるのみかはちすは人の心とそきく
 くれなるにふかくも匂ふ蓮哉池の心やきよくそむらん
 水きよみいけの蓮の花さかりこの世のものとみえずもある哉
 諸人をすくふてふなる蓮葉の思ひしれとやうきしつむらん

氷室

夏まちていたす氷室はいにし年まかせし水のこほる也けり
 六月もすゝしかりけり山陰のなにおはぬものや氷室なるらん
 君かへん御代なかさかの氷室にはうつむ氷のとけぬ也けり
 たちとまる衣の袖のすゝしきは秋は氷室にやとる也けり
 夏の日もすゝしかりけり松崎これや氷室のわたりなるらん
 六月の空のけしきもかはられとあたりすゝしき氷室山かな
 つけのゝにおほ山守かおさめたる氷室を今も絶せさりける
 皇のみことのすゑも絶せればけふも氷室におものたつかな
 またしらし氷きえせぬむむる山夏てふ事は年にありとも
 皇のかしこき御代のしるしには氷も夏のものとこそきけ
 土さけて照日もしらすきえせぬは氷室は夏のほかにやある
 名にしおほゝ氷室の内にいかにしてあたる氷のとけぬなる
 冬さむみゐてし水を埋置てはや氷室とはいふにそ有ける
 氷ゐて千年の夏も消せしな松か崎なる氷室と思へは

夏の日の氷室こほりと思へばあやにくにす、しき水の氷なりけりと
けれともうはなたらなる人かとよ名は氷室にて下は氷れる

泉

六月に岩もる清水むすはすは扇の風をわすれましやは
八重葎しけみか下にむすふてふおほろの清水夏もしられす
淺けれと岩まの清水きよければむすふ雪もにこらさりけり
夏の日も泉の水にことよせてかたへす、しきかせそふきける
むすふてに扇の風もわすられておほろの清水す、しかりけり
けふもた、雪ひまなくむすひつ、岩まの清水人にくませし
影みればや、しら波のよする哉板ゐの清水むすふ雪に
さらし井の木下陰にゆきふれば衣手さむし蟬はなけとも
わきかへる泉の水のすむ宿はまた夏なから秋そきにける
夏の日もす、しかりけり岩まよりりくる清水むすふ袂は
いかなればな、くりのゆのわくかこといつる泉の涼しかる覽
むすふての袂す、しくなりゆくは泉に秋のすむにやあるらん
眞清水のみれば涼しくおほえつ、むすはてた、に過しつる哉
たちよればす、しかりけり夏衣秋やいつみの底にすむらん
諸ともにすめる泉を友として夏をわする、宿はしめにも有哉
人もみぬ高根にいつる泉をはたれか夏とはいひなかしけん

荒和殺

河の瀬になこしのはらへするけふやさはへの神も心よすらん
松陰のとなせの水に御殺して千年の命のへてかへらん
夏はらへ天津社の神うけは我思ふことを空にかなへよ
我妹子かうちたれかみの打なひきすかぬきかくる夏殺哉
六月の川そひ柳打なひきなこしのはらへせぬ人そなき

夏川になかす御殺の大麻はたきつ岩れの波かとそみる
八百萬神もなこしになりぬらんけふすかぬきの御殺しつれば
さはへなるあきらなかりに人にして厭ひし身なもなつるけふ哉
麻の葉に思ふことをはなてつけて六月はつる御殺をそする
古へのさはへなしける神たにもけふの御殺になこむとそきく
みな底の清きなかれにいくしたてあらふる事を神うけつらし
うき事なほはや川の瀬になかすてふなこしのはらへ誰かせき覽
千年まで人なからめや六月のみたひ菅ぬきいのる御殺に
夏はつるゆふへになれば河波に麻の御殺をせぬ人そなき
思ふこと大麻にてそ夏はつる河のせことに御殺をはする
河水にうきことの葉は六月の御殺のせ、になかすけふかな

秋二十首

立秋

とことばにふく夕暮の風なれと秋たつ日こそす、しかりけれ
朝またき秋の初風立ぬれば思ひなしにそす、しかりける
まちわひてかたしく袖のさむき哉我聞よりや秋はたつらん
きのふにはかはるとなしに吹風の音にそ秋は空にしらる、
朝またき袂に風のす、しきは鳩ふく秋になりやしぬらん
夏の夜のあたねの床にふしなから身にしむ秋の風そふきける
秋たつといふきの山のやまおろしの袂す、しくふきいつる哉
千年ふる御殺はきのふせしかともけふはうき世に秋立にけり
これをきけ萩の上葉にかせふきて秋きにけりと人につくなり
吹風の萩の上葉に音信てけふこそ秋のたつひ也けれ
ひとりゐてなかわる宿に秋きぬと萩の上葉の驚かす哉

夕暮の物のあはれをいかにせんけふより秋になりぬと思へは
 秋たつと人にしらする風の音にすしやけさはころも重ねつ
 朝またき秋立空のしるしには風の氣色そまつかはりける
 秋のたつしるしなるへし衣手も涼しきけしきことになりゆく
 いつしかとけさは身にしむ風にこそ秋きに鳧と思ひしらるれ

七夕

天川逢瀬ほとなき七夕にかへらぬ色のころもかさはや
 銀川夜の長月もある物をなと初秋とちきり初けん
 織女にかせるころもの露けさにあかぬけしき空にしろ哉
 銀河空にこそしれ棚機のくれなまつまの秋のころを
 彥星のまれにわたれる天河岩こそ波のたちなかへりそ
 彥星のいそきやすらん天河やすのわたりに舟よはふなり
 渡士守ふなよとみすな織女の年に逢夜はた、今宵のみ
 織女のかへる袂のしづくには銀河なみたちやそふらん
 棚機のかへる別の涙にや花のかつらも露けかるらん
 織女の天の岩舟ふなてしてこよひやいかにいそまくらする
 銀河波たつなめ彥星のつまむかへ舟岸によるなり
 逢はともなくてわかる、織女の心のうちそ空にしらるゝ
 中々にうらやましきは織女のためすあひみる契り也けり
 七夕のあまの羽衣かされてもあかぬ契りや猶もすふらん
 織女の逢瀬のなとかまれならんけふひく糸のななき契りに
 こひくしてこよひはかりや織女の枕にちりのつもらさるらん

萩

ひまもなく眞萩しける秋の野は道ゆきすりも嬉しかりけり
 河水に鹿のしからみかけてけりうきてなかれぬ秋はきのはな

秋はきはこそにかはらぬ色なれと猶珍らしき花のかほかな
 二葉より朝たつ鹿はしからめと眞野の村はき花咲にけり
 萩か花しからむ鹿そうらめしき露もちらさてみまほしきに
 住吉の岸の小萩に打そへて波の花さへみつるけふかな
 みるもおしとをにさける萩か花しほりせさす露のしからみ
 秋萩の末葉の露になつさひてさまにもおはぬすり衣かな
 時しあれは花咲にけりみやき野の本あらこの萩枝もとに
 朝夕にみれともあかす白露のなくの、萩の秋のけしきは
 朝露にうつろひぬへし小男鹿のむれわけにする秋の萩原
 秋はきの花の上なる白露は錦にをける玉かとそみる
 錦野や紐とく花とみゆる哉みたれて咲る眞野の萩原
 しめゆひしわか故里の秋萩は今そ紐とくさかりなりけり
 置露もしつ心なく秋風にみたれてさける眞野の萩原
 高圓の野を過行は秋はきの花すりころもきぬ人そなき

女郎花

ゆきてみんむかひの野への女郎花一枝もおらし花のさかりは
 もとゆひの霜といとは、娘部志我がさしとはならしと思ふ
 夕されは伏見の野への女郎花おらてすくへき心地こそせれ
 露しけき朝のはらの女郎花一枝おらん袖はぬるとも
 秋霧にかくれのなの、娘部志わか袂には匂へとそおもふ
 小夜衣片敷袖もあるものをあした露けき娘部志かな
 いさなみに今もまたみん女郎花しなふの姿あくとしもなし
 みよしの、かたちの小野の女郎花たはれて人に心をはかるな

心からあたの大野におひたちて風にたはるゝ女郎花かな
夕霧に立かくれつゝ女郎花われなつきひて霧さひせん
あたし野の心もしらぬ秋風にあはれかたよる女郎花かな
年をへて露をむすへる女郎花今さらにまたこゝろなかるゝ
おりつれば袂にかゝる白露にぬれきぬきする女郎花かな
みし人もあれ行やとの女郎花ひとり露けき秋のゆふくれ
女郎花匂ふ野へにはいたつらに旅れしつへき心地こそすれ
秋の夜の露ならねとも娘部志さく野へことに心をそなく

薄

秋風にはらむすゝきのある野へはうつしの露や色にまかへる
花すゝき穗に出てまねくころしもそ過行秋はとまらさりける
花すゝき今夜はしめぬ秋風にけさしもなとか朝しめるらん
むれたてゐる篠のをすゝき片よりになひくは風のふけは也けり
風ふけは花のをすゝき穗に出て露打はらふ袖かとそみる
しほ風になみよる浦の花すゝき雪をばらふ袖かとそ見る
風をいたみ鶉鳴野の花すゝきわれをまねくと人やみるらん
花すゝきまそをの糸をくりかへしたえずも人をまねきつる哉
一かたになひかはなひけ花すゝきこそは風の定めなからめ
みこもりてほには出れとしの薄風にはえこそすまはさりけれ
鶉鳴をさゝか原のしのすゝきたれなうしとかほにいてさらん
秋風になひきゝて花すゝき枯野にならんことをしそおもふ
花すゝき招くは袖とおほえつゝ秋は野路こそゆかれさりけれ
夕霧のたえまにみゆる花すゝきはのかにたれを招くなるらん

秋風になひく尾花の夕間暮たか袖かとそあやまたれける
道のへにまねく尾花にはかられて今宵もこゝに旅れなやせん

荊 萱

秋風になひくほとなき荊萱は下葉を上にふきみたる哉
みる程に時雨はふりぬおなしくは笠かかるかやのもとに宿らん
野へ毎にしとろにふして亂るゝはたか荊萱そつかねなもなき
秋くれは思ひみたるゝかかるかやの下葉や人のこゝろなるらん
鶉なく狩はのなのゝかかるかやの思ひみたるゝ秋のゆふくれ
夕されは風のけしきにかかるかやもこゝろほそくな思ひ亂れそ
大原や野風にしたくかかるかやのしとろにのみみたれける哉
朝夕になつゝおほすかかるかやをしめあて君かみま草にせん
さらぬたに亂れかちななるかやをつかのまもなく結ぶ露哉
荊かやも我心をはさこそみめ秋の野風にみたれかちなる
うなひ子か草荊岡の荊かやは下おれにけりしとろもとろに
鶉なく野へにみたるゝ荊萱のかりにたになと人のこしらん
秋風になにかるかやのすまふらん下おれせてもはてぬ物ゆへ
心をく露もこそあれかかるかやのなとたはやすく風にみたるゝ
すきかてに吹秋風そ荊萱の心みたるゝつまにやありける
ともすれば風にみたるゝ荊萱にいつまでとてか露のなくらん

蘭

秋はきてまたおもなれぬ蘭野ことにみればほころひにけり
ぬきかけしぬしはたれともしられとも一野にたてる蘭かな
秋の野にむらゝみゆる藤袴むらさきふかくたれかそむらん

ぬしもなきものと思へと藤袴秋の野風になる、也けり
 秋の野に香さへ匂へる藤袴きてみぬ人はあらしと思ふ
 さ、かにの糸のとちめやあたならんほころひわたる藤袴哉
 野ことにそほころひにける蘭秋のきるにはたへぬ也けり
 そめかけてまかきにさらす蘭またきもとりのふみちらす哉
 秋ことに誰きてみよと蘭さぬ笠岡ににほふなるらん
 秋風にすそのかほらす蘭たれともなしにわかぬしにせよ
 秋かせの日にくふけは蘭きる人なしにほころひにけり
 ぬしやたれぬふ人なしに蘭野ことにみればほころひにけり
 秋霧の野ことなてる蘭たれかぬひけんほころひにけり
 立田山麓に匂ふふちはかまたかきてなれし移り香そこは
 蘭たれきなれけんなつかしき香に匂ひつゝ色はふりせず
 秋霧や立かくしけんおほつかな野ことに匂ふふちはかま哉

萩

秋きてもまた穂に出ぬ萩の葉は風につけてそそよとつけゝる
 秋きぬと賤菜イいほにはつけれとも萩のは風のしるき也けり
 萩の葉のとはす語のそよめきにすゝろにめなもさましつる哉
 さらぬたに秋はれイ覺もあるものを氣色ことなる萩の上風
 山里にふきおとろかすかせなくは萩さへ音もせてやかれまし
 まてといひし人やわけくる萩のはのそよく氣色只のならぬ哉
 春ひみし萩の焼原いつのまに上葉の風のそよとふくらん
 萩の葉を草の枕にむすはすはよそにや風の音をきかまし
 くる人もなき我宿の萩のはいとひきかけてくものふるまふ
 今こんと契りしほと夕暮は萩の葉風そ人たのめなる

鴈

秋風のやゝはたきむくふくなへに萩の上葉の音をかなしき
 いとゝしくものゝかなしき夕暮にあはれをそふる萩の上かせ
 まつ人もなき宿なれと萩の葉のそよとなるには驚かれけり
 つれゝとさひしき宿の夕暮に萩の葉風そ人たのめなる
 萩の葉を吹こす風の音たかみほに出て人に秋をしらする
 小夜更で戦かはそよけ萩の葉に人またぬ身ははからればせし
 雲井よりわのか名をよふ鴈金はいつこをさしてなき渡らん
 めつらしくきくとはすれと初鴈の聲はこそにもかはらさり鳧
 天の戸をあくるほとなをもまたぬ哉いそきやすらん旅の鴈かれ
 穂に出て久しくなりぬ秋の田の稻かり金も今そなくなる
 故郷は歸る空とやなりぬらん天雲かくれ鴈今イそなくなる
 つはくらめいそきやすらんあまの原雲路に鴈の聲きこゆ也
 一つらに聲のきこゆる鴈金はわかまつふみをたより也けり
 鴈金もはれしほる鴈眞管生るいなさほそ江にあまつゝみぜよ
 雲かくれなのりをしつゝ行鴈のなこり戀しき秋の空哉
 春と秋とゆきてはかへる鴈金はいつくかつゐの住かならん
 きくたひにめつらしきかな初鴈のわかまつ妹かつかなれと
 初聲にめつらしくきく鴈金をこしちの人やみゝなれぬらん
 はれかるみ雲まにいろる初鴈の聲のはつかにきこゆなる哉
 ことばりや旅の空にてなく鴈は秋の哀をおもひつられて
 初鴈の翅につけて雲井なる人の心を空にしるかな
 雲かゝるあらちの山を鴈金の霧にまとはていかてきつらん

鹿

袖かたに道やまとへる小男鹿のつまとふ聲のしけくもある哉
 かこ山のは、か、下にうらとけてかたぬく鹿は妻こひなせそ
 妻こふる床の山なる小男鹿のひとりれをなく聲を聞ゆる
 夕間暮嵐にたくふ鹿のれは戀する人の妻とこそなれ
 夜もすかしつくの山にうらふれて妻こひわふる小男鹿の聲
 なにことを大原山になし籠てつきせす鹿のなきあかすらん
 高砂の尾上の松はさしなからなにをしるしに鹿のなくらん
 終夜まぢかれ山に鳴鹿のおほろけにやは聲をたつへき
 足引の耳無山に鳴鹿の妻戀すらしきく人なしに
 世中を秋はてぬとや小男鹿のいまはあらしの山になくらん
 風さむみはたれ霜ふる秋の夜は山下とよみ鹿そなくなる
 秋ふかみものあはれなるたそかれに小倉の山に鹿そなくなる
 夜をつられ妻を戀つる小男鹿のなかぬはいかに逢にけるかも
 三室山おろす嵐のさひしきに妻とふ鹿の聲たくふなり
 たくひなきあはれとそきく小男鹿の妻戀かれてよはに鳴音を
 遠近のみのれつ、きに鳴鹿のいく夜になりぬ妻にあはすて
 露

山かくれ風にしらすな白露の玉ぬきかくるしの、をす、き
 月草の花色衣いかにせんなさ、をわくる 秋のしら露
 露しけき野へをはゆかしあちきなく戀になき名の立ち社すれ
 しの、めの朝露ふかき浅茅生は玉つらぬかぬ草の葉そなき
 風ふけはまつ打なひく浅茅生にいかてをくらん秋のしら露
 ちらさしとなくらんもの箱根山あくればこほる玉さ、の露

白玉そ庭にはみてる道芝のしのをしなみをけるあさ露
 女郎花朝なく露を帯に^{をしなへい}してむすふ袂はしほれしにけり
 終夜おきあてそみる照月のひかりにまかふ玉さ、の露
 小篠原しみ、にける白露を秋はたえせぬ玉とこそみれ
 浅茅生のしのになしなみ置露をまことの玉とおもはましかは
 風吹はなひく尾花になく露を世のはかなさによそへてそみる
 玉をなす浅茅が上の朝露を置いてさながらみるよしも哉
 白露と人はいへとも野へみればなく花ことに色そかはれる
 日にみかき風にみかける草村の露こそ玉をぬきみだしけれ
 朝日さす小篠が上の露よりもあなたのみかた人のこゝろは
 霧

麓をは宇治の川霧たちこめて雲井にみゆる朝日やまかな
 川霧の都のたつみふかければそこともみえぬ宇治の山里
 石走音はかくれす夕霧のころもの瀧をたちこむれとも
 吉野川わたたりもみえぬ夕霧にやなせの浪のなとのみをする
 白波の音はかりしてみえぬかな霧立わたる玉川の里
 水まさる千曲の川は我ならず霧もふかくそ立わたりにける
 御田や守なるこの繩に手かく也晴まろみえぬ霧のみなかに
 朝日さす尾上の霧の村きえて晴やらぬ身に世をそうらむる
 秋霧の袖山川に立ぬればくたす筏のなとのみをする
 夕霧に道やまとへる宮木引袖山人もともよはふなり
 秋山に入にし人の戀しきに麓をこめて霧たちにけり
 秋さりの立四の山のもみちはははれてのちこそ色もみえけれ
 川霧にわたせもみえす遠近の岸に舟ふ聲はかりして
 爪木こる小野の山へも霧こめて柴つみ車道やまとへる

權花

秋霧の立へたてたる麓にはちかた人そうとくなりゆく
 いかにせんたつきもしらぬ山中にかへらん方は霧たちにけり

蘆垣の末よりみえし朝貞はおもかけさらぬ花にそありける
 白露のおきてみつればほともなく面かはりする朝かほの花
 山里のしのゝあみ戸のひまをあらみ明てそみつる朝かほの花
 朝貞もうらやまれけり年ふれとまた花さかぬ人のためには
 浦風に浪やおるらん終夜思ひあかしのあさかほのはな
 世のうさを思ひしれとや朝貞のさきてはかなき色をみすらん
 あたにのみみつゝそする軒近きまかきにさける朝顔の花
 朝貞の花のすかたのゆかしきになにこはなき秋のよそとよ
 朝顔の花のすかたをみつるよりくれをまつへき心地こそせれ
 秋くれは霧のまかきに立かくれほのかにみゆるあさかほの花
 玉ひこの露もさなからなきてみんけさ嬉しけに咲る朝顔
 世中のはかなき中にはかなきはくれをもまたぬあさかほの花
 朝貞のはかなき花をいかにしてかしこき人のそのに植けん
 いつ迄かなきてみるへき日影まつ露にあらそふあさかほの花
 しのゝめにおきつゝそみん朝貞は日影まつまの程しなけれは
 きゆとみしきのふの露もなきながら面かはりせぬ朝貞の花

駒迎

相坂の關路にけふや秋の田の穂坂のこまをつむ／＼とひく
 逢坂の關の夕霧ふかけれはさやかにみえぬ望月のこま
 相坂の關の杉村葉をしけみ絶まにみゆる望月のこま
 杉村のしつえやくくらき桐原の駒引わたす相坂のせき

引わたす瀬田の長橋霧はれてくまなくみゆる望月の駒
 君か代の千年の秋に相坂は駒の心ものとけかりけり
 會坂の關の杉まにひくなるはこや望月の影ふちの駒
 走井のかけひの霧はたなひけとのとかにみゆる望月の駒
 鳴なるは相坂山のくつは虫駒迎する人やきくらむ
 今夜ひく御牧の駒は相坂の山より出る月毛也けり
 引駒のつめやひつらん相坂の關の清水の底そにこれる
 會坂に雲の梯なけれとも空にそかける望月のこま
 關の戸に尾花蘆毛のみゆる哉穂坂の駒を引にやあるらん
 秋の夜のくまなき空に望月の駒は都に入やしぬらん
 かすしらす君か爲にと引駒はいく代の秋に相坂の關
 相坂の關の杉村木くらきにまきれやすらんかひの黒駒

月

山端をよこさる雲の絶まより待出る月のめつらしき哉
 まこもかる淀の澤水ふかけれと底まで月の影そみえける
 嵐ふく生駒の山の雲はれて長井の浦にすめる月かけ
 天原空行月をなかもれは秋はれぬよの数そつもれる
 山のはにいさよふ月のたけゆくを眺むるわれそ人なとかめそ
 月みれはうき世中につく／＼と思ひもしらてすむこゝろかな
 諸ともにみるとはなしに行かへり月にさほさす舟路也けり
 木枯の雲吹はらふ高嶺より寒ても月のすみ上る哉
 雲の波あらふなるへし天川夜わたる月の影きよくして
 かめめる入江の水はふかけれと底まで月の影はすみけり
 秋のよは聞にさしいる月影のあかぬに明る山のはそうき

秋のよの月は曇らぬ眞寸鏡影をうかめぬ水はあらしな
いつくとも月はわかしなかなければさやけかるらん更級の山
月影を心にいれておしめとも思ひくまなくかたふきにけり
久かたの月をはるかになむれば八十嶋めぐりみる心地する
やまおろしに木葉落つむ谷河の底にもすすめる秋のよの月

掃衣

戀つゝやいかうつらん唐衣砦の音の空になるまで
衣うつ槌の音こそたゆむなれたふさに霜の置にやあるらん
小夜深く砦にあたる槌の音のしげきはたれか衣うつらん
秋風はすゝしくなりぬ唐衣たかためにとていそきうつらん
ころもうつ槌の音にてよそながら人の心のほとそしらるゝ
故郷の夜さむになれば衣うつたひにや君も思ひいつらん
まつほとのすきやしぬらん衣うつ砦の音のうらみ聲なる
松風の音たに秋はさひしきに衣うつ也たま川のさと
我妹子か手玉もゆらに打ころも千聲になりぬ夜のなかければ
唐衣此里人のうつ聲をきゝそめしよりぬる夜はそなき
たか爲にいかうてはか唐衣千度やちたひ聲のうらむる
なかし夜に衣してうつ槌の音や物思ふ人の友となるらん
いかばかり思ひそめたる唐衣なかしよすからうちあかすらん
たか爲と思ひそめてか終夜をちの里人ころもうつらん
たのめをきしほとふるまゝにさよ衣うらめしけなる槌の音哉
小庭もさゆる霜夜に終夜をちの里にはころもうつ也

虫

萩のえの下葉を宿にする虫はうらかれてゆく秋や悲しき
駒なへて麓の野へにたつめればなくらにすたくくつはむし哉

みかりする片野ののへの鈴虫の戀する聲やふりはて、鳴
鈴虫の聲する野へなたつめれば心にもあらぬ花をみる哉
夕暮はすきうかりけり秋の野に我松虫の聲ならねとも
たのめ置しことの葉による戀草や人松虫の栖なるらん
山里はさひしかりけり木枯の吹夕くれの日くらしの聲
よはり行虫の聲にや山里はくれぬる秋のほとをしらん
夜をかされ音もなく虫の哀さに大かた秋はえこそそれられぬ
山里の薺ましりのかやのみたれもあへぬむしの聲かな
蜚秋のうければわれもさそ長き夜すからなきあかしつる
秋の夜の更行まゝに虫の音の心ほそくもなりまさるかな
秋ふかくなり行まゝに虫の音のきけは夜ことによはるなる哉
あれはて、人影もせぬ故郷に猶まつ虫の聲そたえせぬ
秋の夜の虫のきけはいとゝしくわか物思ひもよほされけり
露を、もみうつろふ花やおしからん草村ことにすたくむし哉

菊

しめのうちに八重咲菊の朝ことに露こそ花のうはき也けれ
かはかりの匂ひはあらし菊の花むへこそ草のあるし也けれ
みし人もすみあらししてし故郷にまたうつろはぬしら菊の花
奥山のみにたにの底の菊なればなかれなくみてたつめ計そ
うすくこくうつろふきくになく露は色ならぬ玉かとそみる
たれとわか庭にたはれんませゆひしやとの村菊花さきにけり
金色に八重咲菊は昔より老せぬ秋のかさしなりけり
わすれては雪にまかへし白菊をよなく雷のなきかへてける
霜かれんことをしそ思ふ我宿のまかきに匂ふしらさくの花
白菊の匂ふさかりは長月にまたさく花のさらになき哉

谷川の岸へにたてる白菊をひるさへほしと思ひけるかな
霜かれんことをしとおもふ白菊の花よりのちに花しなけれは
菊の花あらひておとす谷水のなかれたくみてよはひのふ也
うつろはてひさしからなん白菊はまた匂ふへき花のなけれは
霜枯の匂ひもさらにたくひなき籬の菊をとけくそみる
うすくこくうつろふきくに置つれば色々にこそ霜もみえけれ

紅葉

しぐれの雨まなくしふれば駿河なるしつはた山に錦をりかく
唐錦霜をはたてとたのめとも時雨のいと猶よはき哉
露のみと思ひける哉守山はもみちこきおろすなにごそ有けれ
峯たかき嵐の山のもみち葉は麓の里のにしきなりけり
浅からぬ八入の岡のもみち葉をなとあかなくに時雨をむらん
よそにみる峯のもみちや散くると麓の里はあらしなをまつ
白露のうつしのはひやさしつらん八入の岡のもみちしにけり
龍田川からみかけて神なひの三室のやまのもみちをそみる
秋をやく心地こそすれ山里のもみち散かふ木枯のかせ
もみちするたかはた山を秋行は下照はかり錦をりかく
紅にしぐれの雨やなりぬらんふれば木葉のてりまさるかな
さほ山に丹葉のにしきなりかけて霧のたつにそ任せたりける
瀧の上のみ舟の山のもみちははこかるほとになりにける哉
もみち葉のくれなる深き山里はたえず時雨やふりてそむらん
うすくこくそめかけてけり立田姫紅葉の錦むら／＼にみゆ
秋山を越つるけふのしるしにはもみちの錦きてやかへらん
九月盡

こふ人に千々の金はとらすとも秋くるこそおしくありけれ
いろ／＼の木葉手向て秋はけふ生田の森にかとてしにけり
さりとともと思ひしかとも八雲立手間の關にも秋はとまらず
もみち葉の散てつめれるこの本や暮行秋のとまりなるらん
花すきあすは冬野にたてるともけふは眺めん秋のかたみに
あせきにはもらぬ水たに有物をとまらていかに秋のゆくらん
くれて行秋し尾花の末ならは手なりてもたんちやとまると
こゑ／＼になく／＼虫はとむるをきかす顔にて秋のくれ行
人ならはやよしはしともいふへきにいかはせまし秋の別を
聲たてしかはかりこそおしめとも思ひしらすも過る秋哉
くれて行秋を心にしらせばやおしまは霧の立やとまると
長月の三十日にけふはなりぬれば秋はかきりと鹿をなくなる
かくはかりおしむもしらす夕霧のともに立てや秋のゆくらん
たまさかにあひてわかれし人よりもまさりておしき秋の暮哉
命にもかへやしなまし暮て行こよひはかりの秋のけしきを

題

冬十五首

初冬 時雨 霜 霰 雪
寒蘆 千鳥 凍 水鳥 網代
神樂 鷹狩 炭竈 爐火 除夜

戀十首

初戀 不被知人戀 不逢戀 初遇戀
後朝戀 遇不逢戀 旅戀 思

片思 恨

雜二十首

曉	山	海	懷
松	河	路	舊
竹	野	旅	夢
苔	別	無	
關	山	述	
橋	家	懷	
鶴	田	祝	
	家	詞	

冬十五首

初冬

きのふこそ秋はくれしかいつのまに岩まの水のうすこほる 覽 春宮大夫公實

立田川秋のとまりとみしほとに水さへこほる冬はきにけり 權中納言匡房

かみな月また冬かまへせぬ物なとりもあへすもあるゝけふ哉 右兵衛督師頼

冬くれはさびしかりけりひとりのわか衣手を誰にかさねん 修理大夫顯季

きのふまで聲たえさりし小男鹿も冬こもりせしけさの氣色か 左京大夫顯仲

かき曇りかれて雪ふる越路にはいかてかけふな冬としらん 中宮權大進仲實

いつみ川水のみわたのふしつけにしはまの氷冬はきにけり 木工頭俊賴

いかばかり秋の名殘をなかめましけさは木葉に嵐ふかすは

野へよりや冬はきつらん草のはになく白露の霜となるかな 右近權少將師時

大あらきの森のみち葉散はてて下草かるゝ冬はきにけり 藤原顯仲朝臣

まことにや冬はきにけるむへしこそ枯野に虫の聲たえにけり 藤原基俊

山ふしの苔の衣のうすければ冬になりぬるけふそかなしき 僧都永縁

冬きてはこよひそはつ夜いつのまに片敷袖のさえわたらん 阿闍梨隆源

風はやみ冬のはしめは山かつのしつの松かきひまなくそゆふ 紀伊

もみち葉もみな散はてて、柞はらけふは梢そまはらなりける 後

賤の男の外面のむくらかれはて、いつしか冬になりにける哉 河内

縁なるはやまの色やかはりぬるいやしきふれる初しくれかな 時雨

打かつく笠取山の時雨には袂そぬるゝ人なとかめそ 雨

みやまへの時雨てわたる數ことにかことかましき玉かしは哉

冬の夜は時雨に夢をさましつゝのとかにあかすことのなき哉

あま傳ふ時雨に袖も濡にけりひかさのうらなをさしてきつれと

かみな月夕間の山に雲かゝる麓の里やしくれふるらん

水鳥の青はの山もかみな月時雨にあへす色かはるらん

木葉のみ散と思ひしくれには涙もたへぬものにそ有ける

かみな月時雨のあめのふる里は浅茅が葉さへ色付にけり
時雨つゝ日數ふれともあたこ山しきみか原の色はかはらし
晴くもりさためなけれは初時雨いもか袖笠かりてきにけり
いかにして時雨は色もみえななくから紅にもみちそむらん
しくれの雨木葉はかりを染ければかつきし袖は色もかはらす
ふりはへて人もとひこぬ山里は時雨ばかりそすきかてにする
かみな月しくるゝころはあつまやに雨やとりする人を絶せぬ
人よりも時雨の音をきくことやあれたる宿のとりところなる

霜

夕こりのはたれ霜ふる冬の夜は鴨の上毛もいかにさゆらん
高砂の尾上の鐘の音すなり曉かけてしもやなくらん
道芝の霜うち拂ふ袖さえてまた夜ふかくも出にける哉
いつしかと朝戸をしあけて見渡せば道芝しろくをける霜哉
小薊に思ひこそやれ篠の葉のさやく霜夜のなしのひとりね
下さゆる草の枕のひとりねに霜の上着をたれかかさねん
年ふれはわかいなゝきになく霜を草葉の上と何思ひけん
住吉のちきのかたそきゆきもあはて霜をき迷ふ冬はきにけり
神無備の三室の山に霜ふれば夕してかけぬ柳葉そなき
道芝に霜やなくらん小夜更て片敷袖のさえまさるかな
ひさき生る小野の浅茅に置霜の白きをみれば夜やふけぬらん
風さむみ冬のよすから置霜の朝日山にはとけやしぬらん
初霜に籬の花はしほみにき葉も枯れとや朝なゝをく
玉ほこの朝行道の小さゝはらわくるもすそに霜寒にけり
置霜はしのひの妻にあられともあしたわひしくきえかへる哉
霜拂ふ鴨の上毛やいかならん十ふのすかこもさゆるよなゝ

霰

雪

玉さゝに霰たはしる冬の夜はいとしそさゆるとふのすかこも
人とはて霽は宿をさせれともなとするものはあられ也けり
あつまやのしつのすかきの下寒て山とよむまであられふる也
道たえて人もたつれぬ棋の戸に冬の夜すからあられなとなふ
人めには霰たはしる我袖をころもにつゝむ玉かとやみん
いてや猶人たのめなる霰かな玉としけともみるほともしし
さ夜寒み人待人にきかせはや萩の枯はにあられふるなり
あれはてゝむれもくもらぬ宿なれば霰ならてはもる人もなし
夜を寒み霰たはしる山里は苔の薙にれさめをそする
故郷の棋の板戸の妻ひさし霰たはしる冬そさひしき
板まより霰もりくる我宿はぬきみたれたる玉そちりける
冬の夜をね覺てきけは片岡のならのかれはに霰ふるなり
おとろかぬ人はあらしな曉の霰のなとのをひたゝしさに
板まあらみ霰もる屋は白玉やよるの衣のうはきなるらん
かきくらし俄にもふる霰かな太山嵐のかせにたくひて
ぬきみたる白玉かとと思ひける木のはの上にふれるあられは
ますら男か小坂の道も跡たえて雪降にけりころもかせやま
いかにせん末のまつ山波こさは嶺のはつ雪きえもこそすれ
吉野山となつ河上雪ふれば煙や民の家あなるらん
かきくらし玉ゆらやます降雪の幾重つもりしこのしらやま
しら鳥の鷺坂山を越くれはなさゝか嶺に雪降にけり
今朝みれば袖ふりはへてきのふこしよしの山は雪降にけり
ふみわけて誰きてとはんみ山への白苔しのき雪のふれゝは

むは玉の黒かみ山に雪ふれは名もうつもるゝものにそ有ける
雪ふれはみなたか^{しろ}い嶺もみえぬまてよしの山はみゆきふりしく
苔蘚あなれか嶺もみえぬまてよしの山はみゆきふりしく
奥山の松の葉しのきふる雪は人たのめなる花にそありける
霜枯の菊のふるえに雪ふれは又うつろはぬ花そさきける
都たに雪ふりぬれば信樂の眞木の 杣山跡たえぬらん
道もなく積れる雪に跡たえて故郷いかにさひしかるらん
白雪のふりしきぬれば苔蘚青根か嶺もみえすなり行
難波江の蘆のまろやもいつくそとたつぬはかりにふれる白雪

寒 蘆

霜枯の野へのほとりのしほれ蘆はゆきかふ駒もすさめさり見
霜かれて花はちりぬとみしかとも玉江の蘆は冬そたえせぬ
まこもかる玉江の蘆も霜枯てふかくも冬のなりけるかな
攝津國の須磨の浦風ふくたひにしほれ蘆の音のみそする
野かひせし蘆もまはらに枯はてゝくきの波もさひしかりけり
終夜あなしふく也難波湯 蘆に波の花やさく^{しほれ蘆に波の花さく}
難波江の浪になつそふしほれ蘆のけき濱風にさえてみゆらん
難波湯つなてになひく蘆の穂のうらやましくも立ななる哉
置霜におひたる蘆の枯ふしてすかたの池のあらはれにけり
難波湯汀をしなみ降雪をおもけにたはむ蘆のしたおれ
鹽風にしほれにけりななれ蘆のおきふし春を待とせしまに
霜かれの蘆かる人の宿なれば八重垣にしてすまふ也けり
冬寒み末の枯葉も落はてゝ本しのはかりたてゝ蘆かな
難波湯蘆の穂末に風ふけは立よる波の花かとそみる

遠方に家おやすらん難波かた蘆かり小舟しけくゆきかふ
よそにのみ三嶋の蘆のれを絶てかりにたにやは今^{アイ}はとひくる

千 鳥

志賀の浦の松吹風のさひしきに夕波千鳥たちぬなく也
月影の明石の浦を漕行は千鳥しはなく明ぬこのよは
友千鳥むれて渚に渡る也沖のしらすに鹽やみつらん
夜をさむみ明石の浦の濱風にとわたる千鳥聲さはく也
夜くたちに千鳥しは鳴樹生る清き河原にかせやふくらん
東なるなさかの浦に鹽みちて有明の空に千鳥しはなく
橋立やよさのうら波よせてくる曉^{くは}かけてちとりなくなり
あらしふくをしまか磯の濱千鳥若うつ波にたちさはく也
大井川くたす筏におとろきてあせきにきめるちとりなくなり
風さむみ夜やふけぬらんしなな鳥あなな湊に千鳥しはなく
霧たちてわたせもみえぬ佐保川のしるへは夜はの千鳥なり見
沖津風吹上の濱の寒ければ冬の夜すから千とりなくなり
夜やさむき友や戀しきれてきけは佐保の川はらに千鳥鳴也
白波に聲打そへて濱千鳥磯のまにゝたちぬなくなり
浦風に吹上の濱の濱千鳥波立くらしまはになくなり
浦つたふ千鳥の聲をしるへにてあまのとまやに旅ねしてけり

凍

ますらおか藻臥つか鮒ふしつけしかひやか下も氷しにけり
河こしのしはつみ車いかゝする氷のくさき冬はたえせし
夜をさむみ川との氷あつければ朝けの水をくみそわつらふ
山里の夜半のあらしの寒ければ細谷川をまつこほりける

かみな月時雨のあめのふる里は浅茅か葉さへ色付にけり
時雨つゝ日數ふれともあたこ山しきみか原の色はかはらし
晴くもりさためなければ初時雨いもか袖笠かりてきにけり
いかにして時雨は色もみえななくから紅にもみちそむらん
しくれの雨木葉はかりを染ければかつきし袖は色もかはらす
ふりはへて人もとひこぬ山里は時雨はかりそすきかてにする
かみな月しくるゝころはあつまやに雨やとりする人を絶せぬ
人より時雨の音をきくことやあれたる宿のとるところなる

霜

夕こりのはたれ霜ふる冬の夜は鴨の上毛もいかにさゆらん
高砂の尾上の鐘の音すなり曉かけてしもやをくらん
道芝の霜うち拂ふ袖さえてまた夜ふかくも出にける哉
いつしかと朝戸をしあけて見渡せば道芝しろくをける霜哉
小庭に思ひこそやれ篠の葉のさやく霜夜のをしひとりれ
下さゆる草の枕のひとりに霜の上着をたれかかさねん
年ふればわかいなきになく霜を草葉の上と何思ひけん
住吉のちきのかたそきゆきもあはて霜をき迷ふ冬はきにけり
神無備の三室の山に霜ふれば夕してかけぬ榊葉そなき
道芝に霜やをくらん小夜更て片數袖のさえまさるかな
ひさき生る小野の浅茅に置霜の白きをみれば夜やふけぬらん
風さむみ冬のよすから置霜の朝日山にはとけやしぬらん
初霜に籬の花はしほみにき葉も枯れとや朝なゝなく
玉ほこの朝行道の小さゝはらわくるもすそに霜寒にけり
置霜はしのひの妻にあられともあしたわひしくきえかへる哉
霜拂ふ鴨の上毛やいかならん十ふのすかこもさゆるよなく

霰

雪

玉さゝに霰たはしる冬の夜はいとしそさゆるとふのすかこも
人とはて律は宿をさせれともなとするものはあられ也けり
あつまやのしつのすかきの下寒て山とよむまであられふる也
道たえて人もたつれぬ榎の戸に冬の夜すからあられなとなふ
人めには霰たはしる我袖をころもにつゝむ玉かとやみん
いてや猶人たのめなる霰かな玉としけともみるほともなし
さ夜寒み人待人にきかせはや萩の枯はにあられふるなり
あれはてゝむれもくらぬ宿なれば霰ならてはもる人もなし
夜を寒み霰たはしる山里は苔の薙にれさめをそする
故郷の榎の板戸の妻ひさし霰たはしる冬そさひしき
板まより霰もりくる我宿はぬきみたれたる玉をちりける
冬の夜をね覺てきけは片岡のならのかれはに霰ふるなり
おとろかぬ人はあらしな曉の霰のなとのをひたゝしさに
板まあらみ霰もる屋は白玉やよるの衣のうはきなるらん
かきくらし俄にもふる霰かな太山嵐のかせにたくひて
ぬきみたる白玉かと思ひける木のはの上にふれるあられは
ますら男か小坂の道の跡たえて雪降にけりころもかせやま
いかにせん末のまつ山波こさは嶺のはつ雪きえもこそすれ
吉野山となつ河上雪ふれば煙や民の家あなるらん
かきくらし玉ゆらやます降雪の幾重つもりしこのしらやま
しら鳥の鷺坂山を越ければなさゝか嶺に雪降にけり
今朝みれば袖ふりはへてきのふこしよしの山は雪降にけり
ふみわけて誰きてとはんみ山への白蒼しのき雪のふれゝは

むは玉の黒かみ山に雪ふれは名もうつもるゝものにそ有ける
雪ふれはみなたか^{しろ}いぬ山もなしいつれかこしの白根^高なる覺
苦蕒あなれか嶺もみえぬまでよしのゝ山はみゆきふりしく
奥山の松の葉しのきふる雪は人たのめなる花にそありける
霜枯の菊のふるえに雪ふれは又うつろはぬ花そさきける
都たに雪ふりぬれば信樂の眞木の 杣山跡たえぬらん
道もなく積れる雪に跡たえて故郷いかにさひしかるらん
白雪のふりしきぬれば苦蕒青根か嶺もみえずなり行
難波江の蘆のまろやもいつくそとたつぬばかりにふれる白雪
寒 蘆

霜枯の野へのほとりのしほれ蘆はゆきかふ駒もすさめさり鳧
霜かれて花はちりぬとみしかとも玉江の蘆は冬そたえせぬ
まこもかる玉江の蘆も霜枯てふかくも冬のなりけるかな
攝津國の須磨の浦風ふくたひにしほれ蘆の音のみそする
野かひせし蘆もまはらに枯はてゝくきの波もさひしかりけり
終夜あなしふく也難波潟 蘆蘆に波の花やさく^{しら}く
難波江の浪になつそふしほれ蘆のけき濱風にさえてみゆらん
難波潟つなてになひく蘆の穂のうらやましくも立ななる哉
置霜におひたる蘆の枯ふしてすかたの池のあらはれにけり
難波潟汀をしなみ降雪をおもけにたはむ蘆のしたおれ
鹽風にしほれにけりななれ蘆のおきふし春を待とせしまに
霜かれの蘆かる人の宿なれば八重垣にしてすまふ也けり
冬寒み末の枯葉も落はてゝ本しのはかりたてゝ蘆かな
難波潟蘆の穂末に風ふけは立よる波の花かとそみる

遠方に家あやすらん難波かた蘆かり小舟しけくゆきかふ
よそにのみ三嶋の蘆のれを絶てかりにたにやは今^いはとひくる
千 島

志賀の浦の松吹風のさひしきに夕波千鳥たちぬなく也
月影の明石の浦を漕行は千鳥しはなく明ぬこのよは
友千鳥むれて渚に渡る也沖のしらすに鹽やみつらん
夜をさむみ明石の浦の濱風にとわたる千鳥聲さはく也
夜くたち千鳥しは鳴楸生る清き河原にかせやふくらん
東なるなさかの浦に鹽みちて有明の空に千鳥しはなく
橋立やよさのうら波よせてくる曉^{くは}かけてちとりなくなり
あらしふくをしまか磯の濱千鳥岩うつ波にたちさはく也
大井川くたす筏におとろきてあせきにきぬるちとりなくなり
風さむみ夜やふけぬらんしなな鳥あなな湊に千鳥しはなく
霧たちてわたせもみえぬ佐保川のしるへは夜はの千鳥なり鳧
沖津風吹上の濱の寒ければ冬の夜すから千とりなくなり
夜やさむき友や戀しきれてきけは佐保の川はらに千鳥鳴也
白波に聲打そへて濱千鳥磯のまにゝたちぬなくなり
浦風に吹上の濱の濱千鳥波立くらしまはになくなり
浦つたふ千鳥の聲をしるへにてあまのとまやに旅ねしてけり
凍 凍

ますらおか藻臥つか鮒ふしつけしかひやか下も氷しにけり
河こしのしはつみ車いかゝする氷のくさき冬はたえせし
夜をさむみ川との氷あつければ朝けの水をくみそわつらふ
山里の夜半のあらしの寒ければ細谷川をまつこほりける

波かくるいはまひまなくたるひして水とちたる山川の水
 諏訪の海の氷の上のかよひは神のわたりてとくる也けり
 しなかとりゐなのふしはら風寒てこやの池水氷しにけり
 つらゝゐてまもる岩まのせきなれやよなへて堅くなり増る哉
 山里は谷の下水つらゝゐて岩うつ波のをとたにもせず
 山川は氷にけらしをし鳥のは風のさなみをとせぬまで
 鳩鳥はよかれにけらしけさみれば蘆まの水ひまなかりけり
 冬ふかみ難波の舟はかよはしな蘆まのこほりとくへくもなし
 氷してみな口とちしその日より寛にかけし水はたえにき
 冬ふかみ氷やあつくとちつらん音たえにけり谷川の水
 奥山の水上ふかくこほればや落し瀧の音もきこえす
 水上にいくへの氷とちつらんなかれもやらぬたに川のみつ

水鳥

朝戸明てひとりかけ見る池水にいかなる鳥のむれてゐらん
 水鳥の玉藻の床のうき枕ふかき思ひはたれかまされる
 水鳥のすたく汀のうす水われても鳩のかつくなるかな
 池水にむれる鳥の羽風には蘆まの氷寒やまさらん
 終夜霜や置らん水鳥のはらふはなとのたえすきこゆる
 谷川の岩間かくれのよとますはいつか鷺の栖ならまし
 なるみ瀉沖にむれるあちむらのすたく羽風のさはくなる哉
 しほれ蘆のふし葉か下にあさりする鴨のうきよを流てそふる
 川風のこよひさゆればうきれるかも青はに霜や置らん
 水鳥は霜のさ衣かされてやさゆる蘆まのうきねをはする
 もかみ川うきねはすれと水鳥の下の心はやすけくもなし

冬のよのつかはぬ鷺のうきねには上毛の霜もとくる也けり
 うらやまし洗むみくすも有物をいかてか鷺のうかふなるらん
 池水にむれておりぬる水鳥の羽風に波やたちさはくらん
 池水のうきねなからにいかにして鷺のつかひのはなれざる
 水鳥の鴨のうきねのうきなから波の枕にいくよへぬらん

網代

武士の年のよるなもしらぬかな網代にひなやかそへさるらん
 作々名實やあふみの海の網代木に波とともにやひなのよる
 田上の瀬々の網代にひなへつゝ我心さへよするなるかな
 網代木に錦織かく田上やその一柳山に木葉ちるらし
 篝火のなからましかはひなのよる網代の程をいかてしらまし
 たなかみやその村きみにあらなくに先網代木をきてそ恨むる
 風ふけは田上川の網代木に峯のもみちもひなへてそよる
 つかのまもつる網代の木葉にてひなへてよらん程をしる哉
 水魚のよるたひにそ拂ふ田上やみくらにかゝる網代木の布
 ゆふたゝみ田上川の網代木のみくらにひなをくらすころ哉
 山風に木葉ふりしく宇治川の網代はひなのよるところ哉
 かみな月うちの網代のひなよりも年のよるこそあはれ也けれ
 水浪のもらて残るとみえつるは網代にひなのよるにそ有ける
 水魚のよる川瀬にみゆる網代木はたつ白波の打にやあるらん
 網代木に波のよるゝ宿りしてあやしくひなをくらしつる哉
 ひまもなくしき浪かくる網代木をひなのよるとや人のみる
 神樂
 あまとつる神の心をとるけふや庭火の煙雲とみゆらん
 曉の星さへさえぬ榊葉の霜うち拂ふ袖のかさふり

賢木とりゆふしてあそふ冬のよは天の岩戸も明ぬへきかな
千はやふる神の心も庭火たくこよひのかくらうけさらめやは
終夜取櫛葉に置霜のとけさらめやは神のこゝろも
神垣や庭火のまへに君か代を猶萬代といのるなるかな
庭火なく天の岩戸の神わざはあめたちから雄猶そ嬉しき
韓神に袖ふるほとは殿守の伴のみやつこ御火白くたけ
ゆふかけていはふ社の神樂にも猶朝倉のおもしろきかな
しらにきて千種の枝に取かさねうたへはあくる天の岩門
夜なさむみとる櫛葉に置霜をしらゆふ花と人やみるらん
庭火にはとる櫛葉に置霜もとけやしぬらん神の心も
廣前の庭火の光りあきらけくかなつる袖をみるそ嬉しき
櫛葉やときはの枝にゆふして、心とけてもあそふなるかな
櫛葉にゆふしてかけて諸人のときはにのみもあそふへきかな
賢木とる庭火のまへに降雪をおもしろしとや神もみるらん

鷹狩

かりくらし上毛の雪をばらはねはしらふの鷹と人やみるらん
御狩する野中のこのしけは空とる鷹のたかへりもせず
吹渡すひらのふきの寒くともひつきの御狩せてやまめやは
みかりすと櫛のましはなふみしたき交野の里にけふも暮しつ
しら塗の鈴もゆらにいはせ野に合せてそみるましらふの鷹
降雪に友むれからするへにてなけともみえすましらふの鷹
やかたおのましろの鷹を引すへうたのとたちを狩暮しつ、
日影さす豊の明のみかりすとかたの、をのにけふもくらしつ
御狩する交野の原に雪降はあはする鷹の鈴そきこゆる
やかたおのしらふの鷹を引すへとたちのはらな狩暮しつる

やかたおの鷹手にすへて朝たては交野の原にきゝすなくなり
とやかへるたなれの鷹を手すへてきゝす鳴なる交野へそ行
降雪に行衛もみえす簀鷹のおふきの鈴の音はかりして
雪降にしらふの鷹をあはせては鈴の音こそしるへ也けれ
御狩人ちかくなりゆく鈴の音を交野のきゝすいかゝきくらん
簀鷹のしるしの鈴のちかつければかくれかねてやきゝすなく覽

炭竈

年をへてつまさこりくへ炭竈に煙もたえぬ大原の里
浦嶋のはこなられともすみかまは年のおくるをくゆる也けり
山ふかみ焼すみかまの煙こそやけて雪けの雲となりけれ
大原やをのゝすみかま雪降て心ほそけにたつけむりかな
すみかまのそこともみえすふる雪に道たえぬらんをのゝ里人
朝またき冬たつ雲とみえつるはまきの炭やく煙也けり
すみかまの煙なられと世中を心ほそくもおもひたつかな
大原やをのゝすみかま雪ふればたえぬ煙をしるへなりける
すみかまにたつ煙さへをの山は雪けの雲とみゆるなりけり
さひしさは冬こそまされ大原や焼すみかまの煙のみして
すみかまに薪こりたく夕暮はをのれけふたきをのゝ里人
小野山に煙たえせぬすみかまをむるのやしまと思ひける哉
すみかまのくちやあくらん小野山に煙のたかくたちのほる哉
深山木をやくすみかまにこりくへて煙たえせぬ大原のさと
四方山の冬のけしきになるまゝに小野のすみかま煙たちます
須磨の浦に鹽焼蟹の煙かとみそまかへつる小野のすみかま
爐火
埋火の下にこかるゝかひなしやきえもきえすも人のしらねは

ほに出てまたおきながら埋火の舟なられともこかれ社それ
埋火の下にこかるゝ氣色こそ難面人にみせまほしけれ
いふ事もなき埋火をおこす哉冬のれ覺の友しなけれは
山里にひとりぬるよは埋火も板まの風にふきおこされて
埋火のきえなんとのみ思ふ哉いきてくゆれとかひしなけれは
夜とゝもに下はこかるゝ埋火のうへつれなくて世をすくす哉
いかにせんはひの下なる埋火のうつもれてのみ消ぬへきみを
驚のなかぬはかりそ埋火のきえせぬやとは春めきにけり
埋火は戀する人の心哉うへはつれなく下はこかるゝ
下はもえ上は難面埋火のこかれをあかす冬のよなく
人しれすしのふ心は埋火のうへは難面こゝちこそすれ
埋火のあたりに冬はまとゐしてむつかたりすること嬉しき
埋火の下的心をしらすしてきえもやすとおきあてそみる
れ覺してかきおとろかす埋火そ冬の夜ふかき友には有ける
終夜上はつれなき埋火の下にはもえておもふとなしれ

除夜

あすよりは春の始といはふへしけふ計こそとし也けれ
よしの川なかれてすくる年波にたちゐのかけも暮にける哉
何事をまつとはなしに明くれてことしもけふになりける哉
はかなくてこよひになれる年月は我身にのみ雪つもりける
門松をいとなみたつるそのほとに春明かたに夜やなりぬらん
花ゆへに春のまたれし昔こそ年のくれなもおしまさりけれ
千年とそ明ていのらんかくしつゝことしの冬も今宵はてぬる

こと玉のおほつかなさに岡見すとこすへなからも年を越哉
年暮て春はとなりになりになりけり今宵はかりやへたてなるらん
月よめは十月にあまり二月の晦日になるはこよひ也けり
いつくにもおしみあかさぬ人はあらし今宵計の今年と思へは
春くるはまたれしものを老ぬれば今宵のあけんことを悲しき
みつもゝちむそちつきぬる此よは思へは年のつもる也けり
過ぬれば我身の老となる物を何ゆへあすの春をまつらん
はかなしや我身も残りすくなきに何とて年の暮をいそくそ
心なる涙さへこそとまられことしはけふを限りとおもへは

戀十首

初戀

眞菅よき笠のかりてのわさみのを打きてのみや戀渡るへき
思ひかれけふたてそむる錦木の千束もまたてあふよしも哉
行かよふ中人たてけふこそは思ふ心をほのめかしつれ
戀せしと誓ひてし身をいかにしてこはこりすまに思ひそむ
思ひあまりけふいひ出る池水のふかき心な人はしらなん
あしふきのこやの玉まゆいつのまにいとく計くるしかる
星崎やあつたのかたのいさり火のほのもしりぬやおもふ心を
難波江のにもうつもるゝ玉かしはあらはれてたに人な戀は
心こそ門出するよりまとひけれ逢をかきりとなれる戀路は
下へのみ戀わたりしを玉のをのみたれてけふそ人にしらるゝ
木のまよりひれ振袖をよそにみていかはすへき松浦さよ姫
池水のふかき心を年ふともいひ出さすはいかゝしらさん
けふこそははつかにみつれほともなく何と亂るゝ心なるらん

またしらぬ人を始めてこふる哉思ふ心よ道しるへせよ
よそながら戀は色にもあらなくに心にふかく思ひそめてき
わりなしや思ふ心の色ならはこれそれともみせまじものを
不被知人戀

なれもる山田のくろに置かひの下焦れする身とはしらすや
春くれば雪の下草したにのみもえ出る戀をしる人そなき
打たへて眺めたにせず戀すてふけしきを人にみせしと思へは
逢事はさこそなからめ人しれず戀すとたにもしらせてし哉
我戀は烏羽にかくことのはのうつさぬほとはしる人もなし
人しれず苦しかりけりかきあけてはたに戀する山かつのみは
いはれとも思ひそめてき錦木のはひさす色に出やしなまし
あさてほす東乙女のかや庭しきのひてもすすこる哉
人しれぬ戀をしすまの浦人はなきしはたれてすすこり
しらせはや新桑まゆのかきこもりいふせきまでにしふ心な
波まより明石の沖をこく舟のほには出ずもこひわたるかな
しのすゝき穂に出ぬこひの苦しきは露けられ共しる人もなし
人しれぬ思ひなのみそますか、み見し人ありと人しるらめや
谷ふかみ木葉かくれを行水の下になかれていく世へぬらん
人しれぬ戀には身をもえそなけぬ留まらん名をせめて思へは
しほるゝなしる人もなき袂哉これやしのふの岡のかけ草

不遇戀

思ひあまり人にとは、やみなせ川むすはぬ水に袖はぬるやと
まくりての袖にも戀のかくれぬは涙の色のしるき也けり
くり返しあまて神の宮柱たてかふるまであはぬ君かな

思ふことありその海のうつせ貝あはてやみぬる名をや殘さん
我戀は吉野の山の奥なれや思ひいれともあふ人もなし
よとゝもにあへの浦とは思へとも袖のみぬれてかひなかり鬼
たゝらたてふけはまかれもわく物を戀にとけせぬ人や何なる

逢事は刀の刃をもあゆむかな人の心のあやふまれつゝ
うとむなよあはぬ思ひにくつわれて影のことくになれる姿を
錦木の千束の数はたゞしをなと逢事のいまたまたしき
はゝきゝにあらぬ物ゆへ我妹子に逢ぬ戀して世をつくせとや
みそめてし日より袂の乾かれはいつたをいつとかまたんとす覽
くるゝまもさためなき世に逢事をいつともしらて戀わたる哉
難面に思ひもこりて戀渡る我心をそ今はうらむる
徒にあはて年ふる戀にのみ朽ぬる袖をなないかにせん
みそらゆく月よみ男ならなくにありとはみれとあはぬ君哉

初遇戀

三十一
八年まで錦の紐を結はせてけふそはしめて心とけぬる
わくらには錦の紐のとけぬれは裏なきものはよるのさころも
憂事をいかてしらせんと思ひしはあはぬかきりの心なりけり
さりともなあひなはとこそ思ひしにいかてやすまぬ心なる覽
播磨かたうらみてのみそ過しかとこよひとまりぬあふの松原
あはゝまつ恨みんとこそ思ひしかさてはつらさも忘られに免
武藏野にわかしめゆひし若草をむすひそめつと人やしるらん
蘆のやのしつはた帯のかたむすひ心やすくもうちとくるかな
幾年に我なりぬらんかはかりの思ひしことを君にかたらて
下紐のうちとけぬれはあひ染のこよひの衣うらなかりけり

みしま江の入えにおふる白菅のしらぬ人もあひみつる哉
 錦木の千束にけふやなりぬらん寝なくに夢にあひみつる哉
 東路のむろのやしまに思ひたち今宵そこゆる相坂の關
 いかにして打とけぬらんよと、もにむすほ、れたる中の下組
 つれなさに思ひこりすとなけしなけさは嬉しき心也けり
 いかにせん雪の下水打とけて名になかれなん事を社おもへ

後朝戀

なくさむるかたこそなけれ梓弓かへるほとなきけさの戀しさ
 笈士の小川をくたすみなれ樺明つるまゝに暮をまつかな
 露をけはあさひのいてのしらま弓かへる咄しきけさにも有哉
 かへるさの朝露しけき衣手はひるまゝつへき心地こそせれ
 戀しさに我身そはやくきえぬへき何朝露のおきてきつらん
 明ぬれば末に玉まく梓弓かへるゝそきみはこひしき
 碑やけふのせは布はつゝにあひみてもなをあかねけさ哉
 とへかしな誰もさそとはしりぬ覺けさしもしぬる心よはさ
 我妹子かあひにし戀のなくさまはけさ、へ物は思はさらまし
 かへりつるイ
 けさ迄は程やへたつる程へれと又こはいかにみまほしきそ
 明つらん空さへけさはつらき哉天の岩戸をいまそさせかし
 いつのまに戀しかるらん白露のおきてきつるはあけほの、空
 仙川のせゝのしら波よるながら明すは何かくれなまたまし
 逢みての朝の戀にくらふれば待し月日は何ならぬかな
 昨日まで歎しことは數ならてけさこそ物はおもふ也けれ

遇不逢戀

待侘ぬかりにもこかし蘆秋の白イのほのしのにかなしみ露もねられす
 賤機に織てふ布のせはければ常にもあはぬむれそくるしき
 遇て逢ぬ戀する人の又もあらはわれなつれてとはまし物を
 今さらに戀路にまよふ身をもちてなにわたりけんさの、舟橋
 神もきけ思ひも出よ吳竹のた、一よとはいつかちきりし
 目にそへて思ひ亂るゝいきのなは今一たびもみてやたえなん
 又いかにむすひかくらん小車のにしきの組はとけにしものを
 山賤のあしやにかけたるたかすかき伏にくしとも思ひけるかな
 しのはらやふたり契しかれことをあはぬかうへに人に語らん
 とけさりし昔よりけにくるしきはむすひたえさる賤はたの糸
 ふえ竹のあなあさましの世中やありしやふしの限りなるらん
 ありしよや浦嶋か子の箱ならん明にし日よりあふことのなき
 人心かれてしりせは中々にあひそめ川もわたらさらまし
 諸友になれにしものをなち鳥行衛もしらぬ中そ悲しき
 かけろふのほのみし人に逢みぬは有にもあらず戀にけぬへし
 逢坂の關は越にし東路をなといまさらに又まよふらん

旅戀

都にてかれにし人にもは鳥のひなの空にはこひしかりけり
 玉ほこの道行人もはつかしき戀はけしきのしるくやあるらん
 立かへり駒のゆきかふほとならはたかはかりしき獨れましや
 戀しさに忍びしかともはるゝと旅の空までたつれきにけり
 戀しさをいもしるらめや旅れして山の峯に袖ぬらすとは
 宮古人戀しき旅の道なれば朝夕露にそほちてそゆく
 まふしさすしつおの身にもたへかれてはと吹秋の聲たてつ也

慕ひくる戀のやつこの旅にても身のくせなれや夕とゝるきは
あけてのみ杉の板戸をたゞきかれ幾夜になりぬ我旅れして
とへかしなさゆる霜夜に思ひかれ袖おりかへす旅のまろねを
家にあるいもなこふとて霜枯の草の枕に目をさます哉
いつくにも戀はせしかと旅衣草のまぐらは露けかりけり
もしほやく浦へにこよひ旅れして我さへこかれ人をこひつゝ
もしほやく蟹のとまやに旅れして波のよるひる人そ戀しき
逢ことはなきさの浦にやとりしてうらかなしかる戀もする哉
旅衣かへしてこよひきつれとも夢のしるしもなきそ悲しき

思

ひとりぬるわれにてしりぬ池水につかはぬ駕のおもふ心を
涙川よなうき舟のなきさには思ひたえせぬつなてひく也
水引のあはせの糸の一すちにわけすよ君をおもふこゝろは
ほとみなき身にあまりたる心地してなき所なき我思ひかな
なにしかは人をうらみんひたすらに心よはきにつける思ひな
もの思へはまのこすけのすか枕たえぬ涙に朽やしぬらん
ひくまのゝかやか下なる思ひ草またふた心なしとしらすや
むやひするかまのほなはのたえは社あまのはし舟行も別れめ
戀なのみ賤のをたまきくるしきはあはて年ふるおもひ也けり
さらてたに絶ぬ思ひにふししつみ床くつるまで物をこそ思へ
わか思ひかたぢありせば大空になき所なくなりやしなまし
露けさはことほりなりや夏草の思ふことのみしけき身なれば
うき人にきかせにたにもきかせはや涙の底に思ひしつむと
時のまもめかれやはする日にそへてますみの色のあかね思に

うちも出ぬ中の思ひのくるしきは煙たゝねはしる人そなき
山川の下には常になかれば思ひたえせぬ水のなとかな

片思

とはねとも君をそたのむ鳩鳥のあしまのかひこかへるゝも
つらさのみ形見にそへてくれはとりあやなや袖の猶ぬるゝ哉
いかにしてななるはかりにこらしめん思ひにまけぬ心強さを
思へともわか心こそこゝろえねわれをおもはぬ人をおもへば
かたしきのかた思ひしてすまの浦にたるゝ藻鹽のからき頃哉
ひとりのみ我思ひしはみつ鹽のあはにましれる色かとよたゝ
雨ふればあまのかくみにふくともものろ心にもあはぬ君かな
石見かたことかた磯による波のくたけて返るものとしらすや
しぬはかり物も思はしなけなき人には身をまかふる物かは
いかにせん人のつらさを思ふとて我のみひとり身をくたく哉
あは糸をよりもあはせぬ玉のなのかた戀するも誰ゆへそそも
夢にたにあひもおもはぬ君ゆへによるゝなけき明しつる哉
心こそ心をこらすものなれやおもはぬ人をなにおもふらん
心をもあはせぬ人をはし鷹のなとやすゝろに戀わたるらん
波よするあらし磯へのかたおもひひまなく袖をぬらすゝる哉
われなから我ともいはしもとかしやおもはぬ人をおもふ心よ

恨

うしとのみ人の心をみしま江の入えのまこもさそみたるらん
きさかたや蟹のとまやのもしは草うらむる事の絶すもある哉
恨むればかひなかりけり今はたゝ人を忘るゝことなしらはや
としへぬる人の心をうらめしと思ふにしもそれはなけれける

思ひかれよる打かへすから衣うらみおれとしる人そなき
 中々にたのむはかりのことの葉を契らさりせは恨みさらまし
 はふり子にみわすへさせて祈るとも君か心のわれによらめや
 何ことにたのむとなみはあやかちていとふ涙のしのに散らん
 さ、波や志賀の浦風うらめしと思ふはかひもなきさ也けり
 みるめかる蟹の筥屋のかち柱しはしうらみぬ時のまそなき
 人しれすみるめもとむと近江なるしかのうらみて過るころ哉
 みるまゝに人の心のありしにもあらずなるとの恨めしきかな
 恨みすは忘れぬ人もありなまし思ひしらてそあるへがりける
 うらめしき心のつまから衣しほりもあへす袖のぬるらん
 われからと思ひしれとも眞葛原かへすくそうらみられける
 われからと思ふものから三熊野の恨みてのみそすこしつる哉

雜二十首

曉

曉の時つくるなり庭鳥の聲うちかはしはれたならへて
 まとろまでもの思ふやとの長夜は鳥のねばかり嬉しきはなし
 山路にてそほちにけりな白露の曉おきの木々の雪に
 草枕旅れの人には心せよ有明の月もかたふきにけり
 山里の笈の水はせはしきに猶有明の月そやとれる
 曉になりけらしな筥ふきの蘆かり小舟しまつたふ也
 長月の有明の月のほのくとはれかく鳴の聲きこゆなり
 あけぬ也しはしまされよかり衣たつねんほとに猶なつさはん
 霜のなく曉かたに野を越て薪こりとやま人をゆく

草枕鳴の羽音に夢さめて空にそあくるほとはしらる、
 明ぬなり鳴のはれかき數ふればかけのたれ尾の長きよなれと
 曉になりけらしな郭公ゆふつけ鳥と、もになくなり
 曉になりけらしな我門の荊田に鳴もなきてたつなり
 さしくしの曉かたになりぬとや八聲の鳥もおとるかすらん
 思ふこと有明の月の曉は心すみます物にそありける
 明ぬ也夕つけ鳥のなにしおは、曉になくわかれせましや

松

鹽風にみとりの色はまされとも浦さびにけりすみよしの松
 つくはれや白雲かゝる松山の千年のかけのなをしるきかな
 枝たかみも、さしのほる松なれば千年は雲のうへにてやみん
 武隈の松のみとりはあら玉の年と、もにやふかくなるらん
 玉もかるいらこか崎のいはれ松いく世までにか年のへぬらん
 あら磯やいはれにたてるそなれ松波にしほれぬ時のまそなき
 かれてより千年はしるしいはれふみかさなる山のみれの松原
 みさこある磯まに生る松のれのせはしくみゆるよにもある哉
 嶺つゝき松のこしけくみゆる哉これや千年の山路なるらん
 覺束ないさいにしへのこと、はんあれやの松と物かたりして
 宮木引人もすさめ松か枝は谷の底にて年をへにけり
 住吉の松のみとりは神さびて千世のかけこそ、にみえけれ
 冬さむみ後にしほむといふなれと變らさりけり松のみとりは
 常葉木のみとりはなへて變らねと風のしらへそ松はことなる
 幾千世とかすもしられす住の江の神さびにける松の梢は
 みるからに心もとけすいはしるの松をはたれか結びなきけん

竹

吳竹の色もかはらてみつかりの久しき世よりみとりなるかな
 すいさきにいく夜かねぬる吳竹の林は夏のふしとなりけり
 木枯に園の河竹かたよりになひけと色はかはらさりけり
 年をへておひそふ竹の枝しけみしけくそ千代の陰はみえける
 冬籠色かはりてもみえぬかな竹のよことに雪はふるとも
 嬉しくも千世をこめつゝうへ竹のれさす計になりける哉
 いにしへの七の賢き人もみな竹をかさしてとしそへにける
 吳竹のうきふししけくなりけりさのみはよと思ひし物を
 吳竹の生る籬の草なればはらひもあへす夕露そなく
 鶯のねくらにしむるなよ竹はいつれの枝かふしとなるらん
 ことし生の籬のもと吳竹も秋はよなくなりやしぬらん
 吳竹のうかりしふしはわすられて此後の世を今はたのまん
 わか友とわれそいふなる吳竹のうきふし繁き身ともなれは
 木葉ちる折ふし毎にかはらねはいくよなふへき竹のみとりそ
 風ふけはなひく物からなよ竹のおもふしありけなる哉
 よふれと色もかはらぬ吳竹を人の心とおもはましかは

苔

佐保姫のあそぶ所がおく山の青根か嶺のこけのさむしろ
 ふかみとり岩ほかうへにむす苔や空にのほらぬ煙なるらん
 日かけはふしけみか下に苔むして緑のふかき山のかひかな
 かつらきやわたしもはてぬ物ゆへに久米の岩はし苔生にけり
 雲かゝる青根か嶺の苔庭いくよへぬらんしる人そなき
 昔よりあれたる宿も庭にしく苔の庭はふりせさりけり

ふむ人もなき庭の面に秋のよは苔庭にそ月はやとれる
 養生のけかしき藪の苔の上にあたら月をも宿しつる哉

年ふれは苔のみつらなゆひかけて岩の姿は神さびにけり
 よこれ嶋下はに生るさかり苔露かゝれとかはくまもなし
 おく山の岩れか上の苔庭たちある雲のあとたにもなし
 白雲の立ある山の苔庭わか片敷の袖かとそおもふ
 れもなくて岩ほの上にむす苔はかみをおほへる心地社すれ
 おく山の岩れの松の陰にてや苔のみとりもときはなるらん
 打ならず人もなけれは君か代はかけしつゝみも苔生にけり
 年ふれとあたにそみゆるれもさゝていかてか苔の岩に生らん

鶴

鶴の子のすまふ入えにあきたてはあまくもりする心地社すれ
 澤ふかきなかな子をおもふ蘆田鶴は聲も心も空にやあるらん
 つなて引灘の小舟や入ぬらん難波のたつの浦わたりする
 難波瀉田鶴そなくなるこれやこのたみのゝ嶋の渡りなるらん
 鳴海瀉朝みつしほやたかゝらんあさりもせてそたつ鳴わたる
 蟹の子か玉藻かりにや出ぬらんむらしか磯にたつさはく也
 故郷をわすれすきなくまな鶴はむかしの名をもなのりける哉
 網引するみつの濱へにさはかれてあけなさゝのへたつ歸る也
 君か代のためとむれあるたつなれは千年をかれて遊ぶ也けり
 朝ひこやけさはうらゝにさしつ覽田面のたつの空にむれなく
 いにしへを思ひいつるの悲しきはなけとも空にしる人そなき
 まことにや蓬か嶋にかふらん鶴にのるてふ人にとはゝや
 澤にすむ鶴のなく聲いたつらに空にきこえぬなけきをする

君か代のなかつの浦にむれあつゝともに千年を契りつる哉
 天津空雲のはいぬにあそふまなつるをふりさけみつゝ齡へぬへし
 千年ふるたつのむれある池水は波のたつさへしつかなるかな

山

神さふるかつらき山の高ければあさある雲のはるゝまそなき
 柴車落くるほとに足引の山のかさな空にしるかな
 あさみとりかすみて渡る絶まよりみれともあかぬいもせ山哉
 嵐吹木くれの雪をうちらひけふ越ぬるやさやの中山
 嶺たかきこしの尾山にいる人はしは車にてくたる也けり
 駒なへてくれぬと人はいそけとも道をはるけき富士の柴山
 夕附日さす夕くれに見渡せば雲をかゝれるなはつせの山
 いくしほり越てか人にいはかれのこりしく山を歸りみるへき
 うはそくは行ひすらしまきの立あら山中にまふしさしつゝ
 東路やしらぬ境にやとりして雲ぬにみゆるつくは山哉
 白雲の絶まにみゆる水とりのみかもの色の春の山のは
 白露のかゝる旅れもならはぬに深き山路に日はくれにけり
 むは玉の黒髪山のいたゝきに雪もつもらはしらかとやみん
 白雲のかゝる高根になるほとはいくよつもれる塵にか有らん
 引つてまとあせんとやおもふとち春はまゆみの山に入らん
 足柄の山のたうけにけふきてそ富士の高根の程はしらるゝ

河

みなはまきとこなめはしるあなし川隙こそなけれ波の白ゆふ
 今よりはひのくま川に駒とめしかしらの雪のかけうつりけり
 わきかへり岩こす波のたかければ山ひゝかせる鈴香川かな

野

すみた川るせきにかゝる白波のたちかへるへき心ちこそせれ
 舟もなく岩波たかさかひ川水まさりなは人もかよはし
 かまくらやみこしかたけに雪消てみなの瀬川に水まさるなり
 岩りのイふるゝ水わきかへるみわ川の清き瀬波のなとのさやけさ
 大井川みなはさかまく岩淵にたゝむ筏のすきかたのよや
 桂川てる月影のやとる夜はにもすむ魚を底にみえける
 名にしおはゝあふくま川を渡りみん戀しき人の影やうつると
 ちい
 みなせ川おちくる水の岩ふれて折人なしになみそ花さく
 濡きぬといふにつけてや流れけんあふくま川のなこそ惜けれ
 よしのなる大川水のよそほひは代々にもさらに絶しと思ふ
 淵瀬をもそことそしらぬはやたつのみなきり渡る河の流は
 波たかく音にきゝつる音羽川けにすきまうき渡り也けり
 いそけともわたりやられぬみなれ川見馴し人の影やとまると

霜枯の野原の浅茅むすひをかん又かへりこん道のしるへに
 すかるふす野中の草やふかゝらん行かふ人の笠のみえぬは
 凜風の吹上のなのゝ浅茅原波よるからに玉そちりける
 秋の野を心のまゝに分行はなのかいろゝさける花かな
 梓弓いる野の草の深ければあさ行人の袖を露けき
 みやき野のちゝの草葉をむすひをきて花みん程は絶す通はん
 月きよみ明のゝ原の夕露にさゝめわける衣さぬれぬ
 さまゝに心そとまるみやき野の花のいろゝむしの聲々
 みわたせばはさかも枯野となりけり今や小倉も紅葉ちるらん
 旅人のゆくほとゝなき武蔵野は草さへふかくなりける哉
 昔みしみち尋ねれとなかりけりぬるてましりのあなのふし原

宮城野の秋の萩原わけゆけは上葉の露に袖そぬれぬる
ともかくも人にいはての野へにきて千種の花をひとりみる哉
我せこかりにのみくるあはつ野に鶉鳴也草かくれつゝ
身にしみておもほゆる哉霜かれの野道はさらに行もゆかれす
いにしへのふる野の道をたつれきて清水を猶もむすひつる哉

關身とイ

いそく道がたく關もりまるともわれ計をはめさしたくへよ
相坂の關のせきもり出てみよ驛つたひの鈴きこゆなり
波の上に有明の月をみましやはすまの關やにとらさりせは
足からの山のもみち葉散なへに清見か關は秋風そふく
いもか家にくもの振舞しるからとなみの關をけふ越くれは
はるく尋れきにけり東路にこれやなこそ關とふまて
遠つ道いそきてすきし關路には八聲の鳥を人そとなへし
いとしく都こひしき夕くれに波のせきもるすまのうらかせ
白川の關にや秋はとまらんて月影のすみわたるかな
白雲のよそにきしを陸奥の衣の關を來てそ越ぬる
なにしおは、勿來といふも我妹子に我てふこさはゆるせ關守
相坂は越にしものを今はたなこそ關の名こそつらけれ
もる人もまたたえなくに川口の關のくきぬきはや朽にけり
月影の明石の浦をみわたせば心はすまの關にとまりぬ
こえぬより思ひ社やれ陸奥の名になかれたるしら川の關
戀わひて昨日もけふもこゆへきになこそ關を誰かすへけん

橋

板倉の橋をはたれも渡れともいなおほせ鳥をすきかてにする
まきの板も苦むすばかりなりにけり幾世かへぬるせたの長橋

打わたすまきのいた橋朽にけりまれにも人のこはいかにせん
東路のはまなのはしのはし桂波はおれともまたたてりけり
東路のさの、舟橋朽ぬともいもしきためはかよはさらめや
明かたになりやしぬらんたえくまの、つきはし人渡る也
けた朽て苦むしにけりをはた田の板田の沼にわたすたはし
朝夕につたふ板田の橋なればけたさへ朽てたちろきにけり
浪をふむ心地こそすれ川霧の晴まもみえずたてろうち橋
朽にけり人もかよはす石上ふるの、澤にわたすまろはし
夜は暗しいもはた戀しをはたの板田の橋をいかふま、し
今はみな橋柱さへ朽はて、はまなばかりをきわたるかな
思ふこと橋柱にそかきつて昔の人はくらゐましける
さ、かにのくもてにみゆる八橋をいかなる人が渡しそめけん
わりなしやわたりかたきは信濃なるきそちの橋の絶ま也けり
陸奥の朽木の橋も中絶てふみに今はかよはさりけり

海路

かさはやの沖津鹽さひ高くともいたてにはしれむこの浦うイまで
おほしほや淡路のせとの吹わけにのほり下りのかたはく覽
波のおるいらくたイこ崎を出る舟は早こきわたせしまきもする
淡路鳴繪嶋が磯にあさりするたな、し小舟いくよへぬらん
いかばかり波まをわけてすきぬらん都のかたの雲かくれゆく
おほみ舟あなの、沖のやしほちにからる計をまかちしけぬく
こしの海あゆの風吹なこのうらに舟はと、めよなみ枕せん
もとめ嫁おまへにかゝる柴舟のきたけになりぬよる方をなみ
手もたゆく浦つたひしてこく舟は沖のなころな、つる成へし
かけさかりゆらのと渡る柴舟のこきをくれたる歎きをそする

月影によもの嶋へを見渡せば鹽もかなひぬ舟出せよ君
追風にいたてにはしれつくし舟しきなみの關せきとむとも
終夜おほ嶋あらしおろす也たかさこ舟は今そ出へき
漕舟の跡しなればもしほやく煙やみちのしるへなるらん
舟とめてみれともあかす松風に波よせかくる天のはしたて
風吹はいそきしかひもなきさにてこきもやられぬ蜚小舟かな

旅

都出ていくかといふにまとりすむうなての森に今夜きぬらん
またしらぬ旅の道にそ出にける野はらしのはら人にとひつゝ
出しより驛の数をかそふればけふそはつかに草枕する
さよ中に思へはくるし陸奥のあさかのぬまに旅れしにけり
思ひ出ぬ人のなき哉かやれかり袂露けき旅のれ覺は
いさよひの月や我身をさそふらん旅の空にもゆく心かな
いく夜れぬしら玉よするましらゝの濱松かれにまづは折しき
し長島ぬのは山に旅れしてよはのひかたにめなさましつゝ
旅人の板間のあはぬあつまに宿るこよひそあまそきする
さすらふる我身にしあれば象瀉や蜚の笥屋にあまたひれぬ
初鴈の心空なる旅れにはわか故郷を夢にみえける
木下に旅れしつへし白雲のしらぬ山路は夢に見えつゝ
くれぬさき山を出んと急くまにしほりをせても越にけるかな
古郷に心ひとつはとめをきて草の枕をいくよむすひつ
道とをみ駒うちはやめ行旅は草の枕もむすひとめし
白雲のかゝる麓に旅れして大空をこそ友となかむれ

別

かへりこんこともさためぬ別路は都のてふりおもひいたせよ
行末をまつへき身社老にけれ別は道の遠きのみかは
けふはきは立別るともたよりあらはありやなしやの情忘るな
立別はつかあまりに成にけりけふやなこそその關をこゆるん
唐衣袖の別の悲しきにおもひたちけんことそくやしき
歸りきてみるへきみともたのまれはけふの別のあはれなる哉
とまるへき道にもあらぬ別ちはしたふ心や關となるらん
わするなよ歸る山路に跡たえて日數は雪のふりつもるとも
あま人の玉もかりつむ舟なれと漕わかるゝは悲しかりけり
たまきはる命もしらす別ぬる人をまつへき身こそ老ぬれ
秋霧のたちわかれぬる君により晴ぬ思ひにまとひぬる哉
庭鳥のひなのわかれの悲しきに曉ことにれをやなくらん
かへりこんこともおほれておもほえすけふの別をおしむ涙に
別路はせきもとめぬ涙かな行あふ坂の名をはたのめと
待ほとといつともしらぬ別路にそふる扇の名をたのむ哉
思ひわひたつてゆかんと思へともしほりたにせぬ別路そうき

山家

霜枯の草のさしのあたなれは賤の竹垣風もとまらず
山里はまれのほそ道跡たえて正木のかつらくる人もなし
霧こめて露のみしけき山里は袖をぬらさぬ夕くれそなき
山里はれ覺の床のさびしきに絶すなとなふ瀧枕かな
ひくらしの聲計するしはのとは入日のさすにまかせてそみる
山かつのあしのやへかき八重葎ことはりなりや人のわけこの
眞柴かり垣れもしめぬ山里の葎の門はとさしやはする

木枯のけしきのみかは山里は鹿のなくれも身にはしみけり
雲かゝる山のかれのあはらやは月のやとるを嬉しかりける
たなつ物み園にまきついさ子とも外面の小田にくはひ拾はん
つま木こるかくれ家にする山里にいかてか月の尋ねきつらん
月いととなけきし山にきてすめは猶西へゆくものにそ有ける
春きてもとふ人もなき山里は夜とゝもにこそさひしかりけれ
山里の柴おり／＼になつ煙人まれ也と空にしるかな
とふ人もなき山里の浅茅生は心のまゝにしけりこそすれ
木葉のみ散積りぬるしはの庵は嶺のあらしにまかせてそみる

田家

にぬはりのそしろの門田植しより秋は聞こそためさりけれ
稻妻の光りのまにもまるとるまで山田もるやに夜をあかす哉
かこひなき柴の庵はかり染のいなはそ秋のまかき也ける
我妹子か柴蒔ふけるひまをあらみ門田の庵に月そもりくる
小山田の稲葉の露にそほちつゝ人めもるみはくるしかりけれ
かりの庵にあまやとりする時のまな山田もるとや人はみる
山田守なしれのひたははへたれといなおほせ鳥のきなく成哉
秋の田に紅葉ちりしける山里なこともおほかにおもひける哉
むれてゐる田中の宿のむらすゝめ我ひくひたにさはくなる哉
わかゝくる門田のひたに驚きていなおほせ鳥のたちや騒かん
こきたれて雨はふりきぬ我宿のいなしる小田なかり亂るころ
ひたふるに山田の中に家ゐしてすなく小鹿をおとろかす哉
宿もせに朝毎稻をほすよりははてをゆひてそかくへかりける
いなしきのふせやをみれば庭もせに門田の稲は蒔ほしてけり
かりそめと思ひしやとにひたはへて獨山田をもるみとそなる

懷舊

小山田のいなはの露を打はらひかりそめふしをいく世しつ
をのゝえの朽しところの仙人のはかなき世には何かへりけん
埋木の下はくつれといにしへの花の心はわすれさりけり
思ひ出ることのみ身にはある物を何有明のあはれますらん
徒にすくる月日をかそふれば昔なしのふれこそなかるれ
末の世の人もみよとや岩代の野中の松をむすひなきけん
いつともと思ひてもなき世中になにと昔の戀しかるらん
朽にけりこれやなからの橋柱あはれむかしの跡はかりして
戀し共いはてそ思ふたまきはる立かへるへきむかしならねは
春の岡に登りて見けんたかとりは神の代ならぬ事をしと思ふ
思ひ出て袂をほちぬ折そなき昔をしるはなみたなりけり
老らくの影みるたひにますかゝみ猶昔こそこひしかりけれ
かそいろのすみしあれたる宿なればあはれ昔を戀しかりける
みし宿の庭は浅茅にあれにけりとなりのかたそいと戀しき
日にそへてかしの雪は積つゝふりにしかたそいと戀しき
我心すきにしかたに立かへりふるの都そいまも戀しき
年月はたちかはれとも石上ふりにしかたをわすれやはする

夢

遠妻は野へのはつ草かりそめの夢のうちにも逢を嬉しき
百年は花にやとりてすこしてき此世はてふの夢にそ有ける
中々に浮世は夢のなかりせはわするゝひまもあらましものな
わくらには戀しき人に逢とみる嬉しき夢はさめすもあらなん
うたゝれの夢なかりせば別にし昔の人をまたみましやは
れ覺つゝこはいかにして嬉しき夢ははかなき物としるゝ

夢にみし人を現にえて後そ世もすなほにははや成にける
さゝかにのいとうかりけん身の程を思へは夢の心地こそすれ
かなふやと龜のますらにとはゝやな戀しき人を夢にみつるを
みる人もあるかなきかに成行ははかなき世こそ夢には有けれ
宵のまに枕さためぬうたゝれの夢にゆめなもあはせつる哉
なかし夜の夢の中にてみる夢はいつれうつゝといかて定めん
うつゝにもまほろしの世と思ふ身に又夢をさへ何とみるらん
花園の胡蝶となるとみし夢はこはまほろしかうつゝとやせん
何にかはうつゝのうさもなくさまん夢みる程のなき世也せは
はかなしとたれかいひげんさめぬまの夢は中々久しかりけり
無常

空蟬のはかなき世とはしりながら蓮をねかふ人はまれ也
世中をいかゝたのまんうたかたのあはれはかなき水のあは哉
みとり子の遊ぶすさひにまはす火の空しき世をは有と頼まし
はかなきを思ひしらすはなけれ共あらましにのみ目を暮す哉
朝日まつ露はかりなる命もてなからへ思ふ人そはかなき
かけるふのほのめくよりもはかなきはかりの世頼む心也けり
世中は常にやはある岩代のをかへにたてる松をみるにも
飛鳥川うき木に積る淡雪の波たちくれはたのもしけなし
かけるふのあるかなきかの身ときけはいと益々あたし世中
山のはに入ぬる月を哀なるわれもさこそは世にはかくれめ
世中をなに歎くらん山川のうたかためくるほとゝしらすや
夢よりもはかなくみゆる世中をなと驚きてそむかざるらん
なく露を我玉しゐとしられはやはかなき世をいとはさる覽
消ぬまもえこそたのまれ道芝のかゝれる露の我身と思へは

花のちりおつる木葉をみるにても世の常なきは思ひしられぬ
けふとても世をのとかには思はれとあすしらぬ身を哀成ける
述懷

何をして翁さびげん朝ごとに鏡のかげをかつとかめつゝ
風をまつ草葉の露をおほけなく蓮の上にやとれと思ふ
月みてもむなしき空にあまる迄君か千世へんことを思ふ
身のうさはすきにしかたを思ふにもいま行末のことを悲しき
なそやこの我身はこしの白山かかしらに雪のふりつもるかな
入月のなこりの空をなかわれは西に心はかゝるなりけり
隙過る駒よりもとき陽炎の玉きはるいそちの春に逢にける哉
俊頼

もかみ川
おほかれと
なることは
なけれとも
うつもれて
あふけとも
悲しさに
くちはてぬ
あふみなる
さゝかにの
ふくかせの
せりつみし
なりはてぬ
せゝの岩門
行方もなく
もにすむ虫の
いはてはえ社
ひく人もなき
むなしき空は
れをるなけは
何ことにかは
打出の濱の
いか様にても
はけしき比は
あつきの袖に
昔をよそに
流石に御代の
わきかへり
せかれつゝ
われからと
なききなる
なけきすと
みとりにて
からころも
あはれとも
うちいてゝ
かきつかん
しりながら
宮木ひき
きゝしかと
はしめより
おもふ心は
底のみくつと
思ひしらすは
かたわれ舟の
浪の立ゐに
いふ事もなき
おさふる袖も
おもはん人に
いふとも誰か
事をはのきに
うはの空にも
みかきか原に
わか身の上に
雲のうへには

かよへとも
おられねは
いふせきに
たちましり
ぬきかへて
ほたしにて
つれもなく
なりにけり
さためなし
すくすとも
ことならし
露なれは
なりはてん
たのむへき
すみのえの
うせはてゝ
みくまのゝ
ためしには
かきつめて
をのつから
雲鳥の
みなしくり
つの國の
くり返し
返歌

難波のことも
うけらか花の
四方の山へに
うつふし染の
後の世とたに
行へきかたも
へにける年を
いま行末そ
たとへは獨り
夢にゆめみる
更にもいはし
嵐をたにも
程をはいつと
かくのみ常に
汐にたゝよふ
有にもあらぬ
浦のはまゆふ
なるをの松の
哀しれらん
忍はれぬへき
あやに叶はぬ
朽葉が下に
いく田の森の
心にそはぬ

ひさかたの
さきながら
あくかれて
あさころも
おもへとも
まとはれぬ
かそふれば
いなつまの
なからへて
心地して
冬かれの
またすして
しりてかは
うつせかひ
世中に
かさねつゝ
つれづれに
行末の
身なれとも
くせなれは
うつめれめ
いくたひか
身なうらむらん

月のかつらの
ひらけぬ事の
このもかもに
花の袂に
思ふひとく
かゝる憂身の
いつゝの十に
光りのまにも
すきにし計り
ひま行こまに
尾花か末の
本の罫に
暮にとたにも
猶故郷に
うつし心も
又何事を
憂にたへたる
徒ことを
人たのめには
はかなき事も
これもさ社は
それにつけても
蜚のたくなは

祝詞

世中はうき身にそへる影なれや思ひすつれとはなれきりけり
いつわれをわかなてしこののこりあて今は昔とひとり忍はん
哀しる人しなれば夜とゝもに我思ふことないはてやみぬる
唐國にしつみし人も我こゝく三代まであはぬなきなはせし
今はたゝ西に心をかけ草の葉になく露を我身とそ思ふ
あきらけき世には嬉しくあひ乍うれへ晴せぬ身ないかにせん
たくひなく人数ならぬ身のうさを思ひもしらてすこす也けり
いくめくりすこしきぬらん春秋にそむる心なうつろはせつゝ
むつことないはても年のへぬる歳老なともなふ人しなれば

君か代の數にくらへは何ならしちひろの瀧のまさこなりとも
神山のふもとをたとむるみたらしの岩うつ波や萬代のかす
松陰に宮作せる住吉のひさしき代なは君そみるへき
君か代はなかるの浦にひまもなくむれあるたつの齡なるへし
君かためゆはたのきぬをとりして、神をそまつる萬代までに
君か代はちひきの石をくたきつゝ萬代ことにとれとつきせし
いさなきのみことの時に定めてき我君ひさに世にまさんと
君か代は松のうはゝになく露の積りてよもの海となるまで
にきはゝぬ民のかまともあらしかし國榮へたる君か御代には
底きよみなかれ絶せぬ佐保川のせきりの波や萬代のかす
奥山のやつおの椿君か代にいくたひ陰をかへんとすらん
住吉の神にそいのる松の葉の數しらぬまで君か御千代を
君かへんよはひのほとなかそふれば八百萬代を千たひ也けり
君か代はなかるゝ川の底清みちたひすむへきかけそみえける
何事につけてか君をいのらまし八百萬代もかきり有けり
枝しけきしら玉椿君か代にいくかへりかはおひかはるへき

群書類從卷第百六十八

和歌部二十三首二

永久四年百首
永久四年十二月廿日
號次郎百首

題

春

元日

賭弓

稻荷詣

躑躅

夏

賀茂祭

樹陰

蟬

秋

殘暑

九月九日

狼田

餘寒

春日祭

未發花

雄

殘鶯

夏衣

避暑

龜

晚立

秋夜

草香

春日

石清水臨時祭

紅梅

桃花

蛙

夏草

夏虫

瞿麥

秋風

曉月

薦

春曙

遊糸

志賀山越

落花

扇

夏獵

鷓鴣川

七夕後朝

八月十五夜

稻妻

秋山

松虫

冬

寒

椎柴

佛名

戀

忍戀

不見書戀

雜

雲

原

社

元服

王昭君

隣

作者

鈴虫

螢

初雪

薪

舊年立春

衾

野行幸

落葉

鴛鴦

五節

貢調

隔一夜戀

經月戀

且見戀

寢覺戀

待年戀

星

出湯

石

故郷

小篠

仙宮

泉郎

蜘蛛

水海

寺

洋

唐人

船

猿

從三位行左京大夫源朝臣顯仲

前越前守正四位下藤原朝臣仲實

前木工頭從四位下源朝臣俊賴

散位從五位下源朝臣忠房

從五位下行皇后宮小進源朝臣兼昌

常陸肥後守定成女本名肥後 皇后宮女房

大進 同定成女 六條院女房

春

元日

旅人のかりの篠やに年暮てけふ二とせに成にけるかな

顯仲 實

萬世の春のはしめのけふしよりつかへまつらん年にあひつゝ

俊賴

けふよりは我なもちゐの増かゝみ嬉しき影をうつしてそみる

忠房

打なひきけふ立かへる年なみのよらぬみきは、あらしとぞ思

兼昌

冬の夜を旅の空にてあかしてや都に春の今朝きたらん

常陸

よき事をまずみの鏡けふ見ればかれて千とせの影そうかへる

大進

諸人の花見ん春のはしめとやけふは思ひのひらけぬる哉

餘寒

春日

谷深みさこそは雪の消さるめいかにさゆるそ春の山里
春きては岩まの凍とくへきに冬にもこえてさゆる比かな
衣手のうすきや春のせきならん我身はいとゝしみこほりつゝ
雪さえぬ青葉の山のあなつゝら春はくれとも猶さむきかな
春風の猶さむしろなをかされはや旅のよ床はさえも社すれ
春なれと雪ふる年の猶ちかみ小野のすみかまけさや焼らん
雪消ぬみ山かくれは猶さえて春のしるしも見えそ有ける

春曙

思へとも昔の秋の悲しさはつきせさりける春の日くらし
大千鳥轉る春はうら／＼となれともわか身くもりつゝのみ
數ならぬ宿には春のこさりせば暮ぬなさはなけかさらまし
から衣春たちきぬと聞しより日のうら／＼と成にけるかな
春の日は袖山遠き里なれや暮まつほととの心もとなき
花もまたにはほはすみゆる山里に春の日くらしなめなそする
わたつ海のうら／＼照す春の日に曇もみるめなかりやはす
天の戸をほのかにあけてこやの野の霞と共に立そやすらふ
浅みとりかすめる空の曙を又身にしめて誰か見らむ
いなめは石のかけ橋ほの／＼もしはし休らへまほならず共
憂事のまきさゝとしもなけれともなめられけり春の曙
山端の横雲はかりわたりつゝみとりに見ゆる明ほのゝ空
梓弓はるかにみれば山のはに横雲わたるあけほのゝ空
花さかり心も空にあくかれておきゐてそみる春の明ほの

遊糸

うちみたれ^{かすめる}するみ空の遊糸に天の河せの水をひかはや
雲雀あかる二月の日に遊糸にみとりの空もまかひみえけり^夫

さゝかにのくもらぬ空のいとなれは遊ふけしきの絶すも有哉
しつくて吹くる風もなき空に亂てあそふいとそみえける
雲晴て天つみ空に遊糸のよるゝはなと見えぬなるらん
はるゝと淺緑なる大空にあそふ糸をやなかくくらさん
つれゝとのときき空に遊ふいとを我より外に人やみるらん

賭弓

春立はあつさのま弓引つれてみかきのうちにまとぬをそする
春されはかた矢たはさみともれうち我かち弓の數をかさなる^{をさしけい}
引ならすたつかの弓の矢をはやみともれにまとの鳴かはす哉
九重のうちに射てふあつさ弓はるかに雲のほかに聞かな
梓弓ひきゝたれもいのるらんかたわくけふの雲の上人
霞しく春の始の梓弓もろ矢しつるを嬉しかりける
あつさ弓春の日くらし諸人のよに入までも遊ひつるかな

春日祭

春ことにつけふいのられて春日山松のさかへもい^ろやまさり也^{けり夫}
天の下たえずを君はさかゆへき御笠の山の神をまつれは
二月のはつさるなれや春日山みれとよむまていたゝきまつる
まつらるゝ神の御前の乙女子も花もひもとく春日山かな
こまなへて御笠の山へ行人はあめの下いのるつかひなりけり^夫
けふ祭るしるしにとてやその神は三笠とゝもに天くたりけん
御笠山ふりにし代より天の下なひきてまつるけふにそ有ける

石清水臨時祭

山水のなかれにうかふ松か枝にかさしの藤をかけてこそ見れ
男山かさしの花も春なれはなみの衣もかはる^はけふかな
たつ程のかされかはらけなかりせはおほえて淀の渡せましや^夫
春ことにすみもまさなん石清水かさしの花のかけさやにみん
おとこ山峯の櫻に諸人のかさしの花をたくへてそ見る^夫
君か代ののときき影をくみ見れば流たえせぬ石清水哉
石清水かさしの花のさしなからいのる心はくみてしるらん

志賀山越

またしらぬ人と共にそこえにけるしかの山路の跡もなけれと
春霞たなひく山の山の井に影見るさへもあさましき哉
志賀の山心はなにそ越つれと霞にさへもまよひぬるかな
家つとにおれる櫻をちらさしといそきそしつるしかの山こえ
立わたる峯のかすみはもろともにしかの山越するにや有らん
峯つゝき花に心のとまりつゝゆきもやられすしかの山こえ
中空にゆきもやられすおほつかな霞はれせぬしかの山越

稻荷詣

いなり山しるしの杉をたつれきてあまねく人のかさすけふ哉^夫
稻荷山しるしの杉を春霞たなひきつるゝけふにも有哉^夫
いなりにも思ふ心のかなはすはしるしの杉のおられましやは^{山イ}
稻荷坂さかしくとまる心かなみな杉のはなふけるいほりに
をそくとく宿をいてつゝいなり坂のほれはくたる都人かな
いなり坂しるしの杉のさしはへて思ふ心をけきそかけつる^夫
いなり山しるしの杉を尋つゝゆふかけてこそ歸りにけれ

未發花

しら雲と見ゆ計咲け山櫻さらは入日にまかひしもせし
 春^夫くれと野への霞につままれて花のふまひのくちひるもみす
 めくむより景色ことなる花なればかれても枝のなつかしき哉
 おほかかなぬひのとちめやまたからんまたほころひぬ山櫻哉
 さかぬよりかれてそいとふ花の木枝吹おるな春の山かせ
 何ゆへか春をはまし山櫻こゝろもとなくほふばなかな
 花と見て尋きつれば吉の山人はかりけるみれのしらくも

紅梅

くれなゐの衣の袖に梅花あかぬ色とや折かさぬらん
 紅に咲かさなれる梅のはな新羅にやりて何にならん
 紅の梅かえになく鶯の聲の色さへことにもあるかな
 匂ふかもなつかしきかなわきもこか衣に染る紅のむめ
 見る人のあくしなれば梅花うすくれなゐの色もかへらす
 たくひなきかほりにそへいとしく紅ふかく匂ふ梅かな
 色もかもめつらしきかな紅にいまさきそむるむめの初花

桃花

かきこしに枝さしかはすも、の花誰も千とせを重ねてやみん
 薄くこくけふ咲あへる桃のはな酔をすむる色にそ有ける
 誰か又見て忍ふらん山かつのそのふの、の花のよそめな
 咲にけりいはゐの水に影みえて三千とせになる桃の初花
 春霞立かくさなん道のへのかきれに咲るひめも、のはな
 わかその、桃のはつ花咲にけり三千世すくへき春のしるしに
 三千世へん春をしれとて桃のはな君かそのにそ先咲にける

落花

谷川になかれて花のうすまきは岩れか瀧の波かとそ見る
 まち吹花のあたりの風下は時そともなき雪を降ける
 風吹は梢もいその心地して花のしらゆふなみそえける
 櫻花ちりぬる宿の庭の面は見にこし人の跡たにもなし
 木のもとに散つもりたる花をこそ庭櫻とはいふへかりけれ
 庭もせに散しく花の白ければ雪ふるとしその心地こそすれ
 残なくなそやちるらん櫻花おしまれぬ身もあれば有世に

躑躅

しつのおかりてはやせるなかつ、し若枝に花の咲にける哉
 紅のふりての色岡つ、しいもかま袖にあやまたれつ、
 夫^夫百たらぬやすみ坂のしらつ、ししらしな人は見にこそる共
 夫^夫風ふかて波のなるやと見るまてにいそつ、きさく白つ、し哉
 夫^夫入目さすなちの岡邊のなかつ、し夕紅の色そまされる
 夫^夫東路やつ、しの岡をきて見ればあか裳のすそに色をかよへる
 岡つ、し折てなゆかん花の色をあかきそたのみ日は暮ぬとも

雉

あはれしや焼野にもれし峯のわの村草かくれ雉なく也
 夫^夫御狩するかたの、みのを今朝見ればひとつ松れにき、す鳴也
 夫^夫いと、しくなのかありかへやるいぬを爰にありとや鳥の鳴寛
 雉なくのへを霞はつ、めともほろゝともれて聲を聞ゆる
 狩人はこゑをたつぬとしらればや霞の中にき、す鳴らん
 あふ事のかたの、雉妻戀にむへほろゝとたちあ啼らん
 鈴の音や近く成らん御狩のにかくろへかれて雉なくなり

殘鶯

霞しく春くれ竹の風の音に聲うちそへて鶯そなく
つれ／＼を何につけてか慰めんもさえつりの鳥なかりせば
けふさらは鳴つくしてよ鶯の春の後は誰かしのはん
中々に春くれかたの鶯ははつ音よりけにめつらしき哉
をそ櫻にほふ梢の鶯は初こゑよりめつらしきかな
残なく春の目かすは過ぬれと猶うくひすそたえず音なふ
なくさむる方やなからん花もちり春もくれ行鶯のこゑ

蛙

たかせ舟のほる堀江の水をあさみ草かくれにてかはつ鳴也
春深みさやまの池のね縄のくるしげもなく蛙なくなり
時しもあれみなふち山を朝行はこのもかのもとにかはつ啼也
谷川のあさき瀬ことにみかくれて妻よふ蛙聲きこゆなり
いか計いふせかるらんこやの池のみくさのもとに集かはつは
暮て行春をおしとや諸聲に井手の蛙のすたくなるらん
春ふかみ蛙のすたき聲す也ゆきてやみましゐての山吹

夏

賀茂祭

めつらしく年に一度あふひをや神も嬉しと見そなはすらん
白雲の八重のななる國人もけふのみあれにあはぬあらしな
引つれてわたる景色をきてみればいつきを神のかさり成ける
かけて行人はかはれと年をへておなし色なるあふひくさ哉

夏衣

宮人のかさしてかへるあふひ草紫野までみとりなるかな
人よりもたのみそかくる葵草わきても神のしるしみせ南
年をへてけふかさしくる葵草神にたのみをかくるししか
ねきをうすみれる衣のいかなれば袂に風を猶へたつらん
時といへはまかれもとくる夏なれや猶ちきされかし蟬の衣
夏衣きみか御けしのあやなれや裏なきさへそしたにきまうき
五月雨にぬれにけらしな夏衣ひとへひかきにかけてほさん
夏たてとしるしも見えず衣川いつも舟よる浦しなけれは
身にちかくなるとはすれと夏衣ひとへのみはえこそ頼まれ
いつしかと花のたもとをぬきかへてうすき衣のうらめしき哉

夏草

しつのめかをはき摘てし春の野に夏は草根を分てやとりぬ
くららのちかやか下のひめ百合のれ所人にしられぬそうき
ひさかりはかされかくれに立よらて誰を戀草もえたてらん
夏山のすその草やふからん分くる人の袖の露けき
夏くさはしけりにけりなやく／＼と春みし野への道まとふ迄
見わたせばむかひの岡の夏くさをたかか駒の爲にかるらん
故郷のしつけき庭は夏草のとこるえかほにしける成けり

瞿麥

山かつのかさほなれともなてしこは變らぬ色を盡してそさく
こなつの是にしく花なかりけりまかきに咲る大和なてしこ
今朝も又いさ見にゆかんさゆりには枝さしかはすやまと撫子
石竹の花さくやとにいかにしてふしよき竹をませにゆはまし

おほつかなかなてしこなこ、迄にたれかわたして植初けん
露はらひおる人もなきふる里に獨のみぬるとこなつの花
よそふるも猶なつかしみ見ることに哀つさせぬ撫子の花

扇

常よりも身にもしむかな夕去の君にあふきの風のけしきは
ふりつみし雪に心の^夫かよへばやあふきの風の涼しがるらん
神々に心なかなさなち^夫かふともききひらきてそ扇なるへき
末ひろく七はねにてはる扇やつれにけりなもとの姿に
手なるれと扇そつらき我せこかますみの色をかくすと思へは
とにかくに袂すしく成行は扇の風に秋やたつらむ
てなれける主はしられと紫のおふきの風のなつかしきかな

樹陰

道のへの木の下水を結びつゝ夕かけ待そ久しかりける
夏の日もやすの河原の柳かけ吹こす風は下そ涼しき
秋もまたたちこめさきに衣手のもりの下にはほのめきにけり
すゝしさのおいその杜の下なれと夏てふ事をわすられにける
夏河の岸の柳の葉をしけみ波もかけによるにそ有ける
思ふとちこのもかのものにむれあつゝ夏は木陰を立うかりける
東路のまた行末ははるけきにけふも木陰に日なくらしつゝ

避暑

聞にさへ涼しく成ぬ若松のもりの梢のかせのしらへは
大原やおほろの水に行ふれば夏はななる物にそ有ける
水はよしあたりもしみゝ吹すくる風さへさゆる玉の井の里

すゝむとて賤のふせやを出つれば程なく汗の入にける哉
玉たれのみすさはく迄風ふけはよとのゝうちも涼しかりけり
おりたちてし水の里にすみつれば夏をば外に閑渡るかな
夏くれはふせやか下にやすらひて清水の里にすみつきぬへし

夏虫

ともし火の光に集く夏むしのそむく命をよそにやはみる
いかにしてもゆる中にも入ぬらん思に身をもかふる虫哉
燈に入夏むしのはかなさを身にたとへてもあかしつるかな
夏むしは思ひにしつむ世中にうきながらふる身なにかにせん
草むらにすむ夏虫は去年の秋くちし下葉のなるにや有らむ
露の命はかなくみゆる夏虫のたれを思に身をこかす覽
何ことをいとかくはかり夏虫の思ひあまりてみなこかすらん

鵜川

うふれおほく下す時しも瀧川にやなくつれして鮎子さはしる
おちくたる鵜舟のかゝりあかければ夜川の底も澄まさりけり
篝火のほかけに見ればますらは袂いとなく鮎子波らし
さ夜すからあゆふす河に篝火の影と共にうかひつるかな
うかひ舟つなてくたすと見えつるは急きてたくるたなは成見
かひのほる鵜舟の繩のしけゝれば瀬ふしの鮎の行かたやなき
大井川うふれにともす篝火のかゝるせにあふ鮎そはかなき

夏獵

夏のたつおきのはすりの風の音にふすのゝ鹿は今やおくらん
夏草のしけみにかくるせこ繩にもろゝ男鹿にあひはつれつゝ
夏の野におちくる鹿を待かけてあふにあふ共みゆるせこかな

夏かりのせこかい野に立鹿は秋よりさきにれなや鳴らん
れらひするしつかさまを小男鹿の一村草と見てやよらん
夏草のしけみを分てかりくればかくれもあへぬ鹿のむらとも
常ならぬかりのこの世はせこかい夏もの鹿の心ち社すれ

蟬

山河の岩越波に打そへて谷ひくも也蟬のもろこゑ
東路やけさたちくれは蟬の聲高師の山に今そ鳴なる
うつ蟬のいてかたくても過すかないかて此世に跡をとめ
袖かくるならのしつ枝に啼蟬の聲はたかくも聞ゆなるかな
夏山のならのひろ葉にかくるへてこのものもに鳴蟬の聲
深山へを獨こゆれば遠近の道しるへなるせみの聲哉
聲たてゝいかに鳴らんうつせみの我身からとは思ひしらすや

鼈

眞木のやの心ちこそすれ柴の戸をいかて水鶏のかくたゝく寛
もしもやと思ながらにこたふればくせと水鶏の人はかるなり
心からたけたの里にふしそめて幾夜くぬなにはかられぬらん
たゝくともさやはなるへき柴の戸はとききはよはの水鶏也
水鶏ゆへあけてくやしき妻戸かな浦嶋か子のはこならなく
おほつかなうはの空にや契けんいつくともなくたゝく鼈は
夏の日のためかれ時におほつかなたゝく鼈の聲はかりして

秋

殘暑

ひとへなる蟬のは衣秋くれは今いくへなをかされても見ん

秋立しそのよの空は涼しくて猶六月のけしきなるかな
穠^夫きては風ひやかなる暮も有^にあつれしめらひむつかしのよ
初秋のまた涼しくもあらぬ間はあつさもなくて夏や過けん
かたみにはあつさ計を殘しをきて秋にもあはて夏はいぬめり
秋かせの萩のはすくる音はしてまた衣手のあつくも有哉
白露とあらそひなからけふも又^猶弱はえこそをかれさりけれ

晩立

夕立やくものさはきに風はやみ露をとゝむる草のはそなき
ゆふ立やたらちねならぬれかほも猶なつかしき女郎花かな
ゆふたちはきりにきるとも梓弓いにいてさへはくれすも有哉
朝日山さしてきたれと夕立にかつく袂はひるよしもなし
夕^夫たちにちちの溝河まさりつゝふらぬ里まで流きにけり
故郷をたつぬる道にかきくらし村雲さはくゆふ立の空
かき曇空もとゝろになる神の物おそろしき此ゆふへかな

秋風

秋のよの礎の音を聞からにうちつけなれや風そしむなる
思へともうきことしけき秋風は身にしむ計悲しかりけり
秋きては忍ひなあへそと思へばや風をとつれて暮かゝる寛
色見えて身にもしむ哉さかるなくこはきか原の秋の夕風
眞葛原もみちの色のあか月にうら悲しかる風の音かな
うらふれてかされぬ袖は秋かせの立につけてそ物は悲しき
ありやとも人はとはれと秋風の萩の上葉に先そ音なふ

七夕後朝

衣手のうきつにぬれて歸かなあさ吹風もなみたてなくに

ひこ星のいは枕してさぬるよは霧たちこめよ明はあくとも
彦星はあめのなしての八重霧に道ふみまとへ又やかへると
うち別袖ふるたにもみるへきを何へたつらんあまの河霧
朝風に河浪さはけ一夜つま玉ゆらたにも立かへるへく
七夕のあかね別を思やる我衣手はつゆけかりけり
天川今朝は瀬せもしらしかしせきとめかたくあかね涙に

八月十五夜

むすふ手の水にやとれる光をそこよひはいと、望月とみる
すみのほろ光のきよき秋しまれしなへうらふれ月を見る哉
望月の駒の毛つけをあふ坂の杉間の影にあはせてそみる
月かけも秋の日數をかそへてやこよひもなかにてりまさる
もちつきの山のは出るよそほひにかねても光る秋の空かな
秋の夜の月は海よりいづれはやしほとゝもには満わたるらん
いとほきの葉分の露の数々によるともみえすてらす月影

九月九日

人のみな命はるかに長月と聞につけてそけふは嬉しき
けふことに菊を薬とする人は千とせのなかは過といふ也
散を見はしほめるかほか花なれはなつ共菊のしるしあらめや
幾へともいさ白菊をえこそみね綿きせながら手折朝は
長月の九日までにふくみたるとなかの菊の花ひらけなん
おる菊の露にぬれぬるけふよりや千年の秋に逢んとすらん
老はて、露のしるしもなき身には猶や折てん長月の菊

秋夜

身のうさを思ひあかせは草枕いと、露けき秋のよなく
丸寝する長月のよの久しきは鳴なきぬとてたのまれもせず
秋のよのとりの初音はつれもなき人まちし夜の心地社すれ
明かたき秋のよなく、幾度か窓うつ雨にめなさますらん
秋のよはなかにの浦による涙のかへすく、それさめられける
秋のよを明かたしとは獨れの旅の空にそおもひしらるゝ
虫の音もちゝにみたるゝ、秋のよの哀ないかゝいひつくすへき

曉月

ことほりや見るほともなく入ぬめり夜深く出る山端の月
いくとせを過ぎきぬらん秋のよの有明の月を我友にして
有明の月のけしきも侘しきに見せばや物を思ふさかりは
長月の廿日の月と諸ともにねやへもいらてあかしつるかな
岩まゆくいさらなかはのせはしきにわれてやとれる有明の月
有明の月の光を友にしてまたふみなれぬ山路にそいる
かれのをとにおとろかされて西へ行月の光をなかめつる哉

嵐

袖かはす人もなき身をいかたせむ夜寒の里に嵐吹なり
くる人もなきあはらやの柴の戸は峯の嵐にまかせてそみる
吹まよふ嵐の音や侘人の涙の玉のなともなるらむ
さもこそはみねの嵐のあらからめあなはしたなの横の板戸や
秋深み木々の紅葉のちるまゝに聲よはり行山嵐のかせ
部山おろす嵐のはけしきに柴の戸ほそも明ぬころかな
よしの山みねの嵐のはけしさにさゝの庵は露もたまらず

稲妻

夏かりのせこかい野に立鹿は秋よりさきにれなや鳴らん
れらひするしつかさまな小男鹿の一村草と見てやよらん
夏草のしけみを分てかりくればかくれもあへぬ鹿のむらとも
常ならぬかりのこの世はせこかい夏もの鹿の心ち社すれ

蟬

山河の岩越波に打そへて谷ひくも也蟬のもろこゑ
東路やけさたちくれは蟬の聲高師の山に今そ鳴なる
うつ蟬のいてかたくても過すかないかて此世に跡をとめ
袖かくるならのしつ枝に啼蟬の聲はたかくも聞ゆなるかな
夏山のならのひろ葉にかくるへてこのものもに鳴蟬の聲
深山へを獨こゆれば遠近の道しるへなるせみの聲哉
聲たてゝいかに鳴らんうつせみの我身からとは思ひしらすや

鼈

眞木のやの心ちこそすれ柴の戸をいかて水鶏のかくたゝく
もしもやと思ながらにこたふればくせと水鶏の人はかるなり
心からたけたの里にふしそめて幾夜くぬなにはかられぬらん
たゝくともさやはなるへき柴の戸はときけはよはの水鶏也
水鶏ゆへあけてくやしき妻戸かな浦嶋か子のはこならなく
おほつかなうはの空にや契けんいつくともなくたゝく鼈は
夏の日なたをかれ時におほつかなたゝく鼈の聲はかりして

秋

殘暑

ひとへなる蟬のは衣秋くれは今いくへなをかされても見ん

秋立しそのよの空は涼しくて猶六月のけしきなるかな
檐^夫きては風ひやかなる暮も有^にあつれしめらひむつかしのよ
初秋のまた涼しくもあらぬ間はあつさもなくて夏^に過けん
かたみにはあつさ計を殘しをきて秋にもあはて夏はいぬめり
秋かせの萩のはすくる音はしてまた衣手のあつくも有哉
白露とあらそひなからけふも又^猶扇はえこそをかれさりけれ

晩立

夕立やくものさはきに風はやみ露をとむる草のはそなき
ゆふ立やたらちねならぬれかほも猶なつかしき女郎花かな
ゆふたちはきりにきるとも梓弓いにいてさへはくれすも有哉
朝日山さしてきたれと夕立にかつく袂はひるよしもなし
夕^夫たちにちの溝河まさりつゝふらぬ里まで流きにけり
故郷をたつぬる道にかきくらし村雲さはくゆふ立の空
かき曇空もとゝろになる神の物おそろしき此ゆふへかな

秋風

秋のよの礎の音を聞からにうちつけなれや風そしむなる
思へともうきことしけき秋風は身にしむ計悲しかりけり
秋きては忍ひなあへそと思へはや風をとつれて暮かゝる
色見えて身にもしむ哉^夫かるなくこはきか原の秋の夕風
眞葛原もみちの色のあか月にうら悲しかる風の音かな
うらふれてかされぬ袖は秋かせの立につけてそ物は悲しき
ありやとも人はとはれと秋風の萩の上葉に先そ音なふ

七夕後朝

衣手のうきつにぬれて歸かなあさ吹風もなみたてなくに

ひこ星のいは枕してさぬるよは霧たちこめよ明はあくとも
彦星はあめのなしての八重霧に道ふみまとへ又やかへると
うち別袖ふるたにもみるへきを何へたつらんあまの河霧
朝風に河浪さはけ一夜つま玉ゆらたにも立かへるへく
七夕のあかぬ別を思やる我衣手はつゆけかりけり
天川今朝は瀬せもしらしかしせきとめかたくあかぬ涙に

八月十五夜

むすふ手の水にやとれる光をそこよひはいと望月とみる
すみのほろ光のきよき秋しまれしなへうらふれ月を見る哉
望月の駒の毛つけなふ坂の杉間の影にあはせてそみる
月かけも秋の日數をかそへてやこよひもなかにてりまさる
もちつきの山のは出るよそほひにかれても光る秋の空かな
秋の夜の月は海よりいづれはやしほとゝもには満わたるら
いとほきの葉分の露の数々によるともみえすてらす月影

九月九日

人のみな命はるかに長月と聞につけてそけふは嬉しき
けふことに菊を薬とする人は千とせのなかは過といふ也
散を見はしほめるかほか花なれはなつ共菊のしるしあらめや
幾へともいさ白菊をえこそみね綿きせなから手折朝は
長月の九日までにふくみたるとなかの菊の花ひらけなん
おる菊の露にぬれぬるけふよりや千年の秋に逢んとすらん
老はて露のしるしもなき身には猶や折てん長月の菊

秋夜

身のうさを思ひあかせは草枕いと露けき秋のよなく
丸寝する長月のよの久しきは鳴なきぬとてたのまれもせず
秋のよのとりの初音はつれもなき人まちし夜の心地社すれ
明かたき秋のよなく幾度か窓うつ雨にめなさますらん
秋のよはなかなの浦による涙のかへすそれさめられける
秋のよを明かたしとは獨れの旅の空にそおもひしらるゝ
虫の音もちゝにみたるゝ秋のよの哀ないかいひつくすへき

曉月

ことほりや見るほともなく入ぬめり夜深く出る山端の月
いくとせを過ぎきぬらん秋のよの有明の月を我友にして
有明の月のけしきも侘しきに見せばや物を思ふさかりは
長月の廿日の月と諸ともにれやへもいらてあかしつるかな
岩まゆくいさらなかはのせはしきにわれてやとれる有明の月
有明の月の光を友にしてまたふみなれぬ山路にそいる
かれのなとにおとろかされて西へ行月の光をなかめつる哉

嵐

袖かはす人もなき身はいかにせむ夜寒の里に嵐吹なり
くる人もなきあはらやの柴の戸は峯の嵐にまかせてそみる
吹まよふ嵐の音や倍人の涙の玉のなともなるらむ
さもこそはみねの嵐のあらからめあなはしたなの横の板戸や
秋深み木々の紅葉のちるまゝに聲よはり行山嵐のかせ
部山おろす嵐のはけしきに柴の戸ほそも明ぬころかな
よしの山みねの嵐のはけしさにさゝの庵は露もたまらず

稲妻

はかなしや田中の里は稻妻の程なきかけをたのめてそふる
秋の夜のいなはの露に稻妻の光をやとす程は我身か
めもかれすまほる山田の稻妻の光にふれてたゝならす見ゆ
世中のはかなき程にくらふれば猶いなつても久しかりけり
かつらきや木かけの閑イにひかる稻妻を山伏のうつ火かとこそ見れ
里となみ山田のいははいなつまの光のもるを友と見るかな
夜もすから山田の庵は稻妻の光をのみやともし火にする

稂田

谷深みそしろの狹井にいほりして稀にそたてる稂田ほ夫の稻
そしろたのわさたかりての稂いれほのさら／＼に秋とみゆ覽
よしさらは生るひつちのかしけつゝ物にもならて霜枯れとや
ひたかけぬおくととやみんよそ人は室のかり田におふる稂を
いなしきやそともの小田にふす鴨のかくれぬはかり稂生に鳥
見わたせば山田の稂ひこはへてほにふる程に成にけるかな
かりばてゝもる人もなき小山田におふる稂のあるは有かは

草香

峯におへは村鳥おちく草の香あさきすそのそともやたはさめ
雲間よりさえたる月を軒ちかくかはの淀みにうつしてそみる
い往くさ來くさのかふ心やつきめ覽今のほり道石ふますとて
春よりはほえ出しかと草香かは秋風ににほふ成けり
秋の野の花分行はくさ／＼の香うつりぬらん我衣てに
我袖に草の香うつる秋の野の旅れの床はなつかしきかな
藤はかま匂ふあたりはおひいつる草の香のみなつかしき哉

薦

み山木の色かへぬ枝もみえぬまてかゝれる薦は紅葉しにけり
田豆の木にはひおほはれる薦にしも時しり顔に紅葉しにけり
契ありてはひかゝるとも見ゆる説つたや梢のいもせなるらん
はふ薦のなき世なりせば松かえにかゝる紅葉の色をみましや
そなれ松枝に錦のかゝれるは木つたふつたの紅葉なりけり
山里のむくらのかきにはふつたの色にて秋の深をそしる
秋霧の龍田のもみち色ふかく時雨そめてやはひもさすらん

柞

山里のあらしにまよふ柞原たもとにかけて見るそ嬉しき
柞原露のしらはひさしつれば時雨の雨そうは染はする
はくゝみし梢さびしく成ぬらん柞の杜のちり行みれば
夫いはゝやないはたのもりの柞原へたつるきりは立ものくやと
片岡のをふしましりに生しける柞の小枝初もみちせり
うすくこきおなし梢の柞原わきて時雨の降にやあるらん
薄くこく木々のこすゑは見ゆれとも柞の色の身にもしむ哉

秋山

都人きても見よかし時雨つゝうつるふ山の秋のけしきを
ま夫こも色夫の青葉の山も秋くれば露の雲に下紅葉せり
都にて誰にかたらん紅葉する龍田の山の峯のけしきを
行やらて秋の山路に暮めとも下てる峯の紅葉やはなき
いくそたひうしとか人にみえつらん月待出る秋の山のは
もみち葉のくれなる深き秋山に心を染て思ひぬるかな
夫の山に朝立鷹も聲たてゝ秋の哀はしのはさりけり

松 虫

たのめつゝこぬつらきにそ終夜今や／＼と松虫のこゝ
松むしの葎の下に聲するは野原の風や夜寒なるらん
夕されは野へもや物を思ふらん松虫鳴て露しめりけり
夫々
ときは山麓の野へに年をへていつもかはらぬ松むしの聲
夕去は萩の下葉やくらからん月まつむしの聲きこゆ也
暮には誰かたのめし身をつめは人まつ虫を哀とそおもふ
獨あてなかわる秋の夕暮はおなし心に松むしそなく

鈴 虫

鈴虫の聲をすゝかと聞からに草とる鷹そおもひてらるゝ
夫々
東路の不破の闕やのすゝむしをむまやにふると思ひける哉
數ならてふりぬることな鈴むしと鳴かはしてもあかしつる哉
時雨ふり色かはり行淺茅生に哀なるかなすゝむしの聲
御狩のになく鈴むしをはしたかの草とりて行音かとそ聞
秋をへてかはらざりけりあなによしふるき都の鈴虫の聲
あさちふになく鈴虫の聲きけはふりにし方そいと戀しき

蜚

露すかる小篠か下のきり／＼す亂てかゝる音をやなくらん
野風のみさひしき旅の草枕やかてゆひめに蜚なく
鳴かへせ秋にをくるゝ蜚暮なは聲のよはるのみかは
獨すむよもきか宿に秋きては蜚こそともになきけれ
秋のゝにやとりなすれば蜚かたしく袖のしたになく也
露むすふ草の枕の程なきに所えてなくきり／＼すかな
れくたれのかみの中なるきり／＼すかしがましくも亂れ鳴哉

冬

霽

夫々
夕去は雪ふるさとの柴のやはしつくにてこそみそれとはしれ
鷹は夫々
あらち山ゆきけの空に成ぬればかいつの里に寒ふりつゝ
みそれにははなたの袂かへるとも我違つまを見てこそゆかめ
ひまなあらみ竹のすかきの下さえてよな／＼降は寒なりけり
夕暮のみそれにしみやとけぬらんたるひつたひに雪落なり
夫々
冬さむみ風もとまらぬ山里にいとみそれそふり増りける
あめの下ふるとはすれとはかなきは庭にたまらぬ雲成けり

初 雪

さらぬたに人もとひこぬ山里にあやになれやけさの初雪
都人先こは見せん山里の庭の苦ちにふれるはつゆき
めつらしき花の都の初雪を九重にさへふらせてそ見る
冬きぬと聞つるまゝにいちしるくいちしの原にふれる初雪
夫々
はつみゆき降にけらしなあらち山こしの旅人そりにのる迄
霜かれの草にやつるゝ古郷はけさ初雪のめつらしきかな
めもはるに花かとそ見る霜かれの草木もわかすふれる初雪

野 行 幸

御狩野の草のおはなのなひく迄羽風はけしきましらふのたか
あかれさす御狩の小野にたつきゝす空とる鷹にあはせつる哉
紫の御かりはゆゝしましるなるくちの羽かひに雪ちるほひて
空とらぬ鷹もあらしな御かりのに雲の上人あはすと思へは
あはせつるましろの鷹も心あらは御こしちかくて空にとら南
冬ふかき野への御幸のけふしもあれ白ふの鷹をすへてける哉

落葉

はしたかも今日の御幸に心ありてふるまふ鈴の音こそことなる
宿にしく錦を見れば嬉しくてさすかに木のはちるはおしまる
紅葉はを夜はの嵐のしく庭は物忘せて朝きよめすな
はけしさのみ山嵐はてもなきにいかて木のはをこき散すらん
散しけるしつはた山の紅葉はを昔路にされる錦とそみる
相坂のかけひの水になるゝは音羽の山の紅葉なりけり
ぬれ色の錦を庭にしくものは時雨にきほふ紅葉成けり
紅葉はのちる木のもとに宿かりて旅れの床に錦をそしく

五節

乙女子か雲の上にて袖ふれば日かけにまかふ天のは衣
乙女子か袖ふりそめし小忌衣豊のあかりにたえせさりけり
日かけさすをみのあかひも打とけて立まふ人をもてはやす也
ふみも見ぬ雲の梯外にのみ天つなとめを聞わたる哉
もろ人の遊ぶなるかな乙女子かかきみの裾のなき夜すから
日影さす豊のあかりにみつる哉我すへらきの千世のかさした
曇なき豊の明に見つるかな天つ乙女の舞のすかたを
椎柴

降雪もをやめやをやめをの山に椎柴かるはしはしはかりそ
いつとなく葉かへぬ山の椎柴に人の心ななすよゝもかな
夏そひくうなのみ山のしゐしはにかし鳥なきつ夕あさりして
おひたては椎の眞柴もなりつ也たとふるかたもなき我身かな
時雨つゝ吹山風に椎柴の枝はなひけと色はかはらす

薪

冬さむみ霜はをけとも椎柴のときはの色はあせすも有かな
くらゐ山峯の椎柴としふともうつるふ色はあらしと思ふ
眞柴かるかりはののに雪ふりてつま木になつむ遠の里人
奥山のならひとなればあなしけの雪よりさきに薪こりつむ
枯はてゝもき木となりし昔よりたきすてられん日を数ふる
こりつみしほたなかりせは冬深き片山里にいかてすまゝし
折くふる柴はさまゝみゆれとも煙はおなし色にこそたて
み山柴をのかかまとにとりくへてあさけ夕けの煙たつめり
しつのおかこりつむ薪我やくと誰ゆへもゆる思ひなるらん

衾

冬さむみ霜さゆる夜は明ぬれとあさの衾そぬかれさりける
あせいらはうれたくせこは思はしや人はたふるなまたら小衾
君こはとはにふの小屋の床の上にあさて小衾ひきて社なれ
きたれとも薄紅のあつすま色によりせはさむからましな
聞の上にあられたはしる夜半なれと妹と衾はさえずそ有ける
荒はてゝむなしき床の形見にはふるき衾のむつまじきかな
かさねゝはさむけかりけり冬のよに獨ふすまは風もとまらず

鴛鴦

をし鳥のつたふいはれに涙かけてうきぬ洗ぬ身をそ恨る
夜をさむみ岩波たかき山河につかはぬをしのすたく成かな
なし鳥のすたくいはれのうす氷けさやうは毛にとちかさぬ覽

冬さむみはたれ霜ふるさ夜川につかはぬなしの聲そ悲しき
山川に友なきをしかけをみて一つかひある心地すらしも
みさひめ鏡の池に住をしはみつからかけをならへてそみる
よとゝもに思ふ事なきなし鳥やかけとならひの池にすむらん
貢調

あさつまやはたさす駒に聲たてゝせたの長橋引わたす也
長殿の常陸の御藏開あけよけ御調物おさめみつへく
御調物にゐくはまゆのいとなもてくる手もたゆく供へつる哉
御調物君か御世には吉野川よし心みよたえやしけると
笛竹のつかひはいつかこちくらんあなまち遠の道のあひたや
皇の民やすらけくおさむればひまなくはこふ御調物哉
いなしきや民のいとなく道もせに盡せずはこふみつき物かな
佛名

ことのはに三世の佛の名をかけてつくれる罪は露もとゝめし
年のうちに積れる罪も消ぬらん三世の佛の御名となへて
かつつけつる綿ひきかけよ小夜過てむろへ歸らん背中かくして
そこはくの佛の御なをみなきけは残れる罪もあらしと思ふ
さ夜更て今そ法の師出ぬらん雲の上人名のりすらしも
人わたす三世の佛の名をきけは昔の罪も今や消らん
かひなくて月日はふれと年くれて佛の御名を聞そ嬉しき
舊年立春

年すくる山へなこめを朝霞さこそは春とともにたつとも
あらたまの としに二たび 春たては 老のかすのみ

そはりつゝ、 なきむかし社 戀しけれ あはれ我きみ
ましゝとき たつのみ顔に ちかつきて てる日の光り
身をてらし うれしき事を あさゆふの ま袖の内に
つゝみても 春は柳の まゆひらけ 花の袂も
ほころひて 喜びのみそ しけりける 夏のはしめの
しらかさね たちきる儘に ほとゝきす はなたち花に
きなきては 五月の玉を ときちらし 秋の初かせ
時をつけ 星あひの空を 見しほとに 峯の月かけ
木かくれて 嵐もそらに 雲をいたみ 谷のゆふ霧
むせひあひて 我らか中は しくれつゝ 袖のつらゝも
むすほゝれ いやかたまれる 庭なれや かしの霜も
はらひあへす いかにとし月 つもるらん むかしの薬
けかさねと さすかに命 しなれねは たゝ大空を
あふきつゝ 身をしる雨に おほゝれて 朽木の山の
そま人に なり行身をは いかにせん けなはけなく
あは雪の あるかなきかの 世にもふる哉

反歌

一とせに春は二度立ぬれと老木の花はいかゝさくへき
淡雪もまたふる年にたなひけは比まとはせる霞とそみる
谷の戸を出すとなけや鶯はとしもあけぬに春はきにけり
とゝむるにとゝまらさりし春なれと待にはきけり年の内にも
あつまやの軒のたるひのうすらくは雪かき分て春や立らん
年のうちに春立くれはうちつけに雪けの空を霞とそみる

戀

忍戀

物思ふといはぬ計は忍れといかゝはすへき袖のしつくを
 おく山の草かくれなるはたつもりしられぬ戀にやまふ比哉
 思出は心ばかりにかまはして衣のくひにことなもらしそ
 包かれ袖より玉のちる時は忍ふとしもやは見るらん
 忍ふともかゝる涙にから衣あらはれぬへき心ちこそすれ
 しらしかしいひしいてればかく計忍る戀に身をこかすとは
 人しれすはれくるかたもなき物は忍る戀の煙なりけり

隔一夜戀

待わひてこよひはかりのまろふしに幾度我はれさめしつらん
 さむしるに衣かたしきわきもこか獨やぬらんそはさくりつ
 笛竹のあなわつらはし一夜をもこめをつらさの節になせとや
 あはてぬる一よ計をへたつるになとよることこれのなかる覺
 しら涙にゆらされてくるより竹の一よもれは戀しかりけり
 たちまちにかはりし^{へい}もせしから衣一よはかりに袖のぬるらむ
 吳竹の一よはかりを隔つればおきふしやすきやはれらるゝ

經月戀

あはぬ夜の數やは積るいかなればたちぬる月といふは苦しき
 衣手も中にはしはしをかさりき月をへたつる君やなに也
 かき絶て三月に成ぬこれやさし心つくしのかとなるらん
 あひみての後も五月ないむとてやみそかにたにも音せさる覺
^{夫仲實}かちそむるしかまのみそのかれはてゝあひみて過し神無月哉

衣手もくちはてぬへしあふことの月をへたてゝとはぬ恨に
 三日月のいつるをみれば君にあはてみそか餘りに成にける哉

經年戀

まてといはんこと社今は頼まれぬ扱のみ去年も過し身なれば
 立別いくらひさゝもなければともあはてても年の過にけるかな
 年越ぬさのみはまたししなが鳥いなのみそ川すましとすらん
 もとかしと七夕つめや思ふらんあはぬ年なきをのかならひに
 あふ事を年きりしたる我身かな花さきかたき物ならなくに
 いかにせむあはて年さへこえぬるに忘ぬこひの心なかさな
 立かはる春の霞そうらめしきあひみぬ年をへたつと思へは

隔遠路戀

こひしなていきの松原いきたりとつけたにやらぬ道の遙けさ
 白雲の八重なる山はかさぬとも心は空にかよへとなつま
^夫すくせ山なといなむやの關をしもへたてゝ人にれをなかつ覺
 はるくと思ひやれとも朝夕にゆかね心のくるしきやなそ
 都人戀しきまてに音せぬはなこそ關にさはるにやあらん
 我戀は心つくしの道とをみ行めぐりてもいつか逢へき
 思ひあまりゆけははるけき玉ほこの道の空にもまよふ比哉

不見書戀

覺束なきそちの橋は年ふれとかけてそ我はふみ見さりける
^夫かつらきやくめの岩橋ふみみれと渡りかたしと空にしりつゝ
 いさや又ふみも見られすともすればとたえの橋の後めたさに
^夫いかせんさの舟橋さるやはふみたにみしと人のいふへき
 わきも子にあふみなりせばさりと我ふみも見てまし轟の橋

逢事のとたえかちにも成行かふみたにかよへまの、つき橋

且見戀

見ても猶あかぬ心のつきせれば戀しきことそかはらさりける
風吹は磯うつ波の立かへりみれともあかぬ君にもあるかな
ひえの山その大嶽はかくれれと猶みつのみはなかれてそふる
かつみれと覺束なきなからへはつらくやならんと思ふ心か
きおひつるおふちの駒の先立てかつみる人も戀しかりけり
かつ見れとあかぬ戀哉心さしふかき契や結ひなきけん
いかにせむあさかの沼の淺ましやかかつみる人にあかぬ心は

寢覺戀

打ふさて思ひあかさむ中々にれさむるたひにくるしかりけり
戀わふる人なし夢にあふとみるれさめくるしき小夜の床かな
淺ましやれさめてみればあともなし夢成けりな袖はひつるも
わすれすと人や夜半におとろかす何としてしつる寢覺成らん
夢にさへ涙せきあへぬ身にしあればれても覺ても濡る袖かな
うきしつみ身のなき所なき物はれさめの戀の枕なりけり
思ふことなくさむはかりかたらはやれさめの床の枕つとへに

待人戀

いつはりの契り計にまつら山まつらんとたに君はしらしな
今こむとたのめし人のなかりせはれて有明の月もみましや
いつとなくこぬみのはまに人まつと漂ふ波のたゝぬ日そなき
住吉の松とは人のしらねはや浪うちたえてきしもせさらん
ひねもすにくれまぢく暮ぬれは夜もすから又人を社まで
風さへもおとろかすかなたのますはまたて中々れなまし物な

別戀

明かたの袖のけしきの露けさに道のしつくは思ひやらなん
いつかたとゆくゑもしらぬ別ちにいかにさきたつなみた成覽
さいのくまはなつ日暮は別るともしつの砌にあはさめやは
別行人にもそはぬ涙さへとまらぬたひの道にもあるかな
いもか家の門に關守すへてしかけさ別行我とまるかに
別にし人を戀ちにまよふ哉いつをあひみん時そともなく
別行人をおしむにあらそひて先たつものは涙なりけり

雜

雲

たかまとの山に入重たつ白雲は空にたなひく心ち社すれ
まぢかくてめなれし身にもありふれば遠さかり行峯の白雲
くちなしの色にたなひくうき雲を雪けの空と誰か見さらん
白雲は雨やみて社歸りけれ花そめならはかゝらましやは
富士の山おりる雲は立のほる煙のやかてなるにや有らん
吹風にたゝよふ空のうき雲をいつまでよその物とかはみん
紫の色やかよふと大空にうかへる雲のむつまじきかな

星

雪とのみかしらは成ていたゝきし星をよめにみるそ悲しき
夫
日くるれば星をいたゝかみにしも拂ひもあへすをける露哉
時つとりなけれ雲ゐにとゝろきて星の林にうつもれぬらん
夕つゝのなとてまたきに入ぬらんれよてふ鐘の音もせなくに

ひこほしの心も空に初秋の七日のよなや戀しかるらむ
我ひとりかまくら山を越行は星月夜こそうれしかりけれ
天つ空夕のほしのよそにても戀しき人なみるよしもかな

出湯

夜と共にしたに焼火はなけれ共嶋根のみゆはさむるよもなし
ましらののはまの走湯浦さひて今はみゆきのかけもうつらす
御熊の、ゆこりのまるなさをす棹の拾ひ行らんかくていとなし
歎きのみありまの山にいつるゆのからくて世にもふる我身哉
わたつうみはるけき物をいかにして有まの山にしほゆ出覽
世の人の戀のやまひの薬とや七くりのゆのわかへるらむ
うき事も思さましてふる物なとやいて湯の湧かへるらん

石

波たてゝかくと計はきこゆれとかへるも見えずおきのしら石
たのめ猶河せの砂としふりてまこふの石とならん世までに
石はさもたてける人の心さへかたかと有てみえもするかな
おしからてなけもやられぬ我身こそ千ひきの石の類ひ成けれ
君か代の數にしとらばうちのほろさほの川原の石もたらしな
おく山の人もかよはぬ谷河にせゝの岩橋たれわたしけむ
いかにして水の下なるさゝれ石の中の思ひのきえせさるらん

水海

近江かた磯のはま山をる浪に舟出やすらんみつのうら人
さゝ波や小松に立て見渡はみほのみさきにたつむれて行
夕附見えかたの浦のいりましに雲すはへしてみのもすけぬ

あふみの海みちくるしほもなき物をたれから崎といひ始めむ
色々袖もかはるから衣うちてのはまの浪なきよせそ
鳩の海はみるめもおひぬ浦にてやむへかつきする海人なかり見
戀わふる人にあふみの海といへは海松はおひぬ物にそ有ける

原

谷おろしの風しやまれは夜と共におきつか原にくぬき浪たつ
春のうちは霞の中にみえしかときりも立けりあなやきの原
霧をいたみまの、萩原時雨して雲に袖をおとろかしつる
名にしおは、虎やふすらん東路に有といふなるもろこしか原
あさちふの露にうは毛やそほつらんわしたの原に鵝なく也
枝ことにくその千世をちきるらんその神世よりいきの松原
道とをみ日も夕暮に成ぬればその原までとさして社ゆけ

瀧

水上にいかなるまゆなくりければ絶せさるらん瀧の白糸
梢より落くる瀧のしろかみはよにひさにへて成にや有覽
たなはたのをりなかしたる布なれや空より落る瀧のけしきは
かちまけなたれかは見けん年をへて同じ程なる布引の瀧
名に立ぬみ山かくれの瀧なれと流は里の人にしられぬ
山たかみ落くる瀧のしら糸をむすふ雲に玉そこほるゝ
谷川やおちくるたきの白糸を水のあやにはなるにや有覽

池

汀には立ちよられぬ山かつのかげはつかしき清住のいけ
冬さむみにほ鳥すたく原の池も世にむすほゝる氷しにけり

世にわひてなみたちまちにすくなれとあその御池にぬき奉る
いせならはひかことそとや思はまし山と成てふみまさかの池
吹風にみくさかたよる池水はながはくもれる鏡なりけり
すへらきのなか井の池は水すみて長閑に千世の影をみえける
くみてしる人もあらしな思ふ事いはれの池のいひし出れば

故郷

八重葎へたてつゝふる故郷にいつくそたとふ人もなし
さしなからまたなのゝえはくちなくに笹も庭もあらぬ里哉
たかやとゝしらねと悲し故郷のほとは垣根にみえしわたれば
よとゝもにまさり顔なき身にしあれば故郷人にみえまうき哉
さほとゝゝさかゆるみればかけふれて古郷と社覺えさりけれ
葎はひ葎か袖とあればてゝふりにし里は人かけもせず
蓬分葎そきつる故郷は花たちはなの香をしるへにて

寺

谷深み跡たに見えぬ山寺は寛の水の行にてそしる
つくゝとすきもゆくかな山寺に入相のかれの聲計して
始なき罪のつもりのかなしさなぬかの聲々くときつる哉
やとないては尋てゆかむ清水寺名にたかはすは住やとまると
有爲の世は今日か明日の鐘のをとを哀いつまてきかんとす寛
木のはちり鹿鳴秋の山寺は入相のかれの音そさひしき
法の聲入相のかれにひゝきあひて哀つきせぬふかき山寺
社
杉村にしめ引かけてうち人のひかる計にみかく玉かき
千早振いつもの杜にみわすへてぬきそかけたる紅葉ちらすな
いのること奈良の社をこうゝと事あはせよく口はしるなり

神かきや三室の山のこくれにも見えまかはぬはあけの玉垣
つかれつゝたてならへたるあしやさは三輪の社のしるし成寛
たのみては久しくなりぬいそのかみふるの社の元のちきりな
ゆふたすきかけてたのめと我ためはれき事きかぬ社成けり

櫛

ゆふしてやかかけつゝ祈ることのはは櫛か枝にしけくなるらん
霜をけと色もかはらぬ櫛はは君か千とせのかさしなりけり
さか木葉を神の三室とあかむればゆふつけ鳥のねくら成けり
神世より色もかはらぬ櫛ははさかへときはににほふ成けり
いこま山手向は是や木のもとにいはいくらうちて櫛たてなり
萬代の色もかはらぬためしには神なひ山のさかきをそとる
千早振神のしめさす櫛はのさか行御世にあふそうれしき

柱

天原いつ時雨して秋のよの月のかつらもあかくなるらん
我身には吹へき風も吹こればかつらの枝もおらすそ有ける
人しれすけふなし待と風はやみかつらの枝を折もよはらす
はれまなき心のやみにまよひつゝえこそ手ならぬ月の桂を
長月の月の光のさゆるかなかつらか枝に霜やなくらん
神山のかつらを折は月のうちに我おもふ事のならさらめやは
久かたの月の桂はとことばに色もかはらぬ物とこそきけ
小篠
朝夕に露のしら玉見る物をいたくなかりを岡のさゝはら
ふむ人もなき庭におふる玉さゝのこたふばかりにふる霰かな

山河の岩間のさゝのひたすらに忍びしふしはあらはれにけり
まつはるゝ眞葛交りの玉篠はまさかたにちり
葉をしけみ道みえすとてやすらへはそよ／＼といふ小篠原哉
露しけなきさゝか原を分行は衣のすそになひくしら玉
あさまた小篠かはらな分ゆけは露けき袖を人やかめん

萍

泪川湊にうかふ浮草のうきれとゝめむ方のなき哉
水の上によるへさためぬ萍のよそへられぬる我身なりけり
かきやればたきりなかるゝ萍も世をはやくして過ぬへら也
池の面にうへぬにおふる浮草は波やよる／＼種をまきけん
ふる河のとたえをわたる旅人のもすそにあなくつける萍
世中は水の上なる萍のうきにたへたる身をいかにせむ
萍のうき世中としりなからのかれもやらぬ我そ悲しき

元服

もとゆひのこそめの糸をくりかへし衣の色にひきや移さん
今夜ゆふはつもとゆひの紫のま袖の色にはやもなりなん
うなゐ子かはなちの髪を取たてゝまさそめ川よ淵瀬かはるな
紫のやしほの色なもとかれと初もとゆひなゆひそむるかな
かそ色の共にいのれは二人さすしそくの影に千世そうつれる
紫のはつもとゆひを結ふより君かくらゐの山をしと思ふ
むらさきの初もとゆひに結びなかんつるはみ衣干とせふる迄

賀

君か代は嬉しきたひにきる杖のつもり敷をしる人そなき

うれしさを袖につゝみて過ぎにき今は何かは身にもあまらん
かしは木を椎のしつゑに折かへて左右左までやふしまろふ寛
我やとに嬉しき事なもりきけはふるにかひあるあめの下かな
わか君のよはひたけたる嬉しさはおほ宮人の身にあまるらん
わかきみはいはひこめつゝ竹の枝千世と契るそ嬉しかりける
つきもせぬ君か齡は幾千世とかきれる竹の枝にやあるらん

七夜

白糸をむすへることに今夜までいく萬代の數つもるらん
君まして今夜七日に成ぬれば是より千代をかそふへき哉
きみか代はなゝひこのかゆ七かへり祝ふ詞にあへさらめやは
たけならぬ二葉の松のおひそめてこよひ七夜に成にけるかな
なしてゐるや鶴のはふきける昔もや今夜は千世といはひ初鰯
ちとせふる岩根の松の鶴の子はけふ巢を立て七日也けり
つるの子の干とせをふへきはしめとは七日より社祝ひ初けれ

仙宮

いかにかく山路を出る時のまにみし人もなく年のへぬらん
桃の花しけき深谷に尋入ておもはぬ里に年そへにける
たちねはぬ衣の袖しふれければ三千年へてそ桃もなりける
いかにして玉の臺の久しくもなかりし程に千世はへぬらん
乗て行鶴のはかせに雲晴て月もさやくすむ山へかな
我もいさ尋いりなんをのゝえの栲けん山の跡をしのひて
故郷はいかになりにしをのゝえの栲るもしらす年のへぬれば

唐人

立波に鼓の聲を打そへてから人よせくおきのしまより
なしてゐるやちへの白波わけしのきわかしき嶋にいかてきつ覽
唐人はしかのをしまに舟出してはかたのおきに時つくる也
嬉しきないかにすればか唐人の今年も袖なせはくたつらむ
うなはらやはかたのおきにかゝりたる唐舟にときつくるなり
唐人の衣にかさる白玉のしろき光のめつらしきかな
唐國の人にとは、やわか如く世にすみつかぬたくひあるやと

王昭君

かき流すみくつになれるいきのを、結と、むる世社つられ
ゆきすから心もゆかす別路になふる里のことそかなしき
見えはやなみえはさりとも思ひ出る鏡に身なもかへてける哉
誰もさはをまこと、や思ひけんうきに紛れぬはつかしき哉
みるまゝに我姿をはかきてまし干々のこれを惜まさりせば
たとふるひなの別の悲しさにきすなき玉の身をそうらむる
道すからなくさむやとてひく琴の緒ことにたまなぬく涙かな

妓女

乙女子かもすにあまる黒髪の靡くをみるそいふかたもなき
繪にかくと筆も及はし乙女子か花のすかたを誰にみせまし
乙女子かとみのお琴にひれふりてかへすま袖を忍はさらめや
なとめこかいにおかしき姿にてみるたび毎に打ふまるらん
女郎花めてたき花のすかたかな衣通姫もかくやありけむ
唐衣たちもはなれて朝夕にめかれすみれとあかぬいもかな
明ほのに霞こめたる花よりもあかぬはいもかにほひ成けり
老人

いやましにひたいの波はかゝれとも消すも年のゆきつもる哉
朝露をひさしきものと思ふよに佛の兄にいかてなりけん
しくち引あこの瀬やに年ふりていやみにまはしはしめられに鳧
あさな／＼みれと昔のかけならて目に添老のますかゝみかな
翁さび立居もやすくせられねはつらつえつきてけふも暮しつ
年月のゆきつもるにも黒かみのかはる姿のはつかしきかな
黒髪も色かはりゆきみる人のいとふ計に老にけるかな

泉郎

黒牛かたこき出る海士の友ふねはすゝきつるとや波間わく覽
おほ磯に朝な夕なにかつきする海士も我こと袖やぬるらん
ひく嶋の海士のうけ舟浪間よりかうてふきといふしてをかく
ふかなから海の心やいかならんうらみぬあまはなしと社きけ
ねれ衣今そはつきにかけてはすかつきしてけりよさの海士人
かの岸にわたりつきぬる海人小船いかにのりえて嬉しかる覽
夜と共にもしはたれつゝ須磨の海士の心つからや袖ぬらす覽

船

恐ろしやともろはしりて波間行あからを舟のあからめなせそ
雲津よりすゝめくりするこし船の沖漕さかりほの／＼とみゆ
なこかれよみすりもすまにかき積てあからを舟の灘通る目そ
水あきみ川瀬の浪はたつ物をなくたす鵜舟のみつやなになる
にはてるややはせの渡する舟をいくそたびみつせたのはし守
わたつみにたゝよふ舟のうきしつみそこ泊となきそ侘しき
風はやきなるとのうみの舟よりもとまりさためぬ我身なり鳧

隣

冬くれば申垣あれて我やとなへたてもなくや君もみるらん
 色かへてふりぬる物はとしたかき隣の松とわれとなりけり
 垣こしにはのめくたにもある物をれたくも梅のあるしなる哉
 隣よりあし火の煙もれきつゝたかぬやにもすゝたりぬへし
 中かきにおふる草木のはなしけみ夏を隣はうとく成ける
 諸ともにまぢかきほとにすまゐしていさかきこしに物語せん

笛

笛竹のよなをさへ月や照すらん空にも聲のすみのほるかな
 吹たつる笛の調の聲きけはのとけきちりもあらしと思ふ
 青竹を雲の上人吹立てはるのうくひすさえつらすなり
 ことほりや宿につくりし竹なれば笛の音までもすめる成けり
 なみの音にたくへてそきく住の江の汀にて吹こまふえの聲
 此里に神樂やすらん笛の音のさよふけかたに聞ゆ也けり
 横の戸を明かたまでもふえ竹のこちくの聲そ人たのめなる

箏

ことの緒をひきくらへてや調へまし秋風なれば身にもしむ哉
 空の色によそへることのこちをはつらなる雁と思ひける哉
 ことの音の琴ちにむせふ夕されは氣もいよ立ぬそゝる寒さに
 玉の緒は絶しもせぬをひく人もなき琴をのみもたる身そうき
 さよ更て物の音たかく成ぬらししらふる琴はこちあくなり
 繰返し昔のことをひきかけてしらふるからに音こそなかるれ

蜘蛛

松風の吹にかよひてことのれは秋のしらへの身にもしむかな
 さかり糸をみるを嬉しきさゝかにのくる人つくる筋と思へは
 さゝかにのしるしもいさやいかな覽今宵にてみんくもの振舞
 さゝかにには苦のたもとにふるまへと涙ならてはくる人もなし
 我がとに立聞人もあらませはかくとはまじやさゝかにのいと
 枯のこる軒のあやめなたよりにてくりかへしひく蜘蛛の糸筋
 かき絶てとひくる人もなき物を空たのめするさゝかにのいと
 心ほそくいつまで我身なからへん軒はにすかくさゝかにの糸

猿

朝またきならのかれはなそよ／＼と外山を出てましらなく也
 夕つくひさすや嵐の山本に物わひしらに猿さけふなり
 たかのみこいと怪しと見まし見猿まるをしも引たてゝとや
 三度てふ聲たにきけはよそ人に物思ひまさるれをそなくなる
 思ふ事おほ江の山に世中をいかにせましと三聲なくなる
 あし引の山へにあそふ木のは猿思ふ心そありて啼なる
 さらぬたにおいてははものゝ悲しきに夕のましら聲なきかせそ

右永久四年百首以甲斐權守季鷹横田茂語藏本并流布印
 本及夫木鈔授合畢

群書類從卷第百六十九

和歌部二十四百首三

久安六年御百首 是第二度也初度者
題同堀川百首

作者

御製 崇徳院 中納言右衛門督公能

參議左中將敦長 左京大夫顯輔

前備後守季通朝臣 隆季朝臣

尾張守親隆朝臣 右馬權頭實清朝臣

丹後守顯廣 散位清輔

堀川 待賢門院女房 兵衛 上西門院女房

安藝 待賢門院女房 小大進

題

春廿首 夏十首 秋廿首 冬十首 戀廿首

神祇二首 慶賀二首 釋教五首 無常二首 離別一首

羈旅五首 物名二首 短歌一首

春 御製

あさ緑やへの霞や二とせの行あふ空のへたてなるらん
れのひすと春の野ことに尋れば松にひかるゝ心ちこそすれ

賤女が形見しるへく日をつめとまたうら若菜手にしたまらす
春の夜は吹まふ風の移りかを木ことに悔と思ひけるかな
大かたの色をはいはし梅の花香をもあたにはちらさゝらなん
嵐吹きしの柳のいなむしろなりしく波にまかせてそみる
鶯の鳴へき程に成ゆけはさもあらぬ鳥も耳にこそたて
春ことにたかきに移る鶯やくらゐの山のありすなるらん
山里は谷のふるすの近ければいつさいるさにうくひすそなく
をしなへて花の匂ひしひとしくは宿の外をば尋れさらまし
山高み岩れの櫻ちる時は天の羽ころもなつるとそみる
ことならはさてこそちらめ櫻花おしまぬ人もあらしと思へは
ことはりやあらしの山にさく花は心長閑ににははさるらん
田子のうら岩れにかゝる藤波はみちくる汐の聲をかるらん
老ぬればわか紫にかさゝれて藤にも松はかゝりけるかな
くらま山木の下かけの岩つゝしたゝ是のみや光なるらん
山吹の花のゆかりにあやなくも井手の里人むつまじきかな
春すきは岸の山吹残らしをたのむかけとてかはつ鳴なり
はなはれに鳥は古すにかへる也春のとまりをしる人をなき
朝夕に花まつ頃は思ひれの夢のうちにそ咲はしめける

夏

重れきし袖のひとへにかはるにも定めなきよそ思ひしらるゝ
 みあれには誰かはかけぬいか計り廣きめくみのあふひなる覽
 時鳥鳴つる杜の一枝はあかねなこりのかたみなりけり
 心さしふかきあさきを時鳥しるしあらせて聲をきかせよ
 かくれぬにいつかと待しあやめ草けふは引さす物にそ有ける
 五月雨に花橘のかほる夜は月すむ秋もあらはあれ
 五月山弓末ふりたてともす火に鹿やあやなくめをあはすらん
 早瀬川みほさかのほるうかひ船まつこのよにもいかゝ苦しき
 あちさいのよひらの山に見えつるは葉こしの月の影にや有覽
 諸人の御稜の敷を河のせに流るゝあさの程にてそしる

秋

いつしかと萩の葉むけのかたよりにそゝや秋とそ風も聞ゆる
 天河やす瀬の波もむせふらんとし待渡るかさゝきののはし
 織女に花そめ衣ぬきかせはあかつき露のかへすなりけり
 道もせに誰をりしけるにしきめもえそしらすけのまのゝ萩原
 顯れて虫のみねにはたつれとも女郎花にそ露はこほるれ
 秋立て野ことに匂ふ藤はかまなかふむ鹿やあるしなるらん
 なさけなきかりこの耳に棹鹿のこよひの聲をいかてきかせん
 鴈かれのかきつられたる玉章をたえ／＼にけつけさの朝霧
 秋くれは思ひなしかも夕附夜残りおほかるけしきなるかな
 おしみかれ入ぬる夜半の月なれと猶おもかけはとゝめなき鳧
 月清みゆる木の杜にある鷺のたゝすはよそにいかてわかまし
 玉よする浦はの風に空晴てひかりなかはす秋の夜の月
 雲の波あまの川瀬にたゝれともなにはれてすめる月かな
 ひたすらに厭ひも果しかはかりの月をたもてる此世なりけり

秋なれと晨明の月は夏の夜の望よりもみる程なかりけり
 星とのみまかへる菊のかほるかは空たき物の心ちこそすれ
 初春の梅をたにこそ求しかおもへは今はひとつこのはな
 入日さすとはた雲にわきかれつ高天の山の嶺のもみち葉
 高瀬舟かしふりたてよ大井川岸の紅葉をいかゝすくへき
 もみち葉の散ゆく方を尋れば秋もあらししの聲のみそする

冬

ひまもなく散もみち葉に埋れて庭のけしきも冬こもりけり
 木枯に紅葉散ぬる山めくり何を時雨のそめむとすらん
 つらゝゐてみかける影の見ゆるかなまことに今や玉河の水
 この比のなしのうきれそ哀なる上羽の霜よ下のこほりよ
 夜をさむみ心つからやなく衛をのか羽風にむすふ氷を
 み狩するかたのゝみのにふる霰あながまたき鳥もこそたて
 夜をこめて谷の戸ほそに風さむみ兼てそしるき峯のはつ雪
 あかすみる竹のうらはの白雪におはうちふるなすたくむら鳥
 晴ぬれと枝もとをゝにしくれしを木の下かけは猶雪そふる
 春きぬとはにふのこやもそよく也齡もくるゝかへりみはせて

戀

武藏あふみふみたにもみぬ物ゆへに何に心をかけはしめけん
 をろかにそ言のはならは成ぬへきいはてや君に袖をみせまし
 床の上にたえず涙はみなきれとあふくま河とならば社あらめ
 ささきの世の契り有けんとはかりも身をかへて社人にしられめ
 紅に涙のいろはふかけれとあさまじきまで人のつれなき
 衰てふなけのなさけもかりなはそをたに袖の乾くまにせん
 命にはかへてあひみんと思へともなれて別れば惜からしやは

いかて／＼歎きをつみしむくひとあひみて後に人を侘しむ
箒鷹のそらしもはてす引すへて假初にたにあひみてしかな
我妹子か思ひさくるにしたかはて戀はかみなき物にそ有ける
根はふかく思ひそめてき奥山の岩もこすけのすけはなけれと
君をたにも人傳ならておとしめは我身のとかも嬉しからまし
戀々てたのむるけふのくれはとりあやにくに待程そ久しき
和田津海の思ひしふかき汐あひはけさ立歸る涙なりけり
唐衣かされし夜半の枕につきけるしはを形見にそみる
ゆきなやみ岩にせかるゝ谷川のわれても末にあはんとそ思ふ
ひれふりし松浦の山の乙女子もいとわれはかり思ひけんかも
我戀はなのゝえくちし人なれやはて七世も過ぬへきかな
戀しなは鳥ともなりて君かすむ宿の梢にれくら定めん
歎くまに鏡の影もとろへぬ契りしことのかはるのみかは

神祇

闇のうちにきてをかけし神あそひあか星よりや明初にけん
道のへの塵に光をやはらけて神も佛の名のりなりけり

慶賀

吹風も木々の枝をはならされと山は久敷聲そきこゆる
龜遊ふ入江の松にあるたつはみちよかさめる物にそありける

釋教

方便品 若有聞法者無一不成佛

一たびも聞し御法を種として佛の身とそたれもなりぬる

安樂行品 於無量劫中乃至名字

名をたにもきかぬ御法をたもつとていかて契りを結び置けん

壽量品 常在靈鷲山

世中に猶有明のつきせすときけは心のやみそはれぬる
善門品 弘誓深如海
ちかひなは千尋の海に譬ふ也露もたのまぬ數にいれなん
心經 色即是空空即是色
をしなへてむなしとける法なくは色に心やそみはてなまし

無常

かきくらし雨降庭のうたかたのうたて程なき世とはしらすや
はかなさは外にもいはしも、歌のその人數はたらすなりにき
老年況列三百首人數未終六儀詞藻之輩或依暮
齡類朝露或雖紅顏歸黃壤浮生險眼慨然墮
淚故詠之。

離別

興津波立別るとも音にきくなかの浦に船とめすな

羈旅

都出ていくかになりぬ東路の野原篠原露もしみゝに
岩かれのこりしく山を越くれはわかくる駒はきになりけり
あまのすむ濱の藻屑を取敷てこにとまるといもしらめやは
かり衣袖の涙にやとる夜は月も旅れのこちこそすれ
松かれの枕もなにかあたならん玉の床とてつれの床かは

物名

にはやなき

つみしれる人やすむ覽河せにはやなきり捨てあみのめもみす

しもつけのはな

さしくしもつけのはなくてわきもこかゆふけの浦なとほを煩ふ

短歌

しきしまや　やまとの歌の　つたはりな　きけは遙かに
 ひさかたの　天津神代に　はしまりて　みそもし餘り
 ひともしは　出雲のみやの　やくもより　起りけるとそ
 しるすなる　夫より後は　もくくさの　言のはしけく
 ちりくく　風につけつゝ　きこゆれと　近きためしに
 ほり川の　流れを汲て　さゝ波の　よりくる人に
 あつらへて　つたなき事は　濱千鳥　跡をすゑまで
 とゝめしと　思ひながらも　津の國の　難波の浦の
 なにとなく　船のさすかに　此ことな　忍ひならひし
 なこりにて　よの人きゝも　はつかしの　もりもやせんと
 おもへとも　心にもあらず　かきつられつる

春

中納言右衛門督公能

難波湯入江の水とけにけり　芦間を分て春や立ちむ
 夜をこめて若なつみにといそくまに遙に過ぬ萩のやけ原
 結び置し谷の氷も鶯の初音もけさはうちとけにけり
 梅の花折てかさにさしつればころもにおつる雪かとそみる
 かゝみ山すかたもみえず春霞八重たなひけるけさのけしきに
 咲そむる花を見捨ていかなれば心も空にかへるかりかれ
 かりかれに春かへれとや玉章をつけゝむ人は契り置けん
 いつしかと咲にけらしな鶯や枝にこもれる花さそふらん
 朝またき鳴鶯にさそはれて心にもあらぬ花を見るかな
 杉むらもなのみ成けり三輪の山花をや春の印とは見む
 なのなられと匂ひにしるし朝倉や木の丸とのにさける櫻は
 紀の國やありまの村にます神に手向る花はちらしと思ふ

夏

秋

吹風をいとはてを見ん此春はなか／＼ちらぬ花もありやと
 しら雲は四方の山へにたな引てたえまもみえぬ花の盛か
 花のちるたびに心のくたくれはあやなく春のうらめしき哉
 吹風にいと亂れぬ我宿の五本やなきおりてこそみめ
 くちなしに匂ひそめける山吹にいかにいひてかかはつ鳴らん
 みるたびにこゝにあてとそいはれけるやへ山吹の花の盛は
 年ふれとかはらぬ松をたのみてやかゝりそめけん池の藤なみ
 聲たてゝなけとかへらぬ春ゆへに心をさへもつくしつるかな
 心をは春にそむれと夏衣けふぬきかへつひとめかさると
 千早振けふのみあれの葵草心にかけて年そへにける
 時鳥まつよの敷を雲ゐにてなふるしけさと思はましかは
 おほつかなたれそま山の時鳥とふになのらて過ぬなるかな
 石神のうらになとはん此くれに山ほとゝきす聞やきかすや
 郭公さこそは忍ぶ聲ならめ音羽の里に音たにもせよ
 霍公なかくて過にし年もなしなかくゝまたてきかんと思へは
 卯の花のかきれつゝきに咲ぬれば水しら川の關路なりけり
 人毎に尋れてひけはかくれぬに生るあやめもかひなかりけり
 あたりさへ冷しかりけり氷室山まかする水のこぼるのみかは
 いつしかとけさ吹風の身にしてみて秋の色にもなりにけるかな
 天河霧たちこめよ彥星の歸るあしたの道みえぬまで
 さ夜更てふしの高根にすむ月は煙ばかりやくもなるらん
 出るより入まで月をなかもれは程なかりけり秋の夜なれと
 玉くしけ二見の浦の月かけは明方にこそすみ渡りけれ

見るたみに心にいれる月なればにしの山へと思ひしもせし
秋の夜の木の下照す月影に小倉の山も名のみなりけり
雲のなみしはしなかけそ天の川よわたる月の御舟さすほと
下葉まで数もかくれす難波かた芦のよことにすめる月影
ともすれば雲間かくれにまたれつゝ空たのめする夜半の月影
なりはてぬ錦とそ見る我宿に色つきそむるはしの立枝は
色々に移ふ菊の上露はむらこにそむる玉かとそ見る
花薄人もすのゝ名をしらてたれ 招くらん秋の夕暮
玉ゆらも風にしられし花薄露ぬきかくるけきのけしきを
鹿の名といふにもしるし小萩原花の中にも 聲聞ゆなる
さなしかも獨ふしみの里にては物さひしとや鳴あかすらん
女郎花露の衣をかされきて何あたしのにたはれふすらん
神樂岡吹まふ風のつてことにふり過こゆる鈴むしの聲
夜をかされ聲よりはりゆく虫の音に秋のくれぬる程を知らな
あかさりし人に別し時よりぞ秋の暮こそさひしかりけれ

冬

さま／＼の草葉も今は霜かれぬ野へより冬や立てきぬらん
草の葉に結びし露のけさみれはいつしか霜に成にけるかな
時雨する夜半に木の葉の散時は音はいつれとわかれやはする
冬の夜はとふのすかこもさえ／＼て獨ふせやそいとゝ寂しき
風にちる花かとそみる空さえてほとろ／＼にふれるしら雪
日なへつゝ積れる雪にかくろへぬ名のみ也けりあさふりの橋
初しもや置はしむらん曉のかれの聲こそか／＼聞ゆなれ
白波に聲うちそふる友千鳥むれてそ渡る浦傳ひすと
いか計ふかき契をなし鳥のさゆるうきれに羽かはすらん

ふるとしはこよひ計に成にけりあけはいはひの言の葉もかな

戀

下組はとけすはとけす小夜衣そのうつりかにしむ身ともかな
手にとりてゆらく玉のを絶さりし人はかりたに逢みてしかな
鳴海湯しほひにをける網なれやめにはかゝりてあはぬ戀する
なにしておは、君打とけよ近江路のしのゝをふゝき忍び／＼に
戀ちには唯一かたに入にしないつくへまよふゝなるらん
我戀はちきのかたそきかたののみ行あはて年の積りぬる哉
大方の戀する人に聞なれてよのつねのとや君おもふらむ
かつきするいせほの蟹もかくやあらぬしほたれに免戀の涙に
人しれぬ戀はいかなる色なれば心にふかき思ひそめけん
うたゝれにまゐるむ程の夢計逢や此世のなくさみにせん
後の世の事をおもへば戀しなしさりとて君はなさけかけした
契り置し事は忍ふやいかにとも逢夜なればとはてこそふれ
戀しさに絶ぬ命と君きゝて情をかけはおしからしかし
逢みんと契りし事を頼つゝまづに命をかけてこそふれ
つく／＼とおつる涙に數しらすあひみぬ夜半の積りぬるかな
心こそ千々にくだくれ逢みんと忍ふる人はひとりなれとも
焼物のくゆる思ひをあかさりし其うつりかによそへてそふる
人はいさ我は忘れす吳竹の共夜計のふしはなかりき
小夜衣露のへたてはなれれとも身を分てこそいらまほしけれ

神紙

春日山神に祈れることは、待ほとも猶たのもしき哉
家の風絶すもわたれ神風やみもすそ川に心をめてき

慶賀

君かへんことは子の日の小松原木高く成て花さかんまで
此君といふなもしるく吳竹の代々へんまでも頼みてをみん

釋教

いさきよき法をたもちて世にすまは月とゝもにや西へ行へき
から衣たちこそきたれ先の世に罪かさなれる身にしあらねば
世の中ないとふあまりに鳥のねも聞えぬ山の麓にそすむ
春の花もとめしことも秋の夜の月もなめしまことならねば
一すしに頼むとなしれ君にわれひかれは法の道に入りなん

無常

世の中ははやせに落る水の泡の程なくきゆるためしにもみる
我ひとりのかるへきよと思ひせば年の積るも歎かさらまし

離別

朝夕にきなれしよはの唐衣たち別るゝは悲しかりけり

羈旅

船とめてみればふしよの松か枝にしるきを後にかくるしら浪
道なする駒なかりせは行なれぬ旅の空にや日なくらさまし
しほりして見えし山路も夕されは猶たとらるゝ物にそ有ける
住なれし宿の事のみ面影に朝たつ旅の草枕かな
花咲し野への草葉も霜かれぬ是にてそしる旅の日数は

物名

たきもの

大井川くたすいかたの隙そなき落くるたきものとかからねば

ひとり

夜もすから君を待まは思ひわひ鳥の鳴にもよそにやはきく

短歌

やまのへの 跡もへたてぬ 身なれとも この人かすに
いりしより 花のかとても 忘られす 月のあきにも
おもひて、 心にかけぬ 時もなく 和歌の浦波
うちいて、 かひなかるへき ことの葉の 皆はつかしの
もりにふく 風の聞えを つゝめとも こやの池水
いひいて、 やかてやなは なをおしく 思ひあまりに
かきつむる 蜚のもくすの すゑの世に 残りともりて
みん人の そしらん事も はゝからす もゝ歌かすな
つられつる哉

春

参議左中將教長

月よめはまた冬ながら咲にける此花のみか春のしるしは
嶺の雪谷の水と春風にいつれかまつはとけはしむらむ
鶯の谷よりいつる初こゑにまつ春しるはみやまへの里
鶯のれくらの竹はときはにて何に付てか春をしるらん
いはれとも霞たな引雲あにて空にそしるき春の氣色は
子の日する人なきのへの姫小松霞にのみやたなひかるらん
若なつむ袖とそみゆる春日野のとふひの野への雪の村消
雪の色もうす紅の梅の花かほる香にてはわきそかれつる
梅の花うす紅の色よりもあやなく香こそ身にはしみけれ
春雨の降つむまゝに青柳の糸につらぬく玉を數そふ
春の夜も久しかりけりあけはまつ花見にゆかんと思ふ心に
木の下にやとらさりせばみましやは月さしかはす花の光を
高砂の尾上の櫓なみたてる松のときはなならひやはせぬ
いかにして咲はしめけん我宿の物にはあらぬ花さくらかな

枝しあらは花は咲なん風よりもおる人つらき山櫻かな
山櫻かすみこめたるありかをばつらきものから風そしらす
櫻花いかなる風にさそはれておしむ人をはしらぬなるらん
咲しよりちらん物とは知なからばかなくおしき花の顔かな
紅に咲みたれたる岩つゝしまたありかたき花のかほかな
散花におしむ心はつくしてき暮行春は人にまかせん

夏

夜もすから春を残せる灯の名残はけさもけたしと思ふ
むつまじや春の形見にとめ置若紫のいけの藤なみ
花ゆへにいとひ馴にし風なればまたや夏とてまたれしもせず
しら雪のしきくふれる心地して枝もとをにさける卯の花
紅の色ふかみ草咲ぬればおしむ心もあさからぬかな
袂にもかゝるのみかは宿ことに菖蒲はけふのつまにそ有ける
思ひれの夢にやきかん時鳥また卯月にはなとつれもせず
時鳥いかてきかまし我宿に花橘のかほらさりせは
尋れても聞へき物を時鳥人たのめなる夜半の一聲
床夏の花の色々散行は秋のとなりや近くなるらん

秋

常よりも涼しくなりぬ吹風に秋のたつ日を誰かつくらん
七夕のくれを待まの久しさと明るおしさといつれまされり
七夕の歸る道には鵲のはしたなきまで袖やぬるらむ
聞人もおとろかれけりなく鹿はなのれのみやは秋なしらん
松虫の聲聞時を打はへて君か千とせのあきはしらるゝ
腐金はきなきときめき秋風の吹て日数はへぬとしらすや
しらま弓張てかけたる曉は程なくそいるたかまとの山

數ならぬ我身なれとも月をみてあかぬや人になとらざるらん
けにやさは西に心そいそかるゝかたふく月も今はおしまし
いにしへもたくひはあらし月影は又こん秋のこよひなりとも
くまもなく月すみ渡る銀河なをたにかけし雲のしら瀨
わたつみの清き瀨へによる波のよるともみえすてらす月影
兼てよりひるとみゆれば秋の夜の明るもしらぬ有明の月
置露のをもけにみゆる眞萩原はらはゝ花の散もこそすれ
けさみればおきある露にあやなくもおれふしにける女郎花哉
藤袴にほひを風にたくへてや露に立とを人にしらるゝ
長月のけふないかてか菊の花おりしりに盛なるらん
時雨にもあかれさしけりもみち葉は朝日夕日の影ならねとも
もみち葉の散てうかへる池水は錦あらひし江にやかはらぬ
ほにいてゝまねくとならは花薄すきゆく秋をえやはとめぬ

冬

秋の中は哀しらせし風の音のはけしさをふる冬は來にけり
散り積る檜の枯葉のなかりせは時雨ふる夜をいかてしまし
よそに見るひらの高根の雪なれと訝るよとこの物にそ有ける
箬鷹のしらふにまかふ雪ふれば野守のかゝみよそにたにみず
雪ふかきまのゝかや原むすはれて吹とも風になひかさりけり
百敷や大みやちかき宿なれとあられの音ないかてつゝまん
難波江の芦は氷にとちられて吹とも風になひかさりけり
水鳥の霜うちばらふ羽風にや氷の床はいとゝさゆらん
つらゝある清き川瀬は音絶てそらに鶴の聲のみそする
立歸る年の行衛を尋れば哀れ我身にとまるなりけり

戀

河のせにおふる玉ものうちなひき君に心はよりにしものを
 きく人もなき奥山の呼子鳥かひなきれをそ我もなきつる
 いかに計戀路は遠き物なれば年は行とも逢よなからむ
 戀侘る心なくさにあひみんとかこと計にたのめやはせぬ
 夕されは萩のうは風そよとたにいふ人もなき戀そくるしき
 戀しなは戀もしれとや思ふらんあは、逢へき程の過ぬる
 逢事はせめてなこやのあつ禰あるはかひなきしほれのみして
 つらしとして思ひかへらぬ我戀やなかるゝ水の心なるらむ
 戀しきは逢を限と聞しかとさてしもいと、思ひそひけり
 つらさは恨みんとのみ思ひしも逢みる時は忘れにけり
 から衣かさぬる夜半も明ぬれば戀路に歸る袖そ露けき
 夢にたに逢みんとのみ思ひしはた、戀しなん爲にそ有ける
 戀しとはことの葉にこそいはさらめ涙の色をいかてつゝまん
 涙川みかさまされは忍ひこし人めつゝみをせきそかれつる
 君たにもこんといひせはぬは玉の夜床に玉なしかまし物を
 君待ととふのすかこもみふにたにれてのみ明すよをそ重ぬる
 かく計涙の川の早ければたきつ心のよとむまそなき
 いかにせんあはのなるとに引しほのひきいりぬへき戀の病な
 つれもなき君まつら山待侘てひれふる計こふとしらすや
 敷妙の枕はかへしわきもこかれくたれかみにふれてしものを
 神 祇
 櫛とるほにしなればから神のおもしろしとや心とくらん
 住吉の神も風もやまつらん松にゆふしてかゝるしら波
 慶 賀
 君か代は千世を限ていはし水神の心にまかせてをみむ

大空をおほはん袖につゝむとも君かへんよの數やあまらん

釋 教

化縁大垂 五性各別

我身にも佛の種の有なれば花のかつらなかけてこそみめ

覺心不生 八不中道

やくさまでさらぬたかまも水上は唯たとはんのなかれ也けり

一道無相 一乘佛性

品々によつの車をすゝめすはのりはつれたる人やあらまし

極無自性 三界唯心

はかなくそ三世の佛とおもひける心ひとつにありとしらすて

秘密莊嚴 卽心成佛

照月の心の水にすむなればやかてこの身に光をそさす

無 常

秋風にあふはせなはの碎けつゝ有にもあらぬ世とはしらすや

水の面にうかへる玉の程もなくきゆるをよその物とやはみる

離 別

歸りこん程は其日と契れとも立わかるゝはいよゝかなしき

羈 旅

古郷にとふ人あらは山櫻散なん後をまてとこたへよ

とふ人もなき旅れするみ山へになのりして行郭公かな

あかす見し同じ都の月なれば旅の空にもかはらさりけり

降雪にいかて家路を尋れましなふる駒のあとなかりせは

草枕をさゐる露は君をのみいもれてかふる涙なりけり

物 名

もちつゝしの花

人毎に弓はもちつゝしのはなし何をかりこのやにははかまし

十五夜の月

五月雨をくるしふこやのつき橋もうきぬ難波の江社かよはれ

短歌

あつさゆみ 春たちぬとや みよしの、

たなひけは 木のめも今は はりぬらん

花まつと このもかもの に たちましり

かひもなく 咲はかつちる はかなさを

なけきつゝ 我身のうへに なりはてん

夏くれは しけき梢に なくせみの

秋はなる かくは常なき 世なれとも

なかむれは もの思ふ事も わすられて

ほこらしき さてのつもりは 老らくの

しら露の 霜としなれば 冬の野に

草のうへは みな白妙に なりにけり

おもひこし 我みなかみも いまはたゝ

たきの糸の くるく君に つかふとて

春

左京大夫顯輔

よなこめて春は來にけりいつしかとあしたの原に霞たなひく

打なひき春立きぬと鶯のまた里なれぬ初音なくなり

春霞たなひき渡る夕されは梢も見えずさくら井の里

おるもうしなしといはまし梅花香はかくされぬ物にそ有ける

君か代を尾上の松にくらへんにいく世の春かあはんとすらん

春ことにわかなは同じ若なにて年つめる身の老にけるかな

梅か枝に降つむ雪は鶯の羽風にちるも花とこそみれ

青柳の糸手にかけて春毎に年のよるなもしらぬ也けり

あやしきはるるに音せぬ早蕨の手をかけぬ共ほとりとそなる

をやみせず降春雨のこま／＼と思ひしとけははるゝ間もなし

苗代に種まくしつのかけみれば徒てもはやくおいにける哉

古郷にあらましかはと思ふにも浦山しきはかへるかりかね

いつとてもおしき命といひながら花待程はかきりなきかな

かつらきやたかまの山の櫻花雲井のよそにみてや過なん

命をそ散花よりもおしむへきさすかにさかぬ春しなれば

隙もなく井手の河波折かけてそこまで匂ふ山吹のはな

ありかたき色とそみゆる岩つゝし唐紅に匂ふとおもへは

山彦は誰としりてかこたふらんを呼子鳥こはたえもせず

いかなれば松のしつえを置ながら人の心にかゝる藤なみ

ひもたえず今宵計のなさけしてあけはみそかに歸りゆけ春

夏

いつしかとけふしらさかれ立きれと思ひ染てし色は忘れす

村々にさけるかきれの卯花は木の間の月の心地こそすれ

人つてといはぬ計を時鳥きくともなくてすきぬなるかな

契置人しなれば終夜たゞく水鶏をよそにこそさけ

何となく花桶の香をかけはいにしへさへそこひしかりける

天津星かけみゆる夜は澤水にすたく螢をわきそかれつる

かくれぬにおふるあやめもけふは猶尋れてひかぬ人やなか覺

五月雨の日數へぬればかりつみししつやのこすけ柄やしぬ覺

はる／＼とたかしのやまに鳴蟬の聲は雲井の物にそ有ける

秋

□□□いさほのかみに靡きにきけふはなこしの御被とをしれ
 衣手のまたうすければ朝またき身にしむ物は秋のはつ風
 霧ふかき袖山おとすいかたしの岩こす棹を思ひこそやれ
 色々の玉とそみゆる秋のゝ千種の花に置るしら露
 七夕のおふ夜ときけはあちきなく我こそさへそらに社なれ
 銀河横きる雲や七夕の空なきものゝ煙なるらむ
 夜もすから人まつ虫の聲きけはさもあらぬ袖と露けかりけり
 天津風雲吹はらふ秋の夜は月より外のものなかりけり
 秋の夜の月の光にさそはれてしらぬ雲路に行心かな
 秋かせにたゞよふ雲のたえ間よりもれ出る月の影のさやけさ
 秋萩の花咲ぬれば山里は鹿の音ちかくきかぬ夜そなき
 しめ結しかひこそなけれ女郎花心もしらぬ風になひけは
 うらやましほに出にけり花薄おもひこめてはくるしきものを
 わきもこかすそ野に匂ふ藤袴露は結へと綻ひにけり
 秋の田にいほさすしつの筈をあらみ月とともにやもり明す寛
 くる度にかりゝとのみ鳴なるを故郷にてはいかにとそきく
 思ふらん心そしるきから衣ななきよすから打あかしつる
 相坂の木の下陰を引ほとはさやかにみえぬき原の駒
 おもふことなにしもあらぬ夕されに心まとはすさほしかの聲
 秋毎にみれは小倉の山しもそ下葉もあけに紅葉渡れる
 暮て行秋をおしむと徒に思ひのみこそ木からしの風

冬

朝毎にあらしの聲はかはりつゝ梢さひしき冬は來にけり
 雨とふる峯の木葉のとまらねはむへもる山といふにそ有ける

戀

思ふことはれせぬ時はかきくらす時雨はよその物とやは見る
 さゆる夜は所もわかぬ霜なれといかて朝日の山にをくらん
 降つめるうは葉の雪の解ぬまはうらみとりなるいはしるの松
 すみかまのくゆる思ひの下むせび結ふ煙はいつか絶へき
 さらぬたに寐覺かちなる冬の夜をならの枯葉に霰ふるなり
 難波渦入江をめぐらぬ鴨の玉もの床にうきれすらしも
 なにはかた□□□ころやたかゝらん蘆邊の千鳥立さはく也
 かひなくて過る月日のいとゝしく積れはおしき年の暮哉

思へともいはての山に年をへて朽やてなん谷のむれ木
 年ふとも猶いはしるの結び松とけぬものゆへ人もこそしれ
 ふみかへすたひに心をくたく哉いかなるへきはしにかな有寛
 高砂の尾上の松に吹風の音にのみやはきゝ渡るへき
 戀するは苦しきものなにかにしてつれなき人を思ひしらせん
 我戀と君かつらさとくらへむと山にたとへはいつれたかけん
 いかてさは世に長らへて侘つゝもつれなき人の果をたにみん
 我戀はかつら木山のそみかくだ聲は聞とも逢よしもなし
 かく計厭ふたにこそ戀しけれなとかへしけんおそのたはれを
 中々に戀しなまぜは人しれすかひなき身をも恨さるまし
 くれぬとてゆけは明ぬる夏の夜を難面人のとさしともかな
 よそにしてもときし人にいつしかと袖の雫をとほるへき哉
 逢みてはいとゝ心の隙もなしはてなき物は戀にそ有ける
 かつらきやくめちの橋は渡られとわりなかりつる朝ほらけ哉
 契りしを命とたのむ我なれはいけもころしも君かまにゝ
 夜と共に涙をひちてこかるればひ水になりてこふとしらすや

かち人の渡れとぬれぬえにもみな又あふ坂はとふとこそきけ
あさてかりしき忍ひけんあつまめも我戀計おもひけんやそ
今更に行衛もしらぬ我戀はとよ玉姫のこゝちこそすれ
年ふれと哀にたえぬ涙かなこひしき人のかゝらましかは

神祇

あしかひの顚れ出し昔より神をは君もあふきそめてき
飛くたるなゝしの雉ないさりせは天のはゝやも歎かさらまし

慶賀

君かへん年の數をは幾千代といさしら雲のはてしなけれは
何をかは君かよはひのかすにせん信田の杜の千枝もかきれり

釋教

華嚴經 法界唯心

うらやみもなげきもすまし世中は我心こそいはゝいふへき

大集經 二垂彈呵

けた物に猶なとりても見ゆる哉人をはしらぬ人のこゝろは

大品經 畢竟空

何事もむなしとける法なればつみもあらしと聞そ嬉しき

法華經 圓

皇の御ゆきをいてゝ見さりせはけふ迄世にはなつまさらまし

涅槃經 一切衆生悉有佛性

もゝ人の心のうちにすむ月をいかなるつみの雲かくすらん

無常

あしたよりくれを限れる虫よりも定なき世そはかなかりける
うちなひく末はにすかる露よりも頼かたきは命なりけり

離別

羈旅

たのむれと心かはりて歸りこはそれそやかての別なるへき
なつからひなの別に程ふれば都のてふりかけぬ目そなき
はるゝといくのゝ道に旅れして袂露けき草枕かな
草枕袖のみぬるゝたひ衣おもひ立けん事そ悔しき
旅の空過る月日はめぐりあへとなとや都のものかたりせぬ
あつまちの野しまかさきの濱風にわかひもゆひしいもかほ
のみおもかけにみゆ

物名

ときのふた

つられれと昨日頼めし言の葉もけふ迄いける身とはしらすや

おもなたな

池のおものたなひきわたる萍にはらはぬ庭と見えもするかな

短歌

うき身には よのふることもし

おほつかの ことほりなれや

そまひとの うきふししけき

身なれとも 心にもあらず

かりかれの ひまなくねけと

きかせれば なくもゆかむも

なしはてゝ このよのことと

おもひつゝ うき世中を

まといつゝ 行へき方も

立かへり 空をあふきて

なかしつる哉 あり明の 天の川なみ 難面なをも

反歌

身をしらていふはかひなきことなれと頼めは人なと思ふ計そ

春

前備前守季通朝臣

いはまもる水のくさひ打とけて今朝より春の水そもり来る
をしなへて四方にたな引霞かなこしちの方は冬とこそきけ
いとしく君かよはひを野へに出て數なき松にいのりする哉
身をつめは若菜は摘しつゝましみ我も昔は老ないとひき
春のうちは久數匂へ梅の花は心なる人やとまると
我心はるてふ事もおもほえずいとゝかしらの雪し積れは
春雨のしつくは糸にぬきてけりむへいひけらし玉やなきとは
たとふへき物こそなけれ山里の霞のうちの鶯の聲
春は猶花の匂ひもさもあらはあれたゝ身にしむは曙の空
花みれば身にやはしみみにしめとかくまとはるゝ春はなかりき
吉野山花は半に散にけりたえゝかゝる峯のしら雲
心なき我身なれとも津の國の難波の春にたえずも有哉
ますらおはしか苦しさを忘れつゝいつの春迄うたならん
なかもれは涙そ落るかりかれのこん秋はまた我やなからん
山吹の花をあまたにかへしめんしはしたたちそ井手の川波
松かうへに木たかく懸る藤の花手かけとるへき物とこそみれ
あなかにけふをおしまは又もこん春を厭ふになりぬへき哉
いかなれば今宵計の春の色を卯月のかけにしはしとゝめむ
身は冬の埋木なれと勅なれば春のことは花をちらしつ

夏

吾せこに都へいかてことつてん卯の花咲る里にとまりぬ

世中にいかていはれんほとゝきす人より先に初音きゝつと
時鳥五月のさ夜に聲す也我はこゝろのやみにこそきけ
吾すみか本の蓬の宿なればあやめ計をけふはふかなん
かほれとも一方ならぬ風なれば花橘をいかてたつねん
むかし我あつめし事を思ひ出てみなれかほにもくる螢かな
夏とても心のとききこそなき花は戀しく月はまたれて
おきなさき結ふ泉の手の隙にうき影みてもおとろかれぬる
大井川のほれはいとゝすゝしきは戸難瀬に秋や通ふなるらん
けふくれば麻の立枝にゆふかけて夏水無月のほらへをそする

秋

このれぬる夜の間に秋はきにけらし朝けの風の昨日にもにぬ
七夕のけさうらめしき玉章は初かりかれやかけて行らん
野分する野邊のけしきをみる時は心なき人あらしと思ふ
秋の野の千草の花にきつれば白露もみななのか色々
野へ毎に人も許さぬわれもかうこや今やうのむさのことくさ
しなのなるとくさ吹てふ秋風はつたへ聞たにそゝろさむしも
秋の夜は松をはらはぬ風たにもかなしき事のねたてすやは
よと共に草の庵にすめる身はま近く虫の音をのみそなく
女郎花いとゝや我ないとふらんかしらの霜のあきのふかさ
吾宿の萩のにしきはをりなからあるしの物におはすとと思ふ
二たひとまれかれましや花薄我のみ野へにみるめなりせば
秋風のふかぬ限はひとりも山田のひたにいとまなき哉
年へたる岩に散しくもみち葉は是やこけちの錦なるらん
かたゝに散もみち葉をかきつめて我宿にのみ秋をとゝめん
おほつかな月と紅葉といつれをかまことの秋の色とさためん

身のうさを思ひぬさめの鹿のれは吾さへ聲のおしまれぬ哉
いつこにも秋はかはらぬ物なれと猶山里はかなしかりけり
ことゝはむいほしろ小田のみたよりもりさて其稲はいか計そも
ことゝに悲しかりけりむへし社秋の心をうれへといひけれ
我命秋の爲にそおしまるゝ秋し過なはおしけくもなし

冬

さら／＼にいやはれらるゝ山里のあしふく宿に時雨する夜は
冬ふかみかれ野をみてそ行末の我身の上は思ひしらるゝ
みほによりなかるゝ水も氷してなとなし川となりける哉
年をへてつめる歎きをこの冬のよるこひもかなたき盡してん
さえ渡るよはのけしきにみやまへの雪のふかさを空にしる哉
鴛鴦のあたりの水はこほらすと聞しはさえぬ夜半のことかも
冬のかけうつしとゝめはこやの池の水の鏡いてみさらめや
すみかまのせれうの里の煙をはまたき霞のたつかとそみる
まきもくのあなしの山の鶯は今いくかとか春をまつらん
年はみなくれていぬれと我身にはえたることなき歎をそする

戀

いかにしてうしと思はて戀をせん歎は人のおふとこそきけ
幾度か返してれまし身にふれて下にかされし衣ならすは
歎きつゝおほくの年を重ねつる夜半の衣のかゝらましかは
思ひやれ身の數ならぬなきをわするゝ程の戀の心を
今はたゝなさふる袖も朽はてゝ心のまゝにおつる涙か
今宵しもうたても鹿の鳴なるか獨れさめの床としらすや
なのつから戀やこえんとおほゆれはみとみる人の哀なる哉
君こふる涙にくたす衣手をやす□きまゝに形見とそ見る

我戀はたのめて後につらければ涙の色のうすくこきかな
言の葉になくさむへきないかなれば哀とたにもいふ人のなき
我戀をれては夢にみさめぬれば面影にたつあはぬ間をなき
今はたゝ我身の程そみまほしき心にいれて君をおもへは
いかにせんいれぬ身共成なはやしめとしきかは哀とやいはん
逢事はわかけよそひのきめなれや年はゆけともさせる共なし
わか戀は水なき時の池なれやつゝみなからにいひもはなため
我戀はなさゝか原の露なれやことの葉ことに心をかゝるゝ
れやの内に干たひやちたひ臥かへり侘しけなくや獨めるよは
歎つゝ床もさためぬうたゝれはうたても夢の程もなきかな
今はさは人も通はすいかにして君かあたりの風にあたらむ
逢ことは命にかへししるしにやけさはいつへき心地せさらん

神祇

いせをしもむへ神風といひけるかれき事はてゝいへる冷しき
いはし水えんをむすへる人は皆うるほひをえぬことのなき哉

慶賀

はこやにはふたりの君の諸共に春と秋とにとめるとそ聞
佐渡の海のあはの鳴門をさしなから田に作る迄君はましませ

釋教

心こそ牛の車をかけ渡るのりをしふかく頼む身なれば
人毎に佛の種はありとかや數ならぬ身はいかゝとそ思ふ
西方にあみた佛はますなればことはりなれやなもととなふ
いかにしてよもきのかとを立出なはやかて蓮に宿をうつさん
あるならず又なきならずありなしに猶しもあらぬ事や何なる

無常

いとひても猶しのはるゝ命哉二度くへき此世ならぬを
現なもうつゝといかゝ定むへき夢にも夢をみすはこそあらめ
離別

おほかりや立別れての名残には哀いはてと思ふことの
み

羈旅

みさふらひみかさなめしそ淺香山木の下露も今はひぬらむ
さらしなや姥捨山に月みると都にたれか我をしるらん
何よりもはかなきことは夏の夜のあしたの野への旅れ也けり
さほのなき猶すゝめてそたかせ船我は都にさせる身なら□
おほつかな木の下かけかけたけ隈の松をよきとそみて過にける

物名

腰より上和琴下にしやうのこと

けふ過ぬあすはこんとそいひしかとは一しやうのこと□□

おきな草を句の上に一もしつゝすへたる

音もせてきにける人を何せんにくり返しわかさそひやりけん

短歌

おほきみの みことかしこみ かしこみて かすにもいらぬ
身なれとも このもゝ歌を たてまつる はこやの山に
すみわたる あらきけものを なしなへて おとろきはしる
こともなく むなしき船を うかへたる 海にたゝよふ
うなもみな みなきる事も なしとかや かゝる時には
あひなから 我身ひとつは いつとなく かしらの宿も
朝ことに はらひもあへず おきな草 ひとりかれのに
たてれとも これなしのふる こともなみ 涙のあめは
露はかり とゝまる人も なゝくりの いてゆしほとし

おほゆれは いづれの方へ いなむしろ しかしやいまは
あらしふく みねの木ノ葉と もろともに ちりなん後も
おもひなく ことはさすかに おほそらを はるかにひとり
なかもれば 霞の内に かりかれの きえみきえすみ
さためなく みなみにさりて かへりこむ ほとをまたてや
いかならむ 雲のたえまに いる月の かたふく影に
さしそへて 心なにしに やりてこそ 後の世なとも
いとなまめ それもちきりに よりければ 何ともなくて
行みつの あはれゝと いひながら すきのいたとの
いたつらに 明くれものそ なけかしき 今はいわ身
いくはくの 春秋とかは とはるへき たとひ久しく
なからへて へぬる月日を かさぬとも 夢に夢みし
から人の 覺ての後に そのことゝ わくこともなき
まとゐをは いか計かは おもふとはしる

反歌

世にふるは我おほきみの哀てふなけのこと葉を待としらすや

春

降季朝臣

明くるゝ同じみ空のいかなればけさは今年のはしめなるらん
立歸る春のあしたを詠れば我身をとめて年は來にけり
新敷春の初音に成にけりしつの丸やに玉はゝきとる
子目する野への小松に引かへてかけおとろへぬ我身ともかな
澤水にひくものすそは濡にけり煮くの若なを摘しなふとて
いさやこらさもとの流せき分て小河の水にわかなあらはむ
うつろへはたへぬ柳の枝にある百さえつりの鶯の聲

驚の春を限らぬ鳥ならは過る月日もおしまさらまし
さほ姫の色めく春に成にけり霞の衣幾重たつらん
あひきすとおことゝのほる鹽の浦の霞こめたる蟹のよひ聲
春くればたか爲にとか青柳のかた糸にぬふ梅の花かさ
久かたの天とふ鴈の歸るさは春のしらへに立ることちか
衆てより花の心を知ぬれば咲てもちらんことをしと思ふ
花ゆへに我身そあやな祈らるゝ千とせの春に逢んと思へは
から衣かつく袂そほちぬるみれとも見えぬ春のこさ雨
かき曇り雨は降さぬみつなさはあしはやを船とまやふくらん
吾せこや花かつらせむから國の昔のけふを思ふ情に
さかつきは誰ともさゝ廻り行なみの心にまかせたるらん
暮て行春は残りもなき物を惜む心のつきせさるらん
散花を心にそめてねぬる夜のおくるあしたに春と思は

夏

物いは、残れる花にとひてまし昨日かへりし春の行衛を
いつしかと衣ほすめりかけるふの夏きにけらし天のかこ山
しての山こえつる背に里なれて今もなかなん哀その鳥
かほるかのねなから袖に匂ふらん今宵あやめの草枕して
玉にぬくおりにあふちの花の色に心うつらぬ人はあらしな
おしめとも花橘のかほる香はかせのやとりにはこはれにけり
橘の咲そふ花にかさゝれてふるき身ながら折に逢かな
時鳥をのかさ月かものゝへのいはせのみに鳴とよむなり
玉のをやみしかからまし御被する麻のをぬさに祈りかけすは
思ふことあさちのなはにときつけて清き川せに夏はらへしつ

秋

このねぬるあさけの風やはらふらん嶺なき雲の空に消ぬる
しらふるは聲もなの／＼引かへてけさからことに秋になる哉
織女のあまつひれ吹秋風にやそのふなちを御船いつらし
さぬる夜の天の河原の磯枕そはたてあへす明そしにける
秋の野の小萩か花を露ながら籬の木にうつしてそみる
庭もせの萩の上風音信ていつしかなひく女郎花かな
すを戀て歸り煩ふつはめ哉なれさへ秋の風やかなしき
くまもなき空行月をみる程に秋の半のこよひすきぬる
照月は積れる雪の心地して玉かとみゆるきり原の駒
鴈金のうかへるつはさ打たれて水田のほたちふみし立らん
竹のはに籬の菊を折そへて花をふくらん玉のさかつき
古のその玉章はかけすしてあしなふくめるかりのつかひか
つふらえのせなの霞も春消て霧立渡る秋の夕くれ
聲たてゝ妻かふ鹿もなのつかから千とせの春にあふとこそきけ
しらすけやまのゝ萱原いちしろくあまたつ鹿のふみならす囀
立田姫花の錦のからきぬをいそくか虫のよるもはた織
吾宿のあさちか本の秋風に聲まもなかねきり／＼す哉
千年まで我行末をな月のかえぬることに逢よしもかな
こきうすき花の色々染てきる秋の衣はけふばかりかも
いつかたに更行夜半の成ぬらん秋の残りか冬のはしめか

冬

長月も冬のはしめになりぬとて雲の衣を立やかふらむ
すむ水心をなしとは誰かいふ氷を冬のはしめをもしる
ちりかゝる木葉も軒の雪あらは時雨する夜はいかてわかし
はゝそ原木末の空を吹風の目をふるまゝに聲をすくなき

戀

霜をけは松のみとりそあらはるゝ見えわかさりし夏の木立を
いひわかね事そわりなき大鳥の羽には霜のふるやふらすや
降積るしらねの雪はいななさのかひの毛衣ほすとみえけり
いつみなる篠田の杜の干枝ながら玉のうへ木にかさるしら雪
九重の雲の上よりやゝふるのなにともなふりつゝみかな
今宵れておくるあしたや我せこかふたなく枝の松もおるへき
其人ときくにけぬへし露の身のしらすしらすは過ける物を
忍ふるに名の埋もるゝ物ならは誰ともけふはいかてしらまし
相坂の關の關守心あれや岩間の清水かけをたにみむ
打はへてかこのわたりに引つな行衛は君にまかせたらなん
淺からぬ心を文にかきのへてなぐる折にや吾をしるらむ
包むへきあしての跡に忘られてまたいひそめぬ人にみせつる
いなとたに書ける筆のなさをは束のまにても忘れやはする
忍ひやるふみつくきの浦にこそ波の心もゆきてかくめれ
さもといへは我身も捨し朝露のけやすき命千年ともかな
うけひくは嬉しかりけり住吉のつものあひき我身なられと
まゆれかき紐とき垂てまためやもしえや今宵といひてし物を
きますらん人待ほとの手すさみに吾玉とこを打はらひつゝ
乙女子かも引のすかたのみならずふりあふきつる顔も恨めし
諸共にけふそ心はゆきにける人つてならぬむつかたりして
白妙の袖おりかへすことそなききことも君に衣かされて
逢そめぬよるはうきれの心地して枕なくゝ涙やはひし
明ぬとて君をくるまのわりなきに忍ふ心はくれける物を
立さらすあひみる人のうき物と明行空を思はさるらむ

神祇

何かそのあはぬ歎きと思ひけん歸るあしたの心のみこそ
なくりつる人の歎やとまるらん面影にたつあされかみかな
神さひていはへるほこのみゆる哉こはよも山の人のまもりか
いにしへもまつれる折は毛衣にわけの衣をきるといひけり
慶賀

釋教

とにかくに心は三世にわかるれといへは一つのはとけ也けり
何とてかむなしからぬと思ふこそまことはのりの心なりけり
いさきよく思ふ心のふかゝらは誰か浮世に思ひとまらん
極樂と聞に心のゆきぬればたれか憂世におもひとまらん
ふたらくのみ山かくれに年をへてすむらん月を思ひこそやれ
無常

離別

思へたゝみなはなすみのはかなさは有かと見れば消ぬる物を
春はもえ秋は散ぬる心地して木の葉よりけにもろき命か
なくれぬと思ひをこせよあかなくの別るゝ道に迷ふ心を
鞍旅

道なとみ駒引とめて相坂のせきの清水にしはしみつかへ
いとなみに柴おりかくるかりの庵の軒に引ほす旅の衣か
大ともの松のはひねを枕にてたかしのはまに丸ねしてけり
旅ねしてつかれにけりな左手の弓とるかたのたゆくなるかな
戀せぬに袖を露けきむさしのゝ淺ちなしなみさぬるよすから

物名

千歌佳句
せんさいかく

人なみに百歌といかにせんさいかくもなき我身と思へば
扶桑集
ふさうしふ

冬さみみさよもふけるの浦風に嶋渡りする船やいつらん
短歌

そさのなの みことのおりに あしひきの やまとことはは
あらかねの つちにも更に なこりつゝ みそもしあまり

ひともしに よみならはして 吳竹の 世々にもたえぬ
ものなれば 花さく春の あさなく 月すむ秋の

よなくも 情をしれる 人はみな わかきもいはす
おいぬるも これに付てそ 夏むしの おもふ思ひも

あらはるゝ ことのはしとは なりにける かゝるわか世の
風なれば 今もむかしも これにまた しく物そなき

こけむしろ みとりの色の ふりにけり ふるきみことの
おり／＼は 此ことのはな かきあつめ なにはの浦の

名に付て かた／＼にこそ わかるめれ いまわかきみの
このみちな もてあそはるゝ ころなれば かしこきおほせ

くたりつゝ いへにさま／＼ 定めなく もゝのうたをそ
たてまつる 其人がすに ましれとも 世にうみすくる

われなれば つたのはそ江の つたなくて ことはのなも
にほひなく おいおとろふる 心地こそすれ

春

いつしかとなるみの浦のかすめるは明行まゝに春や来ぬらん
尾張守親隆朝臣

立歸る春のみとこそ思ひつれ水も解る物にそ有ける

春日山麓の野へのれのひこそ神の印をまつこゝちすれ

春きぬと霞むに付てしるければ隔つるかひもあらしと思ふ

年をへて立かきなればみよし野の霞そ山の衣なりける

松しまやなしまか磯の夕霞たな引渡る蟹のたくなは

鶯のはつれば谷ないつれともまつきく人のこゝろにそいる

鶯のねなは何とかおもふへき我身はいつも春をしらねは

日かけみね岩間隠れのかたそはにまた有けれなこそふる雪

梅かえによのまの風や吹つらんおほえぬ袖の移り香そする

櫻咲よもの山へのとをめぐそいつれもこしの高れなりけれ

朽にける身の埋木は春くれと花をはよその物とこそみれ

矢矧河うへのにたてるかは櫻いつか□きはならんとすらん

春風にしかの山こえ花ちればみねにそ浦の波はたちける

かゝみ山光は花のみせければ散積りてそ久しかりける

とりつなく人もなきのゝ春駒は誰ににげよと荒にけるらん

思ひ出ることもあらしを別れこし何ふる里にかへるかりかね

賤のおか小田のなはしろしめはへて室のはやわせ種かしつ覽

藤の花咲る盛は松ならぬ人のこゝろにかゝるなりけり

行春の影に身をたになしたらは立はなれてやけふはやらまし

夏

ぬきかふる花の袂の移り香のかほるや春の名残なるらむ
ふしみつや河そひうつき花咲て波はかさねの物とこそみれ
時鳥衣の闇にたつれきてきかぬうらみなかさねつる哉
しはしまてまかれふくてふ音はやめきひの中山時鳥なく
朝倉やとはぬになる郭公木の丸とのゝ名をたかしとや

菖蒲草いつかともなき我身にはもとよりねをはかくとしらすや
五月雨に淀の水かさまさるらしみほのしるしもみえず成行
分て行鹿のをひきのかくれぬはまたしけらぬや野への夏草
しほたるゝ海士のかこ山何としてやゝとも叩く夜はの水鶏そ
流しつる麻のゆふしてかけとめて井堰もけふは夏はらへしつ

秋

秋きぬと心にとめて思へはやまたきに風の身にそしみける
またれつる月の中たちいらぬまにはや船出せよ天のわたせに
いそのかみふるからなのゝ女郎花猶いにしへのすかた也けり
えそかすむつかるの野への萩盛こやにしきゝのたてるなる寃
秋ことに猶たえずこそおとろかせ心なかきは萩のうはかせ
鶉なくくるすの小野の夕ま暮ほのめきたてる女郎花かな
月にこそいとひし物を浮雲の又かりかれをたちかくしつる
あたちのゝお花隠れにほのみゆるしらけや鹿のしるしなる寃
結ひなく愁のなたに露ならはとくる心もあらましものを
播磨かたすまの月よめ空さえてゑしまか崎に雪ふりにけり
浦山し位の山の嶺をいてゝたかくものほる夜半の月かな
いくかへり詠きつらんはしたかのしらふにみゆる秋の夜の月
かく計すむ月影は清けれと結ふに濁る山の井の水
むさし野の葛の青葉のしたはれて空までさゆる月をこそみれ
唐衣うらむる聲はすかのねのなかゝし夜を打あかしつる
いこま山ふもとの野へも霜かれてすみかもみえぬくつわ虫哉
引かすもさやにみわかす夕霧の立のゝ駒は音計して
染わたす時雨ふりての紅のやしほのなかのならのもみち葉
いかにして岩まもみえぬ夕霧となせのいかた落てきつらん

住の江の浦にしかへる秋ならはまつとや人の思ひはてまし

冬

けさよりやさえひとりもちばかりななる松葉かきつめ冬籠る寃
枯はつるはしの枕せのわかたち色つくとみし葉さへ散ぬる
神無月くもらは空とみし程にやかて日くらしみ山への里
降雪にそこともみえぬ東路はけふるや室のやしななるらん
白妙に成にけらしな津の國のこやのしのやの雪のうはふき
跡たえてあらちの山の雪こえにそりのつなてを引そ煩ふ
けさしもやすはの氷のひまわれてをしうる駒の聲なつむらん
爪木とる跡絶にけり降雪にいかにかすへき小野の炭がま
埋火のあたりは春にほのめけはしたもえ渡る物にそ有ける
暮はつる年の行衛を尋れば我身に積る老にそ有ける

戀

つれなきにうき爪木とは思へともこりぬは人の心なりけり
人しれぬ涙の雨は降そへとおもひはえこそけたれさりけれ
うらしまの箱のあけくれ悔しきはかひなき人の思ひなりけり
更科やきそのあさ衣袖せはみきたるかひなしむねのあはれは
紫のゆはたそむてふさすはひのあひみあはすみ人しるらめや
さゝかにのくものはたてにかく糸のとにかくに社思ひ亂るれ
中々にたつかの弓と成にせは引とゝめてもいはましものを
いかにしてよその思ひをしらせましのもりの鏡君はみすとも
程もなく朽れる袖も有物をなのゝ点とのみ思ひけるかな
こやとたにいふとしきかは津の國の幾度なりといはまし物を
はくたちのさやは有へきと思へ共せめて戀しき物にそ有ける
みちのくのとつなのはしにくる網のたふすも人にいひ渡る哉

紅にかたしく袖のなりぬれば涙の色のかはるなりけり
東屋のなかの軒の忍ふ草しのひもあへすしける戀路に
賤のめかはつきにさらすあさ衣いやしき戀に袖もぬれけり
しるならはいかに枕のおもふらんちりのみ積る床のけしきを
袖ふかし過かてなりし移りかのけさ迄匂ふおもかけやなに
よさの海の引てふあみのつなて繩くるをは人のこゝろとも哉
れやまてはいるとはすれと梓弓ふさてはなそや返るなるらん
しほりつる袖はかりとそ思ひしに身をさへ戀にくたしつる哉

神祇

いはし水ふかきちかひの流れにはいくその人かわたされぬ
行かたき佛の道のとをければまぢかくあとなるゝなりけり

慶賀

君か代は榮へゆくさは濱ゆふのいく重れともしられさりけり
いつしかと春のあしたのきゝかきに耳驚かす我身ともかな

釋教

御法をは心はかりにかくれ共いつくとえこそしられさりけり
四十あまり多くの年を渡りつゝとくはひとつの法にそ有ける
かりそめにかゝると見えし月なれけ誠はわしの峯にすむなり
誰もみな胸の蓮のあらはれてひらくる身とはいつかなるへき
うき世にはいかて此たひかへりこてやかて佛の道に入なん

無常

あたになく草葉の露の消ぬるを哀よそにや人のみるらん
つゝとして誰かは果のなかるへきをくれさきたつ程計こそ

離別

何事も思ひもしらぬ身なれともおしきはけふの別なりけり

羈旅

都出ていくよかへぬる相坂の關路のすきはとなきかりぬる
駒なつみ岩まかたそはたとり行木曾のかけ路はつらゝしに鳧
なやかかるくゝめ屋形の竹柱ふしよからぬは旅ねなりけり
日計りをたのめて出ぬ此たひはこくてもたゆきときさの舟路に
歸るさにかしらも白く成にけりこしちも雪に年もつもりて

物名

かふりはこ

白雪かふりはこしとて庭の面にいかなる風にさそはれぬらん

すゝりはこ

人しれすずりはこのます陸奥のしのふのもげに何にかはせん

短歌

君か代は こ高き松の かけなれや さかへいとゝも
ときはまて 木末はるかに おいのほり うれしきことな
みとりなる んかひをみつの しなみれば そのしたにすむ
われらさへ 雲井も高く なりぬへし おほくのとしも
なくれとも 風のけしきも やはらかに えたをならさぬ
ことのは、 いくちとせとも かしらさりけり

春

右馬權頭實清

かすめとも雪を降くるけふは猶雲路に冬や立とまるらん
暮の連惜みし春の程もなくはしめにも又なりにけるかな
梓弓春の野へなる姫小松君かちとせにひきそくらふる
小山田は雪けの水し深ければあせ傳ひにそれ芽摘ける
春の野のわかなはかりと思ひしに年をそへても摘てけるかな

雪降て去年にかはらぬ山里に春めくものは驚のこゝろ霞たち浦はもみえず蟹人のあことゝのふる聲のみそする咲ぬともいはぬはかりそ梅の花匂ふは人につくるなりけり梅の花梢を渡る春風のかほる香をのみちらさましかはさほ姫の柳の枝に引糸を吹來る風にまかせてそ見るしつのめか小田の堤にさす柳しげくもことはへにけるかな歸る鴈今いく程もなき物を花の盛を過しやはせむ春風も花まつ程はふかはふけ咲なん後のかゝらすもかな雲ならはさのみはれすや有へきと思ひわくにそ櫻なりける水の面に移ふかけを白波のおるさへおしき花さくら哉櫻花風に散たに有物をいかなる人の手折なるらむ飛鳥川波の花こそ咲にけれ高間の山に櫻ちるらし松にしも何かゝるらん藤の花さても常盤にあらぬ物ゆへ奥山のいはれのつゝし咲ぬれば苔のみとりも色はへにけり行春を聲ふりたてゝ呼子鳥よふにとまらは我をとらめや

夏

あかて行春の別にいにしへの人や卯月といひはしめけむ山賤のさらせる布は卵の花のちらぬ限りの物にそ有ける何しかも人にかたらん時鳥唯しのひれは我に聞せよ時鳥雲井の聲のほのくゝと夜も明方に鳴わたるかな五月雨にあしまの船はあらはれてみえし末葉のかくれ行哉さはにふす鹿は螢におもなれてともしにめなや合せさるらん水あてひむろに冬はとまりけりすきにし春もかゝらましかはおほつかな誰床夏の花なれば見る朝ことに露けかるらん

蓮葉の下にや魚のおそふらんうへなる露の玉そこほるゝ

秋

いつしかとけさは風こそ嬉しけれこゝろに秋の立とおもへは葎はふやとにしもこそ白露の玉もてかきける秋は來にけれ彦星のかへさの舟をおしむとや七夕つめはあまのひれふる手折つる小萩か枝の露しけみ雪に袖のぬれにけるかなしなかりいなの篠原はるゝと心のまゝに置るしら露秋霧のよつまか野への女郎花わかにくれは立かくするん藤袴ぬしやたれそと思ひしに秋きて後そ綻ひにける野邊みれはいつかはなける秋もなし聲にて虫のはかるなり鳧小男鹿の妻にこよひやあはさらん待かれ山のかひになくらん妻こふる涙なりけり小男鹿のしからむ萩にをける白露天の戸を長閑に渡る月の船今宵は雲の浪なかりけり照月に人の心に見ゆる哉哀しけるもあはれしらぬも久かたの月のさかりになりけり天の川霧たゝすもあらなんくのゝあき月はこよひの關なれば心とめて誰かみさらん衣うつ碓の音にこと寄て寢覺かちなる秋のよなゝく移るふにかさへも菊のかはりせは有し花ともいかてしらまし秋深きあたのおほのゝ露霜にかやかうらはも移るひにけりけさみれはしつはた山の梢よりもみしの錦なりて染つる紅の衣かけたる佐保山とみゆるは峯ののみちなりけり花薄まれくかひこそなかりけれしらす顔にて秋のくるれば

冬

山里は嵐ふく夜の村時雨窓うつ音にめをさます哉落つもる紅葉の色はふかけれとあさく成ゆく山の井の水

まはらなる賤かしのやは夜を寒み人こそあらめ風もとまらず
さえ／＼て風の渡せる浮橋は河瀬にむすふ氷なりけり
あなし河水ゐにけり巻向の檜原の柚木いかゝくたさん
けさみれはうきれの鶯はあくかれて氷そひたるまの池水
濱風や更行櫓に寒からんなこの入江に千鳥妻とふ
雪ふればくめのさら山今さらに道踏分て人そこえける
みよし野の青根が嶺を白雲の立こめたりとみゆる雪哉
くれて行年の姿は見えねとも身に積りてそ顯れにける

戀

紅葉はの色にかはらず染てけり涙や袖のしくれなるらん
あはすとも情はかけよなのつからむくひにかゝる戀も社すれ
心には我こそ、ろたに任せればことほりなりや人のつらさは
いかにせん逢より外の藥なき戀のやまひに沈む我みを
つれもなき人社あらめなそまかくめもあはてのみ夜を明す寃
なかくしも有へき物を世中にいとかく物を思はずもかな
淺ましや涙の川にうきなからいかなる戀のきえせさるらん
是をみよ朝な夕なにあさりする蟹の衣と我かしはれと
命こそあるはあたなれ有えすはかゝる戀路にあはさらしを
荒熊のすむといふなるみ山にも妹たにあるときかはいりなん
日をへつゝ戀は増りて我妹子かつらさしもなそ思ひけたるゝ
夕されはそよととする萩の葉の難面人の心なりせは
あしかもと何思ひけん戀侘て我も涙にうきれをそする
風をいたみ浦はによするしき波のしき／＼人に逢みてしかな
戀わひて心ことはもつきにしないかにたえせぬ涙なるらん
夢にたにつらくみえずはなのつからまじむ程は歎かさらまし

いつくにも我身にそへる影のこと戀しき人の離れさりせば
よそにのみみ山か裾のされかすらさねすて過んことそ苦しき
つれなきを歎きしよりも中々に逢みてそ猶わりなかりける
わきも子は雲隠れする月なれや暫しみぬにもゆかしかりけり
神祇

慶賀

やをか行濱のまさこにくらふとも猶君か代の數やまさらん
君か代に三千代へてなる桃の枝いくかへり迄さかんとすらん

釋教

磯のあまよ底のかつきに思ひしれきこそは罪も深くなるらめ
花なれと主にいはいはてはと思ふまにおらまほしきもおられきり
妹ならぬ人に心やつくさまし戀わすれかひたもたさりせば
何にかは偽はせん二つなきまことのりをたもつ身なれば
さか月の影をたにみすかく計うき世に又はいてしと思へは

無常

命迎あるは有かはおしめともおしまれぬ身を何おもふらん
風そよく淺ちか末の露よりもあたる物は浮世なりけり

離別

朝たちて別れし人はいまもかもひなのあらのに草むすふらん
騷旅

磯近き蟹のとまやの旅れには枕の下に浪をなとする
山たかみ石ふむ道のはるけきになつの馬をも今えてしかな
妹かふる涙もかゝる旅衣野原の露にぬるゝのみかは

播磨かたあかしのとなみきはくめりしはしな出そこの船人
なそもかく都戀數思ふらんいつくもかりのやと、しらすや

物名

からくしけ

須磨の浦のあまの藻驤のいとからくしけき思ひに心をややく

かゝみの箱

賤のおよなれやかゝみの箱のなにもに暫しかさなん妹か宿迄

短歌

うは玉の くらかみ山に ふる雪の しろしくろしも

しらすして 和歌の浦はの もろ人と 人なみ／＼に

立ましり むなしきなのみ 音羽川 音はかりには

聞ゆとも 誠はさらに なつ木立 ことのほしまり

かきつめて も、くさ迄も なりにけり そのあさけりも

は、かりの せきやりかたなく おもへとも 君かみことの

すゑなれば いなはの露も いなひけと 思ひあまりに

津の國の なにはのことも わすられて よきふしもなき

しほれ芦の したにはよとむ 水の泡の もらして後も

よと、もに なな消かへり はつとしらすや

春

春きぬと空にしろきは春日山嶺の朝日のけしき成けり

霞たち雪も消ぬや三芳野のみかきか原に若菜摘てん

梅か枝にまつ咲花を春の色を身にしめそむる初なりける

我そのなやと、はしめよ驚のふるすは春の雲につけてき

冬枯のすその、原をやきしより早蕨あさりき、す鳴也

丹後守顯廣後改

哀にも思ひ立かなかへるかりきすかにみゆる春のけしきを
詠するみとりの空もかきくもりつれ／＼まざる春雨をふる
紫のれはふ横の、つほすみれま袖につまん色もむつまし
山櫻咲より空にあくかる、人の心やみれのしらくも
いか計花をば春もおしむらんかつは我身のさかとおもひて
つらきかなとて櫻の長閑なる春の心にならばさるらむ
ちる花のおしきなしはしらせばや心かへせよ春の山かせ
あちきなや何とて花のおしからん我身は春のよそなる物を
櫻花おもふ餘りにちることのうきをは風におほせつるかな
吹風の心とちらす花ならは木末に残す春もあれかし
道遠く何尋ぬらん山櫻おもへは法の花ならなくに
櫻花まつとおしむとする程に思ひもあへすくる春かな
さくらさくふもとの小田のなは代は種よりさきに花を散ける
ますらおは同じ籠を返しつゝ春の山田に老にけるかな
行春の霞の袖を引とめてしほる計や恨かけまし

夏

夏くれは衣かへして山かつのうつきかきれもしらがされなり
千早振かもの社のあふひ草かさすけふにも成にけるかな
さらぬたに臥程もなき夏の夜にまたれてもなく時鳥哉
時鳥鳴行方に添てやる心いく度聲をきくらむ
さ月こそなれか時なれ時鳥いつなまでとて聲おしむらん
夏も猶哀はふかし橋の花ちるさとに家あせしより
五月雨はたくもの煙打しめりしほたれまさる須磨の浦人
庭の面のこけちの上にからにしきしとれにしける床夏の花
小丹さし手折て袖に移しみんはすの立葉の露のしら玉

秋

いつとてもおしくやはあらぬ年月を御被に捨る夏の暮かな
 八重葎さしこもりにし蓬生にいかてか秋の分てきつらむ
 萩の葉も契有てや秋風のなとつれそむる妻となるらん
 七夕の舟路はさしも遠からしなと一年にひとわたりする
 みしふつき植し山田にひたはへて又袖ぬらす秋は來にけり
 何事も思ひすつれと秋は猶のへのけしきのれたく有哉
 夜もすから妻とふ鹿のむね分にあたらず眞萩の花ちりにけり
 身のうさも誰かはつらき淺ちふに恨てもなく虫の聲かな
 夕されは野への秋風身にしみて鶉なくなり深草の里
 露繁き花のえ殊にやとりけり野原や月のすみかなるらん
 石はしる水の白玉かすみえて清瀧川にすめる月かけ
 月よりも秋は空こそ哀なればれすはすまむかひなからまし
 月の纈あまたへぬれとおもほえず今宵計の空のけしきは
 いかにして袖に光のやとるらん雲井の月はへたてこし身を
 秋の月又もあひみん我心つくしなはてそ更科のやま
 月も日もわかれぬものを秋くれは夜をなかしとも誰定めけん
 夢さめて後の世までの思出にかたるはかりもすめる月かな
 此世にはみるへきもなき光かな月もほとけのちかひならすは
 衣うつひゝきは月のなになれやさえ行まゝにすみのほるらん
 山河の水のみながみ尋きてほしかとそみるしら菊のはな
 本ゆひの霜置そへて行秋はつらきものからおしくも有かな
 冬

いつしかと冬の印に立田河紅葉とちませうす氷せり
 まはらなる槌の板やに音はしてもらぬ時雨は木の葉なりけり

戀

風さやくさよの寢覺の淋しさにはたれ霜ふりつるさばになく
 月きよみ衛なく也沖つかせ吹井のうらの明方のそら
 月さゆる氷のうへに霰ふり心くたくる玉川のきと
 空にみつうれへの雲の重りて冬の雪とも積りぬるかな
 雪ふれば道絶にけり吉野山花をは人の尋しものを
 冬の夜の月と雪とをみる程に花の時さくおもかけそたつ
 をの山や焼すみ竈にこり埋む爪木とゝもに積る年哉
 行年をおしめは身にはとまるとかと思ひいれてやけふを過まし
 忍ふよりやかて心そ移りぬる戀は色なるものにそ有ける
 ちらはちれいはいせの杜の木枯につたへやせまし思ふことのは
 年ふれと人の心はつれなくて涙は色のかはりぬるかな
 あちきなや思へはつらき契かな戀は此世にもゆるのみかは
 戀しともいはゝなるかになりぬへし心をみする言のはもかな
 ふかくしも思はぬ程の思ひたにけふりのそことなる成ものな
 たのめすは中々世にもなからへて久敷ものは思はさらまし
 奥山のいはかき沼のうきぬなは深き戀路に何亂れけん
 人こき田の杜に引しめのかくてややかてやまんとすらん
 涙川そてのみわたにわきかへりやる方もなき物をこそ思へ
 露結ふまのゝ小菅のすか枕かはしてもなそ袖ぬらすらん
 戀をのみしかまの市に立民のたえぬ思ひに身をはかへてん
 いかにせんあまのさかてを打かへし恨ても猶あかすもある哉
 忘草つるにこしかと住吉のきしにしもこそそてはぬれけれ
 思ひ侘見し面影は扱置て戀せさりけん折を戀しき
 いか計我を思はぬ我心我ためつらき人をこふらん

人々のみなとが恨みんうきを猶こふる心もつれなかりけり
戀しきに憂もつらきも忘られてこゝろなき身になりける哉
いとふへきこはまほろしの世中をあな浅まし戀のすさひや
しき忍ふ床たに絶ぬ涙にも戀はくちせぬものにそ有ける
はしめなき昔思ふそ哀なるいつより戀にむすはれけん

神祇

幾かへり波のしらゆふかけつらん神さひにける住の江の松
おもふこにや松は十かへり花さくと君にそ人のとはんとすらん

慶賀

君か代はなのゝえ朽し仙人の千度かへらん時もかはらし
まことにや松は十かへり花さくと君にそ人のとはんとすらん

釋教

華嚴

朝日さす高れの花は匂へとも麗人はしらすそ有ける

方等

聞そめし鹿の蘭にはことかへて色々になる四方のもみち葉

盤若

雲もみなむなしと説に空晴て月計こそすみまさりけれ

法華

はるかにも匂ひけるかな法の花後の五百とせ猶盛なり

涅槃

おむかな月の御顔も影消て鶴の林にけふりたえけん

無常

世中を思ひつられて詠れはむなしき空に消るしら雲
常にすむわしのみ山の月たにも思ひしれとや雲かくれける

離別

羈旅

暁と聞て出つる別路をやかてくらすは涙なりけり
浦つたふ磯のときやの梶枕きゝもならはぬ波のおとかな
遙なるあしやの沖のうきれにも夢ちは近き都なりけり
しはつ山ならの下葉を折敷てこよひはされん都戀しも
我思ふ人にみせはや諸共にすみたかはらの夕暮の空
すみ馴しすみかも常の栖かは旅はたひとも何思ふらん

物名

かすみ やなき さくら
月 すゝ虫 もみち

花の色のおかすみゆれは歸らめやなききの宿にいさくらしてん

峯つゝき山へはなれすすむしかもみちたとる也秋の夕暮

短歌

新勸

しきしまや やまとしまれの かせとして ふきつたへたる
ことの葉は 神の御代より かはたけの 世々になかれて

たえせれば 今もはこやの やまかせの 枝もならさす
しつげきに むかしのあとを たつぬれば 峯の木末も

かけしけく 四のうみにも 波たゝす わかのうら人
かすそひて もしほのけふり たちまさり 行すゑまでの

ためしとそ しまの外にも きこゆなる 是を思へは

君か代に あふくま河は うれしきを みはたにかゝる

埋木の しつめることは から人の 三代迄あはぬ

歎きにも かばらさりける 身の程を おもへはかなし

かすかやま 峯のつゝきの 松かえの いかにさしける

すゑなれや きたのふちなみ かけてたに いふにもたらぬ

しつゑにて した行水に こされつゝ 五つの品に

としふかく 十とせ三とせも へにしより 蓬のかとに

さしこもり 道の芝草 おひはて、 春のひかりは

こと遠く 秋は我身の うへとのみ 露けき袖を

いかゝとも とふ人もなき まきの戸に 猶有明の

月かけな 待ことかほに 詠めても おもふ心は

おほ空の むなしき名をは 津の國の 芦のしはれの

あやなさに なにはのことも 残さんことも

かりすて、 さすかにのみそ かりにしを きしうつ波の

立かへり かゝるみことの かしこさに 入江のもくつ

かさつめて とまらんあとは 陸奥の しんのふもちすり

亂れつゝ 忍ふばかりの ふしやなからん

反歌

山川のせゝのうたかた消さらはしらん末の名こそおしけれ

春

散位清輔

いか計年の通路近ければ一夜の程にゆきかへるらむ

いつしかとがすまざりせば音羽山音はかりにや春をきかまし

朝霞ふかくみゆるや煙たつ室のやしまの渡り成らむ

谷ふかく鳴鶯の一聲におもはぬ山にけふもくらしつ

白妙の袖ふりはへて春の野の若菜は雪も摘にそありける

梅の花同しれよりはおひなからいか成枝の咲おくるらん

梅の花君まつよひのうたゝねに人たのめなる匂ひやはする

ちれはうし匂へは嬉し梅の花思ひわつらふ春の風かな

夏

おしむともいなん春をはいか、せん山時鳥はやもなかなん

柳葉にゆふして掛けてやかつかみ祭かきれとみゆる卯の花

何事をぬれきぬにきて時鳥たゝすの杜に鳴あかすらん

早苗をは人にまかせて我はまつたこの心をとらむと思ふ

時しもあれ水のみこもを刈あけてほさてくたしつ五月雨の空

ことほりやさ社はつらく思ふらめともしの鹿のめをも合せぬ

夏の野をゆすふりたて駒なめて朝ふませ行人やたかこそ

をのつから涼しくもあるか夏衣もゆふ立の雨のなこりに

河社波のしめゆふ水の面は神のこゝろもすゝしかるらん

川のせにおふる玉もの行水になひきてもする夏萩哉

秋

山里は庭のむら草うらかれて蟬のなくれも秋めきにけり

人なのみなとく恨みんうきを猶こふる心もつれなかりけり
戀しきに憂もつらきも忘られてこゝろなき身になりける哉
いとふへきこはまほろしの世中をあな浅まし戀のすさひや
しき忍ふ床たに絶ぬ涙にも戀はくちせぬものにそ有ける
はしめなき昔思ふそ哀なるいつより戀にむすはれけん

神祇

幾かへり波のしらゆふかけつらん神さひにける住の江の松
おもふことみわの社に祈りけん杉はたつぬるしのみかは

慶賀

君か代はなのゝえ朽し仙人の千度かへらん時もかはらし
まことにや松は十かへり花さくと君にそ人のとはんとすらん

釋教

華嚴

朝日さす高れの花は匂へとも薨の人ほしらすそ有ける

方等

聞そめし鹿の藺にはことかへて色々になる四方のもみち葉

盤若

雲もみなむなしと説に空晴て月計こそすみまさりけれ

法華

はるかにも匂ひけるかな法の花後の五百とせ猶盛なり

涅槃

おしむかな月の御顔も影消て鶴の林にけふりたえけん

無常

世中を思ひつられて詠れはむなしき空に消るしら雲
常にすむわしのみ山の月たにも思ひしれとや雲かくれける

離別

曉と聞て出つる別路をやかてくらすは涙なりけり

羈旅

浦つたふ磯のときやの梶枕きゝもならはぬ波のおとかな
遙なるあしやの沖のうきれにも夢ちは近き都なりけり
しはつ山ならの下葉を折敷てこよひはされん都戀しも

我思ふ人にみせはや諸共にすみたかはらの夕暮の空
すみ馴しすみかも常の栖かは旅はたひとも何思ふらん

物名

かすみ やなき さくら
月 すゝ虫 もみち

花の色のおかすみゆは歸らめやなききの宿にいさくらしてん

峯つゝき山へはなれすすむしかもみちたとる也秋の夕暮

短歌

新勸

しきしまや やまとしまれの かせとして ふきつたへたる
ことの葉は 神の御代より かはたけの 世々になかれて

たえせれば 今もはこやの やまかせの 枝もならさす
しつげきに むかしのあとを たつぬれば 峯の木末も

かけしけく 四のうみにも 波たゝす わかのうら人
かすそひて もしほのけふり たちまさり 行すゑまでの

ためしとそ しまの外にも きこゆなる 是を思へは
君か代に あふくま河は うれしきを みはたにかゝる

埋木の しつめることは から人の 三代迄あはぬ

歎きにも かばらさりける 身の程を おもへはかなし

かすかやま 峯のつゝきの 松かえの いかにさしける

すゑなれや きたのふちなみ

しつゑにて した行水に

としふかく 十とせ三とせも

さしこもり 道の芝草

こと遠く 秋は我身の

いかゝとも とふ人もなき

月かけな 待ことかほに

おほ空の むなしき名をは

あやなさに なにはのことも

かりすて、 さすかにのみそ

立かへり かゝるみことの

かさつめて とまらんあとは

亂れつゝ 忍ふばかりの

反歌

山川のせゝのうたかた消さらはしらん末の名こそおしけれ

春

散位清輔

いか計年の通路近ければ一夜の程にゆきかへるらむ

いつしかとかすまざりせは音羽山音はかりにや春をきかまし

朝霞ふかくみゆるや煙たつ室のやしまの渡り成らむ

谷ふかく鳴鶯の一聲におもはぬ山にけふもくらしつ

白妙の袖ふりはへて春の野の若菜は雪も摘にそありける

梅の花同しれよりはおひなからいか成枝の咲おくるらん

梅の花君まつよひのうたゝねに人たのめなる匂ひやはする

ちればうし匂へは嬉し梅の花思ひわつらふ春の風かな

かけてたに いふにもたらぬ

こされつゝ 五つの品に

へにしより 蓬のかとに

おひはてゝ 春のひかりは

うへとのみ 露けき袖を

まきの戸に 猶有明の

詠めても おもふ心は

をのつから 残さんことも

津の國の 芦のしほれの

なりにしを きしうつ波の

かしこさに 入江のもくつ

陸奥の しんのふもちすり

ふしやなからん

夏

おしむともいなん春をはいかゝせん山時鳥はやもなかなん

柳葉にゆふして掛けてやかつかみ祭かきれとみゆる卯の花

何事をぬれきぬにきて時鳥たゝすの杜に鳴あかすらん

早苗をは人にまかせて我はまつたこの心をとらむとそ思ふ

ことほりやさ社はつらく思ふらめとしの鹿のめをも合せぬ

夏の野をゆすふふりたて駒なめて朝ふませ行人やたかこそ

をのつから涼しくもあるか夏衣ひもゆふ立の雨のなこりに

河社波のしめゆふ水の面は神のこゝろもすゝしかるらん

川のせにおふる玉もの行水になひきてもする夏菰哉

秋

山里は庭のむら草うらかれて蟬のなくれも秋めきにけり

おもひやる心も冷し彦星のつま待宵の天のはころも
 あたしのと人はいへとも女郎花来る秋ことに色もかはらす
 女郎花あたには誰も思はぬを何をあかすと露けかるらん
 我やとの本あらの萩の花さかりたゝ一村の錦とそ見る
 薄霧のまかきの花の朝しめり秋は夕と誰かいひけん
 秋の野の萩の錦にとちられて駒うちいれん隙たにもなし
 立田姫かさしの玉の緒をよはみ亂れにけりとみゆるしら露
 高砂の尾上の風やさむからん裾野の原に鹿そなくなる
 霧の間にあかしのとせとに入にけり浦の松風音にしろしも
 鹽竈の浦吹風に霧はれて八十嶋かけてすめる月影
 筑波山しけきかひなし秋の夜の月のいるにはさはらさりけり
 おもふ事ありとなければ秋の夜の朝戸あけてそ詠られける
 夜を殘す老の寐覺におきあつゝ秋のともし火かゝけつくしつ
 日にそへて聲よはりゆく蜚いまいくよとてつゝりさすらん
 限りなきよはひのみかはみるまゝに心ものふるしら菊の花
 春ながらとしは暮れと思ひしは紅葉みるにそくやしかりける
 立田山松のむら立なかりせはいつくかのこるみとりならまし
 山下の風なかりせば我宿の庭の紅葉をたればらはまし
 なく虫の命とみゆる秋なればくるゝはさこそかなしがるらめ

冬

山腰のよもきのかとも霜枯て風もたまらぬ冬は來にけり
 君こそは獨やれなんさゝの葉のみ山もそよにさやく霜夜を
 さゆる夜に衣かたしき思ひやる冬こそまされ人のつらさは
 磯邊には霞ふるらし蟹人のかつくし玉數やそふらん
 四方の山初雪今宵つもるらしあくれと消ぬ嶺の横雲

戀

我戀をいはてしらする由もかなもらさはなへて世にも社しれ
 をのつから行合のわせを假初にみし人ゆへやいれかてにせん
 七わたの玉にも緒をはぬく物をおもふ心ないかてとなさむ
 難波女のすくもたく火の下こかれ上はつれなき我身也けり
 逢事はいなさほそえの身をつくしふかき印もなき世也けり
 心こそおもはすかほなつくれとも落る涙はかなはさりけり
 年ふれとしるしもみえぬ我戀や常盤の山の時雨なるらん
 戀しなん命は露も思はれとためしにならん名こそおしけれ
 君かことなにはのことないなひてん思ひ絶れといはむ外には
 逢ことのかたき岩ともなりけるないかなる戀の身を碎くらん
 あちきなや思ふかたこそあし引の山櫻とも身をはすてしか
 恨めしと思ひれにのみえらるれば夢さへさ社つらくみえけれ
 心にはいは木なられと思ふらんたゝあやにくにかけぬ情か
 移り香は薄くなれとも日をへつゝ戀しき事そ身にはしみける
 初かりのこすけの枕作りをけとかびこそなけれ妹しまされは
 かくはかり思ふ心は隙なきをいつくよりも涙なるらむ
 朝夕にみるめなかつくあまたにも恨は絶ぬ物とこそきけ
 ますらおの鳩ふく秋やはてぬらん忍びし人の音たにもせぬ
 なかゝに思ひ絶なんと思ふこそ戀しきよりも苦しかりけれ

露深き浅まの野らになかやかる賤の袂もかくはしほれし^{われしをい}

神祇

天の下のとけかれとや柳葉を三笠の山にさしはしめけん
祝子かさす玉くしのねきことに亂るゝ神もあらしと思ふ

慶賀

君か代は遙に見ゆるわたつ海の限れるはてもあらしと思ふ
鶴龜のよはひもあかす何にかも君をよそへん□□□□□□□□

釋教

華嚴

世中は千種の花の色々もこゝろのねよりなるとこそきけ

大集經

徒にはかなき道に入にけりかへすくもけふそくやしき

大品經

何事もむなしき夢と聞物を覺ぬ心に歎きつるかな

法華

ふたつなき御法の船を頼もしき人をもらさて渡すと思へは

涅槃經

うつもれてくまなき玉はあるものを塵を拂はて願ふはかなき

無常

朝顔の暮を待ぬもおなしこと千とせの松にはてしなけれは
のとけかれ月のねすみよ露のみをやとす草葉の程もなき世に

離別

行すゑを祝ひて出る別路にこゝろもなきは涙なりけり

羈旅

わか獨いそく旅とそ思ひつる夜をこめてのみ立霞かな

はしりゐのかけひの水の涼しさに越もやられぬ相坂の關
夜もすから人まつ虫に心なく草の枕をかりてけるかな
松かれに霜うち拂ひめもあはて思やる心やいも夢にみゆ覽
たひつともにもたたるかれひのほろくと涙そおつる都思へは

物名

からにしき

むつこともつきて明ぬと聞からにしきの羽かき恨めしき哉

こまにしきを句のかみにをきてよめる

こん世にも又こんよにも憎からすしのはしかりし君は忘れし

短歌

あしねはふ うき身の程を つれもなく おもひもしらず
すくしつゝ ありへけるこそ うれしけれ 世にもあらしの

山かせに たくふ木葉の 行衛なく ありなましかは

松か枝に 千代に一たひ さくはなの 希なる中に

いかてかは けふはあふみに ありといふ 朽木のそまに

くちあたる 谷のむれ木 なにことを 思ひ出にて

吳竹の すすの代までも しられまし 恨なのこす

事はたゝ と渡る船の とりかちの とりもあへれは

なくあみの しつみおもへる こともなく 木のしたかくれ

ゆく船の 浅き心に まかせつゝ かきあつめたる

くちはには よしもあらぬを 伊勢の海の あまのたくなは

長き世に とゝめんことも やさしかるへき

春

暮はてゝいつくまで行年なればよのまにけさは立歸るらん
待賢門院堀河

雪ふかき岩のかけ道路たゆるよし野の里も春は來にけり
 ときはなる松もや春をしりぬらん初音はいはふ人に引れて
 霜かれはあらはにみえし芦のやのこやのへたては霞なりけり
 つらゝぬし岩まの波も打とけてともになとなふ谷の鶯
 笛竹のれくらにならず鶯はさへつる聲もことにや有らん
 吹過る風にたくへと梅の花にほひは袖にとまりぬるかな
 こしかたにかりきにけりと聞ゆらん歸る聲々雲井へたてつ
 まつ程の久しきよりも櫻花匂ふさかりのかゝらましかは
 いつかたに花咲ぬらんと思ふより四方の山へにちるころ哉
 花さかぬ梢は春の色なからさくらをわきてふれるしら雪
 白雲とみねの櫻はみゆれ共月の光はへたてさりけり
 三輪の山花のさかりを尋れつゝとふ人しけき杉立るかと
 山風に岩こす瀧の白浪とみゆるは花のちるにそ有ける
 花よりもあたなる身とはしりながら春に心をつくすへしやは
 君か代のかさしにおらん三千とせのはしめにさける桃の初花
 やとちかき笹の内に咲をこそつほすみれとはいふへかりけれ
 雲とみて色を頼むかのきしのむかへる松にかゝる藤波
 何のため暮行春のおしからん花も匂はすむもれ木の身に

夏

あかさしし花の匂ひは郭公まつれ覺にも忘れやはする
 時鳥雲井を過る一聲はそらみゝかとそあやまたれける
 待程にたとりやはする時鳥かたらふ聲のあかね名残りは
 布さらす腰かききれに咲ましりあなうの花やみこそわかれ
 宿毎のつまにひかるゝあやめ草たかよとのにかれはとまる寔
 五月雨の日なふる宿の水の面はみくさもとらぬ池かとそみる

まこも草たかせのよとにしけれとも末葉もみえぬ五月雨の比
 夏の夜も月の光のすゝしさにやとれる清水結はてそみる
 色々の花に心はそめしかといまははちすのうへをこそおもへ
 身はイなすてゝ人かたとたにも思はぬを何にすかぬくみそきなる寔

秋

秋のくるけしきの杜の下風にたちそふものは哀なりけり
 七夕の逢せ絶せぬ天河いかなる秋かわたりそめけん
 かされてもあかね思ひやまさるらんけさ立歸る天の羽ころも
 宮城野に朝なつ鹿も心せよとあらの小萩花咲にけり
 秋かせに何なひくらん女郎花吹はかれ行つまとしらすや
 はかなさを我身の上によそふれば袂にかゝる秋の夕露
 吹風も露もかはらぬ草むらになとるかやのわきて亂るゝ
 相坂の關の杉原露こめてたちともみえぬゆふかけのこま
 水の面にかきなかしたる玉章はと渡る鴈の影にそ有ける
 さらぬたに夕さひしき山里の霧のまかきにおしかなく也
 弓張の月はいつともわかれとも引かへてけり秋のけしきは
 月清み千種の花の色はへて光をそふる露のしら玉
 住かひもなき夜なからの思ひ出は浮雲かけぬ山の端の月
 行月のいかにめくれは秋の夜のなかにこよひは照まさるらん
 雲の涙かけてもよるとみえぬ哉あたりをはるふ月のみ船は
 橋ふかく天の川水すみまさりになかれたる月のさやけさ
 殘なくわかよふけぬと思ふまにかたふく月にすむ心かな
 秋深きれさめをいかになくさめむともなふ虫の聲もかれゆく
 立田姫もろこし迄もかよへはや秋の梢のからにしきなる
 行秋をおしむにさ夜の更ぬれば冬のさかひに成やしぬらん

冬

秋はてゝ花も残らぬませの内に一本菊のたくひなきかな
神無月木の葉も霜にふりはてゝ嶺の嵐の音そ閑しき
晴くもる時雨の空を詠ても定めなき世そ思ひしらるゝ
芦そよく鹽風さむみかた岸の入江につたふあちの村鳥
降雪にそのゝなよ竹折臥てけさは隣の隔なきかな
檣の戸のひましらむとて明たれば夜ふかく積る雪にそ有ける
小夜更てかへす調へのことの音も身にしみさる朝くらの聲
昔なと年のおはりないそきけん過ればおいとなりけるかな
山かつのそともの松もたてゝけり干とせといはふ春の迎へに

戀

かくとたにいはぬに茂き亂芦のいかなる節にしらせそめまし
たてなから數のみ積る錦木のともに我名も朽ぬへきかな
袖ぬるゝ山井の清水いかてかは人めもらさてかけをみるへき
あら磯の岩に碎る波なれやつれなき人にかくる心は
わきかへり思ふ心は有間山たえぬ涙や出ゆなるらん
なかゝらぬ心もしらす黒髪に亂てけさは物をこそ思へ
つれなきないかに忍ひてすくしけん暮待程もたへぬ心に
夢のことみしは人にも變らぬにいかにかへてあはぬなる寢
疑ひし心のうらのまさしさとはぬにつけて先そしらるゝ
うき人を忍へしとは思ひきや我心さへなとかはるらむ
あはぬまは浦のはまゆふ恨みつゝかく言の葉を夢にたにみす
待わひて幾よなくを明すらん鴨の羽かき數しらぬまで
たのめすはうき身のとかと歎つゝ人の心なうらみさらまし
夢計り思はぬ人はかへにおふるいつまで草のいつまでかみん

さゝかにのいか様にかは恨むへきかき絶ぬるも人のとかゝは
人にのみすみつく袖をかきねつゝこふる印も君はしらしな
忘れにし人はなこりもみえれとも面影のみそ立もはなれぬ
深くのみ契りしことを思ひ出に音はしてまし山河の水
逢よなきなけきの積る苦しさをとへかし人のこりはつる迄
あひみて心ばかりは道路の音にきゝても哀しらなん

神祇

いはし水流れの末そたのまるゝ心もゆかぬみくつなれとも
色々にうき身を祈るぬさなれは手向る神もいかゝみるらん

慶賀

君か代は枝もうこかす松風に久しきことをしらふなるかな
わたつ海ののりにたとふる花咲て八百萬代は君そかへん

釋教

あま小船あみたに心かけつれば西のきしにはうけや引覽
皆人の道ひかるなり蓮の糸を唯一筋に頼てそふる
長きよにまよふさはりの雲晴て月のみかほをみるよしもかな
なをさりに手折し花の一枝にさとりひらくる身とそ成へき
二なき玉をこめたる木ゆひのとくことかたき法とこそきけ

無常

夢の世を驚きながらみる程はたゝまほろしの心地こそすれ
朝露は消ても暮にむすふめり猶玉のをそはかなかりける

離別

行人もおしむ涙もとゝめかれ忘るなとたにえこそいはれれ
羈旅

道すから心も空に詠やる都のやまの雲かくれぬる

故郷におなし雲井の月をみは旅の空をや思ひいつらん
忍ふべき都なられとしかのわたりもやらす哀なる哉
旅の空をのつからと思ふらん宿かりかれのちかく聞ゆる
はかなくも是を旅れとおもふ哉いつこもかりの宿とこそきけ

物名

きりくす

秋はきりきりすきぬれば雪降てはるゝまもなきみ山への里

たるなむし

君かためむれてきたるなむしろたの鶴の毛衣千代をかさねて

短歌

ときしらぬ 谷のむれ木 うちはてゝ むかしのはるの
戀しさに なにのあやめも わかすのみ かはらぬ月の
かけみても 時雨にぬるゝ 袖のうらに しほたれまさる
あまころも 哀なかけて とふひとも 波にたゝよふ
つり船の 漕はなれにし よなれとも きみにこゝろを
かけしより しけきうれへを わすれくさ わすれかほにて
すみの江の 松の干とせの はるゝと 梢はるかに
さかゆへき ときはのかけを たのむには なくさのはまの
なくさみて ふるのやしろの そのかみに 色ふかゝらて
忘れにし 紅葉の下葉 のこるやと おひその杜に
たつめれと 今ほあらしに たくひつゝ 霜かれゝゝに
おとろへて かきあつめたる みつくきに あさき心の
かくれなく なかれてのなを わし鳥の うきためしにや

春

上西門院兵衛

あたらしくかはれる年とおもへとも歸りし春のきたる也けり
音絶し瀧の白糸つらゝとけわくにそ春のくるはみえける
なにことを春の印に出つらん雪消やらぬ谷のうくひす
春をへてあまたの年をつむ人もともにわかなと思はましかは
杉たてる門をもいかゝ尋ぬへきかすみこめたる三輪の山本
花もまた匂ひあへぬに散くれば降にし雪の残りなりけり
いつかたと梅さくやとはしらね共匂ひは風にたくひてそくる
みとりなる波のよるかとおゆる哉河添柳なひくしつゝえは
吹風はおもいわかしなひかなれば春しももゆる野への蕨そ
ことならば花のさかりを□歸れこし路も同じかりのやとりそ
たつれ行山へにかゝる白雲のはれぬにしるし花さかりとは
櫻花ときはの物にあらずとも春の程たに匂はましかは
百千とり木傳ふさへもつらきかな羽風にちるもおしき花ゆへ
おりてみる枝をば風もしらなくに心と花はちるにそ有ける
櫻花木の下^本ことに吹ためてたのかもとや風のみるらん
花の色に光さしそふ春のよそ木の間の月はみるへかりける
朝ことにあれ行やとの庭の面にとともにすみれの花を咲ける
松嶋やかゝれる浪のしからみとみゆるは藤のさかりなりけり
山吹の花に心のうつれはや井手の里人すみはしめけん
散花の霞のうらに浪よるを暮行春のとまりとやせん

夏

花にのみ染し心のかはられは夏のころもは人めなりけり
神代より色もかはらぬ葵草いつかいつきのかさしそめけん

聞ぬ夜にかはらさりけり時鳥只一聲のあかぬれさめは
こもり江の汀のあやめ引かへて玉のうてなにかゝるげふかな
五月雨のなやまぬ程そかつまたの池もむかしのけしき也ける
あけなから横の板戸を心みん夜半の水鶏は猶やたゝくと
とり／＼に山田の早苗いそぐ也穂にいてん秋もしらぬ命と
夏の夜は月の光のさしなからいかに明ぬるあまの岩戸そ
夏衣かさぬはかりに冷しきは結ふいつみに秋や立らん
かそふれは夏も末はに成にけり麻のたち枝やかりにゆかまし

秋

なつかしと思ひし水のあたりにはなか／＼秋のくるも侘しな
待わたり月日をおほく過しきて逢瀬程なき天の川浪
さらてたに風に亂るゝ糸萩を玉まぐくのうらめしき哉
あたなりといはれ野に咲女郎花露にぬれ衣きるにや有らん
きもあへすそよとそ萩のこたふなる同じ心に風やふくらむ
餘所めには玉しく野邊とみつれともわけてきたれは道芝の露
立とまる人はかたのゝ花薄なほに出でまねくなるらん
淺茅生にやとる露をは置ながらたれ松虫の聲にか有らん
葎かへの中にそ聲はする蓬か柚に風やさむけき
むら／＼に野邊の錦のみえつるはへたつる霧のたえまなり見
暮ぬとは入相の鐘に聞つれとひるかとそみるあり明の月
秋の夜と思ひながらも月影を降しく庭の雪かとそみる
いくよしも住はつましき世中に月に心をなにとゝむらん
露なからおきてみれとも朝かほの日影まつまは程なかりけり
大かたの哀れそへはやさなしかの妻こふるれも秋はしのはね
おとろかすひたの音にや終夜稻葉に露も置あかすらん

咲そめてまた色つかぬ白菊にかれて心はうつるひにけり
長月の有明の空のけしきをはおくの妻も哀とやみむ
紅に秋のけしきは成にけりみとりにみえし衣手のもり
あすしらぬ身をは思はて廻りこん秋の別を何なしむらん

冬

山里のすかきの宿の下さえて冬きにけりとしらせかほなる
なやまも聞わかれぬは終夜木葉ふりそ不時雨なりけり
花咲し秋のさかりは過はてゝ霜をいたゝく野邊の冬草
落積る木の葉は風にはらはれてあられ玉しく庭の面哉
さくら山梢の雪のきえぬまは折たかへたる花かとそみる
をしなへてかのこまつらにみゆる哉雪むら消るいなさゝ原
何とかは浦つたふらんさよ千鳥いつくも波のかゝるなきさを
高せ舟さはりし芦はかれぬれと水濤もえこそゆかれれ
冬くれは我身のやくとすみかまの煙になるゝ小野の山人
身につもる年の敷をはしらすして花みん春を先いそくかな

戀

さゝれ石の中の思ひのいかにして打出ぬさきにもゆるなる覽
岩間行山の下水せき侘てもらす心のほとをしらなん
かきながす袖のみぬれて水莖の波立かへり跡をみるかな
よとゝもにとくるよもなき心哉戀の亂れにむすほゝれつゝ
つれなしと人をは何か思ふへきこりす忍ふは我身まされる
流れても君にあふせの有といはゝ淵を穿て身は投てまし
さりともと頼にかゝる命にて戀の病はしなれさりけり
我袖の涙や鳩の海ならんかりにも人のみるめなけれは
君にさはつらしとみえん人もかな戀はくるしき物としらせん

宵のまも待に心やなくさむと今こんとたに頼め置なん
引かへてつらき心やつれなしと我をうちみしむくひなるらん
我戀に人のつらさをなすらへて同じ心になすよしもかな
かはしても何にかはせん夢計めもあひかたきよるのさ衣
心にもあらで軒はの忍ふ草しのふ思ひは露もかはらす
思はしと思ひすつれとかひもなく戀は身をこそ離れさりけれ
何せんに空たのめとて恨けん思ひたえたるくれも有けり
古は力車につみけるを我戀草はやるかたもなし
千世迄もたのめし折の言の葉はかくかれはてん物とやはみし
忘れなと思ふにつけて焦るれば戀はけつへき方もしらすな
うかりける世々の契を思ふにもつらきは今のこゝろのみかは

神祇

とりわきてふるの社といふめるはいかなるよにか天くたり
うなひこか垣れにいふなやしろも思ふ事たにならは頼まん

慶賀

幾千世とかけてもいかゝかそふへきはかりもしらぬ君か齡は
まことにや八千代はふると玉椿おひかはるなは君そみるへき

釋教

長き夜の眠りをいかにさましては今よりやみに迷はさるへき
露霜にたとふる罪なけつ物はつとめていつる光なりけり
にしとのみ心計はすゝめともいかなるかたにゆかんとすらむ
いつとなき濁りに洗む身をかへて蓮のうへの玉とならばや
二つなき法にあはすはかけ離れいつゝの雲もはれすや有まし

無常

いつまてのとかに物をおもふらん時のまなたにしらぬ命に

是や夢いづれか現はかなさを思ひわかてもすきぬへきかな

離別

限りあらん道こそあらめ此世にて別るへしとは思はさりしな

歸旅

ひれもすにみれともあかて暮ぬるを今宵は花の陰にとまらん
時鳥ことかたらはぬ宿ならはいかに旅のさひしからまし
秋の夜の月は都にかはられと哀そまさる旅の空には
旅人のかりのふせやは風さむみ柴折くへてあかしつるかな
常ならぬ同じ浮世ばかりそめの草の枕も旅とおもはし

物名

にはさくら

やまへにはさくらん物を故郷の花まつ程は行て尋ねん

からよもき

何こともいはてしのはん我身からよもきく人も哀と思ひし

短歌

春ははな 秋は紅葉の いろ／＼に こゝろをそめて

すくせとも 風にとまらぬ はかなさを おもひよそへて

なにととも むなしき空に すむ月を うき世にめくる

なにとして あはれ／＼と みる程に つもれば老と

なりはて おほくのとしは よるなみの かゝるみくつの

かひなきは はかなく結ふ 水のおもの うたかたさへも

かすならぬかな

春

昨日こそ雪ふるとしも吳竹のよはの内にや春はきぬらん

待賢門院安藝

引連てくる青柳の糸よりも南や北のむめそ身にしむ
春日野におふる若菜は名のみして我身に年のつむにそ有ける
梅の花色をは霞こむれとも匂ひはえこそかくさゝりけれ
青柳の糸のなにかさか春くれはも、ひるとのみ鶯のなく
紅のうす染衣うちなひき春のきたるか梅の立枝に
おしみかれ今はあらしそうらめしき花ゆへいとふ風と思へは
こゝろあれや尋て三輪の山櫻ちるなよ神のしるしはかりに
水上に櫻ちるらし芳野川いほす波の花と見えつゝ
峯高き梢の花ないかなれは吹亂すらん山のしたかせ
花錦ちらては四方の山櫻一むらぬすめ春のやまかせ
行やせんゆかてやあらまし東路の名こそその關に呼子鳥哉
山風にさけるつゝしはさほ姫にたかぬきかけしゆるし色かも
おく山のしつりの雪を春たちてとく散まかふ花かとそみる
さもこそはいはれにおふる花ならめ口なし色にほふ山ふき
花よりも心なかくて青柳の糸こそ春を引とゝめけれ
青柳の糸に吹来る春風を花によりていとひつるかな
春の田をあら打かへしこまゝと思ひ碎けはうき我身かな
散花を葎のかとにさしこめて春はすくともみ山へのさと
行春を何につけてかおしましけふまて花の盛なりせば

夏

歸る春衣の闕や越ぬらんけふより夏に立かへるかな
櫻麻のおふの下草しけれどゝあかて別し花のなゝれは
五月雨のふるの社の郭公みかさのやまなしてなくなり
陸奥のあさかのぬまもあらしかし日數過ぬる五月雨の比
五月雨のあまのもしほ木朽にけり浦へに煙たえて程へぬ

つくは山した吹風やさそふらん花橋のかほるよな／＼
夕立にいさゝを河のまさりつゝふかくもなつのみえ渡る哉
夏草やしけみの後の麻のはになと夕立の玉をぬくらん
蟬のはゝさはかりこそはうすけれと聲に暑さをもたる也けり
たゝりなす神のなこしのはらへすと□□□□□□□□□□

秋

立秋は衣の色にあらねともうらこき風の身にしむかな
年をへてまれに逢夜の更行はみる人くるしたなはたのいと
流れ来る音そすゝしき水上の天の川瀬に秋や立らん
きてみれば衣笠岡になつしかは夜をかされても戀るつま哉
さらてたに色めきたりといはれのに風におきふす女郎花かな
風吹はまのゝ糸萩よることにつらぬく玉の露そとまらぬ
白露のとちめもせぬか藤袴すそのゝことにはほろひにけり
何となく心細きはかるかの葉末亂るゝ風にそ有ける
まれけとも薄のほのみえぬまで露立にけりなのゝ篠原
花薄誰をまれくとしらねともなまめくへのは心とまりぬ
哀猶野もせにすたく鈴虫のふりせぬ物は秋のゆふくれ
さやかなる空に心そとまりぬるこひや月の關にや有らん
槐ふかきよもの紅葉は紅を返しの風やふきてそむらん
おしめとも秋はいく野の花薄まれかはかへれくつのうらかせ
闇の夜のにしき折かく我宿に來る人もなき糸萩の花
葛の葉にうらみられたる花薄又こと人をまれく氣色に
うらめしく花をみすてゝゆきしかと初鴈金のめつらしきかな
暮ぬとて人をまつ虫ならねともよすかられなも鳴明すかな
なけやなけおはな枯葉の蜚われもかうこそ秋はおしけれ

冬

冬きぬといかてしらまし山里の夜半の時雨の音せさりせは
 をの山なきりにきりつゝ、賤のおか世に炭かまの急きをそする
 衣手そさえ渡りける霰はわかものこしにきれはなりけり
 なみ衣袖ふる夜はそのこまにあさくら置てあかしつる哉
 明くれば氷ふたかるはこやたの池には冬のすむにやあるらん
 うち河にひをはくらしつ片岸のあしろによるや旅れしなまし
 獨のみふせやの上の霜置てそのはら／＼と降時雨かな
 逢ことのとゝこほりたる水の上につかはぬ霧のうきれをそ鳴
 冬ふかくかれ行人を我はたゝ草か木かとやとふへかるらん
 となせ河こそすけかたしく網てなは心ほそきは年の暮かな

戀

何ことも心にあかぬ身のうさに戀しもなとか人にすくらん
 谷かくれ山下水のうちのひ戀にくちなんみなれきそうき
 そなれ木のそなれ／＼てむす苦のまほならす共逢みてしかな
 しつたまき數にもあらぬ身なれ共戀はうとまぬ物にそ有ける
 なつかしと思とれともすまひ草戀はちからそおはさりける
 戀をのみすかたの池にみ草ゐてすまてやみなん名こそ惜けれ
 やかたおのやかてそりぬる箬簾のても及はぬは戀にそ有ける
 我戀に落る涙をわかなあふ有馬のいてゆなられと
 戀をのみ須磨の浦はにしほたれてやくとも袖をくたすころ哉
 人心あら磯なみにぬるれともこりすもひるふいけるかひかな
 うきは唯人の心にあるものを身のみつらしと思ひける哉
 よそにても哀とたにも思ひ川なけれあふせはさこそなくとも
 逢事ははやくとはまにわく網の今ひとめたにみることもかな

我戀は雲井にみゆる月なれやかけになれとも逢よしもなし
 月日のみあけくれなぬのやしほまで君に思ひはそめてし物を
 我戀のすかたにみゆる物ならは君かゆかりのなくさめてまし
 弓張のつきせぬ戀をいかせんみなみたるやと人はいへとも
 よと共にみるめなれれば水海の恨めしとたにいふかたそなき
 戀をして伏猪の床はまともまでぬたうちすす夜はのれ覺に
 袖をたりうらまでぬるゝ涙かな天乙女子にあらぬものゆへ

神祇

君か代は松ふく風のいとたかくなにはのこともすみよしの神
 千はやふる君か千とせを松の尾にかゝりてさける藤ふのゝ神

慶賀

玉椿ひかりをみかく君か代にもゝかへりさくうとんけの花
 芦田鶴の千世に一重の毛衣を幾かされとは君そみるへき

釋教

教置しそのことののはのなかりせは蓮の露のいかてしらまし
 あまを船佛の法をつなてにてきしへにつかえうたかひもなし
 草も木も一味の雨にうるふなり世にふる人も頼もしき哉
 わしの山また有明の月もみす世をうき雲に空かくれして

一首闕

無常

あたなれと花はときはに頼まれぬ散て又さく人しなれば
 柚山のくれ待つけぬ朝かけの花よりもけに頼みなきかな

離別

さむしろもおつる涙に栲はてゝ君にわかればしく物そなき
 羈旅

わきもこが衣がたしきまつち山すそのなはやくあゆめくる駒
故郷に心とめてみつれとも戀しきたひに身を離れぬ
さゝのはな夕露ながら折しけは玉ちるたひの草枕かな
山彦のこたふる音を友として山ふところ旅れをそする
さもこそは草の枕といひなめ露けかりつる夜半の袖哉

物名

はなすゝき もみち

秋の花すゝきをなしなみ霜枯て淺茅が原もみち芝もなし

まつむし 秋のくれ

君をまつ虫のれしけき故郷にしくるゝ秋のくれもゆく哉

短歌

来る春は かつらき山や こえつらん ふもとのかすみ
たなひきて なとかすか野に けしきたつ 雪のした草

むすほゝれ とくるこほりの ひまゝに さし出るわかな
おいぬれは おほくの年を つみてける 千年をまつの

君が代に 命をのへに 子日して 悔もさくらも
青柳も ときはに匂ふ こゝちして すきゆく春も

おしからず 夏の色もな たちかへて ひとへに君を
たのめとも 身を卯花の かきねのみ なきこそ渡れ

ほとゝきす 口なし色の やまふきの えもいはぬまの
あやめくさ もろともになと ひかさらん たゝと夏に

わかみこそ からなてしこの いろゝに おもへはかけし

みな月の つこもりにさへ なりにけり 夕くれかたに

みそきして あらふるかみも なこしとる 星合の空に

ゆきかよふ 空すゝしさの 夕まくれ くすのうらふく

風の音も そめ草に とふ人も わかれにし すゝむしの しら露の おもへとも ちりしより くれなゐに 頼めとも 月のみそ いけらしと ふしことに めもあはて かきやれば 薄こほり 物なれば ぬれはまた 甲斐もなし むまれはや はかなくて みぬ夢も いたゝきし はしたかの 捨やらて

我身にしめて あはれしらする なき故郷に 心つくしそ 聲ふりたてゝ 袖うちぬらし ためしも四方の 惜からぬ身の 深くを染る 猶なくさます かげになりつゝ 思ふものから さるはよさむに あかつきかれの 鳴のはれかき 我はぬれとも さえ行夜はに れられさりけり 今のはちすの なとか浮世に ゆき積りぬる おほめかれゆく いまはしらふに すゝろに過る とやかへりぬる

色もなき おきのはの しくれつゝ つきもせぬ なきあかし 時雨きて あらし山 なる里は ことのほな いにしへの 身をすてゝ 月日のみ なりにけり つくゝと 數ならず おもほえず こる露も さよ千鳥 中にあて ふるならん 冬草の むは玉や 成ぬへし よはひかな おきのはの 唯一すしに

心をそむる そまやいかにと 秋しもきみに なかきやすから 夜半におきあて 世のさかのとは しつえの木のは 涙のしくれ にしにかけつゝ をはすてやまの いとゝすかたの あけ柴竹の まきのうすふき いつかなみたな おさまる袖の 戀にはきえぬ なくとほなけき もゝ聲なけと もろともにさは きえもやられす はつかにたにも 黒かみ山の そらはそらはや あはれ浮世を

君をのみ 頼むこゝろに なくさみて おしからさりし
身のはても ゆかしかりけり 今はたゞ いのちなからの
せきすへて すきゆく年を とゝめてしかな

反歌

哀てふことのはさへやかれにけん露の我身の置所なき

春

花園左大臣家小大進

相坂の關より春のとくなればふもとのし水けさそこほらぬ
八百萬まつの千年に引そへて君がよはひを予の日也けり
さほ山に霞の衣染かけて四方の木めはるにや有らん
梅か枝に柳の糸のかたよるは花さかぬ日に鶯や來る
生そめし外面の若菜けさみえず夜の間に雪の積てける哉
よそめには友とやみゆるしらなつの芦間の床に残る泡雪
移り香にあたなたちちえの梅の花猶こりすまに袖やふれまし
春くれはみとりの糸の筋ことにつらぬきかくる玉柳哉
山ふしの石よりいてぬさわらひもうてはを萌る程はしらるゝ
春をへていくへ櫻の花なれば年にかされて匂ひますらん
ほそくふる三月の雨やいとならん水にあやなる廣澤の池
春ふきゆるきの杜の下草のしけみにはむや青さきの駒
都にて年もこしちの鴈かれはかへるとこよやたひねなるらん
足曳の山のやまひこなたへすは友呼子鳥たれとなかまし
門田にはいさら小河をまかせつゝ水もやすらの種まきてけり
もゝの花物ははずとは聞しかは誰すきあふとたはれしもせし
かきつはたへたてなはてそ紫のねすりの衣色もむつまじ
口なしに川瀬の波のかくれはやぬれ色にさく山吹の花

紫の春日のさすやはひならん今朝色ふかし藤なみの花
うらやましいかに入相の鐘なればこの暮にしも春のつくらん

夏

あかさりし花色衣いかにせんぬきかふるこそ物うつきなれ
卯花の青葉ましりに咲ぬればかきれもなみの衣きてけり
うら山し入目の影のさそふにはにしへもなひくあふひ草哉
かたらへはえそ過やらぬ時鳥聲には關もすへしと思ふに
れみせつるよとの忘れなめ草たゝかりそめの枕なりとも
五月雨のふるやの板間隙をあらみもしめてけり床くつる迄
やと匂ふ花橋をしろへにて五月のやみもたととてそくる
二なき御法の花は咲にけり蓮のたちはのたゝ一筋に
まし水に扇も夏も忘れられてやゝはたさむしせみの羽衣
さまたくる神もやきくと六月のみそかとしつる夏はらへかな

秋

吹そむる風のけしきやつらからんけさうらみたる野への葛原
七夕の天の河もり心あらはかへさわたすなかさゝきのはし
咲にほふをのゝ糸萩てにもふれし鹿たちよらは亂れもする
忍ひかれつみしらするそ女郎花たよりにおると思ひうとむな
秋風はにしより吹をいかなればこちと薄のまねくなるらん
さらぬたにしとるに亂る菊宣のおれそにすかるさゝかにの糸
夕露にその下紐やとけぬらんまされて匂ふ藤はかまかな
風の音に軒はの萩のこたへすは秋の衰れを誰といはまし
こまゝとかく玉章にことよせてくるはつかりの敷を亂るゝ
嵐山はと吹秋のをとすれば聲を合てなしかなくなり
つはなおひしなのゝ芝生の朝露をぬき散したる玉かとそみる

霧こめてたつきもみえぬ袖山にをの計こそ音もかくれね
いかにして思ひ捨まし朝顔の昨日の花のありかたき世を
千年迄よに逢坂の君か世をためしにひけるつるふちの駒
天津風更行まゝに空訝て夜すからすめる有明の月
から衣さゆる霜夜にうち侘てまゝとるむ間にや音たゆるらん
浮世には秋はてかたによはり行我身に似たるむしの聲哉
秋はゆくおのか匂ひはつきせねは冬にうつるふ白菊の花
はゝそ原ちれる湊に風吹は波さへ秋は紅葉しにけり
こよひまで秋はかされと定ける神代もさらに恨めしき哉

冬

わきもこかうはものすその水波にけふこそ冬は立はしめけれ
ね覺する床に時雨はもりこれと音にも袖のぬれにける哉
ひさしなき板屋の霞家ことやおちさたまらて世にふりぬらん
消ぬまに繪にかきとむる人もかな雪ふる宿のけさのけしきな
きさかたや柴のとほその明方に聲うらかれて千鳥なく也
冬の池にをしのつかひの離れぬはいかにむすへる氷なるらん
乙女子か袖おり返すその駒はとよの庭火もおもしろき哉
小野山の心ほそくもかすむ哉たれすみかまに煙立らん
はかなしやおひもしらふのたか□雪もかさて御狩のへゆく
あすはさはこそその齡やなからまし年立かへるこよひと聞に

戀

けふこそは心に朽て年ふれとよはらぬ戀を人にしらるれ
我戀は山下水にしつく石のこゝらぬるゝもしる人そなき
尋行舟路にとしのおふるまであはぬ藥ににたるこひかな

我こそはいひはしめしかこ紫あらぬかたにやあひそめにけん
もかみ河心くたくる我戀やいなふる舟ののほるなるらむ
こふれともさゝめの簀のすけなさにあめの下さへ恨めしき哉
きて歸る物ともしらて夏衣ひとへ心はすかさねにけり
ふしぬとて心の糸もよりはりせはへたつる衣はほころひなまし
そことたにまたしらすすけのすか枕朽ぬとつけん人つてもかな
むつこともまた有明のつきぬ間に鳥のねさして歸れとやさは
重れてし夜半の衣のなれぬればしなへうらふれ人そまたるゝ
忍ふまにあふよ涙のこほれつゝめより外にもちりぬへき哉
ねたくわれ何としかまの逢そめてかちかほにする人をこふ覽
しらせはや恨こし路の舟ならはをしかへしたる戀にこかるゝ
山田もる心はすこの獨居にこひ計こそ身にも離れぬ
しつゝとしつはた糸のおりゝに切にきりたる戀もする哉
わかことやいとひすてたを糸屑のもすそにつきて君を離れぬ
ねかひうる西を思はてなそもかく叶はぬ戀によなをつくすらん
逢みんとはけしき山へのほる哉なめならぬは手をおもふ道
今朝きつる心にこりぬしのゝめの空しらすして明は歸らし

神祇

天てらす神の恵みはます鏡曇らぬかけを守るなりけり
いはし水流の末もはるゝとのかなるよに佳を嬉しき

慶賀

君か代は光つきせぬ日の本にあきたつ塵の数もしられす
よそれして苦むすいはほ君か代に千度をなてん天の羽衣

釋教

金剛夜叉

軍荼利

いつかたも心に叶ふ藥あらはにしをそつゐのすみかにはせん
日の光てらさはなとかくらんかくやみ深き罪の身なりと

降三世

諸人のみよの罪をしきたかすはほたひのたれに何を植まし

大威徳

ちかひありて佛の法も君か代もひさしくまもる姿とそなる

不動

立さらぬちかひたのめはをのつから花の臺にのほらさらめや

無常

あすしらぬ三室の岸の根なし草何あたしよに生はしめけん
いかにせんかゝれる草の露のよを月のねすみは音にさはく也

離別

逢事はいつとなくく行道にいかねはしぬる心ちこそすれ

羈旅

道みえぬ此くれ山の柚かたにましろもしらすいもかまつらん

玉しきに立も歸らは都鳥たひにまとふとやとにつけこそ

あやふまて峯よりくたる柴車法に心やそみかくたなる

雪とけは我もけぬへき旅なからはたとせさらす降を悲しき

霜さゆる冬野にさぬる此度は草引結ふ枕たになし

物名

かゝけのはこ

霜降はなへてかれぬる冬草もいはほか蔭のはこそしられぬ

ゆするつき

せこはたゆするつき草の花衣誰か爲にかぬひもなくへき

短歌

君か代は

ゆく末まつのひさしかるへき

花咲て

十かへりいろな

みつかきの

白玉つはき

しるしには

ときはの山に

なみたて

さかきの枝の

やちかへり

はかへするまで

みつはやし

いのるいのりの

たちさかへ

しきみかはらな

みつしほに

のふる命は

なかはまの

願ふねかひの

ありかすに

とれともたえず

大井川

萬代を経て

すむかめの

よはひゆつると

むれたりし

芦まのたつの

さしなから

友は雲井に

立のほり

我はさへに

ひとりゐて

なく聲空に

聞えれば

積るうれへの

おほかれと

心のうちに

うち忍ひ

思ひなけきて

すくるまに

かゝるおほせの

かしこさを

我身のはるに

いはひつゝ

世々をふれとも

色かへぬ

竹のことも

すゑの代を

みかきの内に

うつし植て

にほふときくの

花ならは

霜をいたゝく

老の身に

時にあひたる

心地こそせめ

反歌

しるしけり萬のとしの千々の秋たのしみいまた半ならずと

水三

康治比賜題。久安六年各詠進畢。

仁平三年暮秋之比。依別御氣色一部類進畢。左京大夫顯廣

定家前興書

此百首。先人(俊成)年置數輩之上藤。奉仰部類。一度奏覽之

後。隆季朝臣進上歌可_二切入_一之由被_レ仰。返給之間。有_二保元事_一不能_二奏覽_一。已上人々所_レ進之本。自然留_二家々_一。於_レ家殊可_レ被_二先人自筆之本相傳_一候之處。或人稱_二好_レ道之由_一。可_二借送_一之由懇切。仍與_レ之間經_二年序_一不被_レ返。令_二申驚_一之處。本自不_二借取_一云々。事已不足_レ云。非_二計略之所_一及。忽失_二此本_一。七八年。適尋_二取宮内卿_一（家廢）以_二家本_一被_二書留_一本上更令_レ書寫之。按合煩太以難_レ堪。自_レ今以後。如_レ此文書永不_レ可_レ借_レ人。

承久元年七月十七日

戸部尙書判

于時貞和二年十一月十七日抄出。自餘作者等者。追可_レ書之而已。

群書類從卷第一百七十

和歌部二十五百首四

正治二年第二度百首和歌

題

春

霞 毎一題五首

夏

郭公

秋

草花

冬

雪

雜

神祇

山路

公事

作者

御製後鳥羽院

鶯

花

五月雨

月

紅葉

氷

釋教

曉

暮

海邊

禁中

遊宴

祝言

範光

雅經

具親

詠百首和歌

霞

御製

隆實 後改信實
宮内卿 食房

家長
越前 女房

長明
神主 康業 燕國 陸名

季保

春のくる空のけしきはうすかすみ棚引わたるあふ坂のやま
み山への松の雪まにみわたせば都は春のかすみなりけり
おほかたはかすみもやらぬ曙に春をむかふるしほかまのうら
波の上は霞にくもる春の月に心はかりはすまの明ほの
梅かゝはななむる袖にかほりきてたえくかすみ春の夜の月
鶯
鐘の音にこその日数はつきはてゝ春くる空に鶯の聲
春くるとたれかはつけし春日山きえあへぬ雪に鶯のなく
谷に残るこそ雪けのふるす出て聲よりかすみ春のうくひす
梅かえの梢をこむる霞よりこほれて匂ふうくひすの聲
鶯の初音をもらせ春やとき花やなそきと思ひきためん
花
咲にけり風のこぬまにけふ櫻心のほとにたなりつゝみん

いかにして春さく花をしはしたに風にちらさてみよしの、山
櫻さくひらの高根の春風に木の下のみ雪けなりけり
花にくもる月みよとてやみよしの、梢をはらふ春のやまかせ
いはまつたひきえずなかる、雪なれや花ちりかゝる春の山水

郭公

時鳥しのひらあへすもらす也五月まつまのこそふる聲
子規一聲きけは夏のよのなこりの空にありあけの月
なのるなり雲井はるかに時鳥朝くら山のたそかれのそら
時鳥また宵ながら明る夜の雲のいつくになきわたらん
やとりせし花橋はそれなからまれになりゆく郭公かな

五月雨

音羽川せきいる、水にみゆるかな波さへくもる五月雨の空
このころのみつのわたりは軒にふくあやめに近き五月雨の浪
あま人は袖ともわかつしほらんをしまか磯の五月雨のころ
五月雨はこやの篠屋にあらず共是もほしあへぬさゝかにの糸
水まさるやそうち川の五月雨に木すゑなをよふまきの嶋人

草花

うちなひきさやかにみえぬ秋なれと萩吹風をかたへすゝしき
風になひく片岡山の女郎花たかよもきふに思ひなつらん
秋風の吹にし日よりしの薄しのひもあへすほに出にけり
秋はまたしかの音をふしるへせよ小萩か原をわたる夕かせ
大かたは玉にまかひし白露もはきにしたかふ秋のゆふ暮

月

いかにいいいかにかすへき山端にいさよふ月の夕くれのそら
なかわれば木のまもりくる秋の月風にさかなき松の下陰

有明の月にはちかきなのみしてすむかひなしや西の山本
今は秋山ある里にすまゐせし月みる空に有明もなし
柞原梢をもとにそめかへてのころくまなき松の月影

紅葉

大井川あらしの山の影みえてその梢にもみちしてけり
薄紅葉ちらす風にもつれなけれ時雨にそまぬ色もかひあらは
秋の時雨常葉の山はそめかれて嵐にそかるよそのもみちな
秋ふかしそめぬ梢はあらし山時雨にもる、あなき一枝
龍田山をむる時雨の雨やまで秋も紅葉もふかきころ哉

雪

をかや原うらかれにけり冬の雪ふるからをの、明ほの、空
このころは花も紅葉も枝になしはしなきえそ松のしら雪
冬のよしのし、めの空は明やうてをのれそしるき山のはの雪
あやにくに時雨にたへし松の葉の心よはきは雪のしたおれ
さひしさに煙たえせぬ賤のいほとへかし人の雪のしたおれ

水

冬くれはいはまの瀧つこほりしておもひたえたる山川の水
霜さゆる玉ものとこに氷してはらひもあへぬをしの聲哉
明かたはなちのみきはに氷してかへりてちかき志賀の浦波
浮草はなをあとゝめす冬のよの谷行水はうすこほれとも
冬のよの川風さむみ氷しておもひかれたる友千鳥かな

神祇

いす、川たのむ心しふかければあまてる神そ空にしるらん
千早振神やしらんもろかつらひとかたならすかくる頼みな
玉垣や神のひかりもまさりゆく月のかつらのむかしおりえて

跡たれしすきにしかたを思ふにもたのむしるしを三輪の山本
ちはやふる庭火のまへにとる櫛かなかはししみ山あゐの袖

釋 教 五 時

花 殿

出る朝日山の高根をてらせとも行衛もしらぬ谷の埋木

阿 含

しり初しかせきかその、萩のはにひまなくをける無漏の朝露

方 等

さま／＼に教へし道のかひあればつゐには深く悟りいてにき

般 若

池きよみ水にうつれる月影やむなしといへるためしなるらん

法 花

いたつらにもる、草木もなかり鳧一味の雨のところわかれば

曉

初瀬山明ぬとつくる鐘の音に聲うちそふる峯のまつ風
秋の月ひかりそまさる玉くしけふたみのうらの明かたのそら

くもりこしひはらか下の月影も残るくまなし有明のそら
秋のよの月の影さす楨の戸をなし明かたの横雲の空

雲はなしなめは西にめぐりきて山のはちかき有明の月

暮

三日月のほのめく暮の山端はなめばかりも有明の空
大井川あせきに秋の色みえていさよふ波の夕くれのなと
山嵐に梢の木の葉つきはて、色なき枝の夕時雨哉
山端をめくる時雨の雲まよりとりあへすいつる夕月夜哉
ふる雪をたそかれ時のそらめには花とや人のみよしの、里

山 路

春行は霞のうへに霞して月にはつらしなの、やまみち
葉をしけみもるひまもなし秋の夜の月おほなる足柄の山
秋の月くまなきころはとまりせしひるにやかはるさよの中山
なめこし心は秋の闕なれや月影きよき不破の中やま
立田山もみちし跡もうつもれて木のはにまかふ岩のかげ道

海 邊

なかわればあはちのせとの夕霧にむらきえわたるあまの釣舟
月きよき明石のせとの波の上にうらみなのこす有明の雲
蜃小舟行衛もしらぬ波の上にいつくのうらへさしてゆくらん
磯の松嵐にたへぬおりしもあれ哀うちそふ波のをと哉
あかしがた浦吹風に雲きえて波よりにしに在明の月

禁 中

春はた、軒端の花をなめつゝ家路わするゝ雲のうへ哉
うすみとりまた夏あさき木間より春をとゝむる藤壺の藤
九重のはきのさかりはみかは水岩まの波もはなさきにけり
よもすから雲井の庭を照すなる衛士のたく火は在明のころ
くまもなき雲井の月にやすらへはうしみつまでに夜も成に鳧

遊 宴

千代の春谷の戸出る鶯のはつれにそひく二葉なる松
結びあくる宿の泉の水さえて夏も夏なき物にそ有ける
秋のよの月にそうたふ舟のうち波のうへなるうからめの聲
雪ふかき粟津の原の暮かたはあはする鶯もてにかへりけり
數嶋や大和ことの葉勝負に人の心そひとにこえぬる

公 事

雲のうへにこれや春たつしるしなる袖をつらぬるけふの諸人
相坂の山たち出て雲の上にかけさしのはる望月のこま
天津風雲井の空を吹からに乙女の袖にやとる月かけ
諸人のみたらし川にするかまひ雲井にかへるあかつきの聲
年のくれ三世の佛の御名をきゝて心はれ行雲のかよひち

祝言

三笠山出る朝日の光よりのとかなるへきよろつ代の春
春くれは一しほまさる住吉の松やちとせのためしなるらん
ちはやふる神そしるらんふして思ひおきて數ふる萬代のおく
龜の尾の岩根をおつる白玉の數かきりなき千代の行末
むしろ田やかれて千年のしるきかないつめき川に鶴遊ふなり

冬日陪 太上皇仙洞應 製百首和歌

從四位上守大藏卿兼行春宮亮丹後守臣藤原朝臣範光上
霞

越てくる春はすきねとみせかほに霞棚引あふさかの關
櫻花ひらけぬほとと梢には霞の色もさきかゝりけり
朝日さす春日の山にかすみしてくれなぬふかし峰のすきかけ
霞たつおほる月夜の有明はいかにいふへきなめなるらん
海原や霞の末はしら波の雲路につゝく明ほのゝそら

驚

百千鳥その名は君か萬代のはしめや春の數にそありける
淡雪な花とやみらんふるす出てまた聲わかし谷の驚
初音をはわきてきかせよ驚もまたぬ宿とやかくきなくらん
春のよもふすほともなく有明の月にたゝよふうくひすのこゑ

驚のさそはさりせは梅かえに木つたひちらす花をみましや

花

みよしの、山のかひよりみえつるは雲にはあらて櫻なりけり
へたつとてうらみもはてしけれなる霞そ花の色に也ける
世にふれはうきもつらきも春はたゝ物思ひなき花の下かけ
花ゆへに嬉しうらめし春風に匂ひを送り色をちらして
積る色を行てうらみん花さそふ風のやとりないかてしらまし

郭公

一聲はきゝつともなき時鳥雲のいつくにまたなるらん
時鳥きく袖さへそしほれぬる一聲なるるさみたれのそら
郭公夜すからまちて一聲に明ぬるよはをなに、かこたん
子規ほのかになのる曉を八聲の鳥とおもはましかは
きゝなれしそのかみ山の時鳥かはらぬ聲もめつらしきかな

五月雨

五月雨にしのふあやめはしとろにてさま／＼にちる軒の玉水
日にそひてみかさまされは五月雨にふるの高橋名のみ也けり
五月雨の雲まもみえぬもちのころおもふもくるしあたら月影
五月雨にこやのしのやの軒はよりかゝるはこれも水ひきの糸
五月雨のはるゝまもなくみくまのゝ、實の小菅をほしそ煩らふ

草花

朝またきわくる袂に白露のあたのおほのゝ萩かはなすり
手枕の野へにおれふす女郎花たなりてあたの名をやたてまし
朝またきくるすのなのゝいと萩につらぬきかくる露の白玉
藤袴きてみる人のあれはこそほころひぬらめ秋の野ことに
朝日影心ほそくもみゆるかな尾花か末のさゝかにのいと

月

月ゆへに物をそおもふわかすまひ秋よりほかにかゝらすも哉
いるを恨みいつるをまつと歎てもひとりみるへき月の影かは
秋はくれ月は更行とにかくに物思ふへきあけかたの空
更にけりまちつるかたの軒はより遠さかりゆくよはの月影
かくはかりさやけき月をいたつらに詠すて、はいなん物かは

紅葉

秋霧の龍田の山にもみちして嵐の末そにしき也ける
もみち葉をそむる時雨のぬれ色に光をそふる夕附日哉
紅葉ちる志賀の山かせ吹からにくれなゐする秋のさゝ波
をくら山もみち葉ちれば麓には色に聲ある雨そゝく也
庭のこの葉はらはぬ色を心あらん人にみせはやみやまへの里

雪

あやしくもむこの嵐のさえゝて初雪しろしいなのさゝはら
空は花庭は月かとかまかひつゝ春と秋とをみするしら雪
水の面にちるしら雪のかけみえて底よりもふる心地こそすれ
おきつ嶋目をふる雪の積りゐてかへらぬ波をいとゝうちそふ
白雪をなかつて年のつもりつゝいたゝける身のはてを悲しき

氷

なかれ行紅葉の色やおしからんこほりにとつる山川のみつ
芦鴨のかつくはかひにくたけつゝ玉かとみゆるうす氷かな
上も下もさえわたるらしなし鳥の水のねやに霜はらふ也
こやの池の芦のかれ葉に音さえて氷をわたるむこの浦かせ
池水の氷は月のかゝみにてくもるとみゆるあしのかれたち

神祇

神風ものときき春のはしめとてつのくみわたるいぜのはま萩
皇のなかれひさしきいはし水たのめは夏もすゝしかるらん
見かも山ならのうはゝにをとつれて風わたる也秋のゆふくれ
春日山その名にいとゝふる雪を神のめくみの花かとそみる
木のもとにたれし昔の跡をわけてはこやの山に君まもる神

釋教

方便品 若人散亂心乃至以一花

みたれちる心也ともひと花をそなへよととく法を嬉しき

安樂行品 若於夢中 但見妙事

夏の夜のみしかくむす夢なれと妙なることをみれば頼もし

壽量品 常在鹿野山

望月のくまなき影をみるからに驚のみやまを思ひこそやれ

普門品 弘誓深如海

わたつうみのふかきちかひを頼身はとつる氷の罪もあらしな

提婆品 經於千歲

千年までつかへてならふこの法をたもては君も久しかるらん

曉

夢さむる枕に風の匂ふかな花のひもとく露やをくらん
夏草のかりそめふしにほともなく曉つくるしきのはれかき
うらやまし光ちかくやなかむらんとをかの月のにしの山里
雪ふればしらむ板まを明ぬとやまた夜ふかきに鳥のなくらん
哀なるひとりれきめのなめ哉きえてはもゆる窓のともし火

暮

みかくらん玉とはこれか夕つく日嶺にかゝやく花のいろく
山人のつえにつま木をよせたてゝ谷の夕かせすゝむかへるさ

かれてよりうらめしきかな山のはに月まつほと村雲のそら
雪ふかきまかきの竹の下おれにねくらあらそふ鳥かへるなり
おほかたなこは入日の嶺なれと山のあなたやあしたなる覽

山路

かへるへきいつらはみえぬ山路かな花の白雲ちるとまかふに
時鳥たつれしいればみ山への夏木立こそすゝしかりけれ
くれなるの木葉吹わけゆく駒のかけふみならず岩のかけ道
ふりつめは岩のかけ道うつもれて雪のくつはくきり原の駒
深山へのひしきものにはわりなくも苔の庭とたれなづけん

海邊

けふ春になるとのうらななかわれはいつしかかすむ奥津白波
かゝり火とみれば難波の浦風になひく芦まの簍なりけり
霧ふかしすまの浦風吹はらへ月も波まにあり明のそら
みちのくや末の松山ふゝきしてみとりをこゆる雪のしら波
哀なりたれをみるめとたのまれといつとなきこの里のあま

禁中

名にたかき大内山の花さかり風ものとけくみるそ嬉しき
むすはれと玉のみきりのみかは水みるにそ夏は忘れにける
雲の上の露のうてなはかけ近く月をやとさんためにそ有ける
さゆる夜はとももの宮つこ夢さめてうしみつとさす曉のこゑ
おのこともふみ轟かすなとす也なをけたかしや神のこのいた

遊宴

思ふとち櫻かしたにながめつゝうたのむしろに花をしく哉
松かれの水に夏なきまとゐして千年のかけをむすひつる哉
白菊を折てうかふるさかつきに我がほそまつうつるひにける

雪ふればかくやとまつそ思ひ出る鏡のかけにおもなれよ人
わが君のみこのもゝかにたひらけくとゝのほりたる萬代の聲

公事

いつしかととくる氷のしるしとやけふたてまつる立春のみつ
とのもりはあすはいつかとおやめ草はやふきてけり九重の軒
きのふより望月の駒迎へきてやさしくみゆるひきわけのすけ
つこもりの夜はさそかしとしりながら心を騒く鬼やらふなと
月ことのなゝせのみそきしるしおれは限りもしらす君か齡は

祝言

我君の千代のはしめときくからにのとけくみゆる春の明ほの
なれかしる千代に一たひすむ水をいくめぐりまで君結びてん
幾千代とかきらぬ秋の月なればはこやの山に影そのとけき
吾君の千年を冬のしるしとて嬉しきことをさくものこれり
君か代は限りもしらすありそ海の岩うつ波のかす□からとも

冬日詠百首應 製和歌

從五位上行侍從臣藤原朝臣雅經上

霞

雪さゆる春はみとりの野への色を霞そめつる明ほのゝそら
春はなな明行空をあけやらぬ霞かゝれる横雲のやま
風の音も春のけしきになるみかた波路はるかにうす霞みつゝ
霞ゆくまゝにみきはやへたつらんまた遠さがるしかの浦波
まきもくのひはらか末は長閑にて霞のうへに春風そふく
鶯のなみたの氷いかならんふきにしものを春の初かせ

鶯

春はきてまた雪ふかき梅かえにやとひかぬるうくひすの聲
初音より名残をおもふ鶯のみやこへいつる春のやまさと
いまよいかに月影かすむ明ほの、梅の匂ひにうくひすの聲
古集たつ都も春の梢にて霞をいてぬうくひすの聲

花

是もまつあかね餘りにいりやうて外山の花にけふはくらしつ
なかくてもれたきは雲の色なれやおもへは春の花のさかりを
よしさらは花のふもとの松にふけいとひもはてし春の山風
吉野川ゆく瀬もみえぬ霞より風になかる、花のしら波
何としていかなるへしとなき物は花にあらしの春のくれかた

郭公

卯花の垣れよりこそ郭公まつちりそむるしのひれの聲
時鳥待夕くれに匂ひきてたのめかほなる軒のたち花
初音とていかにかた覽ほと、きすまちふるしたるよはの一聲
われもまたほのかにきゝつ時鳥たかまちえたるよその一こゑ
いつもあかねなこりなれとも時鳥一聲のこるみな月の空

五月雨

かすみしくおほる月夜とみし物をへたてはてつる五月雨の空
なかくめやる伊駒の山の嶺の雲いくへになりぬ五月雨の空
五月雨はもとのみきはも水こえて波にそさはくいてのうき草
五月雨のころともいはしいつとても雲は軒はの山かけの庵
我袖に昔はとはん橋の花ちる里のさみたれのそら

草花

袖のうへにうつれる色やそれならぬおりはやつさし秋萩の花
野へはれや草葉はなのか枕にて露にのみふす女郎花かな

萩原や風まつくれの下露をよそにもかこつ女郎花かな
花すゝきなにとて秋をまちけらししのひし程は露かゝりきや
まれく尾花うらむる葛にことゝへはた、秋風の野への夕暮

月

秋よたゝゆふへの空を哀ともなかくめはつればやまのはの月
花の春なれしなこりの面影よ秋の月とはちきささりしな
ひかりもる軒のしのふの露ながら袖にみたる、夜半の月影
なかくめわひふけゆくまゝの袖の露月やはつらき秋のよの空
月の影なこりたのみやなかむへき秋もいく夜の在明の空

紅葉

そむるより心やつくす立田姫あらし吹そふ秋の梢に
時雨ゆくきゝの梢やうつるらん露も色つく杜の下草
たつねいる秋は外山の色なれやこれよりおくは松風の聲
秋はなをたへすや松の下紅葉思ひもすてぬ色をみすらん
宿うつむ軒はの蔦の色をみよ深山か里の秋のけしきを

雪

はれくもり嵐にさゆる村雲のしくるとすれば初雪のそら
さひしさはかれ野の原の末よりも雪のあしたのとを山の松
ふりにける跡ともけさはみえぬかな志賀のみやこの雪の花園
御狩野や雪はふりきぬこれもまたぬるとも花の春の面影
たつねくる人はなとせて三輪の山杉の梢の雪の下おれ

氷

石はしる清瀧川に玉しきて結びかれたるうすこほりかな
底きよき玉えの水のうす氷やとらぬ月もみる心地して
霜こほる尾花か末も波の音もむすほゝれたるまのゝ浦風

あらし山木の葉の音もおちはてゝとなせの瀧は水しにけり
山川の岩木瀧津ゆく水にこぼるへしとはみえしものかは

神祇

君かためあけはしめてや久かたのあまの岩戸のいにしへの空
石清水そのみなかみを思ふにもなかれの末は久しかるへし
賀茂山の高根にかゝる白雲やわけしなこりの空の通路
住吉の松にたのみをかけをきてけふは嬉しき波のしらゆふ
かけうつすおなし日吉の影なれと光はこれそあけの玉かき

釋教五尊蓮

天眼通

をしなへて尋ねぬ山の花もみつへたつる雲のへたてなければ

天耳通

となさかる聲もおしまし時鳥さゝのこすへきよもの空かは

宿住通

世々をへてすきにしかたを思ふにも猶くもりなし夜半の月影

他心通

みな人の心々そしられる雪ふみわけてとふもととはぬも

神境通

思ひたつほとこそなけれ車路やまた白川の關のあなたは

曉

ゆふへとてさひしからずはなけれともたへぬ哀はあけ方の空
いとふへき契ありともいかせん夜ふかき鳥のほのかなる聲
今はとてたか道しはにわくる露あはぬれさめのよその袖まで
さても猶夢をはかなみまるとるまんしはしなあけそ小庭の床
あつまのまのあまりのやすらひにまつ立人の音はすぐ也

暮

色かへぬ色こそかはれ夕附日さすや岡への松のむらたち

眺むればくれたにはてぬ山のはにいつかたふける三日月の影

山端に月まつころの柴の戸をさゝすやなにを峯の松風

ゆきくるゝ山かたつきてたれかまた都の空をながめわふらん

おほえすよ野寺やちかきいほりさすあたりもしらぬ入相の鐘

山路

ななき夜のさよの中山明やらて月に朝たつ秋のたひ人

時雨つるいくへの雲をわけくらし野原にいつる袖の月影

故郷のたよりとならばことつてん袂にむかふうつのやまかせ

暮ゆけは宿かるかたもしら雲のかゝれる嶺に立そわつらふ

行かよふかけのすそ道末たとりこゆとしらする旅人の聲

海邊

明石かた月ゆへならぬなめまてはれてさひしき波のうへ哉

都おもふ袖をはゆるせ清見潟さこそならひの波の關もり

哀なりいつれの浦のあまならんよるかたもなき沖の釣舟

波の音松のあらしのうらつたひ夢路よりこそとなさかりぬれ

またしらぬうきれの床のかち枕なれぬ袂になるゝ波かな

禁中

百敷やたえぬなかれをみかは水獭行末の影もはるけし

河竹のかはらぬ色のふかみとり玉しく庭の末をしらるゝ

おさまれる世のためしとやかきとめし風も音せぬあら海の波

雲かゝる大内山となりにけりいくよの塵のつもるなるらん

衛士のたぐ煙絶せぬ御代にあひて民のかまともいかゞ嬉しき

遊宴

莖つむ袖よりそてをなたしきて野をなつかしみ一夜のみかはこゝやさは七夕つめに宿かりしあまの川原の夕くれのそらもみち葉を袖にこきいれてかへりけん人の心の色をみるかな御狩せし野守の鏡たつれきてふりにし影もみる心地する摠籠にいつかきにけんとはかりのそのことの葉に昔をそしる

公事

春のあしたはこやの山のみきりよりまついはたつ雲の上人けふにあふ雲井の庭のすまひ草とるてもあたにうつる物かはこれもまた千年の秋のためしかなけふことにひく望月の駒君か世に雲のかよひち空はれて乙女のすかた月にみる哉新玉の春をむかふる年のうちに鬼こもれりとやらふ聲々

祝言

雲の上も春のみ山の萬代も松と竹とのすへにたとへていつとなく君かよはひは和歌の浦に千年をさして田鶴鳴渡る君か代を思ふ心の末の松波はこゆとも色はかはらし幾千代もおなし月日のめくりきて變らぬみよは空にしるしも百草の千種にあまることの葉も君かみかけはすそさかへん

詠百首應 製和歌

從五位下行能登守臣源朝臣具親上

霞

けさも猶霞のうへの雲さえてみえぬ雪けのあけほの、空難波かたかすまぬ波も霞けりうつるもくもるおほる月夜に今もまた妻やこもれるむさしの、霞のうちにきゝすなく也中々になかめの末ははれにけり遠山のはのかすむあけほの

よそにのみ春は都を行鴈は霞にすくるこす点なりけり
 鶯
 色はまた物うき梅の梢にも雪よりなる、うくひすの聲鶯のまたや涙のこほらん空も雪けになをかへる也都へとみな鶯はいてはて、谷には春をよそにきくなり梅かえに匂ひもわくる春風に心なかる、うくひすのこ点花をおしむ友にはなりし鶯のふるすにかへる心つよさよ

花

花さかぬほとは心ななくさめて風いとはぬ嶺のしら雲はやもさけ植ても庭の櫻花たのみもあへぬ春のけしきをたつれてもとまらぬ花はみさりけり吉野の春を月になかめて花ならて人のとふとも春風ようらみに袖のぬれぬものかは時しもあれたのむの鴈の別さへ花ちるころのみよしの、里

郭公

きかぬまの心はしるや時鳥人まつ山のゆふくれのこ点さてもまたねなん物かは時鳥一聲とこそまちし心のまつとなれはいかゝくるしき郭公ねぬにもあくる東雲の空時鳥なこりもしらぬ一聲に雲まの月はあり明のそら子規猶たゝならぬれ覺かなきゝふりてこそみな月の空

五月雨

かれてよりかよひし雲のひまとちて幾日になりぬ五月雨の空水のおもは庭もひとつに廣澤の月影しのふ五月雨のころ銀川おなしゆくゑにみゆるまで雲と波とのさみたれのころ五月雨にみかさやたかくいつみ川は、その森は波のしらゆふ五月雨はもりしいとまもわすれ水むすはぬ波の末にこるまで

草花

植しよりましこはきの花さかりなをかくまては思やはせし
ふみわけてとはぬも人のつらからす花にあとなき深草の里
ひとりねのよその袖まてなとつれて萩の上風露さそふなり
ならはれは身をはたのます庭の面の尾花かもとの松虫の聲
立かへりふりにし庭の花すゝきしのはれぬへき秋のおもかけ

月

なかめはと契りし人はなけれども月にしのはぬ面影そなき
なかめこし心や今ははれぬらんくまなき物と月をしりぬる
雲はらふ嵐に秋の空さえて月の千里に衣うつなり
里わかす秋は心も在明になを月影は娘捨のやま
あくかるゝ心さへこそ惜まるるには月のすてやしつらん

紅葉

面影は庭の梢も立田山こゝろはかりの秋のけしきに
時雨^{にほイ}は常葉の松^{杜イ}そかはりけるよもの梢はなのかいりく
ちらぬまとたのめぬ人もまたれけり花にもみちの心ならひは
龍田川わたれとたえぬ錦かなちらぬ梢の色やわくらん
木のはちりしくれもきをふ山路かなわけ行末は風にまかせて

雪

ふみわけぬ雪より跡の絶そめてなへてなるへき庭のおも哉
嶺つゝき梢はふかくうつもれて雪より下の谷のかよひち
わけこんとたのめぬ床もはらふ哉はにふのこやの雪の夕暮
こほる池の芦ふりうつむ雪の内につかひあれはとなしの諸聲
くれはてぬ蜩のとまやもなき浦のたのも木陰の松のゆきおれ

氷

鶯鶯のうきねはかりそたへにける月も氷し廣澤の池
木の葉ちりかけひの水もつらゝゐて音さへのこる庭の松風
大井川みきは、風にさえにけりぬせきに浪の音をのこして
霜はらふましはの嵐をとさえて野守の鏡つらゝゐにけり
音絶てこほる岩まのわすれ水わすればてぬる冬の山かけ

神祇

やはらくる光もいとゝみかく哉はこやの山にかけをならへて
萬代もすむへきかけは神風やみもすそ川のあり明の月
みゆきするおもかはりせてみ熊野の浦の浪ゆふ千代も電れよ
今そしる君か御代なと住吉の神さひにける松のこゝろな
石清水たのみはふかしいにしへの跡はたえゆくなかなれ共

釋教

色

花ゆへに風をもなにかいとふへきむなしき色をみする也けり
身にあまる難波のことのよしあしも思へはかりの習ひ也けり
今そしるのこるくまなき面影に心の月のすまんゆくゑも

行

識

暮

春は風秋は時雨とうらみきてこれなならひと思ひ□□□□
しれかしなにもにすむ虫のわれからとくるしき海にしつむ心な
あさちふはまた霜をかぬなめよりいさよふ月を袖にまつ哉
頼めしなまらしならひやかはるらんつらくのみなる入相の鐘

旅人の宿とふすへにたのむ也うはの空なる煙はかりを
いとまたあやしかるへきなめ哉折しも軒の蜘蛛のふるまひ
跡たゆる谷のいほりはなのつかられくらにかへる鳥の一こゑ

曉

行末のほとなも空にあさたてはまた山のはにあり明の月
ひとりねのかはさぬ床の枕にもならひにぬる、袖のうへかな
いつくにもいは、や思ふほとはかり伏見の里の鳴のはれかき
一夜たにあかしかれつるね覺かないつよりやかて習ひ始めん
あかほしの影みえそむる山端に月のなこりをしはしみるかな

山路

行末は松の嵐に空はれて嶺よりにしの月をみるかな
雲かすむ麓やちかく成ぬらん岩うつ水の音かよふなり
おもひいる人たにすます成にけりこれよりたゆる岩の通路
心ともすきもやられす東路やまたわけなれぬ足からの關
たき、とる跡より外は道絶ぬゆきいてん末をとふ人はなし

海邊

人とはぬあまの筈やのかち枕うらみぬ月にぬる、袖かな
波風のたとさへあらすなるみかた都を遠くおもふのみかは
またもこん松の槌風身にしてみてとめぬなこりを思ひわひぬる
あさりせぬ袖もぬれ□□松嶋やなしの磯のならひ也けり
月ゆへはよそにも嬉しはりまかた□つねといつる浦の友舟

禁中

心なきとものみやつこいかならん思ふもつらし花のゆかりは
時鳥聲もおしますななるなりたきのくちとはたれかなしへし
花さかり袖にはよそのはきのとも心はふかくおもひそめきて

みかは水いくへ氷のかさねらん雲井の月もかせさえぬなり
君が代に雲やか、らんちり山の千世に一たびかすはるるとも

公事

諸人のたちいる袖のたとさえて玉しく庭の春のはつかせ
ひきつれて我もいさみん梓弓まゆみのけふのいてのてつかひ
星合をうつす光も雲晴て影より外の庭のともし火
影はれし昔も空にみゆる哉雲井の月にあかほしの聲
みそきするな、せの川の風さ□□袖よりはらふ夕暮の空

遊宴

大かたの空さへ桃の花さかりゑひをあらそふ波のさかつき
長きよもためしにそきく菖蒲草引くらへけるさこそねならめ
昔よりたつれし跡も大井川紅葉の錦おりにあひつ、
今も又おきなさびにやり衣はらひもあへぬ雪をみるらん
里わかす誰もれぬ夜のまゝあかな月ゆへならて在明の空

祝言

萬代はあまねきかけのあらはれてはこやの山に月そさやけき
いく千代もすむへき池の鏡かなのとけきかけの面かはりせて
今そしる君が御代なとかれてよりさしての磯の千鳥鳴也
年なへてかさなる千代もあらはれてわかえさしそふ松の行末
久しかれためしつきせぬ世中の昔にかへる和歌のうらなみ

詠百首和歌

霞

今朝みれは霞の衣立田山すその、色もひきかへてけり

散位隆實(上)

雪つみし梢もけさはあさみとりかすめる松に春風そふく
よもの山いつしかみれば朝霞たつやをそきと春めきにけり
なめこし雪けの空の月影のはるとはすれとなを霞つゝ
きなれし嵐の音もうつもれてしつかにかすむ峯の明ほの

鶯

鶯のいつるふるすやいそくらんまた明やらぬ谷のひとこふ
谷はいて宮この空やたとらんやまの里のうくひすの聲
吳竹のふたまたにへぬ春の色にいつさとなれて鶯のこふ
よもきふや雪ふるとしは跡たえて春をつくなり鶯の聲
梅は雪櫻は雲とまかひてもにるものなきはうくひすの聲

花

花のかげ思ふより社さひしけれあらしのちの春のくれかた
小初瀬の花さきねれば菅原やふしみにかはる春の明ほの
高砂の松にも春の花さかは尾上の雲のひまやなからん
花そとは匂ひにしるくなかめても猶雲わくるみよしの山
まつてはつらき梢とみしかものこるうれしき遅櫻かな

郭公

時鳥うの花かけのしのひねにわれも五月のそらそまたるゝ
一聲は夢路をすきて時鳥さむる枕にとなさかるなり
まちわひぬさのみくらくは時鳥まかふばかりの鳥のねもかな
時鳥ねぬよつものり一聲にうらみはまつのいろもかはらす
そらも空やとやはかはる時鳥しらぬかほにもすきぬなる哉

五月雨

五月雨のふり行まゝにすゝか川やそ瀬も淵となりはてにけり
ひまなあらみたまらぬ宿の五月雨は軒の雪の音そすくなき

いつのまに水のみかさのいつみ川□五月雨はけふみかのほら
五月雨のはれまなやかに松嶋やしまの蜚の袖もほしあへす
水の音は深きにしもそよはるなるみせきをこゆる五月雨の頃

草花

秋やこれおなし緑にみし野へを千種にわくるをのかいろゝ
女郎花色をうつせは夕露のちるさへおしき野への秋風
暮ゆけと匂ひはさらにかはられは猶面影にみやきの、はき
まれくとととまらぬをみてうらむ也いかにかすへき尾花葛花
ほに出て招きこそせねをかや原みゆらん物をしたのこたれば

月

なかわれは袂そさゆる久かたの月の都にあきかせやふく
夕暮の萩の音より空はれて秋風しるくすめる月かな
なかわれは都もかなしさらしなや娘捨山にいつる月かも
松浦かたはるかにみればもろこしの空もひとつにすめる月哉
いたつらにまつ夜そいたく更にける山のあなやあり明の月

紅葉

初時雨すきぬとみつる雲間より高根のはゝそ色付にける
龍田山また色あさき梢にも猶たのまれす秋の日かすは
いろゝゝにかさなる山のもみちははいくへたゝめる錦なる覽
もみち葉をさのみやよそに三輪の山杉の梢は時雨のみして
もみち葉のちるなはいはしうきはたゝ嵐に通ふ秋のくれかた

雪

さらに猶声火たくやもさむけしや難波わたりの雪のよなゝ
秋まてはたつめる人を松虫のおもひたえたる雪の山さと
さひしさは秋をかきりとみし宿のまたこのころも雪の夕暮

とはすとも山路の冬を思ひやれ心のみちなうつむ雪かは
瀧津瀬にまかへし風も音絶て松には雪そ□□□也けり

水

今朝よりはほりこし水も嵐山さえゆく夜はに氷むすひて
夜をさむみ氷の下に音たえて岩まの水も冬こもるなり
瀧の音も今はのこらす氷して岩影さびし冬の山さとう
きれさめ水をたひのすみかにて故郷こふるをしを鳴なる
したこほる難波の芦の打なひき波よせ残す浦風そふく

神祇

哀とも神はあらはに石清水きよき心のそこはしるらん
ちはやふる賀茂の川波たちゐにも深き頼みなかけぬまそなき
春日山かすにも神はいれすともかけてそたのむ藤のなはかり
世をてらす日吉の光くもりなくさしてそしるき君が千年は
君かへん千世のけしきをみくまのゝ羨ましとや神も見らん

釋教

序品

紅葉ちる法のはやしなをかきわけてふかくや道を尋ね入けん
方便品

一ふさの花をつみても思ひきやつゐに佛の身とならんとは

譬喩品

たれもみな三の車にのりの道心しかけはさとらさらめや

信解品

はる／＼と草のいほりを尋すは行衛もしらぬわかこならまし

藥草品

法のためあまれき雨やそゝくらん草木もよもに花咲にけり

曉

雲とつる松のとはそにしらむ夜は一聲つくる鳥たにもなし
ふかき夜にたれまたかゝるれ覺して野寺の鐘に袖ぬらすらん
霧まよふ外山の空のほの／＼とあけぬとみれば鳴のはれかき
草枕いまはといそく旅人のおもひさためぬ明くれのそら
月さゆる明石のせとの明かたにほのかにきゆるかこのよひ聲

暮

夕露をはらふ嵐は音すきて梢に残る日くらしの聲
入目さす片山かけの柴の戸に旅の宿とふ人そまたるゝ
山人はいそき出ぬる跡の雲とへとこたへぬたそかれの空
夕附日光は空にのこれとも山陰くらき大はらの里
なにとなく物さびわたるけしきかな軒の梢のくれかゝる空

山路

たちとまりいは井の水をむすふてに都もあかね志賀の山こえ
露わけて夕越くれはなしほ山袖より下に松かせそふく
わけいれは衣手さむみ露そへてさもわびさする秋の山みち
とはるへき道とはさすかまたれけり庵よりつゝく岩のかけ橋
たつれきて哀となとか岩根ふみかよはぬほとこの山のおくかは

海邊

和田の原明れば波にうかふ蟹のいつくを宿とききかへるらん
しほたるゝあまや關守清見瀉磯のすまひになみはかけつゝ
波わけてかるもなるゝわれからとれをなく袖かあまの濡衣
しら波のよるへのみきはたつなきて沖にさびしき蟹のつり舟
夜ゝゝに煙をさへやかつくらん鹽やきくらすいせのあま入

禁中

春ことにつくす心をおなしくはいかて雲井の花にしられん

き、渡る音たにすゝしみかは水すむらんかけを思ひこそやれ
おり／＼にかけてみよとや藤□□□梢は秋の錦なるらん
朝またき日なみそなふる御狩人雪打はらひ今やきぬらん
行末のなかれひさしくみゆるかな千代をこめたる河竹の庭
遊宴

いつしかと小松が原に出しより野へこそ春のすみかなりけれ
手に結ふ岩まの水に秋わきて月みるほとよはてみしかき
狩人のさかふばかりに出る野を心のほかに鹿やうらみん
紅葉ちるうちの河上よそにみてさのみ網代にひなやくらさん
思ふとち野にも山にもうちむれて所さためぬまとゐをそする
公事

雲井よりかさして出る藤の花橘にましろ色そことなる
五月雨の曇りもはるゝ雲井かなふきあさきなさとる御法に
逢取の關路になつむ駒のあしもいはへてみゆるもゝしきの庭
千代ふへき豐の明の日影さし光をそふる雲のうへ人
きくたひに神や恵をます鏡有明方のあさくらの聲

祝言

君かへん八百萬代のしるしとて花さきそむる和歌の浦松
かゝりける常葉の山の岩根松いはれとしるし千代の氣色は
君か代のためしはなにかありそ海のくもともつきし沖津白浪
君か代は幾千年ともしらたつののかよはひも數ならすとや
のとけしなほこやの山ないつる日の照す雲井の萬代のかけ

詠百首和歌

霞

萬代を松の緑もほの／＼とかすみめぬる千代のはつ春
尋ねへきしるしの杉も霞みつゝいか、はとはん三輪の明ほの
夕霞かへるうら路も白波にあとまよはすな沖のつり舟
八重霞嶺の木末に龍田山春も色ある明ほのゝそら
空までも猶明ほのをしのひかれ霞の袖に春雨そふる

鶯

春をあさみこほれる涙風さえてまたうちとけぬ鶯のこゑ
けふも猶谷の古巢を出やられてわれをまちける鶯の聲
すみなれしなこりなしのふ古巢よりなく／＼出る鶯の聲
ぬふとさく梅の花かさかひもなしたゝぬれ色のうくひすの聲
時鳥花橘になくよりも猶梅かえのうくひすのこゑ

花

咲やらぬ嶺の櫻をまつ風のかれてかなしき春のやま里
花ゆへのうらみも今はたえれとやちらぬ櫻に春風そふく
吉野山花をたつぬる古郷のちるなまつこそわれをまつらめ
白川の花みることもみそちへてわれやすらはぬ木の本そなき
山櫻木すゑをはらふうらみゆへ花も涙も風よりそちる

郭公

子規かたまつよひの山のはにさもあらぬ月ははや出にけり
夢なれやうの花月夜ふくる夜の垣にしのふ鳥の一聲
うくひすの古巢をつけし跡なれば雲路よりなくほとゝきす哉
橋のにははぬまでそ時鳥くもにやとかるゆふくれの聲
橋の匂ひもいまはみな月に思ひのきはの子規かな

散位源家長上

五月雨

ふりそめてたえ／＼にみし庭たつみ一つにつゝく五月雨の頃
五月雨に水もおほろのし水さへみしにもあらず面かはりして
五月雨にむこのわたりを見渡せはおひある雲そみきは也ける
あま人よいかに日影をまつ嶋やなしまか磯のさみたれのそら
五月雨にみつの濱松波かけて梢に残るまのゝ浦かせ

草花

いは結ふ野への小萩のさきぬとはわけくる人の袖よりそしる
宮城野の小萩か色もまたみれと袂にうつるおもかけのすり
移しうふる千種の花のはなさかり心の色や庭にみゆらん
物ことに心をとむる片岡の尾花か袖に秋かせそふく
武藏野の草におほめく女郎花妻もこもれる心地社すれ

月

ちゝの秋のとけき御代の空晴て嬉しきにさへ袖の月影
雲きえてまつもおしむも月ゆへにうらみそふかき山のはの空
秋のよのはれたる空にすむ月の光をほしのくもりなりける
まはらなるもやにも影は有明の月にぬるよのなこそおしけれ
よひのまのながめほとなき三か月をまたほめかす有明の空

紅葉

千草みし野へわけすさみ今はとて思ひたつたの山のはのいろ
御室山紅葉のおくになりぬれば松ものこらぬ心地こそすれ
水の面にきしの紅葉やうつるらんくれないあくる池のには鳥
ちらぬまに猶やすらはんはゝそ原これより後の秋の色かは
色そめし時雨にのこるみやまへの楓の梢は嵐ふけとも

雪

空さえて時雨も風にむすはゝれけさより庭に雪もふる也
山里のれやの板まを雪とちて煙もけさは道たえにけり
あさからぬ心のほともしるはかり道わけそむる雪のふるさと
しほやかぬ日數も今は積るまで里のあまりに雪は降つゝ
雪ふかし人めも更になしはらのむまや／＼とたれをまつらん

水

志賀の山おろす嵐に波きえてなきたる浦や氷なるらん
さえ／＼て池のつらゝもよをかされ跡たえはつる鳩の通路
大井川みきはのつらゝ雪積りほそ谷川と成にける哉
瀧の音はつらゝにたゆる太山邊の松の嵐を嶺に残れる
よこの海の氷のはてに舟とめて恨も遠きうきれをそする

神祇

長閑なるはこやの山にはる／＼と神と君との契りをそする
このころのやくもの末の言の葉に思ひいつものいにしへの空
萬代をまつおふる濱に年ふりて君かためにや住吉の神
さかりなる和歌の浦波立そひて恵もしるき玉津嶋姫
うきみいまやそうち人のかすなれば君をいのるはふた心なし

釋教五戒

不殺生戒
今よりはまゆみつき弓引かへてなれくるしかに哀なもしれ
不偷盜戒
さつけなくまことの法を思ひとれおしむ寶はさもあらずとも
不婬戒
我妹子に思ひ軒端の年をへてふかくもしけれ戀わすれ草
不妄語戒

攝津國の難波の事につけつゝもよしなはあしといひな隠しそ
不飲酒戒

曉

さとりえぬ浮世のふひをさめぬ身にかりの情は誰すゝむとも
みしかよの結びもあへぬ夢のよにうつゝともなき鐘のなと哉
東雲の思ふ思ひの數々に猶なきあまる袖のつゆかな
爪木こる賤かあさけの煙ゆへまた夜をこめてひましらむ也
よひにきくおなし野寺の鐘の音に哀は今そつきはてぬへき
さらにまたみぬいにしへの面影も心のうちにありあけのそら

暮

夕附日さすや岡邊の柴の戸に程なくかはる三日月のかけ
いそやかた煙は空に色消てほのめきそむるあまのもしほ火
たれこむるまとやはるかにへたつらん入相の鐘は遠さかる也
いかにせん月にもあかね光まで袖もおほろにゆふつゝのかけ
秋のみと思ひしものを袖の露いつものくれのならひとそなる

山路

此ころはいそく家路そかはりける春より後の志賀の山越
歸りみる麓の里を遠からぬはる／＼きぬる心地すれとも
岩ねふみしはしかたしく苦の上に程なき夢のむすはれつゝ
はる／＼と岩のかげちになつみきて駒立とまるやま川の水
むかし越し跡のなさけの面影も龍田の山の夕くれのそら

海邊

和歌の浦の波を心につけまくもかしこき御代の習ひとそきく
なかもやるなしまかさきの濱ひさし軒端にきゆる沖津白波
蜃小舟かへる浦路の夕くれに松ふく風そしほり也ける

はりまかたしらぬ波路にこよひより浦なれそむる月の影哉
哀なりゆくふもしらぬ波の上に浮世をわたるあまの釣舟

禁中

皇のよるのおとゝのあけかたにほの／＼殘る春のとし火
とのもりの朝清めする萩の戸にしかまのかちのみえぬ花すり
いにしへのいつゝの人もなしつほにみぬ面影は猶のこりつゝ
今さらに思ひもたえぬ煙哉月すむころの庭の火たきや
今よりやとたえはてなんいにしへはふたゝひ渡る雲のかけ橋

遊宴

ひき／＼に子日の野へはかはれとも千年をまつそもろ心なる
白川の花にみゆきの跡とへは老木のさくられにかへりつゝ
うすくもり櫻が本に風たえて木のもとちらぬまりのなと哉
春の花秋のもみちの木のもとに今年なれぬるわかの浦人
川ふけて都のともに逢坂のわらやにかよふ嶺のまつかせ

公事

家路より都の霞わけそめてけふたちわたる雲のうへ人
をみ衣たちぬる跡のなこりかな月にうつれる庭のくれ竹
雲の上のさ月の空のひめもすにきくもすゝしき法の聲哉
昔なれし乙女の袖もゆかしきに豐の明をよそながらみん
明そめしあまの岩戸のむかしより雲井にたえぬあかほしの聲

祝言

末よいかにまた若松の此頃をのとき御代のためしにそひく
白川のながれの末をむすふとも猶としなみはたちまさりませ
くもりなき君かよはひをてらしみて月日やかすな空にける颯
枝々も八百萬代をまつ風は君かならひを吹つたふ也

たみまでも煙をたてゝしらる也にきはふ御代にあふ嬉しさを

詠百首應 製和歌

散位從五位下鴨縣主長明上

霞

春風のはらひもあへぬ嶺の雪をまつつけつ物は霞なりけり
はれやらぬ心の空の朝霞雪けなこめて春めきにけり
故郷にかふなかめの道とちて心もかすむ春のやますみ
雪きゆる萩のやけはら霞こめてたてぬ煙にもゆるわか草
山本もこめてしもこそ朝霞春の哀は色まさりけれ

鶯

雪にふすまかきの竹のよの程に春めくものはうくひすの聲
春やときまた思ひえぬ梅かえに花をおそしと鶯そなく
鶯の谷のすもりやこれならぬのこれる雪にたくふひとこゑ
たちこむる霞をもりて谷川のひゝきにきゆる鶯の聲
鶯もきてとかむ也梅のはなたちよるはかりありし袂な

花

まかへきてあらぬ梢をみつるかな雲こそ花のしるへなりけれ
谷かけの老木の櫻枝をなみともしくさける花をしと思ふ
嶺わたる花のふゝきにうつもれてまた冬こもる谷の陰草
紅の一しほそめのうす櫻山路の雪のちるかとそみる
これもまたなになとへん朝ほらけ花ふく風の跡のしら波

郭公

大かたはななくときけとも時鳥入つてならてこれそはつこゑ
夜はにきくなこりの床のあしたまでおきうかるへき時鳥かな

き、送る心もきえぬ時鳥遠さかりゆくあかつきのこゑ
夏ふかきかきれに残る鶯もこの初聲を哀とやおもふ
夕やみは雲路やくらき時鳥月をむかふる山のはのこゑ

五月雨

久かたのあまの川水まさるらし雲さへにこるさみたれのころ
よひ／＼にすむらんものを空の月雲よりしたは五月雨のころ
あやめ草ぬれ／＼ふきし雫よりたえぬ軒の雨そゝきかな
五月雨は罍の小舟の笛もりてうきれのうちにうきれをそする
とにかくに月に心そなくさまぬ娘捨山のさみたれのころ

草花

大かたは露にたはるな女郎花つもればこれそ霜となるもの
露路わけ物思ふかりやすきつらん色あさからぬ萩の上の露
野へにれて袂にうつす萩か花かたみに宿をかる心地して
小萩原花にも色やうつるらん物思ふ袖の露のゆきすり
秋ふかきさかのゝ小はき露さえてすきゆく花の盛りをそ思ふ

月

夕附日山のはふかくなるまゝに影あらはるゝあさちふの月
思ひ出人屋上の松の枝わけて月にとはるゝ昔のうへふし
武藏野の花のえことに露みちて千里のたまをみかく月影
ひかりみつもちの面影いつなれやかたまゆのこす左明の月

一首闕

紅葉

秋のくるけしきはしるし玉かしは時雨まつまの露のしたそめ
よそにみし雲の下にやしくれけん紅ふかきかつらきのみれ
つまきゆふしつかれりその末葉までみ山の秋の色はみせけり

風はたつ木の葉はもろし中々によきてをゆかん神なひの杜
いつしかとけふやはもりの神無月まはらに成ぬかしは木の森

雪

今朝も猶はけしき風の氣色にて雲に残れる雪をしるかな
ちるよりもあやなかりけり霜をへて葉かへぬ椎の雪の下おれ
わけいれはぬれす成行袂かな外山のほとそ雪はきえける
越ぬへし雪の白波たつた山ひかりはよはにきえんものかは
たきこし横の板戸の音たえて風たにとほぬ雪の夕くれ

氷

風さはく波まの床にぬる鳥もけふやつらゝの枕きたむる
すわのとにくめちの神や通ふらんよるそ氷のはしわたしける
露をきしひたのほそ江のこすけはら冬は氷にむすほれつゝ
れぬる夜はむへさえけらし杉の庵の軒のたるひの土につく迄
つらゝゐるきやまつたひのそふゝに朝ゆく駒の音の寒けさ

神祇

よもの海の波をなすつめて跡たるゝ神やさなからあきつ嶋守
色かへぬ君にあふひのもろかつら神にそかくる千代の行末
大和なるためしをみせよ君か代に塵にまじはる神ならはかみ
千代といはゝいとまかしこし朝夕にいのる心は神のまにゝ
さりともと濁りなき世を頼む哉なかれたえせぬみたらしの水

釋教五戒

すかたこそ哀とおなしあたしのゝ露もて露をいか、けつへき
心せよたゝなはかりの河をたにさこそ昔はわたらざりけれ
なをさりにつくるおもりの色もはや思へは法のいさめ也けり
玉かゝる衣のそてもくちぬへしはやうちはらへくはのはの露

し□よき□むらさきの跡もなき□ほか□□露をみしにも
曉

あけぬるかとはつかあまりの冬のよの月より後にしらむ山のは
露ふかきかり田の庵のいな枕夢路のはてはしきのはれかき
今はとて吹すきむ也牧の笛のれなはやこゑの鳥にゆつりて
おもふとち昔かたりに夜はふけてふすかとすれば鳥の初聲
やすらひにしらてれにける横の戸を明方にさすしのゝめの月

暮

山かつの野かひの道になれにけりなのか心とかへるはるこま
賤の男か山路をいつるなとす也爪木の下にむつかたりして
けふもまた誰かはとふとなかめやる岡への松に目くらしの聲
月にこそ山のはかけてうらみしか入目の跡も心すみけり
□□雲を友にて暮にけりこさめそほふる山陰のいほ

山路

夕されは山路にわひぬわけのほる雲よりおくに瀧つせの音
有明の月たにみえず成にけりひはらか下にみれのかよひち
山路わけうちやすむまの椎の葉も旅にしあれば心すみけり
嶺つゝきさゝわくる袖にたまる露みせはや人に旅の物とて
都いてし日數かそへてたれかけふ思ひをこするうつ山のこえ

海邊

夕されは松風さむみ腐なきて濱路さひしきちかの鹽がま
波わくるかゝりやいつれ常陸海のかしまか崎の蟹のもしは火
たまもゆあまの袖かきぬしやたれけに心ある松かうらしま
颯たるゝしかまのあまに宿かりてたくものほかの煙たてつる
た□□ふく□もへのあまの濱□ま□のきた□□沖津白波

禁中

君そすむ千代をかさぬる九重の雲ゐの花のゆく末のはる
君か代に雲かゝれとや百敷のあたりにちりの山となるらん
誰こゝに草の原までかこちけん花みし暮のおほる月夜に
すきかてに思はぬたひはなしつはのふかき情にすむこゝろ哉
鶯のれもや雲井にうつりけん宿はととひし花をしたひて

遊宴

さも社は雪をめぐらす色ならめなむけにみゆるうすものゝ袖
さらぬたに千代をこめたる竹の聲松の調にふきそそへつる
朝夕にかされてそみる君か代の久しきしまのやまとことのは
暮方のかすのあまりを袖にうけてあかねこかけなかへる諸人
春の山秋の野原になくさめてあらるゝものは心なりけり

公事

君かため和田のはらから尋ねきてしるしをみする千代の初春
諸人の猶あらたむるあしたこそ心の春のはしめなりけれ
年へぬる豊の明に色そへて乙女さひすもみゆるけふかな
吳竹の枝も三月の在明に庭まですれる山あゐのそて
ふけぬれは三世の佛の数ならぬ大宮人の名をもきくかな

祝言

幾千代か雲井の影をます鏡はこやの山におさまれるこゝろ
ことにいてあたにはいはし宮ゐする下つ岩れの動きなき世を
色そはん千入の末を長閑なる春のみやまの嶺の若松を
いか計り恵あまれきみよなれやたかやの軒のかやもしとろに
おりにあふ言の葉迄もきこえあくる身はしも乍ら思ふ千年を

詠百首應 製和歌

散位從五位下賀茂縣主季保上

霞

春といへは外山の霞たちけりうすゝみわたるしからきの里
岩そゝく雪の下水もろからに霞なかるゝはるのやまかせ
海原やしらぬ行衛はたちこめて霞を殘る沖津しら波
越きつる山路の末をみわたせはいく里こむる霞なるらん
なにとなく宿の梢をおもはせて霞にかへるはるの山人

鶯

古巢よりまつ山里に人なれてみやこへかよふうくひすの聲
さひしさはならひにけりな雪ふかき古巢に残る谷のうくひす
露結ふ籬の竹につたひきて軒に玉ちる鶯の聲
匂ひくる梢はしるし鶯の聲にそまよふ明くれのそら
きくよりも哀やまさる鶯の春ふかくなるゆふくれの聲

花

かへるさもわすれぬ花の面影は宿の櫻の木末なりけり
白雲はいくへもこめよ山櫻みえぬも花の色ならぬかは
よしの山ふる木の櫻下はえておなじあつく花さきにけり
をしなへて梢もわかす散おりは花に聲かす松の春かせ
なかわれは雲におほめく高根より散も嬉しき花櫻かな

子規

夜とゝもにまたれてそなく時鳥心となのるひと聲もかな
時鳥おほめくさよの一聲はきゝても人に猶そとはるゝ
名残をはいつちわけまし時鳥おほめくよはの村雨の聲
子規聲の匂ひも契あれや花橋のゆふくれのそら

まつほとわわくかたなきを時鳥たか一聲なきまかふらん

五月雨

さみたれはよこの入江のわたり舟思はぬ山の麓にそよる
五月雨は軒はなよそのなかにて心もほかへかよひやはする
はるくつとく湊をみわたせばしほちもわかす五月雨の比
中々に五月の夜はのくらき雨によの常ならすすむ心かな

一首

草花

風こゆるとわちの末をみ渡せば雲にはのめくたの、かやはら
小男鹿のいる野の尾花打なひきさもあらましにたれ招くらん
わけわふる露は袂にしたひきて色こそみえぬまの、自萩
見わたせば露ものこらぬあき風に猶玉まきは野路の葛原
秋ふかき霧のまかきな人とは、まつこたふへき萩のなと哉

月

なかむれば更行夜はの雲消て月吹わたすあまの川風
雲の波はるかにきえてもろこしの空へたてなくすめる月かな
なかむれば袖にくる、心こそ月のかつらのいろはそめけれ
すみのほる心はいかに秋のよの月になる、は袖のしら露
ふかき秋の哀しらる、なかめまで残りはてぬる在明の月

紅葉

一枝をしくる、山にさきたて、こゝろとしける紅葉をそみる
龍田山もみちに残る常葉木のみとりもふかき秋のいろ哉
もみち葉にしくる、雲のはれゆけは縁にのこる山のはの空
色にあまる心な人にみせんとや鹿なく山の嶺のもみちは
身にしめし色より外の梢までうつりはてぬる秋のくれかな

雪

けぬか上に積るはかりのなをかへていくよふりぬる雪の白山
とふ人の跡にそみゆる降雪は心の道にたえけるものを
山路までひとへにこむるその、雪に空さへしるし在明の月
中々になにかめのみちははれにけりまかきの竹の雪の下ふし
こしかたはいくへくの雲に跡たえてかへる山路の雪をみるらん

氷

いつしかと氷るみきはや朝風の吹すきてゆく跡をみすらん
ながくこほれる程はみゆるかな木のはにたえし山川の水
池の波むすひはてつるみきはより庭までこほる霜の下草
おち瀧つ河をひまはし玉こえて思はぬ枝も氷しにけり
吹わたす夜半のあらしの音さえてこほるすかたも玉川の水

神祇

うつります五十鈴河上影きよみてる目になひくいせの濱萩
石清水月に契りやふか、らん秋のなかはにわきてうつれる
みあれ山いくよの雲は嶺こめてしらぬ昔のけふにあふらん
沖つ風更行月の影さえて色まですめるすみよしの松
宮柱はこやの山にたてそへて神代もおなし君かまに

釋教五藏經

布施

山風に花も紅葉もまかせてんそれも心にとまりやはせぬ
世をうみわたたりはつへきしるへとや貝とる浦にかゝる舟人
忍辱

精進

もみち葉にあからめなせそしたふかき岩のかけちの秋の山人

禪定

苔ふかき杉のとほそに跡たえて心のともにすみそめのそて

曉

哀しる心のその数なれやほのくあくる鳴のはれかき

なにとなく思はぬ外の情かないる山人の月にゆくこゑ

さめてける夢の夜床の明かたに露やはちきる手枕のそて

またきかす稻葉さかふく小山田のこやのれ覺に嵐ふくなり

すきにしも今行末のあらましも心につくあけかたの空

暮

み渡せばあられもまつそかよひける夕日かくるゝ山かけの里

たゝならす雲のけしきをなしてゝくるゝは空も物や悲しき

思ひやる心はいつちかよふらんなかめのくれもゆふくれの空

とまるへき野山か末の里なれや柴の葉こしに煙たつなり

心こそ哀をそへてすみにけれ月まつほととのゆふつゝの影

山路

よそにみし雲にまちてやかゝるらん花にわけける春の山ふみ

わすれすも嵐にはらふいはか上にしはしきれつる秋の山越

岩ねふみ眞柴わけける山人の袖にこほるゝ嶺のさゝ栗

昔まで思はぬ袖もしほるらし時雨にまよふうつ山みち

なにとなく遠さかりけるかたみかなこえくる嶺に残る白雪

海邊

波かゝる浦の笛やの磯枕こゝろのほかの袖もぬれけり

雲の波はらふ嵐に月さえてまゆに霜ふるあはの白雪

たよりまでさひしき蟹のすまゐかな玉もかりしく磯の松陰
みさこゐる遠あら磯になとすみて波よりひく浦の松風
雲まよふ沖の波まのなかもよりほとなくうつるとなつ嶋山

禁中

朝日もるかけものつけし九重のみかきの竹の春の一しほ

なかくに情そふかきとのもりのきよめに積る花のちり山

たか袖にかけてしむらん梅つほの軒端の枝に風わたる也

たかくひなく思ひそふる萩の戸に村雨そく花のぬれ色

萬代にすむへきかけはみかは水にこらぬ末なくみてしる哉

遊宴

流れくる岩まによとむさかつきに心のかけやまつうつらん

櫻人こゑにかなつる袖のうへにやかてつゝめと花のちるらん

こよひはと月にちきれば諸人のなかもや空にむすほゝるらん

なにとなく嵐ふくよの笛の音にあつまの琴をかきあはせつゝ

色にそむ大和ことのはかさねをきて心の底なとみにみえぬる

公事

長閑なる春のなかにひく駒はまつれり人のけしきにそしる

諸人のかはりてわたるかすみえておるしのみつき末とをる也

雲の上にうつす星合の影みれば水にもふかき契りをそしる

天つ人袖ふ跡のけふなれや乙女たちまふ雲のかよひち

雲の上の有明にうつる庭の面に月影こほる山あゐの袖

祝言

たのもしな老せぬかとのうちなれば幾萬代のあるしなるらん

照す日はあきつしまれの空はれてよつの海にも波そのとけき

吹風ものつけくわたる御代なれば鳥の聲まておとろかぬ哉

行末をはこやの山に契りきて千代にちよそふ嶺の若松
君か代は人の心もなよはれはいのるやしるにまかせつるかな

詠百首和歌

女房宮内卿〔上〕

かすみ

春といへは日影もしるきけしきより心までこそ霞そめけれ
岩橋のよるの契りや思ひ出る霞にこもるかつらきの神
なかもやる轡路の末は雲消て霞へたつる淡路しま山
心なきわかためいかて残るらん霞のほかの春のあけほの
ゆくさきの里をしらす夕煙霞のことやかたなりぬる

うくひす

春も猶谷の古巢はうつもれて雪より出るうくひすの聲
しらてきく人もやあらんうくひすの春にさきたつ青き鳥とは
軒ちかき梅のたちえやしるからん思ひの外にきなくうくひす
鶯のなこりもとめぬ古巢かなまたかへりくるおりもこそあれ
世中を思ひすてつるすまゐるまで残る心のうくひすのこゑ

はな

まちえても猶しら雲とみゆるかな花にさきたつ心ならひは
たつねこぬ人こそしらね花さかり谷にもいつか春のよそなる
春の夜の夢路にかよふ面影や花のさかりのうつゝなるらん
花ゆへはなかも庭に積りけり風のつらさは末もとならて
散つる木の下をまた吹風によせてかへらぬ波をたちける

ほといきす

時鳥うの花さかぬ宿ならはさのみやはとはおもはさらまし

さりとともたれやはせぬ時鳥花櫓のにはふゆふくれ
郭公さつきの空の雲まよりこゑもかすみとをさかるなり
子規きくたにわかぬ一聲のおもかけのみそあり明のそら
足曳の山時鳥いとひけんむかしをしるはれさめなりけり

さみたれ

山の井のすそわけ出しさゝれ水いつくなるらん五月雨の比
五月雨におもはぬみなのしるしかな河そひ柳のこる木末は
水そこになりやはてぬる五月雨に岩こす波の音しのふなり
五月雨の雲にもかすみなめかな遠山もとのゆふくれのそら
五月雨に玉嶋河の水越て岸のいはれのとをさかりぬる

くさのはな

れさめより秋の哀はかよひけり萩の上葉を風にまかせて
外山なるならの葉まてははけしくて尾花の末によはる秋風
女郎花野へなひとつにすみなしてまかきに残るいろをみる哉
そこきよき野澤に秋の色みえてわけぬ水さへ萩か花すり
武蔵野や色をおもふ藤袴そのむらさきのゆかりなられと

月

すめはとて宿にはとまる心かはまつこそおもへひろ澤の月
またしらぬ姨捨山も月といへは心にならすさらしなの里
あさち原露のみわけてとふ人の心をみゆる夜半の月影
なか／＼に一むら雨のうき雲は月の光をみかくなりけり
数ならぬ賤かたな井の水までも心はかりはやとす月かけ

もみち

霞ふるみやまのいはをとはしとやまさきの桂色にいつらん
龍田山嵐や嶺にかよふらんわたらぬ水もにしきたえけり

山のはによこ雲わたるけしきよりまかふ日影や嶺のもみち葉
秋霧の立田の山をこめつればたえまにもるゝ色をみるかな
散かゝるよその木の葉をさきたてゝ嵐そ松の色をそめける

ゆき

さひしさをとひこぬ人の心まであらはれそむる雪の明ほの
春はなを花をのみこそ思ひしか雪にはわかぬ梢なりけり
なめこし千種の秋は霜かれて野へはひとつに雪の明かた
降雪に袖うちにはらひこき行は水にはうかぬ花そちりける
みやまへや同じ雪けの空ながら袖のみさゆるふるさとのいほ

こほり

うすこほりしたとけ出る谷川の音にそかふ峯の松かせ
冬の池は月すむ夜半にさえてめて影よりむすふうす氷かな
をとつるゝかけひの水はつらゝゐて煙はかりそたえぬ山里
ひまとめて山田のこせりつむ人の袖さへこほる雪の下水
ゆく水を結びとゝむるつらゝ哉おろす嵐やあせきなるらん

しんき

五十鈴川なかれ久しき御代とてや天てる神はかけをとめける
住吉の松のしつえにしらゆふの風もたむけの波やかくらん
かたそきのゆきあはぬまに風さえて霜より先に月もをきけり
三輪の山とはれぬ宿に神さひて幾代になりぬ杉の秋かせ
貴舟川瀧つ岩れにちる玉ややはらけてすむひかりなるらん

ほうもん

あさひ山まつてる嶺の小松原よそにくちぬる谷のうもれ木
やとせまていはての森の下もみちふかき心のいろそゆかしき
法のため身にもかへけるから衣くちし袂はかはかさらなん

思ふより心のやみははれぬへし鷺の高根にありあけの月
かりそめの夜半の煙と思はすは鶴のはやしの名こそおしけれ

あかつき

霧のうちに影ほのめかす有明の月にそかふ春のなめは
まちえたる鐘より後も明やうて又夢をとふ鳥のこゑかな
みるまゝに閑行空のけしき哉遠山のはのひまもあらはに
思ふこと有明かたの月すめはしくれぬ袖に露をいゝるせし
折からや春にもかふ哀かなかすまぬものをあけくれの空

ゆふくれ

さゝかにのはかなくみゆるすまひ哉軒のしのふに宿を定めて
物思はぬ人はたへける山里に我身ひとつの秋のゆふくれ
是もけにさひしかりけり目くらしの聲より外にとふ人もなし
夕まくれことそともなきなかにそ秋の心はのこらさりける
さても又たえける物を暮かたに雨そほふれる山かけの庵

やまみち

葛城やかけちのそこはかすかにて雲よりかよふ春の山ふし
いかにせんしほるもまかふ暮方を花ゆへなれぬ山路なりせば
旅人のやすむたよりとなりけりさか越はつるならの下陰
麓をはなれめすつる山路かなかすまぬ里のかすもほのかに
雪つもる谷のこすけを思ふ哉めかれなといはのかけちに

かいへん

み渡せば雲より波にこき出て朝日にちかきあまの釣舟
とまりとて厭はぬ物を月をみはふけぬの浦に名こそおしけれ
波まよりほのくかすも光かななめめの末やあまのいさり火
一夜たに松のあらしを思ひしになるればなれぬあまのすむ宿

濱千鳥鹽風よする波の音にもるゝ聲さへとなさかるなり

きんちう

昔より流絶せぬ御河水いく萬代のかけうつるらん
隈もなき月の光にみかゝれてくる戸もいつら名にしおひけり
うしみつといふに昔そしられけるれそすきにける人の心を
あられふる玉しく庭に影さえて月すみわたる雲のかけ橋
風まぜに庭もはたらにふりにけりけさこそみゆれ初雪のそら

あそひ

春にあふ跡としるきけしき哉むれあてうたふこやなきの聲
散花の陰にむれあてしきしまやまとことのはおもひくしに
笛の音やことの絶まもさひしきに名残をのこす嶺のまつ風
行末も思ひ出ある跡なれやみゆきふりにしきよしのゝ瀧
大井川秋はむかしのおなし色の心にうかふみつのふれかな
くし

百敷やかもの羽色の青き馬をいつしかみよとひきそつらぬる
ともかくるゐてのもろやの争に月さへはやくいるにそ有ける
かさしとるみきのかはらけかさなりて立まふ袖を亂れぬる哉
色かへぬためしなけふはひきそへてあやめのこの末も遙に
雲のうへのをとめの姿みるおりそよしのゝ宮もおも影になつ

いはひ

行末をかれてや月のてらすらんはこやの山のよろつ代のかけ
君か代は相生の松も年をへてもゝたひ春の色やかはらん
よもの海を尋ねはてゝはたへとも限りもしらぬ御代の末哉
君か代は猶たくひなきためしかな瀧の眞砂のかすはしるとも
山路ゆく菊の下水よにすめはわれも千代にとうつすかけかな

詠百首和歌

かすみ

霞たつ梢はかりや春ならんまた雪さゆるみよしのゝさと
相坂の山たちこえし春霞都の空そとまりなりける
都にと春たちぬれはをしなへて霞かゝらぬ山のはもなし
うちなかも更行空やかすむらんおほろになりぬ春のよの月
なかわれば行末となき霞かなのとけき御代の春のみそらに
うくひす

いつしかときかまほしきは山里に春をつくるうくひすの聲
鶯は木のまをすくる春風に今や古集を思ひたつらん
やよいかに竹のよとは立出て花もにほはぬ野へのうくひす
降雪は花にまかへて咲やらぬ梅のたちえにうくひすそなく
軒の梅のにはひなさをふけしきにて先をとつゝ鶯の聲
はな

かれてわれ花よりさきにいりぬれば幾重もかすめ三芳野の山
杉ならぬ花の梢をしるしにて春の宿をも人はとひけり
ちりはてん後をはしらてくやしきも心のまゝに花になれぬる
あすよりは嶺の櫻も嵐山春とともにやつきんとすらん
ちりぬれとあかぬ匂ひに櫻花木のもとから春はくらしつ
ほとゝきす

時鳥まつよのかすの積るかなむなしくあくる空をなかめて
子規つれよりもけにまたるゝは花橘のにはふゆふくれ
なかゝにまちつるよりも郭公心くたくる一こゑのそら
きゝしれとおもはせかほに子規杜の梢のほかになくなり

女房越前(上)

夏のよもなか、りけりな夕くれの山時鳥ひと聲のそら

さみたれ

うちしめり花橘そかほるなるさ月の雨のゆふくれのそら
五月雨は庭もひとつに水越て池のあやめの葉すゑたになし
君くやとまつ夕暮の五月雨はなめわつらふ物にそありける
さひしさに遠の雲井をなかわればとりたにみえぬ五月雨の空
五月雨はふしみのを田のあせつたひいくかに成ぬ人も道はて

くさのはな

露ふかきまの、うら萩咲にけり行かふ人の袖のはなすり
はやくみし人の心やあたしの、雲にしほる、女郎花かな
秋の、の千種の色にと、めつる心や花の露とをくらん
秋風に花やちるらん宮城野の小萩が原に鹿そなくなる
行秋をまねきかれてや花薄はてはしとろにおれふしぬらん

つき

いてぬより月のすかたをおもはせてまつ雲拂ふ嶺のまつかせ
すむ月のあはれのこらぬ秋のよに萩ふく風を猶いかにせん
たれならん更行月のくまなきをわれもみるとそ衣うつなる
いく秋の月のか、みと成ぬらんかけみる人のおほさはのいけ
なけきけん昔の人のけしきまでおもひしらる、姨捨の山

もみち

きのふまで青葉の山とみしものをけさや時雨に色かはるらん
はれゆけは猶しくるゝなま顔にまた色うすき嶺のもみちは
なにをかは思ひまさし紅葉はの此色なからときはなりせは
秋ふかみしくるゝまゝにのみちはは皆くれなゐの衣手のもり
龍田山紅葉をさそふ風すきて秋は雲井にかへるかりかね

ゆき

さらすとしてたれかはとはん山里のみちたえをむるけさの初雪
つの國のこやもあらはに霜かれて芦の下葉にまた雪そふる
さらにまた花の春にそ成にける志賀の山ちの雪の明ほの
すみかまの煙を宿のしるへにて雪にもとはんをのゝさと人
いほりさすかた山そはの通ひちもそこともみえぬ雪のゆふ暮

こほり

みきはまてよせぬ波こそ立かへれ氷にけりなしかのから崎
みなと川芦まわけゆくそは舟のさほにしらるゝうす氷かな
松陰のいは井のつらゝひまなくて結ひし水のけしきともなし
さゆる夜は池のつらゝやむすふらん更行儘にをしそなくなる
水底も氷とちてや冬くれはなかれもやらぬ玉川のみつ

しんき

五十鈴川きよきなかれは君かため萬代すめと神そちかひし
神風やもゝえの松にゆふたすきみことなかけぬ時のまそなき
もらすなよ君か八千代にあふひ草かけてそたのむ神垣の内
雲井より日吉の神もうつりきてはこやの山に萬代そへん
神代より神や植けん萬代のしるしにたてゐるみわの杉村

ほうもん

すまの浦の蟹のいさり火たきすてゝくゆる煙を空にたてつる
なつさはし花の香ぬすむ山風におなしたくひになりも社すれ
思へたゝ心なきさをしたにもよそのつまには流れあふかは
忍ひつゝ心の水にせきとめてうきたることの葉をはなかりけれ
のちのよのつみむすふなる花にふ露の情もよしなかりけれ

あかつき

おとろかす尾上の鐘に相坂のゆふつけ鳥もいまやなくらん
かきくらしふる白雪のつもるよは庭のおもよりあくる東雲
霧ふかきさほの川瀬をすきゆけは曉かけて千鳥なくなり
何ゆへの名残ともなくいかなれは明めとつくる鳥のれのうき
明行とあかね名残にいりやうて雲にやすらふ東雲の月

ゆふへ

しつかなる外山の里のけしきかな鳥も梢にねくらさためて
行末のおほつかなきは山のはのくれぬる空にかへるかりかれ
秋はな、心よりおく夕露を袖のほかともおもひけるかな
夕暮の空までふくる夜半ならはたえてもいか、うち眺むへき
すみなれぬ人にみせはやすかるなく裾のゝ里のくれかゝる程

やまみち

いさゝらは立かへりなん旅衣めなれぬ山はくるしかりけり
たつめれはまた里遠きあらち山越もはてぬにくれんとすらん
これなれや夢にも人にあはすしてうつゝにこえしうつの山道
袖になく露うち拂ひ月影とともにすきゆくさよの中山
行末も跡も八重なる雲井にてふむ空もなき岩のかけみち

かいへん

思ひしる一夜あかしのうきれしてつねにすむらん秋の心を
鹽風やあらき濱邊に宿とりて枕になるゝ波のをとかな
興津風夜さむになれや田子の浦の蟹のもしほ火たき増るらん
二見瀉松吹風に雲きえて月の影みつしほあひのはま
思ふにも猶まさりぬる哀かな千鳥とわたるすまの明ほの

たいり

九重に匂ひひさしき櫻花やとから風もちらすなりけり

心あれやきよめし庭を眺めつゝ花にやすめるとものみやつこ
萩の戸はまた花さかす雲井には風の音にや秋をしるらん
いかばかり心のうちもはれぬらん月になれたる雲のうへ人
荒き風みかきのほかにへたてつゝ花も紅葉ものとかにそみる

あそび

皇のおまれくめくむおりにあひて萬代となる糸竹のこゑ
あつき弓春のみ山の千代かけて思ひくゝのまゝをそする
諸人の波にうかふるさかつきに君かちとせのかけそさしそふ
なにとなく心やりたる諸人のけしきにみゆる君か御代かな
思ふとちいくよれぬらん花かけや昔のむしろに袖をかされて

くし

諸人の雲ゐの庭にうちむれておきふし君はいはふ初春
嬉しさは大宮人の梓弓やを萬代のためしにそひく
みたらしの河へにさよや更ぬらん霜さえわたる山あゐの袖
あかほしの雲井にすめる聲にてそあまのとあけし昔をはしる
皇のめくみあまれき御代なれや色なしとてすてぬことの葉

いはひ

萬代もすゝしかるへき心かなはこやの山の常葉木のかけ
みかさ山松のすゑより出る日の千年の□□の光をそ□す
これやこのさしての磯の濱千鳥今よりさらに八千代とななけ
色かへぬ竹のみとりも君か代にくらへて人のおもふものかは
君か代のためしにおふる岩根松いはれとしるし千代の氣色は

詠百首和歌

神主康業上

霞

いつしかと春の明行山のはにたなひく雲は霞なりけり
 よしの山梢に色のかつみえてかすみそ花のしるへなりける
 天原ふしの煙の春の色のかすみになひく明ほの、そら
 からくにやいく霞までなからんまつらの沖の舟のかよひち
 をしなへて春をこめける霞かな明にし目よりくる、けふまで

鶯

谷の戸を冬のあらしにたゝかせて春のあくるにうるうくひす
 春くれは谷の氷の岩まよりうち出る波に鶯のこゑ
 春風の梅よりつたふくれ竹の葉末になひくうくひすの聲
 花も匂ふ春のとしひきえやうてかたふく月に竹の一聲
 きゝすなく春のすそのゝむら柴にまた聲やとすもゝちとり哉

花

吉野山おくゆかしくもたつぬれば花より雲にうつりゆくかな
 とはしたゝ志賀の都の櫻花ちりなは庭をなをゆきてみん
 たつねくるたかまと山の花さかり雲とみつるはそらめ也けり
 みよし野の花なりけりと思へとも雪ふるからにはるゝしら雲
 かせをいとふ心も今はあらしかな花の波こすしら川の里

時鳥

郭公人よりさきにわれきかん聲をならしの岡はいつくそ
 うの花のかげにかくれし時鳥けふたち花の梢にそきく
 さくからにうれしくもあるか時鳥たつね生田の森の一こゑ
 時鳥まるとに橋軒はあやめいかてかこゝにきなきさるへき
 軒の雨の宿とふよりも時鳥かはける聲に袖のぬれぬる

五月雨

富士のれの煙は雲にきえにけり清見か波の五月雨のころ
 五月雨はいつとなきさにしほたれてかつかぬ袖をかつく蟬人
 心はれぬ人やうれしと思ふらんたくひになれる五月雨の雲
 人は又いとひやせまし庭の草にあなところせの雨のけしきや
 水こえてみるもかひある五月雨はなからのはしの跡の白波

草花

秋風よなと萩にしも契りけん萩女郎花なひかすやあらぬ
 故里の萩のにしきなかへりきてみるに心のとまりぬる哉
 萩かえに松風かよふ住吉のとを里小野の夕霧のそら
 小男鹿の聲かれゝゝになるまゝになれもしほるゝ女郎花哉
 藤袴きる人あらは片岡のもすのたちえやはしのかりきぬ

月

いかにせん月まつほととの山のはの松のあらしに鹿のなくなる
 姨捨の山より出る月をみて今さらしな袖のぬれぬる
 ふけゆけは煙もあらし鹽かまのうらみなはてそ秋のよの月
 秋そよく風も涙にしほれけりおきのまかきに雨のよの月
 いつまでか涙くもらて月はみし秋まちえても秋そこひしき

紅葉

ものおもふ人のためとや龍田山うちしくれては色かはりゆく
 色ふかき杉間のもみちたつれきて秋のしるしを三輪の山本
 みむろ山きゝのもみちや立田姫神にたむくる錦なるらん
 紅葉はをちりかもくるとまぢくれて音を時雨にわきを兼ねる
 ちりかゝる嶺の紅葉にそめられて嵐は松の時雨也けり

雪

石上ふる野の雪の鶴ほらけかけそふしての色そさむけき

目にそひて秋のなこりそうもれゆく雪降山の松の下かせ
かよひなれてさこそは冬と思へとも猶雪ふかしひえの山本
なかむればわか山のはに雪しろし都の人よあはれともみよ
跡つかで消ゆく庭の雪をみて宿をも身をも思ひしる哉

水

夜をさむみ志賀の浦波氷あてなからの山に嵐をそきく
我宿は池のつらゝに鳥もこす人めは庭の草にかれつゝ
廣澤の池の水にすむ月はなにか光をみかくなりけり
すはのとを音せてわたる嵐かな波は氷になゝはこそあらめ
いつしかと涙の氷打とけて年のうちにそ春はたつへき

神祇

日の本は神のみ國と聞しよりいますかことくたのむとなしれ
我國をまもるは神のしるしかなをひえの杉やみわの山本
ふたつなき八年の法をまもるとてなゝます神は跡をたれける
君もしれみのりの花のゆふしてをかけても神にいのる心は
嬉しくもたのむ日吉の光をははこやの山の嶺におさめて

釋教

あさくなるみのりの水を思ふとてふかくも君をたのみつる哉
さとりえて西に心なかくるかな池のはちすにのりのしら波
月影のうつれる池の心よりあるなむなしとさとりゆく哉
蓮こそ野にも山にも咲にけれ佛の道はこれよりそゆく
たゝ獨殘りて人をすくふへきあみは阿彌陀のなにこそ有けれ

曉

かつらきやと山はかすむ山のはにまた雪しろし春の明ほの
難波かた哀もふかき霞かなあし火たくやの春のあけほの

初瀬山心も空に成にけり雲に風まつはるのあけほの
今さらにおとろかれぬるなかも散花のよしの、春の明ほの
歸る鴈秋をたのむの聲す也月に花みる春の明ほの

暮

住吉のしきつの浦による波の松風あらふ秋のゆふくれ
東路や月のさかりをななめきてきよみか關の秋の夕くれ
松風はいつくもおなし聲なるなかつの宮の秋の夕暮
花の色をななめすくれは虫そなくわかしめしの、秋の夕暮
萩に鹿かやになく虫心せよ野寺のかれの秋のゆふくれ

山路

すきゝつる旅の哀を人とは、月に越こしきよの中山
風ふけはたかしの山の白波にひとあたりして誰かこゆらん
契りなくけふのうつゝ、もうつの山山ちたえなはうたゝれの夢
あくかれし花のふゝきにすぎなれて雪の空にも志賀の山越
心あらは夜にはこえし龍田山昔のあととほきくさへそうき

海邊

思ひねのさよもふけゐの浦風に夢路たえぬる波の音哉
かよひくる浦風さむし旅衣生田の小野の秋のまくらに
明石瀉嶋に朝霧はのゝとこき行舟の跡をしそおもふ
波のうへの物の哀の通ひちは千鳥とわたる淡路しま山
みればけに行衛もしらぬまさこ哉興津鹽風吹上のうら

禁中

みよしの、山もかひなく成にけりみはしの花の春のけしきに
旅に出しその八橋はわたられと心すゝしきみかは水かな
宮城野を思ひ出るを哀なるけふ萩のとの秋の匂ひに

ひまもなき跡を哀とみつる哉大内山のけさのはつ春
これをみん人は心そみかくへきおほえのむらのいにしへの跡
遊宴

もゝの花うかふ心にまちそみるあふむのつきの石にさはるを
天川光をかはす星なれやけふもてあそふしら菊の花
心ありて苦むす岩を打拂ふ人の情にもみちなそたく
庭の松のことしらふなる風の音に打あはせてもとる拍子哉
秋のいねのおさまれる代の嬉しさは春のあそひの鞠小弓まで

公事

あしけなる馬引けふのわかなにはとれりめすこそ便也けれ
百敷や賀茂のみあれのしめのうちに佛の身をも猶すゝく哉
相坂にけふくる雲の上人は月にのりてそ駒をむかふる
雲の上はかさしの花に雪散てかもの河瀬に月そさやけき
となふなる三世の佛の名のかすをいく千代迄か君かかれん
祝言

雲の上によはひゆつると鳴鳥は君か千年を空にしれとや
萬代の龜井の水を結ひをきしなけれ嬉しき世にもすむ哉
霜やたひなけともかれね竹の節のかためてけりな君か千年は
君か代は限りもしらすはま椿ふたゝひ色のかはるのみかは
身にしめて君をそおもふ神路山もゝえの松の千代のあらしに

建仁三年五月廿五日以大藏卿本書寫校合了

右正治二年御百首以一古寫校合了

群書類從卷第一百七十一

和歌部廿六百首五

内裏名所百首

建保三年十月廿四日

作者

女房順德院

參議定家卿

俊成卿女

宮内卿家隆朝臣

前丹波守知家朝臣

散位行能

題

春二十首

音羽河山城

春日野大和

手向山同

三嶋江攝津

葦屋里攝津

忍山陸奥

田籠浦越中

玉嶋河肥前

三輪山同

伊勢海伊勢

鹽竈浦陸奥

吹上濱起伊

水無瀬河山城

末松山陸奥

高砂播磨

葛木山同

志賀浦近江

宇津山駿河

湯等三崎同

大湊浦伊勢

夏十首

大井河山城

御裳濯河伊勢

大江山丹波

松浦山肥前

秋二十首

泊瀬山大和

宮城野陸奥

宇治河同

高圓野同

清見關駿河

佐良科里信濃

明石浦播磨

冬十首

清瀧河山城

片野河内

浮嶋原駿河

鏡山近江

信太杜和泉

伊香保沼上野

難波江攝津

龍田山同

水莖岡近江

常盤杜同

伊駒山河内

武藏野武藏

白河關陸奥

阿武隈河陸奥

小鹽山同

田養嶋攝津

安達原陸奥

猪名野陸奥

天香九山大和

美豆御牧山城

須磨浦攝津

小倉山山城

三室山大和

生田池攝津

伊吹山近江

野嶋崎出羽

住吉浦攝津

有乳山越前

四幡山美濃

戀二十首

伏見里山城

筑波山常陸

高師濱和泉

濱名橋遠江

佐野舟橋上野

緒斷橋同

二見浦伊勢

雜二十首

芳野河大和

還山越前

鳥羽山城

布引瀧攝津

生浦伊勢

角太河武藏

會坂關近江

霞浦常陸

袖浦出羽

阿波手杜尾張

磯間浦紀伊

安積沼陸奥

三熊野浦紀伊

名取河陸奥

石瀨杜山縣

益田池大和

志香須香渡參河

守山近江

松嶋陸奥

鳴海浦尾張

不盡山駿河

飛鳥河大和

吹飯浦和泉

玉河里

嵯峨野山城

若浦紀伊

春二十首

音羽河

音羽河山にや春のこえつらむせき入ておとす雪のした水

女房

なとは河せき入し波の打出てはるきにけりとみえもするかな

行意

音羽河雪けのなみも岩こえて關のこなたに春はきに鳧

定家

家衡

なとは河せきいる、水も氷とけて春やなそきと打出るなみ

俊成女

水ゐし岩間に浪の音羽河なとに都を出るうくひす

兵衛内侍

山風に打出るなみの音羽河水をわけて春はきにけり

家隆

相坂の關のこなたになとは河音にきゝつるはるはきにけり

忠定

春はきぬといはせのなみの音羽河水打いて、山かせそふく

知家

つらゝゐし岩間の浪のなとは河けさふく風に春やたつらん

範宗

岩間より打出る浪の音羽河こほりの下に春や忍ひし

行能

春のたつ岩間のなみのなとは河ふかきあはれの見えもする哉

康光

降つみし雪けの水の音羽河いかなるはるの色に出らむ

玉嶋河

玉しまや河せのなみの音はして霞にうかふはるの月かけ

わかあゆつる袖も霞にまかふまで玉しまかはに春はきにけり

梅かゝや先うつるらんかけきよき玉しま河の花のかゝみに

まつらなる玉しま河の春かすみ家路しらすもへたてきにけり

いづしかと水のゐせきもらす也たましま河のせゝの春かせ

いく千世の光やかれてかよふらん玉嶋河の春の月かけ

玉しまや新嶋守か今年ゆく河せほのめく春の三日月

浪きよき玉嶋河にうつりきて春の光も色に見えける
たま嶋の此河上もしらなみのしらすかすめる夕暮の空
石はしる玉しま河の清きせにはるの光をちらす月かけ
のとなるはるの光やみかくらむ玉嶋河は浪もきこえず
みとりなる春の光そくもりなきたましま河にうつる月影

高砂

浪まより夕日かゝれる高砂の松のうは葉はかすまきりけり
時しあれば霞にけらし高砂の松のうは葉も色増りゆく
それながら春は雲井にたかきこの霞のうへへ松の一しほ
しら雲に霞そふかき高砂のおのへの松の明ほのゝそら
高砂の松もふりこしむかしまでほのかにむすふ春のよの月
たかきこの尾上は遠く成にけり浪まにかすむ松のむら立
舟人のなのかなかめも跡やなき霞にまかふ高砂のまつ
このゆふへ春雨ふりぬ高砂のおのへの松も色やそふらん
高砂の松はかはらぬみとりさへ猶あらたまる春の一しほ
春のたつ磯邊のなみは高砂のおのへにかよふ峯の松かせ
たかきこの松はまたみし色ながら空のみとりに春はきにけり
高砂の松はみとりにはあらはれて尾上にかすむ鶯のこゑ

春日野

春日のや去年の三月の花の香に染し心は神をしるらむ
かすか野は昨日もけふもなをさえてつまもこもらぬ萩の焼原
若菜つむとふひのゝ守春日野にけふゝる雨の明日や待らん
浅みとり草葉もえ出るかすかのに妻やこもれるきゝす鳴なり
花にまかふ峯の白雪消もあへす春日のゝへはわかなつみけり
よるつ代と君もしるらん春日野の若なつみつゝ祝ふこゝろは

わかなはやさもあらはあれ春日野のとふひのゝ守咲や梅かえ
かすかのゝ霞かくれのおもひ草したの思ひのはるゝまそなき
梅のはなそれかとばかりかすかのゝ霞をわけて春かせそふく
君かへむ千代の数つむ春日野の若なそ雪の隙もとむなる
故郷の春日の原に若菜つむ袖白妙にさゆる霜かな
春日野や木のめも春の雪の中にたれ跡つけてわかなつむらん

三輪山

花の色に猶おりしらぬかさしかな三輪の檜原の春のゆふ暮
敷嶋や三輪の檜原の木のまよりまれなる花をふく嵐かな
いかさまにまつとも誰かみわの山人にしられぬ宿のかすみは
浅みとり春のしるしや三輪山霞そたてる杉のあな葉に
たつれこしみわの杉村跡とへはかすみにまかふ春の木のもと
さびしさをいかに待見てうらむらん三輪の檜原の春の明ほの
三輪山春のしるしを尋ねればかすみのうちに杉たてる門
みわの山ひはらの雪のこそふりてかさし折ける跡は見えけり
かさし折跡もふりゆく三輪の山いく世檜原の霞きぬらん
三輪山ひはらときくは昔にてはるはさくらそかさしなりける
山姫のをむるみとりをあかすとや三輪の檜原に春雨そふる
かさしおる三輪の檜原の嵐にもはなこそにはへ春はきにけり

葛木山

浅みとり糸よりかくる青柳のかつらき山のはるさめの空
みしまゝに誰なかわらんかつらきやとよらの寺の春の明ほの
青柳のかつらき山のなかき日は空もみとりにあそふいとゆふ
春かすみかさなる山やかつらきのやまのたかれの櫻なるらん
みれ高き雲に櫻の花やちるあらしそかほるかつらきの山

葛城や高まのさくらかすむともよそにもまかへ峯のしらくも
しら雲はもとよりかゝる青柳のかつらき山にほふ春かせ
かつらきのあらしは今やかほるらん高まのこす雲そ色つく
なとめ子か葛城山のやま櫻かすみにもれしおもかけそたつ
棹姫のかつらき山の玉かつらかすみゝたれてなひく春風
かつらきやたえずたなひく白雲をこのころ花と山風そふく
葛城や高根の雲やかすむらんみとりになひく青柳の糸

手向山

白妙になひきにけりなゆふたすき手向の山に花や散らん
さくらちる手向の山に風ふけは木毎にかゝるよそのゆふして
たつあらしいつれの神に手向山花のにしきのかたもさためす
おしめともねさに散かふ花なれや手向の山のはるの夕かせ
佐保姫の心にそめて手向山八重しく花の春のにしきを
春は又はなのにしきを手向やまねさと散かふ神のまに／＼
秋の色にたちやはなとる手向山かすみの衣花のにしきは
さほ姫の霞の袖をたむけ山みたすな嵐うすき狭を
佐ほ姫に花のしらゆふ春かけてなのか手向の山風そふく
吹風を神やいさめむ手向山おれはかつちる花のにしきを
春の色を誰に手向の山さくらにほひもよそにふく嵐かな
はるを祈る手向の山のやま風にけき散花は神のまに／＼

伊勢海

いせの海かすむしほひのかたをなみかへるや鴈の聲を聞ゆる
伊勢のうみはるかにかすむ浪間よりあまの原なる海士の釣舟
いせの海や玉よる波のさくら貝かひある浦のはるの色かな
いせのうみ春の浦々霞わけて玉やひろはむきよき渚に

よる浪もきよきなきさのすきみまてかひある春のあまの袖哉
伊勢のうみきよきなきさも霞つゝ春はしほひの玉もひろはす
いせの海興津春ひの朝ななきにいつへき程はあまの釣舟
伊勢のうみや浮たる舟のほの／＼と明たつ波にかすむしら雲
いせの海のなきたる朝の春の日にうら／＼かよふあまの釣舟
玉もかるいせを海士の暇なみ長き日も猶あかすやあるらん
伊勢のうみの汐干もしらぬ夕なきに霞をわけて玉やひろはむ
いせの海かすめる方も捨てふうらの鹽貝手にもたまらず

志賀浦

さゝなみやしかの浦風吹まゝに氷をいつる春のはつはな
しかの浦や櫻吹くる山かせに釣する袖は雪とみえつゝ
さゝなみやしかの花そのかすむ日のあかぬ匂ひにうら風そ吹
花やちるひらの高根の山かせにしかのうら波たゝぬ日はなし
いくしほの春のみとりをそへつらむ霞のそこの志賀のうら松
さく花に色なまかへて春は又みきはにちかきしかのうらなみ
しかの海のしらゆふ花の浪のうへにかすみを分て浦風そふく
花の雪みち行ふりの春風にかほりてかへるしかのうらなみ
山風に花やちりかひくもるらん月さへかすむ志賀のうら浪
鴈かれはおなしなからの山こえてかへるもつらきしかの浦浪
里はあれて春はいく世かかすむらん花そむかしの志賀の故郷
しかの浦やさゝなみよする春風にさきたつ花は匂はさりけり

三嶋江

みしま江やなきさにしつむ松の葉の色よりふかき春の明かけほの
ときはいま春に成ぬとみしま江のつづくも芦にあは雪そふる
三嶋江の浪にさほさすたをやめの春の衣の色そうつろふ

なしなへて水のみとりも色ふかし角くむ芦のみしま江の春
かへる隣雲に消ゆく有明の空も霞にみしま江の月
冬のよは水のひまに三嶋えの玉江の月の又かすみぬる
三嶋江の芦のはかけの夕かすみかならずしもや春の明ほの
ほのく海士のなく火の煙かとかつみしま江の霞成けり
みしま江やわかしめなきしまこも草行魚もしらす霞ころかな
三嶋江の芦まに春やうす氷霞もあかすみゆるしり浪
おほろけの春の色とはみしま江の浪もかすめはよとる月かけ
芦の葉はまたうらわかきみしまえの玉江の浪に春やよるらん

鹽竈浦

之詞集

雲の浪煙のなみははれなからおほる月夜の鹽かまのうら
月影のいつくはあれと春の夜のかすみにくもるしほかまの浦
鹽かまやうらみてわたる鴈かれなもよほしかほにかへる浪哉
なかむれば八十嶋かけてあきみとり霞そたてる鹽かまのうら
立まよふ煙のなみにかすみして春の哀やしほかまのうら
春もまたいつかきにけん鹽竈に釣する小ふねかすみへたつる
春よいかに花うくひすの山よりもかすむはかりの鹽かまの浦
大かたもかすめる頃そうすけふりたつはならひの鹽かまの浦
春の色はわきてそれともなかりけり煙をかすみ鹽かまのうら
たちのほる煙や空にかすみらんみとりもふかき鹽かまのうら
夕かすみ煙にまかふ浪のうへやあまのやくてふしほかまの浦
見たせは焼ももの煙立わかれかすめるかたや鹽かまのうら

宇津山

するかなるうつ山邊にちる花よ夢のうちにも誰おしめとて
宇津の山さこそはかれて聞しかと霞たわくる薦のはそ道

うつの山我行さきもほと遠きつたのわか葉に春雨そふる
なしなへてこのめも春のうつの山薦の若葉に道絶にけり
みるとなき夢よりかすみ春の月うつゝもたとるうつの山道
うつの山薦の青葉の春雨にふりぬる道は猶そ露けき
宇津山道ゆきふりのしらくもにたかことつてのかりの玉章
またしらぬ道を霞にとひかれてうつゝも夢のうつの山こえ
わひつゝは夢こそあらめちる花のうつゝもつらき宇津の山越
うつの山薦の若葉の下にたに道ある御代をたのみ行かな
旅人の霞わけ行うつつの山うつる日數に春をすくなき
はらはれとたもにかろき雪そちる花のさかりの宇津の山道

葦屋里

あしのやのなたの鹽屋のあまの戸を、し明かたそ春は淋しき
あしの屋のなたの鹽屋のうす霞まかふ煙を春やわくらむ
芦のやのわかすむかたの遅櫻はのかにかすみ歸るさの空
夜半に残る海士のいさり火ほのかなる芦屋の里の春の東雲
あしのはの霜かれはて、里の名を霞にこむる空の八重ふき
あてて誰かきくらん津の國のあしやの里のうくひすのこ点
春のよのやみにもかよふ螢かな芦やのさとのあまのたく火は
芦の屋のなたの鹽屋に立けふりさとわく春の夕かすみかな
難波女のすくも焼火も打しめる芦やの里に春雨そふる
朝霞かすみにけりなあしの屋のまた霜かれの冬とみしまに
津の國やかすみ葦屋のみこもりに下根も春のうら風そふく
わひつゝもすめは住けり津の國の芦やの里の春の明ほの

吹上濱

夕霞吹上のはまの此頃はみとりになひく沖つしほかせ

藤代のみさを越て見渡せば霞もやらぬ吹あけの濱
 けふそみるかさしの波の花のうへにいとほぬ風のふき上の濱
 朝かすみ花かあらぬか春かせの吹上のはまになみや立らん
 春のよのためしもしるし紀の國や吹上のなみにかすむ月かけ
 これも又花かあらぬか浦かせの吹あけにたてる春のしらくも
 時しあれば櫻とおもふ春風の吹上のはまにたてるしら雲
 夕煙吹上にたてる春かすみそれかあらぬかあまのたく火か
 春なれば花と咲ちる白浪の吹上のはまのおきつしほかせ
 はる風の猶吹あけの濱千鳥色なき花の浪になくなり
 おきつ風夕浪たかく吹あけのはま地やすらふはるの舟人
 眞砂ちる吹上の濱のあかぬ色を都の春とおもはましかは
 湯等三崎

櫻さく山には春もなかりけり湯等の三崎の曙のそら
 ゆらの崎汐干にあまのひろふてふたまらぬ袖は春のあは雪
 花鳥の匂ひも聲もさもあらはあれゆらの三崎の春の目くらし
 夕霞入日を浪にゆらの崎浦ち暮ゆく春のそらかな
 日にみかき風に浪よる玉の緒のゆらの三崎に袖なひくはる
 誰こゝに霞を分て紀の國やゆらの三崎をわたる舟人
 きさきや湯等のみさきに風立ぬと渡る船のぬきもとらなん
 浪かくるゆらの三崎を春みればかすみの袖につゝむしら玉
 かすみゆくゆらの三崎の明ほのに天の戸わたる春のふな人
 行舟のゆらの三崎の夕なきに霞そわたる浪のかよひち
 夕なみの磯たちのほるゆらの戸に玉をそよする春のしほ風
 浪のうへも道ある御代の春風にゆらの三崎をわたる舟人

忍山

都にも花ちりあへぬみちのくのしのふの山も春風をふく
 みちのくの忍ふの山の奥とてもおなしけふこそ春はたつらめ
 岩つゝしいはてや過る忍ふ山心のおくの色をたつれて
 しのふ山みたれて花はほころひぬかきりしられすにほふ春風
 をのれのみ春をひとりや忍ふ山花にこもれるうくひすのこゑ
 思ひいれておほつかなきはみちのくの忍ふの奥も花や散らん
 人とはぬ軒の忍ふの山のはにその色となき春雨そふる
 春の行道のおくなるしのふ山しのへとかすみ明ほのゝそら
 歸る臆おしむ心のおくもなし忍のやまの道をたつれて
 春ふかき忍ふの山の岩つゝしいはれと色にしるき頃かな
 はるのゆく霞の袖の花の香を忍ふの山に尋てそおもふ
 しのふ山峯のさくらや散ぬらんふるすにかへる谷のうくひす

水無瀬川

に御集

ことに出ていはぬ色とやみなせ河かはらし春のやまふきの花
 花とのみなかるゝ水のみなせ河袖つく波に折やかされむ
 春の色ないく萬代か水無瀬河霞のほらの苦のみとりに
 みなせ河花とも水のしら浪にかすみなかるゝ春のあけほの
 君もまた千年や影をみなせ河くもらぬ御代の空の光に
 河水におられぬ色のひさしきな花とみなせの春はのとけし
 みなせ河ありて行水青柳のうつろふかけは浪を數そふ
 すまむ世のなかれも遠し水無瀬河君か御かけの春の夜の月
 みなせ河そこの玉もは青柳の波にしたかふしつえ成けり
 みなせ河ならぬ梢のうつるより櫻のなみのたゝぬ日はなし
 水無瀬川なみも閑にたつ霞にこらぬ御代の末を晴行
 ちる花はうつりにけりなみなせ河山には春の色もなきまで

大淀浦

大淀の浦はのときき春の日に霞そのころ松のむら立
君か代のためしやいつら大淀の浦に色そふ春のひめまつ
つらからぬ松もこふかくおほ淀の霞はかりにかゝるしら浪
もしほやく海士のたくなは春くれはかすみそふかき大淀の浦
あまのかるみるめをよそに大淀の松は霞てかへる浦なみ
月影を待はつらくて大よとのうらたつ波にかすむよの空
大淀の海士の乙女子春されは波のはつほのみるめかる也
おほよとのみるめはよそにかへる鴈聲にもなきぬ心のみかは
大淀の浦よりなちに行かりもひとつにかすむあまの釣舟
おほよとの浦にむれある友鶴のおそふ日かけの空そのとき
大淀のうらみしもなき明ほのも袖をそほさぬはるの月影
霞ゆく春をへたてゝ大淀の浦よりなちに鴈をなくなる

田籠浦

ぬれつゝもしゐてやおらん田子の浦の底さへにほふ春の藤浪
田子の浦の底さへかけて匂ふらん浦のふち浪たゝぬ日そなき
たこの浦の浪もひとつにたつ雲の色わかれ行春の明ほの
さきにけり田子の藤浪うらとけて底さへにほふ春風そふく
春の色にそむる鹽風ふきそへて霞にむせふ田子のうら浪
田子の浦に時そともなき波よりも春は霞のたゝぬ日そなき
早苗とる田子のうら人夏かけてなはしろ水に入江せくらし
ゆく末にたかみぬためと折つらん波さへかきす田子のうら藤
藤の花咲や彌生の夕つく日はるくれかゝる田子のうらなみ
海士人のおりたつ袖やにほふらん藤さきかゝるたこのうら浪
たこの浦にさくや春へのふち浪のなみに立うき花の影かは

田子の浦やなきたるあさの春の日にかすみ出るあまの釣舟

末松山

彌生もや末の松山春の色にいましほのなみはこえけり
今はとてあたし心の春なれやゝよひの空もすゑのまつ山
あつさ弓末のまつ山春はたゝけふまてかすむなみのゆふくれ
はる風に末の松やまなみこさはころしも花のちるかとやみん
立なれし霞の袖も浪こえて暮行春のすゑの松やま
おりしれもあれ末の松山なみこえてつらきなめにかへる鴈金
時わかす末の松山こすなみの花を分てもかへるはるかな
月日さへいつこえぬらん霞こし波も彌生の末のまつやま
今はまた春のなかも末の松名残有明の山のはの月
立かへる浪よりうへのかすめるは末の松山はるやこゆらむ
すゑの松山にかゝれるしら雲のたえてわかるゝ春の色かな
春のゆく末の松山ふくかせにかすまぬなみの花や散らん

夏十首

大井河

大井河御幸ふりにし色なから入江の松に夏はき^{も御案}にけり
おほ井河くたす筏のくれなゐに岩波くゝる秋を社まて
大井河かはらぬおせきをのれさへ夏來にけりところもほす也
大井河おせきにあまる白浪を春になくるゝ花かとそみる
おほる河岩なみはやく春暮ていかたの床に夏はきにけり
大井河岸よりおろす山風にいかたのとこの暮そすゝしき
おほる河やみのうつゝの鵜かひ舟さたかにそさす篝火の影

おほ河はかにや夏をみなれさほさすやいかたの床を涼しき
大の河夏もあらしの山かせにもみちの浪のたゝぬばかりそ
おほ井河深きえまてはまたれ^{とち}とかりの庵とふ夏はきにけり
大の河くたすう舟のかゝり火にふるきなかれの跡やみゆらむ

信太杜

風の音も秋の色にやいつみなるしのたのよりは青葉なれとも
千枝にもる信太の杜の下露にあまる雫やほたる成らむ
道のへの日かけのつよくなるまゝにならす信太の杜の下かけ
ほとゝきす涙を雨とふりそへてなくやしのたの杜のした露
きく人の涙もしけしほとゝきす信太のもりの夜半のしのひ音
ほとゝきすこよひみ山をいつみなる信太の杜に一こゑをなく
涙やはしのたのもりのほとゝきす下草かけてうつるはかりは
千枝に思ふことのはしけみほとゝきす鳴や信太のもりの下露
ほとゝきす今や都へいつみなるしのたの杜のあけかたのそら
空蟬の涙の露や結ふらんしのたの杜の千枝のした草
ほとゝきす今や都へいつみなるしのたのもりに聲を手向て
ことに出て涙やあまるほとゝきすしのたの杜の夜はの白露

猪名野

風わたるゐなのゝをさゝ打なひき露もたまらぬ夕たちの空
五月雨に猪名野のをさゝ露馴て心ともなく秋を戀らし
みしかよのゐなのさゝ原かりそめにあかせは明ぬ宿はなく共
かきくもり夕立すらし有馬山のゐなのゝ小さゝかせさはくなり
有馬山おろす嵐のそよきつゝ秋をもまたぬゐ名のさゝはら
五月雨に小さゝか原をみわたせばゐな野につゝくこやの池水
夏かりのゐ名の篠原折しきてみしかきよはのいやはれらるゝ

かりれせむゐなのゝ小笹露ふかし跡なき山のゆふ立の空
ゐな野行かせに螢やみたるらんこほれて消ぬ玉さゝのつゆ
風さはく猪名野さゝ原夏の夜のみしかき夢を結ふ白露
夜をかされゐなのゝをさゝふしのまもなくや五月の山郭公
かりにきてゐなのゝ小笹露ながら結ふ枕にあくる空かな

御裳濯河

夏のよも涼しかりけり神風や御もすそ河にすめる月かけ
御裳濯の河せ涼しき波のうへに神代くらぬ夏のよの月
月宿るみもすそ河のほとゝきす秋の幾夜もあかすやあらまし
神かせや御裳濯河の夕すゝみ君か千とせの秋のきぬらん
かみ風に雲はれゆけば夏のよも月かけ清くみもすその浪
やはらくる光はすゝし神風やみもすそ河の夏の夜の月
夏引のいともてをれるななき日は御もすそ河の千世も住らし
こね秋を御もすそ河の夕かけつかけてゆふへの浪を涼しき
をのつかから衣手涼し神風やみもすそ河の夜半の月かけ
玉くしけはつ色なひく六月や千世までかゝれみもすその波
夏衣みもすそ河のせになひく玉もかりれの床を涼しき
なつころもみもすそ河の神かせによろつ代ちきる水のしら浪

伊香保沼

まこもかるいかほの沼のいかばかり浪こえぬらん五月雨の比
こなきうへしいかほの沼のあやめ草長き程をも誰もとめけむ
から衣かくるいかほのぬま水にけふは玉ぬくあやめをそひく
いかほのやいかに程ふる五月雨に沼のいはかき浪もこすらん
かけくらきいかほの沼は夏草の露のみきは月そやとれる
思ふ事あやめの草のなきれにいかほのぬまのいかで残らむ

五月雨にいかほの沼のあやめ草けふはいつかと誰かひくらん
岩かきもみこもりふかく成ぬらんいかほの沼の五月雨のころ
さみたれにいかほの沼のあやめ草かる人なみにくちやはて南
おりたちて引手に夏はなきの葉のいかほの沼のいか、涼しき
蛙なくいかほの沼にすむほたるもゆる思ひにれをそあらそふ
水鳥の玉もの床やしほるらんいかほの沼のゆふたちのそら

天香九山

に御集

白妙の衣はすてふ夏日のそらにみえけるあまのかく山
吹風に五月雨はれぬ久かたのあまのかく山ころもかけほせ
さみたれは天のかく山空とちて雲そかゝれる峯の眞櫛
五月雨は天のかく山をしこめて雲のいつこに有明の月
さみたれのなやむ晴まの日かけにも猶くもふかし天のかく山
夏くれは霞の衣たちかへて白妙にほすあまのかく山
なつ衣いつかは時をわすれ草日もゆふくれの天のかく山
見わたせば朝たつ雲の夏衣空にほしける天のかくやま
ほとゝきす鳴一こ点や過ぬらん今そ明ゆくあまのかく山
櫛葉に夏の色とやさためをきしみとりそふかき天のかくやま
夏の夜の雲まにはやくゆく月のあくる程なき天のかく山
夏の夜の有明の空の月影にくもはのころぬ天のかくやま

大江山

大江山しけみかもとにましりても人にしらるゝ螢成けり
おほえ山行衛涼しき袂かないく野の末に秋やきぬらん
夕すゝみ大江の山の玉かつら秋をかけたる露をこほるゝ
夏ころもころもかはらぬ大江山秋にこえたる風のなとかな
よひなから明ゆく夜半の名残さへ大江の山に月をそなたふく

大江山かけ行道のやすらひにしはし馴ぬるうつせみのこ点
おほえ山月もいくのゝ末遠み玉ゆらまたす明る空かな
夏草はしけりにけらし大え山こえていく野の道もなきまで
五月雨のはれぬ日数や大江山いまゝたゝきつ昔のした水
夏草のしけみの露はおほえ山こえていくのゝ末もとゝに
おほえ山夕立する木のまより入日涼しき日くらしの聲
大江山我よりさきに行人もやとやとるらんひくらしのこ点

難波江

難波江の芦火のけふり立のほり夕日涼しき夏のうらかせ
なには江や鹽風はらふ芦の葉に玉なすものはほたる成けり
なしてゐるや難波ほり江にしく玉のよるの光はほたる也けり
秋ちかき風や涼しき難波江のおしの葉分に螢とふなり
なにはかた浪のしめゆふ芦の葉にいとゝみたるゝ夏虫のかけ
難波かたもゆる螢のみをつくしふかき思ひのえにや馴ぬる
なには江の鶴の毛衣夏をうすみゝちくる鹽に立そわつらふ
いらぬより名残はつらし難波江やみしかき芦の夜半の月影
夕暮は難波堀江のおしの葉に光をわけて飛ほたるかな
夏くれはなにはほり江の芦のはにほにこそあらね秋風を吹
なにはかたこやの八重ふさもりかれて芦まに宿る夏のよの月
汐みてはなには堀江の芦の葉にのれ亂て飛ほたるかな

美豆御牧

かりてはす美豆の御牧の夏草はしけりにけりな駒もすさめす
かりこも五月の雲に成にけり美豆の御牧の夕暮の空
渡する遠方人の袖かたとよ美豆のにしろき夕かほのはな
まこも草末こすまでに日数ふるみつの御牧のさみたれのころ

舟とむる美豆の御牧のまこも草からてかりねの枕にそする
この程はみつの御牧にかる草の露はたもとに五月雨そふる
春そみし美豆の御牧にあれしこま有もやすらん草かくれつゝ
雨はるゝみつの御牧のまこも草からて吹ほすよとの河かせ
秋かせをみつの御牧のまこも草かりにもつけてゆく螢哉
なつふかみみつの御牧のまこもくさ秋の露をやかりてほす
草ふりて螢むなしくたちね也みつの御牧の夕やみの空
五月雨によとの澤水いかならん美豆の御牧に涙こゆるころ

松浦山

夏山や松浦か沖の西の海をなたのかせに秋はみえつゝ
夏ころもひれふる山のなひ風に袂やかろさまつらさよ姫
せみの羽の衣に秋を松浦かたひれふる山の暮を涼しき
さよ姫のひれふる袖もやゝすゝ秋をまつらの山の下かせ
夏かけに秋をまつらの山のせみ染残す枝の露に鳴なり
くる秋をそなたの空にまつら山まつに涼しき風もふかなむ
たのめてもまたとは海にまつら山秋もやきなん天の河波
天津空たな引雲の西にある秋をまつらの山のはの月
松浦かたひれふる山のほとゝきすあかても聲の遠さかり行
ほとゝきすもろこしまても松浦山なみのほろかの雲に鳴なり
まつらかた木のまに月を残してもろこし船のよるそ涼しき
けふは又こゑ六月のほとゝきすまつらの山の明かたのそら

秋二十首

泊瀬山

泊瀬山れさめおとろく鐘の音もめにこそみえぬ秋はきにけり

はつせやま尾上のかれの音までも夕はわきて秋を涼しき
はつせめのならず夕の山かせも秋にはたへぬしつのをた巻
初せ山夕ある雲にふく風の名残ややかて秋のむら雨
はつせ山峯の鹿の音さそひきて麓の谷にそよく秋風
杉の葉は秋たつ霧にこもり江の初瀬の山の色を涼しき
秋の色はまたこもり江のはつせ山何をかことに露の置らん
はつせ山松の扉の朝あけて袖ふきそむる秋のはつかせ
はつせ山木葉色つく秋風にまついねかてのさなしかのこゑ
をきわたす露もさながら初瀬山いつこに秋の色をそむらん
はつせ山おのへのかれのうちつけにさびしき秋の風の音かな
初瀬山ひはらか末はしくれねと秋の色にや月は出らむ

龍田山

たつた山木の葉吹しく秋風に落て色つく松の下露
分てしもいかにそむらなつた山時雨も露もかゝる物かは
心あての思ひの色を立田山けさしも染し木々のしら露
わきてその色やはみゆる秋風の立田山のゆふくれの空
龍田山またきうつろふ下紅葉しくるゝいろの秋はきにけり
夕霧の麓をこめてたつた山しくるゝ色を峯に見えける
たつ田山なをうす衣たかみそき夕つけ鳥も風うらむらん
くたりつる夜のまの露もあとみすなあけは立田の峯の秋かせ
龍田山秋ともいましら露のなれぬ木のはに風かはる也
いつしかと風こそかはれ立田山さらては色に秋は見えぬと
夏衣秋も立田の山かせにかされて物を猶やおもはむ
立田山また青葉なる梢よりこそみし色の秋かせそふく

須磨浦

すまの浦あまの戸わたる鴈かしの聲すみのほろいさよひの月
久かたの月すむよは、すまの浦秋なき浪に秋そみえける
たひ衣またひとへなる夕霧に煙ふきやるすまのうら風
須磨の浦鹽くもあまの衣手にぬれてそやとる有明の月
月影を秋とやかこつ須磨のあまの鹽汲袖の浪にぬれても
もしほくむあたりの空の月影に煙をとめすまのせきもり
すまの浦に秋やく海士のはつ鹽のけふりそ霧の色なそへける
秋よまた月にいくたひもしほたれたえぬなめそ須磨の浦人
すまの浦の蟹のたくなはくれ行は人はたのめすすまのうら波
もしほやく煙は霧にまきれと行衛もみえずすまのうら波
月も、れ風も戸た、け須磨の浦のあれたる關屋秋にまかせん
明わたる須磨の浦半の霧のまになえ、みゆる初鴈のこゑ

宮城野

宮城の、萩の葉よはき朝露を枝ながら吹秋のかせかな
宮城の、もとあらの小萩したはれて葉のほる露に月宿るみゆ
秋にあひて身をなする雨と下露といつれかまさる宮城野の原
さなしかの鳴音ながらやうつるらん袂にあまるみやきの、露
哀のみ分るもふかし露にすむ月を袂に宮きの、秋
宮城野や玉ちる萩の上葉よりうつりもあへぬ色そこほる、
霜かれはまたこと、なき宮城の、もとあらの萩は下を淋しき
とれはけぬよし枝ながらみやきの、萩の下葉の露のしら玉
宮城の、露分ころも朝たては忘れかたみの萩か花すり
みやきの時は時雨や色もなかるらん木のした露のそむる萩原
吹あへぬ風はいかなる色とにまたみやきの、萩の夕くれ

宮城野や分入秋の衣手に霜おもけなる萩か花すり
水荳岡

水くきの岡の淺茅のきり／＼霜のふり葉や夜寒成らん
水荳の岡の葛葉なふく風に衣かりかれさむく成けり
みつくきの岡の葛葉をあまのすむ里のしるへと秋風そふく
大かたのころの恨も葛の葉にけふ水くきのなかの秋かせ
水荳の岡の夕され風立てくすのうら葉に時雨降めり
にぬる夜の朝の霜に水荳のなかの木のは、色そうつろふ
書つらに飛鴈かしの涙にや色増りゆく水荳のなか
水荳のなかのくす原わけ過てかへる日遠く秋風そふく
鴈金の鳴わたるより水くきの岡の葛葉も色付にけり
水荳の岡の梢になくかりのなみたまかへてむら雨そふる
みつくきの岡の淺茅生ふきしほり野風さひしき秋の夕暮
水くきのなか邊の秋の葛かつらくる人やなき松むしのこゑ

小倉山

なくら山峯の木の葉に聞馴て時雨せぬ夜もぬる、袖かな
小倉山秋の朝けの霧かくれ色こそみえは色かはるらむ
なくら山秋の哀や残らしなしかの妻のつれなからすは
小くら山鹿なく秋の夕つくよおほろけならぬものおもひとや
てりまさる月は小倉の名をすて、紅葉を分て出る山のは
なくら山心つくしの夕月夜木のまのかせにあきはきにけり
おもひかれ妻とふ鹿もねにけらしわれそ小倉の山の雲に
なくら山峯の木のはや色に出てふりにし御幸今も待らん
谷陰のなくら山の山の夕暮に有とはかりもさなしかのこゑ

もみちする小倉の山の夕つくひもらぬ栂も下草そてる
露霜の小くらの錦たかためになればかつちる山の秋かせ
くれなるの色こそこれ夕つくひなくらの山の峯のもみち葉

宇治河

秋ふかきやそうち河のはやきせに紅葉そくたす^るあけのそほ舟
あしる木に宇治の河波さえ暮て氷いさよふ山のはの月
河なみも待宵過は遠さかれ八十うち人のあきの枕に
橋姫のかたしく袖に波かけてはれぬ思ひやうちの河霧
かた敷の袖に馴ぬる月影のあきもいくよそ宇治の橋姫
月さゆるうちのはし姫夜やさむきかた敷袖の秋の河かせ
朝日山うつろふ波の色はかりまたそめやらぬうちの河かせ
晴行か横の嶋かせ色見えてやそうち人の袖の朝霧
あしる木にいさよふ秋のから錦中絶わたるうちの河^髣かせ
千早振やそうち人のあしる木にいく夜の月をかけてみるらん
白妙の月の衣手かた敷てれぬよあまたの宇治の橋姫
いろふかくしくるゝ山の秋風に木の葉を染るうちの網代木

常盤杜

秋はとも誰かはいひし椎柴のときは杜に鹿はなく也
山城のときは杜の夕しくれそめぬみとりに秋を暮ぬる
はつかりの來鳴ときは杜の露そめぬ雫も秋はみえけり
色そなき時雨の空はかはりけりときは杜の秋のゆふ暮
そめれとも身にしも色はかはりけり常盤の杜の秋風のこゑ
色かへぬ常盤の杜の下露にぬれて秋しるさなしかのこゑ
秋にたへぬよその紅葉のから錦ときは杜の色そつれなき

露むすふ常盤の杜の秋風に引しめ繩も玉にかゝれる
嵐ふくよそのもみちの色よりもときはのり秋はしられし
秋をきておよはぬ花の色をみる常盤の杜にかゝる白雲
あきは猶身にしも色もかはりけりなのみ常盤の杜の下風
鹿の音もいかて常盤の杜の露色に出へきかせの音かは

三室山

三室山神のいかきにはふ葛のうら吹かへすあきの夕かせ
かれてたにうつろひそめし三室山下くさかけてしくれふる比
三室山しくれもやらぬ雲の色のをれうつろふ秋の夕暮
神なひのみむろの山の榊葉のかはらぬ色にかはる秋かせ
みむろ山麓のおはな霜枯て嵐のそこにかはる虫の音
神なひのみむろの榊それのみや残るもしるき秋のもみち葉
さかきとりかけし三室のます鏡その山のはと月もくもらす
吹まゝに木のはやたへぬ神なひのみむろの葛にのこる秋かせ
ちらすなよ秋の葉守の神かきのみむろの山はあらし吹とも
よそにやは散もみち葉をみむろ山秋ゆく袖をふく嵐かな
みむろ山木のはも色やいそくらんわか袖のみの時雨ならすは
三室山神も知らん君か世に草葉もゝれぬ露のめくみな

高圓野

高まとの野分のかせにけふみればまたき草木の色そしほるゝ
たかまとの野路の秋萩咲にけり旅行人の袖にほふらし
大空にかゝれる月も高まとのゝへにくまなき草のうへの露
高圓のゝへの秋はき散はてゝ色なき露に嵐ふくなり
うらかるゝ萩のうは葉に有明の月やむかしの高圓のゝ邊
鴈かれのこゑは雲井にたかまとのゝへの小はきになみた落見

高まとのお花に風は立にけり付々しるき雲を吹しく
からにしき大和をかけて數嶋の高圓の、への秋風のころ
高まとの、への千種の花す、き秋も末こそ木枯のかせ
たかまとの、へのしら露たまさかに我こそはめ秋の行ふな
高圓の、原の萩のすり衣かさなる秋の袖の色かな
めぐりきて月はすめとも高圓の、へのむかしなとふ人そなき

伊駒山

（隱齋集）

いこま山雲なへたてそ秋の月あたりの空はしくれ成とも
此ころは雲なへたてそ生駒山みつゝをおりん秋の夜の月
伊駒山嵐もあきの色に吹てそめのいとよるそくるしき
朝またきいこまの山にたつ雲の猶はれやらぬ秋のむら雨
なかめても秋とはきかず伊駒山しくるゝ雲のかゝる夕ぐれ
紅葉をは霧なへたてそいこま山しくるゝ雲は又も晴なん
いこま山村雨となく出る月雲もかゝらぬあらしくなり
秋の色をかたのゝ暮にみわたせば伊駒のたけも時雨してけり
いこま山月ゆへとしもなけれともいとひ馴にしみれのしら雲
時雨つゝうつるはかりや吹つらん伊駒の山の峯の秋かせ
しくれゆくいこまのたけの秋の雲うき一すちに何かいとはむ
涙にも色こそみえね初鴈のいこまのたけに雲かくれつゝ

生田池

人すまはさらにやとはん津の國の生田の池の秋の月かけ
秋きてもとはれさりけり津の國の生田の池に月はすめとも
しくれ行生田のもりの木枯に池の水草も色かはるころ
津の國の秋は生田の池水に杜のこすゑのかけをみるかな

とへかしないく田の池に月かけも杜の秋かせ吹につけても
人すまむ程なもとはん津の國の生田の池の秋のよの月
暮ぬとて生田の池を立鷺のぬくらや寒きもりの秋風
秋ふかき生田のもりやしくるらんくねなるにほふ池のうき浪
月にあかね秋の思ひになからへて生田の池のみつからそき
たつれつゝ生田の池に玉もかる袖より秋の露もをきけり
月すまはとはましとたにまたれんと生田の池も秋を忘れぬ
月やとて生田の池の芦の葉に霜ふきかゝる秋の風かな

清見關

清見かたせき吹こゆる秋風にいや遠さかるあまの釣舟
さすらふる心に身をまかせすは清見か關の月もみましや
清見かた隙行駒も影うすし秋なき波の秋の夕ぐれ
さしのほる月は清見か關の戸にいらてやすらふ有明のそら
きよみかた月に浮ねを秋そとも契らぬ波にしほる袖かな
過て行我さへつらし清見かたこゝろの關は秋の月かけ
清見かた鐘の聲さへなきさうつ浪の關とに月そ明ゆく
きよみかたやすらふ月の影をさへなれ若こそ波の關かけ
清見かた月にうつろふ浪のうへな秋の色とや嵐ふくらむ
旅人の浪の枕や清見かた明るはおしき月のかけかな
富士の霞の嵐に空は清見かた有明の月によするしら波
きよみかた浪の關守うつたへにくもらぬ秋の月やみるらん

武藏野

みとりなる春はひとつのわか草も秋あらはるゝむさしの、原
むさし野や草はみながらなく露のゆかりもとむる袖の秋かせ
誰かたによるなく鴈の音にたてゝ涙うつろふむさし野の原

あたらぬ色さへ袖にうつりけりゆかりは露の武蔵野の原
涙さへぬれそふ袖に虫の音もみたれてしけきむさしの、原
おもひやる行衛は遠きむさし野もなかにせはき秋霧のころ
かりいはの妻とふ風も寒き夜にいくよかれなんむさしの、原
月となかめ花と思ふもむさし野の末はみなからうす霧のそら
むさし野の淺茅色つく今よりや夜寒の衣鴈も鳴なん
武蔵野の霧のまよひのなみなへし妻もこもれる煙とそみる
むさしのや月影ながら時雨けりお花かうへの露のした道
武蔵野やいつくの草に妻こめてきのふもけふも鹿の鳴らん

伊吹山

玉かつら伊吹の山の秋の露誰おもかけの松虫をこへ
夕附日さすや伊吹のさしも草露にももるゝ色はみえけり
秋をやく色にそみゆる伊吹山もえて久しき下のおもひも
梢まていふきの山のさしもいかにもえつる秋の色に出らむ
さしもやは身にしむ色も伊吹山はけしくおるす峯の秋かせ
さひしきなにかに伊吹のさしも草さしもつれなき秋の夕暮
色ふかきいふきの山の紅葉かなおふらむ草もさしもかれしな
袖にみつ峯の嵐の伊吹山さしも露ちる秋のならひは
つらしとや誰もいふきのさしもなと待れて出る山の端の月
雲はらふ伊吹の山の秋かせを待ける月の有明のそら
秋はささふくる伊吹の山風を馴すかほにも鹿の鳴らむ
こきすてゝ風はいふきの山のはなさそひて出る關のふち河

佐良科里

さら科やわたる月の里人もなくさめかれて衣うつなり
わか心さてしもいとゝなくさます今さら科の月はみれとも

はるかなる月の都に契り有て秋のよあかすさらしなの里
雲やなきなはすて山の秋の空月を住けるさら科のさと
忘れなむなくさめかれし山のはの空を秋とはさらしなの里
さらしなの里をはかれぬ月のよもとふへき物と人はまたれす
さらしなの里の草葉はうら枯てかれす月に人はとひける
我としもさはぬ月にしほれきぬ誰をうらみんさらしなの山
都にて見しにや似たる秋の月いつこはあれとさらしなの里
うつらなく夕の空の哀まで月にふけ行さら科のさと
をは捨の山より月のいつくにもそもさらしなの秋の空かな
東路やいつくはあれとさら科の里とひ出る夜半の秋かせ

白河關

たよりあらは都へつけよ鴈金もけふそこえつる白河の關
東路やまたしら河の關なれとかそへしまゝの秋かせのころ
しら河のせきの關守いさむともしくるゝ秋の色はとまらず
道のおくしらぬ山路をかされきて夕霧ふかし白河のせき
何となく哀そふかき行方もまたしら河の關のゆふきり
あはれさはいつくをはてと白河のせき吹こゆる秋のゆふかせ
しら河の關のもみちのからにしき月に吹しく夜半の木枯
染あへぬ木の葉やおつる秋の霜けさしら河の關の嵐に
行まゝに秋のおくまで白河の關のあなたにしくれ降なり
白河のせきとは月の名也けりあくとも秋のかけをとゝめよ
秋霧の朝たつ山路はるかにも來にけり旅のしら河のせき
ゆく末もまた霧ふかき夜をこめてたれ白河の關路こゆるん

野嶋崎

たとめ子か玉ものすそやしほるらん野嶋か崎の秋の夕露

都おもふ野嶋かさきのたひ衣日も吹かへす秋のうらかせ
おもかけは日もゆふ暮に立そひて野嶋によする秋のうら浪
浪かけて玉ぬく風や吹つらん野しまか崎のさゆりは露
月影にうつるふ波にみたれ行野嶋かさきの秋風の色
浪かくる野嶋か崎のきりくすもにす虫の聲かとそきく
風吹は波にや床のあれぬらん野しまか崎にうつら鳴なり
きのふまで色やはみえし夏草のしまか崎の秋の夕かせ
こ萩さく野しまか崎に風こえて露ちる浪に残る月影
浪のよる野嶋か崎の糸すきみたれにけりな露のしら玉
白妙の波の花すりみたれつゝ野嶋か崎の秋のころも手
物おもはぬ草葉も今やしほるらんのしまか崎の秋のむらさめ

明石浦

あかし瀉海士の笹屋の煙にもしはしそくもるあきのよの月
夕霧にあかしのとなみこく船のほのく消るあとの騒かせ
ともし火の明石の沖の友舟も行かたたとる秋のゆふきり
影やとす玉をやひろふぬるゝ袖に月そ明石の浦のあま入
秋もへぬ月にねぬよのさひしさを思ひ明石のうら風の音
あかしかなた霧もまよはす浪のうへに嶋かくれせぬ秋の夜の月
明石かたあまのたく火のほにでて冬も近しとら風そふく
風さゆる明石の興の月かけに嶋かくれゆく雲のなみかな
秋の夜を事そともなく明石かた浦半の月のあかね空かな
あかしかなた月にみえゆく浦の名を秋とふ人や空にしるらん
明石かた朝たつ霧のほのくと誰行舟の誰したふらむ
長き夜を誰しわひて明石かた浦の笹屋の月をみるらん

阿武隈河

あすは又あふくま河のしからみにきのふの秋の色や残らん
君か代にあふくま河の霧晴て底なる影といつもつかへむ
立こもるあふくま河の霧のまに秋をはやらぬ闇もすへなん
晴やらぬあふくま河の霧のうちに秋も今はとかへるなみかな
空清き雲井の秋の萬代にあふくま河のなみの月かけ
あけぬなり遠方人もあふくま河の霧に袖のみえ行
なか月やいく有明のめくりきてあふくま河にやとる月影
秋ふかき思ひは遠き君か代にあふくま河の水くつ成とも
馴にける月さへつらき逢人にあふくま河の明かたのそら
みちのくのあふくま河の末までもとまらぬ秋のけふや暮南
秋かせの袖とふ色もふかき夜にあふ隈河のみつからそうき
ふかき秋にあふくま河はしくるれと色こそみえれせゝの埋木

冬十首

清瀧川

清たきや岩間によとむ冬河のうへは氷に結ふ月かけ
くりためて今朝や氷に結ふらん清たき河のせゝのしら糸
音まかふ木の葉時雨をこきませて岩瀧に染る清瀧の浪
氷とや岩間の水もくゝるらん清たき河の冬の夜の月
音さゆるきよたき河のせゝの浪かけまつ氷る冬のよの月
きよ瀧の瀬々のしら玉敷そひて氷のうへにあられふるなり
清瀧のせゝの白糸冬くれはそむる木の葉の錦をそみる
きよ瀧の河せの木葉つきにけり色なきいろにかへるしら浪
今朝よりは清瀧川の薄こほりむすはれ行せゝのしら糸
しら玉のきよ瀧河のうす氷ふかくもむすふ冬は來にけり

氷するきよたき河はせ絶して岩根をおつるまつのかせかな
今朝はまた岩間の氷とちそめてきよたき河も行なやむ也

小鹽山

わしほ山松の葉とつる夕霜に色こそなけれ峯の木からし
行秋の名残をのこすわしほ山まつとしもなき冬はきに鳧
朝霜もしらゆふかけて大原やわしほの山に神まつるころ
ふりにけり神代もしらす大原や小鹽の山の松のしらゆき
染かけて松にのこさぬ秋の色をわしほの山はなをしくれけり
何ゆへか秋の名残を、しほ山小松かはらはもみちやばせし
神無月はれみ晴すみ梓弓をわしほのやまはしくれてそ行
わしほ山今朝ふる雪の夕かつら神代をかけてなひく松かせ
小鹽山さらぬ梢は秋くれてつゐにもみちぬ松のむら立
冬の夜も小鹽の松の木の間よりしらゆふかけて月をもりくる
わしほやま夕霜白き松の葉のちるもいく代の年つもらむ
小鹽山秋のかたみはと、まらて松にあらそふ木枯のかせ

住吉浦

すみよしの松のあらしやかはるらん夕なみ千鳥聲まざる也
冬も今は日数つもの浦さえて雪にもなりぬあられ松原
淡路鳴むかひの雲のむら時雨そめもおよはぬすみよしの松
千早振神の心もふる雪にみなしろたへのすみよしの松
すみよしの浪に妻よふさよ千鳥うらかなしくそ月もふけ行
秋ならぬ風にも月は住吉の松にかされてさゆるよの霜
すみよしとあまもやいはん浦風になみあれくらす冬の笛やは
浦風のあられ松原吹まよひ玉よせかぬるすみよしの江の波
さよ更てあられ松原住吉のうら吹かせに千鳥鳴なり

すみよしの浦にしきつのもしほ草かされてさゆる夜半の衣手
月影にあられふる也住吉の松かせいたくふきまさりつゝ
住吉の浦の松風月さえてふけゆくかたに千鳥鳴なり

片野

夕狩のかた野の眞柴むら／＼にまたひとへなる初雪の空
御狩する片の、眞しは末さき霞ふりぬと吹嵐かな
かり人のかた野のみ雪うち拂ひ豊のあかりにあはむとやる
狩暮ぬけふはかた野の草まくらかれはの霜もひき結びつゝ
かれはつるかた野のみの、かり衣袖さへ霜の色やさひしき
御狩する片の、くれば鈴むしのかれにし聲も猶そきこゆる
狩行は片野の霞消ぬ間の玉のをまたぬ雉子鳴なり
色分ぬ入日の色も峯さえてかたの、里はかた時雨つゝ
みかりする片の、眞柴風さえてうす雪しろし道のさゝ原
はし鷹のはらふうは毛に玉散てかたの、原にあられふる也
夕狩のかた野の鳥たち雪をうすみかくれもはてす柴の下草
うつり行ことしもふかく降雪にかたの、とたち草ものこらす

田饗嶋

雨による田みの、嶋のあま衣さらてはぬれぬ冬の袖かは
難波かた、みの、嶋に鳴鶴の霜をかさぬるなきよの空
なきあかす霜そかさなるたひ衣たみの、嶋はきてもかひなし
あま衣たみの、嶋にたつそ鳴なにはの声のさやく霜よに
飯ふる田みの、嶋の笛やかたなにもさはらすはらふ袖かな
降雪にぬれてや寒き難波かた田みの、嶋の鶴の毛衣
霜うつむたみの、嶋に住民の名にはかくれす袖やさゆらん
うちはらふ我袖かけてさえにけりたみの、嶋の雪のしら波

たひ人のはらふ袂も白たへの田みの、しまの雪の明ほの
つるの鳴たみの、嶋も時雨つ、芦のかれ葉に浦風そふく
さかへ行國のたみの、嶋守も雪ふるめくみ先あふくらむ
難波かた田簀の嶋にあるたつの霜のうは毛や冴増るらん

有乳山

冬の夜の峯のあらしや有乳山月よりかる、野への淺ちふ
あらち山みれの嵐やいかならんふもとの淺茅うら枯にけり
有乳山峯のこからしふきたて、雲の行手におつる白雪
夜やさむき吹くる風も有乳山雪けの雲の峯にあまきる
吹しなる峯の嵐もあらち山こゝろくやしき雪の夕くれ
ゆふ暮は風のけしきの有乳山ふもとの、へにあは雪そふる
あらち山ちりかひくもる花とみる雪に老らく道やまとはん
やたのゝに霜をく風や有乳山堪ぬ淺茅の今朝の色哉
かれてより思ひ越路のあらち山ことはりすくる峯のしら雪
嵐ふく有乳の山の夕時雨やかて雪けの雲やうつらん
さえくらす風もあらちの山高み雲よりうへにみゆる白雪
冬こもる夜のまの風の有乳山いかに木の葉のまなく散らん

浮嶋原

時しらぬ山は雪けの雲ながら有明の月の浮嶋かはら
不盡の山高根の風やかよふらん今朝雪しるし浮嶋か原
ふしのれにめ馴し雪の積きてをのれ時しるうきしまかはら
寄かへる波の立ぬに浮嶋の松にさえゆく風のなとかな
降まかふ涙も空もかきくらす雪けの雲のうきしまかはら
うき嶋となかめしかとも東路や雪の下なる松のむら立
あしからの闊路はれ行夕日かけみそれにくもる浮嶋かはら

波のうへに一むらかゝるしら玉や雪にしつめるうき嶋か原
小夜ちとり聲遠さかる浪のうへにはるかに月の浮嶋か原
ふき送るふしの山風さえくらし霜枯はつるうき嶋かはら
雲のなみお花の浪のはてもなし霜にかれたる浮嶋かはら
むら時雨ふけ行空の月影はこほらぬなみにうき嶋か原

安達原

霜はけさあたちのま弓散はて、残りぬ色を何に染らん
もみち葉や安達の原のしらま弓のこる梢に嵐ふくなり
其方より霞や下にいそくらむ安達のま弓春は隣と
しくれ行安達の原のしらまゆみしらす木の葉は散はてぬらん
春を待あたちのま弓本末も降つむ雪にひく人そなき
雪ふれば安達のま弓末たはみ引手にやすく暮る空かな
ものゝふのあたちの原のしらまゆみ分て入さの道たにもなし
安達野も雪ふりにけり狩人のひかぬま弓の末たはむまて
降雪にあたちの原もしらま弓春の梢のおもかけそたつ
白妙のすそのゝはらのかり衣あたちのはらの雪の明ほの
我ためは是やあたちのくるつかに冬草わけて人は入にき
あらし吹木の下露や結ふらんあたちの原は霜枯にけり

因幡山

雪の中に冬は因幡の峯の松つむにもみちぬ色たにもなし
秋の田になひきし程はかれはてゝあらぬ因幡の峯の松かぜ
きのふかも秋の田面に露をきしいなほの山も松のしら雪
雪ふかき因幡の山の峯の松春やみとりの色にかへらむ
年暮ていなほの山のみれの松雪消なはとちきる春風
としくるゝ冬も因幡の峯の松まつとはしるやまたかへりこん

秋の田のいなはの嶺に吹風の身にしむ聲は冬の暮まで
むなしくもことしいなはの嶺に生るまつとをつけよ春の光に
ふりすて、我もいなはの山のはに松はひとりや雪にしほれん
冬のよの月は因幡の嶺こえて猶山のはにまつ風のこゑ
因幡山雪の松風訝暮てむらくもしろくいつる夜の月
我ならぬ誰かはとはむ立かへりいなはの山の峯のしら雪

鏡山

ゆく年をかゝみの山の冬の月みるかけさへにくもりなきかな
あふみ路や鏡の山のやま風に、ほてる海や先こほるらむ
かゝみ山うつれる波の影ながら空さへこほる有明の月
つもるとも誰かきてみんかゝみ山けさかきくもる嶺のしら雪
氷る夜は月の影みる鏡やまむかしなうつす冬のかゝみに
なかむれは冬そくもれる鏡山木の葉しくれてちりかゝるこゝろ
近江なる鏡の山の玉かつら春をかけても千世はくもらし
みつうみになのれかけみるかゝみ山やまの姿も雪降にけり
月かけのくもるたえまも鏡山色はさやかに峯のしら雪
かゝみ山雪の梢をわれみてもいくたび花のかけにうつりぬ
鏡山たちよるかけに年暮て老さへちかき歎そふらむ
冬きてもみるへかりけるかゝみ山梢くもらぬみれの月かけ

戀二十首

伏見里

菅原や伏見のさとのさ、枕夢もいくよの人めよくらん
いまはたゝ思ひ絶なん菅原やふしみの里は名に忘れぬ
笛竹のふしみの里は名のみしていつれの世にかれをも立へき

契りなく里はふしみの夕間暮まつを稲葉に秋風を吹
歎きつゝ伏見の里の夢にさへむなしき床をはらふ松風
わすれすよ草の枕を菅原や伏見の里の明かたの夢
遠からぬ伏見の里の關守はこはたの峯に君そすゑける
獨かもいく夜ふしみの里遠きおもふ中さへ雲はへたてつ
里はあれてよな／＼かよふ秋風にふしみのさとは夢も絶にき
さとの名も人の心もあれま／＼や伏見のよそに夢路絶つゝ

菅原や伏見は里の名なりけり人の契あひもあれすもあらなん
とことは誰言葉もたのむらん獨ひとりふしみの里の月かけ

霞浦

ほのかにもしらせてけりな吾妻なる霞の浦のあまのいさり火
立まよふ霞の浦の夕けふりそれともよそにしる人のなき
はる霞かすみの浦を行船のよそにもみえぬ人を戀つゝ
晴やらぬ霞の浦にすむあまもぬれてみるめをかつきやはせぬ
ゆくゑなき空も霞の浦風にあとゝふかたもなみそきたふる
しるらめ霞の浦のもしほ火のほのかにかよふ下のおもひな
暮かたき霞の浦の春の日にくるしや心あまのたくなは
かちをたえ霞のうらに行舟のほのかに風のたよりしらせよ
しらせはや煙を雲にまかへても霞のうらのあまのもしほ火
夕霞をのれか浦に立まよひいつちよるへく波路尋ねん
立ましる霞の浦のゆふ煙しらす思ひのあまのもしほ火
もしほくむ霞の浦のよそにてもとへかし人のおもふこゝろな

石瀬杜

神なひのいはせの杜の初時雨忍ひし色は秋風そふく
なのつかからかけても袖にしらすなよ石瀬の杜の秋のした露

神なひの石瀨の杜のいはすともしれかし下につもる落葉くちを

おもひあまりいはせの杜の下露に草はみなから色かはりつゝ、
忍ふるなれにたてよとやさそふらん石瀨の杜のうくひすの聲
おもふ事はせの杜のいはすとも色には出よあきのしたつゆ
神なひの石瀨のもりのいはしたゝわが戀まさる鳥の音はうし
うつろはむ秋の色にも思ひ出さや石瀨の杜のことの葉
かくとたに石せの杜の初時雨今や梢も色に出なむ
戀しともいかゝいはせの杜の露かけてもよその袖の色かは
つらしともうしも風のつてにたにえやは石瀨の杜の言の葉
今はとて石瀨の杜の下露もあらぬ色にや置まさるらん

筑波山

つくは山しけきまさ木の數よりもしらぬは人のこゝろ也
あかつきの鐘の響も筑波山人はかけせぬ床のまくらに
あしほ山やます心はつくはれのそかひにたにもみらくなき比
いたつらに人の心はつくは山いつか消へき思ひなるらん
筑波山はやまを分しなけきよりしけりを増る深き思は
つくは山しけき歎の下露になのか心のしなりをそおもふ
つくはやましつくに絶ぬ谷水のいかなる隙にしらせそめまし
何となく心な人につくは山かけよりしけきおもひ有身そ
枯て行これや心のつくは山葉山しけ山秋風そふく
つれもなき人に心なつくは山絶ぬなけきのしけきこる哉
筑波山しけき歎を分侘てをのれとまよふ戀の道かな
つくは山時雨る秋の露よりもまつ色かはる我こゝろかな

袖浦

袖の浦なみの花にもしらさりきいかなる秋の色にこひつゝ、

跡もなき風をたよりのしるへにてうきれかなしき袖の浦哉
袖の浦にたまらぬ玉のくたけつゝよせても遠くかへる浪かな
物おもへは人の心のいとまなみしはたれ増る袖のうらかな
くちはてし契の床のかたしきに猶ほしわふるそての浦なみ
袖の浦に波よせ歸るよび／＼や我かた數のたくひ成らむ
しきなみに獨やれなん袖の浦さはく湊はよる船もなし
浪にたにぬれてほすまはありそ海の釣するあまの袖の浦風
あかつきの別はいつもから衣ぬれてそかへる袖のうらなみ
よとゝもに忍ふ心のあらはれて絶すそかへる袖のうらなみ
もの思へはいとゝひかたき袖の浦の浪には月そめるゝ顔なる
枯はつる袖のうらなみかくとたにしられぬあまの身を恨つゝ、

益田池

思ひのみます田の池の水かくれにしらぬあやめのれに亂つゝ、
月やとる益田の池のます鏡うつろふ色そ秋はかなしき
人こゝろいとゝます田の池水にうへはしけれる名を恨みつゝ、
つらさのみ益田の池の薄氷とけぬ契とを何むすふらん
思ひのみます田の池のうきぬなは絶ぬちきりそ苦しかりける
思ふ事我そ益田の池にすむをしのうきれもさやはくるしき
わか戀はます田の池の鳩鳥の玉もにあそふ跡もはかなし
片戀の益田の池にたつ鳥の羽かひの波を袖にかけつゝ、
涙のみます田の池のれぬなはのれぬよくるしき物思ふらん
涙のみます田の池のみをつくし歎くしるしやみえて朽なん
涙のみ袖にます田のいけらしといひてもおしきうき名也けり
跡やなきあはて年ふる思ひのみます田の池の鳩のした道

高師濱

おきつなみ高師の濱の松もなをぬる、許の名に社有けれ
興津なみたかしの濱にあかすとも君としあらは夢もみえなん
あた浪のたかしの濱のそなれ松馴すはかけて我戀めやも
よる波もたかしののはまの松かれのかはく間もなき枕なりけり
風あらきなみやたかしの濱千鳥ふみかよひこし程も絶ぬる
まつとたに人はかけてもしら浪のたかしの濱に袖はぬれつゝ
うつなみのたかしの濱の砂地におひける松のねこそあたなれ
波のたつたなみのたかしの濱かせに松はつれなき秋の色哉
なき名のみ世にはたかしののはま風のつれなき色に戀へ渡らん
戀すてふ名のみたかしの濱千鳥さのみや浪の底に鳴へき
物思ふなみのたかしの濱松のまつもむなしき色にふりつゝ
なき名のみ高師のはまの松かえにいかなる風のたえず吹らん

阿波手杜

わか戀はあはての杜の夏草の海集の人こそしらねしける比かな
さりともと色に出ぬる言のほもあはての杜の名にそおとろく
かた糸のあたの玉のをよりかけてあはての杜の露きえれとや
日數ふるあはての杜の下もみちもりくる露の色に出にけり
名にしおはゝあはての杜の呼子鳥うきはためしの夜半の一聲
いつともあはての杜の夕露のなと秋かせにたへすちるらん
たゝ染も時雨も露も置霜もあはての杜の秋の暮かた
身にとまる思ひはこれもしられけりあはての杜の夜半の木枯
白露も置たにあへす枯にけり又もあはてののりの下草
其まゝにあはての杜の秋の暮袖よりほかに色かはりけり

聞したゝあはての杜の名もつらうきためしあるむかし成見
侘はつる身をうつせみのをのれのみあはての杜に音をや鳴覽
志香須香渡

かくしつゝ暮ぬる秋はしかすかの渡もあさき契りと思ふ
うしとても猶しかすかの渡守しるへもなみの行行へおしへよ
秋風に鳴音をたつるしかすかのわたりし波になとる袖なとる袖かは
たのまれぬ人の心をしかすかに思ひわたりて年のへぬらん
みし人の影はかりこそしかすかの渡り絶にしむかし成けり
うしとても忘れんことはしかすかの渡と聞に袖そねわぬる
是も又稀なる中はしかすかのわたりさへこそうつろひにけれ
うきながら猶たのむ哉しかすかのわたり初てし水のこゝろな
あひみてもあはてもなけくしかすかの渡物うき夢のうき橋
立かへり心つからやししかすかの渡もあへぬなみにぬらむ
忘れなん恨みしとてもしかすかの渡にしはし身をそやすらふ
むすひなく契はいかにしかすかのわたりも遠き中のへたてそ

濱名橋

しららめや濱名のはしの絶すのみ下行水のふかきこゝろな
をのつからみるめもしらぬ浪の上に濱名の橋を戀やわたらん
東路や濱名のはしに引駒もさそ待わたる逢坂の關
はるゝと思ひそわたる東路や濱名のはしの浪にぬれつゝ
あふ事もはるかに月の行方を濱名の橋の空にまかへて
行かよふ濱名の橋のしらなみのあとなき道のしるへなりけり
打わたすはまなのはしの磯波磯波にななし小舟誰を戀らん
白浪のはま名の橋にかけてたに思ひし事か雲のとたえは

たのつから影やとまると行てみむ濱名の橋の水のしら浪
逢事は濱名の橋に行まとい跡なき波にのころおもかけ
霧はるわたるはまな橋の夕波に人のとたえそあけてしらるゝ
思ひあらはへたつる霧もなからまはまな橋の秋の夕暮

磯間浦

かみ嶋や磯間の浦にあまのかるもにすむ虫の身を恨つゝ
かみ嶋やいそまの浦に舟出して沖つしほあひみてかへりこん
あつさ弓磯間のうらにひく網のめにかねならあはぬ戀哉
よるへなきいそまの浦の磯波に馴てもぬるゝあまの袖かな
絶ぬへき契に袖をほしわひぬ磯間の浦の浪にぬれつゝ
いかにせむ磯間の浦にやくしほの空にはしるきけふり立けり
夕波のかけてそ戀る神嶋の磯間の浦に衣かたしき
忘れめや磯間の浦の恨きてそのかみ嶋にかけし契は
かゝりける契結ふの神嶋や磯間の浦のうらめしの身や
いたつらに磯間の浦のうつせ貝あはてや波の下にしのはん
煙たにおもふばかりのしるへせよ磯間の浦のあまのもしほ火
鷗のゐる磯まの浦の夕浪に誰面かけをかけて待らん

守山

時雨のみもる山かけの下葉若イかは物おもふ袖は色も残らず
かきくらす涙時雨と守山は袖も残らず紅葉しにけり
夜もすから夢さへ人めもる山はうちぬる中もたのみやはある
しら露のもる山風のいかならん袖よりもろき峯の紅葉々
いかにせむしけき人めな守山の下葉残らずしくれゆくころ
わか袖に時雨も露も守山は下葉の外も色かはりけり
たらちれの親のいさめのもる山の下になげきの色にこひめや

我袖にもる山風の下露はたゝ大かたの秋のいろかは
時雨もる山わけ衣ぬれしかと袖に秋なる色はみさりき
忍びわひしくれも露ももる山の色なる袖を何にまかへん
もの思ふ名はかり色にもる山のしくれそ下の松にかはらぬ
神無月わか身時雨ともる山はわきて袂の色そくち行

佐野舟橋

かけてたに契りし中は程遠し思ひをたえれさのゝ舟橋
人しれぬ心はいそのかみつけやかけてもふりぬさのゝ船はし
言傳よさのゝ舟橋はるかなるよその思ひにこかれわたると
東路のさのゝ舟はし霧こめてよそののみやはおもひわたらん
たつれても渡らぬ中の月日へてかたえはつるさのゝ舟橋
東路にかけても過し中川のせたえもつらさのゝ舟はし
おもふ人波のなちかたつねへささのゝ舟橋えやはうこかむ
もらさはや波のよそにもみわか崎さのゝ舟橋かけしと思へは
中々にかくる心もくるしきにたえなはたえれさのゝ舟橋
かけて猶いくせか戀んよそにのみきゝこそわたれさのゝ船橋
絶れたゝうきにつれなき身なり共さのみもまたしさのゝ船橋
東路や佐野の舟はしいたつらにわたりしころの袖やぬれなん

安積沼

人こゝろあさかの沼のうす氷かつ見なからに消やわたらむ
人心安積の沼の花かつみかつみしかくも見ゆるころかな
いかにせむあさかの沼の花かふみかつみける色に落る涙を
浅からぬあさかの沼の花かふみかつみける色に出にけるかな
契こそあさかの沼の花かふみかつみける色に露そこほるゝ
花かつみかつ道絶る鳩鳥の安積の沼に見馴そめけん

れをふかく我こそおもへ人しれす安積の沼の春の若草^{水くさ}
 しらせはや名こそあさかの花かつみめならふ契深きころを
 つらきなもうきなもしらぬ心かな安積の沼のかつみながらに
 心さしさこそあさかの沼に生るかつみの程はなをそしらるゝ
 人こそ安積の沼のかつ見てもあかねや深き契なるらん
 いかにせむ安積の沼のかつみてもぬるゝは袖のならひ成けり
 松嶋

逢にかふる契のみそ松嶋やなしまれぬ身の習成せは
 松嶋やなしまのあまのならひまてみるめゆへにや袖ぬらす寛
 ふくるよな心ひとつに恨みつゝ人まつしまのあまのもしほ火
 松嶋やなしまの磯のあまの袖いくとし波にしほれきねらん
 逢まてと空行月を松嶋のなみより外にとはぬ袖かな
 まつ嶋やおしまぬ秋の名残にもぬれて有明の月やみるらん
 海士の袖あら磯かけて松嶋や下^う蒙する秋そかなしき
 松しまやな嶋のあまのすて衣思ひ捨てとぬるゝ袖かな
 まつ嶋や小しまのあまに尋れみむぬれては袖の色やかはると
 しら浪のしらすや君を松嶋に猶立かへりかゝるゝろな
 おもひたつたよりもつらし松嶋やなしまのあまの袖の鹽かせ
 くれは又いかに忍はんまつ嶋やなしまの海士のよるの思ひな

緒断橋

東路の緒たえの橋も有ものないかにくち行袖とかはしる
 相坂をけふ越ぬともみちのくのなたえのはしの末のしら波
 ことの音のなけきくはゝる契りとして緒断の橋の中も絶にき
 東路や雲路へたてゝ聞しかと緒断のはしは身にも有けり
 しらせりき忘れたみにみちのくの緒断の橋のうき名計りな

思ひのみ東にしめてひくことの緒たえの橋の道やまとはん
 逢事はぬるなたのみの夢路まてなたえの橋に月をふけ行
 行末の緒断のはしは聞もうしおもひの道のおくもしられて
 忘れすは又や踏みんみちのくの緒断の橋の年ふりぬとも
 逢事はまた末遠し白雲の緒断の橋のなをそ恨むる
 忘らるゝうき身のための名もつらし緒たえの橋の秋の夕くれ
 いきてこそ人をもとはめ玉の緒のなたえの橋はうき名成けり

三熊野浦

三熊の浦より遠に立霧の晴ぬ思ひを猶やへたてむ
 むかしより玉かとのみそみくまの浦まてとなる袖の涙を
 時の間の夜半の衣の濱ゆふやなけきそふへき三熊の浦
 日にそへて人の心をみくまの浦まてとなる浦の濱ゆふ
 へたつとも吹たにかよへみくまの浦より遠の八重の鹽風
 三熊野の浦の濱ゆふとへかしとおもふなけきは猶そかさなる
 三熊野の浦の濱ゆふしら妙の袖のわかれもいのりかさねよ
 いくたひか磯邊の鹽のさしなからつらき心をみくまの浦
 契りしにあらぬつらさをみくまの浦あはて月日や浦の濱ゆふ
 みくまの浦の濱ゆふいく世へぬあはぬ涙を袖にかさねて
 三熊野の浦の濱ゆふ立波の世にふる袖を人にとへかし
 忘らるゝ身社はあらめ三熊野の浦のかひある名をはとめよ

鳴海浦

よそにのみ鳴海の浦の夕煙うはの空にもいかゝたのまむ
 あまの住里のしらへになるみかた我身つれなき恨せしに
 よそ人になるみの浦の八重霞忘れすとてもへたてはてゝき
 物おもへは音にたてゝも鳴海かた聞人波にうらかせそふく

たよりたに行衛しらすや鳴海かた浦こく船のかちをたえなは
をのつから風を知へとなるみかた跡なき波に道迷ふとも
人心あれてみるめのよるの月いかになるみのうらみてかぬる
いたつらに幾年波をへたつ覧よそになるみのうらみせしまに
曉はなのか衣々なるみかたうらみてかへる 沖津しら波
袖の色ふかくなるみの恨を今はかたみとおもひ初つゝ
數ならて哀なるみのうらみかな世のことはりも人のとかは
扱も猶あかすはいかに鳴海瀉みるめかひなき世をやつくさん

二見浦

玉くしけ二見の浦の夕月夜明てもみぬは夢路なりけり
ふりおほふ二見のうらの霜の上にをのれかさぬる袖の月かけ
二見かた伊勢のはま萩敷たへの衣手かれて夢もむすはす
わか戀はあふせもしらす二見かた明暮袖に波をかゝれる
かされても袖の涙の玉くしけ明て二見のうらみとそなる
あかぬよの明る別は玉くしけ二見の浦に又も逢みむ
いかさまに我身を分て二見かた命にかへはあふかひもみん
友舟の契あやなき二見かた行衛もなみのうきまくらかな
別てはあかぬ名残をますかゝみ二見の浦の有明の月
あひにあはゝ二見の浦にれもしなんあら磯浪の枕成とも
二見かた絶す涙の玉くしけ玉ゆら袖のかはく間そなき
伊勢鳴やふたみの浦のかたし貝あはて月日を待そつれなき

名取河

なるかなる涙そあたの名取川せきあへぬ袖はあらはれぬとも
いたつらにあはぬうき身の名取河やなせの波を袖にかけつゝ

名取河心にくたす埋木のことはりしらぬ袖のしからみ
むもれ木の波に朽ぬる名取河うき名はかりやうきてなかれん
あらはれてしつむ涙の名とり河袖の色かはせゝのむもれ木
埋木の名をあらはるゝ名取河あらぬためしはさても朽なむ
名取河心とはゝ埋木の下行なみのいかゝこたへむ
をのつからもれなはいかに名取河やなせの波にせく心かな
名取河うき名はかりはあらはれて思ふ心のせゝのむもれ木
名とり河そこの埋木あらはるゝ紅葉はうへに色にいつとも
なとり河逢せに迷ふうたかたのうきおもひのみあらはれそ行
名取河しつむもくつに名をかへて思ひけりと人しらせむ

雜二十首

芳野河

吉野河あさきせもなく行水の人のこゝろはうへそつれなき
よしの河わたりし時はゆく水のかへらむとやは我もおもひし
芳野河いとはかしはをこす波の常盤かきはそ我君のみ
吉野河なかれてはやくちる花の波のいつくに春とまらん
よしの河ふかき流のためしにも浪敷まさる君か御代かな
君か代はよしのゝ河のとこ波にたゆる時なき影そみえける
吉野河よしや世中早き瀬にたへればこそはけふまてはすめ
みな人の行瀬をみせよ芳野河岩波はやくかけし思ひそ
芳野河岩間に流つ玉ゆらも春のかたみの花のうたかた
水上に干とせをかねて芳野河はやくそ君を祈をきてし
よし野河岩きりとほしせをばやみ過るも人のよはひ成けり
吉野川岩こすなみははやけれど音こそたてれ嶺の松風

鈴鹿河

底清き鈴鹿河原のしき波のまなく時なくたのみてそふる
鈴鹿河ふりさけみれば神路山榊葉わけて出る月かけ
すゝか河八十瀬ふみ渡るみてくらも君か代ながき千世の長月
すゝか河やそせの浪にぬれてやとる月も旅れの空やわひしき
鈴鹿河八十瀬にいのる君かため吹山かせもよろつ代のこゑ
月影もたえずやすまんすゝか河いせをのみやは世々のふる道
長きよのためしにひかむ鈴鹿河こえていつきのわたらひのしめ
ぬれゝす時雨も今はすゝか河伊勢まで秋の色やますらん
すゝか河山には秋のくれなるに八十瀬の浪を色かはりゆく
よろつ代はふるとも盡しすゝか河やそせの浪のたゝむ限りは
鈴鹿河やそ瀬のみくつくちはてゝ浮名世にふる思ひ出そなき
道とめて神代をとへはすゝか河ふるきに歸るせゝのしらなき

不盡山

ふしの根に時そともなく立煙遠こち人もおもなれやせむ
白妙の山はふしのれ時しらぬいく世の雪に煙たつらむ
あまの原ふしのしは山しはらくも煙たえせず雪もけなくに
くらへみむ我身よ不盡の山ならはたゝぬ煙にたへぬへき哉
うつもれぬ名さへ高れの富士の山たえぬためしに雪つもれ共
人住ぬ山はふしのれいつとなくたつるや何のけふり成らん
消かてのふしのは山の嶺の雪時うつるとや霞あるらむ
ふしの根の嵐になひく夕煙のほりもやらぬ身ないかにせん
みな月のてる日もしらす白妙の山はふしのれ雪をつれなき
よとゝもにいつかはきえむ富士の山煙になれてつもる白雪

よとゝもにふしのけふりのたつよ哉我のみ物は思はさりけり
ふしの山峯は雪氣の雲なからすそのゝ原に秋風そふく

還山

都人歸る山路はあと絶てさかひもしらぬ秋のゆふ霧
春はこよひ柴の扉にかへる山朝けのかせに誰をまたまし
いかばかりふかき中とてかへる山かさなる雪をとへと待らん
旅衣いく重かさなる雲井にもかへる山路の空を忘るな
あらためて君か御代にやいにしへにかへる山路も跡をしる
都人暮れはやかてかへる山何そはひとりとりとまほりそ
たのめての待てふ道もかへる山何そは有て人の行らむ
みやこ出て越路はるかにかへる山やまの名をのみ思ふこゝ哉
旅衣かれてもつらき秋かせを袖にうらみてかへる山人
鴈かれの花とひ分て歸るやま霞も嶺に残る色かは
山の名も昔にかへる道はあれと我身ひとつの跡や絶なん
こし方も猶行末もふる雪に跡こそみえぬかへる山人

海橋立

草の原いく野の末やしくるらん秋風そふくあまの橋立
ほのゝとよさの吹井の朝霧にあらはれわたる海のはし立
鳥羽玉のよわたる月の佳里はけに久かたのあまのはし立
わたの原松吹かせに霧晴て月すみわたる海の橋たて
枝ごとに千代をや君に結ふらん松の葉しるきあまのはしたて
過て又いく野は遠く成にけりふみみる道はあまのはし立
みつしほに朽せぬ松やはし桂海のはしたて千世もかきらし
明わたるよさの浦松ふく風に霞て過るあまのはしたて
かりてほす浦のみるめいとよまみこや世をわたる海の橋立

うらみたる時雨は袖もうらふれて名のみふり行海のはしたて
ふりにける猶も昔の色ながら波間に残るうみ「霧」の橋たて
世をわたるをのかしわさもいとまなみ絶す釣する海のはし立

飛鳥河

飛鳥河七瀬の淀に吹風のいたつらにのみ行月日かな
かはり行淵瀬はあれど飛鳥河かはよとしらぬ秋霧のころ
さ、れ石は岩ほと成てあすか河ふちせのこゑなきかぬ御代哉
世にふれは身にのみ積るとし浪のなかれてはやすき飛鳥河かな
末遠く君をそたのみ飛鳥河明日は淵瀬をしらぬみくつに
君か代はたゆる世もあらし飛鳥河なかれてはやすき月日也けり
あまの原空とふ鳥の飛鳥河かへらぬなみや故郷のあと
すむ月の都を遠みあすか河たゝいたつらに浪やたつらん
見るまゝに浪をわけても飛鳥のあすかの河の遠方のそら
飛鳥河紅葉みたれて飛鳥の行せもつらききのふけふかな
飛鳥のあすかのせたとのれのみ深き道とふ世を頼みつゝ
あすか河下行水の早きせにうかみそ出るなみのしらゆふ

鳥羽

年經ゆる松も昔に山城の鳥羽に逢みん千世の故道
秋風の鳥羽田の面を吹なへにほなみにつゝく淀の河水
すゑ遠きとは田の南しめしよりいくよの花のみゆきふるらん
久しかれなひく稲葉の末までも鳥羽田の面の代々の秋かせ
秋もまたいくよの霜のふりぬらん鳥羽田の面の腐のつはさに
山城の鳥羽田のいなはかたよりに君になひかす秋風をふく
八百萬とは田のいれなかりつみて道ある里の民そさかふる
さとの名も君か千年にあらはれてとはにふくへき松の風かな

夕暮は鳥羽田の露に風こえてむらさめなひくなちの山もと
千世までも民の煙や絶さらん鳥羽田の里の朝け夕けに
山城の鳥羽田のおくてかりにたにいつちいなはの庵もとむ覺
胸かれの鳥羽田のいなは打なひき露もとまらぬ風のなと哉

辰市

玉ほこやおほくの民のたつの市にくるれば歸る數もみえけり
ことゝく賑はふ民の辰の市にみよさかへたる程ぞみえける
數嶋の道に我名は辰の市やいさまたしらぬやまと言のは
いたつらにけふも暮なは辰市日かすへぬへき都人かな
浮世をは今はと思ひ辰の市に身をはかへてもおしひかほなる
かすしらす行かふ民の辰の市に、きはふ御代は是もみえけり
辰市や千とせをかけてくる民もくにの都の我君のため
諸人もけふこそこゝに辰の市やとりゝみゆるやまと心を
辰市や行かふ人も暮行はうるまの清水影もとゝめす
萬代に數ぞふ民のたつの市はかへるも行きたゆる物かは
雲さはき日かけにのほる辰の市にうることもなき人を戀つゝ
辰市にうるまの清水底澄て人の心のくまも残らす

吹飯浦

芦邊より攄みちくらし天津風吹井の浦にたつそ鳴なる
あら玉の年さへ老の浪のよるいそちふけぬの恨をそする
こす波に我身ふけぬのうらみきてうちぬる夢も此ころをみる
なかもやる浪の千里の雲井まで月にふけぬの秋のうらかせ
出るより心ほそきは秋風の吹井の浦のあけかたの月
あはれ也誰世吹井のうら風によそにかたふく有明の月
いたつらにをのれ吹ぬの浦馴て子を思ふ鶴のいふかひもなし

さすらふる我世吹ぬの浦ちとりなく／＼過ぬ誰しのへとて
出にけり待とせしまに秋の夜もふけぬの浦の浪の月影
我よはひ吹ぬの浦のさよ千鳥思ひしまゝの波に鳴なり
いたつらに我世の秋や吹ぬかた袖なる月もかたふきに
時雨つる雲も残らて天津かせ吹ぬのうらに月そさやけき

布引瀧

立ぬはぬ紅葉の衣染はてゝ何山ひめの布引の瀧
布引の瀧の水上年をへていかにさらせはくろきすちなき
ぬの引のたきに袂なあらそひてわか年波のいつれたかけん
水上や天の河瀬にかよふらん雲井にしるき布引の瀧
誰ためになりてさらせる山姫の名をなかしけむ布引のたき
布引の瀧の水上なかむれば水なき空と誰かいひけむ
ほしあへぬ我そわか世の袖にかかるぬれて久しき布引のたき
山風に雲のはたてやみたるらん露のぬき散布ひきの瀧
たえず行水のしら糸たてぬきにたかなりかけし布引の瀧
嵐ふく雲のはたての絶々に露のぬきちるぬのひきのたき
布引の瀧のしら糸わくらにはにとひくる人もいく世へぬらん
ぬの引の瀧の白糸山かせにみたれておつる数はとまらず

長柄橋

いにしへにあらすなからの橋柱ふりにし跡をしのはすもかな
なく霜にかれ行声も栲にけり長柄の橋の行衛のみかは
さもあらはあれ名のみなからの橋柱くちすは今の人も忍はし
芦の根の浮身なからの橋柱かくて栲なん名こそ惜けれ
とまる名になかきしらるゝ身なり長柄の橋の跡をみるにも
ふりにけり昔なとへは津の國のなからののはしのあとのしら浪

君か代に今もつくらむつの國の長柄の橋や千度渡らん
けふも又雲のかけはしわたしけりなからののはしの雨の夕ぐれ
跡をたに長柄の橋のたとらん霧たちわたる夕暮の空
橋柱くちにける名をしるしにて昔なからののあとそはかなき
思ひ出よなからの橋の跡絶てむなしき名のみ栲やはてなん
吳竹のみよはかきらす春の日のなからの橋はつくりかふとも

玉河里

日にみかき風にみかける光かなのとかにすめる玉河のさとい
とりとむる物にしあらは玉河の底なる月もさてこそはみめ
てつくりやさらすかきれの朝露をつらぬきとめぬ玉河の里
天の原雲の波間にみかき出て月そやとれる玉河のさと
光さす里を尋てすむ月のかけをみかけるたま河の里
大方は秋とも分ぬ里の名に光をみかく玉河のさと
たま河にさらす手つくりさらによにたのむ日影の哀過行
月の秋雪のあしたもうの花のおもかけたえぬ玉河の里
袖の露秋はならひといひなからまなくもちるかたま河の里
時わかぬ身はいつとも卯花の袖に露けき玉かはのさと
あきらけき御代の光に久堅の月影きよき玉河の里
萩原や末もたはにをく露の枝まさり行たま河のさと

生浦

ちる波は春の色にそさくらあさのおふの浦かせ今も吹らし
しほみては入ぬる草となるなしのかたえにかゝる生の浦なし
何ゆへか底のみるめも生の浦に逢ことなしの名には立ちむ
ありそ海の行年波をかされきていく世に成ぬおふの浦なし

春の雨にひらけし花の一枝を波にかさしておふの浦なし
なるなしは花こそかれて櫻麻のおふの浦なみ立まかふまて
いたつらに身は花さかぬ櫻あさのおふの浦波むそちこえなは
限りあれは花さく比やいつならん身はいたつらに生の浦なし
かりてはすあまのしわざもことはに絶するめや生の浦波
世中に有とはなしに四十あまりかたへ越ゆくおふのうらなみ
おもふ事むなしき年の生のうらかへらぬ波そ身をとめて行
秋をへてみるとも盡し櫻麻の生の浦なし 數まさりつゝ

佐夜中山

さゝの葉はさやの中山吹風にのれぬ夢もむすはす
これよりもふかき嵐に聞馴て今夜はぬるさやの中山
關の戸をさそひし人は出やうて在明の月のさやの中山
てる月を岩根かたしき終夜さやかにみつるさやの中やま
都出し秋はかはらぬ袖の露もさやはみたれしさやの中やま
よそながら嵐のこゑのさひしさなをへてやきかむさやの中山
旅人の草のまくらになくたちろのさやの中山今朝そ越なん
夕かりの岩根の雲にかされて猶袖さむしさやの中山
ふしわひの旅人の床を慎の葉に吹やあらしなやの中山
中々にさやの中山うき物と何しか身なもおもひしりけん
送るとて月も嵐もたのまれすわれ獨ゆくさやの中山
けふも又さやの中山越かててしらぬ庭に月をまつかな
嵯峨野

狩人の草分衣はしもあへず秋のさかの、よものしら露
嵯峨の山よものみゆきはうつむとも野への故道跡やみゆらん
結び置し秋のさかの、庵より床は草葉の露になれつゝ

なへてよのさかの、露とみしかとも心よりなき秋も有けり
花をみし秋のさかの、露の色も枯葉の霜にかはる月影
さかの山むかし跡を尋ねればおもふも遠し野へのふる道
暮れともさか野は過て廣澤やと、はなけの月の影かは
野へ寒み秋のさかなる山風にならばぬ事かむしの鳴なる
名にたてゝ嵐ときゝしやま風に秋のさか野の色そしほるゝ
ゆふされは秋のさかの、鹿の音に山もとふかき露そこほるゝ
けふのみとたつもなけくやさかの山みゆきも遠きのへの故道
時しあれば暮行秋のさかなれやかれ野の薄山風そふく

角太河

今夜又たか宿からいほさきの角田河原の秋の月かけ
みやこ鳥角太河原に舟出しぬさしてとふへき人しなれば
水莖のあとかさなかつ角太河言つてやらん人もといひこす
たれこゝに角太河原の都鳥みやこ戀しきれのみ鳴とも
昔さそふ月は雲井に角田河はるかにかなしおもふみやこも
都にてなれし月さへすみた河ことゝふ鳥のうき音のみかは
月かけのさすやいほさき角田河越てまつちの山のかひより
なかくに我に事とへ都鳥すむや河邊の外はこたへむ
角田河なになつ鳥の都にはまつらん月をおしむ山のは
名にしおふ鳥にことゝふ角田河昔のなみのあとを戀つゝ
忘るなよなれのみこゝにすみた河我おもふ事鳥の名もうし
わたりし守しはしやすらへ角太河ぬれぬといは、暮を待らん
飴磨市

草も木もしくるゝころやあき人のしかまのかちり色増らん
かすならぬ飴磨の市になつ民も君を千世とやみなあふくらん

晴間に先朝霧を立こめてしかまの市に出るさと人
世にふれはしかまの市にたつ民のくるしからてはなき身也見
身にしめてなとあなかに戀をのみしかまの市に染かへぬ覽
見たたせは秋の夕霧立ましりしかまの市はそこしられす
しりなからしかまの市のかた底久しき御代につくりかさねん
染てほすしかまのかちをみるよりもねれて色こき我思ひかな
いかにしてうき身をかへん播磨なる飭磨の市に道をたつて
君が代はしかまの市になくかちの千年をへても色やまさらん
思ひわひ飭磨の市にましろとも身をはなるへき浮世なるかは
なそかく飭磨の市のあなかに身をうき物と思ひそめけん

若浦

わか演例集の浦や羽うちかはし飛千鳥浪にかきなく跡や残らん

カキ

君をいはふたよりにつけよみくまの、跡たれそめて若の浦波
よりくへき方もなきさのもしほ草かき盡しても若の浦浪
をのつから波によりくる玉もなしふくとはすれとわかの浦風
人なみに君忘れすはわかの浦風のうら入江のもくつ敷ならずとも
若の浦やまた道しらぬ浪の上にうきたる舟はやるかたそなき
わかの浦風の浦の神に書やるもしほ草心になひく手向ともかな
みつしほに靡くもくつもかたをなみあしへにまかふ若の浦風
若のうらの霧たつなみの夕つくよほのかにまかふたつの一聲
吹迷ふわかの浦風のうら風しるへせよ玉津嶋もる神のまに／＼
わかの浦風の浦や埴干のたつも道はれて雲の月に霜や重ねん
若の浦やよるへもしらて行船のあと吹送れ沖津埴かせ
しるしらす行も歸るも逢坂のせきの清水にかけはみゆらし

會坂關

あふ坂の關の小河に引とめてしはし水かへ望月の駒
君に猶あふさか山もかひそなき杉のふる葉に色もイしみえは
待かれし世に相坂の關守はうき身ひとつにゆるさゝりけん
いたつらに杉の梢の下葉まで道ある御代にあふさかのせき
千世ふへき君かためしに逢坂のせきの杉むら色もかはらす
あふ坂の關の庵の琴の音はふかき梢の松かせそふく
たのめ猶關のし水はよとむとも道ある御代に逢坂の山
相坂の關やはけふもあれにけり時雨はかりそる人もなし
年をへてゆき、の人も君が代に猶よるつ代はあふさかのせき
たひ衣いつより露をかきぬらんまた都なるあふさかのせき
春の色に梢の空はかはれとも猶山さむしあふさかのせき

三津濱

みつの濱岩こすなみのわすれ貝わすれすみゆるまつかれの夢
大淀のみつの濱邊に船とめて磯の松かれまくらせんわれ
まちこひし昔は今もしのはれてかたえさひしきみつのほま松
大とものみつの濱松老にけりいく年波の行衛しらすも
目のもとの光は君か御かけとや待戀ぬらん三津の濱松
松かれの枕の上になとつれて夢たにみえすみつの濱かせ
暮行はさしてそこふる日本のみつの濱松いつとわけゝり
ふりにけりそのよもしらぬ梢かな浪間に高き三津の濱松
霞たつみつのほま松音はかり有とやこゝにかよふうらせ
君が代に三津の濱松いくかへりまれなる花のさかむとすらん
中々にみつの濱松たまさかにとはてそ人の過へかりけり
大とものみつのはま邊の松かえに年經てすめるあしたつの聲
右建保名所百首予之所藏三本及舊印本照應畢

群書類從卷第一百七十二

和歌部廿七百首六

弘長百首 稱七玉集

題

春二十首

初春

霞二首

鶯

春雪

若菜

梅二首

柳

春雨

歸鴈

花五首

春月

藤

欸冬

三月盡

夏十首

卯花

郭公三首

夏月

五月雨二首

螢

夕立

納涼

秋二十首

早秋

七夕

七夕後朝

露

萩

萩

薄

虫

鹿

初鴈

月五首

擣衣

霧

紅葉二首

暮秋

冬十首

初冬

時雨

落葉二首

冬月

霰

雪三首

歲暮

戀二十首

初戀

忍戀二首

不逢戀五首

初逢戀

曉別戀

後朝戀

遇不逢戀五首

忘戀三首

恨戀

雜二十首

曉

松

竹

山

河

橋

關

旅二首

海路

山家二首

田家

純懷二首

懷舊

夢

神祇

釋教

祝

作者

入道前太政大臣實氏常盤井

正二位藤原朝臣基家後九條前內大臣

正二位藤原朝臣家良衣笠前內大臣

入道民部卿爲家卿

正二位行中納言兼侍從藤原朝臣爲氏

正三位行侍從藤原朝臣行家

沙彌寂西俗名藤原信實朝臣

詠百首和歌

春二十首

初春

あさ日さす影ものとかに久方の空より春の色やみゆらん

實空基家

雪はなをたかきやかけて民の戸にふるもにきはふ千代の初春

家良

あふ坂の關の杉むら雪消て道ある御代と春は來にけり

融覺

たちかへり春は來にけりさゝ浪や氷吹とくしかのうらかせ

爲氏

春たつといつしかみえてひさかたや空にかすめる天のかく山

行家

春のくるひかりもしろくあさ日山嶺よりかすむ影そのときき

寂西

をしなへてのときき御代の天つ空あふきてみれば春もきに見

霞二首

みるまゝに浪ちはるかに成にけりかすめはとをき浦のはつ嶋

今さらにかすますとてもなにはかたなかむる物を春の明ほの

あつまちの春の光は世にみちて霞そあまる野にも山にも

かく山のあまちのかすみなりはへて神もや青衣はしけん

かたなかのあしたの原のかすみよりをち方人も春や知らん

立のほる雲もなよはぬふしのねに煙をこめてかすむ春哉

いくとせかへたてきぬらん春霞ふるの山へのあけほの、空

なには津のしほやく煙立こめていまは春へとかすむ空哉
 たちかへるとしをへたてゝ朝霞たなひきわたるよもの山端
 難波かたかりふくあしのやへ霞ひまこそなけれ春のあけほの
 さほひめの春のころもを立こめてまたひとへなるあさ霞かな
 うすくこきかすみの色は遠近の山のみとりの見する成けり
 ふるさとのよしのゝ霞たなひきぬふかき山にも春やきぬらん
 あさこほりはやうちとけよ川邊なる霞の衣そてはぬるとも

鶯

物ことにあらたまなる春なれば我身ふるすなうくひすの聲
 いほむすふ野原にかよふうくひすのをのれもかくる春の玉章
 いくとせもきゝてふりぬる鶯のなくはかりなむかしなり共
 花さかぬみやまかくれば鶯のこゑのつてにそ春もしらるゝ
 うくひすのしるへはかりやいそく覽花のかをそき春の山かせ
 かくしつゝふりゆく身には今そきく四十年の春の鶯の聲
 谷をいつるほとはいづくのちかければまた朝またき鶯のなく

春雪

あかすみて思ひあはせむみよしのゝ花よりさきにふれる白雪
 おさまれるあきつ嶋はをしなへて道ある春の雪のむらきえ
 さらにもたむすほゝれたる若草の末野の原に雪はふりつゝ
 まつさける花とやいはむうちわたす遠方野への春のあは雪
 たちわたるのかすみのうへの山風に猶空さむく雪はふりつゝ
 みこもりのおかひの岡のせきもあすあはにや春の雪はきゆ覽
 ふる雪はなをこそきえれあら玉の年を吹こす冬の嵐に

若菜

都八けふや野原にうちむれてしるもしらぬも若菜摘らん

たれか又山田のはらの雪わけて神代の跡に若菜摘らん
あさみとり霞の衣春はきぬすその、若菜今やつまゝし
ぬれつゝやわかなつむらんしら雪のふる里人のかすか野の原
誰か又雪まを分てかすかの、草のはつかにわかなつむらん
つめはかつあらはれに覓まさこ行澤のみかけにおふる若菜は
つみたむるわかなを見ればかすか野に袖こそ春の雪ま也けれ

梅二首

なにはつに今や春へとさきぬらん浦つたひ行梅のした風
すみ染の袖にはおらし梅のはなとまる色にならひもそする
あたら夜の月をもらさて見る人や軒端の梅のあはれしらん
梅花南も北もおなし枝にさきちる事のなとかはるらむ
にほひこそ猶のこりけれ梅花たちよるはかりありし名残に
見し人はありしにもにすふりぬれとおなし色香に匂ふ梅かえ
むめかゝの身にしむ比の春風は春のたもと人やかめん
梅のはな色香はかりあるしにて宿はきたかにとふ人もなし
さきさかすなにかよそなる梅花にほひそ風のしるへなりけれ
いたつらにちりや過なん梅花さかりまたれて人はとひこそす
紅ににほへるいもか袖かけておりまかへたるむめのはつはな
ちるとみてさてもあられぬつらさ哉人のたのめし宿の梅かえ
春のきてこれこそしのはつしほのうす紅とみゆる梅か枝
しるしらす盛りはいまか梅のはなたかなめならし色も匂ひも

柳

影見ゆる入江の水の玉も猶みとりたそふるきしの青柳
あなやきのうちたれ髪誰まつといはれの枕よるはらふ覽
さは山のみれに霞はたなひきて川そひ柳春めきにけり

あさ緑やなきの枝のかたいともてぬきたる玉の春のあさ露
浅みとり色そめかけて春風の枝にみたる、青柳の糸
ないくとはみゆる物からあなやきの枝もならさぬ春の風哉
青柳のいともかしこし我君の御代の草木はさそなひくらん

春 雨

春雨をなへての雨とおもふなよ四方の草木も君かめくみそ
さゝかにもすかく草葉にさほ姫のてひきの糸の雨そかゝれる
山のはのかすむとみゆるあさあけにやかてふりぬる春雨の空
たなやめの袖もほしあへすあすか風唯いたつらに春雨そふる
山のはに雲のたえまもみえわかす霞よりふる春雨の空
岡のへはやかすともあれ春雨のふるにつけては草もゝえなん
春雨にかはつなくなりいその神ふるの山田も時やしるらん

歸 鴈

あまさかる雲井の鴈の歸さにしらぬこしちのことやつてまし
たちわたる雲のあなた山越て飛かすみたる春の鴈かれ
誰ために秋こそ鴈のなきけとておしむによらぬ春の別そ
山のはのかすめる空の横雲にわかるとみえて歸鴈かれ
つれなしや有明の月の山のはになこりしられて歸鴈かれ
あはれ我したふなすてゝふる郷になかつてか鴈の行らん
春といへと猶もこしちはしら雪のふる道とめてかへる鴈かれ

花 五首

なかむれはよものしら雲かくらくの初瀬の山は花匂ふらし
風にほふうす紅のはなさくら春の衣はかすみともなし
やま櫻ちりしく池のはなち鳥なのか羽風に波やよすらん
風吹は雪とふる木のさくら花春のなこりはなれもかなしや

七十の春をまちえてかきす共ふたゝひ花の色をこそ見ぬ
 山はみなあつまもろこしかすみけりわか國ひろく花や咲らん
 今朝よりもたつたの櫻色そき夕日や花に時雨なるらん
 さくら花さけるをみれば三吉の、瀧は山よりおちぬ日をなき
 あさことの老のつとめもやすむまは浮世のことく花をみる哉
 風吹は浦はひかたのしほつ山花をみちくる奥津しら波
 みとりなる外山の松のたえまよりあらはれてさく花櫻哉
 白雲をそれかとばかりみしかともまかひはつへき花の色かは
 いたつらに春そへにける櫻花待もおしむも身の思ひにて
 この春も又こそあたにうつろはめならひなきたる花の心は
 人ことにおしむ思ひの程をたにさそともしらて花やちるらん
 しら雲の色はひとつをさくら花さきぬと匂ふ春の山風
 春の夜のゝとかにあくる花の色になきたるあさと山風そ吹
 よしさらはちるまてはみし山櫻花のさかりを面影にして
 いにしへの大内山のさくら花おも影ならてみぬそかなしき
 ちりかゝる花の潤とそなりにけるみなさ川の春のみなとは
 花の色はそれともわかす山櫻あまきる雲の春のあけほの
 やま櫻さけるさかざるをしなへてさなから花とみゆる白雲
 雲のたて霞のぬきになりはへて花はにしきの名にそ立ける
 ちりはてん後をはしらすさくら花あかね心のふかくもある哉
 来てみむといひし計にうつろひぬやよひの花の春の暮かた
 花さかはゆかんとおもふ故郷のみかきか原のかすみぬるかな
 なには人ふりきつみれば雲かゝるいこまのたけの初さくら花
 我宿はとふ人まれになりやせんたのむよしのゝ花も散なは
 雨はるゝこちの返しの春風に露もほしあへすちる櫻かな

ちる花をこれはえさるぬ別そとかつなくさめて猶悲しき
 たちわたる霞にもろゝ山たかみとなき晴まそ花はみえける
 さきにけりかつらさ山のさくら花雲にまかふを今さかりとて
 雲の上になれし昔の花の陰猶も年へて思ひやるかな
 山櫻にほふさかりをみし物をあらぬつらさの春の風かな
 家路をはいそかね物をににかへる程をも花のわすれましかは

春月

しら雲をいとはてそみる春の夜の花のおくなる山端の月
 あはれ也うき身の影もろ共につけて身にしむ春のよの月
 花の香は霞にもろゝやま風に猶むもれたる春の夜の月
 あかすみる花のにはひもふかきよの雲井にかすむ春の月影
 みすもあらすみもせぬ影の中空にあやなくかすむ春のよの月
 これはこの春とて月のかすめるを涙のとかと思ひけるかな
 かすむ夜の月の影こそうとかられおほゝれてみる老のれ覺に

藤

おりかくる波のかさしの花なれや袖にうつろふたこのうら藤
 あま人はかさしてかへる藤なみのかけなる海に春やのこれる
 かさしとておる海士人やなかるらんたこの浦藤盛りなれとも
 いつはりの花とそ見ゆる松山の梢をこえてかゝる藤波
 みかり人今やかさゝん春日のにさかりしるゝ春のふち浪
 年經ぬる松はこたかく成にけり咲そふ藤の雲かゝるまて
 今しはしつけの藤なみ待とてやなこりな猶もかけてみすらん

欸冬

ちらぬまに行てをみはやいにしへの色はかはらし井手の山吹
 山吹のもとあらの花を咲にけるまた秋となき萩の藤に

行水は影をそあらふ岩たかきみむろのきしの山ふきの花
ちればかつ波のかけたるしからみやゐてこす風の歎冬の花
吉野川岩こす水に影みえて波におらるゝ山ふきの花はな
やまふきのちりける時のゐてにきてつらき里とも思ひける哉
あはれなる春の暮かな歎冬の花には物を思ひしれとや

三月盡

月日とてやすくな過そ暮て行やよひの空の春の別路
けふは又やそしまはるゝ夕霞人につけてや春も行覽
吹風のさそへは花はちりもせよ心と春のいかにすくらん
身のよそに思ひなせとも行春のなこりは猶を物わすれぬ
おもへともいふかひもなしとゝまらぬ春のかすみ袖の別は
しはしともえそひきとめぬ梓弓やよひの空の春の別は
いかにせんなかき春日の人たのめやよひの月はけふそ暮ぬる

夏十首

卯花

布さらすうちわたりの垣れよりめつらしけなくさける卯花
をそ櫻咲そふ谷のうのはなやおなし雪けの水のしら波
谷深き岸のいはれの卯花は浪のかけたる色にさきつゝ
柳とる比とはしるし白妙のゆふかけわたす杜のうのはな
うの花の色をかされてしらたへの波もてゆへる玉川の里
たちぬはぬたかいにしへの衣とて猶布さらすやとの卯花
卯花の影にかくれやなかるらんさやけき月の色にまかへて
かはらすと人にかたらん時鳥むかしの聲は我のみそきく

郭公三首

をちかへりなけやき月の郭公やみのうつゝの道まとふかに
いにしへの事かたらはん時鳥今夜はやとの軒のたちはな
里人のおしむかこれもほとゝきす夕の山をいともやられは
いかなればあめのしたにて時鳥雲なき空の月に鳴らん
曉はうさこそまさればほとゝきす袖の別の鳥なられとも
ほとゝきす鳴やさ月としりながら猶あらましに待ぬ日をなき
しのひれを誰にしらせて郭公まれなる比にまたれそめけむ
なこりましてたふあまりに時鳥又行かたを思ひやるかな
しのふらん心もしらす時鳥五月こぬまの音こそまたるれ
郭公たれかまさると夏の夜をねぬになくゝあかしたるかな
里わかすなれるなれとも郭公あさくら山のたそかれの空
またれつゝ有明まての時鳥いかにつれなき初音とかしる
うつゝともなき一聲の郭公れなくに夢とおもひなす哉
あま雲のよそにかなたらふ時鳥さすかに聲もきゝそふりぬる
忍ふへきゆへなかなたらへ郭公ことほりならはこぬもうらみし
あまな舟初せの山のほとゝきすいさよふ雲のほのかにそなく
月よりもいてきたたちてよひのまのくらまの山になく郭公
年ことに心つくしのほとゝきすいつもをそきは初音なりけり
あし引の山郭公なきぬなりまたまし物をあけほのゝ空
ふる郷の花たち花に時鳥我もさ月をまつと鳴なり

夏月

雲きゆる空にや月のさえつらん庭もこほらぬ夏の夜の霜
手にならすおなしうちわの里人は夏のなかほの月やみゆらん
みしか夜の空ゆく月のやすらひなぞそひのこしてあくる東雲
かさゝきの鏡の影もうつりあへすさす程もなき夏のよの月

あけやすき影こそ空にしられけり出て程なき夏のよの月
夏の夜の夕やみなからふけぬれば待いつる月をみる程そなき
見はてぬを我めかれかとおもふまにはやあけにけり短夜の月

五月雨二首

かち人のわたせの波もみちたえぬにふのかはらの五月雨の比
たえもせすけふはいくかと五月雨のいとぬきかくる軒の玉水
ふる雨のくもる五月の玉くしけあしきの河は水まさるらし
山風のそみたれはらふまきのはに日比たまれる露やおつらん
ぬれてほすひまこそなけれ夏かりのあしやの里の五月雨の比
さしも草さしもひまなき五月雨にいふきのたけの猶もゆ覽
大井川音まさるなりある雲のなぐらの山の五月雨のころ
五月雨の草のいほりのよるの袖しつくも露もさてや朽なん
伊勢のあまのおなしなきさの捨衣猶しほたる、五月雨の比
うちわたすよとの澤水波こえてつれよりまさるさみたれの頃
行人のたむけもみえず玉かきのみつのみなとの五月雨のころ
さみたれのみのしろ衣ほすまなき袖やなになり戀もせなくに
みちのへのさの、中川ふちとのみ見るも瀬たえの五月雨の比
早苗とるたこのなかさなその儘にぬかてそかへる五月雨の比

螢

月まつとそむくるまとの燈を、のれか、けて行螢かな
とふ螢いはもる水にやとる夜は思ひやいと、わきかへるらん
こゝろにはにたてすとや忍ふらんもゆる螢のしるき思ひな
かくしえぬむくらのやとの身の程を思ひしれとともとふ螢かな
おもひあまる身なうき草のみたれつゝ、さそふ水あれと飛螢哉
夏の野に草の袂はつゝめとももゆる螢のかくれやはする

もる水もいしまくたくるしからみにせくや思ひと行螢哉

夕立

風さばく雲のふるまひたゝならてかれてまたるゝ夕たちの空
夕立のこゝろといそくうき雲をしたりかほにも吹あらしかな
この里もふりぬと思ふ夕立のくもるはかりに過にけるかな
ときは木のした葉もたへす夕立の雲吹はらふ深山おるしは
夏山のならのはかしは風過て嶺たちのほる夕たちの雲
なる神の音にもしるしまきもくのひはらの山の夕立の空
時のまの雲の一むら里わけていたりいたらぬ夕たちの雨

納涼

し水せくいはれの床の苦むしろこゝにはしかし秋のけしきも
夏は又いてみの浦をすみよしとましはおりしき誰すゝむらん
みち野へのもりの日影の夕かせにいそくも人のえやは過ける
またきより秋かと思ふなぐら山夕暮いそく松のした風
すゝしさはたちよるからにしられけり秋風ちかき衣手のもり
夏山の木のしたかけのいはし水風まつ程もいくむすひしつ
つの國のなにはの里の夕すゝみあしのしのひに秋風を吹

秋二十首

早秋

秋のきてけふみか月の雲まより心つくしの影そほのめく
いその神ふる野の松の音までもむかしなのこす秋の初風
草のうへにあさなく庭の露みれば袖もすゝしく秋はきにけり
かたしきの袖こそぬるれしら露の曉おきに秋やきぬらん
いつのまに秋とは風の吹そめてあさけ涼しく音かはる覽

いつしかも身にしむ風とおもふより心に秋の色はそめつゝ
あはれなる老の世なこそおとろかせ今年もきつ秋の初風

七夕

代々をへておもふもくるし七夕にかしつる糸のたえぬ契は
かさゝきの川風たちぬ七夕の紅葉のとはり波やかくらん
織女のおふせの川のわたしもり暮はてすともみ舟よせん
久かたの雲井はるかに待わひしあまつほし合の秋も來にけり
七夕の契を秋の一夜そともみちのはしにまちわたるかな
織女のをるあさぬのゝ秋ころもむねあひかたくなと契らん
年において一夜なれとも七夕のそらたのめせぬ秋はきにけり

七夕後朝

かさゝきのよりはの橋の中絶はかへる別はなげかさらまし
明方のふしの煙や星合の空の別のおもひなるらん
秋風に雲の衣のかへるさもまつ七夕のうらみとそしる
あけわたるあまの川せの秋風^{原イ}に七夕つめの袖かへるらし
けさよりは天の川波立歸雲のよそに戀わたるらし
あかなくに妻をくる覧ひこ星のけさの船出はかちもいそかし
いそげはそあさ瀬もたとる天川かへさの道は舟よそひせよ

露

かりねする草の枕の秋かせに涙よりちる野への白露
涙こゆるありその眞葛うら葉まであまりて海の露そこほるゝ
あはれしる秋の夕のしら露はたか袖よりかむすひをめけん
よなくの涙しくは苔衣秋なく露の程も見てまし
色々にうつろはんとや宮城のゝ花の干草の秋のしら露
われのみか露をくほとのかかしきはこそ秋の秋の夕暮

草むらのあさちか露のをきところけにもふかしとみゆる宿哉

萩

山里は野へもひとつに鹿そすむうつさぬ庭の萩はきの花
露草に袖すりませむ秋萩のひと花衣色ふかくとも
なく鴈の涙とはみす大かたの秋くるからの萩のした露
秋萩のかつちる花のした葉よりたかいねかてと色かはらん
秋萩はうつりにけりなみや人の袖つき衣色かはるまで
おれは又衣手匂ふこ萩原かならず旅のしろしならねと
萩か花さかりをみれば秋のゝにたゝおりからのにしき成けり

萩

おきの葉に風まつ程の夕暮をなとつれかへて人のとへかし
萩のはにむかしはかゝる風もなし老はいかなる夕なるらむ
おきのには秋風ふかぬ時たにもこほれならはぬ袖の露かは
いにしへはおとろかされし萩のはに吹くる風をれ覺にそまつ
萩のはのそよとなつて我ために秋はかなしき夕暮の空
なとそよくあしへの萩のそれとなく吹まかひたるわかの浦風
我宿に萩のはならは音せんとたのめかほなる秋の夕かせ

蕨

旅人のいる野のすゝきはほに出て袖の敷そふ秋風そふく
秋のゝのはつほのすゝきあさなゝ花のまひちに結ふ白露
人とはてふるき籬の花すゝきまねきなれにし秋や忘ぬ
花薄うへてたにみんまねけとも人こぬ宿はなくきめにして
ほのかなるをちかた人の袖見えて秋風なひく花すゝきかな
見わたせばおはなかなたよりさゝ波やをかたの原に秋風を吹
はつお花袖の中にや秋かせのいるのゝすゝき人まねくらん

虫

日暮れば野もせの草になく露の數よりしけき松虫の聲
きり／＼すなく聲毎に身にしむはいかにき／＼なすれ覺なる覽
あさちばら松虫のねもなきかれて夜さむの霜をむすほれ行
きり／＼す思ふ心はいかにともたかひにしらてなきあかす哉
あしかきのま近き程のきり／＼す思やなそといかてとはまし
いへはえに何を思ひのよもすからなきにのみ鳴きり／＼す哉
露をさむみしつくもあまる秋草になきこほれたる虫の聲かな

鹿

をしか鳴外山のすそのは／＼そ原色にいててや妻を戀ふらん
しら露をならしの岡のされかつら分くる鹿や涙そふらむ
高砂の尾上の霧に立鹿もさそなきぬへき秋のゆふ暮
小倉山秋はならひと鳴鹿をいつともわかぬ涙にそきく
秋の野のお花か露を涙にてしほる／＼鹿の妻やつれなき
日の暮にいはたのなをゆきしかはさな鹿なきつ妻を戀らし
妻よふはしのひやすると思ひしにさもあらはなる鹿の聲かな

初 鴈

ゆく方もさためぬ夜半のむら雲にさわたる秋の初鴈の聲
山本の雲のしたおひなかき夜にいくむすひして鴈もきぬらん
夜やさむき友さそひくる初かりのかはすつはさに秋風をふく
きけはまつ涙こほる／＼秋風やはつかりかれのしるへなる覽
今よりの衣かり金秋風にたか夜さむとかなきてきぬらん
ときわかぬこしのしらねの雪を見て秋とはいかて鴈のきぬ覽
ふりくるとおもふにつけてさひしきは鴈の涙の秋の村雨

月五首

雲もなきみとりの空の夕は山いてぬよりすむ月の色かな
さしのほるいなのみなとの夕しほに光みちたる秋のよの月
久方のあまのいは戸の關もかなとまらぬ月の影をいさめむ
なく／＼も我夜深ぬとみつるかなかたふく月を袖にやとじて
老ぬとて身なもなけかし在明の月もさかりの比は過にき
月影は千里も清くみつしほにみなみはれたる吹あけのはま
かはる世にもとの光のくまなきは月のかつらやふる木なる覽
さらてたに草にやつる／＼宿の月さひしかれとてよ深ぬらん
なれきつる人もまれなる世中のこりて秋の月をみるかな
心あらは猶いかならん數ならぬ身にたにかなし秋のよの月
人ことにかはるにかはる影もなしなさけ有ける秋の月かな
秋風の露吹とめぬ庭草にむら雨過て月その／＼これる
なかめきてさのみつきせぬ涙とも老てしりぬる秋のよの月
夜さむなるいく田の杜の秋風にとは〔れ〕ぬ里も月や見るらん
かさ／＼きのとわたる橋も白妙の初霜いそく秋の月かけ
秋風の雲吹はらふ高砂のおのへの松をいつる月かけ
くもりなき君か鏡といにしへも今をもらす秋のよの月
身のうさのさのみはいかにまさるそと又廻りあふ月やみる覽
つかへこし秋はむそちの遠けれと雲井の月をみる心ちする
みる人の老となるてふ秋のよの月もさかりの過にけるかな
うき雲の跡なき空の秋風に山のはきよくいつる月かけ
なのつかからよそなる雲の影もなしかつらき山の秋のよの月
つかへつ／＼ともかくにもなれて見む君かや千代の秋の月影
めくりあふ程は雲井の秋の月みぬよしられてすめる影かな
しほかせの波かけ衣秋をへて月になれたるすまの浦人

山のはの月出かたになり行はほのみえわたる松のむらたち
久方のあまのときまの隙をあらみわかやとりとや月もすむ
秋なへてつもれば霜をはらひつゝ老にかへてもみつる月かな
秋そかくよもさえずしなと思へとも雪にまかへる山のはの月
玉くしけあしきの川の瀬をはやみあけゆく月の影そなるゝ
まちえぬは老の身にこそかなしけれをそくな出そ山のはの月
くもれとはおもはぬ物を秋のよの月に涙のなとこほる
覺むかしなはおもかはりして思へともみもわすれぬ月の影哉
ぬれてこそ月なもやとせわか袖の露をはほさし涙なりとも
さらしなは心の中の里なれば月みることに身をやとすかな

搦衣

うつ人は千里のやとにかはれともおなし聲なるあさのさ衣
しら雲のたえすかゝれる谷の戸にすめはすむとや衣うつらん
日にそへて身にしみまさる秋風によなものをこさすうつ衣哉
ふきまさる秋風さむみさよ衣たれまつとてかうちはしめけん
露霜のふるさと人のから衣おなしよさむにうたぬまもなし
君はこそすふけにもふけぬ今はさばうたてやれなんよはのさ衣
やまかつのきぬたのつちをおきもせすれもせて夜半に打衣哉

霧

あけ行はみちこそみゆれたかせ舟立河霧の空にきえつゝ
夕日さす山本となくゆく船のかたはいてたる秋の川きり
さしのほる日影のたくなるまゝに空に消行みぬの朝霧
朝ほらけ嵐の山はみねはれてふもととなくたる秋の川きり
横雲のたなひく空はあけはてゝ猶きりふかき秋の山もと
岩こゆる遠かた波の音はしてゆくせもみえぬ秋の川霧

深山邊の霧かくれこそさひしけれ晴まやいつく秋の夕くれ

紅葉一首

たてぬきに時雨の雨のなる錦龍田のちみらいまかそむらん
夕つくひうつるふ雲の雲まより光さしそふ峯のちみちは
やたひこそ霜はをくなれ三室山神そ干しほにそめもなすらん
山のはにうす霧かゝる紅葉々の色こくなしてゆくあらしかな
おほかたの時雨もまたす露霜のいま色みする神並の森
たつた姫今やこそすゑのから錦をりはへ秋のいろそしくるゝ
露なぬき嵐なたとと山姫のなれる錦や秋のもみちは
時雨の雨いかにそめてかみかさ山さしも紅葉のいろなそふ
覺そめのこそ木すゑもみえす立田姫宮の千入のよもの紅葉は
唐錦そめかけてけり棹山の梢しくるゝ秋のもみちは
色そむる木のはの里のから錦あらくなたちそすかのやま風
露さむく秋なく蟬の日くらしもあかすそみつるやまの紅葉々
今もふる立田の山のむら時雨千入の紅葉そめぬ日もなし
紅葉はの山をめぐりて色つくはしくるゝあとのみゆる成けり

暮稿

さしてたになかめわひつる夕暮の秋のかたみとなるそ悲しき
いつ方も關の戸さゝぬ御代なればさそ道ひろく秋も行らん
ゆく秋に我手向せん立田姫紅葉のめさはしはしなかなん
なく露もなのか物からかたみとてぬれてや秋のけふ歸らん
行秋の風につけてもまなくす原かへるうらみはいふかひもなし
ゆく秋の限りなかれて定めすは今いくかなかおしひとめまし
木のはちるやとはいかにと問人のおしみなこそする秋の暮かな

冬十首

初冬

今朝よりは初霜しるし淺茅原昨日の露やむすひかふらん
おしみえぬ涙の露をかたみにて袖にのこれる秋もはかなし
へたてこしよもきのかきも霜かれてあらはに冬の初をそみる
いつともかるゝ人目の山里は草のはらにそ冬をしりぬる
いつしかとうらかれにけり冬きぬといふはかりなる霜の下艸
あき霜のなきてしみれば草かれのなゝふる道冬はきにけり
冬のくるみちのしは草霜枯とおもふそやかて人目なりける

時雨

あまの原雲ゐをかけてかつらきやたかまの山は時雨ふるなり
中空に我身しくれて行雲のかたかりたになとなるらん
この比のなりひそかしといひなからさも時雨ける神無月哉
いまは世に我身時雨とふりはてゝ色に出へきことのはもなし
うちつけにくもりもあへす神無月冬の空ともふる時雨哉
ふりふらぬ里のありとは夕時雨むら／＼くもる空にこそしれ
冬はきぬ時雨は袖にはしわひぬあはれいかなる神無月そも

落葉二首

秋きぬとうつるひそめしむむる山木の葉ふるまで成にける哉
大井河秋のなこりを尋ねればいり江の水にしつむ紅葉々々
世をは皆はてうき物といつしりて残る枝なく木のはちるらん
木からしもいさとやさそふ足引のかなたの冬の紅葉々々
神無月木のはのもろき夕暮になとらしとふる我涙かな
神なひの山の木からしふかぬ日も時雨にもろくちる紅葉哉
ちりはつる後さへあとをさためぬは嵐の末の木のはなりけり

いまよりの霜まちえたる冬のはに心よはくもちる涙かな
もみちはの秋のなこりのかた見たにわれとのこさぬ木枯の風
かみな月空さためなき浮雲のしくれぬ隙もふるこのはかな
いつかとおもしむ木からしのさをはれぬらん山の紅葉は
けふは又山ちもえこそこえやられいはたの杵ちるをみるとて
横の屋に時雨のなとのさのみやときゝ重ぬるそこのは成ける
今は、やこのはなかれて千はやふる神なひ川に冬は來にけり

冬月

冬さむみ瀧ある山の木枯にこほるも月の光なりけり
月のこるむろのやしまの明方に思ひありとや千鳥鳴らん
をきまよふ霜ふかきよの浦風に月もこほれるまのゝ入海
おもひいつるかひこそなけれ代々ふるき豊の明の冬のよの月
冬はまた木のはかくれのくまもなしあらしに氷る夜半の月影
村雲のかゝれとてしもむは玉のよわたる月のなとしくるらん
霜の夜のみ山おろしは寒けれとさもあらはあれと月をみる哉

雪

かれはてゝ霜のしたなる萩のはもくたくはかりにふる散かな
波はみなこほりてむすふいと川いはをこゆるは散なりけり
吹風のあらちのたかれ雪さえてやたのかれのに散ふるなり
吹きさく深山あらしの篠のはにぬる夜すくなくふる散かな
冬きてははつせなとめの衣手に玉とみたれてふるあられかな
うたの野やかれ柴かくれふす鳥の飛たつはかりふる散かな
こほるゝとみるにつけてもたまらぬはいたゝの橋の散成けり

雪三首

みなかみやいつくなるらんわき歸空よりおつるゆきのしら波

こえしとてとふ人もなし我宿のまかきも山とつものしら雪
たちかへるみちとは見すな芳野山いりにし人の跡のしら雪
かり衣すそのにないく冬草の葉わけの鷹も雪はらふらし
雪となりしくれとなりて嶺わけにかゝれる雲も二むらの山
かれてより雪をしきつの浦路までさそすみの江と月もみゆ覧
しからきの外山はかりにみし雪の里までつもの時はきにけり
あまの原雲まもみえすふる雪のいくがともなきみよしの、山
しられしなとはぬを人のなさけとはわれこそみつれ庭の白雪
さらてたにそれかとまかふ山のはの有明の月にふれる白雪
あらし山ふるもつもるもひとつにて雲ある嶺にこほる白雪
さそはるゝ心は雪にかはられと我身ふるれば行方もなし
つもりけるかきりもしらすたか嶋のかち野の雪の冬の明ほの
さゆる夜のあらしの風にふりそめてあくる雲まにつもる白雪
いとゝ又かりにも人の跡たえてつもれば雪のふかくさのさと
さきたゝぬくぬのれたきは人に今朝とひなくれぬる庭の初雪
ふりつもるうはゝの雪の夕こりにこほりてかゝるまきの下露
たかまとのおのへの雪に跡絶てふりにし宮は人もかよはず
ふりつみてあまりさえたる雪の上はさすや朝日も影そ氷れる
ふる雪のつもるおりこそ我宿にあしふみいれて人もとひけれ
見たせはよし野の山にみ雪ふりあはれさむけき冬の空哉

歳暮

おとろかてことしも早く暮にけり花と月とのなかめせしまに
たかしまの柚山川のいかたしはいそく年木をつみやそふらん
しはしこそよそに過ぬと思ひしか身にとまりける年の行來な
むそちあまりなくると思ひし身の上に又かへりける年の暮哉

年くるゝいなはの山のみれの松まつとや春の今かへりこん
春のくれ秋のすきしにならひにきおしむによらて越る年とは
はからさる八十のほかの年の暮つものとたにも今はおほえす

戀二十首

初戀

しらせはやまた色みせぬ立田姫袖にしくれのそむるこゝろを
また背のは山のほくしもえ初て鹿まつとたにいかてしらせん
しらせてもななつれなくはいかゝせんいはねをとかに人や戀まし
人しれぬ戀てふ色もわかなくにおもひそむるはこゝろ成けり
人そむるしけきなさゝの露ならてまつ袖ぬらす我涙かな
なにとして思ひそめける心そと身ながら身社あやしかりけれ
涙のうついそのあらゝしらせてそくたく心の程もみすへき

忍戀二首

ことの葉の露もゝらさし歎つゝ人にしのふの山のかけくさ
かりにても人はしらしなあしれはふうきに年ふるしたの心は
人しれぬこゝろの空は闇なからいかてよなゝ月をみるらん
身をさらぬ心とはん折々はなき名といかゝいひもなすへき
せく涙それもさすかにかきりあればいつ顯れて人にとはれ
なのつから涙のゆへやしられなんゆるす枕のさても朽なは
濁江のみ草かくれのうきぬなはくるしとたにもしる人はなし
いかにせん戀ははてなき陸奥の忍ふばかりにあはてやみなは
いかゝせん身にかふ計おもへ共いはぬにすぐるよその月日を
歎きつゝ戀やしなまし承らへてさそしられば後の名もおし
しるといへは心なかれてよなゝの枕もうとく成にけるかな

せく袖にもらはうき名もたちぬへし身をおもはぬ我涙哉
 なさへての後さへ袖にあまりなはなにを涙のかくれにかせむ
 難波なる入江のを船あしのはにはたかくれても戀わたるかな

不逢戀^{五首}

なき名のみおふのうらなし徒にならぬ戀する身こそつらけれ
 風あらきすさの入江の波越てあちきなききてぬる、袖かな
 契こそ猶かた糸のみたるともあはすはたゆな玉の緒たまき
 たのめてもあたし心をおくの海のあらき磯へはよる船もなし
 なく露の玉つくりえにしけるてふ芦の末葉の亂てそ思ふ
 涙川まろれのうちにまる木橋こぬうき瀬には夢もかよはす
 夏草のその名もしらぬ契ゆへ袖によるへの水やまさらむ
 待かぬる我袂なもしらせはや草のはにのみ秋風そふく
 つれなきを身に寒きよとかこちても君にふるさぬ月を見る哉
 行あひは身にかたそきの契にてあるにまかする松そ久しき
 もしほやくあまの衣はよそにしてなれすつれなき人も有けり
 年もへぬいなはの山のみれの松つれなき中を尙やたのまん
 いつまでかうき田のもりの椎柴のしおても人を戀わたるへき
 徒に朽やてななつたつなくなこえのこすけむすほれつゝ
 いかてなを戀しぬ計こふる身を人つてにたにさそときかせん
 たのめつゝいふきの草のかひもなくもゆる思ひに年をふる哉
 とへかしな蟹のまでかたさのみやはまづに命の承らへもせん
 誰ゆへにおもふとかしるはつせめの手にまぐ玉のをれ亂て
 しらせはや道のゆくてのさはかりにみしを限りの命なりとも
 同しえの葦刈を船をしへやしさのみはいかゝうきにこかれん
 かきりあるいのちの程のつれなきも戀しなぬにそ思しらるゝ

つらさのみおもひ亂て玉の緒のたえぬ物からあふよしもなし
 いたつらにたつなばかりやふしのれのならぬ思ひの煙なる覺
 戀しなん後とも人はたのまれす同じ世にたにつらきこゝろは
 つれなくも年月つもる涙かな我ためしならぬこゝろなかさ
 あやにくにれられやはする夢にもしあて打ふす床のさむしろ
 なにの今なをのこりてかななく覺つくしはてぬる心と思ふに
 秋の野にひとりほに出る花すゝきはすかたなき袖の露けさ
 手向してゆけと戀ちの奥なればさもそあひつの山ははるけき
 前の世に我やつれなき身と成てかゝるつらさを君にみせけん
 いける身のためにと人を戀こそ只けふあすのかこと成けれ
 あふことのなきもの草になく露とおもへは袖のぬる、成けり
 後はいさあひみぬさきのつらさ社思ひくらふる方なかりけれ
 戀草になふあふこの悲しさよかたやすにたに逢ふなければ
 たちのほる煙をみせてしなのなるあさまに人を戀やわたらん

初逢戀

ゆく末のふち瀬をみえんなけきわひあひそめ川の水の白波
 うらみける我心こそくやしけれこはたれなれば嬉しかるらん
 月草のはなたの帯はとけそめぬかへらぬ色をたれにとはまし
 たまくらに結ふすゝきのはつ尾花かはす袖さへ露けかりけり
 した紐のとけてぬる夜のかれことにあかぬ契を又むすひつゝ
 あひみはと思ひ續けし言のはの向へはえこそいはれさりけれ
 契あらはそれまてとこそ惜みしかあふに命のひぬへきかな
 曉別戀
 うしとても今はあたなるなこりかはわすれかたみの有明の月
 なに故か鐘のひゝきはうかるへきかつ人をこそ人はうらみめ

きぬ／＼の袖の涙のもろ友にやとりわがる、有明の月
別路のあり明の月のうき身こそたへて命はつれなかりけれ
ふかきよの鳥のそらねといひなしてつらき別を惜かれつゝ
しぬはかりおしきわかれの曉やいのちにかへし報ひなるらん
ひとつかひゆふつけ鳥もぬる物なとあかつきの別つく覽

後朝戀

つらしともけさは誰にか語らまし見し夜の夢の現ならずは
河霧もたゞちわたれあふくまに君をはやらし夜は明ぬとも
曉の別になへてけさのまもいかにいのちの暮をまつらん
きえ歸我にもあらずまとなあしたの霜のおき別つゝ
たのめなくことのはなくは朝露の猶この暮をなにゝまたまし
わかれつるそのおも影のあされ髪涙をかけてゆらく玉の緒
かこちよする朝のまそと思ふまに猶きぬ／＼の人とはまらず

遇不逢戀五言

なげかしよ袖のうら波立かへりおもへばうきもちきり也けり
昨日たにむかしといは、いはれなん身のことばりの秋の夕暮
あひそめし夜半さへ月の比ならて後忍ふへきかたみたになし
おなし世に又夕暮をなけくかなこりぬうき身の心よはさは
きえれた、袖にくたくる露の身と思ひいつるもこゝろ成けり
面影をこふるあまりのしるへにそ空もたよりの月はみえける
風わたるいはかけま弓いまはとてよりこし涙も引かへるらん
おもふ中遠さかりゆくかた田船なにをあふみの海といふらん
あつま屋のかやかした行わすれ水むすぶ涙や猶みたるらむ
中々に心もなかね程みえてうらむるしもそたのみなりける
いかにせん岩間をつたふ山水のあさききりは末もとをらす

見せはやな袖のわかれのそのまゝに涙はかりのこゝろ長さを
ねられればさてもうらみやかきならん頼む夢とてかへす衣は
芦まゆくみなとの舟さしもはや通ひし道のさはりはつへき
しぬはかりなけくたへていけるみや又逢事の頼みなるらん
さりとてもありしつらさにこりもせて夢の歎をいかゝ加へん
契をきてやすらひ出し横の戸のをしあけかたの月を忘ぬ
すゝか山たか名をたてと伊勢の海人の鹽なれ衣ふり捨にけん
うくつらき餘所の關守みちとちてねられぬよは、夢も通はず
初霜のをかのかけ草かりにのみかよひし跡はやかてかれにき
あかさしその面影のかたみともいひてかひなき山の井の水
いかにれしその夜はかりを契にて又もわたらぬ夢のうきはし
深めともなをいつまてかうらみけん思ひ絶たるいさよひの月
あらさらむ後の世そともいひてましありしに限る別なりせば
契したたかいつはりにうらむらんこえける波のすゑの松山
思ひ川わたせのいかにかはりてか又は涙の淵となるらん
又とたに契もなかず逢事はたゝそのまゝをかきりなりける
おも影をなにそ中々身にそへてみし夜の月の雲かくるらん
あはれけに人の心のうみとのみいつれし床のあればてぬ覽
なさけしるこゝろの程もみし物をさらにや何のいはき成へき
おなしよに有てなしとやうき人をまたみぬ夢の契なるらん
くちれとてあまの捨たるたぐ繩のたゆるをくると思ひける哉
つらからはたゝ前のよに別なてたにのむくひをちきり醒醒
なからへてくやくしく人の戀しきはあふに命をかへすや有けん
言のはも秋にはあへす移ればやかはるつらさの色をみすらん

忘戀三首

あらはあれあらすは何のみなと川いふかひもなきあまの捨舟
我しらぬうき身のとかを歎きても人のつらさを誰にかこたん
契られは身にこそまたれ夕暮のありしにかはる秋の空かは
うつりにきつらき心の花そめはあらはにみえぬ露のをきても
なこりとて今さへくもる夕かな待しなかもはむかしなれとも
たえはてし身には歎きのこりつみてけつつかたしらぬ胸の埋火
しはしかとおもひし程にあら玉の月日へたてゝとはぬ君かな
あた人のおなしつらさになりはてゝ我さへふくる山のほの月
おもひ出やあら磯波のうつせかひわれてもあひし昔かたりは
今さらに袖こそぬるれわすれ水うきなやそれと思ひいつれは
れをそなく人やとはぬと心みにいひしまゝなる夕くれの空
忘れよと我かれことの契しをたかへぬしもそはてはくやしき
いつまてか猶またれけん今こむといひしはよその夕暮の空
契をさしもとの心の跡もなしかよひたえたるよもきふの露
よそにたに思ひも出しはしたかの野守の鏡影もみえれは
うしつらしみつの濱邊による貝をたれ我ためにひろひそめ劍
玉つさの筆のすさみの跡方もしらぬ中とも成にけるかな
かはりゆく人の契りをわすれえぬ我にならひてたのみける哉
こふるまに年のへにける悲しさよみしは昔とおもひいつれは
わすれ水おなし心になえもせてなにしかひとり袖ぬらすらん
波こそぬ末の松山そてをみよたかひのこゝろかはりやはする

恨戀

かちをたえり江のわたをこく船のをそくも人を恨みける哉
つなてなはひけはもとすゑ我方によりこぬ船はよそのしほ風
けにも身のうけははとてなくさま哀恨のことはりをなき

なけきわひ人をうらみぬことはりの身にあまるこそ涙成けれ
しらせはやしなはふ葛の秋風に返々もおもふこゝろな
あま人のしほやくさとの夕煙つらき心のしるへとそ見る
たゝにありて恨みぬさまをみすれ共けふは涙のこほれぬる哉

雜二十首

曉

むかしいま思ひのこさぬれ覺かなあか月ばかり物わすれせて
老らくの物うき程になれる身はれさめそいたく心すみける
ふりまさる年を重ねてしのゝめのれ覺さひしくよを殘しつゝ
いたつらに老のれさめの長夜はわか涙にそ鳥もなきける
鳥の音を曉毎になれにける君につかふるみちいそくとて
あしたつの子を思ふやみにあけやらて曉深きれをや鳴らん
なきすさむ夕つけ鳥のはつ聲にまた深夜の程をしらるゝ

松

けふそみる野暮山くれ葦こしみちのおくなるたけくまの松
千里まで枝さしかはす松嶋はいつれの木よりなりはしめけん
大井河ふるきみゆきになれ／＼入江の松も君をまちけむ
昔とてかゝるはかりの友もなしみのゝな山の松のふる木は
つれ／＼とあら磯波のいはれまつ年はふれとも思ひ出もなし
たれにかも身をはうれへん宿の松それも物いふ友ならなくに
岩に生るまことの松とみゆる哉けにも千歳のためしと思へは

竹

もゝしきや玉の砌のみかは竹君か代なかくうへやそめ劍
としたけてみかりにあひしこの河の人のなこりや岸の吳竹

吳竹の末の世速きためしとや玉しく庭に植はしめけん
あさ日影さしきかへゆく竹の園千代にやちよを猶そかさねん
吳竹の身のうきふしの數々にわか代のほとなおもひしる哉
みとりなる竹のみそのゝ萬代に猶もときはのかけそしけらん
吳竹のさ枝かくれの窓なればあけてもくらき夜なのこすらん

山

君かすむ龜のな山のたきつ瀨は千代な心にさそまかすらん
きく人もみる人もなき山そうき風と月とのみちはあれとも
いかなれば花も紅葉もかつらきの山なところと契そめ劔
さか木葉のかはらぬ色に年ふりて神代ひさしきあまのかく山
思ひやる程そ久しきいにしへにあまくなりける神のかく山
思ひあらはきちのかよひち遠とも行てやすまむいとせの山
雲よりもたかまの峯とみる物ななとしもといふかつらきの山

河

行とまるいつくをさしてかよふらんくたれはのほる湍の川船
わたりする人もあはれやまさるらんすみたかはらの春の曙
君か代は千代なつむともせり川のおなし流につきしと思ふ
たえすのみ祈そわたる行すゑを君にとおもふ關のふち川
せきとむる宇治の川瀨のあしろ木にあまりてこゆる水の白波
わかゆつる神代も遠し玉嶋やまつらの川のむかしおもへは
大井河みせきの石を君かためひるひあくるは千代の數かも

橋

きゝ渡るなからの橋は朽にけり身のたくひなる古き名そなき
かけつくるきそのみ坂の橋よりもいへはあやうき世を渡る哉
跡なたにさしもや人の忍はましなからのはしのむかし朽すは

きゝわたるさの、船橋かひもなししらぬ昔はかけてこふれと
ふりにけるいたゝの橋の徒にありとはかりなきゝわたりつゝ
いにしへにわたすやいつこ津の國の難波の橋の跡をゆかしき
なにとなくみ渡してこそつの國のなからの橋の跡もしらるれ

關

むかしよりかよひし中のおとゝめて心へたつなあしからの關
波の上はすへてきよ見かせきなればかゝる物なき月をみる哉
旅人の衣の關のはるゝと都へたてゝいく日きぬらん
相坂や關の戸あくるとりぬに木のまの月の影はさしつゝ
音にきく心つくしななにとめて年ふりにけり文字の關守
故郷はかよひなれにし道そかしふはの關もりわれなとかめそ
なしなへてせはからぬ世の道なれば行來に障る關の戸もなし

旅二首

たつれ行あつまの方やそれならん山路のすゑにいつる月影
かへり見はこなたもさこそ隔らめ霧に分入秋のたひ人
おなし野も枕むすはぬ草葉にや人にはうとき露もあるらし
梓弓やへのしほちに在る舟のなしてひきこすつなてくるしも
草枕あまりよふかにたちにけり鳥のはつ音も今を鳴なる
やすらひに別て出し古郷の月はあかすそしたひきにける
都いてし日かすおもへはふしのねも麓よりこそ立のほりけめ
嶺の雲いそへの浪はかはれともなふるさとおも影をたつ
しのはるゝ故郷人のことつてもおもひ絶たるうつ山みち
またしらぬひなのなか道行やらて里とふほとにくるゝ空哉
山ふかみまた名もしらぬ鳥の音をあげめときゝて今を越行
草枕あまたゝひれなかそふれば都の遠くなりけるかな

あはれなるいはれのいはの旅れ哉嶺のあらしのたゝこに吹
やとかりし里をも過る旅の空となき草の枕なりける

海路

こきかへり猶みてゆかん伊勢嶋やしまめぐりなるあしの浦風
松かけの入海かけてしらすけのみなと吹こす秋の鹽かせ
わたの原目にみぬ風をしるへにて波ちの船のゆくもはかなし
しほ風のなるとはかりにあはち嶋をかひにみえてわたる舟人
うつ波のたよりに風やなりぬ覽ゆらのみなとをわたる舟人
明方のよさのいそまに船とめてかたふく月をうちちにそみる
月をみてとまりはせしとき行はしらぬ波ちに夜を明にける

山家二首

やまさとのいは井の水は年ふともすみえぬ物は我身成けり
あらはれて我すむ山のおくに又人にとはれぬいほりむすはん
月はいるむそちの坂の山きはに光なきみをすみのほりける
山人はいてたる跡の秋のいほのこれる鶴やよはに鳴らん
なにゆへか深山のいほの板ひさし久敷とはぬ人をまつらん
山里のあかつきかたにれ覺してまたすみけりと月をみるかな
人問ぬ山のおくこそ世中になきおなし身と思しらるれ
たらちれの昔の跡をおもはずは松のあらしやすみうからまし
なとつるゝ覺の水のたよりに身まかせぬはこの世成けり
きけは猶物をおもふなくら山うき世のほかの嶺のまつかせ
まさのやにれさめの枕をばたてゝあはれとよもの嵐をそきく
むくらさす柴のと山のしはしとてすみし住家を年ふりにける
山陰にしけきよもきのそまつくり我すむ庵のかこひにそかる
うけかたき世にもすみかの有けりと覺の水のたよりをそ思ふ

田家

たつらなるわら屋の軒のこも簾これやあかたのしるしなる覽
我門のいなはのしたひつたひきてたみの水もる花の夕暮
深山には木のほもいまた紅葉ぬにそものをしれ色つきに鳶
おりふしの民のちからの習ひとて心をつくるをたのかりいほ
露結ふかたのいほのあれまきは風にまかせてもる人もなし
さひしさをとふ人もかな嶋の立澤田のいほの秋の夕くれ
かりをたにたてるそほつはかひもなし徒ならは門まもりせよ

述懷二首

もろこしもたくひやあると尋はや三たひあひみる秋のみや人
きく人も哀とおもへ老のなみたちぬにつけてやすからぬ身を
ありふれはもろこしならぬ我國も虎の口をはえやはのかるゝ
さまゝに歎く迄こそこの世なれ思ひかへせば人もうからず
浮沈み何かはわきて歎くへき世のことはりに身をまかせて
あらましに思ひしよりも永らへて花と月とになかめなれぬる
傳へくる庭のをしへのかたはかり跡あるにたに猶まよひつゝ
和歌の浦に老すはいかてもしほ草波のしわさもかき集めまし
さりとともと我あらましに頼まれて行末しらぬ世こそおしけれ
善あしもわかぬ難波のみおつくし世の人波にあるかひをなき
思ひ残す事も有てやいにしへなへてのうさに袖ぬらしけん
いかにせむ波こそ磯の恨みてもしさりの蟹のたくひなき身を
猶しはしいのちをおしと思ふこそ老なはいはぬこゝろ也けれ
のほるへき身にはあられと位山をしあけらるゝ心ちこそすれ

懷舊

何事なそのことのはとなけれともむかしときけは人を戀しき

大かたのむかしは事のいはれにて我みし世こそまつ戀しけれ
いかてかは忍ふ心のあさからむ又もあふへきむかしなられは
みし事のたゝめのまへに覺ゆるはれさめのほと昔なりけり
うつりゆく月日につけて忍ぶ哉きくにかへらぬ世々の昔を
されは我いつのさかりのありければ心にかゝる賤のをたまき
いにしへに又あひかたき板間よりかたみの月をね覺にそみる

夢

ぬるが中に百年過しことのはも夢てふ物そまこと成ける
いにしへの雲と雨との山かけはたかあさちふの夢なるらん
まところむもおなし心のみれはこそさめても夢は忘れさるらめ
みるほとをうつゝとたのむ心にそさめても夢は思ひあはする
見ても又たのむにつけてはかなきは夢にまさらぬ現なりけり
なかきよの眠の中にある身こそ夢をゆめともおもはさりけれ
なにとして枕のうへのほかまては夢てふ物の行かへるらん

神祇

色そへよ波のかすむ住吉のはま松か枝の露のことのは
代のためにたてし内外の宮柱たかき神ちの山はうこかし
しきしまの道をすてすは住吉の神そまほらん我君の御代
やはらくるよもの光を日の本とあとなたるゝも我君のため
萬代をさしてそいのるみかさ山のとかなるへき天のしたとて
いし河やせみのを川の流れこそ今もたえせぬかものみたらし
やをよるつ影をや移す石清水くみてもしるき御代にまかせて

釋教

さとりけるもとの心のすめはこそむすへはにこれ山の井の水
にしの海みちひくしほにまかせつゝ我とはさゝぬ法のはや舟

思ひとくふかき江にこそしられられ水のほかなる氷なしとは
すまさしなこゝろの水も蓮葉のにこるえにこそ花はささけれ
をしへつる法のしるへとしりながら心にまよふ道そかなしき
なにかそれうつらぬ影そなかりける心やすめるかゝみなる覺
わたしもりちかひの船は心せよのりかたふくる人もこそあれ

祝

やすみしる君かまもりの神なれば萬代まてと誰かいのらぬ
うみのはて山のおくまでおさめしる御代にそなひく涙も嵐も
神風や内外の宮の宮柱千たひや君か御代になつへき
龜のおの山のいはれの宮つくり動きなき世のためしなるへし
のとかなる君かひかりをあふく哉天つ日つきの空にまかせて
千歳とはなよの當のことのはそいかにか君か御代を祈らん
吾君の御代をいのるとする程に身にもいはひの年そかさなる

群書類從卷第一百七十三

和歌部二十八百首七

丹後守爲忠朝臣家百首

題

春

正月子日

河岸柳

關路歸鴈

巖上躑躅

夏

山家首夏

曉更照射

遠山水室

秋

泉邊初秋

風前菊萱

杜鵑紅葉

鳩邊虫

海路霞

岡邊早嵐

谷中呼子鳥

瀧下秋冬

遠村卯花

旅泊五月雨

樹陰納涼

雲間郭公

寢寐水鷄

池上蓮

七夕後朝

雨後蘭

苔上露

竹林鶯

山路櫻

閑中春雨

山田苗代

沼水杜若

雪中若菜

閑中春雨

古砌葦菜

池岸藤花

江中菖蒲

叢中螢火

庭萩

鄰家萩

窓前梅

澤邊春駒

野外遊糸

旅宿三月盡

門田早苗

每夜鷓鴣河

河邊荒和枝

野徑薄

嶺上鹿

深夜駒迎

閑九月盡

遠鄉擣衣

離中女郎花

冬

初冬時雨

濱邊葦

月前神樂

戀

洵始戀

卜戀

雜

谷風

梢猿

野酌

楊貴妃

作者

橋上落葉

曉天千鳥

晚頭鷹狩

人傳戀

意偽戀

岑雲

神社

溫泉

浦嶋子

遊女

眺望

寒庭霜

谷川水

深山炭竈

被返書戀

契久戀

遣水

山寺

釣舟

和琴

王昭君

上陽人

慶賀

閨上霰

川上水鳥

閑居埋火

後朝隱戀

共忍戀

詞和不會戀

淵鶴

高麗笛

松上雪

雨中綱代

舟中除夜

改名俊成

丹後守藤原爲忠朝臣

少納言藤原忠成

加賀守藤原顯廣

兵庫頭源仲正

伊豆守藤原爲業

散位藤原爲盛

左近大夫 改名爲經

筑前權守藤原盛忠

改名爲經

源賴政

春

正朔日

爲忠朝臣

たちかはる千代の初の例には子日にあたる今日そひくへき

忠 成

いつしかと子日の松をひきつればけふや千年の初なるらん

顯 廣

きのふまで雪ふる年の小松原ひきかへてけり春のけしきに

仲 正

めつらしく春立けふの初子日ひきあはせてもいはひつる哉

爲 業

のへみれば子日の松を引かへて春のけしきにけさはかすめる

爲 盛

あくるより子日の松をひきそへていはひそゝむる千代の初春

盛 忠

あらたまる年を待とやいつしかとけふに子日の歸るなるらむ

賴 政

いつしかと年の始の今朝しもあれ子日に逢てねほかひをする

海路霞

浦つたふ衣の關の浪の上に立かされたる八重がすみかな

舟とめてあれば霞のたな引て春はあかしのうらなかりけり

あきつしま漕はなれ行浦舟はいくへか春の霞へたつる
つなてくる舟のよすからたとる哉霞こめたる浦つたひして
見渡せば八重の櫓ちに春かすみ浪とゝにも立にける哉
追風にはしるふなともほのみえてむるつる沖は霞こめたり
たえ／＼に霞棚引あげほのは浦漕舟のみえみ見えすみ
柴船はほふねのあとをなふ物を迷ひやすらん霞へたてゝ

竹林鶯

谷ちかき竹にまつきて鶯の聲ならすなりはれもやすめす
鶯も我ともとてや梟竹のしけみにきつゝたえずなくらん
吳竹にはる鶯のさえつるやあらたまりぬるしらへ成らむ
竹のはに衣かけゝむ夕暮を思ひいてゝやうくひすの啼
風吹は竹のはやしのともしりにふしやわつらふよはの鶯
いその上ふるすな出て鶯の聲ならす也竹のはやしに
鶯の朝たつ聲のきこゆなりまかきの竹にれくらしてけり
宿近き竹の林にれくらしてしのゝめことに鶯をなく
鶯の竹の中にはふしなからよをこめてなを音せさるらん

雪中若菜

春日野もまた白妙に埋れてけふのわかなは雪をつみける
きえやらぬ雪いたゝきてみえつれと拂ひてつめる若菜也けり
雪のなをふるのゝへの若菜をやこそのかたみにつちへかりける
はつ／＼のわかなをつむとあさるまに野原の雪は村消にけり
衣手はぬれにけらしなかつかのゝ雪がき分て若菜つむまに
衣手に雪はつもるとうち拂ひのさはのこせりつまたかへらん
わかなゆへ我こそそのへに出つるをわなし心に雪をふりつむ
あされ共いくらもつまたひは暮ぬ雪とけやらぬのへの若菜は

窓前梅

匂ひくる砌の梅のひらくれば窓をもとちすはるのよな／＼
 軒端より散つむ梅の花みればあつめし雪の心地こそすれ
 冬のよは雪かきつめしあかりよりかはらす匂ふ花の色かな
 春風にしられにけりな梅花ふかきまにもあまる匂ひは
 軒近き梅はよこえのさしくれば窓のうちまで移りかそする
 窓ちかき梅のはつ花ひらくれば玉章のみかけてよめとか
 かけてよむ玉章のみそなつかしき窓に散くる梅の匂ひに
 なつかしく砌の梅のかほるかにいとふのなもうかゝはぬ哉
 ひちくたす窓よりにほふ梅花ねふりをさますつまにそ有ける

河岸柳

青柳のみとりやそこにうつらむ深くもみゆるみなせかは哉
 春くれば柳のいとのうちはへてきしに涙よる山川のみつ
 釣のをひく人なしとみゆるかな河邊にたれる青柳の糸
 頼むかなあやうくみゆるかははたのたふれ柳も春にあへれば
 かはそのひの柳のいととはもとふれて涙のよるにもまかせつる哉
 風吹はきしに波よる川やなきはるは緑のふかくなりけり
 春のくるかたこそまつはなひきけれおなし河邊の青柳の糸
 あやかはの江の涙のなるものはきしへにたてるあなやきの糸

岡邊早蕨

春の日の長岡に出てさはらひをおりくらしてもかへりぬる哉
 しめなきし春へのなかのさはらひを我より先に人やおるらむ
 春ことにこかれやすらむふな岡は蕨もえいつるわたり也けり
 しめ置しわかたなかのさはらひをまつふみおるは澤の春駒
 しられてやもえ出ぬらんおりにくる人に忍ひの岡のさはらひ

雨ふれともえのみまさる早蕨やきぬかさ岡のしるしなるらん
 いつれなかつはおらまじきてみれはならひの岡に生る早蕨
 春くれば日はへてそおる行かへり道をならしの岡のさはらひ

山路櫻

散かゝる花の梢にめなかけて日も暮にけりしかの山こえ
 よしの山花さきぬれはしるしらぬ人には是やあふさかのせき
 さきぬれば櫻や春のみやきもりすきゆく人をとめかほなる
 ちりしける花をおしむとよく程に春は山路にふみところなき
 たまほこのみちもゆかれぬ山櫻さけるさかりは心とまりて
 枝ことに人の心なとめつゝ道さまたけの山さくらかな
 花の色をたちななくしそ春霞我も山路にかゝるとをしれ
 花にほふ山路に我はやすらへは家路のともにてすてられにけり

閑中春雨

春雨のゝきのいと水かき分てくるひとみなきみやまへの里
 とふ人もなきみやまへのすみかには心細くそはるさめもふる
 つく／＼と日をふるさとの春雨や身なしる人の涙なるらん
 雨ふればかされのしとそほねれてさへつりくらす春の山里
 つく／＼となかむる宿に春雨のこゝろほそくもふりくらす哉
 春雨の軒の雪をつく／＼とさひしきやとになかめてそふる
 なくさむるかたゝにあらは春雨のふるとも何か苦しかるへき
 さらてたに人めしならぬ我やとによなうちたえて春雨そふる

澤邊春駒

もえわたる野へのみとりを待程や澤邊にあさる青さきのこま
 まこも草つのくみにけり津の國の澤邊に駒のいはゆるなる哉
 春ふかみあれゆく駒はあしはらや野澤の水にかけもとめす

いはえたる心あしけの春駒はたち野のさはにともよせそする
とりつなく人もかたの、深にあればたなれし駒の心ち社せれ
冬かれになつみしかとも春くれば澤への駒はてにもかゝらず
春駒のいはゆる聲を聞ゆなるさはへのこもゝさかりなるらむ
冬なつみかけのやうにてまこも生るぬまの入江をあさる春駒

關路歸鴈

おしむへき花の都をふりすてゝすゝかのせきをかへる鴈かれ
きくひとそ立とまりける白河の關路もしらすかへるかり金
雲ちよりほるかに歸るかりかれも關のしみつに影はみえけり
雲路にもなさへの關のあらませはやすくは鴈の歸ちさらまし
せきもりやそらめしつらん雲井より心のまゝにかへる鴈かれ
雲井よりかへる鴈をはとゝめれとわかためかたきすまの關守
なのりしてふる里へゆく鴈かれななとかとゝめぬすまの關守
足柄の關をもしらすれたけにもなのりちらしてかへるかり金
谷中呼子鳥

立ならふいもせの山のなかにきていつれともなくよふこ鳥哉
山高みよふかひあらしよふこ鳥谷のそこまてたれかゝよはむ
吹おろす春のあらしや寒からむかすみのそこによふこ鳥かな
おく山の谷ふところの呼子鳥うき身かくさん我さそひいれよ
たに川の音はかりししてくる人もあらし物ゆへよふこ鳥かな
わりなしやはひろの谷のこのまよりすかたはみえて呼子鳥哉
きくひとまなき物故によふこ鳥みゝなしやまの谷になくも也
みれたかくなきわたる也よふこ鳥谷のを川のなとゝよむまで

山田苗代

うち山のすそのゝわたの苗代にいくらかまさしそてのこの種

をやまたのこひちにたちてえくつむと苗代水に袖ぬらしつる
なはしろのまたきに苗のいろなるはみれの梢のうつる也けり
水たまるたにの点こゝほり返しわりなくうなふわたの苗代
苗草を山田のなたにかりしきてそしろの室のたれはまきける
小山田のたなぬのつほに水すみぬはやたれおるせ時過ぬまに
山河のあたりのなたのなほしろは水をこゝろにまかせたる哉
小山田のなたの苗代みほすとあせきるほとに日は暮にけり

古砌葦菜

雨たにもとまらぬやとの軒にきてたれとすみれの獨さくらむ
としなへてしけりにけりなつほ葦のきの玉水あとみえぬまで
むかしへのみほのいはやなきてみればこけの砌に葦さきけり
すみれ咲ならのみやこの跡とはいひしすへのみそ形見也ける
さかりなるすみれの花やしほるらんあめふるさとの軒の雪に
故郷ののきはのしたなきてみればひとりすみれの花咲にけり
こけむせるたまのつみしのひまわけてひとり葦の咲にける哉
ふるさとをたつれて見れば庭もせに心なかくもすみれ生けり

野外遊糸

我のみとおもひてのへにいてつれとおなし心にあそふいと哉
はるゝと野原も空もみとりにてみたれてあそふ糸を隙なき
あそふいと春のはやしになゝよふは花の錦やはつれゆく囃
のへみれば春の日暮のおほ空に雲雀とゝもにあそふいとゆふ
思ふ事なきにやあるらし春のゝにうらやましくも遊ふいと哉
〔以下三首闕〕

巖上躑躅

年へたるさしの岩根にねはいりて散ことかたきもちつゝし哉

有かたき物とそみゆるいは躑躅岩にはいかてれなとゝめけん
〔以下六首闕〕

瀧下歎冬

瀧津瀨の岸にみゆるやのへのまゝもとめうへてふとへの山吹
やへよりも匂ひそまさる瀧つせのたま散かゝるやまふきの花
たきつせの玉ちる水やかゝるらむ露のみしけき山ふきの花
おちかゝるたきつほに咲山ふきは口なしひたす心ちこそすれ
さきかゝるくちなし色の歎冬にいとゝなとせしなとなしの瀧
岩間より落くる瀧の散たまにひろも露をち山ふきのはな
瀧つせの岩うつ浪にあらはれてまたきやちらんやまふきの花
山ふきのかけしうつれは岩に落るたきのしら糸色そかはれる

沼水杜若

かきつはたあさかの沼に生たちていかてか深き色をならひし
いはぬまのしたの心やいかならむへたて顔なるかきつはた哉
みさひゐてなかれも出ぬ沼水ないとゝもこむるかきつはた哉
人すまぬあらゝぬまなたかためとかこひてさける杜若キ若キも
春ふかみぬま江の水にかけみえて花咲にけるかきつはたかな
ますけ生るのへの沼水もらさしとさきこめてける杜若哉
かきつはたあさかのぬまに咲つれと深き色をはへたてさり鳧
杜若おなしなさきに生なからみつに心をへたてつるかな

池岸藤花

はらの池の汀の藤のはつ花をいつしか波やよりてをるらん
藤のはな咲そめしよりむらさきのさゝ波そなつまのゝ池水
むらさきに匂はさりせは藤の花いけよりかゝる浪かとやみん
こち風にみつつの白玉吹かけてひかりをそふるいけのふちなみ

紫にいけの藤波さきぬれはなのみ也けりみとり、いけ
色ことにきしに咲たつ藤波やすかたのいけのかさり成らむ
藤の花さきぬる時はいけみつにむらさきふかき浪を立ける
ふち波の紫ふかくいひそめていけの汀にたれかいりけん

旅宿三月盡

ゆく春もおしむ我身も旅に出て心そらなるけふのくれかな
春は唯今宵のみそとみしまなるあしのかりやのたえまうき哉
なくれしと都を出しかひもなく今宵やはるにゆきわかるらん
行春の旅れの床にやとさはやしはしかすみのたちやとまると
ゆく春のおしむ心をしらませはおなし旅れの宿やからまし
草枕かりねのところにしはしいらて暮行春のみそらなかもむ
つれよりもくれゆく春のおしきかな花散里に旅寝するよは
もろともに花の都はいてしかと今宵は春に別れぬるかな

夏

山家首夏

こけのうへに散つむ花をかきたためて春のなこりをおしむ山里
やま近く家あしせすは春過てまた散やらぬ花をみましや
春とても花の色にも染さりし賤のこゝろもかへむとやする
夏くれはしける草葉のあつれつゝやゝすみにくき大はらの里
なをさくらぬさと散かふ山里は猶はるとこそあやまたれけれ
みわたせはかされ青葉になしはてゝ蓂もしけき夏はきにけり
夏くれとしるしもみえず山里は衣かへすることしなけれは
いつしかとけさは夏さぬきるへきにまたはたさむし大原の里
遠村卯花

うの花の盛なりけりしのむらやゝむらにさらす布とみつるは

たつねつゝ、いくたの里のうの花はみるかひありて今さかり也
うの花のかきねを雪にまかへてやいそき出つるをの、炭やき
むかつらのはたのかこひの卯花や賤のさらせるてつくりの布
よそにてはたちもとまらぬ白雲とうの花さける垣根をそみる
卯花のかきねつゝきのよそめにはたゝぬのかほに更科のさと
うの花のさかり也けりよそめにて白雲かゝるやまとみつるは
見渡せばたとちの里のうつき原うつきになれや花しろくみゆ

雲間郭公

なか／＼にきく空もなし時鳥雲路をかくるよはのしのひね
さらぬたに待とななるに郭公雲井になきてすきぬなる哉
いつかたときゝたにわかす郭公あま雲あくるよはの一点
ほとゝきすさ月の空やなつかしき雲にむつれてすきかてに鳴
雲かゝる高まの山のとゝきすきは心もそらになるかな
郭公さよふけたの雲間よりそらなきわたる聲の聞ゆる
ほとゝきす雲路になきはきく人の心も空にあくかるゝ哉
時鳥聲する方の空みれば月をななむるこゝちこそすれ

江中菖蒲

あるまゝに繁りそまさる菖蒲草になかれ江の年をふる波に
繰返しくる人しけみくりくるつくま江に生る菖蒲ひととて
みくりはふ入江に生るあやめ草ひく人なしにれやなかるらん
人しれすみなと入江のあやめ草みちひるしほやけふは曳らむ
難波江にあしまさし分來る舟はあやめかりにといそく也けり
五月雨にいとゝふか江のあやめ草はつかにみゆるは末浪よる
つくま江に生る菖蒲の長さねをいつか軒にはかけてあるへき
難波江の菖蒲も今はあらしかしひかてかへらぬ人しなれば

門田早苗

うちあけて開く門田に早苗とるたこのおほくもいりぬへき哉
我宿の門田の早苗うへしよりいさゝなかはなまかせてそ見る
かりにたにくる人もなき柴の戸はたゝうへこめよ室の早わせ
竈もるみつはのうみないりよりはひいてのなたの早苗取見よ
早苗とるかたとの庵にいくしたてみなくちまつり愈々賤のを
けふみればふしたつ程になりて見あけは門田の早苗とりてん
我門のそとものをなたもけふこそはあけつる儘に早苗とらすれ
さよふけはししも社くれたゆむなよそとものをなたの早苗也共

曉更照射

あか星のあまたみゆるはこのまよりともしの影のまかふ也
しかのたつ端山の影のこ暗さにあくるもしらす照射をそする
ともしするほくしの松ももえつきて歸るにまとふしもつ闇哉
あか星のひかるかとのみ見えつるはたかしの山のともし也
山端に月の入かとみゆるかな有明かたのみねのともしは
さを鹿もめをあはせてやゝみぬらん照射の影のなをみゆる哉
照射すとさやまによなを明しつるしかも我身もめをも合せて
(一首闕)

旅船五月雨

五月雨にひかすつくしのまつら舟おなしとまりに猶もふる哉
五月雨にあしやの沖にとまりして物かなしかる旅の空かな
五月雨におもはぬうらに舟とめて波のうき波に袖ぬらしつる
さみたればとまの雫に袖ぬれてあなしほとけの波のうき波や
五月雨に猶たのみてやあま舟のみのしまわのみ漕とまらむ

五月雨の猶ふるとのみよる舟はふくとまこし栲はてぬへし
五月雨にいたしもやらぬ高せ舟いくかになりぬ筈はさすして
行やられて日なのみそふる五月雨に道のな川のかさまりつゝ
寤寐水鶏

うたゝれの夢を程なく覺にけるたゝく水鶏やおとろかしつる
身のうきを思ひつられて明すよな人待かとしてたゝくくひなそ
たゝく也是は水鶏のなとならんよひにそ人はとはゝとはまし
うちれふるかりそめふしもえこそせれ叩く水鶏に驚かされて
こぬ人をおもひれさめの里にきてたゝく水鶏のはるかなる哉
身のうさにれ覺のみする我宿をなにおとろかすよはの水鶏そ
さよふけてたゝくひなのはけしさにれ覺ぬ人や驚きぬらん
叩くをば水鶏のくせとしりながら横の板戸をあげぬよそなき

叢中螢火

風そよくあさちましりの蒨萱にほたとひかふ夏のゆふくれ
しけりあふ草葉を分て夏虫のいかにみたれてとひまかふらん
おほあらしのもりの下草栲ねらしうきたのはらに螢飛かふ
風吹はひかりをみたるほたるかなきは井の草の靜なられは
あさちはらなく白露もかくれなくすたく螢のかげにみる哉
草ふかみほたる飛かふ少されはをはな末に玉そちりける
夏虫のとふひの野邊にまかふかなふる五月雨に草やくつらん

〔一首闕〕

毎夜鵜河

篝火のみえぬよそなき大井川おなしうふねやおりのほるらん
夏の目のくるればともす篝火のいくよか川にかけうかふらん
うかはにはさ月のやみもなかりけりくたればくたす舟の篝火

鵜舟さしよるは／＼といくよかは淀の渡りをおりのほるらん
篝火のかげを寫して大井川うふねくたさぬよはゝあらしな
大井川う舟のたなはうちはへてよな／＼瀬々を住家とそする
夜をかされとなせのかたにみゆるひはう舟にともす篝也けり
かゝり待今宵はつきぬいかにして今一せをもたなはさばかん

遠山水室

山かたのみちをたのみて我ゆかんやきの氷室ははるか也とも
我庵のちかゝらませはひ室やますゝみにゆかぬ人なからまし
夏なからこほりをりける奥山はこのよのほかの心ちこそすれ
たには山水室のおものうなかつてこまの足とくみやこへそ行
近からはゆきてもみましひ室山みちなかさかと人のいふらん
やまとなるさかへのひ室道とをみいかてひつきに絶す立らむ
むかしよりひつきのお物たえぬ哉ひ室の山はちかゝられとも
なか澤のひ室は道の遠ければけたてそなへむことをしと思ふ

樹蔭納涼

かまふのゝひとつかしはのこかけこそ夏もりこぬ處也けれ
あやしくもときはのもりの夕風に秋きに鳧とおとろかるらん
風もらすまきのうつほの苦むしろいかに山ふしふしよかる覽
けゝらなく鳥はたゝちぬ夕すゝのむくろはかけそゝ風ふき
松原やかけのゝへにむれあつゝ夏をよそにも思ひぬるかな
我宿のそとの櫓のはかくれを夏のひるまはすみかとそする
すゝみするやなきか蔭に風吹はよりくるなつをはらふ也けり
すゝしやと木蔭を夏のすみかにて秋まであらは紅葉をやみむ

池上蓮

色々にうかふはちすにゐる玉やまことのいけのかさり成らん

紅のいろに心そしみまざる池の蓮の花を見るにも
にこりなくいけの心やすみぬらん今そ蓮のあらはれにける
ひまもなくはすのうきは、ちかふれとなつてもれ出る池の水湛
紅にふかくも見ゆる蓮かないけの心はあさしとおもふに
夕す、みこやのいけ水風吹はあもさたまらぬ蓮葉のつゆ
ほともなく露はけぬれと干歳ふる龜こそやとれ池のはすはに
よと、もにれかふ蓮はいけ水に心のまゝにすませたるかな

林頭蟬

なみたてる木々の梢に葉かくれてみゝのまもなし蟬の聲々
みれしめてはやす梢に葉かくれて空にもひゝく蟬のこゑ哉
ぬけからは木のもと毎にぬきすてゝしらすかほなる蟬の聲々
しつえをはつまきにおれるを林のかれ葉におてそ蟬は鳴ける
夏山のせみのこゑ／＼いとなれや木々の梢によりあはすらむ
しけりあふ夏のみやまにこかくれて梢の蟬の聲を絶せぬ
夏山にみちても蟬の聞ゆるは木々の梢になけは也けり
涙たてるものしつえやすみにくき末にのみ鳴蟬のこゑ／＼

河邊荒和菰

いにしへのなかれ尋てかはのせにちとせの命のへてかへらむ
今日ことにかもの川瀬にみそきして干歳すむへき命をそこふ
河の瀬にあさのおほぬさうちなひくけしきや神の心なるらん
みそきする今日川上ののとききはあらふる神のなこむ也けり
神のまへみたらし川の清き瀬に幾たひあさのみそきしつらむ
川上になこしの稜してけりとやなせにしけくかゝるおほぬさ
思ふ事みなつきぬらし川の瀬に行てなこしのはらへしつれば
皆人のよくなる瀧ときゝなきてくひみな月のはらへなそする

秋

泉邊初秋

いはまゐる水の白糸むすふまに秋のくるをもしらてふるかな
秋きぬと岩井の水はいはれ共むすふ手にてそまつしられぬる
松かけの水の白糸秋くれはむすはぬさきにかせそ涼しき
手にむすふいつみにうつる我影のうとく成行秋はきにけり
風の音に秋たちきぬとおほはらやせかひのしみつ没てしる哉
たつひより賤のあさなもひたすめりむすふ泉の水のなかれに
つれよりもいつみの水の涼しきは秋のはつかせふけは也けり
涼しさは清水しつめはおとろかすにしより秋の風そつくなる

七夕後朝

わかれ行すかたはみれと七夕の今朝の心を空にしらるゝ
七夕のせきとめかたき涙かなあくれはかへるあまの川瀬に
七夕は雲のころもなひきかへしきのふやけふは戀しかるへき
彦星のかへるあしたをわたりこしきのふの暮と思はましかは
秋のよもみしかゝりけり七夕の歸るほとなきかけを見るには
七夕のあかねわかれのわたしもりかへる舟出は急かさなむ
七夕の別るゝときに心あらはひともちらなんかさゝきのはし
七夕のひるの人のめをつゝますは今朝いつしかと別れましやは

庭萩

庭のおもに花のにしきなのへ敷てはたなる虫を聞ぬまそなき
立よりて誰か見さらん庭のまににしきなりしく秋はきの糸
かせならて露もちらさし秋萩の花のあたりはあさきよめすな
色々の野邊の花なも見るへきによこめさせぬ宿の秋はき
我やとにひとめ見ましや秋はきの花のひととく盛ならすは

にはの面に露のたまぬくいとほきの吹くる風にみたるめる哉
あき露をおきてみたれば色々の玉ぬきかくる庭のいとほき
ともすれはしからむ鹿のなきのみや野へにかはれる宿の村萩

籬中女郎花

まかきよりのたはれないてそ女郎花はし近なりと人もこそみれ
生たちし籬のうちをこほれ出てたはれかゝれる女郎花かな
我ならぬ人もこそおれをみなへしこほれないてそ竹の籬に
あた人の手もやなふと女郎花まぜなは遠くのけてこそゆへ
くれ竹のまぜゆひかけし女郎花よのまのほとも思ひこそやれ
女郎花まぜゆひかくるかひもなくあたなる風に靡きやすらん
紫におれふしなまし女郎花竹のまかきにゆひしなかつは
をみなへし籬のうちにかくせともはつれて人のみるを怪しき

野徑薄

たひ人のたえずいくの糸すゝきみたれやすらんわくる袂に
あたし野のお花をしなへ分行はこほれてかゝる露の白玉
花薄なみよるのへの夕暮はまかひそわたるこまのふりかみ
あき露に野への草はらわけ行はお花すりして玉もそほちぬ
花すゝき風のしわざと思へとも招くのへなはすきそやられぬ
何せんにおもひもよらす花薄すきていく野の人まねくらん
かた／＼にまねく薄の多かれは秋ののちはゆきそかねつる
華薄まねかねたにも秋の野はこまにまかせて過るものかは

風前荳蔻

さらぬたに下葉おれ行かる荳の野分にあへるけしきいかにそ
かたよりに風にはなひく荳蔻のなそしたおれのしとる成らん
さらぬたにみたれやす成荳かやの露吹むすふからしの風

吹かへす風なかりせば荳蔻のかたはらふしはなをらさらまし
風吹はみやまかはらにかる荳の亂れかちななるあきの夕暮
さらぬたにしとろに見ゆる荳かやないとゝもみたる秋の夕風
荳蔻は秋の野かせのなになれや吹にまかせてなひきそめ劔
よのつれはなに荳蔻の秋かせにふきかへされて亂れかちなる

雨後蘭

村雨と思ひしかともふちはかま野ことにぬれてまたも乾かす
むら雨のなこり露けきふちはかま色も匂ひも身にそしみける
藤はかましほるはかりに也にけり時雨やしつるのはらしの原
きのふこそ時雨はせしが藤袴今朝きてみれば猶そ露けき
晴わたる雨のしるしかふちはかま秋の野毎にぬれてたては
宮城野を今朝きてみればふち袴よのまの雨にほころひにけり
そゝきつる雨のしわざか藤はかまうすむらさきに移ひにけり
来てみれば雨にぬれけり藤袴つゆにはかゝるけしきこそせれ

隣家萩

あるしたに昔つれねとも中々に萩の葉風そしられかほなる
まとろめはまなきしの垣へたてたる萩の葉音の人おとろかす
あやなしなさりとて秋のこなたかはいさきいれし萩の上風
なか垣をそゝや人こそこえくなれと思へは萩の葉かせ也けり
あしかきは隔つとすれと萩のはな吹こす風のなとはかくれす
風吹はまかきのほかの萩なれとわか思ふ事はそよといふなり
おほつかな何れの宿にうへたらむ萩ふく風の近くきこゆる
萩のなとをぬしはいかにか思ふらむ隣は人のくるかと思ふ

羈旅鴈

もろともにみふれの山をこゆればや空行鴈のからるをすらん

草枕がかりかねの音に夢覺て露けき増るたひころもかな
なきわたる鴈や涙をそへつらむ草の枕のいとつゆけき
めつらしきはつたかりかねわたる也首途うれしき旅の空かな
我ひとりたひのそらとは思へ共やとかりかねも鳴わたるなり
いそきつゝこま打むるゝたそかれに雲井はるかになる鴈金
夕暮に宿かりかねそきこゆなる我ひとりとも思ひける哉
身をつめはたひの空なる鴈かねの啼たひことに悲しと思ふ
嶺上鹿

雲かゝるいふきのたけになくしかは風のつてにそ聲は聞ゆる
さ夜更て高まの山のみれ高し聲もおしすをしかなく也
ふしのれのけふりのなかに鳴鹿はもえぬはかりに妻や戀しき
夕されはみれのつゝきに妻こふとたえすきこゆるもる鹿の聲
つきよゝみさきさか山をふみ分てをさゝかみれに男鹿なく也
いかにして秋きにけりと聞つらん耳なし山の峯のさなしか
秋風や身にさむからしつくはかはその水上になしかなくなり
妻こひて鹿をなくなる獨れて嶺のあらしの身にやしむらん
杜間紅葉

をしなへてみな色々にみゆる哉紅葉するきやおほあらしの森
うすくこく紅葉しにけり紅の匂ひにみゆるころも手の杜
紅葉はのやみのにしきとみゆるかなしのたの杜の秋のゆふ暮
もみちするこやのおほ杜見渡せば錦に見ける心ちこそすれ
時雨するかみなび山をみわたせばはいはぜか森も紅葉しにけり
秋さぬと人はつけれと紅葉するけしきの杜にしるき也けり
露霜をたてぬきにしてたつた姫錦をゝれる衣手のもり
緑なるたもとにちれはにしきかとみれば常盤のもりの紅葉々

苔上露

朝またき苔のむしろになく露はみとりの玉をしくかとそみる
岩の上のうちたれ髪とみるほとに露なきかさる玉かつらかも
みとりなるこけちに散す白玉は秋のみそらの露のしわか
苔のうへになく白露のいつはりなくたるたまと思ひける哉
やまかつのそとも庭の苔の上にあたら玉をも露のなすかな
有明の月やとれとやみれにむす苔のむしろの露のうはしき
草枕やとれる露をけさみればこけのむしろに置そひにけり
白露も苔むす庭になきつればあな玉しける心ちこそすれ

田家霧

いなしきやそとのなたの朝霧に鳴子ひくなる聲はかりして
やまたもるしつものさゝもの雲なきは秋霧のみを立へたてける
あさ霧に賤のかとたを分ゆけは人をもしかとひたならすなり
夕霧にやまたもるやをたつぬればむれともみえぬ庵也けり
ますらをかかたとも見えぬ秋霧にひたひきならずをと計して
秋霧の山田の庵はたちこめてなるこひくなるなとのみをする
あし垣をへたつる霧のたえまよりわさたの庵のほのみゆる哉
霧こめていつつもみえればもる人もなき小山田と誰かみらん

垣根槿

むくらはふ籬かしたの朝顔はみになるまでもしほれさりけり
まはらなる賤のかきれに立そひてたれうかゝふそ朝かほの花
あたらしやしほれにけりなあへなくも賤の垣根の朝かほの花
朝顔は垣根の竹にまとはれてうきよをえこそはなれさりけれ
八重むくらしける垣根にわりなくも咲かゝりたる朝かほの花
あさかほのあてなる花の姿もて賤のかきれにならされにけり

たれならむ露にしほれて山かつのかきねにみゆる朝かほの花
垣ねをはたてさりけり朝ことにあさかほみする朝かほの花

深夜駒迎

待宵もや、すきむらのこのまよりさしつるかけやもち月の駒
逢坂に駒ひきとめて月みるとやすらふほとにさよふけぬらし
もち月の駒やいつらと待ほとにせきのむらすき影かたふきぬ
あふさかの關のこなたにさよ更てにしへよりゆく月かけの駒
更にけり關のすきはら霧暗て今をかけつるもちつきのこま
望月はよ、めとみえず道とをしなつみにけりなきりはらの駒
さよなかにみやこを出てもち月の駒あふさかの關にきにけり
月かけはいて、はるかになりぬれと駒のをそくもあふ坂の關

嶋邊虫

浪かくる江嶋にすたく虫のねをうつしなかはや秋のかたみに
我やとのよもきのそまの心ちしてまかきの嶋にきり／＼鳴
秋風にをしまかいそのまつ虫はなみと、もにや聲をたつらん
松虫のこゑのわりなく聞ゆる小嶋かくれのいは、さまより
なくむしの聲聞ほとに蜚人ものしまかさきはあさりせられす
波のよるうらかなしく聞ゆる身なうきしまの松虫のこゑ
今こんとたれたのめけむよもすからのしまにすたく松虫の聲
あはちなるゑしまの磯に浪うてはもにすむ虫はねをそ鳴なる

水岸菊

くきのはかまやそこにさけたとなしなとをけさに社山河の菊
そこ清みさしの八重菊かけみれば池のさゝなみなり重ねけり
水とりのすたく汀の白きくわうはけの霜にまかへつるかな
ときならぬ雪のつゝみとみゆるまで池なめくりてさける白菊

大井かはとなせのたきとみるまでそきしの白きく花咲にける
みつのおもにきしの白きくうつるへは本マ、
水にうつる影なかりせば白菊の只ひとむらとみてや、まゝし

〔一首闕〕

十三夜月

なをえたる今宵の月の同じくは明ゆくまでもとまらましかは
ひく駒の影そふ月もみしやとか厭もなを今宵そくまなかりけれ
さきまくり今ふたよなはみてすしてくまなき物は長つきの月
かそふれはもちにふつかはたられとも光は空にみてる月かな
もち月に今宵の月をくらへはやいつれか空のはれまゝさると
昔よりなになかれたる長月のつきすみにけりあまのかはせに
いかなればみたぬ今宵の月影のむかしのよゝりくまなかる寛
もちをのみ盛りと見るに長月は二夜もたらてくまなかりけり

遠郷擣衣

よもすからきこゆなるかな衣うつなとはの里は近かられとも
たひねするとなちのさとに月すみてみやこ遙にころもうつ也
はるかにもきこゆなるかなさよ衣月の都にうつにやあるらん
夜もすからとなちの里にうちわたすきぬたのなとか蟲のはし
ほのかにそなちのさと人あかつきの鐘と、もにも衣うつなり
秋風や身にさむからしよもすからなちのさと人ころもうつ也
夜もすからたえすきこゆる鴈金やなちの里人ころもうつらむ
まきかへす程にやあるらんから衣となちの里はうちたゆむ也

閏九月盡

長月のひかすをそふることしさへあかても秋のおしまるゝ哉
秋は猶つゝあにかくれぬことしわかおしみえたりと思ひし物を

常よりも今宵は秋のおしきかな久しくのへにむつれならひて
長月にまたなか月はくはれとなをあきたらすおしき暮かな
あやにくにおしまるゝかな長月のなかひく年の秋のくれしも
あやにくにおしくも有かな長月のくはゝるとしの秋の暮さへ
なが月のくはゝるとしの秋なれと暮行としのおしくも有かな
長月のまたかきなれるとしとてもおしむ心はいやまざるなり

冬

初冬時雨

年をへてふる時雨とは思へともいつしかけさはめつらしき哉
かみな月たつたの山を過ゆけはしくれとゝもにこの葉散かふ
けふよりははゝその杜も神無月時雨ばかりやしらんとすらむ
やまふしのたのむこのもと時雨して涙とまらぬ冬はきにけり
冬きぬとそらしるかなかみな月曇もあへぬけさの時雨に
いつしかと冬の景色をみせ顔にたつやなそきとしくるめる哉
かきくらししくゝけふのけしき社冬きに鳧と空にしらるれ
さもこそは冬のはしめのさかならめいつしかもふる初時雨哉

橋上落葉

いかにしてあやふむきそのかけ橋をやすく紅葉の散渡るらん
紅葉はの散しきにけるそま山の谷のかけはしくれなぬに見ゆ
きそちにはたとえしたりといはせはやきも紅葉を人のふまゝと
水のおもに紅葉散しくうきはしなひきわたしたる錦とそみる
けたもなきいたゝの橋をいかにして水々の紅葉のちり渡る寛
紅葉ちる峯のこからし吹たては谷のかけはしにしきゝてけり
色々にしける紅葉のみたるればわたらまおしき谷のかけはし

紅葉ちる頃はみかはのやつ橋もひとつもみえず埋もれにけり

寒庭霜

庭もせのむすふつらゝのうへにをけは木々、
庭もせにかやか枯葉はおれふして霜はかり社おきてみえけれ
故郷はくさかもともおれふして枯葉に霜のをかめまもなし
はたらなるあは雪よりはながく庭ひたしるにける霜哉
庭もせに霜ふりにけりおほ鳥のはれにのみとは思はさらなむ
よもすから庭のから草風さえてはたらに今朝は霜ふりにけり
朝ほらけさえゆく庭にをく霜をのこれるつきの影かとそみる
初霜のあさひにあへとときえぬかな庭の草葉やさえわたるらん

閨上簑

いたまより簑もりくる冬のよは玉の上着をかされてそきる
あられふる草の庵はかともせてれやのひまより玉を散ける
とこそはきはにふのこやのいたまより枕のうへに簑たはしる
吹はらひあれたるやとはひとりれのくみれのうへに簑ふる也
もりくなるいたま簑のなかりせはたまの衣をきてれましやは
いとしくかたしく袖をさえまさる板間まはらに簑もるやは
いたまより簑もる夜は今更にとこのさむしろしきそわつらふ
さ庭に簑もりきてたゝく也ふるやのいたのうちくたけつゝ

松上雪

いつしかとあけはまつみん白妙に雪ふりおほふはこさきの松
雪ふれば皆いはしろの結び松花さきにけりとけすもあらなん
ふる雪に梢はひとつ色にしてふたとたてゐたけくまの松
朝またき松のうはゝの雪はみん日影さしこはしつれもそする
ふりつる雪高砂を見わたせばは尾上の松も花さきにけり

朝またき雪ふりきてそ色かはるころもの山の松のみとりは
白雪のこゝろに千代やかなふらんふれは花さく高砂のまつ
しらさきの松の梢にむれゐるとみゆるは雪のつもるなりけり

濱邊葦

かもめゐるしららのほまの夕浪にまかふはあしの末葉也けり
つきもせずえせぬ雪の白濱はなみよるあしのほすゑ也けり
ともすれは潮みつ濱の葦のれのしつみてからくおいぬへき哉
冬くれはむれゐる田鶴にしたかれていと、しほる、浦の葦原
沖つかせ吹あけの濱のあしのほにまかひてみゆるきしの白浪
しほかまの煙なひかすはま風にしほれし葦のうらはそよめく
吹風になみたか濱の葦のほはそれそれとも見えわかぬかな
難波江の入江のあしのしほれはのしほれ／＼てあと方もなし

曉天千鳥

有明の月の入しほみちにけりうらはの千鳥たちさはくなり
おもふ事あり明方の月さえてさほのかはらにちとりなく也
たましくけふた見のうらのあけ暮にはまつたひして千鳥啼也
さよの浦に波のしらむを明ぬとや驚きかほに千とりたつなり
浪よするなしまかいそのはま風に千鳥しはなくあけくれの空
こゑしつゝ雲間ゆく也とも千鳥有明かたの月のまに／＼
あけかたになりやしぬらんもろ聲に霜よの千鳥なきわたる也
是さけや冬になるよも限あればあくるしるしの千鳥鳴なり

谷川氷

今朝みれはきひのなかやま風さえてほそ谷河に氷しにけり
谷川のいはもとゝろきたきつせのなとたゆるまで氷しにけり
山陰や谷のした水つらゝゐて岩うつ浪もいまはなとせず

いはまとう露ももらさす谷河のみつほすものはこほり成けり
なかくるる音もきこえずつらゝゐてみゝなし山のたにの川水
冬さむみゝれのあらしのさえくれは谷の川水こほりゐにけり
冬くれは聲もつらゝにとちられておほつかなしや谷川の水
さよふけて谷の小川そこほるなるいはこす水のなとをくる也

河上水鳥

山川の岩まのつらゝかき分てわりなくきあるよはのをし鳥
しなか鳥ゐなの河せをみ渡せば雪ちりまかひかもめむれゐる
獲しもみなれにけらしみなれ棹さすにも驚のさはきけもなし
水はやみ岩きりとをす山川にむれゐてすたくなしのつるきは
こほりゐて浮ねのとなければや羽風にかもの立騒くらん
山川のいはせにすたくすゝかもの聲はふりせぬ物にそ有ける
よそなからみるたにさゆる川波にいかなる鳥の浮ねしつらむ
いか計したさはくらん浪のうへにやすけにあそふ驚のかも鳥

雨中網代

網代木にかくる簀のしめるまでけはしき夜半の村しくれかな
おもふとて宇治の河瀬の網代木にしぐれの雨と目をくらす哉
ひなのよるやそうちかはのかは浪に聲うちそふる山めくり哉
時雨しぬ網代のひなに宿からんひなのよるをしまむと思へは
村雨にぬるゝもしらす村きえはうくらにひなのよるなまつ哉
たな上の瀬々の網代によるひなを時雨にまさる波かとそみる
網代木の水にふりくる雨のあしなひまなくひなのよるかと思へは
時雨にもさはらてそくる網代木はそれにやひなのよると思へは

月前神樂

いつるよりくまなき空にむかひゐて今宵の月とほしうたふ也

面白し物のねよりも月かけにあさくらしもそすみのほりける
つきよ、み庭火のまへの笛の音を雲のよそにもき、わたる哉
とのもりのみひしろくせよ晴くもるおほろ月夜に戀とるみむ
からかみのかなてになれはいと、しく照月かけの面白きかな
あまてるや神の心もとけぬらんさやけき月にさかきとる夜は
さえわたる月の光のくまなきにいと、庭火をしろくみえける
月かけにほしなゝりてそあそふめるあまてる神の心とるとて

晩頭鷹狩

はし鷹を今ひとよりもあはせはやたち歸るさはよるになる共
夕月夜入の、なさ、ふみしたきましるの鷹をあはせつるかな
かりくらしこゑもしられすはし鷹のうちふる鈴のたと計して
かりくらし入日とともに簪鷹を山のあなたにあはせこしつる
夕されはの守のか、みかひそなきこゑする鷹の影しあへれば
かりくらすましるの鷹のゆく方をおふさの鈴のなとにしる哉
とやかへるま白の鷹をあはせつ、み狩の野邊にけふも暮しつ
つかれやる聲のみそするはし鷹の行系も見えずゆふくれの空

深山炭竈

しつはらやひら松やまのすみかまは煙たえて年をへにける
うらやましやくすみかまの煙たに峯たかくこそ立のほりけれ
雲まよりかすかにけふりたつた山峯のあなたに炭や、くらん
雪きえぬみやまたそのすゝくはやくすみかまの煙也けり
おく山にやくとはきけと炭かまの煙と人にみえずやはあらぬ
見わたせば煙たつめりさ、波やおほさ、山のみれのすみかま
あとたえて人もかよはぬ山中にたれ炭かまのけふりたつらん
おほつかなくふもしらぬおく山にたれすみかまの煙立ちむ

閑居埋火

埋火にはなのきのすみかきてけり今朝ちり計あたりはるめく
夕されは雪かき曇り埋火のうつもれてよなすくところかな
埋火をみるよりほかのともそなき柴のあみとは風にまかせて
ともにするよはの埋火けぬるくて老のねふりそしつか也ける
うつみ火を哀とそみるよもすからさ社は我もしたにこかるれ
ひとりして物思ふやとの埋火やしたにこかる、たくひ成らん
おきあつ、おこしそ添る山里はうつみ火ならぬ友しなけれは
さゆるよはおきあてこそは埋火を友にてあかせしなけれは

舟中歳暮

年なみはけふこゆるきといそきつ、春をあかしの浦による哉
今宵しもこのうらに我船とめて春になる夜にあくるをそまつ
おきつ波そこをたしへよ暮はつる年のとまりに我もとまりん
月日のみつみて過行はや舟のこよひとしにもなくれぬるかな
たまくしけふた見の浦に舟よせてこよひ明なは春とこそきけ
たまくしけふたみに今宵舟とめてみてこそゆかめあけん初春
ひよりあらは年をこめてと漕ゆけとつめに今宵に成にける哉
故郷へこかれてとゆくそまな舟今宵はかりの今年とおもへば

戀

洩始戀

三つの山しらてのみこそ過つらめしるし計はけふを見せつる
つゝめとも涙のたまのくたけつ、そてより終にもらしつる哉
なけきつ、おほくの年はすきまより今こそもらせ山のほの月
〔以下五首闕〕

人傳戀

しらせはやいろこのみそと聞しより心にそみて君をおもふと
つけそめし人さへ今はつらきかな色に出へきかたしなけれは

〔以下六首闕〕

被返書戀

思ひ河わたす丸木のはしたなくふみかへしてもあはぬ君かな
いかにしてこつたひよらん情なく谷のつき橋ふみかへしけり
玉章は我むすひめにかはられともしやと裏をみぬたひそなき
難波瀉あしてにかける玉章をみにくしとてやかへすしらなみ
玉つさをみけりと計しらるゝは我むすひめのかはるとそ思ふ
わか文にいくたひ胸をつふすらんいなと計もかきやますると
むすひめもかはらて返すたまつさにとけぬ心のほとなしる哉

〔二首闕〕

憑媒戀

さり共とわきをかく社嬉しけれこしらへえたる氣色しるしも
よとゝもにたのむ甲斐ある君ならは逢坂山へはやしるへせよ
うくひすのさへつる聲をたのめとも猶とけかたき山川の水
我かたにかみかきやりて靡けなん朝夕たのむいかうしろみ
心なもとりもやゝるとはしたかやあはする人にまかせつる哉
玉川はみかたのはし重ならはつれなき人のかけみさらめや
いつしかとなか人たつるかひありてまとのかたちきくを嬉しき

〔二首闕〕

詞和不會戀

ことよさはきら／＼敷て宵ことにいてほしからぬ空たのめ哉
むつ言はむつまじしなから下紐のむすほゝれてもあかす夜半哉

いかにせんあはぬを急くつらからぬ氣色をしらぬ心とやみむ
ことのはは風にしたかふかるかやのしたれはつよき君か心か
つらからぬ人の氣色にはかられてさりとともとのみ思ひける哉
つらからは思ひこりても有へきを何とてかくるなけの言葉そ
あひみれと今まで我が世にふるはなさけにかゝる命となしれ

〔二首闕〕

卜戀

あふ事は何ともしらす和田津海の龜のますらにやくとゝふ共
春風になひきぬへくやなりぬらむしめさしをきし宿のわか草
いかならん言の葉にてかあひみんとトよりトにとはぬ日そなき
思ひかね戀しき人をえものにてとふにかなへるうらかたも哉
あふ事なとふいしかみのゆるかねはみ難き戀と空にしられぬ
うき人の心を人にとふうらにみるめなとかといふなこそまて
水莖のあとにとひつゝひきしかはあふてふトにあたりし物を

〔二首闕〕

怠僞戀

淺からず契るにつけてつらき哉まことしからぬ心とおもへは
はしたかの君かをきふにはかられてこりすもきつゝ恨つる哉
よしさらはれたさになをやたてゝまし僞にても頼めさりきや
つらき哉あはらまかきのかくれなく我をすかしてあはぬ心の
頼むとはなけの言葉に云ながら思ふ氣色の見えはこそあらめ
たのめつゝこぬ物故に松嶋やなしの海人の袖ぬらすらん
今更にかはる心のつらきかな契しほとはむかしならぬに

〔二首闕〕

契久戀

難鳥のそのはくみに頼めをきてあはてふしきに成そ悲しき
あひみんと頼めし事を松かえにいのちをかけて年そへにける
としふれはたのめといひし一ことに命をかけていきの松はら
おもふとはつみしらせてきひな草童遊びのてたはふれより
しるしあれば祈りそかくる我妹子かたのめし程もすきの社に
頼むまのそのともふしの契には世に永らへはとこそいひしか
頼まゝ經にける年はいかゝせんあはて此世にすぐさすもかな

〔二首闕〕

後朝隱戀

戀々てよるはあふみのあさ妻に君もなきさといふはまことか
いつしかと今朝は暮をそ待へきに行衛もしらぬ歎きすへしや
あかなくにおきつるたにも有物を行衛もしらぬ道芝の露
逢見ても心の鬼をつくりてやけさしも人のかくれみのきる
あひそめのよはに心やかはる覽今朝は有かなをそこしらね
あひみても人苦しめの辭なれはいつかけさはなしといふ也
くやしとやいつしかいかにあはしとや又も見しとやけさはなしとふ

〔二首闕〕

共忍戀

しられしと君つゝむめり我も又人めはからふ程そくるしき
賤の女が花つみたむる花かたみかたみになそや人めしるらん
しのふとも我は色にや出なましかすならぬ身を思ひしらすは
なさへたる袖になみたはあまる共もらすなよ君我もつゝまん
いかばかりあはぬたえ間を恨みまし我も人めを包まさりせば
もろともに思ひしのふのすり衣きてもなか／＼袖そぬれける

諸ともにしけき人めなつゝむとていはぬ日數のつもりぬる哉

〔二首闕〕

雜

谷風

なつかしく梅かほりけり鶯の谷にふくなる春のあらしに
ふなきこるますらをや今本々、谷風さむみ駒いはゆなり
やま人の柴引むすふ谷の戸をあらくもたゝく風の音哉
散ぬとも外へなやりそ色々の木の葉めくらすたにのしたかせ
宮木こる人のためには朝夕に吹谷風をうれしかりける
夜もすから身にやしむらん賤の男かれらふなしかの谷の秋風
散殘る花の匂ひのしるへには谷よりいつるあらしをそする

〔二首闕〕

峯雲

花の散あみたの嶺の山端にとよはた雲をかけてける哉
谷の戸に嶺より雲の立きつゝ苔の衣のうるひぬるかな
かくらくの初瀬の山は白雲の嶺に棚引なにこそ有けれ
嶺高く花やさけると見えつるは立白雲の遠目也けり
朝またき嶺の白雲立ぬれば黒髪山も名のみなりけり
ふたみ山嶺にあさある白雲の晴間まつてふ伊勢の海士人
白雲の立しかゝれば苔薺あなれか嶺も名のみなりけり

〔二首闕〕

遣水

音高きなるたき川をせきよせてときはにすめる影をこそみれ
岩ふれてとゝこほり行まし水にさえてなかるゝ月の影かな

誰宿をあれたる庭に行水の心ほそくもすみわたるかな
古郷にとゆきかくゆくや水は心くせあるひとやまかせし
君か代の久しかるへきかけ見えて長閑に澄るみかは水かな
かきなかつ宿のさゝ水よもすから岩間行なる音そさやけき
昔より長閑くするありすかは今行すゑも絶しとおもふ

〔一首闕〕

嶋 巖

海人の住小嶋か崎のそなれ石にたえずもかゝる沖津なみかな
松嶋の松の木陰にそはたてる岩れのこけも年ふりにけり
鹽はひぬいまやとしまかいはかまにうちよせつ覽貝も拾ひに
沖津嶋ゆく人かたきはなれ石にやすくも鳥の立居する哉
千鳥なくみしまのいその色々をいくしほ浪のかけてそむらん
なころうつ磯はのはゐに心せよとしまか崎にかゝるふなとも
松嶋のいはまに生るかたのりを浪はひけともはなれざりけり

〔一首闕〕

洲 鶴

沖のすに長閑に田鶴をあそふなる生るひさきか陰にむれあて
あさりして洲崎に田鶴のむれあるを風に立よる波かとそみる
雲の上に心はかりはあくかれてうきすにまよふ鶴のみなしこ
としふりてなかにれむるあしたつの夢をさますは沖津白浪
波かくる洲崎の松の陰毎にあそふなるかな田鶴の村鳥
はるくとはひなかくすにゐるたつの久しき程を浪や數へん
かのみゆる洲崎に鹽のさすまゝにむれある田鶴の立さばく哉

〔一首闕〕

梢 猿

この山に木のみもりはむこの葉さる梢木つたふ聲きこゆなり
木すゑにてわひしらになく聲きけは物の哀のまさるなりけり
あき果てあらしにたへぬ木の葉猿梢をつたふ聲のみをする
椎柴や梢にすかる〔恐有脱字〕くさりたえぬ山邊をやなわたるはし
なく聲の梢にのみも聞ゆればはやたかとりといふにそ有ける
むれあつゝましらなく也聲々に端山かみれのかえの木すゑに
山彦のこたふるばかりましらなく木々の梢にえたうつりして

〔一首闕〕

社 頭

久かたのあめしの社としふりてしるし有なそもりきこえける
住吉の松のしつえにいく千代か浪のしらゆふかけてきぬらん
浦風に神さひにけり住よしの松のひまより見ゆるかたそき
なる神はいつこか社に見えぬ雲のかくれやほこら成らむ
神のます此御社に雪ふればゆふしてかくとみゆるさかき葉
あめの下心ひろたといはれてよにふる數にもらさゝらん
さしかゝる夕日のかけにてらされて光を添るあけの玉かき

〔一首闕〕

山 寺 短歌

爲 忠

あしひきの 山寺にくる たひことに こゝろとまらぬ
折そなき 花のさかりは たちそひて 散をおしきと
するほとに 山ほとゝきす かたらへは 雲間の聲を
待かれて 心そらなる 夕されに さやけき月の
影もいてぬ なかめあかして 見わたせば 梢もみちて
こからしに かねの響も たくひつゝ 獨すまして
つくくと みたの御前に あふき居て おもひをにしに

かくるなりけり

朝毎にひらきてそみゆる池水の蓮にむかふ花のとほそを
かれの音に道ひかれきて山寺のこけの庭をもふむそうれしき
明暮の鐘より外になのつから音する物は山おろしのかせ
すまはやな嶺のしきみの花を折谷の水汲山のこ寺に
見るまゝに清水山の瀧津瀬は心すみます物にさりけり〔る舞〕
いとしくあはれうちそふ山寺のいりあひの鐘の音聞ゆなり
なやみせず雨はふれとも山深み柳をさしてわれはきにけり

和琴

開度に聲のひききもまさりつゝふり行まゝになかすゝかな
武士もきけは哀なかくといふあつまのこをいかてならはん
面白き東のことなひくなかななうとはまな身にはしみける
逢坂の關をは越し身なれともしらへもしらぬ東ことかな
相坂のせみ丸か手をつたへてや東のしらへかきならすらん
面白き東のことにそのかみもあまのいは戸をあくとこそきけ
しらへてはまたきかれ共よそ乍らゐのみか聲とくみてしる哉
〔一首闕〕

高麗笛

こまひとにならひつたへてあやきりを心はそくも吹たつる哉
おほつかないつれの御代にこまふえを心ほそくも吹傳へけむ
波を分いかなる風のためよりにかこまのしらへなふき傳へけん
そりことかみきのかくやのこま笛に打あはするはから鼓かも
おひとりしいしかはひとの笛の音にはやしの歌の聞ゆ成かな
聞人の身にそしみけるふきならすこまの調へは色ならねとも
吹ならすあつまあそひの笛の音やするか舞するところ成らん

〔一首闕〕

野酌

のへに出てめくらす玉の盃に千種の花のかけそうつれる
さかつきにかけたうかへてさゝれ水心をのへに出にけるかな
諸ともにいさかたふけん山かつの園ふへにたてる桑の葉の露
篠原やさゝのくゝたちさかなにて旅ゆく人をしめてとゝめん
櫻さく野へはたゝまくおしき哉吹春風の酔をすゝめて
おもふとちかり場の小野に閑居してさしこそかはせ玉の盃
風そよく秋の野立て朝なゝゝくみこそつくせくはの葉の露
〔一首闕〕

温泉

たえずわく出湯有まのあたりにとは冬もけぬらし霜はなけとも
なにかち^きに岩まを分て出る湯のいつくへか又わきかへるらん
なみかくる濱のあらゆは我なれや身をうみにのみ思ひ入らむ
敷ならぬ身のあやしきは有馬なるいてや出湯のしるし非しな
わけてゆくさゝまの水の出そめていくよに成と知人そなき
思ふ事有馬の里に出る湯の絶す涙をわかずころかな
かたゝゝに出湯は多く聞しかとなゝくりへ社わきてきにけれ
〔一首闕〕

釣舟

遙々といそらかさきの波まよりたいつるあまの舟にみゆるは
荒磯の鹽のなこみに引つれて興こき出る海士のつりふね
歸るさはけふりや宿のしるへなるむろのやしまの海士の釣舟
すゝきつる海士の友船さそひ出あさける風に波もしつけし
あなしふく鳴海の沖に釣舟の浪にたゝよふ春のあけほの

よさのうみちれのとなかに漕出て浪にたゝよふあまのつり丹
雲はらふ秋の夜風に月はれて明石の浦に海士を釣する
〔一首闕〕

王昭君

心にもあらぬ雲井にきてみれば月はかりこそかはらさりけれ
唐衣^{後拾遺}うらめしかりしみやこのみきては戀しきこの里そうき
ゆきつくる月のかつらの聲のみやみしよの人に逢こゝちする
思きや墨繪に我を書なして花の姿をけたるへしとは
思きや都の方をはなれ出てひなのあたりにすまんものとは
悔しくも鏡のかけを頼みつゝ干々のこかれを盡さゝりける
なけくまに鏡のかけそかはり行こや繪にかける姿成らん
〔一首闕〕

上陽人

新古今
いたつらにむそちの春を過にける宮のうくひす聲はかりして
老にける身をそうらむる鶯の百轉をひとり聞にも
春の日も秋のよのまもなかゝりきいかに過にし年のむそちそ
むは玉の黒き髪なく雪ふりて空に老することそかなしき
あけ難き秋のよすから歎かなむなしき床におきゐられつゝ
春毎にさひしき宮の鶯を獨聞つゝとしそ經にける
さらぬたに老の寢覺はさひしきに窓うつ雨の音のみそする
〔一首闕〕

楊貴妃

まほろしの傳に聞こそかなしけれ契りし事は夢なられとも
朝夕にみればなみたそこほれ出るなにかきとめし姿なるらん
七夕は今も替らすあふ物をその夜ちきりし事はいかにそ

まほろしの玉のかさしのしるへ社いとゝ心のまとふつまなれ
ふりにける枕のちりを見ても猶昔の野への忘れぬ哉
もろともに昔ちきりし言の葉をたゝまほろしの傳に聞かな
人つてにことのはいかて頼まゝし昔ちきりをむすひをかすは
〔一首闕〕

浦嶋子

よさの海に釣するあまをみるからに浦嶋のこか事をしそ思ふ
戀しくともかたみの筥をあけさらは再びあはてやみなましやは
故郷のみしにたにも替らすは戀しさのみそなけきならまし
悔しくもうら嶋の子か筥をあけて老にふたゝひかへりぬる哉
老らくを歎かさしましなしへ置し人の契りをたかへさりせは
心からなにとかへりて思ふらん身につむ年のかゝるなけきを
古郷を戀しと思ひし事よりもかへりてのちはいかゝこひしき
〔一首闕〕

遊女

新古今
ひとりれて今宵もあけぬ誰としもたのまはこそはこぬも恨め
あけくればゆきかふ舟にうつろひて波の上こそすみか也けれ
うきたちて宿も定めぬ蜚のこはなかくゝよにやすみよか
川の瀬に波の浮草うかれありくそなたはれめたいかゝ頼まん
それとしも妻も定めぬ海士のこはゆきゝの舟を待にそ有ける
波の上に浮れのみする蜚のこはさせる泊りをさためぬそうき
宿毎のそともに船をつなきつゝゆきゝの人をまたぬ日そなき
〔一首闕〕

眺望

たとふへき方こそなけれ松かえに雪降わたるあまのはしたて

見渡せばなにはの浦もそこすみて荳のたえ間に驚たてりけり
いつくにかたとへていはん朝なきて霞たなひく鹽竈のうら
和田の原入江嶋々はる／＼と目も及はぬは明ほのゝそら
みわたせばあのゝうら風ふく故に伊勢の濱荻なひくめるかな
はる／＼とみればこしまの濱へより浪立まかふ八重の鹽みち
月影の浪に入ぬと見ゆる哉にしなる山や八雲あるらん
〔一首闕〕

慶賀

嬉しさの身にあまりぬるけふなればての舞足のふまん知れず
よそなりし雲井の花の色みればことしそ春にあふ心地する
君か代はさため置てき神代よりこのころまでの年をふるまで
こゝのたひとたひに位うつりけん人もかくこそ嬉しかりけめ
はかへせずえたさしそへよ雲かゝる位の山の嶺のしゐしは
しかしかし嬉しきことのかすならはちひろの濱の眞砂也とも
たくひなきみねのあさ日の光にて位の山をのほり行かな
いにしへは身にあまりける嬉しさの今は心もなき所なし

右爲忠朝臣家百首以兩本校正

群書類從卷第百七十四

和歌部二十九百首八

木工權頭爲忠朝臣家百首

題

櫻二十首

山中櫻	嶺上櫻	洞底櫻	旅泊櫻	野徑櫻
關路櫻	磯邊櫻	鳴上櫻	岡邊櫻	浦路櫻
瀧上櫻	林中櫻	池岸櫻	園中櫻	庭上櫻
砌頭櫻	橋下櫻	遠村櫻	隣家櫻	山寺櫻
郭公十五首				
首夏郭公	人傳郭公	寢寢郭公	深夜郭公	曉郭公
朝郭公	夕郭公	雨中郭公	閑中郭公	羈旅郭公
山家郭公	夜々郭公	船中郭公	馬上郭公	晚夏郭公
月二十首				
三日月	晚月	弦月	十五夜月	亭午月
伊左與非月	立待月	居待月	寢待月	廿日月
木間月	露上月	有明月	山葉月	雲間月
朧月	雨後月	水上月	閨中月	霜夜月

雪十五首

神社雪	故鄉雪	行路雪	竹園雪	杜間雪
海邊雪	鹽屋雪	杣山雪	荻田雪	葦間雪
塙根雪	風前雪	簾中雪	氷上雪	草中雪
戀十五首				
未通詞戀	見手跡戀	聞音戀	繞見戀	時々見戀
隱在所戀	來不會戀	逐日增戀	憑人妻戀	絶後戀
寄井戀	寄鷹戀	寄鏡戀	寄錦戀	寄糸戀
雜十五首				
卯杖	蹴鞠	闘鶏	神祭	賀茂祭
騎射	乞巧奠	相撲節	小鷹狩	射場始
五節	臨時祭	庚申	競馬	園碁
讀人				
木工權頭爲忠	勘解由次官親隆	兵庫頭仲正	散位爲盛	散位源賴政
加賀守顯廣				
伊豆守爲業				
備後守爲經				

櫻二十首

山中櫻

木工權頭爲忠

消のこるみやまかくれの雪かとしてたれ初花をみてすきぬらん

勘解由次官親隆

櫻花きのふの山をたつぬれはおられにけりななのなか色ゆへ

加賀守顯廣

すきてこしとやまの花と咲にけりふかき匂ひを惜みつるまに

兵庫頭仲正

吉野山はるのよらへとみえつるはたうけに花のさける成けり

伊豆守爲業

かなとめてたつれきたれは櫻花かへる山路のしるへなりけり

散位爲盛

ゆくひとにみやまのたうけしらすとてうへし櫻の花咲にけり

備後守爲經

山ふかくたつぬるかひやなからまし初花櫻にははさりせば

散位源頼政

花ゆへに日をやくらさむ行末もすきぬる計とをきやまぢを

嶺上櫻

咲にけりうすくれなぬの花櫻色をよしの、岑のこすゑに

よしの山花咲ぬれは雪ふりておのへは猶を冬こもりせる

ゆふつくひいるさの山のかは櫻うすくれなぬに花そか、やく

かみ山の岑のうへなる花をみてあふかぬ人はあらしと思ふ

山鳥の尾上の花をことならはかけしか、みにうつしとめはや

よそめには岑のしら雪むらきゆるかつける花のみする也けり

しら雲や岑の櫻となりぬらんか、らぬけふも色のかはらぬ

心をし岑の櫻にひかはれていくさかゆくもしられさりけり

淵底櫻

流れいつるみつにそありとしられける人もかよはぬ谷の櫻は

谷深み花のあたりのうれしきはしられぬ松もひとめみてけり

ゆきはれぬちとせの谷のをそ櫻いくたひ春をよそにきくらん

高根より谷の櫻を見くたせばこすゑの花そしつえ也ける

都へやいてやこしらんうくひすはなのか住家の花にむつて

春くれはかすみの衣かさねきて山ふところのふしきはなさく

いはすへる深山かたそはおりかたみ花まきあけよ谷のつし風

谷風を咲そむるよりいとふかなこれゆへちらん花そと思はむ

旅泊櫻

さらぬ木もみゆめる物を心あらは花にとも綱つなかさなむ

けふもなな思ひわつらふ舟出哉とまりは花のなからましかは

櫻花ちるをみつこと世中をおもへばたひのうきなりけり

櫻咲ふななをかやまのすそつつかた春はすきうきとまりなりけり

有馬山いなのみなとに舟よせてしなかにまかふ花をみるかな

からことにふれひきつけて見渡せばたてる櫻を盛なりける

ふなてせはのりやなくれん高砂の尾上の花にとまるこゝろは

うきれするひかすはふとも櫻花匂ふあたりはこきないたしそ

野徑櫻

春日野にたれや散けん八重櫻おふる若木の花そかはらぬ

み狩する野邊のかすみのたえ間よりまたらにみゆるいね櫻哉

はる駒の雲に入ぬとみえつるは野邊の櫻の花さかりかも

雪とこそ外山の花はちりにけれすそのめくりの道もはたらに

花すゝきまねきしよりも春の野にたてる櫻そひとゝとめける

旅人よ駒なつなきそさらにたにあたしの、への櫻ちとすなき、すなくかたの、花をみるとてや櫻狩とはいひはしめけんはる／＼とくるすの小野の花櫻その蔭ならてやすむものかは

關路櫻

心とや花はちらまし吹風のは、かりのせき春しすきすは櫻花風をなこそその關ならは散をもなとかとゝめさるへき月影のさやけき秋にあられ共咲花春もしら川のせきみる程にひとまりけりいはてた、花にまかせよふはの關守花とてもはもりの神はよそにみしかしはの關にさくと思へはさえれとも人の心なとゝむめり春は關守はなにかせよ白川の關をは春はもらしかし花にとまらぬ人しなけれはちらぬ間はすきかてにせぬ（采々）花をとゝめよ須磨の關守

磯邊櫻

散花の雪とふれはやいそなつむ海士をとめこ袖もぬるらん櫻ちるいそへにあさる海士人は花をかつくとみゆるなりけり風のなともいはのけしきもよる浪もあらし磯へにいかん櫻そ龜のこふさしいての磯にちりかゝる花をかつくるかひ風そ吹散花やいそのへちふむやまふしの昔の衣のうはきなるらむおきつ風ふけはあら磯ゆするめり花のしつえよ浪におちるな風吹は涙かいその櫻花ちりてそかへるうしろめたさに吹風のあらいそ櫻散時はうすくれなるの浪そたちける

鳴上櫻

ふく風にうとはの櫻まかせてむ散ても浪の花とさきけり松嶋やなしまの櫻咲にけり心しておれおきつしら浪あたにちる櫻もよゝやすくすらんうら鳴のこかこひしかみ山

鹽風になしまの櫻はなかとてなみのみたてもなくてちりぬるあけはとくあしかり小ふねこき出ても、つしまはの花櫻見むちりぬともみしまの櫻かきつめて春より後のかたみにもせむゆきすかふ心はかりなうつす哉えしまの花の春のよそめはおもしろき室のやしまの花櫻いかてけふりにすゝけさるらん

岡邊櫻

櫻花つゝしのをかに咲比はいもかきなれのすかたそとみるあきのみと思ひしかともくれなるゐの花もやしほの岡と社みれ山風をならしのをかよ心あらはあたりの花はよきてふかせよこかけなるわか草の上にちりかゝる花はみますなわかの春駒心とやちらんとすらん春風をならしの岡にさけるさくらば櫻花しのひのなかに咲ならは風にもしはしありとしらるな花盛衣笠岡をきてみればにしきははれる春のあけほのたつれくる人ましかほにかたをかのとなみにたてる花櫻かな

浦路櫻

浪よするかすみの浦に散花を櫻かひとやひとはあ見旅るらむみさこゐるよさの浦はに風吹はさくらかひよる春のあけほの海士のすむやとの櫻に吹風をうらみてのみもする春かな浪かくるへちにちりしく花のうへを心してふめ春の山ふしみる程になかぬのうらの櫻花ちらすはかくてよなやつくさんすきかてにころもの浦をきてみればみきはの櫻ほころびに鳧舟よするしかの浦浪しつかなれみきはにさける花のかけみむさゝ浪のよする浦路もみえぬまで花吹おるすしかの山かせ

瀧上櫻

水上の春は雲井にみゆる哉ちりかふ花やおほはらの瀧

水上にはななきぬれは布引の瀧のしら糸がさまさるらし
さきかゝるしたり櫻によらはれてしつえにまかふ瀧のしら糸
雲かゝるなちのたかれに風吹ははなぬきくたす瀧のしらいと
はるかにもたきの心のみえつるはその水上のさくら也けり
水上の櫻さかりはしら雲のなかよりおつる瀧かとそ見る
ぬの引の瀧のあたりにちる花をさらしつくとや人のみるらん
あたにちる花のしたよりおちてくる瀧は雪けの水かとそみる

林中櫻

櫻花松のしけえにましるへとあたなるくせばなをらさりけり
さしかはすきゝのしけみをかきわけてまされすにはふ花櫻哉
さ、栗やくぬき交りのをはやしにあないふせけの花のありかや
櫻咲うしろのかたの里はやし春はむかひになりまこけるかな
かけしけきこまの林にうちむれてみれともあかね花櫻かな
めつらしくみれ共あかね松原やみとりかなかの一本さくらは
ときはさも花のこすゑとみゆる哉よもに櫻のちりしまかへは
春過てたつれやこましさきましる花もときははやし也けり

池岸櫻

吹風にみきはの櫻ちるときはいけの浮草はなさきにけり
さの、いけさしの櫻に風吹て春はたまも、花咲にけり
いひたつるかたそにふせるはひ櫻した行水にれやうきぬらん
くつれより池のきしへの花櫻れさへあたなるものとこそみれ
かるのいけのみきはふきおるす浦風に櫻浪たつ春のあけほの
櫻花なのかかゝみにあらなくにすかたの池にうつるめるかな
岸の花ちりしまかへはみつなしの池にも涙のたつかとそ見る
散花のかげをしみれば池水のそこにもかせのふくかと思ふ

園中櫻

みちよへてなる桃園にかくにしてあたに櫻のたちましらるん
山かつの竹のすかきの園のうちにあたらしくてもたてる櫻か
こかひする賤かそのふの花櫻くはのたかせにしたえおらるな
みそのなるしらかは櫻ちりかゝり春のかきねに卯の花をさく
わか園の花をうしろにまかすればちらす風こそあるし也けれ
ふみかはすそのふの花櫻ちればすきたり共みゆるしつのを
餘所にちることたにおしき櫻花けふはかりのに雪とふるかな
かこへともかきのすゑこそ春風にその、櫻をえこそかくきね

庭上櫻

ちらしてはやすくも花を庭にわかつて又ふきたて、いつち行覽
櫻あさのおふとそみゆる賤のやのそとの庭の花のちりかを
宿ふりてこのした蔭にむす昔よりつむ花をまたはちらすな
からくらやこまもかさるぬ我宿のにはもせにさくうす櫻かな
宿に咲花もときはのものならは庭もはたらにかくはちらしな
定なくはらふ風にそまかせたる花ちるほとこのよはのきよめは
庭のおもに櫻ととき櫻とおもへともやとせにこそ花は散けれ
我心にはの櫻にとまらずは春の山邊にあくかれなまし

砌頭櫻

我宿の軒端の櫻咲ぬれは花のひかくしさすかとそ見る
やまうちのみそきはにうへし櫻花かきなきしりて咲にける哉
軒近き花はこすゑをはなるともしのふにしはしな宿りせよ
宿ちかきわかきの櫻のきすきてほすえに花の咲にける哉
いかにして春すくともとゝめましあかすみきりの花の匂を
櫻花春の嵐にのこりなくたまのつみにに散しきにけり

櫻咲軒端のあめのつたひきてかゝるしつくのなつかしきかな
しつてなはちらてひさしにさしかけて常にみきりの櫻とも哉

橋下櫻

すちかへにわたすくちきの橋の上をかたはひきにもとふ櫻哉
いはゝしの花の光をしらむとてあけぬにかへるかつらきの神
いはゝしな渡しはてよな葛城やよしのゝかひの花もおるへく
うへしより橋本さらぬを櫻春のくれなやまちわたるらん
いそのかみふるみのはしの櫻はなちりしかゝれば珍しきかな
みるまゝに埋れにけり花のちるこのした水にわたすいたはし
しら涙のくもてにわたすとみえつるはやつはしに散櫻也けり
あたりなる花のよそめに山川のまる木の橋をふみそわつらふ

遠村櫻

たれかすむ宿の櫻そおほつかなかすみのみよりみゆるしら雲
なちの里かきねにさらすしら布とみゆるは花のこす成けり
はるゝと一村みゆる白雲はたかすみ里のこす成なるらむ
はるゝと錦のちはたてゝけり四方の木末の匂ふさかりは
白雲のかゝると見ゆるやとははや花の盛りのよそめなりけり
はるかにそ霞にまかふ櫻花いつれの里の梢なるらん
見渡はかすみの里に住居してたれわかもと花をみるらん
あさまたき野邊の霞の絶間よりみゆる梢や櫻なるらむ

隣家櫻

散くもめつらしき哉を櫻いとよそなるにほひと思へは
餘所ながら春は人めのしげき哉ならひの宿の花のさかりは
花のちる宿のあたりにすむときは吹くる風をさしもいはね
ちる花となりの人はおしむ共こなたにそはへなかのあし垣

あさゆふにゆきてみましや櫻花うつるふ宿のあたりならずは
かきこしにふきくる風をいとふ哉我身は花のあるしならねと
わかたにみな春風のふきこしてよその木末や花のふるさと
櫻咲はるしもわかたなひかき心してふめしつてえまて見む

山寺櫻

さきやらぬくらまの山のかは櫻春のとちめに匂ふなりけり
花をみてくるゝそらをもしらぬには入相の鐘をしるし也ける
ふもとてら年ふるむねのこけの上に岑の櫻のたれおひにけり
山かつの小てらにさけるいね櫻花の數とはおもほえぬかな
たえゝに霞たなひくはつせ山はつかに花の木末を見る
よそめにて花の盛りにみし人やくもある寺となをはつけゝん
谷ふかみあか井の水にちる花やのちの世までもしつまさるへき
山寺のあか井の水にちる花やのちの世までもしつまさるへき

郭公十五首

首夏郭公

郭公また里なれぬしのひねをきゝつるのみや人にをとらぬ
夏ころもたちぬにつけてけふよりは山郭公ひとへにそまつ
うくひすのとゝめていにし郭公けふやふるすにひとりなく
夏ころもたつのいちとやうくひすに山郭公聲をかふらん
春かけてみやまやいてし郭公けさいつしかと初音なくなり
いつしかとまかけかほに夏ころもたつよりきなく郭公かな
かへりにしなかこりいろのかはりにやいつしかきなく山郭公
いつの間に花をわすれて郭公まつに心のうつるなるらむ

人傳郭公

まつことはなとらし物を郭公わきていかなる宿になくらん
人はみなきくなるものを郭公そのうちにたにいらぬみそうき
もしやとそまぢわたりつる郭公なきけりやきは今はたつれん
ひとつてはいなやなにせむ郭公そのふるなのりこそ聞てき
人傳にきくたにうれしほとゝきすまつ我宿にきなかましかは
よなをされたれもきゝけり郭公なとわれにしも聲おしむらん
郭公しのふるこゑなきゝつてふかへるかたにもしたひ行かな

寢寤郭公

おまたゝひたえすなるかな郭公まゐるむ宵もなきやしつらん
またすしてきくとやおもふ郭公ね覺のとこの夜半の一こゑ
まゐめはやかた覺ゆるよひの間の夢はかりなく郭公かな
さよなかにぬすまはれなく郭公きゝあらはしつおいのね覺に
ね覺してきくとやしらぬ郭公しのふる聲を露もおしまぬ
夢覺て思ひふしみのさよなかに身にしむものはうなるこゑ聲
またぬなをたちやはてまし郭公なく一聲にね覺さりせは
一聲に聞おとろかれさむるめのまたあひかたき郭公かな

深夜郭公

さむしろにあやめの枕そはたてゝきくも涼しきほとゝきす哉
夏の夜のふけるの浦の郭公岩うつゝ涙の立かへりなけ
郭公よはになのりて過ぬればおひつゝきにそとりのねもなく
まち兼てふしなましかは足引の山ほとゝきす夢にこそ見め
しのひれの聲なつゝみそ郭公みな里人もしつまりにけり
まちかれてまゐるむ程に郭公たゝにもやます驚かす也
聞はとにれになるかひもふきさしてときなたかふる郭公哉

曉郭公

あかほしのかけをともにて山の端を夜ふかく出る郭公かな
郭公なかれはいかにともしくもまたれぬきしのはなとすく也
しのひつゝまおきゆく空に郭公なこりおほくもなきわたるかな
あかつきに囀のもゝはゝかくなれと山ほとゝきす一聲もせず
郭公きゝもわかれてすきぬなり八こゑの鳥の聲のまさきに
郭公いつかたとたに聞わかつのてらのとらのかいのまさきに
かつらきの神ならなくに郭公あけぬさきにといつちゆくらむ
さをしかのかへりいるさの山きはに立ながら聞ほとゝきす哉

朝郭公

きえやらぬをさゝかみれの露分て聲めれ色になく郭公
郭公かほつくりするわきもこかれなきの髪のうちたれてなけ
まちあかす我をはしらて郭公いかなる里にあさいしつらん
郭公ながこゑいかてかけとめむかさとり山にあまかまへして
あさか山まはゆければや郭公木の下かけにきつゝなくらん
郭公いかなる里にぬくらしてあくればかへる聲きこゆるん
みれつゝきあさある雲にまつはれてみやま立出ぬ郭公哉
郭公はなたち花の朝露におは打ぬらし今そなくなる

夕郭公

とりはみなぬくらにかへるときなれとひとりやすらふ郭公哉
おほつかなくらふの山の夕闇にたとてきなく郭公かな
もろ友にゆふすゝみせむ郭公しはしかたらへ森の木すゑに
思はずにときのとりにそきなくなれよなうみはつる湊入江に
この里の花橋にぬくらしていつちすきぬるほとゝきすそも
心すむ日も入相の鐘の音に山郭公聲あはすなり
郭公夕すゝみする松かけにまつかひありてきなくなるかな

郭公入相のかれに打ませて心ほそくもなき渡るかな

雨中郭公

さみたれにしととみてややみなまし郭公てふ聲なかりせは
こよひたにのきのしづくも心せよ山郭公きたかにやきく
郭公かたらふ聲とおもは、やたえずなとするのきのしづくを
郭公をのかうはけに雨をきてひまなく聲をもらすころかな
なきてゆく聲こそあかね郭公あまやとりせんこかけをしへよ
この里にあまやとりせよ郭公しほ、にぬれていつちゆくらん
五月雨に聲ふりたて、郭公す、かの山をなきわたるなり
雨ふれとひまなきやとは郭公聲はかりこそり聞ゆなれ

閑中郭公

たれにかはきけ共いはむ郭公あたりにみゆるひとしなけれは
つれ／＼のなくさみにせし郭公それたに今はなとつれもせず
みちもなくあれゆくほととの橋にむかしのねなる郭公かな
山ふかみひとりとすみかのうはそくは郭公とやことはかたらふ
あはれとやすきかてみえし郭公ひとりなかめの里になくらん
たつれくる人なきやとは郭公かたらふ聲そ友となりける
聲すへきとりたにもなきみやまへにあはれにきなく郭公哉
つく／＼とき、ならましや郭公よにいそかしき我身なりせは

驛旅郭公

つたひゆくこしのほけちのけはしきにかけりてすぐる郭公哉
郭公まつよりほかのことなくて草の枕にいくよへぬらむ
しらさりしあたちの原のかりねにも聲なつかしき郭公哉
あさたちこまのにくらわいそき置てき、おほせつる郭公哉
郭公なくれを露にことよせて草の枕になきて聞はや

ほとゝきすみやこの聲にかはらね旅の空にはいとゝなつかし
草枕かりねの床も郭公都になきし聲はかはらす
なきくたれふしの高根の郭公すそのゝいほはきゝもをよはす

山家郭公

あたにゆふしつの竹かきあはれつゝまはらにきなく郭公哉
郭公やまかたつていへあせしもの心はなれきかんとて
みやこにはまたも鳴らん郭公とやまのいほにかれすかたらん
はなひろふかきのしたえに郭公しつの屋ちかく聲ならす也
都へといそくなるかな郭公しはのあみ戸にしはしとまらて
郭公かたらふ聲にはかられてかへりもやらずすみやまへのさと
郭公たつねぬ聲をきくのみや山里にすむしるしなるらん
郭公なきかなふなるこれその山さとへこしわれかれこと

夜々郭公

ふえ竹にきつつなくなる郭公夜はかはれともれこそかはられ
くれたたけの夜毎に聞は郭公ふしよきねやの心ちこそすれ
郭公きかてぬるよもありなまし物おもふ事のなき身なりせは
あまりなりなかねよ、にせよ郭公聞あきぬてふ人もあるかに
きかね夜もなききのわかの郭公浪うちはえて聲もおします
我宿の花たちはなにれやしめてよかれすきなく郭公かな
人しれすまちしかせば郭公きかてやむ夜のかすそすきなき
なかね夜をまつものならは郭公この五月にはあらしと思ふ

船中郭公

あなしけのいたてをはしるゆらのとにはやくもちかふ郭公哉
急くともせとのみやつき聲とめむしあけのまつに郭公なく
けふは猶おきこき出し郭公なくやまもとのあけのほそ舟

まつら舟かちとりなをしきそくるたまつしまはになく郭公
風もなみひよりよくとも郭公なくともまりをは出しとおもふ
なみまわけはしる舟路にほとゝきす聲ほのかにも鳴わたる哉
なに事を思ひをかましほとゝきす聲する浦のふなてならすは
はるかなるふなちなすきそ郭公とわたる船のほつらやはなき

馬上郭公

郭公聞て心をうつしむまのなつむはかりにたつれゆくかな
すかたゆへわかれしたひの馬のうへをしらめにたくふ郭公哉
うち渡すこまのとゝろに郭公さやにもきかすたのなかはし
こまよはみゆきもやられす郭公なくかた山によりによられて
鳴聲はひのくま川にあられ共こまとめて聞ほとゝきすかな
行ききに山郭公聲すればいとゝ駒をもはやめつるかな
駒とめてゆきそわつらふ郭公鳴つる方をきゝもわかれは
おなしくは行かたになけ郭公かへせはこまの足もつかれな

晩夏郭公

五月雨に思ひなしてや郭公なを夕たちの空になく覽
夏くて今そかへると郭公しのひし空につけわたる也
みなつきに猶をとつるゝ郭公かへる山路やものうかりけん
水無月におくての苗をさけひきてしてのたおさは猶を長なく
郭公こよひはかりのなつやまになこりおほくもなきわたる哉
おしみつる聲つくすなり郭公夏のみ空をけふはかりとて
散のこる華たちはなに郭公五月をこふるれをやなくらん
思へはなもと五月の郭公夏のすゑまでいかてなくらんむ

秋月二十首

三月月

をとらしと思ひかはなる夕つゝになに三月月の影くらふらん
いかにしておかみそめけん夏ひきの山より三月の月は出れと
秋來てはけふそわつかに三月月と思ふにかけのさえにける哉
頼むかな影すこけなる三ヶ月のみちひろくらん末のよころな
ゆふつくひいるかとすれば三月月の天津空にも出にけるかな
さらぬたにかけほのかなる三月月の心ほそくもこのまもる哉
見る程もなくてやみぬる三ヶ月のいる山ちかく出やしつらん
かそふればすゑたのもしき三月月を心ほそくもなめける哉

晩月

はれやらぬ天つみ空の夕月夜あるかなきかにかくろひそゆく
あこの海の浪間に遊ぶにほとりのほとなくいるは夕つくよ哉
有明のあかてあけゆく空よりもとゝめまほしき夕つくよかな
暮にけり西のひかくしとりのけよ月をいとふと人もこそみれ
とふ人もなしはら山の木間よりいかてもりくる夕つくよそも
よひの間にあるかなきかにかくろひて程もなく入夕つくよ哉
天津風ふきたゝよはす村雲にほのかにまかふゆふつくよかな
山かけに入目のかけののこるかとおほめかれぬる夕つくよ哉

弦月

あまの原もとにして入しらま弓あかつきやみにあたるこる哉
またきくる大宮人のともしればかきしてたてゐるゆみはりの月
いつこよりいつかいてつる山の端にいろのみみゆる弓張の月
いるたひにはつれぬものは雲かくるたかまの山の弓はりの月
弓はりの月にたなひく雲はれてかはきの里にかけをすみける
おしめともたちもとまらぬ弓はりの月は入佐の山のはそうき

たつか弓やまのはちかくみえつるは月の光のいるにそ有ける
おほ空に夕つゝたにもなかりせはかへりやせまし弓はりの月

十五夜月

見渡はすきぬるかたのなゝつきに今宵ひとよの影をまされる
かそふれば秋はなかはに成ぬれと月は今宵をみちまさりける
月は猶あきてふ中に秋といへと秋のさかりをさかりなりける
めくりくる秋のなかはゝまとかなる月のわにみつ今宵也けり
月影におもひこそやれ相坂の關路の駒は今や引らん
行秋の中にくまなくさやけしと今宵の月を誰が見さらん
秋の夜の月はいつともなけれともなかに今宵のてりまさる哉
いはしみつ流にはなついろくつのひれうちふるもみゆる月哉

亭午月

玉くしけ夜やあけかたになりぬらん月の光もみやすきにけり
なとやかくうしのかいふくときしまれ月は馬にも影のなる寛
まはらなるしつの柴やにもる月のみより過ぬる影のさやけさ
夜もすから山端となくのけてみんかけかたよする中そらの月
くる程もまたはるかなり中そらにいてゝやすらふよひの月哉
こぬ人をうしとゆふまにてる月の影はむまにもなりにける哉
なみたてるきゝのこかけの靡かぬは空ゆく月やたかく成らん
照月はそらのなからににけり庭のこたちの影もなひかす

伊佐與非月

みちて出し昨日のくれの氣色にもをとらすみゆる十六夜の月
いさよひの程になりぬと思へともいつらは月の遅くかけする
やとことに思はせたりや暮はてゝしはしまたるゝ伊佐與非月
はかなくも我よのふけをしらすしていさよふ月を待わたる哉

ことならは明石の浦へおもふとて詠めにゆかむいさよひの月
あき風のふけは浪よる雲間よりやさしくみゆるいさよひの月
なにめてゝ宿ことにみし宵よりも長閑にすめるいさよひの月
み空よりいさよふ月にさそはれていたらぬくまもなき心かな

立待月

人しれすまちたてゐるかな足引の山よりいつるかつらおとこそ
さのみやはまち渡るへきともふさのやすらふ程にいつる月哉
露分は袖にさへこそやとりけれ旅のみそらの立待の月
あつまちやさやの中山しけくとも早ぬけいてよたちまちの月
秋の野の露分ころも打はらひ今やいつるとたちまちの月
くるゝより心みやまのはに掛けていまやゝとたちまちの月
心みに立出てみれば岑たかみこもれる月のすみのほる哉
ひとりのみたゝすむほとに久方の月出てこそかけもつれけれ

居待月

花すりのころもそ露にぬれにける月まつ宵のたひのしはるに
かるもかくお待の月もまち出つ今はいやすくれもやしなまし
山里はやまのさむしろしきゐにて居待の月をまつもさひしき
山さつかしかきのかけや隙もなきあ待の月のいてよさりする
たはれめのならひ居待の月をみてせなか事をも語りあはする
身のうさの忘るゝことは思ふとち月まつ程のよひゐなりけり
慎のとをさしてけるこそ嬉しけれひとりのあまのよはの月影
山かつのそとものにはにすゝみ居ていらぬさきにも出る月哉

寢待月

あつまちのすゝのあみとををしあけて獨すゝくもふし待の月
まとるまで今宵もあけぬ月をみてねまちの空はなのみなり鳧

横のとにまぢねにしはしまとろめはさしおとろかす山端の月
たちてゝも人なみならぬ物うさによりふしまちの月を社みれ
かすならぬ身のうき事をつく／＼と思ひねまぢの月を見る哉
うたゝねの枕にやとる月影にいてにけるとそおとろかぬる
さらぬたに心もとなくおもひねの月をなこめを山端の雲
まぢ兼てふしみの里にまとろめはさしおとろかす山のはの月

廿日月

ひとへやまはつかにみゆる月影のいつる心そかたみなせなる
すみよしの岸ならねとも山のはにはつかの月をまつそ久しき
しいしはやしけきみ山の月影は今宵ならねとはつかにそみる
こえこむとさゝらへ男いてたてや山のはつかに影のさきたつ
月影にはしにたちおふ草みればや、おちにけりとをはに残して
さしのほる廿日の月のかたふけは旅ゆき人もいほりたつなり
程もなくあけなん物をあやにくにはつかの月のいてやらぬ哉
よひのまに思ひしことを思ふ哉はつかの月のすみのほるまで

木間月

小夜更てまつのこまよりほのめくは月のかつらの枝の影かも
武蔵野のあさちの原のこくれよりしかわけいつる秋のよの月
草ふかき人もかけせぬおほあらきの杜の下にも月をもりける
おほのかに空行月はみえ乍らこのまかそへてもらぬよそなき
もみち葉も嵐の風に散はてゝこのしたてらす秋の夜の月
もる月の影やすからすなみよるは木すゑを風の渡るなるへし
えたしけきたれその杜の木間よりほのかに月の影をもりくる
ますらをのまぢきの下にたつ鹿をまたらにみするよはの月哉

露上月

みる人も心すめとやいけみつのはちすの露にやとる月かけ
なさゝ原すゑはにむす白露のひかりの間にすめる月かけ
あさち原月をやとしてしら露のなのかひかりと思ひかほなる
闇ならはいかてかみまし草の葉に玉ある露のみかくかすなも
いかなればひかり長閑き月影のあたなる露にやとるなるらん
あさち原うははの露のかすことにわかすもやとる月のかけ哉
かりになく野はらの露にいかにしてたま影やとす秋のよの月
月のすむをばすて山のした露やむかしの人のかみた成らん

有明月

うちとけて中空にすむ月影をまぢはかりけるしのゝめそうき
月影のあく夜なれば時わかすいつも有明とおもはましかは
秋の夜のふかきあはれば有明の月みしよりそしらはてまし
秋くれはよかれせすみるかひしなくかたはれもてく有明の月
なかむればこゝろすみす月かけにしきなきわたる有明の月
なこりなくふけゆくまゝにはれのきてくもなき空に有明の月
晝とのみみえつる月のいらぬ間は明るもえ社しられさりけれ
くらかりしよびにも出て有明のあたらしかりをあましつる哉

山葉月

高根よりひかりはかりなをきたてゝ心もとなきよひの月かな
おしめともえぬる月は山端の木すゑはかりやなりなるらん
かくれぬとうき世の人にみえしかとなを山端に月はすむ也
いつるさに岑をのほりてゆく月は入山端やくなりさかなる
山端をわかつみるかもおもはゝやさてもや月のいるは惜きと
まつよびに山端出る月みれば物おもふことそなくさまれける
月により何山のはないとはましまつもおしむも苦しからずは

秋の夜の月の出入やまのはにむかへなくるは心なりけり

雲間月

定めなくたゝよふ空の浮雲にみえかくれするあきのよの月
あまの原くものこゝもは重ぬれとたちのきてすむ秋のよの月
風ふけはむらたつ雲の浪のうへに流るゝ月は見えみみえすみ
あまつ風ふきもはらはぬ空なれや雲のみやこな月のみるらん
村雲のたえまよりつるたひこにめつらしくなる月のかけ哉
雲のなみわけゆく舟は秋のよのあまのとわたる月にそ有けり
むらゝゝにたたくもはしる大空は長閑き月もはやくみえけり

〔二首附〕

朧月

入ぬるか有明かたのほのかにもかたふく月のかけのみえぬは
秋風におはななみよる野邊にきてほのめく月の影をこそみれ
うす雲にかけなおしみそ秋の月みてたにしはし心はるけん
なみかたのみつまき雲にかけくれて朧にみゆる月のふなかけ
さやかにも月のひかりのみえぬかな天の川霧たちやこむらん
くもり夜のあるかなきかの月影やはれぬ思ひのたくひ成らん
さらぬたにうす雲かゝる月かけになははれやらぬ秋の夕霧
夜もすから霧たつ空の月かけにさやかにみえぬあきの山里

雨後月

いとひつる雨のなこりの庭たつみさしくる月そまつ宿りける
しくれつる空のけしきを引かへてこにも月のすみのほる哉
ふきはらふあなしの風に雲はれてなこのとわたる有明の月
しくれつるくものぬれきぬき捨て心きよくもすめる月かな
村雨ははれわたるとも月かけは軒のしつくのなをみゆるかな

山めぐりするしくるめの雲はれてなかく月の影そくまなき
よひの雨に水やまされる天の川はれゆく月のなかれ渡るは
吹はらふかへしの風にかれてきし月のあま笠ぬきすてけり

水上月

たちとまる人もなけれといなみの、野中の清水月はすみけり
月かけに水のしら浜みかゝれてたまる玉のひかりをそます
たちもあへす川瀬にめくる水車くむかすことにやとる月かな
西へゆく水にやとれる月かけは山のはまものすみかなりけり
吉野山岩こすなみははやけれとやとれる月はなかれこそすれ
やとるめる月ものととけくすみた河心のとまるわたりなりけり
たくひなきみ空の月と思へともあふくま川にまたもすみけり
川はたのうつまく水にうくちりのめくるも見ゆる秋の夜の月

閨中月

山風にまよのかやふきうへわけてまくらにやとる夜半の月影
賤のめかふせやのねやの板まよりおしくも月のもりてすむ哉
夢覺てたまかとそ思ふ板まよりこるものうへにかゝる月かけ
はし近くあさまにねやなしつらひて空行月をはれぬよはなき
板まよりもりくる月はこひつまの枕のちりのかすなみよとか
ひとりぬるれやの板まのあかれよりさしきてやとる月の影哉
あしふきの軒のつまなきあつまやはれやまで月の入を嬉しき
月のいる閨にあけたるひきものをおろすとみするよはの浮雲

霜夜月

あきふかみ露むすふよのこからしにそらさえのほる山端の月
かれはつるよもきかそまの庭さえて霜にしもなもそふる月影
秋ふかみよなゝ月のさえゝて霜とは露やむすほゝららん

小夜更て庭おもしろく照月にけたれにけりな庭の初霜

月かけにいろなまかへて衣てのきゆるにこそは霜としりぬれ
さえてなくさきさか山の霜のうへに宿れる月の影そくまなき
しら菊の花もてはやす霜のいろに月のひかりをさしそふる哉
なく霜にけかしき庭とかくろへてきよくも月のすみわたる哉

雪十五首

神社雪

うつきゝてあさとひらきはけふなれとなをしら山の雪深き哉
いなりやま（本ノマ） しらゆふかけてみゆる也けり

白妙にきふれの道はなりにけり山をみのはなも雪つもりつゝ
雪とけは社の軒にめつらしきしろかれみかくしけたるきして
みゆきふる時にしなれば久方のあまつやしろを思ひこそやれ
霜のみとおもひける哉かたそきのゆきあひのまより積る白雪
山城のいはなの杜に雪ふればきことにかくるゆふかとそみる
あけなるをやしろといひしいつはりは雪ふる時のまこと也覓

故郷雪

たかまとの屋上のみやを今朝見れば雪ふる里となりける哉
むかしみし宿の木すゑもうつもれて雪ふる里となりはてに覓
冬かれのあさちか原もゆきつみて昔のあとやいつくなるらん
古里はけきよし人もかよひこて雪ふみけかすあとたにもなし
むかしにもあらずなりゆく宿なれとふる白雪は色もかはらず
住馴し宿の木すゑを來てみればゆき降てこそあはれなりけれ
あれはてゝすむ人もなき山里は雪ふるときそみしにかはらぬ
雪ふれば宿のさくらそ咲にけるならの都のふるき木すゑは

行路雪

あつまちのさやの中山ふゝきしてさゝめのころもかはす旅人
ふる雪にきそのかまひちあと絶て駒の足ともみえすなりゆく
吹雪して越のれわたし風たけしいかゝあちの山はこゆへき
雪ふかき山路に人を尋ぬればこまさくりこそしるへなりけり
こえて来る道もなき迄かつら木のかまの山は雪ふりにけり
はらへともかつふる雪にたひ人の（本ノマ）

初雪のふまゝおしさに道すから我よりさきのあとをゆくかな
くやくしくもとみし駒に乘かへてこしちの雪にまとひぬる哉

竹園雪

すゑをみそのふの竹の雪おれに立さはくなりさきのむら鳥
我宿はうさきかそのになつらへておれふす竹の音のみをす
うればもろしつりや繁き吳竹のふるれも雪をいたゝきてける
竹にふすれくらの雀けからしくうへはにゆきのふりにける哉
白ゆきにそともの竹のうつもれてしたえのみこそ緑なりけれ
かつゝもるうはゝの雪やおもからんおれふしにけり園の蒼竹
夜をこめてふる白雪を今朝みれば竹の園生もうつもれにけり
そのにまたまのゝ林をたてながら雪のしらはなはきてける哉

杜間雪

ひにそへてふりつむゆきのかきなればみな白妙の衣手のもり
繁りあふちえの木すゑもみえぬましてのたの杜は雪降にけり
ある鶯はわのか色にやまかふらんゆるきの森にふれるしら雪
世中にこりはてぬるかふるゆきのかゝる方なきするもきの森
神まつる心ちこそすれしら雪のゆふしてかくるかかしはきの杜
さきむらのたちもやらぬとみゆる哉ゆるきの森のきゝの白雪

干枝ながら皆たいらにそなりにけるしのたの森に雪し積れは
友とてやゆるきの森の雪をみてあらそふ鷺のしつちかすらん

海邊雪

岩にあるうら□もさきになりになりに鳧しららの濱の雪のあしたは
沖つ風吹やる方にさそはれてゆきもとわたるものにそ有ける
ゆきふれはなみのぬくみにうらに出て男鹿の角も花を咲ける
和田の原あまきるゆきを空になつなみのそきと思ひける哉
時ならてさくらの花と見えつるはまかきの嶋の雪にそ有ける
あみてさくあしたちもなく雪つみていかはすへきよのあま入
きの國やしらの濱にふる雪のきゆとも雪のとめをかなむ
みくま野のうらの濱ゆふ埋もれていくかさねともみえぬ雪哉

鹽屋雪

鹽こしのかけひもうつむ雪間よりいかてたくもの煙たつらん
しほきつむあまのかまやに雪ふりて立煙さへしめらひにけり
ふる雪にあまの鹽やも埋もれてたくものけふりゆく方もなし
うしほれるかなとの煙けをぬるみ雪もたらぬあまのあはらや
白たへのあまの鹽やはうつめとも煙はゆきにかくれさりけり
煙たつ鹽やのすけみせしとて雪のうはふきけさはしてけり
もしほ草やくとやあまのはらふらんすまのとまやに積る白雪
きえなまし鹽やのうへの雪ならはしたの思にかくからき身は

柚山雪

ふる雪に岑のともくまいりぬらし朽木の柚のまきのうつかに
みや木引くちきのそまのやま出し雪きえはよと思ひたつらん
みや木ひく音絶にけりまきもくのひはらの山や吹雪しぬらん
うちたつたつきにひく柚山はひ原のうれに雪そとまらぬ

ふるゆきに柚山人もあと絶ていつらはなの、をと聞ゆらん
わりなしや葛の柚木もとらぬ哉ひさすかみれも雪しとけれは
をやむへきけしきそみえぬみやき引泉のそまにふれるしら雪
柚人は峯のうすきをふりかくす雪なからこそまろはしてけれ

荊田雪

しめかけてかりしひとしる冬されは雪いた、かね稻莖そなき
この頃は鵜のれやもさえけらしかり田のくろに雪はふりつ、
いたつちに雪にむもれむ爲とてや山田のひつち秋になくれし
冬かりの山田のつほぬ社みれわかつなはても雪のしたにて
山かつのかり田も雪にうつもれてしきのふすへき方もなき哉
ひつちおふる山田のくろも雪ふれはなにはたかひて成も行哉
そこひおふる山田にたてる稻草の隠れもはてぬ今朝のあは雪
賤のなをしれかりつ、やすみあしくろ共みえずふれる白雪

葦間雪

分のほるを舟みとろしあしはらにこほる、雪やおほくつむ覽
難波江の葦のあさはのしつれこそ下はふなしのうはき也けれ
ゆき通ふ葦まは雪にかくされてにほふるすにみちや絶なん
横はしる葦まのかにも雪ふれはあなきむけとや急きかくる、
心してたなし小舟さし分てあしまのゆきのしつはとそする
いとおしくおれふす葦をあやにくにかつのわかほに積る雪哉
なにはか葦れにつもる白雪をむれあるさきと思ひけるかな
ふる雪をかされて白くみゆる哉あしまにたてる鶴のけころも

牆根雪

朝日さすまきのおりとのあやかきに散ましりの雪そましある
かきつけし賤のまつかさ花咲とみゆるは雪のふれるなりけり

冬こもるしつの垣ほに雪ふれはひたきしはまに聲のみそする
やきはやす垣れの雪はつるのはのまとしるにこそきえ残けれ
人もこぬ垣れにおふるからなつなふりつむ物は雪にそ有けれ
しつのかかうつきかきれに雪ふれは冬も花さくけしきなる哉
朝ことにやとにさへつるむら雀こしはの雪をふみなちらしそ
なをきけはとゝまるへくもなき物を籬のもとにきえぬゆき哉

風前雪

風ふけはたてぬきにふるしら糸はしつはた山の雪にそ有ける
東路やいふきおろしのはけしさにのかみの里に吹雪しにける
風はらふ木末につもるしら雪をちればかつさく花かとそみる
このまより露ふきませて散花は風そはへするみそれなりける
水鳥のたまものやとに風さえてうははに雪のふりつもるかな
いさゝらはこの下道はよきてゆかん嵐に湛めしつりひまなし
おきつ風なひかす雪のかたよりを吹上のはまの浪かとそみる
雪をたに花とさかせてみるへきに猶ふきはらふこからのし風

簾中雪

たまたれをまなくひかすよこ風のふきしく雪やしとれ成寛
あさまたきまの板とを問たれはすゝのわれより雪を散くる
軒せはきこやのしのやの葦すたれはつれにけりな雪もとまらず
北くちにけるのとこまで通りくるみ雪はみつのふるふ也けり
あれはてゝ風もとまらぬたまたれのひまもる雪にぬるゝ袖哉
わりなくもこすのあらふのひま分て風に散くる雪の花かな
年へたる葦のすたれのひまをあらみもりくる雪に袖は濡つゝ
うちなひくこすのこはしにわかれきて床の前にもつもる雪哉

氷上雪

こほりみつ池のかゝみや曇るらんはれせぬ空の雪のちりゐて
はこの池の氷の上にふる雪はかゝみにちりのいるかとそ見る
ころも川むすふ氷のけぬか上につもる雪をやとちかさぬらん
とちわたす氷に雪のうはきしてさむけにみゆるころも川哉
つららゐるいつぬきかはにふる雪をわけ衣とたつやみる
空はれてむすふつらゝにいとゝしくとかさしとてや雪積る
水のうへもふる白雪はつもりけりむすふ氷のひましなけれは
こやの池につららのやれいなかりせはいかてかせし雪のうはき

車中雪

ふる雪にあふ坂山のだひくるますきのしつりに袖をぬれぬる
はつかしやその荷車のうしよはみ雪つみぬればひきそ煩らふ
山路出るしはの車に雪ふれははなの木つめる心ちこそすれ
うちはやめかさしたさまへ荷車におふゝ雪のふりもつむ哉
うち路ゆくあしる車にふる雪をひなのよるかとおもひける哉
しろたへに雪ふりつみし曉のすみのくるまはいかゝ見えけん
はらへともなを白雪のふりつめはつるのをのせたる車とやみる
おるせともはつれすたれの絶間よりうちまて雪のふる車哉

戀十五首

未通詞戀

いかてかとおもひなからの橋柱みこもりにてもくたしつる哉
いかさまにいひ出ましと思ふよにむせひてのみもすくす比哉
人しれず戀はみやまのたになれやいひ傳ふへき橋たにもなし
人しれぬ歎きのえたは下もえてまた言のはのえこそめくまれ
さのみやはいはまほしくてすくへきにいさもらしとむ山川の水

思へともわかみつゝみにせかれつゝいひたに出ぬ佐野の池水
なつかしき餘所のけしきや替とて中々えこそいひも出され
思へともいはてしのふのすり衣心のうちにみたれぬる哉

見手跡戀

人しれぬことをかきけるからすはをみるよりうつる我心哉
水くきのうかりしあとゝみなせともいとゝ涙のなかれそふ哉
かき亂す心ちこそすれつゝの國のこやその人のあしてと思ふに
水莖のこ墨うす墨かきつらんでつきゆかしきなめををする
九重のみのつなかれにおちてこしがきのことは露も忘れす
うすくこく皆なつかしの墨つきや白し黒しはしらぬ身なれと
はなちとりあとをほのかにみてしより立ぬに物を思ふ比かな
つらき哉たか玉章に筆なれてかきつけたりとみるにつけても

聞音戀

夜もすから餘所に眺めし言の葉に露も思ひをかけぬまそなき
尋ねるにありとしきけは慰みぬうれしけもなきけはひなれ共
笛につく秋の男鹿は我なれや聲するたひにこゝろまとはす
わきもこが聲はへたてすくるゝきのなとあけ難き中と成らん
これやさば我こひわたる忍び妻あかれやさしき人のけしきよ
いかにせむあな美しなつかしく誰とたはるゝけしきなるらん
何事なれいと聞もわかさりきぬれいらなりし聲は誰そも
わきもこかいなる聲を聞かからに身にしむ計物をこそおもへ

總見戀

玉かほのひまにはつれしそはかほを心かはしていかで迎へむ
いはみかた嶋かくれ行もかり舟みあへぬ程になにこかるらん
野分してまよひしこすのかさまよりいりにし心君はしるかも

ほの見えし尾花末なる妹が髪いつゆるゝかにかきそへてれむ
わきもこは嶋かくれ行舟なれやほのかに見えてすき渡らん
夕されにさしてかけしなほのかにもみしより君を星と社思ふ
さし隠すいつへかさねのひ扇のひまより見えしまみを戀しき
猫の緒に懸りし簾のはさまよりほのみし人をれうとこそ思へ

時々見戀

浪間より稀にさしての磯におふるみるめはかりにぬるゝ袖哉
しまなひく沖のしら石しら浪のおりゝみてもぬるゝそて哉
袖の裏はかゝる涙にくちぬへしりぬる磯のなけきするまに
人こゝろ花か紅葉あかすのみおりゝ見えて我をさはかす
釣の緒のうちにはへてしもあひみれば蟹の小舟のうかれ社すれ
いかにせんさそと汀の度ことに浪よすへくもあらぬけしきを
見るたびに心ばかりをつくさせて餘所の情はうれしけもなし
いかにせむあふ夜はなくて笛竹のおり節みゆる人のつらさは

隠在所戀

尋ねれと爰にありてふ事もなしこはからくにの人にや有けん
いかにせんあふこと難き帯木のそのはらそとはしらする物を
から國や虎ふす野へにすむとたに聞て一つにみをもかへはや
我といへばとへと答へす色好むけしやうやりとも口をかねて
こひつまのいつかふせやの信濃なる園原とたにいはいさりし哉
津の國の難波の事もいはしとやそこに有馬としらせぬそうき
妹か宿とへともさらにいはし水みそきをうけはこそと教へよ
かりもらす男鹿の笛のおきよりもふかくも君かしのひける哉

來不會戀

夕鹽の浪にひかれてよりたけのれも心みてあかしつる哉

から衣よことにきては重ぬれとまたむねあはぬ物をこそ思へ
あはてやは立かへるへき園原やふせやにおふる物ならなくに
くることを心やすくて青つゝらとけすしふねき妹かしたひも
頼めなきてつまきの山のかひなしや谷の水のうちしとければ
うちとけて今宵あふみと思はすはなにかは更にくるものと里
契り置いて歸りしことをたのみつゝあはてもれなくしつる物哉
かつきする蟹のむすへるなく繩のくるとはすれととけぬ君哉

逐日増戀

昨日まてゐるはなかりし我袖をいかにそめけるかはの涙そ
なけきつゝあはてひころのふるまゝに涙の色の増り行かな
いとかくやすきにし方はこひさりしぬるよもあり夢に見えは
我戀はきねかおもにひきそふるもゝかのしめの重なりそゆく
わか戀の日をふるまゝに増るとは涙の雨のいろにてそしる
しはしこそしほりもせしか今は只くちなはくちれ数ならぬ袖
いかにせんあはぬ日數のふるまゝに涙の雨のもししまさるを
雨とふる涙にぬるゝ戀草はひにそへてこそもえまさりけれ

悪人妻戀

形見にとうるむはかりもつみし故人にすみれの花としるゝ
せなかなきそのひまゝに尋ねあひて是をいみしと何思ふ覺
やよいか心にしのふしけからん人すむ宿のつまとみなかる
人つまや秋おさめする稲葉かり頼みをかけて餘所にのみ見る
思ふ人ありその海としりなかなみの心にかけてぬ日そなき
頼むへき中をたのまて喜しくもあたる我をあたに思はぬ
我はかり思はし物を心みにたゝかけさかれ餘所のたまくら
忍ふれとぬけつゝもくる人つまはこゝろあはせのころも也見

絶後戀

今更にいひな出しそかつまたの池のつゝみはむかしきれにき
あふ事は絶にし物をされかつらまたいかにして苦しがるらん
ことつけてつらくもなるかあら玉の年のみとせを心みしまに
戀しさのためになくるなゝさへかね昔にかへる心はよはゆふ
くる髪のおかてわかれしのちよりは亂れて物のなけかしき哉
おもなれしむかし契しむつ言は思ひいつやといかていはまし
むかしみしふる野のさはのわすれ水何今更におもひ出らん
雲かくれあまとふ鳥のほのかにもみえずなりぬる人の戀しき

寄井戀

人こゝろいてあさましやさらし井の更にいはいしと思ひし物を
我戀はいた井のしみつみさひめて心なくみてしる人そなき
草枕やとやかましあすかゝるに影見し人の影やみゆらん
たかにくむとを井の水のかけられて語るしほなる戀もする哉
つゝ井つに立むかひけるむかしけのひとの心やたくひなら南
我戀は古井におろすつるへ緒のたえぬと見えてくるそ久しき
しらせはや昔みそいろほりし井にふかき心をとりやはする
いたつらにあはて古井の淺からす思ふこゝろなくむ人そなき

寄鷹戀

年をへてつらき心をおほ鷹のいくかへりかはみてすきぬらむ
とやかへるしらふの鷹のやかたおの聽て戀にもかゝりぬる哉
夜たかすむはよしのはしに住鳥のとけてもえねぬ戀もする哉
わきもこか心あら鷹よとりつゝかへりさすまてなつてし哉
はし鷹のよとりにあかすますらおかいねすと人をこひ渡る哉
いかにせむかくれる鷹の見えかたくつれなき戀にさはく心を

ならせ共な見えかたきはし鷹のはしたなきまであはぬ君哉
しはしかと思ひし程にやかたおのたかとそりぬる人を戀しき

寄鏡戀

日にそへて戀をますみのます鏡かけとはそはて影とこそなれ
かゝみをはさしなく事やなからまし戀しき人の影うつりせは
答へするかけしうつらはます鏡しのふる事もかたらひてまし
我こふる人はみえてます鏡しらぬおきなむかひのみある
見るもうく鏡のかけのならましやこひに姿のかゝらざりせば
淺ましや鏡の影をみるたひになとろへゆくは戀のしはさか
から人のいもとわかちしから鏡われても君にあはむと思ふ
くりかはに鏡しつめししの原のいとひめよりも袖そぬれぬる

寄錦戀

から人のところせしといふとこにしきみ難き戀もする我身哉
を車の錦のことはなかけてふたそちへともあふときかはや
涙川にしきをあらふ身なりせはふかきいろなもみせまし物を
からくしていとぬるよのさ庭にとこ錦とそあやめられける
忘らるゝみの古里へたちかへし人はしきのころもならねと
よと共に人のつらさにからにしき色々にのみおもひなるかな
よひ毎に人にしられてから錦おりたによくはたれかあやめん
今ははや身になれなましわきもこかまもりにつゝむ錦也けり

寄絲戀

深くのみ思ひそめては年ふれとこよひはあはてあけのから糸
ふたこもりうらやまなれとしけ糸のふしにくしやくるよみなる
我戀はおほ海のものこしのいとのか計かはむすほゝれゆく
人しれぬ戀はすゝしの糸なれやよるはおきあて露もぬられぬ

秋のよもあけのいとこそくるしけれいもゝかへれば心亂れて
なつひきやわくての糸のいくそたひこひしてふ事くり返す覺
かき絶てくる人もなき白糸の思ひみたれてふる我身かな
やにさせるうるしのしたの糸なれやとくるよもなき人の心は

雜十五首

卯杖

初春のはつうの杖をたてそめて幾よになりぬかすのみやつえ
ひかけ草花のいろゝむすひもてはつうの杖を視ひつけつる
玉つはきはつうの杖にきくことはやちよの坂も君こえよとか
うつえつき昔にかへる道もかなさらにわかえて春にあふへき
萬代のむらのきしもきゝり初ていろこなつえの久しかるらん
いかにして日かけの糸を取そへて千歳の卯杖たてそめにけん
幾度かしらたまつはきあらたまる春の卯杖とならんとすらん
八千代まで君かつくへき杖なれば白玉簪ゆひそへてけり

蹴鞠

しつえまでこしけき庭のはかゝりは落くる鞠のみえすも有哉
人は皆立出るものを庭まりのかゝるかたなき身をいかにせん
とにかくに春は風こそいとほはるれ鞠につけても花につけても
ひれもすにかゝりのまりの枝馴て花にむつるゝ春のたはふれ
庭まりに立ならふかな花さかりこの下風はちるかおしさに
ふちとのみ思ひしかとも春くれはまりも松にはかゝりける哉
山里の木の下草のしけからぬ春來る人のまりはなりけり
おしむへき人なき空をふりさけてこへと木末にとまりぬる哉

園鷄

春雨にみのけあらしてれる鳥のふせこをかきにきてかへる哉
からしふく黄金うつちのはれおもにがちふせこをもつてける哉
咲花もなくうくひすも春は花なとりあはせたるころにも有哉
はくみてわか育てたる雛鳥のこはいちちよちそにけぬつかふな
春雨のなこりの庭にぬるとてもあはするとのみのけ立ちむ
さりとともと羽にしほふくあか鳥のまくる氣色のからけなる哉
覺束な何れの鳥かかけにけんあこれのかねとはれのからしと
ぬりをきしとのりのはかひのからし故からくもまくる君か方哉

神祭

青かしはさすやひらてをなめすして白ゆふかくる柳をとる
なら柏そのやひらてをそなへつゝ宿のへついにたむけつる哉
まつらるゝからや葉守の神ならんらの葉柏とりもいさめぬ
山かつの垣れにいふやかつかみ卯花さける岡にみ〇るかと
あつかたてはさらとりすへやかつかみ祭る卯月に早成ぬとか
やまとこにならの葉柏さし置いてゆふしてかくる卯月きにけり
檜のはにちる卯花と見えつるやゆふしてかくる神のひほろき
けふことにつらぬきまはす玉柏ひもろきにてもときちらす哉

賀茂祭

諸鬘かけてもいはいつくしきいつきの宮のけふのみゆきを
うないこかつしゝはらふ音す也今や光りのわたるなるらん
もる人のけふみなかくるもる鬘あまれき神のしるしなりけり
年をへていく祭にかあふ草けふなとりわきかけてきぬらん
はふりこもろかつらして神山のみあれのすゝを引ならす哉
ひとなみにしつのはかみうちはらひ皆諸鬘けふはしてけり
春秋のみやのつかひももる共にはなめきつきむ賀茂の御祭

騎射

みあれひくけふにあふひの鬘してかみに靡かぬ人はあらしな
五月雨にくまのむかはきそほねれてあけゆくいてや宿り成覽
からはたけみつのつはもてまといて騒ぐやけふのみものなる覽
同じくはなのりてすきよ郭公ひおりのそらもやゝくれぬめり
あやめふく五月のゆみを古はなからのもりへみにそゆきける
しきりはのやさしき物はあやめ草けふひきつるゝまゆみ也覓
觥にはあやめやさしくさしそへてひたりのまゆみけふやひく覽
菖蒲ふく硯のふちのつるむまのたゝすみまとないさせつる哉
あやめ草長きねならぬまゆみなも共にけふこそひく日也けれ

乞巧奠

ひこほしも空にてらしてしりぬらん七日のよひのこゝの燈火
こゝのつのえたの燈火掲げつゝ祭るしるしのとりのあとみむ
もゝ草のはなのけふりや七夕の雲のころもの袖にしむらん
いつ草の糸もてぬけるなゝはりなちのの一はにさしはさむ哉
七夕のなかのわたえぬ秋ことにあふ言の葉そたてまつりつる
ふみつくとりのあとこそ彥星の心ゆきあひのしるし也けれ
おもふ事かなひやするとみとせまて星合の空をまつりつる哉
七夕をまつる心はひとつにてれかひのいとほなのかすちゝ

相撲筈

進み出てひきこはなとるすまひおさのつきくし共ささりよる哉
さしかれてなけまふよりもすまひおさのひきとどるけしきまつみよ
ゆふかほに葵の花のさしあひていつれか色のうてんとすらん
秋霧の立なからこそうてにけれいてつるかたやおほえさる覽
きゝあはせ弓とる方なかたひかかんひたりすまひの強くみゆれば

いつかしとうらてに出てうてぬれば恥かしける夕かほの花
とりものに顔は隠れて見えわがすいづるうらては誰にか有覽
やふれ屋のよはけに靡くすまひ哉いてゝさゝみ我方のすけ
小鷹狩

出るよりはやるこのりを引すへて蒨田の嶋にあはせつるかな
小萩原のたつ雲雀のしりとひてまちはかるなつみの落はよ
色々の花にまきさるかやくきをかるると野へに暮しつる哉
雲雀とるこのり手にすへこまなへて秋の蒨田に出ぬ日そなき
しらつみのあかれのつるにまとはりて羽黒の鳥のまけにける哉
うち出て小はきふみ分たかのこにいさあはつ野の鵲とらせん
いかなればあはつ原の萱莖の目をへてかれとつきせさる覽
はしたかのはかせにさはく葢くきのとて亂れたる秋の野へ哉
射場始

ゆたちとくいての諸人ことつけて鈴のいたつさまつならず也
神無月たつかの弓をひきつるゝけふやまとゐのはしめ成らん
まゝきいるおほ宮人はけふやさは冬のゆみ場に立はしむらん
霞たつ春のゆみ場のとをければ采々々々

もろ人やまはかけからて梓弓ひくころも手のさへわたるらん
けふやさは雲の上人もろやしていはけのせにき心かくらむ
御垣守つきしあつちにいつしかとけふ社まとなかけはあつれ
もみちする神無月よりあつさゆみひきつれてみん春の花まで

五節

むれたちて遊ぶなる哉をとめこかをみの袖ふる豊のあかりに
けふやさはみそきのはてをとめこかひれふる豊の明なる覽
いかならん更行空の月影にとよなかひめのよはのみやひと

冬の夜の雲井の月を見ることにとよのあかりを思ひつるはや
餘所ながら乙女袖ふる九重のとよのあかりをおもひこそやれ
もろ人の心もはれてあそふかな目影さしそふとよのあかりに
雲の上にいづたひふりし袖をみてよし野の宮のことなしと思
入日さすよし野の宮のことのれに袖ふり初しあまつなとめこ
臨時祭

姫小松はやすみきりにもろ人のかさしの花をさしそふるかな
かへりたつ庭火の前のかなてこそあな面白といふへかりけれ
つらゝゐるみたらし川もそこさえて山あめの衣かけやみゆ覽
暮ぬ間にものみ車のまへはたれあなすりはくの雲のうへひと
冬されはかも川浪立出てみかひもかくるすかたをそみる
おもしろや立もやられぬにはのさのをみの袂にふれるしら雪
をとさゆるみたらし川に影見えて袖をつらぬるすかまひ哉
うと濱の浪の音をたつれ共なをしつかなる賀茂のみたらし

庚申

うちて遊ぶみつめたならてその外のみさるかうらはせぬしらむ
しるいあさのかみつみあくる今宵こそさひ戯れのれて明しつれ
教へ置いてせきより西に逃れにしあと尋ねとてよなあかしつる
午をうしといひける人と友なひて寅の時までよそとほしつる
つきませのれぬよや今宵ぬるよとて物思ふ身には枕きためん
宿ことにれぬよなまほるめさましに亂れあひつゝ遊ぶなる哉
夜もすからこてのせにをを思ひやる其つらなぬまとゐなれ共
たれそこのぬしをはなきて高岡のみさる處のはなををしおる

競馬

なよひつる手は打かけに見え乍にゐにとられてにけふちの駒

みるためのしるしありとやきないむまの葦をのりてかけぬる戦
程もなくとりつゝきても過るかな是やひまゆく駒にあるらん
なとらしときをひくゝて先にたつにけの駒をそかけふちとみる
きなひ馬に同じ程にやのりつ覽とりならひてもぬきぬめる戦
足亂る駒はいかゝとみつれともせひみとけてもかへるめる哉
（本ノマ）をとらすふちなうちそあはする
駒の足ははやしとみるにまけぬるは人の心のなをきなりけり

園 墓

やま人の斧のえくちしいにしへもかく面白き手をやめてけん
古へのなのゝえくちしことわさにけふも心なうちつくしつる
さゝれ石のかたみに思ひあることの誰かにしへうち出し劔
白浪はまさこうつなり浦々によするたまもなかけものにして
うちなける手なみの程のいかなればとるへきはまも潜なる覽
勝まけは濱のかい石おほけれとなみうち果てみゆるなりけり
いかにしていつれともなく亂れ石を思ひ忘れすとり直しけん
うちうたす君か手並をしらぬまは濱の眞砂そあやふまれける

右爲忠朝臣後百首以流布印本校正了

群書類從卷第七十五

和歌部三十百首九

句題百首 稱五玉集

作者

頓阿法師

法印良守大納言基良子 續後撰 續古今 續拾遺 新後撰 玉葉集作者

權大僧都良春猪熊大僧正 參議季通子 新續古今作者

頓宗新拾遺 新續古今作者

禪僧周嗣新千載作者

點者

頓阿法師

春十五首

遙峯帶晚霞

すか原やふしみの暮の面かけにいつくの山も立霞哉

良 守

くれかゝる遠山とりの尾上よりまたき隔て立霞かな

良 春

暮にけりそこ共みえず春の日のなからの山はかすみへたてゝ

頓 宗

入かたの日影に見えて霞たつ山は夕そあらはれにける
暮行は遠さかる也山のはに霞やいと、立隔らん

周 嗣

殘雪更粘枝

山ふかみ春ともいまたしらかしの枝なる雪を消かてにする
吹は猶あらしの音に氷りつゝなのとけたぬ松の白雪
さえかての雪を落そふ春風の梢をはらふ松のしつえに
さえかてに猶こそ殘れ松の雪はらふもさゆる春のあらしに
さもこそは春の光りのよそならめ雪さへ消ぬ谷の松かえ

春淺霜連夜

朝ことによのまの霜の消やらてまたもえ出ぬ萩の焼原
春きても光よそなる玉さゝのいくよの霜にむすほゝるらん
春も猶冬かれなからみしま江の芦のよことに霜はふりつゝ
よな／＼の霜も尙なく手枕に春とや夢の結ふともなき
春は猶あさゝはぬまに住たつのは毛に訝るよな／＼の霜

梅殘數點雪

梅花且咲にけりたえ／＼にのこる垣れの雪とみるまで
白妙の雪のうちより咲初てちるまでまかふ梅のはなかも
むめかえに今は春へと咲花を猶冬こもる雪かとそ見る

梅かえにかつさく花を鶯の鳴とも消ぬ雪かとそ見る
窓ちかき梅のはつ花咲しより春さむからて残る白雪

清月上梅花

さよふけて月そりくる出ぬまもそれかとまかふ梅の梢に
春の日のくるゝもしらすなむれは軒はの梅に月そいさよふ
よなくは花咲かへてむめかえにもりくる月の影そかはれる
吹わくる木間の月の影なから匂ひなゝくるむめの下風
梅かえの木間を出る春の夜は花にかすまぬ月のかげ哉

柳間黄鳥路

心せよ露たにおもき青柳の糸に木傳ふ春のうくひす
鶯の木つたふほと羽風にも亂れやすきは青柳の糸
なきとめぬ花こそあらめ鶯の木傳ひちらす青柳の糸
青柳のいと絶まや鶯の枝よりえたに移るかよひち
春風にむすほれ行青柳の糸の亂れを分るうくひす

春江浪拍空

明わたる空もひとつになにはえや霞よりたつ沖つ白浪
漕かへる同じ入江もまふらん霞の下によする白なみ
難波江や霞のおくに立波の花こそ空のかさし成けれ
見渡せば空のかきりもなこの江の霞にかゝる沖つ白波
なには江や霞のまよりよる波も雲ぬにかへる春の明ほの

春深花始開

待ほと半は過ぬ今よりの春や花みる日數ならまし
咲やらぬ春の日數はかさなりてまた一枝のはつ櫻哉
さきにけり花はいくかとかそふれば春の彌生に成にける哉
山櫻まつに日數のつもりきてさけは残りの春そ少き

いと、猶日數を花におしむ哉咲初めれば春もほとなし

花開紅樹亂

花の色に亂にけりなさほ姫のしのふにはあらぬ春の衣手
花さくら咲そめしより紅の色に亂るゝ庭のはるかぜ
さくら花うつろはんとや朝日影にほへる雲に山風そ吹
紅にうつろはんとやさく花にみたれてまじる嶺の白雲
雲なからうつりにけりな紅のはつ花さくら色もひとつに

花發雨多

世中はかくこそ有けれ花さかり山風吹て春雨そふる
いかなれば嵐も雨もあやにくにいくかもあらぬ花にそふらん
花さかりしつ心なき山風に先さそはれて春雨そふる
つらき哉雲と見えつゝさく花は雨と風との宿り成けり
ふる雨に猶やしほれんさくら花あらしにおほふ袖は有とも

坐久落花多

見るまゝにふかくも花のつもる哉休らふ陰にほとや經ぬらん
からにきたゝまくおしき木下に散しく花の幾重成らん
雪とのみまとゐの中にふりはてゝそなからあらぬ花の陰哉
いと猶つもありそまさるちる花の名残をししたふ木陰に
木本のすみかも花にうつもれぬおしむ心に時はうつりて

花落樹猶香

花ちりて青葉にかはる梢より吹くるかせの猶匂ふかな
思ひつゝよればや花のかほるらん花は散にし枝の青葉に
花の香のうつろはかりに吹とめて青はそ匂ふ木々の春風
木下な花の跡とて外よりも尙にほひある春風そふく
散にけるそのなこりとてしはし猶木のもとと匂ふ山さくら哉

類簾掛古藤

紫の雲かとそみる庵ふりてうき世のきにかゝる藤なみ
あはれにも傾きのこる軒はかなかゝれる藤のつなく許に
玉水も色にそおつる春雨のふるやのゝきにかゝる藤なみ
年ふりてかたふく後は咲藤の花にそかゝる軒はなりける
たこのあまの宿まてかゝる藤の花なみにあれ行軒はともみゆ

歳時春猶少

おしまるゝ心なれはやいつはあれと春の過るは程なかるらん
夢なれや春はいくかもあら玉のとしにまれなる花の面かけ
尋はや花なき里にすむ人も過る月日は春やすくなき
春は尙ありて暮ぬと思へはや同じ日數の分てほとなき
一年の月日を春に過すとも花はわかれやほとなかるへき

春盡鳥聲中

鶯のこゑさへ花となりにけりつもれはくるゝ春の日數に
なくとりはあらぬ心に任すらん春の日數はかきり有とも
花の山なこりもとめす行春のけふはしはしとなくとりもかな
鳴とめぬ花こそあらめ鶯のしるしなき音も限とそきく
暮て行春よりも猶鶯の別れなかくつこゑそ物うき

夏十首

深谷夏聞鶯

春たにもはるはよそなる谷かけのしける木間に鶯そなく
雪を出て谷の鶯いつのまにふかきみとりの底に鳴らん
身はかくて春たにとちし谷の月に時しらぬ音は鶯そなく
谷ふかき夏のみとりに残る也雪になれにし鶯のこゑ

卯花の雪かとみゆる谷かけになくうくひすの聲を殘れる

綠樹連村暗

夏山のしけさまされは木かくれて有ともみえず岡のへの宿
なつは猶人めはかるゝ山里のとなりも見えずしける木陰に
山さとの梢は花の跡もなし人めにかへてしけき比かな
常葉なる色もわかれす眞木の村よその梢もしける青葉に
をしなへてしける梢もみえわかつれときはの里の一むら

山雲夏亦繁

山のはにいつもかゝれる白雲の猶立のほる夏の空かな
さらぬたに晴ぬ雲井の山たかみ猶すみわふる五月雨の比
夏衣がされてほすや白妙の雲立のほる天のかくやま
たえ／＼にいつもかゝると見し雲の山のは埋む五月雨の比
遠近のけふりも雲に埋れぬ淺間のたけの五月雨の比

松風五月寒

五月山雨はれそめてせみの羽に衣手さむく松風そ吹
時しらぬさこそは谷の松ならめ夏のものなかも秋かせそ吹
雨晴ておふる五月の浮草の末よりさむく松風そふく
氷室山あたりの松に音たてゝ夏の半も風そ身にしむ
時鳥なくや五月の山風も松をばらへは音そ身にしむ

風樹咽鳴蟬

山風の梢もさはくならのはにしはし聞えぬ蟬の聲哉
夏山の松のこすゑを吹風にあらそひかぬるせみのもる聲
しはし又蟬のもる聲とたえしてならの葉さはく山風そ吹
瀧つせのひゝきはまさる山風に梢のせみのこゑむせふなり
鳴蟬の聲は梢にとたえしてかせのみさはくもりの下かけ

秋聲帶雨荷

風わたる池の蓮葉露おちて秋にすゝしき雨の音哉
露は玉はすの浮葉に夏をへて秋とあさむく雨の音哉
蓮葉に雨ふりをける玉のをゆらくほとなき秋の聲かな
ふる雨ははすのうきはにちる玉の秋にもこえて音を涼しき
音たてゝ秋やいつしかかよふらん村雨すゝし池のはちす葉

扇罷風生竹

しはし又ならず扇の風やめて笹の竹のそよくをそきく
手もたゆくならずあふきのひまなれや竹によるよの窓の秋風
竹のはゝ露もたまらず吹風にならず扇やなきまさるらん
手にならず扇のひまも涼しきに風になるよの窓のくれ竹
夏のよはならずあふきの風のまも音をそのこす窓のくれ竹

泉聲到池盡

石はしる山の瀧つせひゝきて末は音なき夏の池水
せき入る岩ま計に音たてゝしつかにすめる庭の池水
音せぬも涼しかりけり石はしる瀧のなかれの末のいけ水
瀧つせなせけは音こそ聞えれと涼しさがよふ庭の池水
池水に音はなけれとすゝしさは末までたえぬ山の瀧つせ

雨餘生晚涼

雨はゝや過ぬる跡もそのまゝに夕露涼し木々の下陰
むら雨はよそに成ぬる木かくれになつことやすき夕すゝみ哉
秋かけて思ふもすゝし夕立のなこり許のもりの下水
ふる雨のなこりも涼し浅茅原秋になひきて結ふ白露
村雨のなこりもすゝし露結ふ庭の浅茅の夏の夕くれ

螢入定僧衣

時しもあれうなる玉や顯るゝほたるそ宿る蓀の衣手
影みえぬ心の水のすみそめを有しや袖にはたる飛らん
飛螢山を出へきほしなれや曉ふかき昔のたもとに
と螢なれてそかよふ袖をたにはらはぬ計しつかなるよに
かけうつす心の水やしつか成袖の螢の玉をそふらん

秋十五首

露氣早知秋

明わたる朝のはらもなく露の光にみえて秋はきにけり
夏草のきのふも見えし露のまに袖まで結ふ秋は來にけり
吹結ふたもとの露をかそふれはいそちにかゝる秋のはつ風
萩のはのかせをもまたて露結ふ袖よりやかて秋そしらるゝ
かせは猶吹も定めぬ秋の色をさやかにみする野への白露

一雨洗殘暑

夏のまゝにてる日のかけも村雨の音より秋にかはる空かな
雲井より秋はくれはや村雨の行ての風のすゝしかるらん
庭草にのこる日影もこの夕涼しくなりぬ秋のむらさめ
ふるまゝにてる日のこりて村雨の跡より秋の空をすゝしき
とこなつは花の名のみの草村にあつさのこさぬ秋の村雨

野色混秋光

なく露も花のひかりに成はてゝのへは千種の色そまかはぬ
宮城野の木の下露と花の色といつれがまさる光なるらん
さきまじる花のゝ露の下葉に秋のおもひの色をそへつゝ
うつろへはいつれを露の光ともいさしら菅のまのゝ萩原
暮行は日かけはうすき秋のゝに花のひかりと露や成らん

天高一鴈橫

雲もはれきりも隔ぬ中空をかすかにわたる鴈の一行
雲井まで聞るかりのつらさにひとりなくる、音をや鳴らん
しるらめやあしへの友と音をそ鳴あまとふ鴈はつらを離れて
はるかなる空にもわたるほとみえて月にそちかき鴈の一つら
あまつ空くもゐるにみえてくる鴈は聲こそいと、かすか成けれ

終夜着裴聲

きく人の涙は着るやきり／＼す夜はすからに枕にそなく
床の霜おきあてきけは老か身のたくひによはる 裴哉
いつまてと露のよすからきり／＼すかへなる草の底に鳴らん
夜もすから鳴もよはらぬ裴われにもまさる思ひとそきく
よもすから思ひを人に猶そへてをのれ音をなくきり／＼す哉

稻花千頃浪

なにかめやる遠山もとをかきりにていな葉なみよる秋の夕風
秋の田は雲をなすかはみわたせは風のまに／＼なみそ立ける
末とをきふしみの田面霧晴てほなみによするうちの 柴船
風わたる田面の末の山もとは稻葉のなみのみきはなりけり
みなと田のたのも遙にみつしほは風に波よるいな葉なりけり

江聲入秋寺

いそ山のかふもとの入江汐みちて月待出るみねのふる寺
なには江や月のてしほのなみの音に打あはせたる入相のかれ
さとは荒てなにはの寺の入相にこゑ打そふる秋の夕しほ
月もはや入江の波の音更てかれいそく也磯のふるてら
みつしほの音計して明行は月は入えのいそのふるてら

月色一窓廬

わか心むなしき空の月影を窓しつかなる庵りにそみる
おなし窓幾よの月になれぬ覺あれすはいかにさひしからまし
雪なたに集めし窓に月みてもよるはすからにするわさそなき
しつかなる夜はの窓より思ふことむなしき空の月を見る哉
夢さめて閑なる夜の窓の内なとふもむなしき月のかけ哉

江清月近人

あま人のしほくむかけもなにはえや月と共にそ波にうつれる
なにはえや芦分をふれさす棹のさきはる計にやとる月かな
月やとる入江の波の立よればかけふむはかりみゆる空哉
難波江やうつれる月のかけ清み氷にうかふあまの釣舟
夜もすから月をや波に三嶋江の芦邊さし行あまの釣舟

鷄聲茅店月

たれ住て明行月をおしむらん鳥の音残る淺茅生の宿
思ひきや草の庵りに旅れして鳥のれいそく月をみんとは
月そすむ鳥はそられとかこつへき人こそとはれあさちふの宿
鳥の音の聞るまでに月は猶露に夜ふかき淺茅生の宿
鳥のれのしはしは残る月ははやかたふくほとあさちふの宿

山曉月初上

よこ雲のわかるゝひまに顯れて山たちのほる在明の月
秋の夜も明なんとする山のはにはかなく出る有明の月
あなし吹ひはらかうへのやまかつらつれなかくけて出る月哉
待得てもみるほとそなき秋のよの明行みねに出る月影
秋の夜も明行山の木間よりつれなく出る月のかけかな

月向白波沈

しはし猶かくれなはてそ波の上に半の月の残るともみん

わたつ海やかぜ吹ことにうき沈む玉にあらそふ月の影哉
梓弓すゑの松山入月のかくれぬさきにこゆるなみかな
波に入かけかとみえてわたの原空のかきりに月そかたふく
よひのまの山のは出しおもかけな波に残して月そかたふく

遠山青入霧

木末のみまきとの山に顯れて里まで晴ぬうちの川きり
はつせ山霞にまかふおもかけのきりに残れる秋の夕くれ
つまかくすやの、神山たつ霧にまた末とをき秋の色哉
なかもやる末の松山跡もなしふきこすきりの八重の鹽風
山のは、埋れはつる夕きりに残るとなちのさとの一むら

風便數砧聲

此里もはや急くとや秋風の砧のなとをさそひきぬらん
衣うつなとをさそはぬ時たにも答やはするれやの秋風
里わかぬ夜寒のつてに打そへてよその砧をさそふ秋風
さそはれて砧の音も聞ゆ也秋寒きよのおなしあらしに
よそにうつ砧のなとも聞ゆ也雲井の鴈をさそふあらしに

新霜染楓葉

紅をなに、そむらん立田山霜のたてもてなれる錦に
木末よりうつろひ初て初霜のなく程みゆる庭の紅葉々
夕露もまたほしやらぬ紅葉々を霜と成てやけさは染らん
秋さむき霜もよなくおく山のいは垣もみち色まさるらし
いつしかに木葉も色やかはるらん月のかつらの初霜の比

冬十首

落葉無行路

山人のもみちふみ分行跡をやかてそうつむ木からしの風
ふりしけるふもとの木葉きてもとへ我庵まてはふみ分すとも
みるまゝに道もさりあへす木からしの吹と吹ぬる山の紅葉々
落葉にもかへさは道やしられまし分くるまゝに跡をのこさは
もみちはの散しく山はとふ人も道もみなから分やかぬらん

木落見他山

遙なるいこまの山もあらはれて梢の冬にかはる比かな
時雨ふる音はまちかき木間よりみゆる尾上に雲そかくれる
神無月風もたまらぬ木間より山端なからしる日かけ哉
冬かれの庭の木間に顯れて軒はに近き遠の山端
ちりぬれば山は木間に顯れてよその紅葉の色をみる哉

人迹板橋霜

霜ふかき谷の板はし跡みえて日かけのさきに出る山人
しゐて行たか別路の跡ならん霜に残れるまへの板橋
跡つけて出づる人の歸るまてしもとけやらぬ谷の板はし
なく霜に谷の板はしあとはあれと柴の戸まては間人もなし
置しもの跡あらはれて山人のかよひふりたる谷の板はし

破林霜後月

枝に猶のこる紅葉の数みえて霜よの月のもりの下陰
紅葉てるしものはやしの木間より錦をやふる冬のよの月
月そもる今は木葉もふりはて、霜ふかきよの雲の林に
〔一首闕〕

この比はもりくる月に霜さえてしくれし雲の林ともなし

山寒水欲氷

ほかよりも先や氷らん夏み川風も寒き山陰にして
さえくらすかつらき山のやま風やあすかの川の氷ならまし

さえくらす霜の後せの山かせに谷の小川も行なやむ也
山風もくるればさむし夜のほとに氷やとちん谷川の水
夏箕川かはなと寒き山陰に月の氷や先結ふらん
一鳥過寒水

山河のいつくを床と夕暮は鳴になくなしの獨行らん
夜を寒みうきれの床をあかくかてつかはぬなしのいつち行覽
跡をたにたれしのへとて山川の友なし千とり鳴て行らん
池水にしはし友まつあしかもの氷れはたえずよそに立也
なし鳥の空につまよふ聲す也くるゝ川とや氷とつらん

清晨雪擁門

霜かれのむくらの門をとちてけり八重降しけるけさの白雪
朝またき草の戸さしも跡つけてあけまきおしき庭の白雪
かくてはや身は初雪のあさ氷とちにし門を誰かはらはん
けさも猶人の跡をはいとはれと降つむ雪を門をとちける
降雪に道とちにてゝ待人のたのみけさは杉たてる門

晴雪落長松

朝日さす嶺の梢の雪おちて松はみとりにはるゝ空かな
あさ日かけさすやおのへの松の雪解るもしるく打なひきつゝ
なしほ山松も木たかく晴初て嵐のつてにおつる白雪
日かけさすたかかれの雪のむらゝに松あらはれて山風そふく
あさひさす梢ばかりはあらはれてなな松陰におつる白雪

獨釣寒江雪

降つる雪には跡もなこのえの氷をわけて出るつりふれ
枯はつる入江のあしの雪のうちに一葉のよるやあまの釣舟
ふりすさむ雪はともまつ水のえに先あとみせて出る釣舟

ふる雪に又友もなしなにはえや袖さゆる日のあまの釣ふれ
なには江やこやもかくれてふる雪に歸る宿なきあまの釣舟
流年川暗度

月も日もしはしよとまで行年や淵せもしらぬ山河の水
とまらずよ雲のみおにてみし月のつもりて年の暮に成ぬる
あすか川月日なかれていたつらに昔をとをみくるゝ年かな
天川行水よりもしなみのくるゝややすき月日成らん
河水のよとまぬ波のみおよりも猶瀬を早み過る年哉

戀十首

心知人不知

なにとたゝ我のみしりて過るまのうきあらましに袖ぬらす覽
かはらやのおなし思ひの下もえにあらぬけふりと人やみる覽
しらせはやしのおふか原にさすしめの草はにつけて露かゝる共
しらせはやしのふもちすり忍ふるもたれゆへならぬ下の亂を
思ひかれしられぬ中に戀しなはけふりをなにの行衛とかみん
唯有涙痕多

袖にはやせくほともし涙川なにをか今はしからみにせん
みえぬらん人めしのふのすり衣涙のかゝる跡のみたれは
はかなくも人めを袖につゝみけるうき名は身にもあまる泪を
よしさらは柄たにはてよわか袂泪のあとのみえぬはかりに
柄はては何につゝまんうき名とてさのみ泪の袖にせくらん

三年不見書

なをさりの玉札をたに待もみす雲ぬの鴈の三たひくるまで
新枕われは昔の秋そともせめてつけこせ鴈の玉つさ

そのまゝにひるすも今は立ぬらんかきもなかせぬ水壺の跡
藻鹽草かく玉札もまたみればすまのうらみに三とせわひつゝ
新まくらむすはてまつとしらせはや三とせまてみぬ人の玉札

涙盡腸欲斷

限あれば涙も今はつきぬらんけふを過へき心地こそせね
なみたこそ色かはるまで成にけれ思ひはいつをかきり成らん
かきりそとけふ啼つくす涙こそ我後の世のさきにたつらめ
しるらめや泪も袖につきはてゝ色もえぬへき胸の思ひを
きえやらぬ胸の思ひのせくまゝに袖にたえたるわが涙かな

入夢到如今

思ひぬのはかなきゆめにかはす哉打もはらはぬよはの枕を
うつゝ社はかなかりけれむは玉の夢路はもとの足もやすめす
みし夢の面かけくもる年月や身にそふ中の隔成らん
おもかけのありしならにみる夢はうつゝになるを別也ける
なれてみし夢をしたへは今更にいと驚くうつゝとそなる

花開更憶君

たのめこし花のたよりをすくす哉色見えてこそ移ひにけれ
花になす心ならひにわか宿の庭のさかりはたちまたれつゝ
とへかしなあらぬ色かなき物を花にそ人の心かはらて
花よりも猶あたなりや色かはる心つからの人のちきりは
山さくらあたなる色もひとつにてみるに猶そふ人の面かけ

空閨殘燭夜

明るまで思ひ盡せぬ獨れに涙かきくらす夜半の灯
獨のみおきゐるれやの灯や思ひつきせぬたくひ成らん
きえわひぬ空しき床のともし火やれなくに明る夜を殘すらん

待人もむなしき闇の灯の消てやいとゝ思ひたえなん
夜もすから待に心を盡す哉れやの灯きえのこるまで
恨別鳥驚心

ふかき夜にいそくとかこつ別路に又とりのれの驚すらん
鳥のれに心はあらしわかるゝはこゆるならひのあふ坂のせき
此まゝに又も聞すはしのはれん物とや鳥のおとろかすらん
別路に人は待えていそけとも身一つにうき鳥の聲哉
われたにもかこたぬほととの別路を何とよふかく鳥の鳴らん

別後會難期

わかれなほこよひはかりの人またに又いつかはと思ふ悲しさ
立わかれまた夕暮を待たにもたえてあらんと思ひやはせし
えそ知らぬさらにはいつかあふくまや霧立わたり今夜明なほ
別ては後のあふせもたのまねは是やかきりの中川の水
あふまての後の命も頼れは是やかきりの別れ成らん

何處更相逢

いつかみんつらき所はおほくのみ月日つもりて待ひまもなし
今たにも手にもたまらぬ大ぬさのつゐのよるせをいかゝ頼ん
いつくにかめくりもあはん下帯のとけて別れし道をしらねは
ありしのみわすれぬふしのさゝ枕又結ふへきかたもしられす
命こそ猶おしまるれいつくにて逢みん事はたのみなければ

旅十首

棧路雲間没

行末の岩のかけみちたえ／＼にうつみはてす峯のしら雲
いつくにかきそのかけはし行末も跡をも埋むみれの白くも

岩れふみいまいくへとも白雲のたな曳わたるみねのかけ橋
かけはしは雲より下に埋れて夕日にのこるみねのかよひち
うつもるゝみねの梯みえれとも分れば雲にのこるかよひち

江邊聞船子

舟よはふ聲はかりしてみしま江や人こそ見えれ秋の夕暮
おほくらや思ひいりえのわたし守世をうち山の道しるへせよ
ことゝはん舟さしよせよ住江のふなつを過るむこのうら人
くるゝ日に里とひかれて湊江のあまの舟をそ宿と定る
あまの子のとへとこたえぬ湊江は舟にもぬしや定さるらん

船行夜已深

はりまかた尾上のかれの聞ゆ也沖こく舟にさ夜や更ぬる
ともし火のかけをしるへに漕つれて明石の沖に夜そ更にける
さよ中と更行月に舟出してとわたる空に鴈そきこゆる
ゆらの戸を夜わたる月も更にけり浦こく舟と遠くきぬらん
うら風も磯邊の松に音すみて澳こく舟そ月に更行

棹入黄芦浦

あしま行うらの小船にさす棹のみなれぬかたに宿やからまし
舟とむるあしのかればのさらゝに夢ちゆるさぬうら風を吹
枯はつるあしのうら船さす棹のさはらぬ宿はうきれなりけり
あしへ行ほとはかくれてさすさほの末のみ見ゆる浦の友舟
なには人あし分小舟さすさほのかよひなれてやさばらさる覽

蒼苔満山徑

くれぬより日影もみえずみ山水のうへはしける苔の通路
草も木もふみ分かたきおく山は葎こそ道のしるへなりけれ
旅衣なりはへほさぬ山路哉眞木の下露苔の雪に

ふみ分てこゆるいはれの苔庭よるは旅れの山路にそしく
霜むすふあしたのほとそみ山ちのこけにも人の跡は有ける
郷信寄胡鴈

ふる郷にわふとこたへよ山たかみ晴ぬ雲井にわたる鴈金
今ははや古郷人もわするらんまつも空なる鴈の玉つさ
故郷のつてもわするな歸りこんほとは雲井の秋の鴈金
歸るさないつとさためて鴈かれの都へ行にことはつてまし
ことつてんかひこそなけれ行鴈の歸る雲も都ならねは

人行秋色中

旅人のさきたつ袖も秋草の花にわけ入むさしのゝ原
たひころもたつたの山をこえ行は袖に色つく秋かせそふく
みむる山をめぐもゝらさぬ時雨哉秋行袖は木葉なられと
咲にけり秋のはきはら露分て旅行人の袖うつるまで
くれぬとも猶分ゆかん秋萩の花のゝ露を袖にかけつゝ

路明殘月在

さゝ分る道もたとらす月まちて曉出るゐなの山もと
あふ坂やこえ行跡にのこる也空にも關や有明の月
明ぬればさそひし月を中空にのこしてこゆる足からの關
在明の山邊さやかにのこらすは夜ふかく出て道やまよはん
行まゝに山した道もあらはれて木間さやけき有明の月

灘聲入夢寒

なれぬ夜の川音寒き草枕みるとしもなく夢路おとろく
すさましき河せの波のうつゝとも夢ともわかぬうき枕かな
いそまくら川音さむみうつゝとも夢ともしらて明ぬこの夜は
都出てみるゆめもなしいつみ川かは音さむみ夜半の枕に

ふる郷の夢はたえたる手枕に川音がよふ夜はのさむしろ
空愁雙鬢覺

草枕たひの夜寒をかされきて蓬のかみも霜そ置そふ
宮古出ていく秋風にたえぬらん鏡のかけもしら川の關
草まぐらよもきか霜もふる郷につけのを枕いつかとくへき
かゝみ山立よりてみん旅にてはかしらの雪もなをやくもると
旅にきてつもの日数は覺えぬにかしらの雪のふりまさるらん

閑居十首

幽居有餘樂

心さへとまるはかりにうき事をきかぬみ山は住よりけり
かくてこそ身をも心の休るをしらてや人の山陰の庵
ひとりすむまやのあまりのたのしみや君にしらぬ恵成らん
是も又心をめはしつかにて住よきやとのかひやなからん
かれて思ふ身のあらましの程よりも猶山里はすみよりけり

盡日掩柴扉

今更にくれてもちず山風のおほふまゝなる柴の戸ほそは
さしこもるしはのとほそは自から明ぬにくるゝ日こそ多けれ
閑はてき柴の戸ほそはしこそ明ぬ暮ぬと人もまちしか
さしなから又そ暮ぬるけさまでも夜はのまゝなる柴の扉を
くるゝまてさなからとつるしはの戸を絶す嵐の尙たゝくらん

秋月離喧見

ふけゆけはひはらの風も音さえて月閑なる山のおく哉
世をすてぬ人もみらめ秋の月心のすむはすみまさりつゝ
澄のほる月に吹よの松風はこゝろの空に音も聞えず

すてしより身のうき雲も残られは心に晴て月をみるかな
世中のうきよりほかとみるにたに月にはゆるゝわか袂かな

深居絶是非

水清き山のおくには世中のすむものにこるも聞えさりけり
水上を尋てそすむ山河のかはる淵せはさもあらはあれ
山川のすみそめしより音たえてふちせにかはる世をも歎す
人とはぬ山の奥にはよしあしの世のことはりも聞えさりけり
なへて世の色になかめはおく山の花も紅葉もかひやなからん

山中無曆日

春秋は栢の色にしらるれと月日をわかぬ山のおくかな
うつり行月日もしらぬ深山路を何とて老の尋きぬらん
時そとて火はたかねとも春はもえ秋はこかるゝ山の色哉
山里はつもる月日は知られとも松のあらしの音をなれぬる
おく山にしらぬ月日の積りきて老やうき世にかはらさるらん

鳥啼人不見

きゝなれぬみ山の鳥の聲はして苔のいほりに住ひともなし
問人もなきおく山の苔衣をのれきなれて鳥や鳴らん
山ふかみまた聞しらぬ鳥のれもあらはそ人に名なり聞へき
人みえぬ柴の扉の明暮は鳥もしつかになれてなく也
名も知らぬ鳥の聲のみ聞えつゝ身をおく山にとふ人もなし

殘生隨白鷗

老の波こゝなとまりと立そよるなるゝかもめの契たかはて
老のなみよる方もなき捨舟になるゝかもめや我を知らん
すてしよりなるゝ鷗も驚す世をうき舟の我をわすれて
年をへてなれし鷗ようき身世による方なみの行衛しらせよ

日にそへて浮身の友と波の上になるゝかもめに心へたつたな
閑門留野鹿

のへ近き蓬か門をとちやせんかよふなしかのふしなるゝまで
松の門さすともしらて夕暮の籬を山としかや鳴らむ
のへ近しみのりの門にさしこもる鹿のそのとや宿をなさまし
さしこもるむくらの門の明るまで庭なものとへと鹿を鳴なる
山里はむくらの門もさしはてゝ庭なるしかのかよひもそする
身在能無事

今はたゝなす事もなし老らくの心のまゝに世をやつくさん
何事なすとはなしになかゝりて人のためうきかりの宿哉
世を祈る心を猶もわすられぬなす事もなき身はやすくして
かくてすむ身はやすけれどすてゝみん申々世をは厭はさり鬼
心をも身をも同じと聞しよりすめともやすき浮世なりけり

竹徑通幽處

尋はや是やうきよの外ならん竹のは山のおくのかよひち
いにしへの竹の林のあとなれやうきふし遠き苦の下道
ふみまよふ竹の下道よの中にあらぬ所やいつく成らん
末みゆる竹の下みち程もなし栖もさそながすか成らむ
幽なるけふりに里もしられける竹よりおくの道の一すち

雜二十首

半山帶夕陽

あすもみん夕日かくれぬあし曳の山の半の松のむら立
山もとは山のかけより暮はてゝ峯に入目の色そうつるふ
夕附日かくれもやらぬ山のはのこなたの松はかけもうつらす

ふもとより先くれ初てなくら山みれに入目の影そのこれる
残りける高れ許は顯れて日かけの下に雲そ暮行

鐘聲雲外殘

明わたるおのへの雲のいつくともしられす遠きかれの音哉
出てこし宿はいつくそはつせ山雲井にのこる入相のかれ
おいとなるれ覺のかれのなこりまてわかれはおしき横雲の空
よこ雲の明はなれ行尾上より夜ふかきかれの聲を聞ゆる
雲うつむひはらかおくは暮はてゝよそにはつせのかれを聞る

水窮天盡頭

みわたせば空もかきりは有物を入日かたふく沖つしら波
みくまのゝ山のあなたや天河雲よりおつる瀧のしらなみ
わたの原日も暮かたはしられとも空のはてこそかきり成らめ
わたの原遠き限りをみわたせばは浪もひとつにかゝる白雲
なかもやるほと計こそ和田の原波と空との限なるらめ

流水浸雲根

風こしの峯に夕ぬる白雲の中におつるきその山川
きえぬともたれかはしらむ雲かゝる山の岩れの水のうたかた
世とゝもに雲そかゝれる石ま行水の水かみ音許して
雲の波尚立そひて水上はみれよりおつる山の瀧つせ
たえゝに未はなかれて行水の浪かけみれはかゝる白雲

山光落釣舟

夕日さすいそ山もとのあまな船浦をへたてゝみるそまぢかき
宿やなき磯山かけな暮ぬとてとまひきかへるあまの釣船
いさりしてあさこく舟の過かてに日かけうつるふ磯の山もと
磯山のかけみるなみのみとりよりあしへにうつるあまの釣舟

いそ山のかげや波まにうつるらんみとりもうかふあまの釣舟
船與浪高低

うきしつみさも定なき人の世や浪にたゆたふ浦のつり舟
おきつ舟風にたゆたふ波より見えみみえずみ遠さかり行
おきつかせ立しらなみのかすことになゆたふ舟の定なの世や
世中は浪のさはきにこく舟の心さためす浮しつみつゝ
定なく立しらなみの世なうみに思ひたゆたふあまの釣舟

風林無鳥宿

ふしなるゝれくらの鳥の聲もなしあらしくよの竹の林に
風ふけはたゝ一枝のれくらたに住えぬ鳥の音をや鳴らん
風ふけは林の鳥もいつくにか南の枝のすなうつすらん
むら鳥のやとらぬよはの枝たれてはやしの竹のなひく山かせ
村とりのとまる林と思ひしに今夜やかせのやとり成らん

天色無情談

心なきむなしき空をかこつ哉人はあはれといはぬあまりに
なかむればあはれとそ思ふ大空はなにの心の色もあらしな
いにしへに心をとめて言とへはみとりの空はいふかひもなし
おほ空のむなしき色はいかなれば詠るからにあはれそふらん
草木まてうるほふ雨はおほ空のむなしき色のめくみなりけり

人間多苦人

人ことにそむかれぬ世なうき物とおもふや同じ心なるらん
かくてみな老の坂にやむかふらんみるもくるしき浮世なり見
世のうきは我にそしりぬ過る身に捨ぬにかはる人はあらしな
捨ててぬ我身なりせばよの中のをき人数に今やいらまし
人ことに心ひとつを捨てては住うかるへき世間もなし

世路山河險

柚川やおろすいかたにさす棹の心ゆるさぬ世にこそ有けれ
うき世を猶すてやらぬ車をも舟をも返す道と見ながら
いかたこす柚山川の早き瀬にうつはあやうき世を渡りつゝ
柚山のみたちに有なにかたしのくたす早せもさそなくるしき
山よりも水よりも猶よの中の人の心の道そさかしき

清溪照孤影

朝なゝあかくむたひに老らくの影みる谷のみつからそうき
谷川のなかれをむすふたひことにあふ偉や友となるらん
我さへにすますなりせば谷水の苔の下にや影も埋れん
わかむすふかけより外は友もなしすむもひとりの谷の下水
年をへて結びなれたる谷水にしらぬ翁のかけそゝひ行

松多寺不見

陰ふかき松よりおくや寺ならんくるゝ山路に人歸る也
年をへてその宮寺の道とへは一夜なからの松もしけれ
行暮て尾上のかれも音たえぬ寺こそしらぬ松かせそ吹
松原のおくよりかれは聞ゆれとありとはえこそみれの古寺
幽なるかれのひゝきにしられけり松をへたつるおくの古寺

遠嶂収殘雨

此さとに晴ゆく雨の末みえて一むらくもるをちの山のは
雨はるゝ雲のとたえやたちぬはぬ遠山とりの衣なるらん
はれそめてみとりそふかきあま雲のよそになり行遠の山のは
雲のゐるとをちのみれや中空にはれ行雨のなこり成らん
ふりきつる雨かと思へばほともなくとをちの嶺に雲を殘らぬ

落日沈沙頭

吹上のまさこもたかし夕影かくるゝ山のみれとみるまで
みつしほの入目のかけのうつろひて紅くゝる濱のまさこ地
白妙のほむけのあしの追風に夕日もなひく濱のまさこち
玉かしはみかくとそみる夕つく目ひかりをうつす吹上のはま
しほかせにまさこの山は雲消て日影かたふく吹上のはま

清風隔世塵

松風のふくもいとほしかくてこそ浮よのちりは遠さかりけれ
まつかせを知人にせん山ふかみこれそうき世の塵もましらぬ
山鳥の尾上の松のちりもせずき世隔るかせのなとかな
心にもうき世のちりをのこさぬはいかにはらふそみれの松風
いかにしてうきよの塵をはらはまし松の風きく山なかりせは

衰髪臨朝鏡

朝ことにみるかけもうしますかゝみいつ迄知らぬ翁なりけん
手にとりてみればなけきのます鏡なにと面に年のへぬらん
翁さひみるかけもうしいにしへなてらす鏡にあらぬ物ゆへ
これそ此老となるもの朝なゝ向ふかゝみにつもる白ゆき
いつのまに霜もをくらんあさなゝみれば鏡のかけそ替れる

潺湲夜疑雨

れ覺して雨かとそきく此里の枕になるゝ瀧のひゝきを
あらし山今は木葉のふらぬ夜も雨かとおもふたきの音哉
今更に涙もからず瀧の音も雨ときく夜の枕とをりて
山さとなるゝ枕のたきの音は雨と聞夜そさらにさひしき
山さとのまくらにひゝく瀧つせはなれても雨の音かとそきく

鷺立斜陽天

舟よするうらのみなとの夕日影うつろふ水にさき渡る也

夕日かけ雨とふらしをかきゝきのいつくの空をさして行らん
かけうつるかたちをましえ夕つく日さすや河へにたてる白鷺
夕日さす遠山もとの秋の色にをのれまかはてわたる白鷺
ゆふつく日さすや河へにゆく舟のあとにも残る鷺の一むら

山田綴々高

ふもとまでいなはの末をつたふらし岡の早田の秋の夕風
高よりひきゝにをよふ山田の水の心に人ならはなん
吹まよふ山田のおもの秋かせにのほればくたる雲のみ哉
なのつからうへなる小田を餘りきてまかせぬ方もおつる山水
たらゝの霧の上なる小山田に秋のいなはの雲そ立そふ

僧談悟色空

とく法の花の下ひも色もかもむなしきほとを尋てそしる
夢のよをかたりあはせてしほる哉同し山にすみそめの袖
是も又むなしとそきく墨そめの色を深しとおもふ心は
とくのりを又とく人のなかりせはむなしき道に猶やまよはん
驚かす友なかりせは夢の世をまことにすむとみてややみなむ

朗詠百首

春部

池凍東頭風度解

はるの池の汀をわたるこち風に水のくさひうちとけにけり

東岸西岸之柳遅速不同

春のくるそなたやまつはめくむらむこのものかの岸の青柳

望長安城之遠樹百千万莖齊青

おちかたの遠き梢をみわたせばことに摘し若菜なりけり

淺紅嬋娟仙方之雪媲美

たちねはぬ衣にかゝる雪の色もはつらんものを梅のにはひは

山桃復野桃日曝紅錦之幅

もゝの花ところ／＼に咲ぬれば野にも山にもにしきなりかく

花明上苑輕軒馳九百之塵

花みにといそく車はすきぬれと我のみゆかて思こそやれ

不明不暗臙々月

くまもなくさえぬものゆへ春の夜の月しもなそや臙けならぬ

西樓月落花間曲

春の夜の有あけかたの月をみて花になつさふ宮のうくひす

留春春不駐春歸人寂寞

留むれと春はとまらて歸りにきいかゝはすへきけふの淋しさ

□□□□□□□□□□□□□□

あけかたに春の夜たゝもなりぬれば西にそ廻る星のやとりは

夏部

生衣欲待家人着

ぬきかふる人をまつらむ春すきて夏のけさたつ蟬の羽衣

斑婕妤團雪之扇代岸風兮長忘

川風のきし吹夏の夕すゝみいつらあふきのゆくゑしるらむ

燕昭王招涼之珠當沙月而自得

空はれていさを照らす月の色を涼しき玉のかけかと思ふ

五月蟬聲送麥秋

神まつる卯月もたては五月雨のそらもとゝろになく蟬の聲

五月菖蒲素得名

むかしより行かたもなき沼水にいかてあやめの名を流しけむ

一聲山鳥曙雲外

あし曳の山郭公一聲をあげゆく空のよそにこそきけ

池冷水無三伏夏

こやの池のみきはゝ風の涼しくてこゝには夏をしらてふる哉

松高風有一聲秋

松風のこするを渡る一こゑにまたきも秋のけしきなるかな

六月瀨聲似秋雨

みな月のかはせをたゝくさゝ水の音にそかよふ秋のむらさめ

螢火亂飛秋已近

夏たけて秋もとなりになりけりすたく螢のかけをみしま江

秋部

二星適逢未叙別緒依々之恨五夜將明頼驚涼風颯々之聲

たまさかに秋の一夜をまちえてもあくるほとなき星舎の空

秋夜待月纔望出山之清光

あれやさは隈なき月のいつるかけ山のまに／＼またれ／＼て

秦甸之一千餘里漂々氷鋪

あまのはらそらさへ渡る月かけにいく里までか氷しくらむ

胡鴈一聲秋破商客之夢

鴈かれはこしちにやとる旅人のまゝとるむ夢やおとろかすらん

不是花中偏愛菊此花開後更無花

一すしに咲にうつろふこゝろかはこの後花のなければこそは

鷗胡背上數片之紅纔殘

しもをいとふ鳥のうはけのくれなゐは散し紅葉の残りけり

秋夜長夜長無睡天不曙

さらぬたにあくるひさしき秋の夜を物思ふ人の心つよさよ

巴峽秋深五夜之哀猿叫月

月の入かた山かけになく猿はふけ行秋をものかなしとや

縱以峭鹵爲固難留蕭瑟於雲衢

天のはら雲のかよひちとさしせよ空に暮行秋やとまると

冬部

十月江南天氣好可憐冬景似春華

神無月いりえの雨そのさとは空にそ春のかけをしろらん

曉入梁王之苑雪滿郡山

くれ竹の夜もあけかたに見わたせば山の高根に雪こえにけり

山深感動先侵四皓之鬢邊

年ふれとみ山をいてぬおいらくのものとゆひことに霜や置らむ

暖泉流處草冬青

冬くれとなを霜かれぬさゝたつま氷らぬ水のぬるきあたりは

爐火欲銷燈欲盡

埋火の消るのみかは窓の前にそむくるかけもか／＼けつくしつ

香爐峯雪撥簾看

こゝなからやとの簾を卷あけてみるおもしろき山のすゑふり

龍領珠投顆々寒

風やこれあられの玉をもて來らむちるかす毎に寒さまざるは

四時零落三分減

いつちとて春夏秋のすきねらむとまるとは冬のかけはかりして

急於流水難廻浪

みつのこと流てすぐるとしなればゆく月なみのたち歸らめや

白頭夜禮佛名經

年暮れてかしらに雪はつもりつゝみよの佛の御名をこそきけ

雜部

新豐酒色清冷鸚鵡盃之中

もろ人の涙にうかふるさかつきのそこまで澄るおほみきの色

韓康獨往之棲花藥如舊

ひとりのみ詠るやとの木末にも花はむかしにかはらさりけり

僕夫待若鷄籠山欲明

かへれとや我まつ人を思ふ覺よこ雲わたる山もしろめは

嚴粧金屋之中青蛾正畫

たはれめか朝けのかほをかさるとてけさうやりとをけさやあくらむ

三壺雲浮七萬里之程分浪

みつのしま雲ちはるかにわけたれは思ひ／＼にかくる白浪

傳氏巖之嵐雖風雲殷夢之後

あたにみし夢よりさきはしらさき覺てそ人は思ひあはする

且南暮北鄭太尉之溪風被人知

たに風のあした夕にかはるかなゆきかふみちに心せんとや

遊子（旅人）獨行於殘月函谷鷄鳴

あそふ子の入月かけをしとふとてゆけは關中に鷄の聲しつ

南望期有關路之長行人征馬路驛於翠簾之下

たますたれあけてもみつるあら□□駒うちなめてすくる旅人

鷄人曉唱聲驚明王之眠

すへらきのかしき夢を驚かせともの宮つこあけぬとならば

祝部

萬歲千秋樂未央

ちの秋よろつの年をへぬれとも思ふ事なきみとはしらなん

尊猶南面松花色十廻

千年ふる松は十かへり花咲とおもかはりせぬ君かみよかな

不老門前日月遲

年ふれとおいせぬかとをたてたれは過る月日もしられさり見

谷水洗花汲下流而得上壽者（十）三百餘家

しらさくのした行水なくむ人はいのちなかれの末はるかなり

本朝之延曆延喜胤子多我君亦胤子多

古へのひしりの御門のみならず君もなかれのかすよしらすも

管絃部

第一第二絃索々秋風拂松而踈韻落

琴の音のしらへにいかてかよふらん松のこすをばらふ秋風

管絃之在長曲怨不關於俗人

所せやかなつる袖も久しきにいかにつさせぬことのねそこは

感同類於相求離鴻去鴈之應春啼

わかれ行雲井のかりのなく聲ににてもさえつる春の驚

一聲鳳管秋驚秦嶺之雲

すみ登るふえのしらへはひとこゑに嶺の白雪おとろかしけり

新聲宛轉夢歟非夢歟

うつゝとも夢共えこそ聞わかれふきあはせたる笛のこゑく

閑居部

不獨記東都履道之里有閑居秦適之叟亦令皇唐大和之

歲有理世安樂之音

ひとりゐて日をのみことは記し置む治る世をも人にしらせん

幽思不窮深若無人之處

さ夜更てゆく人もなき道すからいつくにかよふ心とかしる

愁腸欲斷閑窓有月之時

ひとこすてきひしき窓にある物はさし入月の影ばかりのみ

陶門跡斷春朝雨

くる人のあとそとしき我かとに雨ふりこむる春のあしたは

陵園配妾月前心

春のおもひ秋のあはれそつきもせぬひとりそえ行月を詠て

羈旅部

鳳凰池上月送我過南山

水のおもに宿りし月のこよひさは秋の山ちなとにすきぬる

曉入長松之洞巖泉咽號嶺猿吟

あか月はいはもる水もむすふ也山とよむまてましらなきそ

若波路遠雲千里

はるくくと雲のはつかにみわたせば漕ゆく舟の波ちいくらそ

白霧山深鳥一聲

みれつゝき霧たち渡るみ山へにきけは稀なる鳥の聲かな

壯士若單易水秋

ものゝふの衣やうすき秋風にかは瀬も寒きたひれしてけり

述懷部

恨同伯鸞歌五噫而將去

なけくこと一つのみにもなかりけり人の心や我身なるらん

顧不運之質多積淪落之悲

いかにこは我身のうきになしはてゝさのみこりつむ歎なる寔

范蠡取責棹扁舟以逃名

さゝなみやうかふ小舟に棹さしてところせき世を漕離れにき

駢驥倚輔於吳坂馬鳴良樂知與不知也

顧みてひく人なくはやかてさばなつみし駒やいはえさらまし

昨日山中云木才取於己

いかにさは思ひさためむ世中なとてもかくてもありあけの月

餞別部

前途程遠馳思於膺山之暮雲

ゆく道のほとなもえこそしら雲のゆふゐる山に眺めをそする

李門浪高人送我何日

としことに人なのみこそ送りつれいつまた人の我を送らむ

泣尋沙塞出家鄉

なくくそしらぬ越ちへ尋いるふるき宮古をいつるわか身は

昔爲鸞與鶯今作參將商

思ひきやなしの契をたちはなれほとは雲ゐのやとりせんとは

尋陽江畔夜送客

いさよひの月も入江の夜ふかきにいつくをさして漕はなる寔

戀部

爲君薰衣裳君聞蘭麝不馨香

うらめしやそての匂ひはかはらぬよ人のこゝろの昔にもにぬ

南翔北嚮難付寒溫於秋膺

ひきつれて秋は南へゆくかりよ□□たまつさを人につたへよ

可憎病鵲半夜驚人

一人ぬるやもめ鳥はあなにくやまた夜深きにめをさましつる

楊貴妃歸唐帝思

而かけを戀ふる我身に添をきて命はのへの露と消にき

李夫人去漢皇情

たまかへす草をもうへし中々にみるに思ひのしけさまされは

懷舊部

金谷醉花之地花每春匂而主不歸

ちれとまた花はさきけり春ことになしや人の行てかへらぬ

南樓嘲月之人月與秋期而身何去

年ことに月と秋とはめぐりきてみし人の身はいつちなるらむ

王子晋之昇仙後人立祠於緱嶺之月

このみれになつるやしろは昔みし人を忍ふのものとなりけり

遺文三十軸軸々金玉聲

水莖のあとはむかしにかはられはみるに涙のかはくまそなき

東平王之思舊里也墳上之風靡西

ふる里をなな戀しとやおもふ覽そなたへなひくとりへの草

無常部

未及暮景蜉蝣之世無常

いかにとよ常有へしと思ふかは夕かけまたぬかけろふのよな

孟嘗君之多樂猶泣雍門之微吟

琴のれに物のあはれなしらさりし人の心をひきかへしてよ

生者必滅釋尊未免梅檀之煙

生れてもしぬるうきよのためしにはいて、そいりし中空の月

樂盡哀來天人猶逢五衰之日

空をとふ天つ乙女も限あれば花のかさしはしますもあらし

夕爲白骨朽郊原

はかなしやかはれは野邊に曝されていつらけさまで有し姿口

法文部

十方佛土之中以西方爲望

かりのみをしはし此世にやとし置て心は西にはこふとなしれ

昔初利天之安居九十日刻赤梅檀而摸尊容

隈もなき月のみかほなうつしもて歸らぬ程のかたみとそせし

十二因縁心裏空

世の中に人となるよりおはりまで思へはなにかまこと也ける

念極樂之尊一夜山月正圓

夜もすからあはれ心のすむ月にみたのみかほをよそへたる哉

願以今生世俗文字業狂言綺語之誤驪爲當來世々讚佛乘

之因轉法輪之縁

はかなくも風にあさむく言の葉をまことの道にひるかへしてむ

此朗詠百首者。壬生二品家隆興眞跡也。而本又未見類。故

人之注釋尤可ニ握翫者乎。

黃門源通村

右以土浦侯秘本書寫校合畢

群書類從卷第百七十六

和歌部三十一百首十

俊成卿文治六年五社百首

年ころ人の家々歌合にも。又或神社佛寺にも。ことをよせつゝ
歌合とすゝめて。先判をうけむと申によりて。おほえぬよしな
しことをのみかきつゝる事のやくなくおほえて。ちかひたる
よしを申て。せずなりて後。よしなき判をのみかきつゝりたる
事を思ひて。春日日吉の社に歌合をしてまいらせむとて。人々
すゝめ侍しかは。上達部たちもおほく事うけはしなから。なに
となくなくられさりしかは。今はとけかたかるへき事になる
へしとて。そのかはりに兩社にあやしくとも。百首の歌をたに
よみて奉らむと思ひなりて。文治五年より思ひ立て。よみつら
ね侍しほとに。住吉の社賀茂などにもまいらせてやはと思ひ。
又太神宮にまいらせはとて。五社の百首とて讀そへて。文治六
年の春そ清書てたてまつりはむへりし。

立春

太神宮

いつしかと霞の衣たちかけてみもすそ河も氷とけ行
賀茂

つらゝぬし賀茂の川上うち解て瀬々の岩波春とつく也

春日

古郷のまたふるとしに春たてはかすかの山そ先かすみける

日吉

春は先にほの海をやわたるらむ霞をよするしかの浦かせ

住吉

住よしの浪より春や立つらむ松ふく風もあらたまるなり

子日

君を祈る子日もあまた過にけり哀とおもへ春日のゝ松

君か代を野へに出てそ祈りつる初子の松の末もはるかに

春日野におふる子日の松はみな千世をそへつゝ神やひくらむ

さゝ波や志賀のはま松ふりにけり誰世にひける子日成蘭

子日には野へならねとも住よしの松のかけにて祈るはかりそ

霞

霞こそたちこめたるを鈴鹿山春になるとはいかにいふらん

立かへりむかしの春のこひしきは霞をわけし賀茂の曙

かつらきやつくりさしける岩橋も春のかすみは立わたりけり

あさみとり四方の山邊にうちなひく霞や春のすかた成らん
明石かたゑしまなかけてかすめともかすみのうへも沖つ白浪

鶯

谷を出て心たかくうつるなる 神路の山の鶯のこゑ
鶯の音はかはらねと神山に春を告るはうれしかりけり
年を経てあはれとぞ聞鶯の宿をもわかす春をつくらん
關こゆる春のつかひや行やらぬ音羽の山のうくひすの聲
さらねとも難波の春はあやしきに我しりかほに鶯の鳴

若菜

今日とてやいそなつむらん伊勢嶋やいちしの浦の蜃の乙女子
しつの女かかはたの原につむせりも誰爲にとて袖ぬらすらん
若菜には数ならねとも春日野におほくの年をつみてける哉
いさやこら若なつみてん根芹生るあさ澤小野は里遠くとも
あやなくも摘に來にけるわかなかな澤のねせりは袖ぬらし鳧

残雪

おなしくは花の咲まで待つつけよ吉野の山の峯のしら雪
しるたへの手向の本綿にまかふかなかた岡山の雪の村消
よしの山ふもとは霞たなひけとまた雪深し岩の陰道
神山や杉のしけみの去年の雪さえぬしるしを殘す成けり
松かけに久しく消ぬしら雪はこそのかたみに神や殘せる

梅

一木たに匂ひは遠しもうこの梅咲峯を思ひこそやれ
色につき匂ひにめつる心とも梅かえよりやうつりそめ劍
宿のうちに軒はの梅の香をみて、旗の板戸もさゝぬ頃かな
契りあれや花の中にも梅はなかくる匂ひにほひそめけん
難波津はむかしも梅の咲ければ蜃の笛やも風かほる也

柳

たをやめのよとての姿おもほえてまゆより青き玉柳かな
玉柳にはふともなき枝なれと緑の色のなつかしきかな
あさみとりさほの河邊の玉柳つりをたれけん糸かとそみる
露ぬける春の柳はさほ姫の玉のすかたをみするなりけり
あさみとりなのか色とやおもふらん柳の枝に鶯のなく

早蕨

誰ために忍ふの岡の下わらひ烟はたてすもえわたるらん
たのみこししめちか原の下蕨したにもえても年へにし哉
いにしへを思ひこそやれ山ふかみふたり折ける春の早蕨
炭かまの烟になるゝ小野山は春の蕨もまつやもゆらん
つらゝゐしたるひの杜の早蕨の折にたにやは人のこさらむ

櫻

なをもおもへ櫻の宮に祈りみむ花をちらさぬ神風もかな
わすられぬその神山の花盛よもすからみし春のよの月
是そ此ならの都の花さかりこりかさなりて匂ふ白雲
山櫻ちりに光をやはらけて此世に咲る花にや有らん
吉野山春の雪とはみえなから風こそかほれ花にや有らむ

春雨

春雨はみとりの空をうつしもて野への色をもそむるなりけり
草も木もあまれく惠春雨に袖はぬれてもかひなかりけり
春雨はとひくる人も跡たえぬ柳の門の軒の糸水
つく／＼と濡そふ袖におとろけは降ともみえぬ春雨そふる
春雨は軒のいと水つく／＼と心ほそくて日をもふるかな

春駒

小笠はらやけの、薄つのくめはすゝろにまかふかひの黒こま

若草を妻とや駒は思ふらん野をなつかしみはなれさりけり
故郷のみかきか原のはなれこまさこそ野かひのあれてみゆ蘭
とりつなけはなれもはてし春駒のあるは草になつく成けん
はむ駒のあし毛にのみもみゆる哉難波の春や深く成らん

歸 鴈

秋はきて春は常世にかへる鴈夏や涼しきすみか成らむ
歸鴈こゑに涙やたくふらんながむる袖に露の落そふ
何となく思ひを送る歸る鴈ことつけやらん人はなれと
秋きてもなるとはなしに歸るかり春はわかれの心地こそすれ
春の空こちにみえてかへる鴈松の風にそ聲かよふなる

呼子鳥

あはれとは夜の鶴をそおもひしを春の山にも呼子鳥なく
人の思ひたゝすの杜の呼子鳥心のやみは空に知らん
老の身ないとほぬ人はかた岡に珍らしく鳴呼子鳥哉
あはれなり春の山ちの呼子鳥花の陰にを人とまれとや
おもふとはいはせの杜の呼子鳥あはれしれらん人のきけかし

苗 代

くもつ川せき入てまける苗代に秋の空こそかててみえけれ
頼もしなみたらし河をせきかけてみしめはへたるみと代の種
しめはふる苗代かきのけしきまで植ん田面のほとそしらるゝ
花のちる山河せける苗代に賤かこゝろもみつへかりけり
賤かせくなはしろ水のなかれまて難波わたりは心ありけり

董

三熊野のはまゆふわけて咲董かされて色のむつまじき哉
むらさきの野へのしは生のつほ董かへさの道もむつまじき哉

いにしへの籬の野らのつほ董むかし戀てや露けかるらん
董さく淺茅か庭はふみわけてとふ人なきもさあらはあれ
董咲遠里なの朝露にぬるともつまむ旅のかたみに

杜 若

こなきつむあかたの井戸の杜若花の色こそへたてさりけれ
神山やおほたの澤のかきつはた深きたのみは色にみゆらん
紫の色はふかきなをかきつはた淺さは小野にいかて咲らむ
春ふかき沼江の水の岩垣になをかきこむる杜若哉
こやの池の汀にうつる杜若あしのかこひをまはら成とや

藤

あはれともうしとも思ふ藤の花なとかしつえに我をなしけん
藤のはな雲にまかへて散したに雨をほふれる夕暮の空
藤の花うちのもろ人見し時も雲の衣をつられしなはや
當初保延之頃於勸學院行藤花宴之時爲雲客交其席賦詩
故云

故云

志賀の山松にかゝれる藤のはな浦のさゝ波こそかと思ひなさはや
住の江の松に藤こそ咲にけれ梢にかゝるむらさきの浪

歎 冬

むかし誰うへはしめてか山ふきの名をなかしけむ井出の玉水
さくら散春の暮ゆくもの思ひもわすられぬへき山吹の花
駒とめてなな水かはむ山吹の花の露そふゐての玉河
やまふきの名をは冬とそ聞しかと春のゆふへの風にこそさけ
ゆく春をいつちさへともいはいはしとや口なしに咲山吹のはな

三月盡

けふくれぬ夏のこよみを巻返しな春そとも思ひなさはや

さりとともなくおしむ共わかれゆく春も心にあはれならしや
年をへて春のおしさはまされとも老は月日のはやくも有哉
行春はしらすやいかに幾かへりけふの別をおしみきぬらむ
かへる春けふの舟出はむやあせよ猶すみよしの松陰にして

更衣

けふも又めつらしき哉百敷や雲の上人衣かへして
花の色はわすれすなから夏ころも薄きにも又うつる心か
花の色をかふるならひのつらきかな昔は春やおしまさり
罽染の袖はよそなる花の色を人の爲にもななかしむかな
たれも猶はなの色をは身にしまて人めばかりや蟬の羽衣

卯花

卯花のさける山路の夕月夜ひかりは雪のそふるとそ見る
中河やわたりに咲る卯花はかきれつゝきに波を越ける
夕月夜あやしくことにさやけきはうの花さける山ち成けり
うのはなの波のしからみかけそへて名にも越たる玉川の里
卯のはなのかきれは雪のあしたにてよその梢は夏の山さと

葵

あふひ草日かけに離く心あれは天津やしろもあはれかくらし
みあれひく今日の葵をみても先神にたのみなかけそふる哉
哀にそ草のなかにももろかつら神のかさしとひかれそめける
よそなからけふの日吉の祭にも賀茂のみあれは葵なりけり
いかなれば日影にむかふあふひ草月のかつらの枝をそふらん

郭公

またれてもたゞには過す時鳥ことかたらふそあはれ成ける
夏ことに契とならば郭公かくしも人になとまたるらん

郭公さやかにちかく啼こゑはにこれる世にはあはすも有かな
なくさむるかたなからまし夏のよをあはれにもとふ郭公かな
子規はな立花になく時は聲さへにはふ心ちこそすれ

菖蒲

奥山の谷のうきぬの菖蒲草ひく人なしにねやなかるらむ
瑞籬やさ月のけふの御戸ひらきかさる菖蒲のかさへなつかし
をしなへてふかぬ宿なき菖蒲草いかによと野にさのみ幾らん
みくりくるつくまの沼の菖蒲草ひけとつきせぬれこそ有けれ
鯉波人芦まの菖蒲あしのやにやかてそへてや今日はふくらむ

早苗

伏見津や澤田の早苗とる田子は袖もひたすらみしふつくらん
おほあらきのうき田の早苗老にけり杜の下草とりなまかへそ
早苗とる鳥羽田の面をみ渡せば幾なみあらんた子のをかさよ
かるもかくぬたのこひちに立田子は早苗よりこそほつ也幾
種まきしわさ田の早苗うへてけりいつ秋風のふかんとすらむ

照射

ますらおは鹿に心なかけつるや忍ふの山に夜をあかすらむ
夜を重ねともしになつむますらおは鹿をまつなや焼つくす覽
雲あまで行盤かとみえつるはたかまの山のともし成けり
ますらおは幾よともしに迷ふ覽ほくしとしての山はあらしな
ともしにもしな鳥とやますらおかゝるなのは山を分忍ふらん

五月雨

五月雨はおふの浦なし浪越てなりもならずもしらぬ頃哉
さみたれは岩波あらふ貴船川かは社とはこれにそ有ける
五月雨は水上まさるいつみ河かさ木の山も雲かくれつゝ

若草を妻とや駒は思ふらん野をなつかしきはなれさりけり
故郷のみかきか原のはなれこまさこそ野かひのあれてみゆ蘭
とりつなげはなれもはてし春駒のあるは草になつく成けん
はむ駒のあし毛にのみもみゆる哉難波の春や深く成らん

歸 鴈

秋はきて春は常世にかへる鴈夏や涼しきすみか成らむ
歸鴈こゑに涙やたくふらんながむる袖に露の落そふ
何となく思ひを送る歸る鴈ことつけやらん人はなれと
秋きてもなるとはなしに歸るかり春はわかれの心地こそすれ
春の空こちにみえてかへる鴈松の風にそ聲かよふなる

呼子鳥

あはれとは夜の鶴をそおもひしを春の山にも呼子鳥なく
人の思ひたすの杜の呼子鳥心のやみは空に知らん
老の身ないとほぬ人はかた岡に珍らしく鳴呼子鳥哉
あはれなり春の山の呼子鳥花の陰にを人とまれとや
おもふとはいはせの杜の呼子鳥あはれしれらん人のきけかし

苗 代

くもつ川せき入てまける苗代に秋の空こそかてみえけれ
頼もしなみたらし河をせきかけてみしめはへたるみと代の種
しめはふる苗代かきのけしきまで植ん田面のほとそしらるゝ
花のちる山河せける苗代に賤かこゝろもみつへかりけり
賤かせくなはしる水のなかれまで難波わたりは心ありけり

董

三熊野のはまゆふわけて咲董かされて色のむつましき哉
むらさきの野へのしは生のつほ董かへさの道もむつましき哉

いにしへの籬の野らのつほ董むかし戀てや露けかるらん
董さく淺茅か庭はふみわけてとふ人なきもさあらはあれ
董咲遠里なの朝露にぬるともつまむ旅のかたみに

杜 若

こなきつむあかたの井戸の杜若花の色こそへたてさりけれ
神山やおほたの澤のかきつはた深きたのみは色にみゆらん
紫の色はふかきをかきつはた淺きは小野にいかて咲らむ
春ふかき沼江の水の岩垣になをかきこむる杜若哉
こやの池の汀にうつる杜若あしのかこひなまはら成とや

藤

あはれともうしとも思ふ藤の花なとかしつえに我をなしけん
藤のはな雲にまかへて散したに雨をほふれる夕暮の空
藤の花うちのもろ人見し時も雲の衣をつられしをはや
當初保延之頃於勸學院行藤花宴之時爲雲客交其席賦詩
故云

欸 冬

志賀の山松にかゝれる藤のはな浦のさゝ波こそかとそみる
住の江の松に藤こそ咲にけれ梢にかゝるむらさきの浪
むかし誰うへはしめてか山ふきの名をなかしけむ井出の玉水
さくら散春の暮ゆくもの思ひもわすられぬへき山吹の花
駒とめてなな水かはむ山吹の花の露そふゐての玉河
やまふきの名をは冬とそ聞しかと春のゆふへの風にこそさけ
ゆく春をいつちさへともいはいしとや日なしに咲山吹のはな

三 月 盡

けふくれぬ夏のこよみを巻返しなを春そとも思ひなさはや

さりともなくおしむ共わかれゆく春も心にあはれならしや
年をへて春のおしきはまされとも老は月日のはやくも有哉
行春はしらすやいかに幾かへりけふの別をおしみきぬらむ
かへる春けふの舟出はむやあせよ猶すみよしの松陰にして

更衣

けふも又めつらしき哉百敷や雲の上人衣かへして
花の色はわすれすなから夏ころも薄きにも又うつる心か
花の色をかふるならひのつらきかな昔は春やおしまさり
蠶桑の袖はよそなる花の色を人の爲にもなをおしむかな
たれも猶はなの色をば身にしめて人めばかりや蟬の羽衣

卯花

卯花のさける山路の夕月夜ひかりは雪のそふるとそ見る
中河やわたりに咲る卯花はかきれつゝきに波を越ける
夕月夜あやしくことにさやけきはうの花さける山ち成けり
うのはなの波のしからみかけそへて名にも越たる玉川の里
卯のはなのかきれば雪のあしたにてよその梢は夏の山さと

葵

あふひ草日かけに靡く心あれは天津やしろもあはれかくらし
みあれひく今日の葵をみても先神にたのみをかけそふる哉
哀にそ草のなかにもろかつら神のかさしとひかれそめける
よそなからけふの日吉の祭にも賀茂のみあれは葵なりけり
いかなれば日影にむかふあふひ草月のかつらの枝をそふらん

郭公

またれてもたゞには過す時鳥ことかたらふそあはれ成ける
夏ことに契とならば郭公かくしも人になとまたるらん

郭公さやかにちかく啼こゑはにこれる世にはあはすも有かな
なくさむるかたなからまし夏のよをあはれにもとふ郭公かな
子規はな立花になく時は聲さへにほふ心ちこそすれ

菖蒲

奥山の谷のうきぬの菖蒲草ひく人なしにねやなかるらむ
瑞籬やさ月のけふの御戸ひらきかざる菖蒲のかさへなつかし
なしなへてふかぬ宿なき菖蒲草いかによと野にさのみ幾らん
みくりくるつくまの沼の菖蒲草ひけとつきせぬれこそ有けれ
姫波人声まの菖蒲あしのやにやかつてそへてや今日はふくらむ

早苗

伏見津や澤田の早苗とる田子は袖もひたすらみしふつくらん
おほあらしのうき田の早苗老にけり杜の下草とりなまかへそ
早苗とる鳥羽田の面をみ渡せば幾なみあらんたすのなかさよ
かるもかくぬたのこひちに立田子は早苗よりこそそほつ也幾
種まきしわさ田の早苗うへてけりいつ秋風のふかんとすらむ

照射

ますらおは鹿に心なかけつるや忍ふの山に夜をあかすらむ
夜を重ねともしになつむますらおは鹿をまつを焼つくす覽
雲あまて行益かとみえつるはたかまの山のともし成けり
ますらおは幾よともしに迷ふ覽はくしもしての山はあらしな
ともしにもしなかく鳥とやますらおかゝるなのは山を分忍ふらん

五月雨

五月雨はおふの浦なし浪越てなりもならずもしらぬ頃哉
さみたれは岩波あらふ貴船川かは社とはこれにそ有ける
五月雨は水上まさるいつみ河かさ木の山も雲かくれつゝ

さみたれはなからの山も雲とちてしかの浦舟篷くちねらん
有馬山雲まも見えぬ五月雨は出湯の末も水増りけり

虚橋

雨の後はな立花を吹風に露さへ匂ふ夕くれのそら
いにしへを忍ぶ心をそふるかなみおやの杜にほふ立花
古郷よいかにもかしを忍へとて花たちはなの風に散らん
さ月こそはな立花もにほひけれ春を暮ぬと何おしみ
住の江に花たちはなの匂ひけり松もやむかし思ひ出らん

螢

夏むしのはかなき身よりいかにしてくらきを照す契有けん
わか玉もあくかれぬへし夏虫のみたらし河にすたく夕暮
ともしけつ光をみるもあはれなりあれにし道の螢成とも
なかむれは心もつきぬゆく螢窓しつかなる夕くれの空
なつ虫のなたる鹽屋にすたく夜は螢のたく火のしけくも有哉

蚊遣火

かやり火の烟はかりや山かつの宿をしらるゝよそめ成らん
あはれさな人見よとても立さらむ煙淋しき賤か蚊遣ひ
蛙なくかひやに立る夕けふ賤かしわさも心すみけり
山かつのふせやの床の蚊遣火もけふりはおなし雲と成らん
山かつのしわさにも猶いらむとや埴生のこやもかひたてゝ

蓮

夏の日も心の水をすませとや池のはちすに露を涼しき
野へにをくおなし露ともみえぬかなはすの浮葉にやとる白玉
はちす咲池の夕風にほふなり浮葉の露はかつこほれつゝ
はちすさき水さへ匂ふ夕くれは身をかへてみる心ちこそすれ

浮草のすゑより風は吹なれと池の蓮そ先かほりける

氷室

冬の後夏もよりこぬ氷室山秋やはしめて時を知らん
岩かけや松かさきとのひむろ山いつれ久しきためし成らむ
春日山ふるき氷室の跡みるも岩のけしきは猶そ涼しき
ふゆとちし岩戸あけても氷室もり夏はとをさぬ關ち成けり
春も過夏たけぬれと氷むろ山冬をおさめてなける成けり

泉

まし水のいはもる聲を夜さけは枕のしたの心地こそすれ
ふりにける鴈の清水結びあけて昔の人の心をそくむ
玉はこの石井のし水手にむすひかくても夏は過ぬへき哉
いつくにか夏はよりこぬ山陰や岩もる清水宿しはしかせ
萬代も御法のなかれ絶しとや龜井の水の清くすむらむ

六月菰

けふも誰五十鈴の河に御菰してあらふる神もなこし成らん
思ふ事今はみな月はてぬらんみたらし川に御菰しつれは
水上に秋や立らむ御菰川またよひながら風のすゝしき
御菰する麻のたちえの青にきてさはへの神もなひけと思ふ
おなししは難波の浦に出てこそあしてふ事は御菰にもせめ

立秋

いつしかも今朝は袂のかるきかな秋は衣に立にそ有ける
けさみれば嵯峨のゝ露も色つきて嵐の山に秋風そ吹
秋ははや立田の山の山おろしの麓のさにとくる成けり
あきのくる曉かたとおもふよりやかて露なく苔の袖かな
須磨の關秋のはつ風こえにけり數津の浪の音もかはれる

七夕

たなはたや天の川よりかよひけむ誰か名つけし星合の濱
七夕のあふよのそらの更るにそ秋の心はくたけそめける
天河ほしあひの空をうつすより秋はことなるおりとみえけり
契けむ秋のはしめよ天河心もふかしほしあひの空
織女のとわたる船のかちの葉に幾秋かきつ露の玉章

萩

ものゝふの入野のはらと知ながら萩咲ぬれば鹿の鳴らん
山田もるかり庵に眞萩咲ぬればはなにそうつも立る成けり
露しけき宮木か原の萩さかりにしきの上に玉ぞ散ける
身にしむる秋とは萩の名成けり露に花咲月に鹿なく
春といひし人にみせはや津の國の遠里小のゝ萩萩の花

女郎花

女郎花露を玉のかつらにて霧のまかきに立かくるらん
をみなへし虎ふす野へに匂ふ共おらてはいかゝ人のすくへき
すか原や伏見の野への女郎花誰になれてかけさは露けき
女郎花色にめつとはいひながらさのみやのへの露にしほれむ
あはれなる逢かやとの女郎花思ひしほれて露けかるらむ

薄

過かてに我こそみつれ花すゝきまねくは風になひくなりけり
何事をおもひみたれて糸薄ほに出ながらむすほふるらん
露むすふあたの大野のはな薄何まねくらむ袖ぬらせとや
出にけり入野の原のはつおはな誰か枕にしなへてもせん
はりまかないなみの野への花薄むら／＼よする波かとそみる

荳

神風やみやのゝはらのかるかやなかられて秋も過ん物かは
はし鷹やはつとやたしの秋風にまたきしほれぬ野への荳かや
哀なり野へのかるかやみたれても下葉はしはし露とまりけり
なをしとてあさのよもきは何ならず亂れてもあれ野への荳
昔より誰みまぐさにしなふとて荳かやとくも名つけそめけむ

蘭

藤はかま草のまくらにむすふよは夢にもやかて匂ふ成けり
ふちはかま咲ぬる時そむさし野のわか紫の色もみえける
藤はかまおもひこそやれ花の時草の庵の秋の雨にも
藤はかま匂ふうてなもよそなりきあやなくふれし苔の袖には
秋のきてほころひにけり藤はかまうつりかこくも猶匂ふかな

萩

萩にし秋のあはれはなかりけり野原の花は干くさなれとも
かくしもは秋ふく風もおもほえすくやくしく宿に萩をうへつる
秋風の萩の葉わたる夕くれは身をわけて吹心ちこそすれ
いにしへはあはれと聞し萩の音もこともおろかに成にける哉
きゝなきし生田の杜の秋風も萩のはよりや身にはしみけん

鴈

いつしかと鴈はきにけり玉くしけ二見の浦の明かたの空
もろこしの浪ちや過し秋の鴈雲ゐにきてもからるをす也
なしれほす田面にきゐて秋の鴈をのか常世のものかたりせよ
かへる鴈又もあはしと思ひしなはれに秋の空に聞かな
はつかりはみとりのかみの玉章なかきつらねたる秋の空哉

鹿

山ふかみ松のあらしのほかに又宿とふ物はさなしかの聲

あらし吹まかきの萩に鹿啼てさひしからぬは秋の山里
鹿のれはよそにこそきけ春日野は草の枕のものにそ有ける
心ある人いかばかりおもふらん秋の山邊の夜半の鹿の音
たのめをきて妻やこさらん棹鹿のまぢかれやまの曉のこゑ

露

秋くれば玉串の葉に露をきて香をかくはしみかほるらんはや
秋のよもしは生の露をふみわけし猶そのかみの戀しかるらん
野へにこそ露はなかくと思ひしかやとりは昔のなもと成けり
花の枝もあさか末もなく露のちれば心のまつくたくらむ
露を誰あたにいひけむ住の江の松の下葉の玉にそ有ける

霧

朝きりは勢田のなかはしこめてけりゆき、の駒の音計して
霧はれぬふもとの里はをのつから人のとふさへ淋しかりけり
山里は野への眞萩をかきりにて霧のまかきに鶴なく也
なそやかくなむるかたも霧こむる深山の里に心すむらん
朝霧に武庫の波ちを見わたせばほのかに成ぬおはち嶋山

種

見し人のなきかおほかる世中に秋はかならずあさかほの花
月草はうつしの色もあるものを露たに残せあさかほの花
権の露も千世をやへぬへきと山路の菊にうへそへましな
あさかほを誰かはかなしといひなきし明れば咲ぬ秋毎にして

駒

迎

日影さすほとをまたぬ朝かはた、俤の花にや有らん
かけふちにまたみえける逢坂の杉ま出るもち月の駒
霧原の駒もこゝろや晴ぬらん雲の上人あふさかにして

東路やいく山越しこまなれや關の岩かとなつまさるらん
逢さかの關の清水にことゝはむ幾夜かみつる望月の駒
夕霧のたちのゝ駒をひく時はさやかにみえず關の杉原

月

月よみの神にもいかて祈りみむ秋の空には雲なくもかな
久かたの月のみやこもかくやあらむ賀茂の河原の有明の空
あらさらむ後も心やなをすまん三笠の山の秋のよの月
此世には又なくさめもなきものを我をはしるや秋のよの月
たとふへきかたこそなけれ玉津嶋てらしかはせる住の江の月

擣衣

秋ふかく浦吹風にいせしまや蜃の筈やも衣うつ也
月きよみ千里の外に雲盡て都のかたに衣うつなり
野となれる秋の山風さむしとや衣うつなりふか草のさと
吹おろすひらの山かせ夜やさむきみつのはま人衣うつ也
衣うつ音こそ空にさえねなれこやの篠やによや深ねらん

虫

神風や竹のまかきの松むしは千世にちとせの秋やかされん
ありす河いつきの宮の秋の花千世をかれたる松むしの聲
わきてなをあらはれる哉いそのかみ古き宮古の鈴むしの聲
虫の音もよもきか本にしけれは野への旅れはいふ方そなき
常よりも露しけしとや蓼野へのたひれの床に啼らむ

菊

千々の秋も山路の菊は匂ふなり神代より咲花にや有らん
みつかきやあたりに咲る菊よりや久しき秋の花と成けむ
秋くれてひとり咲たに有ものを二たび菊の色をかふらん

かたそきや玉のみと野の初霜にまかひて咲る白菊の花
輪をへて思ひも出る雲のうへの星にまかひし菊のこの花

紅葉

立田姫よもの山邊をそめさらは身にしむ秋の色を見ましや
神代よりいかに契りて立田ひめ秋の紅葉をかくは染劔
もみち葉のこきも薄きも立田姫心のほとそ深くみえける
旅衣にしきたちきぬ人をそなき紅葉散かふしかの山越
住の江やかゝれる蔦の紅葉は、波も幾しほよりて染らん

九月盡

春もすき秋も暮るはかきりあるを又も逢みむことをのみこそ
いかゝせむ關の岩戸はかたむとも雲路に歸る秋のくれなは
都こそむかしうつらめ古郷は秋たにしはしとまらましかは
むしの音も鹿の聲をも聞拾ついかには暮行秋の心そ
ゆく秋の歸る雲ゐななむれば夕の空も浪ちなりけり

初冬

しくるとも神無月とは誰かいひし天照光かきりあらしな
かくこそは秋も時雨し空なれと今朝は嵐のはけしがるらむ
山里はかけひの水のつらゝゐて音つれぬにそ冬を知ける
冬くれは霜をけとてや山かつの園生いつきて庭と成らん
秋の後なをそ心の残りけるあらしの音のけさも悲しき

時雨

夕月夜かたふく空のむら時雨ひかりより散露かと思ふ
ななむれば心さへこそあかるれ時雨るゝ頃の村雲の空
村雲の外山の岸にかゝるより麓の里は時雨てそ行
なのかやかて染し紅葉の散時はおなし聲にそ又時雨ける

うち時雨人の袖をもちらす哉空もや秋の暮を戀らん

霜

あはれにも露とみしかと霜といひて冬のしるしに結ひなく
月のすむみたらし川の橋の霜玉しけるともみえ渡る哉
今朝みればみのくま川は水こほり小篠か原は霜むすびけり
霜さゆる枯野の尾花あはれなりその姿までしほれ過けん
初霜は降にけらしなしなかな鳥ゐなのさ、原色かはまるて

霰

山かせにたくひて夜半に降くるは霰は雪のものにや有らん
時雨せし雲のけしきはおなしくて空さえつるは霰なりけり
霜の上に霰ふる夜の冬の月哀そみける身をはいとほし
ふもとにはまたしくれとやおもふらんみ山の里は霰ふる也
月そすむ玉つくり江は霰ふり氷みかける名にこそ有けれ

雪

はまゆふも幾重か下になりぬらん雪降しける三熊の、浦
冬はこれ水の心の空にみちて氷れば雪の降にそ有ける
いつくかは雪のあしたのなるかなる猶限りなしみよしの、山
雲ふかし雪のみ山やこれならむ御法の末も絶しと思へは
空さむみ雲さえくゝて降雪は冬のすかたをみする成けり

寒芦

しほ風に伊勢のはま荻うち枯て草の枕も霜そさえける
冬の池の芦の枯葉のみたれこそ鳩のうきすのたより成けれ
あとたにもなから橋のわたりには枯葉の芦をかたみ成ける
難波かた芦のかれ葉に風さえて江の田鶴も霜に啼也
なには江や入江の芦は霜かれて月のやとりそくらさりける

千鳥

伊勢の海清きなさに鳴千鳥聲もさえたる有明の空
河千鳥なれもものはうれはしきたゝすの杜に行歸り鳴
月清み瀬々に氷やむすふらんさほの河原に千鳥なく也
ことはりやまのゝ入江に啼千鳥浦風さむきあり明の空
明石かた月の出しほやみちぬらんすまの浪ちに千鳥鳴なりとわたり

氷

冬なれば水の氷るは常なれとことにはすはの渡りを聞
貴船河岩こす波の氷りゐて冬そ靜に月はすみける
やまとちや駒うちわたす山河の氷ふみわけかよひしなわか
壯年當初常參當社經凝寒故云

かつ氷かつはくたくる山川の岩まにむせふあかつきの聲
冬の池にやとれる月の光よりやかて氷りはむすふ成けり

水鳥

夜もすから鶺鴒のうは毛をはらふにそ霜はまことに降物ときく
〔水鳥のいけになれたるけしきにそ哀をしれる宿はみえける〕
こやの池の芦のかれはの八重ふきやともれの鶺鴒の住家成らむ
はらひあへぬ上毛の霜にいかにして鶺鴒の青羽のかはらさる覽
浪のうへに消ぬ雪かとみえつるはむれてうかへる鷗なりけり

網代

田上や宇治の網代にもるゝ□てひをへん程もあはれいつまで
むかし誰宇治の網代なうちをめて今も心を人のよすらん
千早振うち河長老にけりあしるは年もよるにそ有ける
月清み田上川のあしる木は氷うちよする名にこそ有けれ
ひなのよる宇治の網代に舟とめて氷をかくる月をこそ見れ

神樂

かく山の榊の枝にゝきてかけそのかみあそひおもひこそやれ
千はやふる賀茂の社の神遊び榊の風もことにかうはし
吹たつる庭火のまへの笛のれは天の岩戸もさこそ明けめ
あなさやけあなおもしろとみゆるかなとる榊葉に霜のなく程
松風に和琴のれひゝきあひて庭火の笛も空にすむ也

鷹狩

風さむみかりはの小野を朝ふめは忍ふもちすり霞ちりかふ
おほつかなとかへる鷹もいかならん狩はの小野のゆき暮の空
雪降ぬしはしやすへむ御狩野にしらふの鷹のこぬやまかへん
はかなしや交野の原に立雉子たえぬかりはとかつはみゆらん
みかりするかた野のなに日はくれぬ草の枕を誰にからまし

炭竈

炭竈の山のおくまで見ゆるかな民のつとめやかきり成らん
すみかまのなのか烟の空さえて雪ふれば又かよふ旅人
遠かたや都のたつみ誰すみてまきの炭竈烟立らん
炭竈も氷室もちかき小野山は火と水とこそへたて成けれ
冬くれはなのゝ炭やききほひ出て時にあへりと思ひかほなる

爐火

埋火をかきおこさすは冬のよのれ覺の床は友なからまし
有とたに人□□□はいの下に何か思ひのなを残らん
年くれて有にもあらぬ埋火に老はつる身の程を知らん
うつみ火にすこし春ある心地してよふかき冬をなくさむる哉
山かつの丸木さしあはせうつむ火の世に有物と誰かしるへき

歳暮

月日のみなかるゝ水とはやけれと老の底より年はかへらす
おもひきや暮行年をおしみつゝ八十もちかくならん物とは
岩根こす八十宇治川の波よりもはやくも過る年のくれかな
けふことにつもる年波かさなりてへたゝり行はむかし成けり
けふことにいくとし浪を過ぬらんつもりの浦の濱松のきし

初戀

うれしさを袖につゝまむ思ふ事みつの柏にけふそことゝふ
みしめひく卯月のいみをさす日より心にかゝる葵草哉
誰となきそらたきものゝ匂ひこそうきたる戀のしるへ成けれ
はしめより思ふ心はきはもなし法の道なもそこそいふなれ
袖ぬれぬしちのはしかきかきそめて末また遠き道芝の露

忍戀

忍はすはほさても袖をみすへきにしほりそかぬる夜半のさ衣
いかにせんいは田の小野のしの薄ほにも出すや秋もくれなん
みせはやな賤のしのやのしの薄しのひ侘ぬる床のけしきを
みちのくの忍ふの里の近からは立かくれてもすまゝし物を
秋の野の萩のしけみにふす鹿の深くも人に忍ふ頃かな

不逢戀

いたつらにゆけともあはて歸る哉君はふせやにおひぬ物ゆへ
契あらは世々のあはれもいふへきをあはすは何か恨しもせん
逢事は渚によするうつせ貝むなしき波にぬるゝ袖かな
身をなけて生田の川にしつみても逢瀬なくては何にかはせむ
ぬる夜有て夢たにみえはなのつからあはする人もあらまし物を

初逢戀

柄はてし夜の衣をかはすかなしほとけしとやあはれ成とや

錦木の千束のかすにけふみちてけふの細布むねやあふへき
契あれやこよひ伏見の里にきて草の枕をかはしそめぬる
あふ坂の關守神に手向せしぬさのしるしはこよひ成けり
ひとりのみ歎し床を君か爲うちばらふにも袖はぬれけり

後朝戀

わかれつる床に心はとゝめ置て霞にまよふ春の明ほの
暮にもと契をけとも袖川や筏の床はをきそわひぬる
くれをまつ命さりとともなからめや今朝の別れのなとや悲しき
あはてこし道の露にもまさりけり衣々になるしのゝめの空
浦千鳥入江の波に起侘てなきてそ出る有明のそら

遇不逢戀

移りかはかさねし袖に有なからぬれきぬとやはいひ放つへき
現にはあはぬけしきに難面くて見しなは夢にいひなさんとや
あさましや袖ぬれてこそ結ひしか又影みせぬ宿のまし水
名をたてゝ我つらきともいふへきに只戀しきそわりなかりける
うら山しあたちの峯のそりま弓そりはてましを引かへしけむ

旅戀

夢路にはなれし宿みゆ現にはうつ山邊の薦ふける庵
露ふかき野原の草の枕こそ戀の涙もしのはさりけれ
わするなよ契しやとはいいかゝあらん野にも山にも侘そたつ
夢にこそ都のこともみるへきに袖に波こすちかのしほかま
難波女の芦のしのやのしのすかき一夜のふしも忘れやはする

思

深からぬ澤の螢のおもひたに身よりあまるはあはれならずや
戀しきも思ふゆへこそ戀しけれこひと思ふも何かことなる

水鳥のうける心のあききたに下の思ひは有とこそきけ
戀しともうきをつらしと恨るもおもふ心の深き成けり
まとりすむ杜の神にもとひてきけ思へはこそは思ふともいへ

片思

夜とにも我のみ思ひくたくらむ岩うつ磯の波ならなくに
あきなやつれなき人をいたつらに思ふ思ひのおしくも有哉
さきのよの我身そつらき君か爲かゝりければやむくひ成らん
中々にうるまの嶋の人ならはうきに思ひをかへまし物を
涙かくる岩根につけるあはひ貝こや片戀のたくひ成らん

恨

なみこさはうらみむとこそ契しかいかゝ成ゆくすゑの松山
心あらん人をそ人は恨むへきうらみけるこそはかなかりけれ
恨わひなをかへせとも小夜衣夢にもおなしつらき成けり
なとめつか後は梢そなひきける恨はたえぬ物とこそきけ
何せんうしとも人を恨みけむさてもつらさはまさる物ゆへ

曉

いつとても有明かたは露けきを猶かきりなし長月の空
明ぬるか有明の月はかたふきてかもの河原に千鳥啼也
あし鴨のはかひの霜や置つら尾上のかれもほの聞ゆなり
曉は鐘のこゑより鳥の聲千とり友よひ鴨のはねかき
旅の空残の月にゆく人も今や越らんあふ坂の關

松

人しれす百枝の松をたのむかな藤の末葉もあはれかけ、ん
たらちれのむかしの跡と思ふにも頼そわたる松の尾の陰
なしほ山小松か原はしけくともたのむこすゑは神もわかなん

霜の後ひとりのこれる谷の松春の光のさす時もかな
うきながら久しく世をそ過にけるあはれやかけし住よしの松

竹

竹のみや籬に植て千世までと祝ひそめけん此君そこれ
百鋪やみかきにならふ竹の千の末の世までも神のまに／＼
くれ竹のかはらぬ色を友とせし人の心のうちを知かな
も／＼しきやなかれ久しき川竹の千世のみとりは君そみるへき
窓に植て我ともとみる吳竹は袖にかはらす露もなきけり

苔

いにしへのみほの岩屋は苔むしてみれ共あかすところつら也
あはれにも苔よ衣となれ／＼て終には下にくちむとすらん
にほへとも花は春のみよしの山こけの縁そ常磐成ける
おち瀧つたきのうちはの岩の苔わか袖の上といつれ露けし
おく山の岩根のこけそあはれなる終には人の衣とおもへは

鶴

興津波あはれをかけよ和歌の浦の風に立そふたつの行末
松の本千とせの鶴の夜のこゑ龜のみ山にさそかよふらん
雲はれてつるこそあまた聲すなれ君か千とせを空にするとや
子を思ふ事はかはらし夜のつるいかて雲かに聲聞ゆらむ
難波かたむれたる田鶴の上毛こそ千とせも消ぬ霜には有けれ

山

たけちほのくしふる峯そあふかるゝ天のをすめの初め思へは
月みればなくさめかたしおなしくはをは捨山の都なりせば
世をすてはよし野の奥に住へきを猶たのまるゝ春日山哉
たのむかな我たつ袖と祈り置て山のかひある峯のけしきを

あし曳の山のなかにも富士の山いかに契て烟たつらん
河

宮はしらしたつ岩根の五十鈴川萬代すまんす原をはるけき
行かへり馴し都のしのはれて音もなつかし賀茂の川浪
折ことに思ひそ出るいつみ川月なまちつゝわたりしものな

當初毎月參仕當社三ヶ年故云

ひえを山岩きりとなす谷川のはやきしるしを猶たのむ哉
秋くれて紅葉なかるゝ立田川はやくみし世や戀しかるらん

野

野へは秋あきはまはきの花盛なしか妻とふ夕くれの空
我袖にくらへてみはや宮城のゝ木の下露は今朝やしけきと
春日野は子日わかなの春のあと都のさかは秋はきの花
鶉なくあはつの原のしのすゝき過そやられぬ秋の夕暮
秋風に野へのけしきをみるはかり身にしむ事は猶なかりけり

關

月を見て千里の外を思ふにも心そかよふしらかはのせき
關守はすくしやれとも清見かた心のとまる波路なりけり
聞わたる關の中にも須磨の關名なとゝめける波の音かな
逢坂の關のせき守老にけり哀とおもふあはれとおおもへ
よと共に過る月日なかきとめて文字の關とはいふにや有らん

橋

鈴鹿川きりの古木のまる木はしこれもやことのれに通ふらん
ひさしくも聞わたるかなかつしかやまゝのつき橋苔生ぬらん
宮古より伏見を出る明かたは先うちわたすひつ川の橋
あはれなり長柄は跡も栲にしな大江の橋の絶せさるらん

東路や勢田の長はしむかしより幾千世へよとわたしそめけむ
海路

ひれふりしむかしをさへや忍ふらん松浦のうらないつる舟人
百つたふ八十嶋かけて見わたせば空こそ海のきはめ成けれ
何となく心そとまるそれとみて漕はなれ行むしあけの松
浪のうへに遙かにうかふあし鴨はとり嶋かよふ船にや有らん
すみよしの松吹風はなくれとも心そとまるすくる舟人

別

春の過秋のくれ行わかれにもとしふるまゝにたへすも有哉
入江こくた舟になひく芦のははわかるとみれと立かへりけり
別てふ名こそつらけれ旅衣立わかれては日數へすとも
かりそめの旅のわかれと忍ふれと老は涙もえこそとゝめぬ
浦波は立わかるともすみよしの松をたのむそたのみ成へき

旅

いつくをも旅ならすやは思ふへき浮世はかりの宿とこそきけ
角田川古郷思ふ夕くれに啼音をそふるみやこ鳥かな
まるふしの柴のしき井に露を置夜や更ぬらん小夜の中山
かきすつるあまのもしほの草枕こゝろそとまるわかの浦風
みやこちは幾日もなきをもしほ草敷津の波は袖にかけけり

山家

春は花秋は紅葉を散まかふたれ山里をさひしといふらん
山里はぬしなは置て漣の音も心ほそさのすむにそ有ける
松のかき竹のはしらの山里は千世もへぬへき心地こそすれ
山里はたへてもいかゝすこすへき松のあらしに鹿も鳴也
爪木こる山路はかりはふみ分て逢か門は跡たえにけり

田家

ますらおは月を友にてもるなれや門田の庵のまはら成らん
長岡やおちほひるひし山里にむかしなかけて田つちにそ行
なしか啼山田の庵は月もゝるおとろかさてそみるへかりける
秋くれぬ今は我見んすみ馴し山田のいはは紅葉ちるらむ
稲葉ふく風もことにそ身にさむき生田の里の秋の夕暮

懷舊

思ひいてはむかしもさらになれとも又かへらぬそ哀成ける
あはれとはみなやの神も照さんむかしの人を忍ふ心な
むかしなは神も哀と思ひ出よ月に山ちな十とせみし人

先人納言毎月參仕當社之事十ヶ年故言

昔たにむかしと思ひしたらちれの猶戀しきそはかなかりける
ふりにけり難波ほり江のみをつくしいつれの年のしるし成蘭

夢

うき世をは何によそへてさとらまし夢そまことの道に有ける
夢路をそはかなき世には頼むへき思ひあはするかたも有けり
夢をなとはかなき物とまとふらん三世の事迄みゆとこそきけ
夢とのみ過にしかたはおもほえて覺てもさめぬ心ちこそすれ
見ても又思へは夢そあはれなるうき世ばかりの迷ひと思へは

無常

常なきは常なる事に馴ぬれはおとろかれぬそおとろかれぬる
春のたち年の暮ぬとかはれともまた世の常とみるそはかなき
くれなまつ朝の露もかたき世に猶さなめなし野への秋風
なないとへ蓮のたち葉の露たにも此世の池は風ちらしけり
何か世を常ならずとはおもふへきなからの橋も名やは朽たる

述懷

かけまくもかしこき豐の宮はしら直き心は空に知らん
いのり置し心のうちをみたらしの末に逢みんことそうれしき
春日山谷の松とは朽ぬとも梢にかゝれ北の藤なみ
世を照す日吉と跡をたれてけり心のやみをはるけさらめや
和歌の浦の道をはすてぬ神なれや哀はかけよ住の江の波

祝

君か代は千世ともさゝし天の戸や出る月日のかきりなければ
きみか代は賀茂の社の姫小松十かへり花そさかんとすらむ
天か下のとけかるへし君か代は三笠の山の萬代の聲
君か代はこやの山に千世を経て不二の高根に立まさるまで
四方の海のとかなれとそ住よしのつものりの浦に跡をたれけむ

右俊成卿五社百首以百花庵宗固本按合了

秋日陪

社壇同詠祈雨百首

和歌

神主從四位下津守宿禰國冬

春二十首

雨中立春

きのふみし雪ひきかへてふる雨のみのしる衣はるは來にけり

雨中子日

れのひする野への小松の春雨に置しら露は千代のかすかも

雨中霞

三輪の山霞にしのふ雨の音も人にしらね春のゆふくれ

雨中驚

深山にはなけともいまた雪降て都は雨にうくひすのこゑ

雨中若菜

春日野は春雨ふりぬあをによしならのあすかちわかな摘てん

雨中殘雪

淋しさをふる春雨に讓をきてあとなき庭の雪そきえ行

雨中梅

白妙の梅のたちえの雨のよにおもひのほかの月をみるかな

雨中柳

春雨にまたぬきとむる青柳の露はかりたにふかね風かな

雨中蕨

萌出る野邊のさわらひみるほとに我も物うき春さめの空

雨中春駒

わか草の露ふみゝたす春駒はあめのうちにもあとや尋む

雨中雉

かり衣ぬれてよふかき春雨に野へのきゝすも露になくなり

雨中雲雀

春雨やはや晴かたに成ぬらんをのつからたつ雲雀なく也

雨中歸鴈

いつはりのたか言の葉そ春雨にかきくもりたる鴈の玉つさ

雨中花

山里のたちよる軒の春雨にぬれたにもせて花をみるかな

雨中苗代

水こめていまこそ種をまきもくのあなしの山田春雨そふる

雨中堇菜

雲雀鳴小野の芝生のつほすみれ此春雨に咲にけらしも

雨中蛙

あら小田も降春雨に水こめてよもきかくれにかはつ鳴なり

雨中欸冬

降雨によその尾上は見えわかつて窓にのそめるやまふきの花

雨中藤

雨に咲たこの浦藤をきあまる露のそこさへさそにはふらん

雨中暮春

なのか入やよひの雲の春雨にさそうくひすのなみたそふらん

夏十五首

雨中更衣

藤の花ぬれ／＼折し衣手をたちかふるけさも雨はふりつゝ

雨中餘花

めつらしき卯月の雨のくもりかなのこれる花の嶺のしら雲

雨中新樹

降雨やたまるひろ葉にあまるらんならのしけみに雫おつなり

雨中神祭

かしは木のもとつはなしみもる雨にぬる共けふや櫛とるらむ

雨中卯花

玉川の卯花くたしふる雨に波そたちそふなみそきえ行

雨中郭公

此水にさなへとれとや時鳥田のもの雨に啼わたるらん

雨中早苗

なをつから袖のみしふをすゝかな早苗は雨にとるへかり鳧

雨中菖蒲

袖ならぬ軒のあやめも置露に玉をはなれぬさみたれの頃

雨中橘

たち花の木すゑの花を舟なからたおる小嶋のさみたれの頃

雨中夏草

五月雨にまさるみかさの高嶋やかちのゝ草もなみやこすらん

雨中蚊遣火

五月雨にもしほはやかし芦の屋の浦のけふりやよはの蚊遣火

雨中螢

五月雨の水かさの底のかまぐちて空にむなしくゆく螢かな

雨中蟬

蛸のなく山かけをいとゝ又暮ぬとみせて雨はふりつゝ

雨中納涼

むすふ手の雫をそへて涼しきは山井の水のむら雨の空

雨中六月袂

もろ人の出る河瀬にふる雨のあかすや浪のゆふかさぬらん

秋二十首

雨中立秋

あさち原秋くるけさのかきくもり雨こそ露のはしめ成けれ

雨中七夕

中々に雨にさはらてかよふらしあさせもしらぬあまの川ふれ

雨中露

虫の音を雨にまぢぬる夕暮はみたるゝあともまたものつゆ

雨中萩

袖にのみふるかとそおもふ只ならぬ萩ふく風の夕くれのあめ

雨中萩

萩かはな下葉色つく秋の雨は音をきくにもれられさりけん

雨中女郎花

降雨に波こす澤の女郎花あまるなみたにたれをこふらん

雨中薄

ふる雨もまた一村そそゝくなるまた野とならぬ庭のすゝきに

雨中荊萱

ひとかたに風にはなひく荊萱のとにかくになる雨のゆふくれ

雨中虫

名にしおへはかれ行色は染てけり寒き時雨のまつ虫のこゑ

雨中鴈

鴈鳴てしくれふる也いと、又山のこのはや色かはるらむ

雨中鵲

かりにとふ道やさばらん鵲啼深草の野の秋のむらさめ

雨中鳴

なのかふす草れに水やこえぬらん澤邊のしきの雨に立ぬる

雨中鹿

いか計萩の下露ふかゝらん鹿なく暮のあきのむらさめ

雨中稻

穂なみにやたのきのさいの上るらむ稻葉に餘る雨のみかさ

雨中霧

かた岡の霧よりつくく村雨やけさくる鴈のなみた成らん

雨中月

心ありてもみちを染る時雨こそ月のあたりにくもらさりけれ

雨中擣衣

衣うつよさむの雨に山姫のにしきの袖もおりかさぬらし

雨中菊

降雨にさくの下まさをる也くむにつきせぬよはひしれとや

雨中紅葉

色そむる時雨とみすは立田山もみちへたつる雲やうからん

雨中暮秋

冬をさていかに分てか浮雲の秋にかゝりてまつしくるらん

冬十五首

雨中初冬

都よりひらの高根の浮雲をみれば時雨る、冬は來にけり

雨中落葉

木の葉ちり時雨降よそめてうき寝よといさめし人もなき身に

雨中霜

枯もせず色なもかへぬ樹葉の霜にかされて降しくれかな

雨中寒草

萩の葉の末こそ風の吹さえてはや冬かれにける霜かな

雨中寒松

雪けなる時雨吹しほる風にまつ下をれぬへくなひく松かな

雨中氷

さはた河氷る朝けに行人の猶袖ぬれて降しくれかな

雨中千鳥

千鳥には馴てれぬへき須磨の浦時雨やつらきよはの關守

雨中水鳥

龍田川いかに時雨をはらひてか鴨の青羽の紅葉さるらん

雨中網代

網代木の浪ふきたつる山風にすくる時雨の行衛しらすも

雨中霰

そめもあへず外山の正木風さえて霰ましりに降時雨かな

雨中雪

うつもるゝ宿の時雨の庭たつみしたこそとけれ雪のうは水

雨中鷹狩

雪をこそうちばらひても狩衣とたちの雨そせんかたもなき

雨中炭竈

冬さむくしくるゝまゝに炭かまの煙をそへてくもる空かな

雨中爐火

降雨のもりてきえぬと思ふまで影かすかなるれやのうつみ火

雨中歳暮

ふりく／＼て空にや雪のつきぬらん雨に成ぬるとしの暮かな

戀十首

寄雨初戀

わか袖に冬の時雨はしりそめぬいつ秋風にあはんとすらん

寄雨忍戀

人しれぬ戀のくもりを便りにてなみたの雨のふらぬ日そなき

寄雨不逢戀

哀しれ長きよつらき窓の雨のうちまかせたるおもひならぬを

寄雨契戀

いつ迄かふるとも雨を契りけんなきたる朝といとはるゝ身に

寄雨祈戀

戀衣もとの袖こそほさゝらめみたらし川に雨はふりきぬ

寄雨待戀

これ程のかことはなきにこぬ人をこよひの雨になにか待らん

寄雨逢戀

降雨にとふこそいとゝなさけなれ月をたにみす歎かまし身を

寄雨別戀

まつ背にいひしかはやと分れちの雨にも人のさはらさるらん

寄雨絶戀

山の端にしけき時雨もある物をめぐりあはてもふる月日かな

寄雨恨戀

わかうらみ末もとをらぬ涙かな過る時雨のあめもある世に

雜二十首

寄雨曉

明はてぬ尾上の雲の村しくればなれもやらて降よなりけり

寄雨松

たけくまの雨にたちよる松笠もおなし雪の宮城のゝつゆ

寄雨竹

嵐ふく露も葉わけにこほれけり籬の竹のいさゝむらさめ

寄雨鶴

あふみちのうれのゝたつの聲はして明ぬや雨の曇るなるらむ

寄雨苔

緒捨山あらそふ横の村時雨思はぬこけもさゝこそ染らめ

寄雨山

降雨ももらぬこすゑのしけみかなかさとり山に笠とらぬまで

寄雨河

もとの瀬はなをこそみゆれあすか川浅き淵ある五月雨の頃

寄雨野

あさちふの小野の夕立空にさへしのをたれてもふれる雨かな

寄雨關

清みかた行へきいそのしほかれに猶關をもる五月雨のなみ

寄雨橋

待人のさそさばるらむ雨のよにあはれとは思ふ宇治の橋ひめ

寄雨海

五月雨のもらぬ芦屋のかひもなしやかぬに消る海士のも鹽火

寄雨旅

富士の根そ雲にかくるゝ大井川雨にやすらふあたり日數に

寄雨山家

いかばかり草の庵の雨のよにしきみかはらの露けかるらん

寄雨田家

まはらなる庵をもしらす秋の田の雨おそろしなうれしと思ひけるかなとい

寄雨夢

過やすきれ覺の雲のはては又なのれ夢にもなる時雨かな

寄雨懷舊

かしこしな時雨降をけるならのはのひろくあつめし數嶋の道

寄雨述懷

言の葉の雲のうへまできこえよと身はしもなから雨いのる哉せ

寄雨神祇

神よかみ民の草葉に雨そゝけ物思ふ人の袖はほすとも

寄雨釋教

神垣やたむくる法のことはに露あまるまで降雨もかな

寄雨祝

打はへて時をたかへず降雨におさまる御代を空にしるかな

爲兼卿鹿百首 春日社法樂

春二十首

立 春

春日山春立くらしさなしかの朝行峯に霞たなひく

子 日

さなしかも春日やすらん春日野の小松かはらにけさそむれ行

鶯

秋はなのか心にわきし鹿までも鶯の音に春を知らし

霞

朝々に霧わけなれしさなしかもかすめる空の春やさひしき

若 菜

〔春日野の懸〕雪まのわかなつみ分て鹿そむればむ春日のゝ原

殘 雪

雪まのわかなつみ分て鹿そむればむ春日のゝ原

梅

□□□□むらゝ見ゆる雪の上に朝はむ鹿の跡そのこれる

柳

□□□□にや心なうつす梅かえの匂ふあたりは鹿そばなれぬ

早 蕨

鹿の立となちの野への柳かけなひくけしきも春そのときき

櫻

いとはやもゝえ出にけりさなしかのあさる岡への春の早蕨

春 雨

あつさ弓春の日あかね櫻かりわけ行末に鹿そおとろく

春雨に花ちる山のさなしかは木の葉しくれし秋や忘れぬ
春駒

若草を妻とやともにたのむらん駒にまされる春のさなしか

歸鴈

秋霧をまたわけてとや契らむ鹿立峯にかへる鴈かね

呼子鳥

なしか立山路の末に呼子鳥誰をよふとかさのみ啼らん

苗代

せきかくる苗代水に立しかはなのか影にや友をしるらん

葦

さなしかもつねより野へやなつかしき葦花さく春の此頃

杜若

かきつはた花咲比はさは水の分行鹿も影そへたつる

藤

□□みぬたのみをかくる春日山鹿もあれぬか北の藤波

歎冬

さなしかもいはてやおしむ春暮る名残の色の山吹の花

三月盡

鹿はかり野山をわくる身ともかなわかるゝ春をしたひ送らむ

夏十五首

一首不足

更衣

衣手もうすきにうつる今よりや鹿も夏けにかへんとすらむ

卯花

山かけや野へにつゝける道なれば卯花かけに鹿も立なり

葵

秋山にすむやなしかも葵草かさすみあれのけふは知らん

郭公

郭公こゑをたつて分ゆけはさき立鹿の跡を残れる

菖蒲

もろ人のあやめひくてふ沼水に鹿もけふこそおり立てけれ

早苗

さなへとするそのゝ田子の聲々におとろく鹿はみ山にそいる

照射

五月やみ尾上にみゆる火のかけは山のさつおの鹿まつらしも

五月雨

歌調

盧橘

かほる香におのへの鹿も立そよるたち花にほふ山陰のやと

螢

鹿のふす夏野の草の露までも螢のかけに光をそみる

蚊遣火

かやり火の烟はよはる夕暮の月出る峯に鹿の入ぬる

蓮

はちす葉も花さくほとに成にけりなしか妻こふ秋ちかゝらし

水室

氷室山すゝしき陰とたのみてや木の下草に鹿もふすらん

泉

やとにせく石まの水の涼しさに鹿もつねにそ立ならしける

六月被

御殺川夕なみかけて立風も鹿の啼へき秋いそく也

秋二十首

立秋

秋來ぬとけふふく風にをしかふす野原の草も今や露けき

七夕

七夕もあふ夜になればさなしかの妻戀すへき時は知らん

萩

をきあかす白露おもみさをしかの分行野へに萩そかたよる

女郎花

をのか妻おもひなしてや女郎花露けき野へに鹿は臥らん

薄

をしかなく野への尾花の上よりもうれへの袖そ露はひまなき

菊 萱

露ながら亂れそまさるさな鹿の鳴音もしけき野へのかるかや

蘭

小男鹿の妻とふ野邊の藤はかましほれて露のなかぬ日もなし

萩

萩はらや秋に吹てふ風の夜に妻戀すらし鹿そなくなる

初 鴈

はつ鴈も今そ啼なるさなしかのしからむ萩の色かはるころ

鹿

三とせふる秋のうれへは春日野に音に鳴しかも思ひ知らむ

露

春日野の露も色そへわかうれへ鹿もあはれとおもひしるまで

霧

鹿よりも音そなけれける三とせまで雲井へたつる秋霧の空

槿

をしか立野原は庭もひとつにて垣ほにはへる朝かほの花

駒 迎

さなしかもむれて行也望月の駒ひきつゝあふさかの道

月

鹿はかり鳴音あはれとみかさ山さしもくらぬ月は知らん

搗 衣

なく鹿もきぬたの音も打たえてねられすなけく友と成ぬる

虫

たゝに啼むしのねよりもさなしかの妻戀するを思ひそふらん

菊

さをしかも花にやめつる秋ふかき山路の菊の陰になく也

紅 葉

妻こひの鹿の音聞ゆ時雨ふる山の木の葉も色まさる比

九月盡

此篇もまた暮はつる身のうさは鹿もともにそ音を啼にける

冬十五首

一首不足

初 冬

冬のきて木のは吹しく山陰に鹿も涙やもろく落そふ

時 雨

むら時雨降まさる頃は山風も鹿の鳴音もひまなかりけり

霜

さなしかのふす野の尾花末ふして霜置まざるけさの寒けさ

霰

霰ちる野風はけしく小男鹿のなにかふしともふしうからまし

雪

雪ふかきみ山の鹿も我はかりうつもれまざるものはおはし

寒 芦

冬枯の澤へにたてるあしかもふしける鹿そ風におとろく

千 鳥

さは川に千鳥しは鳴春日野の鹿もこよひの霜や寒けき

氷

春日山やました水も氷る夜に鹿のうは毛も霜むすふらむ

水 鳥

さる澤の池邊に立るさなしかの影におとろく鴨のむら鳥

網 代

あしろ木によるてふ波の立居にも世を宇治山は鹿やすみうき

神 樂

三笠山さよ更かたの神あそび庭火のかけに鹿ぞ立よる

鷹 狩

御狩野やたちをあさるかり聲におとろく鹿ぞ立のきにける

炭 竈

さなしかの跡にまかせて炭竈の烟わけみるおほ原の山

歳 暮

今年さへさてや暮なん春日の、鹿もあはれをかけよと思ふに

戀十首

初 戀

こひそむる心よりしてさなしかの音に啼はかり思ふとはしれ

忍 戀

さを鹿は音に鳴頃も我はかり思ふ心をしのひやはせん

不逢 戀

鹿はかり聲にたつともあはれとはいはぬかも逢事なしに

初逢 戀

なしかふす野原の秋の初尾花かはしそめても袖そ露けき

後朝 戀

時しもあれ鹿も鳴なり衣々になりわかれ行しのゝめの空

逢不逢 戀

又もやとたのみし中はむなしくて身を秋風に鹿も鳴なり

旅 戀

なしか啼たひれの野への露の床いも戀あかし夢もむすはす

思

音にたて、鳴やを鹿も我はかり思ふおもひはおよひしもせし

片 戀

身をしればあはれそふかきさを鹿も心かよはぬ妻やこふらん

恨

なしか啼野原のまぐす秋風にうちみても猶あかね比哉

雜二十首

曉

身のうれへ心にあまる曉のれさめこと、ふよその鹿のれ

松

みかさ山神の恵を松かけに鹿よりもなを音はなけれり

竹

うきふしはなれもやしけさゝ竹の夜をかさねても鹿の鳴覽

苦

なくら山苔の岩かぬふみならし鳴やなしかも世中やうき

鶴

春日野の鹿もあはれめ和歌の浦に道まとふ鶴の獨鳴音を

山

みかさ山神たにすつなさをしかの音に鳴よりも深きうれへな

河

袖ぬらすあはれは鹿も思ひしれたえて影見ぬさほ川の水

野

ふみわけし道たえはつる春日野に又もや聞んさをしかの聲

關

鹿はかりかよひなれまし春日野にいかなる關そわか道もなき

橋

はし姫も月に鳴音やかよふらん宇治のわたりのさをしかの聲

海

月にこく夜舟はるかに音すみて鹿のねおろす武庫の山風

旅

鹿の音も草の枕もかなしきは都こひしき松風のよは

別

鹿の音もあはれとかなく古郷をわかるゝ跡のしのゝめの空

山

松のかせ鹿の鳴音も聞わひぬ浮世におなし山かけの庵

田家

世を秋に思ひ侘ぬる時しもあれ門田の面に鹿も鳴也

懷舊

すみなれし雲井をこふる月の夜に哀をそへて鹿も鳴也

夢

雲のうへにかよふと見つる夢たにも鹿の鳴音に又たえにけり

無常

鹿のなく聲のうちに常ならぬ世のことはりは離れさりけり

述懷

あやまらぬ身をやはすてんことはりを哀さためし春日のゝ鹿

祝

みかさ山君のさかへな松風に鹿も千とせの聲かよふ也

此百首は春日社にて爲兼卿夢想の事ありて一時に鹿の百首をよみて奉納せられ侍ると也

永和四年五月日

右百首借三持明院三位 基春卿
右兵衛督 本一書寫之者也。

明應九年季秋廿日

以ニ中御門大納言 宣秀卿 自筆本一書寫。

享祿元年十月晦日

倉部下

花柳

右以松岡辰方本書寫校合畢

南都百首并序

後成恩寺關白兼良公

たましきの平のみやこなをさすらへ出て。あなによしならの京にすまぬせしよりこのかた。六とせの春秋をくくりむかへて。きのふの夢のまたさめぬかとうたかひ。ひとつ空の月日をあふき見ては。むかしの友にむかへるおもひをなせり。三かさ山のふもとのちりにまじはり。天か下のしつかならむことないのり。春日野のとふ火のかけなのそみて。雪まのわかたつまいに。さまたけなしといへとも。七十あまりのなみのしはのふるはかりのおもひてもなく。千とせをふへき松ならぬ身は。なけきのもとをばなれかたし。武士の家にし生れされは。弓馬の道にたつさはるへきにもあらず。法の師の門をはこゝろさせとも。いたづらにあかし暮し。なをさりに起ふすひまくには。からの歌やまの言の葉をもてあそひて。花の朝月の夕をなくさみにける。是によりて。堀川院の百首の題をえらひて。大和の國の名所の名によせつ。硯の水のあさきこゝろさしにまかせて。くさのはやしにくちぬること葉を。かきあつむるといふ事しかなり。

春二十首

立春

あすか河なかれてはやき年波もけふを春とや立かはるらん
年日
れのひするまゆみの岡の姫小松ひくやまとゐのはしめ成蘭

霞

杉たてる門をや春もたつれけん三輪の山邊のけさはかすめる

鶯

春といへは出るひかりにさそはれてあしたの原に來鳴鶯

若菜

〔歌闕〕

殘雪

とのへもり誰跡つけて出つらんみかきか原の雪のむら消

梅

泊瀬川はやくみしよの古里にむかしわすれぬ梅かゝそする

柳

玉柳六田のよとに糸はへてわかあゆつるとみゆる春哉

早蕨

うちけふる若草山の下わらひ木のめも春と今やもゆらん

櫻

昨日けふ峯にも尾にもしら雲のたつたの櫻今さかりかも

春雨

こけむしろしくふれる春雨は青根か峯を色まさりける

春駒

小篠原なつみし駒もひきかへつ日のくま川の春のけしきに

歸鴈

霞しく雪けの澤をたつ鴈のまた古郷はさえかへるらん

呼子鳥

なけやなけさほの山邊のよふこ鳥はゝそも春にひこはへに鳧

苗代

いくしたて引やみしめの苗代にふるのわき田も春や知らん
堇

一夜れし露たに袖はしほれしを雪けの岡につむ堇哉

杜若

猿澤の池の玉もやへたつらんそこにはさかぬかきつはたかな

藤花

藤なみのかゝる末葉もめくみけり南のきしにたてし誓は

款冬

ぬししらぬ花染衣春くれて口なし山にさけるやまふき

三月盡

けふとのみ春に手向の山さくらむへこそ花はぬさと散けれ

夏十五首

更衣

立かへぬ雲の衣は春なからつなきて見ゆる天のかく山

卯花

咲にけり神のみむろの櫛葉にしらゆふかくるきしの卯花

葵

神山のあふひはよその契りにて夜々かけし葛城のはし

郭公

聞つともいはせの杜の郭公人傳ならぬ一聲もかな

菖蒲

年をへて五月のけふはなたえぬ玉あゝの沼にあやめひく也

早苗

すか原や伏見のさなへほのくくと明る田面にそよくなそまつ

照射

明るとやともしするおのわかるらんくらはし山によこ雲の空

五月雨

五月雨は水分山の名もしるく雲におちそふ瀧のしら浪

橘

いにしへをみきのつかさの袖の香や奈良の都にのこる立花

螢

山陰はまたよや残る夏簀河かはと明てもとふ螢かな

蚊遣火

拂ひえぬうちのはの里のかはしらに煙たてそふよるのあくたひ

蓮

たをやめの花のすかたの池水に舟なうかへてとるはちす哉

泉

秋はけふまた夏なから辰の市やうるまの清水むすふ袂に

氷室

春日山日かけはもらて氷室もるしけみか下そ夏の外なる

六月萩

夏はつる御萩やうけし神なひの杜の秋風ゆふかけて吹

秋二十首

立秋

三笠山きりの一葉もおちそめて天のしたには秋風そふく

七夕

七夕の手向にさらすけふはかりなに山姫の名をやかまし

萩

花すりの衣は露にみたるともなわけゆかむまのゝ萩はら

女郎花

繪にかけるかたちのをのゝ女郎花心うこかす秋風そふく

薄

かりれする手枕の野のしの薄くるれば露や先むすふらん

菊 萱

風かよふあきつの小野のかるかやの亂れて物はわれを悲しき

蘭

藤はかま春のゆかりの花の名におほ川のへを秋そ匂はす

萩

秋風をならしの岡にならしてもそよとおとろく萩の音哉

早 雁

飛鳥のはかひの山の山かせもはらふか峯の遠のしら雲

鹿

さなしかの妻とふ聲も高圓の尾上のまはき今さかりかも

露

物おもふ袖にもさそなしけ岡の草葉にあまる秋の夕露

霧

宮のたき霧のとはりのひま見えておつる白玉はもる人もなし

權

あさかほの花にも霧の晴まよりみそめのさきの俤そたつ

駒 迎

春日野のおとろの道はわけすとも鹿毛なる駒もけふやひく覺

月

あひにあひて露の光も玉きはる内の大野の月そさやけき

搗衣

里人のうつや衣もたゆむらん十市の山に月かたふきぬ

虫

夜さむそふ秋ははつせの山風になをもつれなき松虫の聲

菊

みゝなしの池のそかひに咲にけりなにをか音に菊のしら露

紅葉

時雨ふる三輪の檜原をかきわけて秋や紅葉のかさし成らん

九月盡

はつせめか賤はた帶の長月もくるればけふに老めくりつゝ

冬十五首

初冬

かしは木の杜はくち葉に埋もれて道こそなけれ冬は來にけり

時雨

ましてはしさのゝわたりの夕時雨やとゝふ三輪の里になる迄

霜

自妙の雲間の虹は中絶て霜をきわたす久米の岩橋

霰

神南備のあさ篠はらに降霰ひろはぬ玉や世にのこるらん

雪

玉くしけ三室の山の明るよにかゝみをかけてふれる白雪

寒 芦

冬の夜はたく火にせむとしめし野に澤へのあしも霜枯にけり

干 鳥

日影の清き川原に小夜更て千鳥友よふさほの浦かな

氷

きのふけふ猶さえまさる飛鳥風七瀬のよとや氷はてなん

水鳥

きやすみの池いかゝみの恨あれやつかはぬ鳥の涙のうきれば

網代

瀬を早みよし野の川の網代木にしらゆふ花のさかぬまそなき

神樂

庭火たきうたふあなしの山かつら曉かけて神あそひせん

鷹狩

かたの野のみゆき跡ある君か代に逢や嬉しきやかたなの鷹

炭竈

雲よりもたかまの山に立けふりよそにもしるし峯のすみかま

爐火

消ぬるか春より冬になら山のくろ木のこやの夜半の埋火

歳暮

まきなかく丹生の河瀬の筏しのさこそはとしの暮いそくらむ

戀十首

初戀

けふよりは袖ふる山のみつ垣もしらぬためしに人をこひはや

忍戀

もらすなよ夕ゐる雲の下比山谷にしつめる鳥の一聲

不逢戀

日にそへて思ひます田のいけるよの爲にぬねはさそな苦し

初逢戀

流れてのうき名思へはみなれ河みなれそめしそ今はくやしき

後朝戀

こりすまに父はまつちの山なりと濁りやせまししのゝめの月

逢不遇戀

二本のすきにしかたそしのはるゝふる河のへに思ふ心は

旅戀

旅れする枕のたちのつは市にかへてうき身の逢夜しらせよ

思

かるもかく猪かひの岡の草なれや起ふす床の露のみたれば

片戀

うしつらし二上山の峯の雲こなたはかりになと時雨らん

恨戀

とはゝこそいはせの山の秋風にしたはふくすの露こほるとも

雜二十首

曉

月やとるとよらの寺のえのは井にむすひもあへぬ曉の袖

松

名におひて高木の山の松なれや空のみとりに枝をかはせる

竹

うつり行鷺山の春風は伏見の竹やまつなひくらん

苦

みよし野の奥の岩ねにすむとてもこけの葉に袖はぬれなん

鶴

幾年をふる野の澤になれぬらん今もおりゐる鶴の毛衣

山

雲とのみ御舟の山の花ならはつれにあらなん春はすくとも

河

むかしみしきさの小河はかはれと我とし波そ立かされぬる

野

葛城やたかまの草にあらずともしめさす野へは後もきてみん

關

よしの山花の關守櫻とは人をそとむる春はとまらず

橋

さほ川に橋うちわたりし我家のむかしの跡をみるそうれしき

海路

立田山あらしなむみ大伴のみつのとまりに舟を休らふ

旅

大和路やすみた河原に宿からむ遠く聞けるほとにはあられと

別

よしさらはかたみとなれあかすしてわかるゝ袖の岡越の道

山家

まさもくの檜はらくもりて峯深き月にはうとき山の下庵

田家

吹風にひかぬなるこをひくて山麓のひつちもる人もなし

懷舊

かきつめし大和言のはちりくにならの里人名のみふりつゝ

夢

曉のかれのみたけにやとからんこむよをかけて夢やさめぬと

無常

あたし野の朝の露の消ぬまになになむさほる心成らん

述懷

くるまかもことなしそ思ふ神のます春日の原に家居せしより

祝

君かためとよなか姫の跡たれし玉木の宮に千世やかそへん

右百首一條禪閣詠也。以_二自筆之本_一書寫訖。于時文明第

五仲秋下旬候。

右南都百首以百花庵宗固本書寫校合了

群書類從卷第一百七十七

和歌部三十二

道助法親王家五十首和歌

題

春十二首

初春 雪中鶯 橋邊霞 行路梅 春月
岸柳 旅春雨 遠歸鷹 山花 關花
庭花 河欸冬

夏七首

社卯花 早苗 里杜鵑 岡子規 夜盧橘
籬罌麥 江螢

秋十二首

早秋 荻露 荻風 尋虫聲 山家月
野徑月 船中月 曉鹿 河霧 擣衣幽
夕紅葉 殘菊句

冬七首

朝時雨 竹霜 池水鳥 鳴千鳥 松雪
湖雪 惜歲暮

戀六首

寄雲戀 寄露戀 寄烟戀 寄草戀 寄鳥戀
寄枕戀

雜六首

曉述懷 閑中燈 山旅 海旅 野旅
寄松祝

作者

御詠 入道二品道助親王 後鳥羽院勅 二十二首
春宮權大夫實氏 常磐井人 道前太 七首
參議藤原雅經 十九首
正三位藤原家隆 二十八首
從三位藤原知家 三首
中宮亮藤原範宗 四首
右大將公經 西園寺入道前大政大臣 九首
民部卿藤原定家 二十七首
正三位藤原家衡 一首
從三位藤原保季 三首
法印權大僧都定範 七首
中務權大輔藤原信實 二首

散位藤原行能

一首

法印權大僧都幸清

十一首

法橋覺寬

一首

已灌頂阿闍梨隆昭

十六首

僧經乘

五首

但馬守源家長

四首

宮内少輔藤原光經

三首

藤原孝繼

八首

河内守藤原秀能

二十八首

僧俊孫

六首

春

初春

春とゝもに立にけらしな朝かすみきのふの山そ遠さかりぬる

御詠

たちそむる霞の衣うすけれと春きてみゆる四方の山端

公經

ふる雪はことしもわかす久かたの空にしられぬ春やきぬ覽

實氏

春の色とたのむまてやはなかつるいふばかりなる山の霞な

定家

久かたの天の岩戸のむかしよりあくれば霞春はきにけり

雅經

朝日かけさしてそれとはなけれども空よりしるき春の色かな

家衡

よし野川こぼりのひまにとけにけりうち出る波の花のした紐

家隆

朝みとり初しほ風の波の上に春さへこゆるす点の松山

保季

知家

春日の、雪のした草色に出てあともみとりに春はきにけり

定範

けさはまた山も霞になりやうていふばかりなる春の明ほの

範宗

山のはのかすみばかりなみよしの、雪まの草も春やきぬらむ

信實

春立て峯の朝日の出しより身にしみよはる山の下風

行能

山姫の霞の衣はるたてはきえれとうすき峯のしら雪

幸清

あさ霞とを山もとに立たみの里をもわかす春はきに鳧

覺寬

春の色のいたり至らすなへて霞にけりなよもの山端

隆昭

いつよりの春の色ともみよしの、草のはつかに雪ま分らむ

經乘

朝ほらけ岡への松のかすめるは千世のはしめの春やきぬらん

家長

自妙のみのしろ衣うちはらひ春ともわかす雪は降つ、

光經

玉しきの都に春は立にけりあつまのかたや先かすむらん

孝繼

たちそむる霞の衣風にうすみなにさは姫の春いそく覽

秀能

春くれは永なかるゝあなし河檜原の雪やとけはしむらん

俊 孫

はるたつと誰みよし野にかきりけんその山となき今朝の霞を

雪中驚

梅かえにこそ宿とふ驚のはつ音も寒く淡雪をふる
うちきらしたまらぬ雪の花のえにうつりにけりな驚のこゑ
春やとき草葉もみえぬ雪の中にむすほふれたるうくひすの聲
松のはは今もみゆきのふる里に春あらはるゝ驚のこゑ
はるとなく初ねはかりそ驚の羽風を寒みゆきは降つゝ
春やときまた降雪を花とみてなのか古巢に驚そなく
うくひすの雪の花かきぬひ侘ていつれを梅とねれて鳴らん
なこりふくあらしや寒き驚のこゑする山にきえぬしら雪
今はとて春をいそかす驚のなげともきえぬ山のしらゆき
何ことに春をしるらむうくひすの雪のふるすを出てこそなけ
うくひすのこゑするかたをたつねれはまたしら雪の谷の通路
またさかぬ軒はの梅に驚のこつたひちらす春の淡雪
雪ふかき谷の驚をのれのみ鳴とも春としる人やなき
ねぬる夜のはかなき夢も驚のなく音に氷る雪の明ほの
驚の聲するかたを尋ねてもわかなつむへき野邊の雪かは
梅かえにかゝれる雪を花とみて宿ありけりときある驚
谷の戸やまた春寒き雪まよりはね白妙に出るうくひす
あは雪のあはれ我みはふりゆけと春あらたまる驚のこゑ
山ふかみ猶空さえて降雪に春もまれなるうくひすの聲
はつ音いた雪につゝめる驚のなみた吹とけ春の谷かせ
うちとくる涙もこほる雪のうちにまたかきこもる驚のこゑ
ふるゆきをさそふはかりの花とやは匂はぬ風にうくひすを鳴

橋邊霞

あとたにも今はなからのはし柱かすむあたりの春のゆふ暮
なかめても契り朽せぬ春なれやこそまかすみしまゝの繼橋
里人のよわたる音はたえもせず霞のまなる淀のつきはし
かけたえて下行水もかすみけり濱名のはしの春の夕くれ
しもとゆふかつらき山に春やくる霞とたえぬくめの岩はし
岩橋のとたえも見えず春くれはかすみわたれるかつらきの山
行人を思ひを渡る東路や霞かゝれるさのゝ舟はし
聞わたる跡はなからのはし柱名をは霞もうつまさりけり
かつらきや神のこゝろもやすらひに猶よをこめて霞む空哉
あつまちや風もなきたる朝ほらけ霞たな引さのゝ舟橋
山のは霞のひまにみわたせば夕日にのこる峯のかけ橋
橋はしらたつるやいつこ春の日のなからの濱は霞こめつゝ
明ねれと猶やわたさむ春かすみたな引山のかつらきの橋
よしさらは霞もはてよ今はたゝをうち橋の跡たにもみし
橋姫のまつらんかたもへたつらしかすみ吹とけうちの河かせ
岩橋の神は春とを契りましあくるもみえず霞む山端
春たてはかすみの衣かされてやこね夜はぬらん宇治のはし姫
みわたせば霞の波にうきしつみかつみかくるゝせたの長はし
白たへの濱名の橋もみえぬまで遠かたこめて立霞かな
たえにけるくめちのはしのなか空も霞を渡る春のあけほの
春くれは霞たな引雲まよりたえゝみゆる山のかけはし
とたえにしくめの岩橋今さらに霞を渡る春の明ほの

行路梅

みちのへに行かたしたふ梅のはなありとやこゝにゝほふ衣手

散位藤原行能

法橋覺寬

僧經乘

宮内少輔藤原光經

河内守藤原秀能

一首

一首

五首

三首

二十八首

法印權大僧都幸清

已灌頂阿闍梨隆昭

但馬守源家長

藤原孝繼

僧俊孫

十一首

十六首

四首

八首

六首

春

初春

春とゝもに立にけらしな朝かすみきのふの山そ遠さかりぬる

御詠

たちそむる霞の衣うすけれと春きてみゆる四方の山端

公經

ふる雪はことしもわかす久かたの空にしられぬ春やきぬ覽

實氏

春の色とたのむまてやはなかつるいふばかりなる山の霞を

定家

久かたの天の岩戸のむかしよりあくれば霞春はきにけり

雅經

朝日かけさしてそれとはなけれども空よりしるき春の色かな

家衡

よし野川こぼりのひまにとけにけりうち出る波の花のした紐

保隆

朝みとり初しほ風の波の上に春さへこゆるす点の松山

知家

春日の、雪のした草色に出てあともみとりとに春はきにけり

定範

けさはまた山も霞になりやらていふばかりなる春の明ほの

範宗

山のはのかすみばかりをみよしの、雪まの草も春やきぬらむ

信實

春立て峯の朝日の出しより身にしみよはる山の下風

行能

山姫の霞の衣はるたてはきえれとうすき峯のしら雪

幸清

あさ霞とを山もとに立たみの里をもわかす春はきに鳧

覺寬

春の色のいたり至らすをしなへて霞にけりなよもの山端

隆昭

いつよりの春の色ともみよしの、草のはつかに雪ま分らむ

經乘

朝ほらけ岡への松のかすみめるは千世のはしめの春やきぬらん

家長

自妙のみのしろ衣うちはらひ春ともわかす雪は降つゝ

光經

玉しきの都に春は立にけりあつまのかたや先かすみらん

孝繼

たちそむる霞の衣風にうすみなにさは姫の春いそく覽

秀能

春くれは永なかるゝあなし河檜原の雪やとけはしむらん

俊 孫

はるたつと誰みよし野にかきりけんその山となき今朝の霞を

雪中驚

梅かえにこそその宿とふ驚のはつ音も寒く淡雪そふる
うちきりしたまらぬ雪の花のえにうつりにけりな驚のこゑ
春やとき草葉もみえぬ雪の中にむすほふれたるうくひすの聲
松のはは今もみゆきのふる里に春あらはるゝ驚のこゑ
はるとなく初れはかりそ驚の羽風を寒みゆきは降つゝ
春やときまた降雪を花とみてなのか古巢に驚そなく
うくひすの雪の花かきぬひ侘ていつれを梅とぬれて鳴らん
なこりふくあらしや寒き驚のこゑする山にきえぬしら雪
今はとて春をいそかす驚のなけともきえぬ山のしらゆき
何ことに春をしるらむうくひすの雪のふるすを出てこそなけ
うくひすのこゑするかたをたつぬれはまたしら雪の谷の通路
またさかぬ軒はの梅に驚のこつたひちらす春の淡雪
雪ふかき谷の驚をのれのみ鳴とも春としる人やなき
れぬる夜のはかなき夢も驚のなく音に氷る雪の明ほの
驚の聲するかたを尋れてもわかなつむへき野邊の雪かは
梅かえにかゝれる雪を花とみて宿ありけりときある驚
谷の戸やまた春寒き雪まよりはれ白妙に出るうくひす
あは雪のあはれ我みはふりゆけと春あらたまる驚のこゑ
山ふかみ猶空さえて降雪に春もまれなるうくひすの聲
はつ音いまた雪につゝめる驚のなみた吹とけ春の谷かせ
うちとくる涙もこほる雪のうちにまたかきこもる驚のこゑ
ふるゆきをさそふはかりの花とやは匂はぬ風にうくひすを鳴

橋邊霞

あとたにも今はなからのはし柱かすむあたりの春のゆふ暮
なかめても契り朽せぬ春なれやこそもかすみしまゝの繼橋
里人のよわたる音はたえもせず霞のまなる涯のつきはし
かけたえて下行水もかすみけり濱名のはしの春の夕くれ
しもとゆふかつらき山に春やくる霞とたえぬくめの岩はし
岩橋のとたえも見えず春くれはかすみわたれるかつらきの山
行人を思ひそ渡る東路や霞かゝれるさのゝ舟はし
聞わたる跡はなからのはし柱名をは霞もうつまさりけり
かつらきや神のこゝろもやすらひに猶よをこめて霞む空哉
あつまちや風もなきたる朝ほらけ霞たな引さのゝ舟橋
山のは霞のひまにみわたせば夕日にのこる峯のかけ橋
橋はしらたつるやいつこ春の日のなからの濱は霞こめつゝ
明ぬれと猶やわたさむ春かすみたな引山のかつらきの橋
よしさらは霞もはてよ今はたゝよをうち橋の跡たにもみし
橋姫のまつらんかたもへたつらしかすみ吹とけうちの河かせ
岩橋の神は春とそ契らましあくるもみえず霞む山端
春たてはかすみの衣かされてやこぬ夜はぬらん宇治のはし姫
みわたせば霞の波にうきしつみかつみかくるゝせたの長はし
白たへの濱名の橋もみえぬまで遠かたこめて立霞かな
たえにけるくめちのはしのなか空も霞を渡る春のあけぼの
春くれは霞たな引雲まよりたえゝみゆる山のかけはし
とたえにしくめの岩橋今さらに霞を渡る春の明ほの

行路梅

みちのへに行かたしたふ梅のはなありとやこゝにゝほふ衣手

匂ひのみみちゆきふりのむめの花それともみえず春のよの闇
 みちのへのかた岡山の梅のはなたちよるはかり春風そふく
 玉ほこの行てはかりなむめの花うたて匂ひの人したふらむ
 分やらぬにほひそふかき梅かえの花のゆきゝも道まとふかに
 春かせのゆく袖にほふむめの花宿こそしらけ香やはかくるゝ
 誰袖のゆきゝもわかし玉ほこのみちてにほへる梅の下かせ
 行てこそとはましさとと梅かゝを先吹なくる春の山かせ
 みち野へのいつの人まにむめの花うつるふはかり風の吹けん
 さとはいてぬおほえぬ袖のうつりかを嵐にかこつ梅のした道
 梅花にほふさかりそ道のへのしつか垣れも人にとはるゝ
 ふめはおし花は行てに故郷のみかきか原のむめの下陰
 春かすみ朝たつ袖もかほれとや梅さく山にふくあらしかな
 玉ほこの道ゆきふりの梅のはなきえすは人の跡やとふ寛
 吹なくるかせをはたのむ道のへの行てにあかね梅の匂ひを
 くらふ山やみにもしるき梅かゝになかゝ春は道まとひけり
 みちのへの老木の梅のいにしへにたか行袖か匂ひそめけむ
 人はいさまちもやすらん梅のはな行過かたき香に匂ひつゝ
 みちのへの垣れにさけるむめの花たか袖わかすにほふ比かな
 道のへの野中の梅の春風にたかなをさりのとても残らす
 わきもこかなれし袂にくらふ山やみに越れと梅のかをする
 もる人の行かふのへの春かせに衣手わかすにほふむめかゝ

春月

白妙の花よりほかは雲もなし霞にかき春のよの月
 花さかぬ枝にもかけやたまる覽木のも春の山のはの月
 山のはに花のかゝみとみる月もちりのまかひに霞む比哉

やまのはも霞の外の花のかにこの比ふかきいさよひの月
 大かたの空にそ春の色をなす霞にかすむはるのよの月
 ときはなる松はみとりの色そへてひとしほ霞む春のよの月
 雲はなをよもの春風吹はらへ霞にゆるすおほる月よそ
 おほかたの春はおほるの山のはにこよひかすまぬ月を見る哉
 けふも猶花はつれなき木のもとにをのれうつるふよはの月哉
 かつらきや明るはおしき山のはの月にかゝれる花のうす雲
 あはれしる人やなからん霞むよの月と花とは春を忘れす
 立渡る朝けの霞ふかゝらてすむ程みゆる春のよの月
 ふけぬるか雲より上の影みえて霞にあまる春のよの月
 ひとりみて思ひつゝくる春のよの月もはかなき身の行衛哉
 心ともおほるなるらむ春のよの月を霞にかこつへきかは
 さそはるゝ花もゆく点の太空に風よりくもる春のよの月
 ふけぬとて恨みなれにしかたそきのいる山霞む春の夜の月
 ふかき夜の月と花とのひかりゆへよそなるれやの春の燈
 久かたの空吹はらふ春風にかすみかゝらぬ山のはの月
 太空はわきてかすまぬ春のよのこゝろゝの宿の月かけ
 はるきてはまたうらわかき初草のみしかき夜半に霞む月影
 庭もせに軒はの梅の咲しよりかすまて移る春のよの月

岸柳

青柳の岸よりかゝる糸ことにみたれて落る水のしら波
 春風のたつたのきしの柳陰なかれもやらぬ波の下くさ
 なかめやるみむろの岸の柳原霞のうへに春風そふく
 なそくとくいづれの色を契る覽花待ころの岸の青柳
 最上川かけこそおなし稲舟のほれはくたる岸の青柳

あさみとり岸の青柳うちはへて春きにけりと波もよる也
はつせ川なひく玉藻はみかくれてきしの柳に春風そふく
たつ田川岸の柳をこきませて波の花にも春は見えけり
立田川した行水は浅けれと陰のみ深き岸の青柳
かせふけは河そひ柳をこ消てなみこそかけの霞なりけれ
たつ田川きしの柳はさほ姫のうちたれ髪やかけてほす
青柳の神南備川の春風にみむるの岸をあらふ白波
河よとのさはかぬ水もさはきけりきしの柳や陰なひくらん
岩まゆく河そひ柳玉ゆらもほしえぬ枝を春かせそふく
君か代に四方の草木のなひくとも先しらするは岸の青柳
なみのうへに岸の柳をこきませて花の錦のおれは亂るゝ
よしの河きしの青柳うちなひき浪にこほるゝ露のしら玉

新編

旅春雨

花とみてけふやぬれなむ春雨にゆけとかけなき峯の白雲
行くらし雨ふりすさふ春の日のなかくもみえぬ道のしは草
みやこにはわかかなつむらん東路やきのふもけふも春雨そふる
たひ枕こやもかくれぬあしのはの程なき床にはるさめそふる
春雨のふるさと人のかたみとてみのしろ衣ほさすともきむ
都にはこのめも今ははるの雨日数ふり行たひの空かな
ゆくてにもまたむすはれぬわか草の枕いそかす春雨そふる

分來つるみちは木のめもはるさめの故郷深き跡のしら雲
たひ衣ぬれてそ袖にしられる霞にわかぬ春雨のそら
春雨も晴ゆくすゑをみわたせば遠山さくら雲をつれなき
わか草の露の枕もふしわびぬ春雨そゝくむさしのゝはら
かすみゆく都のさかひよそにのみ猶山かくすはるさめの空
きのふまでまた冬かれに分し野もけふは縁に春雨そ降
昨日今日越ゆく山の苔のうへに夕日色ある春雨そふる
春雨も旅の日数もふる程はのへのみとりの色にみえけり
春雨のふるのかり庵さゝをあらみ軒はともなく落る玉水
明日ゆかむ野原の草はもえぬらし旅ぬの庵に春雨そふる
宿も猶さのゝわたりのさのみやはぬれてもゆかむ春雨の空
ふみまよふ山路の苔の色そき我袖はさぬはるさめの比
たひ衣ぬれて春雨けふふりぬあすやみとりの野への若草
忘れすはしはれて出し春雨のふるさと人も袖ぬらすらん
白妙の袖のわかれにぬれそめて猶ほしかたき春雨のそら

遠歸腸

わかれなはよるとなきても思ひ出よく山遠くかへるかり金
みるまゝに心ほそくもとふ鴈の雲になり行春の明はの
かへるさのさかひいつくに成ぬらん雲なき空に消る鴈かれ
いく霞いくのゝすゑはしらくものたな引空にかへるかりかれ
かすみ行四方の木のめもはるゝと花まつ山に歸るかりかれ
雲かくれ霞を分てかへる鴈かけたにみえぬ春のよの月
霞たつ春の山への花のかなふさくる風にきゆるかりかれ
天つ空みやこなうとくとふ鴈のはたての雲に遠さかる聲

われなからつらきわかれをなくかりの名残の空は雲も残らず
 雲に入こゑもすかたも消はて、おもかけ計かへる鴈かれ
 いまははやかすめる峯のしら雲にたえ／＼みえてかへる鴈金
 歸るかり程はくもぬにもろのれまたくれぬるたのむのかたやみえず成行
 歸る鴈霞ていぬる山のはに面影のこるしのゝめのそら
 今とはと山とひこえてゆく鴈のひとつ雲ぬに残るゆふくれ
 歸る鴈みちゆきふりのことつても忘るはかりに遠さかりぬる
 かこつへき雲も霞もなかりけりみとりの空にきゆるかりかれ
 今は又いつくの里にきこゆらんかすみていぬる春の鴈かれ
 春の日のなかく通路あとしあれば霞のなちにかへるかりかれ
 かへる鴈かすめる空に敷きえて山のあなたに遠さかりぬる
 わきてよも跡は霞もふか／＼らし雲井の鴈そとをさかりぬ
 なき渡る雲井の鴈のかへる山來てもとまらぬ名こそつらけれ
 歸る鴈遠さかり行山のはに残る月さへなを霞みつゝ

山花

梓弓をしても花とたのみつゝいるさの山にかゝるしらくも
 さくらさく山は霞にうつもれてみとりの空に残るしら雲
 ちる花なよしの、おくにみる人はいとゝもよほす色やそふ覽
 あしひきの山さくら戸なまれに明て花こそあるし誰を待らめ
 あたなりといひはなすとも櫻花たかなはたゝし峯の春かせ
 山さくらなれ幾よのはるなへぬ花にふりゆくみよしのゝ里
 山櫻おほふはかりのかひもなしかすみ袖は花もたまらず
 明わたるいまは月の山のはにうす花さくら色そうつるふ
 ものことにあらたまれとも春をへて花にそまかふ峯の白雲
 峯つゝきなかめもかゝる山のはの雲のいつくかさくら成らん

關花

あふ坂や霞もしろく吹かせにいつれを雲とはなとしりける
 山さくら花の戸さした明そめて風もとまらぬしら川の關
 ちらすなよあふさか山の山さくら袖にあらしの又かへりこむ
 櫻花たか世のわか木ふりはてゝすまの關やの跡うつむらん
 おしむとも花もとまらず不破の關山吹越る春のあらしに
 風すきぬ關路なりせば山さくらのとかに春の花はみてまし
 會坂や明ほのしるき花の色にのれよふかき關の杉むら
 いろみえぬ花のかのみやかよふらん雲にとちたるしら河の關
 櫻色の衣のせきの春風にわすれかたみの花の香をすする
 花をたにとゝむか名なもとゝめはや春はもちあぬ關の風に
 しら河の關のしからみかけとめよ花なさをひて春を暮行
 音羽山なとはたてぬ花なれや關の杉まにみゆるしら雲

逢さかの關もりすまね御代なれと花みて過る人やなか。覽
世にふれはさそなの春にあふ坂の關ちの花にけふは暮しつ
ちらぬまはみすて、過る人もあらし花にまかせよしら河の關
清見瀉さくら吹おるす山風にしほひもしらぬ波のせきもり
とはれけるせきのわらやはむかしにてあるし殘れる逢坂の花
かつこえてぬさも取あへず逢坂の花のしらゆふ關のまに／＼
心あてにそれかとそみる櫻花かすみのせきの春のゆふ暮
せきの名も人たのめなる逢坂に花をさそひて過るはる哉
散花のかけやはとまるあふ坂の關のしみつの名さへうらめし
音羽山せきのいさめはなれとも散しく花そ道もゆるさぬ

庭花

庭の面にこれもや風のかけたらん水より外の花のしからみ
ふめはおしふまては人なとひかたみ風ふき分よ花の白雪
とはれつる人のかたみもと、まらす踏と跡なき花のしら雪
跡たえてとはれぬ庭の苔の色も忘るはかりに花を散しく
雪とのみふるはならひの花なれと宿から庭の跡やたえなん
こぬ人なとへとまたし櫻花ちりなは庭のふまゝくもおし
けさみれば梢の花は散にけり風のしたなる庭のしら雪
さひしさをとは、根みし春ふかみ跡なき庭の花をわくとも
年をへて花のしら雪ふりにけり哀いくよの宿の春かせ
ちる花に降そふ雨の庭たつみたまさかにみる春のみそれな
山里の軒はのさくら吹かせにうくひすなうてとふ人もかな
こす点には青葉ましうて散はなのつもればあらぬ庭のさ、原
とふ人の移るひはてし庭の面は花にまかせてすむへかりけり
雪とふる花は□へえぬ庭のおもにこす点をしらぬ風を殘れる

春來てもとはれぬ庭の櫻花ちらぬさきより人そこひしき
きてみればきのふの花に跡たえて雪の下なる庭の蓬生
又とへよけふの櫻に吹かせのあすさへふかは庭のしらゆき
庭もせにちり行花の梢にはのこりすくなき春の暮かな
なのつからとひくる人もみるはかり花散庭の朝きよめすな
人こゝろ風も吹あへぬふるさと跡なき庭の花そつれなき
あさてほす庭にふきまぐ色みれば風のやとりになる櫻哉
ちりやうて待みる庭の櫻はなつもらぬさきとは、問なむ

河秋冬

よし野川いはてうつろふ山ふきも春の日敷をしらせかほなる
散はつる山吹の瀬にゆくはるの花にさほさすうち川長
かさしおるやそうち人の麻衣ぬれてこしまの山ふきのはな
山吹の花にせかる、おもひ川なみのちしほはしたにそめつ、
やまふきの井手の里人ぬしや誰花はこたへす春の河なみ
くちなしにゐての川なみうち出て見つともいはし花の盛は
石はしの瀧なき河もかひそなき折はこほる、山ふきの花
ちりぬるか水上しらぬ山ふきの色になかる、井手の川なみ
よしの河おられぬ水に袖ぬれぬ波にうつろふ岸の山吹
吉野川さくら山ふきこきまてて春のしきをあらふ岩なみ
よしのかは岩行なみもうつろひてみてを渡らん山吹の花
あすよりは春のかたみを立はなの小嶋に散れる山ふきのはな
山ふきの花のさかりは過にけりゐての蛙よ鳴て恨みよ
やまふきのうつろふ花やしけからん浪を染たる井手の川水
衣手はゐての川なみかくれともしゐて折つる山ふきの花
よしの川さくらにくる、春の色のはしやすらんふ岸の山ふき

春のゆく河への波にぬれ／＼もけふこそおらめ山ふきの花
ゆく水は下くゝるとも山ふきの花をもらすな井手のしからみ
山ふきの花さきしより吉野河岩なみはやく春そ暮行
よしの川春ゆく水の早きせになのれうつろふきしの山吹
芳野河おちくる水に今そしる人にしられぬ山ふきの花
さきかゝる下行水のおもかけに川なみおしき岸のやまふき

夏

社卯花

すみよしやゆふしてなひく松かせにうら波白くかゝる卯花
みかけ山卯のはな月夜露なからほすやちはやのふるの神垣
手向さすたか世の花のくちもせて神のう月の色に咲らむ
御幣とるみわのはふりやうへ置しゆふして白くかゝる卯花
神まつる卯月の花や咲ぬらむ下くさかゝる杜のゆふして
白妙に神の垣はさきにけり卯のはな月よくもりあらすな
神かきに咲やうの花あめにます豊をか姫の手向なるへし
卯木かきしらゆふかけてみたらしや花のいくしは神やうく覧
たか荒和しらゆふかけて神かきのみたらし川にさける卯花
神代よりひかりやかけて卯花のはなもあまてる月よみの杜
夏くれはみむろの山のさかきはにゆふしてかけてさける卯花
河のせにたてぬやしるも卯花のしのに衣をほすかとそみる
あまつ袖ふるの山なる櫛はに雪のしら水綿かくるうの花
夏かくらけふやしつらむ卯花の白ゆふかくる賀茂の川かせ
いそのかみ神さひにける玉かきに猶うの花のかゝるしらゆふ
咲あへぬ花よりしめなゆふかつら卯月をかけて神も待けり

卯のはなや玉かきしろく咲ぬらむはるかにかゝる賀茂の川波
いなり山杉のしたかけ下はれて卯花月夜道もさやけし
神山の青葉ましりに咲にける初うの花の色そすくなき
卯花のしらゆふかゝるこの比そ手向にあけるふるのみつかき
ゆふしてにまかふうの花うちなひき神のい垣としるくも有哉
手向をくたかゆふしての色とてか神垣しろく咲る卯花

早苗多

村雨にとる手ひまなき早苗かなきのふもけふも袖ぬらしつゝ
けふいくか千里の田子のとりのもあへすまき早苗の程をしられぬ
あめか下田子のもすそやしほる覧いつくもおなし早苗とる頃
うへくらすみとりのさなへ里ことに民の草葉の数もみえけり
うへ盡す千里の田子のいとまなみつけのなくしも早苗とる頃
うちはへてとれとも盡す曳しめの外まてあまる早苗成らん
行つるの鳥羽田のさなへ里つゝき千世の数とる御代の民哉
ますらおか千町の早苗とり／＼にけふはさ月とこ急ぐかな
とを山田みちある御代にたつたみのその数しらすとる早苗哉
君か代は千町の早苗ひきつれておりたつ田子の数もしられす
立ならふ民の小笠も数そひてけふも千町にさなへとるなり
まちえつゝあまれきとしの五月雨に荒田の澤もさなへとる也
玉ほこや道ある民も数そひて山田のさなへとらぬ日をなき
里つゝきいく田の面にうつりきて数そふ民の早苗とるらし
さと毎にたこの数そふ君か代になむとりあまるさなへ成けれ
とりくらす早苗はあすも山城の鳥羽にあふへき田子の秋かな
千里までとればつきせぬ早苗よりかれて末葉の秋はみえつゝ
あめかした廣き田面に立たみもとるや早苗のやむ時もなし

けふいか田子のもすそのぬれながら千町の早苗とり暮す寢
あめかしたしけき恵やみたやもり急きもあへぬけふの早苗に
さなへとりおりたつ田子の聲々に御代さかへ行程をしらるゝ
里わかぬ四方のさなへの數々に君の恵みの色やみゆらん

里郭公

いる深く誰もしのふの里の名を山ほと、きすなく／＼そ問ふ
今もまたなみたやさそふ郭公わか衣手のさとになくなり
この里に今も鳴なむほと、きす聞しに、たるこそふる聲
ほと、きす誰しのふとか大あらきのふりにし里を今もとふ覽
尋れきて里とふ人も鳴ふるす山ほと、きすわれのみそきく
このさとの軒はにきなく子規なをへたてたる五月雨の雲
白妙の衣ほすよりほと、きすなくや卯月の玉川のさと
かりにきてふしみのくれのむら雨にぬれて里とふ郭公哉
何かしのふをのかさ月もほと、きすあすかの里の夕くれの聲
ほと、きすいつみよしの、里なれてたのむの鴈の跡しのふ覽
郭公おきるのさとと過ぬなりいかなる人の夢むすふらん
すかはらや伏見の里のほと、きす夜半にやきつる明ほの、聲
たかまとのあれたるさとと郭公なく夕暮をたれかしのはむ
誰里へおもひたつらん杜鵑秋みし色にふりてこそなけ
鳴すて、急きなすきそほと、きすな井の里の名をも頼まむ
さとわかすなけや雲路の郭公そら行月の跡をたつれて
やすくやはふしみの里の杜鵑人つてならぬはつ音まつころ
深草の里をはかれぬほと、きすな鳴かたを誰うらむらん
春秋もしらぬときはのさと人に夏をきかするほと、きす哉
有明の月をもまたし郭公かななく里のむら雨のそら

いまはとてまたれし物をほと、きす外山の里に聲のふりぬる
あけぬとや岡への里のほと、きすまつよりにしにの月になく也

岡郭公

ほと、きす鳴や岡への松のはのかはらてあかぬよ、のふる聲
ほと、きすやすらふ月の入かたに猶こゝる岡のまつかせ
草むすふなかのやかたの郭公ぬれにし袖を心してなけ
またしらぬをかへの宿の子規よその初れにき、かなやまむ
朝戸明ののきはの岡の杜鵑をのかね山も今や出らむ
五月まつ山ほと、きす人しれす聲をならしの岡に鳴なり
あふち咲をかへにきなく子規藤のゆかりの色やとふらん
ならしはの名にあふをかのほと、きす故郷人もいまや聞らむ
ほと、きすたか住宿にとひなれてゆき、の岡のやすらひの聲
聞つとはしられてきかむ子規はつ音ならしのをかの忍び音
郭公いつとわきけりゆふ月夜さすや岡への松になくこゝ
ほと、きす夜半のなこりは飛鳥河ゆき、の岡に又もたつれん
心なき人やほと、きす郭公なくや五月のなかの松かけ
ほと、きす鳴すて、行かたをかの松にかたふく有明の月
まつ人ななとかたらはて郭公ひとりしのひの岡になくらん
夕日さすむかひのなかの郭公雲のはたてにをりはへてなけ
ほと、きす誰を忍びのなかのへのよふかき雨にぬれて鳴覽
ほと、きすなくや岡への松のはのいつともわかぬ聲の色かな
水葦のをかへの里のほと、きすれての朝けに聞ぬ日はなし
玉銚のゆき、のなかの子規いまこゝにくらすころかな
かたなかの梢の木かくれ風過て聲ほのかなる郭公かな
ほと、きす鳴や五月をいつとてかななも忍びのなかのこゝ

夜盧橘

うたゝれの枕みしかき夏のよに夢もむかしとにほふたちはな
ふしわひてむかしながむる古郷のまのあまりににほふ立花
風かほる花たちはなにやとりして月も昔の色やそふらむ
たち花の花ちるさとの夕月よ空にしられぬかけや残りん
さためなく夢もむかしと鳥羽玉のやみのうつゝに匂ふ立はな
たち花のはなちるよひのむら雨に昔をかけてゐるゝ袖かな
月やあらぬむかしやたれとにほふらん花橘もとのみにして
こよひしも袖のかしるし橘の小しまのとまり浦風やふく
かた糸をよるの袂も匂ひけり花たちはなを玉にぬきつゝ
誰かしるひとり忍ふの軒はなる花橘のよはのれさめを
のき近き花たちはなのにほふ夜はむかし忍ふの袖を露けき
かけやとす月もむかしのよそならす花橘のにほふたもとに
眺めつゝねぬよの袖やかよふらん花たちはなも露そこほるゝ
わすれすは花橘にしたれして跡はむかしの夢とたにとへ
たちはなのにほひそのころさよ衣かされしそては昔なられと
みもはてぬ夢のいつくに橘のとをきむかしの香をさそふらん
橘のにほふ軒もる月かけに昔の袖の色もみえけり
月かけにむかしわすれぬおもかけのけに橘は袖のかそする
夏のよもやふけ行は橘のしたふく風の袖にすゝしき
いにしへやたかみしか夜のなこりより袖のかたみに匂ふ橘
ふかき夜をとふ人もかな岡のへのおとろか軒にゝほふ立はな
さ月やみめに見ぬ人のそてのかを匂ひにさそふ軒のたち花

籬罌麥

古郷の庭もまかきもなく露のわきて色こきとこ夏の花

わか宿の籬にうへしなてしこの花もまとなにとふ人のなき
雨そゝくおなしまかきの草ながら露おもけなるなてしこの花
なてしこのたのむ籬もたはむまてよのまの露のぬけるしら玉
なく露やとりなるへき夕暮のまかきはやかて大和なてしこ
たれゆへに籬の露のをきぬつゝぬれてかはかぬとこ夏のはな
朝露のまかきのすかたうつたへに見れ共あかねなてしこの花
しら露の玉に錦をしきしまや笹をかさるやまとなてしこ
花の色によるはこえしと宿りしてくるゝ籬をやまとなてしこ
茂りあふ草もへたてぬ庭の面のまかきあらはす床夏のはな
朝日かけ露さへにほふなてしこの花のまかきを誰にみせまし
あたにゆふ籬のうちは床なつのをのれふしてや露にぬるらん
床夏のまかきもしつむ故郷の草にやつれぬ花のいろゝゝ
ふるさとのまかきはやまとなてしこの花に残れる夕ぐれ空
むかしみしもとの籬はかはられと露そうつろふ床なつのはな
うすくこき笹にうへしなてしこの色をわすれぬ花の朝露
うつしうへしまかきあれ行床夏の花は昔の露そうつろふ
日をへつゝ籬にあまる匂ひかな咲そふからのなてしこの花
蛭なかねゆふへもあはれなりまかきにさけるやまとなてしこ
秋やいまちかき笹の朝ほらけ露のをきある常夏のはな
うへなましやまとなてしこ尋れてそ古き籬の程はしらるゝ
秋なまき草のまかきになく露のうつろひ初る常夏の花

江 登

しら露の玉江のあしのよひゝに秋かせちかく行はたるかな
難波えや芦のはかくれすむものな小屋もあらはに飛登哉
夏むしののをれはやみにあらね共まよふ入えは月もやとらす

こき歸る柳なしをふれおなし江にもえて螢のしるへかほなる
なにはめかすくもたく火の深きえにうへにもえても行螢哉
難波えやあまのいさりか螢かもあしのほのかに秋風そふく
いせの海の入えの草のしほひかたあまも螢の玉はひろはし
行はたる玉江のあしの浦かせにかりそめならぬ秋を告らん
なにはえやみるめはあまのいさり火の影ほのかにも行螢哉
難波江やからぬ芦火を焼そめてなみのよるなもしる螢かな
くれ行は螢とひかふみしまえの玉江のまこもししからすな
なにはかたもゆる螢も同じえにけふりあらぬ螢のいさりひ
なには江のあしまの螢もえてのみこやあらはなる思ひ成らん
夏と秋とたれかはわきてみつづのえにかたへ涼しく行はたる哉
つらき江にみたれそめにし夏むしの玉ちるはかり物思ふらむ
堀えこくみふれふりにし波の上に猶玉しくは螢なりけり
難波江やさのみはともすあまもあらし螢やそふる漁火のかけ
かゝりさすたなゝしをふれこきかへり入えの螢數ぞゝひ行
大なる河くたすうふれの篝火にいり江のはたるかすまざるらし
深き江の思ひよいかに夏むしのとへとしら玉あはれとやみん
身よりあまるおもひは誰もなにはなる深きえにしもとふ螢哉
暮やらぬ芦の葉かくれとふはなる入江の水や夜をいそく覽

秋

早秋

今よりの夕露ふかき秋の色にしらぬむかしなしたる涙かな
いつまでとむれぬし鳥も今さらに立ことやすき秋のはつかせ
草の葉にけさなく露の色みれば風よりさきに秋はきにけり

あまの河わたせの浪に風立てやゝ程ちかきさきさきの橋
うつせみの羽になく露もあらはれてうすき袂に秋風そふく
秋きぬと風はさやかになとつれて色こそみえぬのへの草はに
をかへなるわざ田の穂むけうち靡き昨日のさなへ秋風そふく
衣手のすゝしきまてもなけれともおもひなざるゝ夕暮の空
あきや来る色はつれなき常盤木の青葉の山に風かはる也
夏ははやいな葉のなるこ引かへてきのふのさなへ秋風そふく
いつしかと身にしむはかり立田姫あき吹風に人々戀しき
さびしさのあはれなしらぬ宿もなし四方の草木の秋の初風
風の音もいつかはるらん秋はきてまた浅ちふの小野のしの原
大かたは誰秋ならぬ萩のはに忍ふもつらきかせの音かな
やとかるかまたひとへなる衣手にひかりもうすき秋の三日月
おもふたに露そとまらぬ今よりの草の戸さしのあきの夕かせ
けさみればしくれぬさきの音羽山いろかはり行秋かせそふく
露おつる早田の稻は打なひきけさよりまほにあき風そ吹
いつも聞庭の松風ふきかへて衣てさむき秋はきにけり
今よりの朝けの袖もこゝろせよくるゝ夜かはる秋のはつかせ
夏ころもをくしら露の明かたにしられぬ程のあきかせそ吹
ふか縁つれなき松にふく風もうつるはかりの秋はきにけり

萩露

をくつゆの色に出ゆくあきはきや物思ふくさの袂なるらん
萩かはな散てふことをまたきよりのれならはす秋のしら露
ならひかは移ればかはる袖の上にかこちかほなるはきの白露
わきてよもあまとふ鴈のなきもせし宿から深き萩の朝露
年をへてうつろふ秋の露やそふいつかは袖のもとあらぬ萩

色ことに萩のうははになく露やめにみる秋の哀なるらん
 咲かくすのもりか庵のさゝの戸もあらはにをける萩の朝露
 はきのうへの露には何のとはかりになれて移る宵の月影
 小萩はら下葉のこらす色に出て露もうつるふ秋風そふく
 露おもき枝にもさよや更ぬらん小萩かくれの月かたふきぬ
 かせわたる萩のしたはにうつる露それむこの比色かはりゆく
 萩の上の露をかされてなく鴈の涙にうかふ秋の色かな
 とを山田かりそ鳴なる秋はきき下葉の露や色に出らむ
 秋はきの葉すゑにおもき夕露の色をかへても吹あらしかな
 ものおもはぬ宿もかなしや萩かえに鴈の涙の露おつる比
 秋にあひて物思ふ宿の萩の露かならすかりの涙ともなし
 この程は何のなみたの露かなく鴈もまた来ぬ宿の萩原
 野かせたつ萩のにしきのぬきをうすみ結びとめぬ露の白玉
 なきわたる鴈の涙となく露といつれかそむるのへのきははら
 めきとめぬ萩のしら露袖ふれて物思ふ秋のなみたにそかる
 秋のゝにむすほふれたる萩かえの露よりさきに袖はぬれにき
 あきはきの花ちるのへのしら露はそめぬ袂も色を移るふ

萩風

おきはらやすゑこす比の夕くれにめにみぬ風も秋をかなしき
 うらみても秋まで人のとひこかし風のやとりの庭のおきはら
 さひしさのことはりはかり吹かせも我身にとまる宿の萩はら
 今よりの夕くれかこつ下おきなうちつけにふく秋のはつかせ
 大かたのなびく草木はわかれ共おきのうは、そ秋風はふく
 下おきに露のしら玉くたく也わか身ひとつのあきのゆふかせ
 草も木もさそなあらしの山かせにひとりしほれぬ萩の音哉

萩のはにはしめてかはる秋かせを空にまちける手枕の露
 あきの色をそれともわかぬ夕暮も心やすめぬ萩のうは風
 あれはあれとみし人なから萩のはのかはらてそよく秋風も哉
 萩の葉に夏はしのひしかせの音もはけしくなればあきの夕暮
 おきはらやすゑのゝ露に風立て身にしむ時の秋のゆふくれ
 秋なうしとなかめぬ宿の萩のはに夕くれならぬ風やふくらん
 かれく秋の心のなるまでもいかなる色のおきのうはかせ
 大かたのあきの哀のなかにしも夕くれちきる萩の上風
 萩の葉をよきて吹ゆく風ならは袖のよそなる露やこほれん
 こゝろから笹の萩なうへそめて秋かせことなるゝ袖かな
 れやちかくうへしはたれそ萩のはの末こす風も人のとかは
 うへすて、聞人もなき故郷のまかきにのこる萩の上風
 すみすてしあはれいくよのふるさに風は昔の庭のおき原
 れ覺する庭の萩はらうちそよき人もうらめし山おろしのかせ
 さらぬたに袖ほしかぬる故里の月によふかきおきの上かせ

草虫聲

まつむしのこゑにや宿をかり衣すそのゝ秋にみちもまとはて
 聞つやとそをなくさめのことのはも誰にとはましのへの松虫
 秋のゝに袖はにほへと松むしのをのかりかは風もおしへす
 まつ虫のなくかたとなくさく花の色々おしき露やこほれん
 まてしほし聞てもとはむ草の原あらしにまかふ松むしの聲
 夕されはをのれ鳴てそ松虫の草はの露のやとりなはとふ
 わけわひぬもすの草莖そことたにおしへぬのへの松虫の聲
 秋の野の草葉の露にしほれきて此ゆふ暮も松虫のこゑ

うつしうへし花の跡とふむしのねものへになとめ秋の夕風
夕暮にふきくる風よしるへせよいつれのへに松むしの聲
誰をとふ道のゆくてもまつ虫のこゑをしるへのよもきふの宿
草のはらむしの音しけき宿とへはひとむらすき秋かせ吹
夕暮はしの、葉くさのあとかたもみえぬ道とふ松むしのこゑ
なかやはら露こほるとも松むしの聲をはよそに聞やすくへき
たかためかまつな虫のねにたて、尋ねぬよその露に鳴らん
なく虫の聲やいつことたとるまに草むらことの露にぬれつ、
いつくにか我松むしは恨むらんまよふの原にさよふけにけり
松むしのこゑする野へをたつぬとて草付ことに袖ぬらしつ、
ふみ分し野中ふるみちあとはあれと虫のねたとる秋の夕暮
中々に分てもつらし淺茅はらむしの音よはるのへの秋かせ
いくかへりわけぬ草はもなかりつるそなたの露に松むしの鳴

山家月

山さとは軒はのみねのたかければ松のはなから月そふけゆく
谷ふかき松の梢な草はにて庭より出るやまのはの月
すみかふる宿から色やまさる覧みやこにも見し山のはの月
月ならてたれそま山のかけはかりふかき柴やの秋をとまはし
袖のうへにやとさすとてもこの山の嶺には近き月そなれぬる
住なれぬ宿ゆへかはる哀かな軒はに見つる山端の月
松の戸をなし明かたの山かせに雲もかゝらぬ月をみる哉
軒ふかく梢もる月の葉をしけみいく度おなし袖に消らん
さひしさはとふにつらさをまはしはしく外山の庵の床の月影
いとひこし雲をは谷にすみなしてうきよを出る峯の月かけ
なかむればかすさへちかくとふ鷹の軒はにかゝる山のはの月

さらしなやをはすて山の柴の戸にしほしも秋の月はくもらす
秋やあらぬ月やみしよにまさる覧住こし山の庵をうかる、
世ないとふ心のおくの山さとにひとりと月をみても過ぬる
のかれきて又あくかる、山里にすみなれにける月の影かな
山ふかくとふ人さへに夜半の月花のあるしを春はかこちき
とはれまし月も梢の外そゆく横の葉しけき秋の山里
山さとにいまはの心月のみやかはらぬ秋のともとみるへき
なのつから風もとまらぬさ、の庵深山もさやに月はもりけり
ならはては深山の友とたのみこし住うかりける月の光を
くもるへき木のは吹しく山里の風よりのちに月は出けり
結びなきしましはの庵や荒ぬらん露なからもる山端の月

野徑月

あたしのや夕の露のたまゝもぬきとめかたき草の上の月
なかも行月にうらなき葛のはのかへるもしらぬのへの秋かせ
雪にすむたかれの月やさそふらんふしのすその、秋の旅人
むさしのは露をく程の遠ければ月は衣にきぬ人そなき
なかもつゝ、更行すゑも忘れぬ山のは遠きのへの月影
やすらひに空ゆく月もやとりけり露分わふる野ちの篠原
とまるへきすゝのまるやはあれにけり里迄なくれのへの月影
すみのほる月をは月とをきながら木のしたはれぬ宮城の、露
むさしのは行す近くなりけり今宵をみつる山端の月
やとるへき裾の、露を置ながらな山のはにかゝる月かけ
分くれしのはらの露のしら玉をあかすもみかく月の影哉
春日野は秋ゆくみちも白妙の袖ふりはへて月をみるかな
ゆきとまるみちなき秋の思ひかなすみのみ増るのへの月かけ

はる／＼とかきわくる草の葉末よりにはかに出る武蔵野の月
月かけのなくらん程はなを分むいくの、露は末遠くとも
しくれつる生野のすゑは晴にけり遠かた人の袖の月かけ
おもふことそれとはなしの月そみむさゝ分る野の露の衣手
月にゆくふしの裾野をいそかるゝ清見か關のみほのうらまで
武蔵野や行たひ人の跡もなし月の光の秋のしり雪
印南野は分ゆく露のふかければ浅ちか末に月をかたよる
分くらすのはらの露も白妙の衣手さむき夜半の月かけ
はる／＼と行のゝすゑの草はまて露をかきりにやとる月影

船中月

とまりふね寢覺に残る月かけなむかしの夢になく／＼をみる
月にこくおきつ舟人波まより數さへみゆるすみよしの松
わたの原とをき舟出に行くれてみちもやとりも月に馴ぬる
しらさりき秋のしほちをこく舟はいかはかりなる月をみる共
こく舟の外行なみも月さへて雲はへたてすやへのしほ風
わたの原いさよふ浪に舟出してまほにも月をなかめつる哉
木のまなきもろこし舟のうきれにも心つくしの月はみえけり
又やこむひれふる山を漕はなれ便もしらぬ月にまかせて
月かけのあかね光をみなれさはさすや雲にそてもぬれつゝ
みもきゝもならはぬよはのね覺哉笛もる月に磯の松かせ
あたら夜の月を雲にさす棹の行てもおしきうち川長
夜ふれこくしるへの風に雲消て跡なき波ば月をさやけき
沖つなみあら磯しるく夜は更てうきれの袖によする月影
秋のよははやそしま分るあまなふれ人にも告ぬ月やみるらん
いまそしるよはに棹さす蟹小舟月みむとてのしわさなりとは

をのつから月みる友となりにけり契らぬ蟹の沖の釣舟
をのれさへうきたる船にやとりきてよな／＼波にぬるゝ月影
由良のとをよわたる月にさそはれて行衛もしらすいつる舟人
湊へのあし分小ふね漕出てなにはの沖の月を見る哉
わたつみや秋なき波をこく舟も浦ちの月に袖はぬれけり
涙のみうきつの波のなみまくら月にひたせる袖をかなしき
あまなふれよるへの浪にこす棹の末よりつたふそての月影

曉鹿

契りなく深山の秋のあかつきに猶うき物としかは鳴なり
なのかつまでもつれなくみゆる限りとや有明の山にさな鹿の聲
夕月夜あかつきやみのむら雲に涙しくれて鹿もなく也
なかきよにあかすや月をしたふらん峯行しかの有明のこゑ
あくるまで妻待かせも高妙のなれつれなきさなしかの聲
立かへる思ひやつきぬさなしかの聲のかきりは曉そなく
有明の月のかつらのみちはな峯に残しておしか鳴なり
鹿はいかにすそのゝ妻をおしむ共いるやまししらぬ明方のこゑ
あけくれのなくら山の秋かせに寢覺やすらん棹鹿のこゑ
さなしかの妻こひかれてぬるよはもなな曉をうしと鳴なり
この比のあか月露にいかはかり妻とふ鹿のぬれてなくらん
有明のつれなき山になく鹿も猶うき物と妻をこふらむ
秋のよははれさめの後もなかな月の有明の月に鹿をなくなる
すみわふる世をうち山の朝ほらけ猶思ひ入しかそ鳴なる
曉をうき物そとはさなしかもいつならひてか聲に立らん
なのか妻なきてや鹿のわかるらむうつるふ萩の露の露
戀つまにあはて明ぬとなく鹿のおしむもしらす月をかたふく

さを鹿のゐの、草ふし起わかれかへるならひの聲もうらめし
夕月夜あかつきやみのくらふ山木のしたたる鹿や鳴らん
つまなみ鳴やおしかの涙よりちにくたたる曉のつゆ
しなりするあかつき起の袖の上に鹿のねらの露やなくらん
さなしかのなくや涙をかけそへて曉深き山のした露

河霧

橋姫の待よの月やいたつらに霧たちこむるうちの川なみ
秋ふかき川せの霧のはれやらて人こそみえれことはかよへと
大井川ふかきゑせきに立きりもむかしよの秋やこふらん
飛鳥川ふちともしらぬ秋のきり何にふかめて人へたつらん
つれもなきまきの小山はかけたえて霧にあらそふうちの河湏
秋かせや立田の河の霧のうちに色こそみえれ水くゝる也
河きりにうちのはしひめ朝な／＼うきてや空に物おもふ頃
とふとりのふるさとこめて飛鳥川かはせもはれぬ霧の曉
もみち葉のしくるゝ色はなかりけり霧のみ深き秋の川なみ
朝日出きりはよふかく立こめてひとり明行宇治の河湏
ゆふされは遠かた舟やまよふらん霧になりゆく佐保の河なみ
よしの河岩なみこめて立霧も早くそ秋の深くみえ行
遠かたや明ゆく霧のたえまよりたか袖したふうちの橋姫
よしの河岩なみこめて立きりのはやくなかるゝ山風そふく
あけぬとて遠かた人や出ぬらむ川せのきりはまたよふかきに
阿武隈にたつ河きりの朝な／＼しゐてもやらぬ人なへたてそ
あらし山ふもとの川の夕霧によその紅葉の色そきえゆく
さしかへるうちの河長霧のうちにたゝこゝもとの友よはふ也
最上河きりの下行いなふれののほるもみえぬ秋の夕くれ

なかれても深き契の思ひ川あたにへたつるせゝの朝きり
ほの／＼とをちかた人の聲ながら風になかるゝ、うちの川きり
ふもとより立川霧をはらひかれかせも空なる秋の山のは

搦衣幽

こよいたれそなたの風の便とてぬしたまらぬ衣うつらむ
まところめはそれかあらぬか秋風のふきくるかたに衣うつなり
聞まよふ聲さへきゆるうす霧の遠やま人を衣うつなり
秋かせにさそはれきえてうつ衣をよはぬ里のほとそ聞ゆる
から衣うつかきぬたも初鴈の雲をわたるれにまかひつゝ
衣うつ音もおほろに霧こめてふけ行月のさむき空哉
夜やさむき里は雲井のこからしに聲さへうすくころもうつ也
へたて行雲にあらしの遠かたや誰さとゝなく衣うつらん
里遠くけふはいくゝ花すゝきほのかに秋のころもうつなり
さとやとをきたえまはきえて秋風の吹につけてそ衣うつなる
たかさとの有明の月の明かたにこゝもほのかにころも打らむ
衣うつそなたのつてもたえ／＼になとつれかゝるさとの秋風
いく里の人にあはれなしらす覽衣うつよの庭の松かせ
ちかゝらぬよその砧もなとつれぬ人のしつまる秋のよな／＼
たえ／＼にきぬたの音をよはるなるそなたの風や吹かほる覽
風かよふまぐらのそこにおとつれてかたもさためす衣うつ也
遠里やそなたの月に誰か住あるかなさかのころも打こゝ
さとの瑩のしほやき衣うつ音もまとをにひゝく風のつて哉
秋のよのなきれさめの月影にとなき砧の音そさひしき
しつのめか月におき井の里とをみなひ風しるく衣うつなり
衣打さといつくとわきかゝるとやまのすゑに月もかゝりぬ

夕紅葉

ふけはて、猶たか里のとはかりもきこえぬ程に衣うつなり
 しからきのとやまの紅葉なのれとや夕日をむる色まさる覧
 大かたのゆふひのかけもあかれさすやしほの岡の秋の紅葉は
 そめわたす木のはのうへの露も猶たは分て秋やみゆらん
 たつた姫雲のはたてに掛けてなる秋の錦はぬきもさためす
 暮かゝるゆふつけ鳥のうちにはへて錦たつたのあきの山のは
 秋もいまは夕くれなるものもみちはや野にも山にも残る色なき
 とく暮るをくらの山のかけもなし秋の紅葉のしたてらす比
 夕つく目下てる山のうすもみち時雨も露もそめぬ色かな
 もみちする秋のはやまの夕つく目うつるふ雲の猶しくるらん
 夕つく目そめ残したる山かけの木のははかりや時雨まつらん
 しくれつる木すゑははれて夕附日にしきはすてふ天のかく山
 けふも又くれなはなけの道ならて紅葉を分る山のおくかな
 まつとなき人もうらめし山里に木のはのおつる秋の夕暮
 夕しくれふり出て色やそめつらんからくれなゐの嶺の紅葉々
 時雨のみ染さりけりな夕つく目うつるふ山の木々のくれなゐ
 くもるとも紅葉はのこせ山のはに月待そらのよもの木からし
 ゆふつくひうつるふ峯のうすもみち今一しほは時雨せれとも
 夕時雨ふるからたのゝもとかしはもとつ葉ながら紅葉しに鳧
 小倉山夕日かくれやししくれつるぬるゝかほなる秋のもみちは
 行秋やいまはたむけの山風に夕くれかけ●散もみちかな
 山風にかけもたまらず夕附日もりの木のはのうつろひしより
 をくら山雲よりにしにめくる日のなこりあらはす嶺の紅葉々

殘菊句

色に出てしはしは句へきくのはなこれより後の秋もすくなし
 あきな／＼移るふ色にならふとも香をたに残せ霜のしら菊
 暮て行秋のたむけに色かへてふたゝひ句ふ菊の白露
 をきそめていく世つもれる句ひともいさしらきくの花の下露
 ものことにうつるふ比の色ながら秋もかきらすにほしら菊
 こと／＼に句ひやかはるはつ霜にうつるひ残る白菊のはな
 竹の園まかきのきくのにはふ袖千世もかさね露のまに／＼
 秋ふかみまかきの菊はしほれてもうつるふ色にかやは残らぬ
 けさはまた移るふ色もしらきくの花は老せぬ秋の霜かな
 霜かれのうつるひなから白菊のふたゝひ花のさかりなをみる
 草も木もうつるひはつる秋かせにひとりしほれぬ庭の白きく
 いまはとて霜にかれ行しら菊の色こそあらねかやはうつるふ
 とふ人の袖にゝほひなとゝめても移るひ残れ秋のしらきく
 白菊のうつるふ花はむらさきの草のゆかりの色とこそみれ
 それかとも句ひはかりを残りける色は跡なききくのませかき
 色はみなうつるふきくの垣れよりもとの句ひの秋風そふく
 うつろひて霜のみいまは白菊のにはほひもさむく秋かせそふく
 植しよりれこしてかれぬしらきくの深き句ひは長月のすゑ
 うちはらひおる袖寒くにほひけり霜の離に残るしら菊
 霜ふかき垣れのきくのこむらさき誰もとゆひの句ひ成らん
 きくの花にほひもすすきはつ霜に移るひ残る色そかなしき
 あし奥の山路のきくのしら露にぬれてほしげむ袖の香そする

冬

朝時雨

なくら山しくれもかはく聲のうへにけさあらはるゝ嶺の木枯もみちゝる山は朝日の色なからしくれてきたるうちの川なみあらしくはらの外山の朝かしはぬるや時雨のいろに出つゝ秋すきてななうらめしき朝ほらけ空行くもゝうちしくれつゝ朝なゝしくほるゝ袖もますかゝみみる影さへにしくれてそ行この里の朝けのけふり晴やうて嶺の時雨の雲つゝく也

春日野に朝あるくもの山風きんぷにしくれて渡る冬はきにけりほのゝと明る朝戸の時雨よりふゆはきにけりみ山へのさと冬きぬとけさはいはたの柞原をとにたてゝもふるしくれ哉夜のまには山のいつくをめぐりつゝけさは軒はに時雨きぬ覽あさなゝしくれの音そよばり行眞木の板やにもみちふく比冬きぬといふはかりにや神無月けさは時雨のふりまさりつゝ初しくれふるさと寒く冬はきてかはらぬ松もけさそさひしきその色とみえはこそあらめ時雨ふる常盤の山のけさのむら雲神な月思ひもあへぬ朝戸出にまやの軒はのうちしくらんむら時雨あさひもさためなきものを何山人の衣ほすらむ山めぐり夜のまの秋をなくりてやなこりしくるゝけさの村雲初しくれくもりもはてぬ朝つく日むかひの岡にみかくしら玉神無月しくれて明る山端にはなれもやらぬ横雲のそらかみな月峯に朝日はさしなから夕をいそぐむらしくれかなかきくらす木のはの色も晴行はけさはまはらに降時雨哉まさ木ちる外山の峯の朝くもり何にしくれの色をそむらん

竹霜

秋なきし霜ものこらぬ呉竹の葉分の霜の色そつれなきなきまよひかさなる霜におとろけは我世もふけぬ窓の呉たけ

契なけ葉かへぬ色にさゝ竹のおほみや人の袖いあさしもいつよまてなれてふりぬる河たけのまた下蔭に霜をさきそふ竹のはによなゝ霜のふる里は庭もまかきも冬そあれ行なく霜のよゝなをかされて竹の園かはらぬ色にとしやふりなむ山鳥の末尾の里もふしわひぬたけのはしたりなかきよの霜霜のなくまかきのたけの下みとりやつれぬ色をこからしそ吹冬の日はやかて程なく呉竹の葉になく霜のきえあへぬまでつゆは霜に結びかへたる呉たけの葉にしたかひて風も吹いくい也いくちよもかれぬためしを見よとてや緑の竹に霜のなくらん木にもあらぬまかきの竹は冬草の霜につれなき色かとそみる竹のはのさやく霜夜におとろけはさえたる月はかたふきに覺そあられふる音こそよはれ竹のはにやゝなく霜のふかきよの空ひとりふす窓の呉たけ風さえて葉分のしもゝ置まよひけり竹のはになく夕霜のなれのみあらしにもろき色はみえつゝ呉竹のかはらぬ色になきなれてあたる霜も千世はへぬへし木にもあらす草にもあらす呉竹は霜はなけ共色そかはらぬ木かきよのれ覺の窓の竹のはに曉さむく霜やなくらん此ころの夕しもしろき竹のはに出るもまたぬ窓の月かけ霜こほり衣手いたくさゆるよにたけのは白く明るしのゝめふりつつまむ雪のすゑはのいかならん霜たにおもき園の呉竹

池水鳥

すみわひていけのあしまを立かもの水に残るあともはかなし池さむき芦まに氷る水とりのあな羽のこさぬ冬のよのしもしいけ水によりたる鳥もなれぬらんおなしやとかる有明の月

にを鳥の下のかよひもたえぬ覽殘るなみなき池のこほりに
 ゆられ行にほのうきすもよるへなみ氷らぬ程を廣澤の池
 池水に浮ながらこそ年をふれおしからぬ世をおしとなきつゝ
 この池の木のはにあそふあしかの青羽こきませふく嵐かな
 夜や寒きうきぬの池のうす氷ひとへはかりのなしの毛ころも
 此池のつらゝの床のさゆるよをあかしかれたる鶯のひとりね
 月さゆるこやのあしに住をしののれはらぬ霜のむら消
 みるめかるたよりにあらぬ池水をかつきわひぬる鶯の獨れ
 池水の玉もの床に住かものうは毛の霜に冬はきにけり
 中々に霜夜の空やさむからん氷にかへる池のをし鳥
 見るもうしつかはぬをしのひとりのみいたつらに立跡の池水
 池水にわれとむすはぬつらゝゆへみなれし鳥の遠さかりぬる
 鳩のすむ池の水にふる雪のうへにもかよふ跡はありけり
 冬の池のつらゝの床のひとりねはかなしき物と鶯ぞ鳴なる
 池にすむをしのうきれもなけれぬ袖の氷におもひあはせて
 冬のいけの水草をしながら雪に己もしろき鴨のむら鳥
 影たえて凍りはててゐる池水にたくひもみえぬをしのひとりね
 さゆるよの水ふみ分池水に身をなゝしとりのすむかひも哉
 あしかのゆきゝも今はやすからず絶々氷る冬の池水

鴨千鳥

わたのはら漕出しふれの友干とり八十しまかくれ聲きこゆ也
 風よする沖の小しまの濱ちとり浪のおりゐにこゑくたくなり
 いせしまや玉しく浦のしほひかたのちしのへともなく千鳥哉
 濱ひさしなけのかたみの友千鳥とわりすつる沖のこしまに
 あはちしま渡るちとりも白妙の浪まにかさす興つしほ風

浦つたひしほくむあまの袖ぬれてをしまの千鳥月に鳴也
 聞なれぬ新しまりかあさ衣さゆる霜よに鳴ちとりかな
 なくちとり聲のよふかくなるまゝに月かたふきぬ松か浦しま
 友ちとり鳴はかりなかはしまの水のしら波たちわかれつゝ
 淡路嶋ゆふしほさきや立ぬらんすまのむかひに千鳥なく也
 さよちとり浦のはつしま行かへり有明の月の空になくなり
 むしのれは野しまの草にかはれてゝなのか霜よの千鳥なく也
 小夜ちとり鳴やそなたの波まよりみゆる小嶋に月そかゝれる
 ありと聞うらの初しまほのゝと降をける霜に千鳥なく也
 松しまやいそこす波に立ちとりぬれてや夜半に浦つたふらん
 さよ千鳥こゑもをしまの笛やかたなれたる蜃の夢はつれなし
 あかし瀉嶋たちかくす朝きりに舟こそみえぬちとり鳴なり
 あさりするあまや家路にかへらん小しまの千鳥聲さほく也
 さゝしまや磯こす波に立ちとり心とぬれてなかね夜そなき
 遠近のしほかせさむみもゝつての八十の嶋はにちとりなく也
 しまかくれ浪うつ磯にある千鳥くたけて聲はよそかなしき
 行舟もさそなあかしの嶋かくれをのれあらはに鳴千とり哉

松雪

山のはに残るみとりはみえぬ共音あらはなる松の雪おれ
 もろともに老その松を色かはることしも深くつもる白雪
 わか宿はけさふる雪にうつもれて松たに風のなとつれもせず
 したゝへす梢おれ臥よなゝにまつこそうつめ峯の白ゆき
 庭の面はすゝきをしなみ跡たえてとひこぬ人をまつのしら雪
 あとたえて日数ふりつむ里なれやむなししく人をまつのしら雪
 高砂の尾のへのしかのながめ日も積りはてぬる松のしらゆき

たかさこのおのへに風の音はしてしつえもみえぬ松の白雪
とはれぬを心の松もいたつらにうつもれはつる山のしらゆき
なとつれし庭の松さへうつもれて雪には風の跡も絶けり
そめまさむ春の一しほ松の葉のみとりもみえす雪を降しく
高砂のおのへの松もむれ木の朽もやすらん雪のしたおれ
あと絶てとふに音なき雪のうちも風を告る庭の松かな
おとこ山松はかひこそなかりけれふるきみゆきのあとの曙
ふりつもる雪を花とやみれの松をのあらしにはらはさる
さびしさははらふあらしの音もあれと猶おく山の松の雪おれ
谷ふかみありともしらぬ松が枝も雪おれしるき冬の明ほの
ふかゝらぬ松の下さへみちそなきたへぬしつえに雪おもる比
しからきの外山はうすき白雪のうつみもはてぬ松のむら立
とふ人は思ひたえにし山里にきのふもけふも松のしらゆき
そめかれしけさは常盤の名もつらし雪吹はらへ峯の松かせ
白雪のみなふり埋む山のはに風をたよりの松の一むら

湖雪

にほの海や氷に雪のつもるより沖に残れるなみのうへの月
しかの浦のこほりのうへに立なみも猶音たゆる雪のあけほの
志賀のうらやさゝなみ遠く行舟のやかたもしろくふれる白雪
鳩のうみやみきはの外の草木まてみるななきさの雪の月影
さゝ浪や浦やはるかに風さえてみれもたひらの山のしらゆき
しかの浦よるともみえぬさゝなみや比良の高れの雪の明ほの
立かうへによこさる波やさゝ浪のひらのあらしのさそふ白雪
もみちゝる梢につもるしら雪を波にこきおろす比良の山かせ
降雪はそれともみえすさゝなみのよせてかへらぬおきつ嶋山

しかの浦や氷る汀のあともなし音こそたてぬ雪のしらなみ
霜かれのあしりのうらを漕行は雪の花ふくおきつしまかせ
自妙の雪をかされてさゆる夜にこほりを高きしかのうら波
さゝなみや山にしめゆふ人はなし釣するあまや雪に出入ん
音たつる志賀のうら風吹さえてかへらぬ浪やゆきの夕暮
しかのうらやあまさる雪の曙に氷はとけぬさゝなみそよる
にほの海や波まにしるき沖つしまさすかに雪の色そまきれぬ
滋賀のうらや絶々積る白雪に下のこほりの程そみえ行
しかのうらや遠さかり行雪の色に結ふ氷のほとそしるゝ
しかのあまの釣する袖や寒からし雪に成行比良の山かせ
しかの浦や波まもしろく降雪にそれ共わかぬあまの袖哉
さゆるよの雪ふきなくる山風に明かたしるさしかのから崎
こほりゆくしかのうらはの程みえてさゝなみ遠くつもる白雪

惜歳暮

とゝめはや流れて早き年なみのよとまぬ水はしからみもなし
思へともかひなきみつのわたしもりをくりむかふる年の暮哉
月はなを有明の山のかけもみきつれなく過るとしの暮哉
おもひやれさすかに物のとはかりもうらみぬふしに積る年哉
年きはる身の行衛こそ悲しけれあらはあふよの春をやはまつ
夜半の空あけは越なむいたつらに行年なみのせきもりもかな
つらかりし袖のわかれのそれならておしむないそく年の暮哉
あはれ又いそちの冬もくれはらあやまたぬ身の老なかつては
行年のくれなや人のいそく覽誰も我身にうつらき分れな
年つもる雪のくれこそかなしけれいかなる人の春をまつらむ
かへる山雪ふりつもるかひやなき暮行としの道ちまかはす

身にとまるならひもつらき暮ことにおしむは年をいとふ也覓
ふりまさる我みに霜をかされても暮行としを鶯のひとりれ
いつまでとしらぬ命もくれて行年をかそへておとろかれぬ
年暮てむかふる春はよそなれと身の老らくそききさらはぬ
こしかたの夢をはかなみ數ふれはいやまさりにもおしき年哉
春秋のわかれしたにもおしまれきなへて今年の夕くれの空
いかにせむあすより春のたつが弓引とゝめたる習ひなければ
うつり行月日をおしきとふ鳥のあすかもあらは年や暮なん
おしめともつれなくかへる年波のとゝめかたみにぬるゝ袖哉
飛鳥川かはるふちせもある物をせくかたしらぬとしのくれ哉
身のなりひ今行すふもたのまねはつもらん年のおしきけふ哉

戀

寄雲戀

わするなよ夕の雲の跡もなく空に成行人のおもかけ
たのみけむそなたの風そそためなき人の心の空のうきくも
しられしな思ふあたりに行雲のうき身をかへて消わたる共
いこま山いさむる峯にある雲のうきて思ひのきゆる日もなし
おもふより涙ふりそふ雨雲のよそにも人は見えぬものから
よそにして色しみえれは思ふともまた白雲のうはの空なる
契りしは夢になかむるうき雲の消て跡なきうつなりけり
思ふかたの雲にしくれよなのつからつれなき袖も色や變ると
明ぬとて山立わかれゆく雲のよにふるからにつらき空哉
よそにみるかつらき山の雲たにも高れの松にかゝりやはせぬ
戀わひて身はうき雲と消ぬともあたのためしやよゝに残らん

夕くれはよそにやこひん天つ空くものはたての行衛しられは
ゆふ暮の空にはかなく行雲の跡なき道におもひたつらん
わか戀は風ふく空にまよふ雲の思ひ定めぬ夕暮そうき
ゆふくれはおもふ心をかけてしれそなたの空の雲のはたてに
空になる人の心のたくひまで我ある山の雲そつれなき
人しれす思ふそなたにしくれても我袖つけよ空のうき雲
わすれすようき雲かくれすむ月のほのかにみえし人のおも影
もるともにかよふ心やへたつらむいもせの山の中のうきくも
たのめとや夕の空をかなむれば分れてかへる遠のしらくも
風ふけはかつらき山並イの嶺の雲あとなき戀に思ひきえつゝ
緑なる山のはわたるしらくものよそめもしろくぬるゝ袖かな

寄露戀

君かすむあたりの草にやとしてもみせはや袖にあまる白露
吹風に誰ことのはをかるかやのみたれてかゝる露もうらめし
おもひくたくくさきに色やうつる覺身よりあまれる秋の白露
道のへのあたなる露をゝきとめて行てにけたぬ戀をかなしき
なくといひぬとは忍はむ白露のれたくや袖の色に出らむ
わか戀は秋の草はの露しけみしはしも君をかけぬ日はなし
秋もなをのはらの露のをかぬよはあれ共袖のぬれぬ日ナシをなし
花にこそまたるゝ露の置ところめつらしからぬ袖のうへかな
あたる人の心の秋の露よりそみしことのはも色かはりける
宵のまのことしけき露の袖なからやとしてけりな有明の月
秋かせになきところなき白つゆの我身ふり行ことのはそなき
わか袖の涙の色におもなれて草葉に淺き秋の露かな
山ふかみ秋の木のはに置つゆのむなしき色にそてや朽なん

思ひいれぬ風にもいるはある物を何といはたの森の下つゆ
身にしれは四方の草木も哀なり物を思はて露はをくかは
よそにのみきくのしら露いくよしもつもらぬ袖の淵と成らん
朝夕のよそのくさはの露までも袖のならひに哀とそ見る
わか袖はまつうらはにあられともつもりて露の淵となる迄
分れにしその曉のなこりよりかならず露はそてになきけり
いたつらに行てはきぬる宵のまは我のみはらふ袖のしら露
いかにして人の心を秋の野の露わけ衣うちみそめけん
木のはちる秋の山へになく露のしたにうつろふ色もうらめし

寄烟戀

ふしのれや絶ぬけふりの行衛たにしらぬ思ひの年やへぬらむ
不二のれの空にや今はまかへまし我身にけたぬむなし煙を
みるめなき浦よりなちに立煙われをばよそに何こかる覺
いかにせむあまのもしほ火絶す立けふりによはる浦風もなし
恨みしるなにはのみつに立けふり心からやくあまのもしほひ
人しれぬ戀をしほやの煙かな心の底を蜚やくむらむ
たつればや煙を何にまかふらん忍ふのうらのあまのもしほ火
なひけとてたえぬもしほの煙をもめたてぬ方へさそふ浦かせ
うらみても我身のかたにやく鹽のおもひはしるく立けふり哉
中々に今はあさまの夕烟そらに思ひをしらせてしかな
さひしさに柴折くふる山里も身よりおもひの煙やはたつ
ふしの山みれに煙のあらはれはいかにせむとかおもひ初らむ
行衛なき空に思ひのみちぬればふしの烟はふもと也けり
わすれしと契りしことはかはらやの下にやむせふけふり成寛
須磨のあまのやくしほ煙尋れても靡く習ひをいかてしらまし

もしほくむ磯やのけふりあはれなと靡かぬ方に身をこかす覺
よそへてもみせんと思ひしふしのれの煙をうつむ雲も恨めし
淺間のや立名もよその夕けふり遠近人もいまよとかめむ
するかななるふしのしは山しはしたにきえぬ思ひに立けふり哉
立まよふあまのもしほの夕けふりおもふそなたの浦風もかな
ふしのれのもゆが思ひにくらふれば烟はよその物とやはみる
身にあまる思ひよ空にくらへみよ不二の煙も外にやはたつ

寄草戀

あさちふのをのゝしの原露なからたか秋風にみたれそめけむ
月草のうつろはんとや染をきし人の心もいろかはりゆく
わか袖の露の下おきとにかくに思ひみたれて秋風そふく
すゑまてと誰か契りし秋の霜むかしかたりの庭のした草
いかにせむ人の心の種たえておもひわするゝ草のはもなし
いたつらにかれやはてなん草の原いかに契りを霜を結へる
うは玉のれての夕のおもひ草こよひもむねにもえや明さん
ひるまなきゆふかけ草の白露のしられすけなむ身社おしけれ
なけきわひたのむ夢路の忘草れられぬまゝに茂る比哉
わするゝもしのふも人の軒はなる草におもひの種はまきけり
いかにせむ忍ふのおくの思ひ草われのみしりて年はへにけり
忘草しける宿はうき人の心のたれもつゆやなくらん
わするなといひしはかりの庭の面にかく度草の生かはる覺
吹かせの音にはたてししら露の身はかけくさの下になくとも
花すゝき草の袂に露そへて秋のさかりもくるしかりけり
かれにけりそれをかきりに朝霜のをきて別れし道の芝草
冬くさのかれてはやまね春みれば猶たのまるゝ人こゝろかな

思ひ草かれなて誰かみちのへのお花か下に種を蒔けむ
我こひは軒のしのふのうす紅葉たえぬ涙やふるさとの秋
等閑の契りあさかの沼水に生てふ草のかれのみにせゆく
人こゝろあさき色つく折しもあれ夕日かくれに何たのめけむ
なく霜の下に朽そふ冬草のかりの契りもいつたえにけむ

寄鳥戀

鶯のこほれる涙むすほふれとけぬ思ひをしる人そなき
かれはてし契りの末の春かすみたてるやいつこ賜の草くき
とりのれなむなしき袖にかこちても哀いく夜の有明のそら
逢坂のゆきくにたつるとりの音のなく／＼おしき曉そうき
そてのうへも數かくはかり成にけり鳴の羽音のしけき涙に
芦鴨のうきはわすれて一すちにみなれんまてを思ひ社やれ
なきなのみ夕つけ鳥のあふ坂に捨られてたに音をも鳴はや
おもひあれはひとり色こき衣手のもりには鴈のなみたなく共
いかにせむ夕つけ鳥のをのつからなくれないとふ曉もかな
しほのみつ袖しの浦のかたななみ芦へのたつの音をのみそ鳴
わすらるゝ身を鶯のよなく／＼にふしもさためぬ宿のくれ竹
かれれとや立田の梢色かへてゆふつけ鳥もしくれてそなく
まつよのみむなしき空にとふ鳥のよそにも人の遠さからん
夕暮はあまとふ鳥の行かたもおもひしらるゝ身の契り哉
なけきつゝあかしかれたるなかきよの鳥のれいとふ曉もかな
かへるらむ誰曉のとりの音にうきもよそなる有明の空
今もなくゆふつけ鳥よ哀又たかあふ坂のゆきゝみるらん
見るまゝに人の心のかりのこないくつ重ねていかにたのまむ
たつねみるのへの通ひち跡もなし誰いつはりのもすの草くき

雲かくれ鳴行とりのよそなからありとは聞といかゝたのまむ
いまはとておもひ絶たる鳥の音のつらきや人のなき成へき
つきもせぬ鳴の羽かきいくかへり曉ことに物おもふらむ

寄枕戀

あちきなく契りのほともしられつゝ古き枕の誰したふらん
なにと又枕のちりをはらふらむならひなきみの闇の秋かせ
いかて我心を人のまくらまておもふ計の行衛しらせむ
思ひ出る契りの程もみしか夜の春の枕に夢はさめにき
しられしな我袖はかりしきたへの枕たにせぬよはのうたゝれ
物思ふ日かすは塵のつもれとも夜のまくらものするかたそなき
白妙の枕は今もくれなるのちしほや涙そめて朽なむ
まち侘てまくら定めぬうたゝれもかりそめなから幾よ積りぬ
床はあれて枕にこけの結び置し露の契りやあたにくちなん
しれはこそ夢にも人をみせつらめつけの枕よ物おしへせよ
もろ共になれし枕のかたみさへ今はあたなり夜な／＼そうき
心からをのれうちねぬ夜をへては枕のうへの夢のせきもり
さむしろに身はならはしの秋の風たか手枕のひまもとむらん
かくて世に古きまぐらの跡はあれと聞は空しき人のおもかけ
みるめかるかたをなしへよしきたへの枕の下にかよふあま
まくらとてれむかたもなし涙川うきて思ひのよるへしらねは
ありし夜のかたみもつらし菅こものならふに残るつけの小枕
枕たに人のきかくにかたるなよそれを今はおもふことゝて
しきたへのまぐらの下になく露はなきてぬるよの涙なりけり
いかにれしゆめのならひも絶はてゝよそに成行つけの小枕
いかにしてつけのをまぐらたのめしを苦深き迄待としらん

雜

曉述懷

うたゝれの夢てふ物を契りにて有し枕に残るおもかけ
契りあればあかつき深く聞鐘の行末かけて夢や覺なん
夢さむる身を曉のかれてしも月よりにしかゝるこゝろは
有明の月にむかへる住よしのまつことおほき我みなりけり
をのつからまた有明の月をみてすむともなしの憂にたへけり
限りあればけふも暮めとなかめつるきのふの鐘の曉のこゑ
鐘の音にこんよの夢も驚きて思ひしらるゝ明かたの空
思ふことまたつきはてぬななき夜のれ覺につくる鐘の音かな
たとりこしおとろのみちも踏分つ行すゑてらせ有明の月
おもふより曉ふかき寐さめかな我身に近き秋のしくれに
なかし眠さめぬかうちのうたゝれの一夜の夢を明るかひなき
曉はうき身をいとゝ秋のよの露なく物と袖やしるらん
我がくて今宵も明の衣手に老のれさめの露そちかつく
曉の寐さめに思ふ身のはてなしる人あらは哀とやみむ
あはれにもかならず老のれ覺とて曉ふかき夢を残れる
身のうさを思ひつゝけぬ曉になくらむ露の程なしらはや
しら露のをきゐていのる曉の空はさりとて我をしるらん
のとななる曉まさる身のうさにたへて幾よのはてなしらはや
おとろかす山端ちかき月かけにいそちの夢の名残をそとふ
いたつらに我よふけぬと眺むればはつかあまりの月を出ぬる
有明のつれなくみゆる曉もわか身の外にうき物そなき
晴くもる有明の月を待えても心の外と誰なかむらむ

思ふ事わするゝ夢のさむしろにいとふもしらぬかれの聲かな
閑中燈

これのみともなふ影も小夜更てひかりそうすき窓の燈火
ひとりのみ有明の月の入までに残りあらそふよはのともしひ
なかしよもひとりしぬれはまよるまてかゝけそ盡す秋の燈火
つく／＼と明行まとのともしひの有やとはかりとふ人もなし
人とはぬわかやいたく更ぬらんかけよはり行窓の燈
冬の夜のかけかれたる燈にはなれぬ影の猶ほのかなる
きえやうて残るかけこそ哀なれわかよふけそふ窓のともしひ
つたへ来て窓しつかなる君かよに光をそふる法のともしひ
深き夜の夢のなこりはほのかにて残る共なき秋のともしひ
つたへきて残るともなきともし火の窓に螢をつく人そなき
長きよの夢路たえ行窓のうちに猶残りける秋の燈
くらき雨の窓うつ音に人はこて影ほのかなる秋のともしひ
明ぬるか光もうすくなりけりむなしき床の秋のともし火
消やらぬひかりもしろく明にけり窓に残れるよひのともしひ
うきにそふ影より外の友もなししはしな消そ窓のともしひ
身のうへを思ふもかなし柴の戸に有かなきかの宵のともし火
山里はまよるより出る月かけにそむけもあへぬよはのともしひ
なかしよのやみは此よもかなしさに獨かゝくる閑のともしひ
なにとなく昔こひしき夜の雨におなししかたみの窓のともしひ
哀なりなかしよをくる燈のきえなむとするしのゝめの空
里はあれてみしはそれ共分かぬぬあらぬか窓に残るともし火
なか／＼にさひしき物を眞木の戸にありとしもなく残る燈ひ

山旅

吹まよふみやまのあらしよさむにてなれにし里の夢もまれ也
 おもかけに今なく露を茂り行むかしに越るうつの山みち
 さゝのやの袖しく程の陰もなしふるは涙のやまのしづくに
 わきてなと我しもたへぬ露けさそ山路は誰も旅人を行
 立かへり又もやこえむみれの雲あとも定めぬよものあらしに
 あつさ弓はる／＼きぬる旅衣かさなる山は秋かせそふく
 千早振神かき山も越ぬへし故郷人をおもふあまりに
 ならしはの露の露を分すて、うちむく山も秋風を吹
 都出し衣手かれてあさち山色かはり行あきかせそふく
 明やらぬ雲行みれに入にけりなくらぬ月の跡のみやまち
 ほとふれはわすれやしぬる故里にさやは契しさやの中山
 さてもぬる岩れのあらし身にしめて誰ならはしさやの中山
 たひ衣かさねぬ床の山かせも朝たつ空はあはれ也けり
 越わひてなくさむ山の月影もしけき木かけの外までそみる
 われのみと思ふ山路の夕暮にさきたつ雲の跡もさためす
 都出て遠山とりのなく／＼もひとりやれなむしらぬおのへに
 外山にはなを残りける哀かなかさなる峯のおくのゆふ暮
 しりしらす行あふ暮の旅人はかたみ山ちのすゑをとほるゝ
 あし曳の山路や遠きたひ人の跡よりうつむ嶺のしら雲
 故郷の空もたよりの月に又見しおもかけのさやの中山
 白雲のかさなる山の苔むしろしきりにぬるゝ我袂かな
 そてに又なれくる月の分けさへかさなる山の雲の下みち

海旅

ふる里の月はいくよかめくりあはむ波の敷そふとこのうら風
 わするなよ一夜なれぬる友ふれの出なん後の跡のしら波

あま衣たみのゝ嶋に宿とへは夕しほみちて田鶴を鳴なる
 明る夜の夕つけ鳥に立わかれ浦なみ遠く出るふな人
 影やとす袖はうきれの我からに月を藻にすむむし明のせと
 うちはへてあまのたくなはくくる人もいくよ渚にかち枕して
 漕出ぬと人に告へき便たにやそしま遠きあまのつり舟
 にしの海夕しほたとる波まよりこしかたしるく出る月かけ
 明くれの行さきしらぬ浪の上をかぜにまかせていつる舟人
 うきれする一よの袖をほしかれて思ひしらるゝ里のあま入
 暮かゝるすまのうら路の夕霧に漕行舟そよるへたつぬる
 わたつ海は道のしなりもなき空にたゝこきすくる跡のしら浪
 松かうらのとまりの磯と聞ものを名にもさはらすかへる浪哉
 暮ぬとてとまりにかゝる夕波にこと浦しるきあまのいさりひ
 衣手をしきつの浦のうき枕なみたも浪もかけぬまそなき
 ことしゆく新嶋もりの袖にしれましてならはぬよはのうら浪
 くるとあくといつかと待し波の上に都の山はけふそみえ行
 故郷もちかのうら浪こゝろせよかふたゝちの夢をのこして
 たひれするいそのとまやに月をみて浪の枕にゆめそたえぬる
 さたまらぬ風をしるへのあた波にその日もしらす故里の空
 思ひ出るむかしの浪に袖ぬれて又おりふするいせのはまおき
 故郷はとなき浦はの涙のみうき出て行あまのつりふれ

野旅

草まくら一夜の露を契りにて袖にわかるゝのへの月かけ
 草まくらかりれの庵野へいのほの／＼とお花かすゑに明るしのゝめ
 たひ衣いくのゝおはなかるしつの手たまもゆらになひく秋風
 のへの露うつりにけりなかり衣萩の下葉を分とせしまに

里遠き野中の庵に人はなし草の袂をまくらにそかる
都いて、草のまくらに結ふ露いくよかされてのへの初霜
霜かれの野寺のかれの夕月よたへてもぬへき旅の宿かは
しなかとりあなの、小笹かたしきて玉ちる床に月をみるかな
旅人の袖のなみたにかるかやの露そみたる、野邊のあき風
たれか又朝たつ野ちの末ならむ遠かたしるき袖のしの、め
わするなよ野への庵のきりくす今宵はかりの床にぬるとも
一むらの宿のこすゑにとひなれて野中の杜にけふはきにけり
あれはつる野中の庵にやとかれは住ける人の跡もはかなし
見渡はけふりはかりを立のほる里にちかつくのちの行末
なく鹿のなみたは袖にかり衣まくらならふる小野の草ふし
武蔵野にやとりはすへし旅ころもひとく花も露のゆかりそ
なかめやる遠の草はに立けふり野なかの庵のしるへかほなる
枕とてたのむ冬の、草ながら衣手かれてれむかたそなき
草まくら結ふ野はらのさと遠み鳥の音聞ぬ曉のそら
わするなよ契りて出し分路の野原のまくす秋風そふく
しられしな夏の、草のみちすから茂き思ひにむすはるとも
むさしのや何のゆかりの露がなくその色しらぬ草の枕に

寄松祝

龜山の岩れの松をふく風に千世のかすそふ瀧のしら玉
のりの花たえすならひの岡の松ともに千歳のかけはかはらし
たれまきし磯への小松君か世にいく度くちて生かはるらん
大かたの松の干とせはふりぬ共人のまことは君そかそへむ
神代よりまもるちかひのつきせねは君かちとせも住よしの松
君か代はたかの、山の峯の松まつも久しき月やみるへき

さ、れ石のいはほとならん苔の上に松もふりてや君にあひみん
ふりにけりいく世かへぬる竹くまの松はたけても末そ久しき
千世をへて君やみむろの岩れ松まつに久しき花の色かは
さ、れ石の巖となるを松かえにすむ鶴の子は君そそたてむ
いくちとせかきりかなきし君か代にならひの岡の松のむら立
住よしの松の干とせもかけはあれと君かみかけは猶そ久しき
君か代なときは山の岩れまついはれと茂きかけはみえけり
きみかよの限りそしらぬ高砂の松はふた、ひ生かはるとも
岡のへに生そふ松のかすく、に千歳をゆつる御代そのとき
契りなくまつときみとの行末をつもりん年のいつれたかけむ
すみよしの濱松かえにさく花のいくかへりとも君そかそへむ
松かけに萬代すめるのりの水結ふにつけてよはひのふ也
いくちよもときはかきはと契らん竹の園ふく松かせのこゑ
梓弓いそへの小松よろつ代の君かためしと誰もひくらむ
契りある高野の山の嶺のまつなを行末の千世もかはらし
千早ふる神やみかきの松のはにたえぬ干とせの色をそむらん

上皇勅書云。

五十首和歌事。已先例歟。其上者雖爲重代。無下末練之由
風聞候。不_レ可_レ然歟。雖_二人數之外_一。家長。光經。秀能尤_レ可_レ詠
輩等也。家長和歌所預也。光經依_二堪能_一已_レ被_レ聽_二昇殿_一。即_二獻_二
中殿會和歌者也。秀能於_二當世_一大畧無_二雙者_一也。於_二歌沙汰_一
者彼詠必_レ可_レ被_レ具者也。任_二建久例_一者僧詠定有_レ之歟。堪能
何人候哉不_レ審_二候_一。

八月二十二日

吹まよふみやまのあらしよきむにてなれにし里の夢もまれ也
おもかけに今なく露を茂り行むかしに越るうつの山みち
さゝのやの袖しく程の陰もなしふるは涙のやまのしづくに
わきてなと我しもたへぬ露けさそ山路は誰も旅人を行
立かへり又もやこえむみれの雲あとも定めぬよものあらしに
あつさ弓はる／＼きぬる旅衣かさなる山は秋かせそふく
千早振神かき山も越ぬへし故郷人をおもふあまりに
ならしはの露の露を分すてうちむく山も秋風を吹
都出し衣手かれてあさち山色かはり行あきかせそふく
明やらぬ雲行みれに入にけりなくらぬ月の跡のみやまち
はとふれはわすれやしぬる故里にさやは契しさやの中山
さてもぬる岩れのあらし身にしめて誰ならはしさやの中山
たひ衣かさねぬ床の山かせも朝たつ空はあはれ也けり
越わひてなくさむ山の月影もしけき木かけの外までそみる
われのみと思ふ山路の夕暮にさきたつ雲の跡もさためす
都出て遠山とりのなく／＼もひとりやれなむしらぬおのへに
外山にはなを残りける哀かなかさなる峯のおくのゆふ暮
しりしらす行あふ暮の旅人はかたみ山ちのすゑそとほるゝ
あし曳の山路や遠きたひ人の跡よりうつむ嶺のしら雲
故郷の空もたよりの月に又見しおもかけのさやの中山
白雲のかさなる山の苔むしろしきりにぬるゝ我袂かな
そてに又なれくる月の分けさへかさなる山の雲の下みち

海旅

ふる里の月はいくよかめくりあはむ波の敷そふとこのうら風
わするなよ一夜なれぬる友ふれの出なん後の跡のしら波

あま衣たみのゝ嶋に宿とへは夕しほみちて田鶴を鳴なる
明る夜の夕つけ鳥に立わかれ浦なみ遠く出るふな人
影やとす袖はうきれの我からに月を藻にすむむし明のせと
うちはへてあまのたくなはくくる人もいくよ渚にかち枕して
漕出ぬと人に告へき便たにやそしま遠きあまのつり舟
にしの海夕しほたとる波まよりこしかたしるく出る月かけ
明くれの行さきしらぬ浪の上をかぜにまかせていつる舟人
うきれする一よの袖をほしかれて思ひしらるゝ里のあま入
暮かゝるすまのうら路の夕霧に漕行舟そよるへたつぬる
わたつ海は道のしなりもなき空にたゝこきすくる跡のしら浪
松かうら^{セイ}らのとまりの磯と聞ものを名にもさはらすかへる浪哉
暮ぬとてとまりにかゝる夕波にこと浦しるきあまのいさりひ
衣手をしきつの浦のうき枕なみたも涙もかけぬまそなき
ことしゆく新嶋もりの袖にしれましてならはぬよはのうら浪
くるとあくといつかと待し波の上に都の山はけふそみえ行
故郷もちかのうら浪こゝろせよかふたゝちの夢をのこして
たひれするいそのとまやに月をみて浪の枕にゆめそたえぬる
さたまらぬ風をしるへのあた波にその日もしらす故里の空
思ひ出るむかしの浪に袖ぬれて又おりふするいせのはまおき
故郷はとをき浦はの涙のみうき出て行あまのつりふれ

野旅

草まくら一夜の露を契りにて袖にわかるゝのへの月かけ
草まくらかりれの庵^{野ヘイ}のほの／＼とお花かすゑに明るしのゝめ
たひ衣いくのゝおはなかるしつの手たまもゆらになひく秋風
のへの露うつりにけりなかり衣萩の下葉を分とせしまに

里遠き野中の庵に人はなし草の袂をまくらにそかる
都いて、草のまくらに結ふ露いくよかされてのへの初霜
霜かれの野寺のかれの夕月よたへてもぬへき旅の宿かは
しなかとりあなの、小笹かたしきて玉ちる床に月をみるかな
旅人の袖のなみたにかるかやの露をみたる、野邊のあき風
たれか又朝たつ野ちの末ならむ遠かたしるき袖のしの、め
わするなよ野への庵のきりくす今宵はかりの床にぬるとも
一むらの宿のこすゑにとひなれて野中の杜にけふはきにけり
あれはつる野中の庵にやとかれは住ける人の跡もはかなし
見渡はけふりはかりを立のほる里にちかつくのちの行末
なく鹿のなみたは袖にかり衣まくらならふる小野の草ふし
武蔵野にやとりはすへし旅ころもひとく花も露のゆかりそ
なかめやる遠の草はに立けふり野なかの庵のしるへかほなる
枕とてたのむ冬の、草ながら衣手かれてれむかたそなき
草まくら結ふ野はらのさと遠み鳥の音聞ぬ曉のそら
わするなよ契りて出し分路の野原のまくす秋風そふく
しられしな夏の、草のみちすから茂き思ひにむすはるるとも
むさしのや何のゆかりの露がなくその色しらぬ草の枕に

寄松祝

龜山の岩れの松をふく風に千世のかすそふ瀧のしら玉
のりの花たえすならひの岡の松ともに千歳のかけはかはらし
たれまきし磯への小松君か世にいく度くちて生かはるらん
大かたの松の干とせはふりぬ共人のまことは君そかそへむ
神代よりまもるちかひのつきせねは君かちとせも住よしの松
君か代はたかの、山の峯の松まつも久しき月やみるへき

さ、れ石のいはほとならん苔の上に松もふりてや君にあひみん
ふりにけりいく世かへぬる竹くまの松はたけても末そ久しき
千世をへて君やみむろの岩れ松まつに久しき花の色かは
さ、れ石の巖となるを松かえにすむ鶴の子は君そそたてむ
いくちとせかきりかなをさし君か代にならひの岡の松のむら立
住よしの松の干とせもかけはあれと君かみかけは猶そ久しき
君か代なときはの山の岩れまついはれと茂きかけはみえけり
きみかよの限りそしらぬ高砂の松はふた、ひ生かはるとも
岡のへに生そふ松のかすく千歳をゆつる御代そのときき
契りなくまつときみとの行末をつもりん年のいつれたかけむ
すみよしの濱松かえにさく花のいくかへりとも君そかそへむ
松かけに萬代すめるのりの水結ふにつけてよはひのふ也
いくちよもときはかきはと契らん竹の園ふく松かせのこふ
梓弓いそへの小松よろつ代の君かためしと誰もひくらむ
契りある高野の山の嶺のまつなを行末の千世もかはらし
千早ふる神やみかきの松のはにたえぬ干とせの色をそむらん

上皇勅書云。

五十首和歌事。已先例歟。其上者雖爲重代。無下未練之由
風聞候。不_レ可_レ然歟。雖_二人數之外_一。家長。光經。秀能尤可_レ詠
輩等也。家長和歌所預也。光經依_二堪能_一已被_二聽_一昇殿。卽獻_二
中殿會和歌者也。秀能於_二當世_一大畧無_二雙者_一也。於_二歌沙汰_一
者彼詠必可_レ被_レ具者也。任_二建久例_一者僧詠定有_レ之歟。堪能
何人候哉不_レ審_二候_一。

八月二十二日

五十首和歌。加ニ一見ニ返ニ獻之。五卷詠不ニ用捨。皆以神妙也。
就中於ニ隆昭詠ニ者事外物候也。凡提翫之餘悉加ニ愚點ニ畢。
不レ顯ニ後見嘲諷ニ。愚意所レ及隨ニ歌淺深。存ニ點長短。旁以可
レ令ニ猶豫ニ次第候歟。抑定家。家隆。秀能等之詠之外。大畧異
樣無レ極候。不レ足レ言次第候。其中如ニ家衡詠之中。求ニ一首
猶以難レ得。可レ謂ニ未曾有。中々定範なとは無ニ過失ニ候。

十月十四日

建保六年 御覽廿三

出題

定家卿

御點

上皇

右道助法親王家五十首和歌以兩本校正了

群書類從卷第百七十八

和歌部卅三

新古今和歌集竟宴倭歌

後鳥羽御製

新古今和歌集竟宴

和歌

いそのかみふるきないまにならへこし
むかしのあとをまたつれつゝ

暮春新古今和歌集竟宴高一尺一寸七分
端六寸

應 製倭歌

攝政太政大臣從一位臣藤原朝臣良經上

しきしまやゝまこと

はのうみにしてひろ

ひしたまはみかゝれ

にけり

暮春陪新古今和歌集竟宴高一尺一寸五分
端四寸五分

應 製一首

從一位行皇太弟傳臣藤原朝臣賴實上

わかのうらなみものと

けきみやなれはかき
あつめたるたまもし
ほくさ

暮春陪新古今和歌集竟宴高一尺一寸四分
端四寸五分

太上皇應 製一首

從二位行權中納言兼左衛門督臣源朝臣通光上

ちよまてとよするたま

もなかきつめてなみ

もいくよのわかのうら

風

暮春陪新古今和歌集高一尺一寸七分
端五寸五分

竟宴應

太上皇製倭歌

參議正三位行右衛門介兼備中權守臣源朝臣通具上

むかしいまのむかしな

うつすたまのこゑこゑく

きみかちよそきこゆる

春日陪新古今和歌集竟宴高一尺一寸五分
端四寸

同詠一首應 太上皇製倭歌

參議正三位行伊豫權守臣藤原朝臣隆衡上

よるつよのことは
いまやしけからむ
けふふきそむるわかの
うら風

暮春新古今和歌集竟宴應高一尺一寸三分
端三寸七分

太上皇製和歌

正三位臣藤原朝臣經家上

ふりにけるあとにまか
するみつくきもなむ
ゆくすゑのためしに
そかく

暮春新古今和歌集竟宴應高一尺一寸八分
端四寸

太上皇製和歌

大藏卿正四位下兼行長門權守臣藤原朝臣有家上

しきしまやゝまとし
まねのかせのつてけ
ふのためとやたえすふ
きけむ

春日陪 太上皇仙洞新古今集高一尺一寸二分
端五寸

竟宴應 製和歌

正四位下行左近衛中將臣藤原朝臣經通上
いくちたひきみかみ

ことのけふにあはむ和歌
のうらかせふきつた
へつゝ

春日新古今和歌集竟宴應高一尺一寸五分
端四寸

太上皇和歌

散位正四位下臣藤原朝臣保季上

わかきみのなかきた
からとしきしまやゝま
とことのはかきあつ
むらむ

暮春新古今和歌集竟宴應高一尺一寸三分
端三寸五分

太上皇製和歌

散位正四位下臣藤原朝臣家衡上

よるなみもこゑしつむ
らしいにしへにいま
ふきかよふわかのう
らかせ

春日陪新古今和歌集竟宴應高一尺一寸六分
端三寸一分

製和歌

前上總介從四位上臣藤原朝臣家隆上

きみすめはよするたま
もゝみかきいてつ
ちよもつたへよわかのう
らかせ

春日侍新古今和歌集竟宴應^{高一尺一寸一分}

太上皇製和歌

正五位下行左近衛權少將兼加賀權介臣藤原朝臣雅經上
きみかよになれぬる
わかのうらかせに
あまねきなみやしま
のほかまで

暮春侍新古今和歌集竟宴應^{高一尺一寸八分}

太上皇製和歌

防鴨河使正五位下行左衛門權佐臣藤原朝臣親房上
ふりにけることはとては
あつむれとむかしはかゝる
ためしやはある

春日陪新古今和歌集竟宴應^{高一尺一寸五分}

應 太上皇製和歌

正五位下行宮内少輔臣平朝臣宗宣上
なかきよのためし
なるかなしきしまや
やまとみことのゆくすゑ
のはる

暮春侍新古今和歌集竟宴應^{高一尺一寸五分}

太上皇製和歌

左近衛權少將正五位下兼行阿波權介臣藤原朝臣忠定上
みなひとのことはの

つゆもあらはれて

はこやの山にみかく

月かけ

春日陪新古今和歌集竟宴應^{高一尺一寸四分}

太上皇製和歌

從五位上行左兵衛佐臣源朝臣具親上
ふくかせものときき
みのよゝのあとむかし
にかへるわかのうらなみ

春日陪新古今和歌集竟宴應^{高一尺一寸五分}

太上皇製和歌

從五位下守兵庫頭臣源朝臣家長上
わかのうらにもしほもる
みのいとまなみけふより
のちやたちもはなれむ

春日侍新古今和歌集竟宴應^{高一尺一寸九分}

太上皇製和歌

正六位上行左近衛將監臣藤原朝臣清範^{三本皆上字无}

よものうみのうらく

ことにたつれみてひ

ろへるたまのこゑもあ

りけり
春日侍新古今和歌集竟宴應^{高一尺一寸九分}

應 製倭歌

正六位上行主馬首兼左衛門少尉臣藤原朝臣秀能上

いくちよもことはの

はなのいるにみよむか

しもきかねはるのま

とるな

元久二年三月廿六日新古今和歌集竟宴

和歌

御製講師

右衛門督通具

講師

前上總介家隆

讀師

前太政大臣

正安三年十一月廿六日已上透而寫畢

本白 内裏被下之

右新古今和歌集竟宴和歌以長鹽信行藏本書寫以一本按
正畢兩本脱御製今據白雲書庫本補之件本家隆卿筆云々
稱異本者是也

續古今和歌集竟宴倭歌

後醍醐御製

續古今和歌集竟宴

和歌

三代までに古今

の

名もふり

ぬ

光おみかけ

玉つしま

姫

紅藻標 淡唐花 紫小鳥

大宮院權中納言

わかのうらにかき

あつめたることの

はや

世々にたえせぬ

ためしなる

白藻標 泥下繪 古今序の心をかく

中納言

ことのほのつゆの

たまぬくあなや

きの

いとのとえすそ

よゝにつたへ

暮春續古今倭歌集竟宴

む

應 製和歌

關白從一位臣藤原朝臣實經上

おりえたるやまとこ
とはのはなのいろをみ
とりのほらの月に見
るかな

春日續古今和歌集竟宴

應 製倭歌

從一位臣藤原朝臣公相上

むかしいまひろへる
たまもかすかすに
ひかりをそふるわかの
うら浪

春日侍續古今和歌集竟宴應

太上皇製和歌

從一位臣藤原朝臣實雄上

わかくにのなかきた
からと君か代に
ふたゝひつけるやまと
事の葉

春日陪續古今和歌集竟宴

同詠一首應 太上皇製和歌

正二位行兵部卿臣藤原朝臣隆親上

もしほくさいにしへ
いまをかきとめてみ
たひつたふるわかのう
らかせ

春日陪續古今和歌集竟宴應

太上皇製和歌

正二位行大納言臣藤原朝臣良教上

ゆくすゑのちとせもし
るしわかの浦にもとの
ひさしきあとおた
つれて

春日陪續古今和歌集竟宴應

太上皇製和歌

正二位臣藤原朝臣實季上

いくちよもきみゝん
とてやひろふらんわか
のうらわによするし
らたま

春日侍續古今和歌集竟宴應

太上皇製倭歌

正二位行權大納言兼皇后宮大夫臣藤原朝臣師繼上

あつめつくいにしへ
いまのことの葉のかす
も千とせのためしな
りけり

春日侍續古今和歌集竟宴應

太上皇製和歌

正二位行權大納言兼右近衛大將臣藤原朝臣通雅上

かすく／＼にみかくたま

ものあらはれて三代

しつかなる和歌の

浦なみ

暮春侍續古今和歌集竟宴應

太上皇製和歌

正二位行權大納言兼中宮大夫臣源朝臣雅忠上

ゆくすゑのためしなる

へきいにしへになむ

たちまさるわかのうち

らなみ

暮春侍續古今和歌集竟宴

應 製倭歌

正二位行權大納言兼左近衛大將臣藤原朝臣家經上

つきもせしはまのまさ

このかすおほくいま

もつもれるやまところ

とのほ

春日侍續古今和歌集竟宴應

太上皇製和歌

正二位行中納言兼侍從臣藤原朝臣爲氏上

わかのうらにみかける

たまなひろひをきて
いにしへいまのかすな
みる哉

春日侍續古今和歌集竟宴應

太上皇製和歌

正二位行權中納言臣藤原朝臣長雅上

於奈新名乎萬多者喜

計登裳伊丹志邊能安東

任古盈堂類王賀乃宇

良奈美

春日侍續古今和歌集竟宴應

太上皇製和歌

參議正三位行右近衛權中將臣藤原朝臣經平上

きみはなをよろつ代ま

てもわかのうらにみか

かむたまのかすやつ

もらむ

春日侍續古今和歌集竟宴應

太上皇製倭歌

參議正三位行左兵衛督兼伊與權守臣藤原朝臣高定上

わかのうらや代々にも

ひろふたまなれとこの

たひはかりみかける

はなし

春日侍續古今和歌集竟宴應

太上皇製和歌

參議正三位臣源朝臣實平上

いにしへに今たちかへる
和歌のうらのなみも
千とせのかすはみ
えけり

暮春續古今和歌集竟宴應

太上皇製和歌

正三位行右京大夫臣藤原朝臣行家上

しきしまのみちの光
とまきくのなかに
みかけるたまを見
るかな

春日侍續古今和歌集竟宴應

太上皇製和歌

正三位行右兵衛督臣藤原朝臣爲教上

いまもなわかのうら
かせたえすしてまた
たまみかく御代にあ
ふかな

春日侍續古今和歌集

竟宴應

太上皇製和歌

正三位行左近衛權中將臣藤原朝臣公雄上

いにしへもいまもかはら

すわかきみの御代
にかすそふやまとこ
との葉
春日侍續古今和歌集竟宴應

太上皇製和歌

造東大寺長官參議正四位行左大弁臣源朝臣雅言上段雙

わかきみの御代をかし
こみいにしへにな
たちまさるわか
うらなみ

春日侍續古今和歌集

竟宴應

太上皇製和歌

藏人頭正四位行右近衛權中將臣源朝臣具氏上
けふやまた代々のた
めしなくりかへし
まさ木のかつらなかくつ
たへむ

春日侍續古今和歌集竟宴應

太上皇製和歌

正五位上行左少弁兼皇后宮大進臣藤原朝臣經任上

いにしへもいまも
かはらぬあといめて
たまもなみかくわかの
うら浪

暮春續古今和歌集竟宴應

太上皇製和歌

右近衛權少將正五位下臣藤原朝臣隆博上

まつの葉のちらぬを

御代のためしにてなと

ふきまさるわかのを

らかせ

文永三年三月十二日續古今和歌集竟宴和歌

御製講師中納言爲氏

講師具氏朝臣

讀師前太政大臣

御製講師可有奥歟而今度

銘如件被書之

右續古今和歌集竟宴倭歌以爲氏卿筆本不違一字書寫按

令畢按公卿補任及職事補任雅言朝臣上階具氏朝臣下階

而不書上下字蓋脫字乎

文治六年女御入内御屏風和歌

題

正月 小朝拜 子日 霞 二月 春日祭 鶯 梅

三月 春駒 櫻 藤花 四月 更衣 葵 早苗

五月 郭公 菖蒲 瞿麥 六月 山井納涼 夏草 六月 秋風 野花 鹿 網代 鶴 田家

七月 菊 紅葉 霧 鷹狩 八月 神樂 雪 歲暮

九月 五節參入 臨時祭 鷹狩 十月 千鳥 網代 鶴 田家

十一月 泥繪御屏風 十二月 神樂 雪 歲暮

夏 納涼 冬 氷

作者

攝政太政大臣 後法親寺殿

右大臣 三條實房

從三位季經卿 前宮内親

定家朝臣 左近權少將

月次十二帖 各三十六首

正月

小朝拜

殿下

立そむる春の光とみゆるかなほしなつらぬる雲の上人

左 府

右 府

左 大將

前宮内卿

隆信朝臣

定家朝臣

三位入道

子日 野瀬小松はらに子日したる所

むらさきの袖にもあまる嬉しさよ立ぬかなつるけふにも有哉
袖たれて玉しく庭をうちらはひふしてそ春の初とはしる
たちそむる雲井の春は諸人の袖をつらぬる庭に見えけり
色々につらなる袖はみゆれともたちぬのさまはかはらざり見
河竹の千世をこめたる庭に出ておきふし君をいはふ諸人
霞しく春のはしめの庭のおもに先たちわたる雲の上人
こゝのへや玉しく庭に紫の袖をつらぬる千世のはつ春

けふよりは君にひかるゝ姫小松いく萬代か春にあふへき
千世までといはふ子日は君か代のよはひも松もまた二葉なり
ちよ経へき春日のゝへの姫小松長くたもてるためしをそひく
春日野のこまつに雪を引そへてかつゝ千世の花咲にけり
又さらに子日の松は引にこむけふのちよなは君にゆつりて
ことしより千年のかけなならへよと二葉の松をためしにそ引
小松はら春の日影にひきつれてちよのけしきを空にみる哉
春日野のけふの子日の松を社千世のためしにひくへかりけれ
霞 住吉松に霞たちたるころ

さひしきはなな住吉の朝ほらけ松やはかすむ難波江の春

住吉の濱松かえのたえ間より霞てみゆる淡路しま山
すみよしの松にかゝれる夕霞千年をいのるためし成けり
詠やる遠里なのはほのかにてかすみにのこる松のかせかな
やへ霞ふかくみとりをこめつれば千年はもれし住吉の松
山たかみ霞を分てなかわれははるかにみゆるすみよしの松
春かすみいまゆくすゑをゝしこめて思ふもとなき住吉の松
霞しく春の光になかむれば千とせはしるしすみよしの松

二月

春日祭

けふまつる神の心やなひくらむしてに波たつさほの河かせ
天の下君かさかへはけふまつるみかさの山の神のまにゝ
けふまつるみかさの山のはふりこは天の下を祈りこひける
いく春のけふのまつりな三笠山峯の朝日の末もはるかに
けふまつるみかさの山の神風はのとけきあめのしたにや有ん
今日まつる三笠の山の名におへる大宮人もさして來にけり
みかさ山さしけるつかひけふくれはすき間にみゆる袖の色々
春の日も光ことにやてらすらん玉くしのはにかゝるしらゆふ

鶯 人線花中に鶯ある所

緑なるうは毛のみかは鶯のこゑさへ春の色になくらむ
鶯のひなひきつれてあさゝらす花のぬくらなしめてけるかな
花のみはひるのみましか鶯のぬくらの竹をおき出てゐる
春の日の長閑にかすむ梢よりうちとけそむる鶯のこゑ
か計に梅のにははぬ宿ならはまれにやきかん鶯のこゑ
鶯の聲の色さへ身にしむは花のなよりにきけはなりけり

里わかれ春の光をしりかほに宿をたつれてきゐる鶯
谷を出てたか木にうつる鶯は花さく宿のありす成けり

梅 人家井野邊に梅花さきたる所

梅かゝをほかへや風のさそはまし夜ふかく明ぬ横の戸ならは
むめの花にほふにしるし我宿の久しき春にあはん物とは
開そむる若木の梅の年なへて匂ひをまさむ末そゆかしき
梅のはなにほふのへにてけふ暮ぬ宿の梢をたれたつねらむ
いつれなが先はとふへき此里も梅のにはほ宿なかりけり
をしなへて野面にはふ梅よりも宿のかきれを先はとはなん
遠近の匂ひは色にしられけり横の戸過る梅下かせ
野邊にさく梅のにはひもたえぬれば宿の花こそあるし成けれ

三月

春駒 溪邊春駒

花の山に駒さへはなつみよなれば我しも春にあふとしらすや
草も木もきみかめくみに逢春は溪邊の駒もけしきことなる
おり立て野澤に駒のあさるかなまたみこもれる芦のわか葉を
霜かれしはらののさはの浅みとり駒も心は春にそめけり
野澤にはおなしかけなる駒なれと引かへてけり春のけしきは
芦めくむ澤への駒のけしきまでつねの春にはひきかへてけり
春ふかく澤邊のまこも崩ぬれば立もはなれすあさる駒哉
春駒の野澤になるゝけしきにて芦の若葉のほとそしらるゝ

櫻 山野井人家さくら盛に咲たる所

櫻花風ものとききみよに逢てちらぬ春をしかさぬへきかな
花さかりわきそかれつる我宿は雲のやへたつ峯なられとも

吹かせに散とも見えす山櫻花はけふこそさかり成けれ
をしなへて雲にきはなき花盛りつくもおなしみよしのゝ山
櫻花開みちにけるうれしさ霞の袖につゝみつるかな
野も山もあまれき花の匂ひにて思ひひらくる春を知らない
もろ人の心にかほる花さかり長閑きみよも色に見えけり
峯の雲野への霞もかほりあひて春にむすへる宿とこそみれ

藤花 人家庭に藤花盛にさきたる所

たのもしなけふもかひある姫小松かゝれる藤のゆく末の春
兼てより汀の松のしるきかなきたの藤なみかゝるへしとは
春の日のめくみもしるく見ゆるかなたゝせぬ北の家の藤なみ
萬世は春しりそむる藤の花宿は雲へとみする成けり
よはひなほ松にかゝりて藤の花久しく匂へ宿のかさしに
代々をへて絶せぬ藤のはなさかりかゝる春にも逢にけるかな
春の日の光てります庭の面に昔にかゝる宿の藤なみ
池水はしつかにすみて紫の雲たちのほるやとの藤なみ

夏四月

更衣 人家に更衣したる所

春もおしあつさもまたしいなやそれ卯月のけふの蟬のは衣
けふよりは卵の華かきもしろたへの衣かへして見えわたる哉
夏衣たち出てみれば卵花のかきれさへきるしらかさねかな
けふよりは千世をかされむはしめとてまつひとへなる夏衣哉
ちかふるうすき袂は花を見し春をへたつる衣なりけり
限ありて花色衣ぬきかふと千里の春もおもかはりする
けふことにひとへにかふる夏衣なを幾とせをかされてかきむ

しろたへにけふたちかふる夏衣千世にかはらぬ色にそ有ける
葵 萱茂下御神饗邊に葵付人あり

れきかけついつきの宮のあふひ草今よりたゆな神のしるしに
いくかへりけふのみあれに葵草たのみをかけて年のへぬらん
けふはみなともに葵をかさすかな頼むみなやの神のしるしに
今日みればかものみあれに葵草人のかみにもかけてけるかな
朝夕にたのみをかけて過れともけふめつらしき葵草かな
千早振神にかけつるかひ有て君か八千世にあふひ成けり
千はやふるかも水かき年をへていく世のけふに葵なるらん
神世よりいかに契てみあれひくけふにあふひをかさし初けむ
早苗 うへたる所

植わたす伏見の田子の旅れにはさなへそ草の枕成ける
苗代のみな口まつりいくしたて急げやたこのてまはなくとも
小山田におり立田子のほかに又水のそこにもさなへととりけり
早苗とる田子のころはしられ共そよきし秋の風そまたるゝ
急きとる竹田の里のさなへ哉ふしたつまでにおいやしぬらん
限なき君かみしれの早苗をはいくよろつよかとりかさぬへき
あめのしたけしきもしるくるとるなへは水を心に先そまかす
數知らす田子のおほくもみゆるかな千町の早苗とれは成けり

自正月至于四月獨河ノ大納言清春。自五月至于八月伊經實之。

五月

郭公 人家邊郭公ある所
時鳥過ぬるあとにおもふかな名残はまつにまさる成けり
ほととぎす雲の上よりかたらひてとはぬになる明はのゝ空

ほのかにそ鳴て過なる時鳥くも間の月やなれかともなる
思しれ有明かたのほととぎすさこそは誰もあかぬ名残を
聞人の心のみかはほととぎすなれも雲ちはゆくふしられし
すきぬとや人はきくらむ時鳥心にとまるあか月のこゑ
いく里の人にまたれて郭公宿のこすゑに聲ならすらむ
雲路にて夜半にかたらふほととぎす千年きく共あかしと思

菖蒲

真菖かりたる所又人家にふくも

君か代のためしあらはすなき根は何れの沼のあやめなる覽
いかばかり茂るあやめそみな人の宿にもふきつ枕にもゆふ
あやめ草このふしなやとのへて玉の淀野にけふはふく覽
風吹はよはの枕にかはす也軒のあやめのおなし匂な
幾とせとかきらぬにひくあやめ草久しき宿の妻と頼まむ
長きれも猶しあかれは菖蒲草君かためしにひきはくらへし
あやめ草長き契をねにそへて千世のさ月と祝ふけふかな
絶すひく淀野の澤のあやめ草猶萬世もねはとむらん

瞿麥

人家庭に瞿麥さきたる所

立よればいつらあつさのまさりけるおる手にかゝる床夏の花
床夏のいつもかはらぬ色なれば君か宿にはむへし花さく
二葉よりしめゆひたつる撫子の花咲けふに逢やうれしき
ませの内に君か種まく床夏の花のさかりを見るそ嬉しき
たくひなき錦をしける心地してとこめつらなる撫子のはな
久しかれ君千世ませの河竹に色はへまさる床夏のはな
種まきてちりたにすゑぬ床夏の花の盛は君のみを見ん
宿からにさかり久しき床夏は千世の秋にもあはんとやする

六月

山井納涼 人家にも有

岩井くむあたりのをさゝ玉こえてかつゝ結ふ秋の夕露
山の井の清水むすひて日はくれぬ月とゝもにや宿をからまし
結ふ手にとりてや夏をすてつらんあたり涼しき宿の眞清水
山陰にいつか清水のさゝ波に秋をよすなりならの下かせ
夏衣袂にかせはふかれともむすふ泉は秋にかはらす
岩間もる水に心のうかひきて結ふちきりの程を知らな
なかし日に春秋とめる宿やこれ結へは夏もしらぬまし水
立とまるほとたに涼し山のゐにすむらん里の人をしと思ふ

夏草

日數ゆく野はらしのはら夏ふかし分いる袖の露の草すり
下草の茂みをしまみ夕涼みたちをやらぬおほあきのもり
夏草は日なへてふかく成にけり淺みとりなる野へと見しまに
涼みにと分いる道は夏ふかしすそのにつゝく杜の下くさ
霜かれし野へのけしきと見えぬかな道分かねる杜の下くさ
風のなともまたき秋とそきこゆなる下草なひく杜の木かけは
分ゆけは夏のふかさをしられる杜の下草末もはるかに
夏ふかみのへのさゆり葉風過て秋おもほゆる杜の陰かな

六月菰

みそきするかへさを秋やむかふらむ袂にふけぬ夜半の河かせ
萬世といはふみそきはますけよきそかの河原の夕暮の空
御菰する汀にたつる麻の葉は又夕なみをかけてけるかな
夏の日なかれてみそきにすつるかなあすこそ秋の初と思に
みそきしてたつるいくしの河風になひくや神のこゝろ成らん

秋七月

秋風

山野井人家に秋風吹たる所

野はらより秋のなさをけをさそひきて籬の萩に風つたふ也
いつもきくふもとの里と思へともきのふにかはる山嵐のかせ
櫛の戸をたゝく嵐にこたふれば萩のうはゝやあるし成らん
夕されは野山の錦いかならむ秋かせたちぬ庭の萩原
過かてに萩ふくかせと思ふらんをこそすなれま木の板戸に
をしなへて萩吹風のなとさへそのとき秋をしらせかほなる
照月の光そふへき秋きぬときくも涼しき萩の上かせ
松かせをすそのゝ萩のつたへきて千年の秋と宿に告なる

野花

見渡せば千種の花のひとけてこゝろやらるゝ秋のゝへかな
萩が花玉しく庭にうつし植て露をきながら千世の秋見ん
色なりと思ひとかむな女郎華又さくのへにうつるこゝろを
秋の野の千種の色を我宿に心よりこそうつしそめつれ
しら露はなきて見んとも思ふらんさのみうつさし花の色々
宮古人千くさなからにうつし植はのへには残る花やなからむ
をしなへて花に心はいりにけりのへの千種を分るもろ人
もろ人の千種の花の時にあへる心々を野へにみるかな
鹿
ねきことを神やうけひく春日山いかきのおくのさをしかの聲

足引の山は萬世よはふなりしかも聲をやたくふへらなる
萬世とさこそはよはふ山ならめ鹿のこゑさへきゝなされけり
春日山松の嵐にこゑそへてしかもちとせの秋とつくなり
さな鹿の萩が花つましからみて伏見のへをよかれさりけり
風のなともものときき御世はさな鹿の聲のみ秋のけしきなる哉
かすか山朝日まつ間の明ほのに鹿もかひある秋と告なり
春日山萬世よはふ松かせに鹿も秋をはしるにやあるらむ

八月

月

秋の月やとる清水となりぬればいつれもおなし廣澤の池
月ゆへにまかする水にあられとも久しくかけなとむへき哉
さやけさは空にあまりて池水のそこまですめる夜半の月かな
雲はるゝみそらや池にとるらむみな底よりも月は出けり
池水に雲ゑの空をうつしもて手にとるはかり月をみるかな
萬世もすむへき宿の池水にのとかにやとれ秋のよの月
天つかせみかゝ雲ゑにてる月の光をうつす宿の池水
池水にのどけき月をうつしもて心はれたるやとのもろ人

駒迎

吾妻よりけふ逢坂に引駒のなつますなから關の岩かと
逢坂の關の清水に諸人の駒むかへゆくかけそうつれる
たちのほる月の影をもむかへけり關をこえつる駒にまかせて
あつまよりけふ逢坂の關こえてみやこに出る望月のこま
はるゝとたちの、牧に引駒のなつますこえぬ相坂の關
ひく駒やちかくなるらし相坂の關の岩かととひゝくなり

關水のかけもさやかに見ゆるかなにこりなき世の望月のこま
君か代に逢坂山關水もかけしつかなるもち月の駒

田家

荊田よりおくの野へにやつたふらんいなはに風の音信てゆく
風たにもあらくはふかぬ御世なれはいれにけらしな門田もる賤
いなむしる敷わたしたる宿なれはあるしり旅の心ちこそすれ
山田もるしつかいほりになとつれて稻葉にやとる秋の夕かせ
秋かせになひくいなはの絶間よりほのかに見ゆる賤かしは庵
驚かすいなはの風にうちそへてもるひまもなし芦の八重ふき
秋深き山田の鳴こなしなへておさまれる世のためしにそひく
秋の田の五百代田より家おしてちつかやなしね摘んとすらむ

九月

月 自九月至于嵯峨左大將慶御清書

菊

末むすふ人さへのふるよはひかな千世をやうつす菊の下水
幾秋も何かしほれむ足引の山路の菊の露もさなから
しら菊の花を千とせの友として山路に秋をくる成けり
君か世に匂ふ山路のしらさくはいく夏露のぬれてはすらむ
年へたるふかきみ山の仙人は幾世の秋の菊をみつらむ
露の間に千代ふる人のととてや山路の菊の咲かさぬらん
限なき山路のきくのかけなれば露もや千代を契をくらむ
仙人のおる袖にほふ菊の露打ばらふにも千世はへぬへし

紅葉

すそ野より峯の梢にうつりきてさかり久しき秋の色かな
木のもとに又吹返すから錦大宮人にみまししかせむ

花の春あかす思ひし心こそ紅葉の秋もかはらさりけれ
秋霧の晴ゆくまゝに色みえて風もこのはをそむる成けり
いつこをもやしほの岡といひつへし薄き紅葉の色しなけれは
常よりものとけかるへき秋なれば散ぬもみちの色をみるかな
うつしうふる花も紅葉もおりに尋る人の心をそしる
尋見る麓の里のもみち葉にこれよりふかきおくそしらるゝ

霧

つれよりもふかきたくもの煙かなしほ屋をこめて霧や立らん
むこ海の朝霧かくれこく舟にたくふやまかふ木のはなるらむ
朝霧の絶まゝを詠ればむらゝになつ沖津しらなみ
ほのくゝと明石の沖を見渡は霧の絶間に沖津しらなみ
はるくゝといつくまてとも見えさりし鹽路は霧に埋れにけり
磯つたひそことも見えぬ朝きりに立こめられぬ波の音がな
たちまさる浦半の霧に長月の日敷計をあらはにそみる
すまの關秋のひかすをやらしとや浦ちをこめて霧立にけり

冬十月

千鳥

小夜ちとり更行なみにうちそへてうきれの床に聲をくる也
明ぬも見ゆるこ嶋の波のうへに雲間を分て千鳥とわたる
在明の空に千鳥のこゑす也月のいてしほみちやしぬらむ
友千とり沖の小嶋にうつるなり岸の松かせ夜寒なるらし
風寒ると嶋か磯のむら千鳥たちぬは波のこゝろ也けり
八千世とそ千鳥鳴なるしほの山さしての磯の跡を尋て
君か代をやちよとつくるさよ千とり嶋の外まで聲きこゆなり

よもの海のあまの鹽屋も數をひて浦半の千鳥千世よはふ也

網代

散積る木のはのしたをみぬ程はまたひをよらぬせゝの網代木
風吹は紅葉とゝもによるひを、波かさなりとおもひけるかな
見渡せば瀬々の網代木てにかけてほすや紅葉の錦なるらん
もみち葉を都の人の心まで日をへてよするせゝの網代木
もろ人の日をへて絶ぬ網代かなほかに心をよせずや有らん
紅葉ちるうちの網代はひをへつゝ花の都の人もよりけり
此ころは瀬々の網代に日をへつゝ言とふ人のたゆる間をなき
絶すゝむ八十うち河の網代木にいくよ紅葉の錦かくらん

鶴

難波かたうはゝの霜に涙こそは芦間に洗ふ鶴毛ころも
難波瀉芦のあなたにはむたつのかくれぬまてに霜かれにけり
難波瀉あしのうれこす鹽風を身に寒しとやたつの鳴らん
なにはかた芦はかれはに成にけり霜をかさぬる鶴の毛衣
冬こもる芦まにたてる友鶴は千年の春を待にや有らん
君か世は芦へのたつの聲にさへおもふ心をあらはれにけり
ゆく末もいく世の霜か置そへん芦間にみゆる鶴の毛衣
難波瀉あしへは冬のけしきにてかはらぬ物は鶴の毛ころも

十一月

五節参入

雲の上にくもらぬ御世の久しきはとよのあかりの光也けり
おとめ子の雲の梯のほるなりとよのあかりのみ火しろくたけ
雲のうへにたま装のこしを引つて昇りもやらぬ天津乙女子

小夜更てとよのあかりの諸人の乙女むかふる雲のかよひ路
今宵こそ雲あるかにのほるなれ雪をめぐらす天津乙女子
久かたの天津乙女子引つれて雲のかよひち尋きにけり
自妙のあまの羽衣つられきて乙女まちとる雲のかよひち
乙女子か雲のかよひ路空晴て豊のあかりも光そへけり

臨時祭

みたらしや汀によするさゝ波をおらてもかへすをみの袖かな
小忌衣みたらし河に影見えて立まふ程に明ぬこの夜は
櫛葉の霜うちはらひまつりきて幾世になりぬかものみつかけ
御手洗の河へにさ夜は深にけりたちまふ袖に霜寒るまで
神山のみたらし河に影みえて大宮人のかさすふちなみ
青摺の袖をつらぬるみたらしに影もこゝろもとまるけふかな
ふる袖はみたらし河にかけさえて空にそすめるうとはまの聲
月寒る御手洗河に影見えて氷にすめる山あひの袖

鷹狩

冬の日の暮ぬにつもるあふ事はきゝすたつのゝみかり也けり
けふも又みしまの原に狩暮ぬしらふの鷹の見えみ見えすみ
けふも又かたのゝみのに打出てとたちも見えず狩くらしつゝ
今日暮ぬあずもかりこむうたのはら枯野のしたにきゝす鳴也
けふも又やかて狩のに暮にけり幾とたちなかあはせきぬらん
けふも又いか日なみの御狩かりくらし交野ののをな行歸るらむ
いそきたつ日なみの御狩雪ふかしがたのゝ冬の明ほの
又もなを人にみせはや御狩するかた野のはらの雪のあしたを

十二月

神樂

神代よりなかく雲にます鏡光をはすあかほしの聲
もゝしきの大宮人の神あそび千世とそたかくこゑはきこゆる
百數の年をかされて神かきのみ室の山の櫛をそみる
雲の上に神も心や晴ぬらむ月さゆる夜のあかほしのこゑ
聲さゆる星に光やまかすらむもゝしきてらすやたの鏡は
ます鏡光をそふる雲のうへに星さえわたるこゑきこゆなり
空さえてまた霜ふかき明かたにあかほしうたふ雲の上人
ことはりや天の岩戸も明ぬらむ雲あゝの庭の朝倉のこゑ

雪

はなのおりなを縁なるときは山ゆきゆく春に逢そあやしき
けさみれば夜の間の雪にうつもれて枝もたはゝの窓の村竹
雪ふりてところもわかす咲花は梢も庭もさかり成けり
詠やる心の道もたとりけり千さとのほかの雪のあけほの
日なへつゝ山路も見えず降雪にふかき契の程をしらるゝ
みゆきふり年もつむへき君か世は竹の末までなびく成けり
吳竹も松のすゑはもおれふしてちよなこめたる雪の内かな
冬こもり野山しめたる柄まで花の春にもなせる雪かな

歳暮

賤のおは雪をこ松に引そへて春いとなみにみやま出なり
年くれて今そみ山をいたすなり兼ていはひの賤のかと松
賤のおか松もておるゝ山路をやつゝきて春の越んとすらむ
千世ふへき松さへ山を出にけり春をいとなむしつにひかれて
賤のおか祝ひてきれる松みれば千とせをたもつ心ちこそすれ
山人のかへる家路に年くれて松こそけふのかさし成けり

民もみな君か八千代を松かえに數とりそむる年の暮かな
引つれて山路に松のみゆるかな春のむかへないふ成けり

泥繪御屏風和歌 各二首

夏

納涼

は、そ原茂る梢は夏なから袖に秋たつ杜のしたかせ
尋ゆく山のこかけの涼しきや夏にしられぬところなるらし
をのつから木の間もりくる日影こそ流石に夏のしるし成けれ
夏草の風にみたる、夕暮は秋のみふかき大あらしの杜
立みれば涼しかりけりは、そ原梢は秋の色ならね共
枝茂きならの廣葉に風はれて夏にしられぬ山のかけかな
すゝみにと道は木のまにふみなれて夏をそたとる杜下かせ
君か代はよもの山邊もしけ、れは木陰涼しく清水すみけり

冬

氷

池のうへなうつむにしるき氷かな水には雪のつもる物かは
氷しく池のか、みの底すみてちとせのかけなうつしてそみる
風わたる池の水はひまなくて波よる物はあられ成けり
池水にさゆる光をたよりにて氷は月の結ふなりけり
芦間にはいかてか雪のつもらまし氷らぬ池の汀なりせは
おしのある池の汀のうす氷ふかき契りを結ふ成けり
宿からは夜をへてこほる池水もかさねむ千世の影そみえける
冬くれは池の鏡に氷めてみかきそへたる千世のかけかな

右文治六年女御入内御屏風和歌一卷以横田茂語藏本書

寫一掬畢

昭慶門院御屏風押色紙和歌

霞

爲相朝臣

かこ山のむかしのひかけたちかへり思へはとなく霞むはる哉

一條

咲ぬまは羽風いとはぬ花のえたに木つたひつくせ春の鶯

梅

前關白

とはれぬも花の名たての身のとかに梅咲宿を住やかへまし

爲世卿

よしさらは思ひのほかの人もとへまつに梢の梅匂ひを

歸鴈

爲相朝臣

一ふてを霞のうへにかきすて、跡もとゝめぬ鴈の玉章

花

爲藤朝臣

立田山ゆふつけ鳥のをのかれを夜ふかき花の色に待かな

とはるへきあるしは春にうとければ花の便もえやはたのまむ

覺助法親王

をのゝえの朽木の櫻幾かへり入山人も春にあひ見む

院御製

いにしへの春をそ思ふ今の世の花に成ぬる人のこゝろに

春月

爲藤朝臣

山風にしはし霞のひま見れば春とて月はくもらさりけり

花の色もやよひにうつる山陰に猶春ふかく霞む月かな

内大臣

秋冬

法皇御製

山吹の誰あやまちに咲そめて冬をはよその色と成けむ

郭公

爲相朝臣

れさめする我をはとはて時鳥またぬいつくの夢に鳴らむ

爲世卿

鳴ぬへき心のうらも急雨のたよりまさしき時鳥かな

國冬宿禰

めくりあふ同じさ月のほとゝきす聞ふるしても猶そあかれぬ

虚橘

法皇御製

忘れしよ右の司の袖ふれし花立はなや今かほるらむ

爲世卿

古郷のはなたち花も色よりは香こそ哀と昔わすれぬ

五月雨

五月雨は日數經ぬれとしかま川海に出ては水もまさらし

夕立

右大臣

くもるよとおもへは晴る山のはに日影さためぬ夕立のそら

七夕

權大納言局

瀬は瀬にかはらぬほとも天の川としのわたりの契りにそしる

露

爲世卿

閑置しその言の葉に忘れぬ庭のをしへの秋のしら露

秋夕

一條

なかめしと思ひなりぬる夕くれの秋のこゝろをやるかたも哉

院御製

あはれさはいつれなる寔身にしむも夕と秋とわけてななめむ

内大臣

こりすまに又袖ぬらす夕かな身はならはしの秋のななめに

虫

公顯卿

更にけり風夜寒なる月のかけむしの恨も身にともるまで

實覺

蓬生のもとの心はしられとも聞は悲しき虫の聲かな

月

太政大臣

荒にけり誰と住こし跡ならんあはれ幾世の蓬生の月

定爲

たきすさむ煙やのこる秋の田のかひやか上に霞む月かけ

頓覺

捨し身に猶まつことや光なき谷にはうとき秋の月かけ

前内大臣

まよへとも猶ゆく末にたのまるゝ道ある御世の野邊の秋霧

紅葉

實泰卿

朝なゝゝかれそまさる瀧の上のみふねの山は時雨ふるらし

初冬

太政大臣

霜かれの朝の原は跡もなしいつくを道と冬のきぬらん

覺助法親王

淺茅生に秋より霜は置なれて冬のしるしも見えぬ庭かな

時雨

爲相朝臣

いまてにほしこそやられ柏木のかけをばなれし袖の時雨は

落葉

重經卿

吹しほる枝やすからぬ山風にのこる紅葉の一葉たになし

雪

爲相朝臣

里あるゝよし野はふるき跡として積るも久し世々のしら雪

定爲

踏分し苔ちのあとも絶ぬらむ日を経て雪のなのふる道

歳暮

爲信朝臣

ゆく末を頼むまでこそいそかるれうきはかへりておしき年哉

尙侍

今はたゝ忍はんかたもなく／＼そ我涙よりあらはれぬへき

待戀

爲藤朝臣

はかなくて待らんとこそ偽に契し人もおもひ出らめ

權大納言局

ちきればと頼むも悲し偽のなき夕暮にいつならひけむ

尙侍

つらさはしらすかほにて過しきぬ戀しき事を誰にうれへむ

不逢戀

爲信朝臣

富士の根も空しき名をや立そへんあとなき戀の煙くらへに

恨戀

俊光

身のとかとこととはり知も暫しにて人のつらさに又かへりぬる

山

頓覺

富士のれはなへての山をはたちまて重れてたくふ名社高けれ

川

院御製

よしの川よしとは誰か岩なみのたかきむかしの跡しのへとも

橋

俊定卿

聞わたる跡そかしきき諸神のかたちわかれし天のうきはし

旅

公顯卿

哀なり野山の木立水のなとこれを都とおもはましかは

實教卿

都をはさてもわすれし角田川住らむとりの名はしらねとも

神祇

前内大臣

天津神國津社とわかれてもまことをうくる道はかはらし

本云

本書此和歌は昭慶門院の御屏風に爲世卿女の筆にて。色紙にかきて押給しを寫し侍なり。口一首は色紙のちらしのやう子にうつしぬ。奥はいそき寫しなり。各先年の百首の内歟。

德治元年十一月三日

又云

爲世卿女。于時權大納言局役。後入撰集。贈從三位爲子。歌人云。文才云。能書云。名譽之女房也。

應安四月六日

判有

右昭慶門院御屏風和歌以屋代弘賢藏本校正畢

最勝四天王院障子和歌

建永二年

春日野 大和

御製

若菜摘む春日の原の雪まよりそれかとにほふ野への梅が香

大御集

大僧正慈圓

春日山のへの若菜にしられけり年をつみける神の恵みな

大納言通光

また消ぬ雪かともみむ古里の春日の野への梅のはつ花

俊成卿女

霞たち消あへぬ雪も白妙のに梅が香にほふ春日の、原

有家朝臣

若菜つむ春日の野への春霞三笠のやまの聲かよふらし

定家朝臣

春日のに咲や梅かえ雪まよりけさはるくと若菜摘つ、

家隆朝臣

春日野の雪まの若菜尋れば我衣手に匂ふむめか香

雅經

春日野や咲ける梅も白妙の雪ふりやます若菜摘袖

具親

消あへぬ雪そひまなき若菜つむ袖さへ色を春日の、原

秀能

袖ぬれて霞にしへの若菜つむ春日のはらの雪の下みつ

吉野山 大和

三吉野のたかれの櫻散にけり嵐もしろき春のあけほのみよし野の外やまの花をふく風にしはしもはれぬ嶺の白雲

吉野山おくまで花や咲ぬらん霞もかほるよもの春かせ

みよし野の花のしら雲猶かけて櫻にくもる春のやま

よし野山マこほれ匂ふ花なれば霞のおくの嶺のしら雲

みよし野は花にうつるふ山なれば春さへみゆきふる里のそら

春は今いくかなるらむ吉野の山の櫻に霞たなひく

花はたゝ猶しら雲にかすみぬといふばかりにやみ吉野の山

春霞かすめは曇るみよし野のよしの、山は雪そふり鋪

吉野やまうつるふ花に朝霞たな引わたるみれの春風

三輪山 大和

三輪の山杉の木かくれゆく月に涼しくなる郭公哉

三輪の杉たつれてきなく郭公山としめし契なられと

ほとゝきすみわの神杉すきやられて問ふへき物と誰を待らん

郭公いかにたつれて三輪の山杉のふるえに昔とふらむ

千はやふる三つの神杉としふともたえすこと、へ山郭公

けふこすはみわの檜原の時鳥ゆく手の聲を誰か聞まし

過かてになりはへて鳴けかさしおる三輪の檜原の山郭公

ほとゝきす一聲すきの木のもとに尋ねみわの山ちくらしつ

時鳥またも待みん三輪の山なこりも涼し杉の下かけ

ほとゝきすなこりを袖にとゝめ置て村雨はるゝ三輪の茂山

龍田山 大和

木の葉散る秋も龍田の山おろしよ鳴ても惜めさをしかの聲

秋の色は木の葉のみかは龍田山袖にしほるゝき男鹿のこゑ

龍田やま嶺にはけしきこからしに立迷ふ鹿の秋の夕暮

龍田川せゝにみたるゝ秋の色に山かせふかき袖をなれ行

たつた山しくるゝ雲の下もみち秋の日かすも色に出らし

こすえ

可

龍田やまよもの時雨の色ながら鹿の音きそふ秋の初風
龍田やま風のしからみ秋かけてせくや河瀬の嶺のもみちは
さなしかの紅葉ふみわけ龍田山身を秋かせにひとり鳴らん
來てみればふかくそ浪もたつた河しくるゝ山の色に出にけり
龍田やま時雨にぬるゝ我か袖のまたひぬさきに散るもみち哉

泊瀬山 大和

松岡集

はつせ山世のうきものは住ぬへし杉の窓ふく雪の下かせ
雪くもるはつせの檜はち哀也かれよりほかの夕暮の空
たつれみむ雪こそ今ははつ瀬山ちきりし杉の色かはるとも
初瀬川ふる川のへにいくよへて霜につれなき二もとの杉
はつ瀬やま花があらぬかしら雪のふる川のへの杉の二もと
なはつせや峯のときは木吹しほり嵐に雲雪の山もと
雲のうちに年も暮ぬや初瀬山入あひのかれに雪はふりつゝ
すかはらやふしみのかたは時雨して雪そはつせの山のはの空

初瀬川 あて て り か れ の み 響 く 雪 の 曙
初瀬山 お の へ の 鏡 を 哀 なる 雪 の 庵 の あ け か た の 空

難波浦 攝津

難波江や芦の葉しろく明るよの霞の沖に鳥も鳴也
難波かた霞にきてゆく鴈のなこりを残す海士のつり舟
ゆくすゑの秋やなにはの若葉より契りそめたる芦のうら風
なには満かすみの空に鴈そゆく芦のわか葉や春いそく寛
霞ゆく難波の芦のうらわかみ汀の駒も春をしろらし
春の色はけふこそみつのうらわかみ芦の若葉をあらふ白浪
難波江にこゝろありてやすみそめし春のけしきをみつの浦人
難波かた波も霞のみこもりに下根とけゆく芦のうら風

なにはえの芦のわか葉をはむ駒に立まかひてもよする波かな
芦火たく煙もかすむ難波かたうらむとすれとしのゝめの月

住吉濱 攝津

住よしの浦こく舟のたえゝに霞ますとても跡は見えしな
思ひやる神代の春そ住よしの遠さとなのゝ霞也けり
たとふへき色こそなけれ住吉の遠里なのゝ春の曙
淡路しまみとりにまかふ住よしの霞の浪に春の舟人
行するは遠さとなのゝ春かすみはるかにちきれ住よしの松
しら菊の匂ひし秋もわすれ草おふてふきしの春浦風
淡路鳴夕の浪をすみよしの松さへかさす春の浦かせ
淡路しまうら漕舟のほのゝと霞に明るおきつしら波
住吉の浦こく舟のほのゝと霞にあくるおきつ白浪
すみよしの霞のうちに漕舟のまほにも見えぬ淡路しま山

芦屋里 攝津

はたるとふ芦屋の浦に蟹のたく一夜もわけぬ五月雨の空
五月雨はひま社なけれ津の國の芦屋の里の雲のやへふき
もしは焼芦屋の蟹のうきれたに浪にしほれてゆく螢かな
いさり火のかけよりほかに行螢まよふ芦屋の里のしるへか
くれぬとはつけの小櫛をさらすとも芦屋里に螢飛也
芦の屋のかりれの床のふしのまに短くあくる夏の夜な
みしか夜のまたふしなれぬ芦の屋のつまもあらはに明る東雲
夕されは秋の濱へなふく風に軒うちをよゝ芦の屋の里
いさり火はまかはぬ磯の螢かなあし屋の里の五月雨の比
五月雨は芦屋のとまや朽ぬらん軒の玉ゆらぬるゝ袖かな

布引瀧 攝津

布ひきの瀧のしら糸うちへて誰出かせに掛けてはすらん
芦の屋の嵐のぬきにおりなみて涼しく落る布引のたき
落たきつ瀧のしら玉わか袖にかけてそすゝむ夏の日くらし
夏衣秋たつ袖にいとふまてまなくみたるゝ瀧のしら玉
久かたのあまつ乙女の夏ころも雲井にさらす布ひきの瀧
布引の瀧のしら糸夏くれはたえずそ人の山路たつぬる
ぬきみたれ散るやしらす玉白妙の衣手涼し布ひきの瀧
ささ足曳の山分ころもぬきをうすみよれば涼しき布ひきの瀧
風も夏と吹や袂に散る玉のぬきみたれたる布引の瀧
布引の瀧のしら糸よるかけて月みんとてやとひこさるらん

生田杜 振律

大かたの秋の色たに悲しきにいく田の杜に露そうつるふ
しら露のしはし袖にと思へとも生田の杜に秋風そふく
しかそとふいくたの杜の下もみち露も時雨もそめぬ梢を
問したゝいく田の杜の秋の色露のかことを風にまかせて
秋にふく生田の杜の下風に誰かすむとかは鹿の鳴らん
秋とたに吹あへぬ風に色かはるいく田の杜の露の下くさ
たつれつゝ生田の杜に宿かれは鹿の音ながら秋風そ吹
津の國の生田の奥の秋風に鹿の音なるゝ杜の下露
秋ふかき心の色もしられつゝ生田の杜のさなしかのこゑ
しくれつるふいく田の杜に雲消てうつるふ色に秋風そふく

若浦 起伊

わかのうらの芦まとひ分ゆくつるの聲きく方に月そすみぬる
玉津しまむかしの跡に風吹はふしまにぬるゝわかの浦波
わかの浦や汐干をさして行鶴のつはさの波にやとる月影

たつ御衆

千々の秋の光をかけて若の浦の玉になひく有明の月
わかの浦の芦へに波のよるの鶴ふけ行月に子をおもふなり
夜の鶴鳴れふりにし秋の霜ひとりそほさぬわかの浦人
わかの浦やあしのまよひの田鶴の音は雲井の月も哀しらなん
つるのすむわかの浦風ふけぬらし芦への波に月わたる見ゆ
千世ふれとわかの浦波けふよりは君にゆつるの栖なりけり
古しへなかけてそおもふ久かたの月待宵のわかのうら瀧

吹上濱 起伊

かちをたえ夢路もたえぬ沖津風ふきあけの浪音のあらさに
紀の國やいさ吹上の濱に出て雪のしほ風空になかめん
波風に吹あけのちとりうち侘てなく音悲しき睦の空
ふりまよふ雪氣の雲の浪風に吹上の千鳥こゑまよふ也
吹上の濱風寒み跡とへは雪にあまきるむら千鳥哉
しほ風の吹上の雪にさそはれて浪の花にそ春は先たつ
鳴千とりそれかあらぬか沖津風吹あけの濱の雪の白波
冬さむみそれかあらぬかおきつかせ吹上の濱の雪のしら浪
衣手もさえゆく霜の小夜千とりはさめて渡る吹上のはま
千とり鳴吹上のたてる松風の聲すむ袖に月をやとれる

交野 河内

宿かさん人もかたのゝ笹の葉にみやまもさやと霰ふる也
散る雪に冬もかた野の櫻かり花ならなくにぬれゝそ行
霰ふる音を淋しきみかりする交野のみのゝ櫓のはかしは
かはらしな霰ふりにし狩衣かた野の原の冬かれのいろ
かりくれぬ交野のみのゝ櫓の葉に霰程ふる村雨の空
風をいたみ交野のとちしたはれて忍ふかれはに霰ふる也

たち歸り汀の宿やかり衣交野の霰袖にふる也
かり暮し今はとちも交野なるふみなら柴の雪の下折
夕つく日鳥立も見えぬ山のはのくるゝ交野に霰ふる也
露わけし野への秋草かれしより御かりはつらき天河風

水無瀬川 堤津

みなせやま木葉あらはになるまゝにおのへの鐘の聲そ近づく
水無瀬川木の葉さやけき初風に鹿のぬあらふ菊の下水
落瀧津木々の下水みなせ川なかれなめくる萬代の秋
よるつよの秋まで君を水無瀬川かけすみそめし宿の白菊
萬代の契を結ふ水無瀬川せきいるゝ庭の菊の下水
この里に老せぬ千世はみなせ川せきいるゝ庭の菊の下水
山かせのよそに紅葉はみなせ川せきいる宿の庭のしら菊
庭にうつす山路の菊をみなせ川ぬれて吹ほす千世の松風
波かせにつけても千代をみなせ川峯の松やま菊の下水
菊の花にはふ嵐にみなせやま河の瀬しらむ霧の遠かた

諷磨浦 長津

すまのあまのしはたれ衣うちはへて來てはなとみぬ浪の月影
朝なきにならぬ浪に夢も見すなれなはいかにすまの關守
もしはやく須磨の關守我からに猶おもひそふ秋の夕暮
なれぬとて袖にやとなき夜の浪すまの浦かせ秋ならてに
秋は猶衣手さむみもしはやくあまりに吹やすまの浦風
須磨の海士のなれにし袖もしはたれぬ關吹こゆる秋の浦風
ことそとて詠なれたる色もなし秋しもしるき須磨の浦かせ
定めなき心ひとつ須磨の浦の月に出たる秋あま

秋の夜はかされて袖も朽やする月をのみ見るすまの浦人
須磨の浦になか雨あかすはれにけり月は西へもいらぬ物ゆへ

明石浦 播磨

袖ぬれていくよあかしの浦風におもふかたより月も出らん

秋の夜の月ゆへくもる浦の名を雲にあかしのつけて過ぬる
あかし湯なみよりおちに雲晴てすむらん月のはてなしらばや
しらぬよの雲井のほかの秋までも明石の波にすめる夜の月
秋の夜の月をあかしのとまひさし久しく起て見つる月かな
明石かたいたさおちこちも白露のおかへの里の浪の月かけ
あかし湯うらみぬ袖も月や宿るれなまし海士のもしは波つゝ
明石かた月は波ちの果もなし秋をかきりの有明のそら
くまもなくすむへきよの友なれや明石の浪にうつる月影
あかしかた雲をへたてて行舟の待らん月に秋かせそ吹

飴磨市 播磨

播磨なるしかまの市にたつれみよ世にたつとも物や思はん
古のあゐよりもこきみよなれやしかまのかちの色をみるにも
播磨なるしかまに染るかち人の袖よりふかき秋の夕暮
いとまなみしかまの市にたつ民もしのに數そふ君か代の秋
たえずたつしかまの市の數々に千代もとあふくみよの行末
君か代は誰もしかまのいちしるくとしある民の天津空かな
たつ民もしかまの市に數そひて千とせの秋のかひを待哉
しるしらす行かふ秋の名残までいかにしかまの市の夕暮
君か代はしかまの市にたつ民の數かきりなく國をさかふる
秋くれはしかまの市にほすあゐの深き色なる風の音かな

松浦山 肥前

まつら^{やみ}に波にちかつく冬の夜の月なへたてそ八重のしほ風
唐にしきさらにみよとや松浦やまのこるもみちも枝に一むら
もろこしの秋をや今はまつら山ひれふる嶺に霜まよふ也
木のまより嵐に月をまつらかた時雨るゝ浪に渡る舟人
白妙のひれふる雪をみれたかみ松浦の沖の遠つ舟人
ならちめやまたもろこしの松浦舟こしも暮ぬ心つくしに
ましてはしみやまおろしのしくる也松浦の沖をいつる舟人
宮古には春をかけてや松浦舟とし立かへる波にまかせて
松浦やま霜ふきむすふしほかせにから國さへや月は澄らん
唐人のたのめし秋は過めとも松浦の沖に雲なへたてそ

因幡山 因幡

山の月やあけはいなはの嶺にしもまつ夜な更そ秋のよの月
嶺の松すそ野の萩もなひきゝていなはの山はたゝ秋の風
たちわかれ誰がいなはの山のはに契し跡の松風そふく
さらて又まつにしつらき夕かはいなはの山の秋風の聲
よそにみていなはの山の嶺の松まつらんとかはたのみ渡らむ
これもまた忘し物を立かへりいなはの山の秋の夕くれ
秋も今はいなはの山の嶺の松かはらぬ色をしほる嵐に
いつかといいなはの松の秋かせに身をまかせたる山の夕暮
いかてかはまつともきかはんばるゝと因幡の山の嶺の秋かせ
別てもよしやいなはの嶺に生る松となつけそ心つくしに

高砂 播磨

たかさこや尾上の秋のなかきよも明めとひとり鹿ぞ鳴なる
高砂のおのへに風や渡るらむ松のしつえをこゆる鹿の音
高砂の尾上に秋やふけぬらん嵐にかへるさなしかの聲

高砂のおのへの暮の鹿の音にうきれの夢を松風の聲
高砂の松のすゑこす秋かせになれすはこそはさ男鹿のこゑ
たかさこの松もつれなき尾上よりおのれ秋しる棹鹿の聲
たかさこの尾上の鹿の聲よりも浦こく舟もよるへしりけん
松風にうきれの浪も高砂の尾上のかたやさを鹿の聲
高砂の鹿の音をくる秋風に又となさかるおきつとも舟
吹かせの色こそみえれ高砂の尾上の松に秋は來にけり

野中清水 播磨

いにしへの野中のしみつ尋ればさゝわくる袖に露を置そふ
心あれや野中の清水かけすみて昔にやとる夏の夜の月
年へても思ひいつやと印南野のふるき清水に昔なそとふ
草ふかき野中の清水たえゝになひく末葉の風そまたるゝ
さゝ深き野中の清水かせ過てさらに昔の心をそくむ
玉ほこのみちの夏草末とをみ野中の清水しはし影みん
昔とふ野中の清水立かへりもとの心に夏そくまれん
いにしへの野中ふるみちことゝへは清水流るゝよのさゝ原
いなみ野や野中のしみつ結ふ手に玉ゆら涼し笹のかり庵
契あれば野中の清水むすびあけてもとみし影な又やとす哉

海橋立 丹後

久かたの天の橋立かすみつゝ雲井をわたる鴈ぞ鳴なる
橋立や松風かすみあけほのあまのとかへる春の鴈かれ
浦風に霞もなひく松原のみにとりに明る天の橋立
鴈かへるよさの雲井の浪ままで春にかすめる天のはし立
鴈かへる浪ちはるかにうちかすみあけ社わたれ天のはし立

ふけもみぬいく野のよそに歸る鴈がすむ波まの松とこたへよ
春の鴈聲をほにあげて行舟もあまの戸渡る天の橋立
浪路わけ釣するあまの橋立や霞にまかふよさの浦舟
いまはとて歸る鴈かれ聲までも霞てわたる天のはし立
たちまよふ波と霞のたえまより雲井に見ゆる天の橋立

宇治川 山歌

はし姫のかたしき衣さむしろにまつ夜むなしき宇治の曙
網代木にいさよふ浪の音ふけてひとりやねぬるうちの橋姫
網代木や八十うち川のしき波にこほりもあへぬさむしろの床
橋姫の氷の袖に夢たえて嵐吹そふうちの川波
ものゝふの八十氏人のまとひして浪にいさよふせいの網代木
あしる木や浪の霧まに袖見えてやそうち人は今かよふらん
網代木にこほれはやかてくたく也八十うち川の水のしら浪
さむしろに宇治の橋姫いかならん浪のみよるの瀬々の網代木
うち山の嵐におつるもみちはや網代によるのにしきなるらん

大井川 山歌

大井川なみのかよひち立かへりあと有風に木葉ちりつゝ
あらし山けふの御幸のかり衣にしきとなれと散るもみち哉
大井川入えの松をしろへにてむかしの浪にうかふもみち葉
河跡の色にはあらし大井川むかしなうつす紅葉也けり
紅葉はなみゆきふりにし大井川跡なき水に秋の有ける
大井川まれのみゆきに年へぬる紅葉のふなち跡は有けり
さかの山みゆきをうつす大井川もみちにまかふかり衣かな
この川にもみちは流るあしひきの山のかひある嵐ふくらし
紅葉はのふりにし世より大井川たえぬみゆきの跡を見る哉

大井川ふるきを忍ふ事ならはもみちの錦みふれかさらん

鳥 羽 山歌

雲ひとつ鴈の羽風に月さえてとはたの里に衣うつなり
さとしむる鳥羽田の稲葉ほの／＼と霧かくれ行淀の河舟
おしれはす鳥羽田のくろにある鴈の泪にむせふ秋の稻つま
やゝそよく稲葉の露やさそふらんとはたの秋の鴈の羽かせよ
秋の夜は宮古のみなみ月そすむとはたの面の雲あはるかに
もろ人の千世のみかけに宿しめてとはにあひみん松の秋風
君すみてとはにみるへき里なればたのもはるかに松風を吹
鳥羽田ゆく鴈の涙のちるなへに秋の山への色をかふなる
見渡せば鳥羽田の稻はかたよりてつとふる風の末をはるけき
秋立て月をおしれの露こほるとはたのおくて鴈も鳴也

伏見里 山歌

おしれはず伏見のくろにゐる鴈のとをさかりぬる曙の空
秋は空里はふしみの夕まくれ雲よりおろす萩のうは風
一夜ふす伏見の里のおかへなるわき田もかりに鹿を鳴なる
鹿の音にねさめた秋と松の風ふしみの床に露や契し
門田ふく野風をさむみかりに來て伏見の里のいれかての露
ふしみ山つまとふ鹿の涙をやりほの鹿の萩のうへの露
袖のうへもことのほかなるよるの露に鳴や伏見のさか鹿の聲
稲葉もるふしみの田井のいれかてに千世を一夜と松風を吹
獨りねのなこりも露そ置あへぬ伏見の月の曉のそら
をしかなく床の月かけ夢たえてひとりふしみの秋の山かせ

泉 川 山歌

いつみ川かはなみしろく吹風に夕す、しきさほのやままつ
 泉河いくみかのほら過ぬとも夏はおもはぬ衣かせやま
 涼さに秋そうち出るいつみ川は、その杜のきしの下水
 杵ちるもりの下風をのつから立よるはかり秋やとふらん
 秋の色をや、みかのほら泉川むすへは露の玉の井の水
 いつみ川かは浪きよくさす棹のうたかた夏をおのれけちつ、
 白妙の夕浪涼しいつみ川は、その杜のたけの下みち
 いつみ川いくせの水も深みとりしけるは、その杜の下陰
 暮る、まはかはらす秋に泉川は、その杜の月そもりくる
 いつみ川かは浪す、し水鳥のは、その杜の夏の夕かせ

小鹽山 山城

をしほやま小松かはらの明ほのみにねをへたて、たつ置かな
 小鹽やま神のしるしを松の葉に契し色はかはるものかは
 萬代をはるの嵐にしほ山かすみもなひく嶺の松はら
 おほはらやなしほの松も契らん霞も春もちよの色とは
 小鹽山小まつか原の朝かすみ君のためにや千代をこむらん
 春にあふなしほの小松かすく、に増るみとりの末そ久しき
 なしほ山今一しほの春の色に君もみとりの松そ久しき
 大原や神代かけたるゆふ霞はるやなしほの松の下かせ
 夕つく日暮ゆく春も小鹽山まつはいつともわかぬ物ゆへ
 なしほやま松に霞も色に出ぬうけひく神にみよのしめなは

相坂山 近江

あふさかのせきの相むら霞めり行も歸も春の道とて
 朝霞せきの岩かとたちならし逢坂こゆる春は來にけり
 逢坂やしるもしらぬも行入のかすみの袖に春かせそ吹

春はまつ相の梢のうすみとり霞をそむるあふ坂の關
 これやこのしるもしらぬも君か代の春の光にあふ坂の關
 今とはとて驚さそふ花の香にあふさか山の先かすみらん
 春に今は逢坂やまのいはしみつ木かくれいつる驚のこふ
 いくそたひおなし霞の立かへり春のゆき、にあふ坂の關
 東路やいくへの霞へたつらん立はしめたるあふ坂のせき
 あふさかや霞もやらぬ相の葉の下水こほるあけほの、空

志賀浦 近江

しかのあまの袖吹あらしうらふけぬ歸れや汀こほりもそする
 志賀の浦やしはし時雨の空ながら雪になり行山おろしの風
 からさきや氷吹ゆく松風に汀の田鶴もとをさかる也
 こほり行しかの浦はにある田鶴のちよの翅に拂ふ白雪
 雪ふれば氷汀もさ、浪や志賀のうらはの月の明ほの
 志賀の浦や氷もいくへある田鶴の霜の上毛に雪は降つ、
 さ、なみや志賀のうらはの水の面に氷ふきしく比良の山かせ
 峯さむみ比良山おろし雪ちりて汀氷れるしかの浦なみ
 なちかたや比良山おろし雪降ははらひわひたるしかの浦松
 志賀のうらや夜半に霜ふむあしたつのはかひの霜を吹嵐哉

鈴鹿山 伊勢

す、か川ふかき木の葉に日數へて山田の原の時雨をそきく
 もみち葉のせきは鈴鹿のいせの山錦をぬすむ風をとをすな
 す、か山嵐よこさる木のまより八十瀬の浪に秋そみたる、
 秋の色もふりすてかたきす、か山またき木末も時雨そめつ、
 秋ふかくなりけらしなす、か山紅葉は雨とふりまかひつ、
 秋は來て露はまかふと鈴鹿やまふるもみち葉に袖そうつるふ

木の葉ちる時雨も袖にすゝか山からくれなゐにふり出て行
八十瀬ゆく水はまさらて木葉のみふるやすゝかの山の秋かせ
鈴鹿山ふるや時雨も吹かせも散るもみち葉の色を尋て
すゝか河木の葉にふかき秋の色にしはしも淀む波のまそなき

二見浦 伊勢

ふたみかた月をもみかけいせの海のきよき渚の春のなこりに
玉くしけ二見の浦の名なりけり明るならひは夏の夜の月
二見潟つりする海士の夏衣ほしあへすしらむ夏のよの月
波のうへの秋にまたれぬ月影は二見の浦の明かたの空
玉くしけ二見か浦の波まくらうちふす程に有明の月
ますかゝみ二見の浦にみかゝれて神かききよき夏の夜の月
夏の夜はたまゆらもなし玉くしけ二見の浦に明る月影
玉くしけ明行そらや二見潟うらみもあへぬ波のうへの月
程もなくうらみは深し玉くしけ二見の浦の明かたの月
風ふけはいせの濱荻おりしらぬふたみの浦の月の影かな

大淀浦 伊勢

に御集

大よとの浦風かすむあけほの雲ゐを鴈のをとつて行
おほよとの春たつ波のいかならんうらみてのみも歸る鴈かれ
大よとのみるめはうとく也ねとも浪にのりか秋をわするな
おほよとの霞吹むすふ松風にうらみてのみや鴈かへるらん
大淀の松とやつくる古里にうらみぬからに歸るかりかれ
大よとの浦にかりほすみるめたに霞にたえて歸る鴈かれ
霞ゆく松さへつらし大淀の浦たつ波にかへるかりかれ
大淀の松はつらくも霞まれと波ちへたてゝ歸る鴈かれ
大よとのうらみて盪やいさりするみるかひもなき霞夜の月

大淀の春の波ちにゆく鴈のうらみてかへる曉のそら

鳴海浦 尾張

よる涙もあはれなるみのうらみさへかされて袖にさゆる比哉
きくからにあはれなるみの小夜とり霧立波のすゑの松風
浦人の日も夕暮になるみかた歸る袖より千鳥鳴なり
旅人の日も夕ぐれに鳴海かた浦かせさむみ千鳥鳴也
東路やいつより春に鳴海かた浪に花ちる雪のあけほの
鳴海潟雪の衣手ふきかへす浦風をもくこのころ月かけ
故きとも今や夕になるみかた宿とふ雲はまたしくれつゝ
夕きりにともとなるみの浦千鳥跡なきかたの汐ひみそとふ
冬ふかきけしきに今そ鳴海かた雪吹おくる沖津汐風
風吹はよそに鳴海のかた思ひおもはぬ波になく千鳥かな

濱名橋 越江

るこのかり御集

たのむとてれになきかへりこし鴈の濱名の橋の秋霧の空
又やみん雲ゐの鴈にこといはん濱名のはしの秋きりの空
鳴わたる雲井の鴈よしるへせよ濱名の橋の霧のまよひに
はつかりの雲ゐに今そ鳴わたる濱名の橋の秋霧のうへに
朝霧に濱名の橋もとたえして雲井を渡る秋の鴈かれ
霧はるゝ濱名の橋のたえゝにあらはれ渡る浦のしき浪
東路やはまなの橋の朝霧におちこち人の聲かはす也
初鴈の聲のゆくふもしら浪の濱名のはしの霧の曙
鴈かれも霧のとたえやうらむらん濱名の橋の秋の夕暮
秋かせに夕かなしき東路の濱名のはしにかゝるしら波

宇津山 駿河

日くるれはあふ人もなし宇津の山うつゝもつらし夢はみえぬに
 葛の色むかしな今に分なして心ほそきは宇津の山みち
 夕月よ露吹むす秋風にわか袖ひぬや宇津の山みち
 色々の木葉しくるゝ露分てうつゝともなき宇津の山道
 葛の色もうつりにけりな宇津の山秋もふけゆく時雨せしまに
 宇津の山うつるはかりの峯の色はわきて時雨や思そめけん
 ふみわけてさらにや越ん宇津の山うつるふ岩岩イの葛葛イの細みち
 ふみ分しむかしは夢かうつの山跡ともみえぬつたの下道下道イ
 誰にかは風のたよりもしらすへきもみちふみしく宇津の山道
 しられしな今もむかしも宇津の山葛よりしける思ひ有とも

佐良之那里

信濃

あちきなくなくさめかれつ更科やかゝらぬ山も月やすむらん
 月出はよもさらしな夜半の空をはすてならぬ秋の山かは
 更科や峯ふきくたす秋風に霧にしほれて出る月影
 里の名の秋にわすれぬ月影に人やはつらき更科の山
 しな路や雲井に聞し更科の星のしるへはをは捨の山
 嵐吹く山の月影秋なからよもさらしな里のしら雪
 秋風の吹く大空の月の色もたゝ里からの更科の山
 雲ちかき山路の月を人とはゝいまさらしなをは捨の空
 なかめわひ誰も心のおもひ哉かくてふりぬる更科の月
 更科の月ふく嵐夢にたにまたみぬ山の鹿そなくなる

清見關

駿河

きよみかた月に出ぬるとも舟のこき行波の御案にあくるほとなき
 清見かた涼しや月の秋の夜もれぬに明るはならひ成けり

きよみ瀉月はつれなき天の戸をまたてもしらむ浪のうへ哉
 月のすむ雲井をかけて清見かた夏の夜ななき浪の上哉
 清見かた月ゆへかよふよな／＼の秋をはゆるせ浪の闕もり
 きよみかた袖にも波の月をみてかたへもまたぬ風そすゝしき
 清見かた夕たつなみに雲消て月もすゝしく出る釣舟
 きよみかた關を岩根にもる月の波ま過行夏のしほかせ
 清見かた磯たちのほるしら浪のよるほともなく明る月影
 きよみ瀉みしかき夜半の浪のまにほとなくふくる有明の月

富士山

駿河

ふしの山おなし雪けの雲路よりすそ野を別て夕立そする
 雪のうへになひきてのこる富士のれの煙涼しき夏の空がな
 この頃のふしの白雪いかなれや猶ときしらぬうき嶋の松
 水無月のてる日やうすき富士の根に猶消かたき雪の白雲
 時しらぬ雪はふしの根としへても一日もいつか水無月の空
 ほとゝきす鳴や五月もまたしらぬ雪はふしのれいつとわく寛
 ふしの根の雪よりおろす山嵐五月もしらぬうき嶋のはら
 ときしらぬ山とは消てふりぬれと□□□□峯のしら雪
 時しらぬ山こそ雪のきえさらめ月さへこほるうき嶋か原
 裾野には夕立しけりふしの山けふりも雪も消ぬ物から

武藏野

武藏

むさし野や暮はいづくに宿とはん霞も道も末をしらねは
 武藏野の春やく草のゆかりとて煙に深き朝かすみかな
 行すゑのなめははてもなかりけり霞をあくるむさしのゝ原
 むさし野の春はゆかりもなければと霞にこもるわか草の露
 かすみても誰にとはまし武藏野のゆかりもしらぬ春の若草

木の葉ちる時雨も袖にすゝか山からくれないゐにふり出て行
八十瀬ゆく水はまさらて木葉のみふるやすゝかの山の秋かせ
鈴鹿山ふるや時雨も吹かせも散るもみち葉の色を尋て
すゝか河木の葉にふかき秋の色にしはしも淀む波のまそなき

二見浦 伊勢

ふたみかた月をもみかけいせの海のきよき渚の春のなこりに
玉くしけ二見の浦の名なりけり明るならひは夏の夜の月
二見潟つりする海士の夏衣ほしあへすしらむ夏のよの月
波のうへの秋にまたれぬ月影は二見の浦の明かたの空
玉くしけ二見か浦の波まくらうちふす程に有明の月
ますかゝみ二見の浦にみかゝれて神かききよき夏の夜の月
夏の夜はたまゆらもなし玉くしけ二見の浦に明る月影
玉くしけ明行そらや二見潟うらみもあへぬ波のうへの月
程もなくうらみは深し玉くしけ二見の浦の明かたの月
風ふけはいせの濱萩おりしらぬふたみの浦の月の影かな

大淀浦 伊勢

に御集

大よとの浦風かすむあけほの雲ゐを鴈のをとつて行
おほよとの春たつ波のいかならんうらみてのみも歸る鴈かれ
大よとのみるめはうとく也ねともし浪にかりか秋をわするな
おほよとの霞吹むすふ松風にうらみてのみや鴈かへるらん
大淀の松とやつくる古里にうらみぬからに歸るかりかれ
大よとの浦にかりはすみるめたに霞にたえて歸る鴈かれ
霞ゆく松さへつらし大淀の浦たつ波にかへるかりかれ
大淀の松はつらくも霞まれと波ちへたてゝ歸る鴈かれ
大よとのうらみて盪やいさりするみるかひもなき霞夜の月

大淀の春の波ちにゆく鴈のうらみてかへる曉のそら

鳴海浦 尾張

よる涙もあはれなるみのうらみさへかされて袖にさゆる比哉
きくからにあはれなるみの小夜ちとり霧立波のすゑの松風
浦人の日も夕暮になるみかた歸る袖より千鳥鳴なり
旅人の日も夕暮に鳴海かた浦かせさむみ千鳥鳴也
東路やいつより春に鳴海かた浪に花ちる雪のあけほの
鳴海潟雪の衣手ふきかへす浦風をもくこのころ月かけ
故きとも今や夕になるみかた宿とふ雲はまたしくれつゝ
夕きりにとともなるみの浦千鳥跡なきかたの汐ひみそとふ
冬ふかきけしきに今そ鳴海かた雪吹おくる沖津汐風
風吹はよそに鳴海のかた思ひおもはぬ波になく千鳥かな

濱名橋 越中

るこのかり御集

たのむとてれになきかへりこし鴈の濱名の橋の秋霧の空
又やみん雲ゐの鴈にこしはん濱名のはしの秋きりの空
鳴わたる雲井の鴈よしるへせよ濱名の橋の霧のまよひに
はつかりの雲ゐに今そ鳴わたる濱名の橋の秋霧のうへに
朝霧に濱名の橋もとたえして雲井を渡る秋の鴈かれ
霧はるゝ濱名の橋のたえゝにあらはれ渡る浦のしき浪
東路やはまなの橋の朝霧におちこち人の聲かはす也
初鴈の聲のゆくふもしら浪の濱名のはしの霧の曙
鴈かれも霧のとたえやうらむらん濱名の橋の秋の夕暮
秋かせに夕かなしき東路の濱名のはしにかゝるしら波

宇津山 駿河

も衛生

日くるれはあふ人もなし宇津の山うつゝもつらし夢はみえぬに
葛の色むかしな今に分なして心ほそきは宇津の山みち
夕月よ露吹むす秋風にわか袖ひぬや宇津の山みち
色々の木葉しくるゝ露分てうつゝともなき宇津の山道
葛の色もうつりにけりな宇津の山秋もふけゆく時雨せしまに
宇津の山うつるはかりの峯の色はわきて時雨や思そめけん
ふみわけてさらにや越ん宇津の山うつるふ岩高イの葛の細みち
ふみ分しむかしは夢かうつの山跡ともみえぬつたの下道みち
誰にかは風のたよりもしらすへきもみちふみしく宇津の山道
しらしな今もむかしも宇津の山葛よりしける思ひ有とも

佐良之那里

信濃

は御案

あちきなくなくさめかれつ更科やかゝらぬ山も月やすむらん
月出はよもさらしな夜半の空をはすてならぬ秋の山かは
更科や峯ふきくたす秋風に霧にしほれて出る月影
里の名の秋にわすれぬ月影に人やはつらき更科の山
しな路や雲井に聞し更科の星のしるへはをは捨の山
嵐吹く山の月影秋なからよもさらしな里のしら雪
秋風の吹く大空の月の色もたゝ里からの更科の山
雲ちかき山路の月を人とはゝいまさらしなをは捨の空
なめわひ誰も心のおもひ哉かくてふりぬる更科の月
更科の月ふく嵐夢にたにまたみぬ山の鹿そなくなる

清見關

駿河

の御案

きよみかた月に出ぬるとも舟のこき行波にあくるほとなき
清見かた涼しや月の秋の夜もれぬに明るはならひ成けり

きよみ瀉月はつれなき天の戸をまたてもしらむ浪のうへ哉
月のすむ雲井をかけて清見かた夏の夜なかり浪の上哉
清見かた月ゆへかよふよなゝの秋をはゆるせ浪の闕もり
きよみかた袖にも波の月をみてかたへもまたぬ風そすゝしき
清見かた夕たつなみに雲消て月もすゝしく出る釣舟
きよみかた關を岩根にもる月の波ま過行夏のしほかせ
清見かた磯たちのほるしら浪のよるほともなく明る月影
きよみ瀉みしかき夜半の浪のまにほとなくふくる有明の月

富士山

駿河

問御案

ふしの山おなし雪けの雲路よりすそ野を別て夕立そする
雪のうへになひきてのこる富士のれの煙涼しき夏の空かな
この頃のふしの白雪いかなれや猶ときしらぬうき嶋の松
水無月のてる日やうすき富士の根に猶消かたき雪の白雲
時しらぬ雪はふしの根としへても一日もいつか水無月の空
ほとゝきす鳴や五月もまたしらぬ雪はふしのれいつとわく寛
ふしの根の雪よりおろす山嵐五月もしらぬうき嶋のはら
ときしらぬ山とは消てふりぬれと□□□□峯のしら雪
時しらぬ山こそ雪のきえさらめ月さへこほるうき嶋か原
裾野には夕立しけりふしの山けふりも雪も消ぬ物から

武蔵野

武蔵

むさし野や暮はいづくに宿とはん霞も道も末をしらねは
武蔵野の春やく草のゆかりとて煙に深き朝かすみかな
行すゑのなめははてもなかりけり霞をあくるむさしのゝ原
むさし野の春はゆかりもなければと霞にこもるわか草の露
かすみても誰にとはまし武蔵野のゆかりもしらぬ春の若草

むさし野のゆかりの色もとひわひぬみながら霞む春の若草
過來つる野山もうつる程もなし春の日数はむさしの、原
淺みとり霞むばかりの若草に春もこもれるむさしの、原
みわたせば霞そなひくむさし野のまた若草の春風の比
武藏野やよこ雲かすむ明ほのに春の影なき色は見えつゝ

白川關 陸奥

雪にし袖よ夢路よたえぬへしまた白河の關のあらしに
初雪に冬草わくる朝ほらけおくそゆかしきしら河の關
しら川の關の秋をはきしかと初雪わくる山のへのみち
そこなく山路も雪にうつもれて猶たのみこし白河の關
五月雨のふる里となく日數へてけさ雪深し白河の關
くるとあくと人をこゝろになくらさて雪にもなりぬ白河の關
けぬかうへにふりしけみゆき白川の關のこなたに春も社たて
おもひなくる人はありとも東路や雪ふりぬとはしら川のせき
みやこより初雪寒し東路やみちのおくなる白河の關
陸奥のまたしら川の關みれば駒なそたのむ雪のふるみち

阿武隈川 陸奥

風はやきあふくま川の小夜ちとり涙なそへそ袖のこほりに
君か代にあふくま川の友ちとりやちよときけは末はるか也
小夜ちとりなく音すさむる人もこすあふくま川の霧の遠かた
さは千鳥やちよなそふる君か代はあふくま川のしき波の聲
冬の夜をなかくや契る友千鳥あふくま川のたえぬ汀に
思ひかれ妻とふちとり風さむみあふくま川の名をやたつぬる
君か代にあふくま川の埋木もこほりの下に春を待ける
わすれしなあふくま川の河風にしはしなれぬと千鳥鳴也

夜をさむみつまとふ千鳥うらむ也あふくま河の名やたのむ覽
年へてもあふくま川の友ちとり鳴音身にしむよはの月影

安達原 陸奥

人とはぬあたちのまゆみ誰ひけはすゑさへ夜の錦なるらん
もみちさへあたちの原の夕つくよまゆみに春の色はみさりき
たつれ来る心の秋はおくなれや安達か原の木々の梢を
みちのくのあたちのまゆみいく秋か色をこすゑの秋に染らん
故郷の梢もかくやしくるらん安達か原のゆふ暮の空
しくれ行あたちか原の夕霧にまたそめはてぬ秋をこもれる
かり人の安達のまゆみ未たはによるやなしかの秋の紅葉は
色つくや安達のまゆみ秋の末しくるゝ雲の空にたなひく
そめはてぬ木葉しくれもみちのくの名よりあたちの原の山風
安達野の秋かせそよく村すゝきうき物とてや鹿の鳴らん

宮城野 陸奥

みやき野や曉さむく吹かせに鳴音もよはき葦かな
草まくらまた宮城野の露にしてあさくも秋を詠つるかな
旅人の袖にあらしの秋ふけてしらぬ露ちる宮城のゝ原
宮城野の秋にみたるゝ虫の音に露とふ風の袖にまかへて
みやき野の木の下にわくる旅の袖露をたよりの秋の花すり
うつりあへぬ花のちくさに亂つゝ風のうへなる宮城のゝ露
宮城野はやとかる袖も松むしの鳴夕かけの萩の上露
ふるさとを忍ふもちすり露みたれ木の下しけき宮城のゝ原
宮城野の草葉の露をあらそひてまた古里の誰思ふらん
みやき野のうつるふ秋にあしひきの山たちならし鹿を鳴なる

安積沼 陸奥

程集

さゝわけし安積の沼の花かつみかつみる夢のあくるはかなさ
宮古おもふあさかの沼の花かつみかつみるかたは三日月の空
花かつみかつみるからに波こえぬあさかの沼のさみたれの比
五月雨の葉すゑの波に花かつみあさかの沼の水深きころ
花かつみかつみるからのしるへかなこれや安積の沼の岩かき
ふみしたく安積の沼の夏草にかつみたれそふしのふもちすり
夏はまた安積のぬまの花かつみかつみる色にうつる比かな
野はまた新古
夏はまたあさかの沼にかる草のかつみるまゝにしけるころ哉
年をへて又咲にけり花かつみあさかの沼のちきりとかな
みちのくやなこり安積の花かつみ深き色をは尋てもとへ

鹽竈浦 陸奥

しほかまや春のもしほのうきまくらおほる月夜に浦風を吹
人とはいかに語んしほ竈の松かせゆるき春のあけほの
あはれとや霞むにつけて鹽かまの浦こく舟の遠さかる聲
あさくても春をわけたる朝ほらけ霞る波はしほかまの浦
こゝろあらは袖をいかにとあま乙女おほる月夜の鹽かまの浦
霞とも花ともいはし春のかけいつこはあれとしほかまの浦
しきしまやまとにあらぬもろこしの春にもきかす鹽竈の浦
霞より今一しほの鹽かまに松の葉なひき浦かせそ吹
春の月まつに霞そふかみとり山のはもなき鹽かまのうら
あま人の波まにみゆる白妙の衣てかすむしほかまの浦

御製

八首

吉野山 立田山 佳吉濱 水無瀬川
因幡山 宇治川 鳥羽 鈴鹿山

大僧正 十

泊瀬山 生田杜 交野 諏摩浦 筋麿市
小鹽山 志賀浦 宮城野 海橋立 鹽竈浦

遍光 四

春日野 三輪山
若浦 清見關

俊成卿女 二

野中清水
佐良之那里

有家 二

布引瀧
武藏野

定家 六

難波浦 松浦山 伏見里
泉川 逢坂山 大淀浦

家隆 六

芦屋里 明石浦 富士山
白河關 阿武隈川 阿達原

雅經 四

大井川 二見浦
宇都山 安積沼

具親 二

吹上濱
濱名橋

秀能 二

高砂
鳴海浦

右最勝四天王院障子和歌一卷以立原萬本書寫一校畢

群書類從卷第一百七十九

和歌部三十四

句題和歌

臣千里謹言。去二月十日參議朝臣傳_レ勅曰。古今和歌多少獻上。奉_レ命以後。魂神不_ニ安臥。重_ニ病延以至_レ今。臣儒門餘孽。側聽_ニ言詩。未_レ習_ニ艷辭。不_レ知_レ所_レ爲。今臣纔搜_ニ古句。搆_ニ成新歌。別亦加_ニ自詠十首。惣百廿首。悚恐震懾。謹以舉進。豈求_レ駭_レ目。只欲解_レ願。千里誠恐懼誠謹言。

寛平六年四月廿五日

散位從五位上大江朝臣千里

春

咽_レ霧山鶯啼尙少

山高みふりくる霧にむすればや鳴鶯の聲まれらなる

鶯聲誘引來_ニ花下

鶯の啼つる聲にさそはれて花のもとにそ我はきにける

偷_レ閑何處無_レ不_レ尋_レ春

しつかなる時を尋ていつこにか花のありかをとみに尋む

花枝攀處芳紛々

花のえた折つるからにちりまかふ匂ひのあかすおもほゆる哉

不_レ見_ニ洛陽華

神さひてふりぬる里に住人は都に匂ふ花をたに見す

晚歸多是看_レ花回

今ははやかへりきなまし道なりし花を見しまに程そへにける

綠柳條弱不_レ勝_レ鶯

こつたひて緑のいとのははければ鶯とつるちからたになし

尋_レ花不_レ問_ニ春深淺

花をのみ尋こしまに春はまたふかさ淺さもしられさりけり

夜風吹送毎年春

はかなくて空なる風の年をへて春吹送ることそあやしき

春暖山花處々開

あたゝけき春の山邊の花のみそ心もわかつ咲みたれける

落盡閑華不_レ見_レ人

あと絶てしつけき山に咲花のちりはつるまで見る人もなし

老眼花前暗

としふかく老ぬるひとのかなしきは咲る花さへをとる成けり

花下忘_レ歸因_ニ美景

花を見てかへらんことのわするゝは色こき花によりて成けり

歳時春猶少

年月にまゐるときなしと思へはや春しも常にすぐれたるらん

送春那得_レ不_二慙_一

あかてのみ過行はるないかてかは心ないれてをしまさるへき

春光只是有_二明朝_一

かねてよりわか惜こし春はたゝあけむ朝そ限なるへき

兩處春光同日盡

春をのみこゝもかしこもおしめともみな同じ時盡ぬるかうさ

春酒易悲

はるゝにあひて老ぬる身なればや酔に泪のあかれさるらん

あはれとも我身のみ社おもほゆればかなき春を過しきぬれば

惆悵春歸不_二留_一得_一

歎つゝ過行春をおしめともあまつ空からふりすてゝ行

一歲唯殘_二半日春_一

ひとゝせに又ふたゝひもこし物をたゝひる中に春はのこれる

夏

春條長定夏陰盛

このめはるさかへこしゝも仇なれば花の陰とそ成まさりける

鶯多_二過春語_一

うくひすはすきにしはるな惜みつゝ鳴こゑ多き比にそ有ける

蟬不_レ待_二秋鳴_一

空蟬のみとしなりぬるものならは秋をまたてそ鳴ぬへらなる

鶯語漸稀

鶯はときならぬはや鳴聲の今はまれらになりぬへらなる

餘花葉裏稀

ちりまかふ花はこのはにかくされて稀に匂へる色をともしき

春盡啼鳥廻

限りとて春の過にしときよりそなく鳥のれのいたくきこゆる

蓮開水上紅

秋ならてはちすひらくる水の上は紅ふかき色にそありける

枝空華落稀

吹風に枝もむなしくなりゆけはおつる花こそまれに見えけれ

鳥思_二殘花枝_一

なく鳥の聲ふかくのみきこゆるはのこれる花の枝をわふるか

月照_二平砂_一夏夜霜

月影になへてまさこのてりぬれば夏のよふかき霜かとそみる

但能心靜即身涼

我心しつけき時はふく風のみにはあらねとすゝしかりけり

潤澗路甚清涼

山たかみ谷をわけつゝゆく水はふきくる風をすゝしかりける

秋

天漢迢々不可_レ期

あまの河ほととの遙になりゆけはあひみん事のさためなきかな

秋霜霰似_二年空長_一

秋のよのしもにたとへて我かみは年のはがなくおひし積れば

秋來只識_二此身衰_一

おほかたの秋くるからに我身社かなしきものと思ひしみのれ

霜草多枯虫思忽

なく霜に草のかれ行時よりそ鳴むしのれも高くきこゆる

今宵織女渡_二天河_一

ひととせにた_二今宵社_一なはたの天の河原を渡るといふなれ
心_レ情逢_レ秋_一似_レ友

ものおもふ心のあきになりぬればすへて人社みえわたりけれ
秋_レ悲不_レ到_二貴人心_一

おほかたの秋を悲しとひることも仇なる人はしらすそ有ける
樹_二葉霜紅_一

つれよりも秋の木の葉になく霜の紅ふかく見ゆるころ哉
蕭條秋思苦

かすかなる時のみ見ゆる秋しのは物思ふことそ苦しかりける
悲_二秋々多_レ老

すきてゆく秋の悲しく見えつるは老なんことのかしき也けり
紅樹蟬鳴

もみちつゝ色くれなるにみゆる日は鳴蟬さへやなくは成ぬる
□□□□□□□□

秋のよな寒みなきつるむしのれは我宿に社あまたきこゆれ
ゆくかりの秋すきかたに獨しも友におくれて鳴渡るらん

吹風の音たかくさへきこゆれば置露さへもさむくも有かな
このはみなから紅にしくるとて霜のさらにも置まさるかな

秋のよなさむみなきつゝ行鴈の霜をしのきて行かへるらん
しのゝめに秋をく露の寒ければたゝひとりしも虫のなくなる

鳥栖_二紅葉樹_一
秋すきはちりなんものななく鳥のまつもみちはの枝にしも鳴

秋鴈過盡無_二書到_一
秋のよなかつはなきつゝ過れともまつ言傳は見ゆるよもなし

寒鴈飛□□□□

行鴈の飛ことはやく見えしより秋はかきりとおもひ成にき
寒鴈聲靜客愁至

鳴鴈の聲たに絶てきこえれば旅なる人を思ひまさりぬ
なく蟬の聲高くのみきこゆるは秋すむ虫の秋そしるらし

冬

迎_レ冬先有_二好風_一
いつしかと冬を迎ふるあしたからまつよき風の吹そうれしき

中宵似_レ有_二春風至_一
小夜更に猶われられれと春風の吹くるかともおもほゆる哉

一年冬至夜偏長
ひととせに春くる事は今そしるふしをきすれはあかし難きに

新愁多待_二夜長_一來
あたらしきうれへはおほく寒きよの長きより社はしめ成けれ

心灰不_レ改_二爐中火_一
物を思ふ心ははひとくたくれとあつきたきには及はさりけり

鬢雪多_二於砌下霜_一
我髪のみな白雪と成ゆけははける霜とおとろかれけり

年々只見_二人空老_一
年々とかそへこしまにはかなくて人は老ぬる物にそありける

十分一盞暖_二於火_一
あくまでにみてる酒こそ寒きよは人の身までに暖まりけれ

老眼早覺常殘_レ夜
老てぬる目ははや覺てとこしなへよはに過れば音をのみそ鳴

霜未_レ殺_二萋々草_一

よひ／＼にまた置霜の寒ければ草葉をたにそからささりける

□□□□□□□□

獨ゐてもゆる螢にむかへはやくなともなき身とそ成ぬる

長年老_レ惜_二光陰_一

かく計老ぬと思へは今更に光の過ることもおほえす

風月

風飄白浪花千片

おきへより吹くる風はしら浪の花とのみこそ見えわたりけれ

月照波心一顆珠

照月は浪のこゝろにひかされてひとつかたにも見え渡るかな

柴扉日暮隨_レ風掩

わひてすむやとにもかりのくれ行は吹風のみそとさし成ける

不_レ明不_レ暗牖々月

照もせずくもりもはてぬ春のよの朧月夜そめてたかりける

鵲飛山月曙

かゝさきの嶺飛こえて鳴ゆけはみやまかくるゝ月かとそ見る

清景難_レ逢

雲はれてよき月影も常ならすあらんかきりはおしみ社せめ

非_レ暖非_レ寒漫々風

あつからす寒もあらすよき程に吹くる風はやますもあらなん

殘月照_レ山明

ふたつとも見えぬを月の山ことにてり渡りつゝあきらけき哉

風索屬_二閑人_一

きためなく吹くる風はきき分てなとかしけきに人に告らん

月宮有_レ路無_二思人_一

てる月の都はかりはありといへと尋てゆかん程をしられぬ

可_レ憐春風老

おしみてもとめまほしきを春風の吹過かたく成ぬと思へは

遊覽

山雲初晴水色新

雲もなく谷は山さへはれ行は水の色こそあらた成けれ

猶愛_二雲容多在_レ山

白雲の中を分つゝ夕くれのめてなきことは山にそ有ける

借問春山何處高

とひしりて雲のかけ橋とひゆかむ何れのかたか山はさかしき

水落青山出_二白雲_一

ゆく水の青き山より落くれば白雲かとそ見えまかひける

遙見_二人家一花便入

よそにても花を哀と見るほとにしらぬ山にそ我はきにける

可_レ憐悲靜地

さしわけてふかく哀と見えつるは晴てしつけき所なりけり

井下水頭無_二秋日_一

影しけき水のあたりは年をへてすきゝぬれ共見えすそ有ける

欲_レ偷_二風索一繫_二遊_レ春

吹風の光をとめんと思へはそしはしもるに遊ぶへらなる

長歳作_二獨遊人_一

あやなくも年の緒なく獨してあくかれ渡る身とや成南

天高暮山遠

天津空ちかく見えつゝはへつるは暮行やまの麓なりけり

野曠白雲浮

かきりとて野へのはるかに見えつれば立白雲も深くそ有ける

山花織錦無縁

山ことに花の錦をなれゝはそ見ゆるところのやすき空なし

□□□□□□□□

谷水のことの音絶す聞ゆればときのまなたにへたてすを見る

雜

溪流雙袖面成文

なく涙こふる袂にかゝりてはくれなるふかきあやと社見れ

別無遠近皆難見

別るともいひつる時ははるけきを近きをみぬそ戀しかりける

別後相思夢魂遠

別にし君を思ひてたつぬれば夢のたましゐはるけかりけり

朝結古郷意

あさことにむすはゝれつゝすくしつる□□□□□□□□

別後愛惜容華改

わかれにし君に見せすて徒にかたちのかはる身社つられ

白雲一片隨君去

白雲のわかるゝことに立つれと君ともにこそゆきかくれぬれ

後時相見是何時

別ての後も君見むと思へとも是ないつれの時とかは見る

送故辭春雨様多

人を送るともに春さへ過ぬればこれかうらみはあまる也けり

萬里經年別

近からすはるけき程に年をへて獨ある人はくるしかりけり

不_レ知何日又相逢

別ての後はいしらぬをいかな覽ときにか又はあはんとすらむ

沈吟難_レ別情

そこゐなく物をそおもふ有てのみ別るゝことを思ふ我身は

述懷

自靜_二其心_一延_二壽命_一

定なき心ひとつをなしつるそ命をのふる物にそありける

心更老_二於身_一

世の中をとおもひ知ぬる心こそ身よりは過て老まさりけれ

□□□□□□□□

心をしあまのうき木になしつればなかるゝ水に心まされり

何獨朝々暮々閑

はかなくていつも我身の獨して朝夕にしつゝゝゝゝゝゝゝゝ

浮生短_二於夢_一

よるへなく空にうかへる心こそ夢見るよりもはかなかりけれ

憂喜皆心灰

かなしきも嬉しきことも多かるを心ひとつそなたつかりける

自遠_二浮雲無名着_一

我身をは浮へる雲になせればそゆく方もなくはかなかりける

幻世去來夢

まほろしきよし知ぬる心にはさかなき夢と思ふ成けり

浮世水上漚

かりそめにしはし浮へるたましゐの水の泡とも譬へられつゝ

黒髪假變「春花」

黒かみのしろく俄に成ぬれば春の花とそみえたりける

恩光春景去

我君も春の光にひとしくはさきなる身ともしらぬへらなり

夢中歡樂又縁愁

夢にても嬉しきことを見る時はこゝにちりくる身には増れり

詠懷

しもわけて都尋にくる胸も春にあひては飛かへりけり
春毎にあひてもあはぬ我身かな花の雪のみ降まかひつゝ
春のみや花は咲らむ谷寒みうつもる草は光をも見す
しら浪の立かへりくる數よりも我身をなげくことは増れり
あし田鶴のひとりなきて鳴聲は雲のうへまで聞へつかなん
天雲や身をかくすらん日の光我身てらせと見るよしもなき
年毎に春秋とのみかそへつゝ身はひとゝきにあふよしもなし
思ふこと啼鶯につけたれば色もかはらぬ我ひとりてふ
みやこ迄浪立くともきかなくにしはしたになと身のしつむ寛
哀とも我みのみ社おもほゆればかなき春をすくしきぬれば
郭公さつきまたすになきにけるはかなく春をすくしきぬれば
有百廿首。大江千里之和歌也。自寛平六年二月十日。至同
四月廿五日。之詠。看三日數。幾間詠也。彼人一世之詠歌雖レ可
レ有數首。依レ隔時代。今見稀也。此後歌者吾隨レ所見書。加
之。今世雖レ有。不レ好之詞等。古風體儒門之詠歌何可レ捨乎。
不斷勘可レ被レ見之。誠溫レ故而知レ新之謂宜哉。

文保二年六月四日

參議藤判

寛平の御時きさいのみやのうた合の歌

春

鶯の谷よりいつる聲なくは春くることをいかてしらまし

夏

いくらなつなき歸るらん足引の山ほとゝきす聲ははれすも

秋

うへしとき花まちとをにありしきく移ふ秋にあはんとやみし

冬

光りまつえたにかゝれる雪を社冬のはなとはいふへかりけれ

戀

ほのにみし人に思ひをつけ初て心からこそしたにこかるれ

やとりせしはなたちはなまかれなくになと郭公聲たえにけん

ちまきといへることな

後まきのなきておふる苗なれと仇にはならぬ頼みとそきく

題不知

れに鳴てひちにしかとも春雨にぬれにし袖とはゝこたへん

やまひにわつらひて侍ける比こゝちのたのもしけなく

おほえければよみて人のもとへつかはしける

紅葉はを風にまかせてみるよりもはかなき物は命なりけり

寛平の御時うたゝてまつりけるつゝあてにたてまつりけ

る

あしたつの獨なきて鳴聲は雲のうへまで聞えつかなん

題不知

しらゆきのともに我みはふりぬれと心はきえぬ物にそ有ける

つゆかけし袂ほすまもなきものをなと秋風のまたき吹らん

世中の心になはぬなと申ければゆくさきたのもしき
身にてかゝる事あるましきと人の申侍ければ

流れてのよなも頼ます水上のあはにきへぬるうきみと思へば
つみなかりしかとも人の事につきてしはらく籠居すへ
きよしありしころ式部大輔のもとへこまやかに申をく
りしふみのおくに

都（主勝）さて波立くともきかなくにしはしたになとみのしつむらん
かへし 千古朝臣

しつむみと聞から袖に波かけてうしろやすくはいかて思はん

美材朝臣のもとにて山月照といへる事を

いつくにか今宵の月の曇るへきなぐらの山も名をやかふらん

松樹不レ變レ色

はなをめて紅葉めつる折々もつねなる松は猶もめてたし

式部大輔の庭のはなみんとてこれもかれもまかりて木
のもとにたちよりてさけなとたうへてよみ侍ける

盃のかけさしそへて思ふとちはなにまとゐのあかぬへら也

難波にとまりてよみ侍ける

なには江やおきつすとのねぬこゑも旅なる人そ哀とはきく

大舟はかけてとまりのたゆたひの旅なる人はねられさりけり

ものへまかり侍けるにはゝの例ならぬとさゝて歸ると
て

秋の日は山のはちかしくれぬまに母にみえなんあゆめあか駒

薄暮鳥鵲飛

雲まとひ夕の雨もおつる江にからすも鵲もしほれてそ行

伊豫の任に侍ける時よみ侍ける
うみやまのめつらかなるにむかひても都にみはと思ふ心あり
あした

あした

けさはしもおきけん方もしらさりつ思ひ出るそきえて悲しき
明るよりいてゝやまつるみつしほのひるま計もみねは戀しき
あふことはゆめか星合の朝風にこひしき波のよるみしほとに
きく

秋をきてとき社ありけれきくの花移ふ秋にあはんとやみし
なにしおふ色そめかへし雨ふらん花もてはやす君もこなくに
たかなな人のもとにたてまつるとて

秋もこは花にもみはやさなしかのふみしたかななおしき夏草
うめ

うめ

折人のてにも袖にも梅香はかきりなくこそしみわたりけれ
立よればにほひを袖にうつす社花もさすかの心あるなれ

いへさくら

向ひゐてあかす思ふいへ櫻くるとあくとにめなもはなたて

伊豫の任に侍けるととき人のふなてし侍りけるにあふき
にそへてつかはしけるうた

いまはとてこき出る舟のさはりなみ扇の風はへにもかけなん
あつまにまかる人にあふみをやるとて

東路にへたてはつとも武蔵あふみふたかふなと思てそやる
いはひ

すみの江の濱のまさこは限りなく君か世々へん數にとるへし

右大江千里句題和歌以一本校合

三月三日紀師近曲水宴序 序不書

花浮_ニ春水_一

躬 恒

やみかくれ岩間を分て行水の聲さへ花のかにそしみぬる

燈懸_ニ水際_一明

水底のかけもうかへるかゝり火のあまたにみゆる春のよひ哉

月入_ニ花灘_一暗

とくも入月にもある哉山のはのしけきに影の隠るとやいはむ

これひら

水の面に花はうきつゝ行らめとかにこそめつれ色をやは見

岩波のかけてゆくともみなしたの影はてります物にそ有けれ

花のせに思ひよせつゝ思へとも月なきよひはかひなかりけり

友 則

山かくれ櫻をそ思ふ行水にかさへなつかしせゝのまに／＼

みきは行螢よりけにかゝり火のかけもあかくそ見え渡りける

月の入てほととのへゆけは春のよの風につけつゝ花をおもふ哉

藤 興 風 號 號 號 太

せゝ毎にかけてそ思ふちる花のうきて流るゝかはみつのかは

白玉のふれるとや見む汀よりさやけくはれるかゝり火のかけ

花のせも見るへき物をやすらはてとくも入ぬるさらしな月

大江千里

春のよの更ゆく水のかなかけはいつくともなく花こそ有けれ

そこにさへてりつゝふかき篝火のかけにそ春の色も見えける

みか月のわれのみならんものなれや花のせにこそ思ひ入ぬれ

さかのうへのこれのり

何れをかいつれとわかん河浪のくきたつ花のかにまとはれて

汀よりてりて渡れるかゝり火のかけはしられぬ物にそ有ける

花なかつせなもみるへきみか月のわれて入ぬる山のなちかた

壬生忠岑

岩そゝく水にゆきつゝ花のかの空にめてたきやみかくれかな

浪まよりてりつゝみゆるかゝり火の影にもふかき春のよひ哉

ちりまかふ花はころもにかゝれともみなせをそ思ふ月の入方

紀のつらゆき

春なれば梅にさくらをこきませて流すみなせの河のかそする

かゝり火の上下わかぬ春のよは水ならぬみもさやけかりけり

入ぬれはをくらの山のなちにこそ月なき花のせともなりぬれ

みつれか序にいへること。さてもこよひあらさらん人は。

うたのみちもしらてまとひつゝ。あめのしたにしりかほ

するなめりと。かきたるもことばり。まことにめてたきう

たよみとかな。この世にむまれて。この人々のみなみて

うたよみしけんを見ましかは。なにこゝちせましとおも

ふも。すきたるこゝろなり。

右紀師近家曲水宴和歌以一本按合

三百首和歌

中務宗尊親王

春七十首

^{續古}

おほとものみつの濱松かすむなりはや日本に春や立らん
 首尾相叶。姿よく聞え。本歌の取成御舩殊珍重候。

東路の逢坂山も關なれはいつくをこえて春のきねらん
 いつくより霞そむらむ足引の山にも野にも春はきにけり
 立初る春の霞のうす衣なを袖さえてあは雪そふる
 山川の氷の關やこえつらん岩間の波にはる風そふく
 春風そ吹ならは。氷のとくる事も候へきと存候。

つれもなき音をたにさそへ驚のこそそのやとりの春の初風
 下句など。優美に候へとも。つれもなき音にと候味。聊不_二思
 得_一候間。卷過候。

光なき谷の驚いかにしてよそなる春の色をしるらむ
 如此本歌。存旨候之間。故不_レ申_二子細_一候。

心にもかなはぬ音をやつくすらん芹つむ野へのまつの驚
 此驚。面白くめつらしくも候へとも。猶軒梅窓竹はとより
 も。

奥山の去年の白雪けぬか上にすかの□□驚そなく
 下句同前候歟。

風さゆる山のかけの、初草のはつかに去年の雪を残れる
 故郷のよしの、山は雪消てひとひもかすみたる日はなし
 只此等之舩にこそ。歌は候へきと承候しか。尤珍重候。

春はまた霞のそこに成にけり雲井に見えしかつらきの山
 遠近の霞そふかき煙たつ淺間のたけの春の明ほの
 ふき拂ふ峯のあらしもうとければ霞もとなき武藏の、原
 武藏野の遠き心。近代満_二耳目_一候。めつらしけなく存候處。
 此嵐うとくて。野霞遠き景氣浮_レ眼候歟。

ひれふれしむかしな遠み松浦かた霞の袖に春風そふく
 心ある蟹の磯屋はかすかにて霞に残る松か浦しま
^{續古}わたつ海の浪の千里や霞らんやかぬ鹽せにたつ煙かな
 餘々事を申上候。雖_二其憚候。焼ぬ鹽せにと申事は。造立た
 る事にて候。推美麗候詞候歟。

尋_二むたかしるへとはなけれ共梅か香さそふ庭の春風
^{續古}今日もまた人もとてや紅のこそめの梅の花のさかりな
 袖にはふ山路の梅の花かつら夕こえかゝるはるのたひ人
 梅花香をなつかしみ春の、に菫もつまぬ旅れしてけり
 菫もつまぬ鹽の時申上候。

ひるは雪夜は月とそいひなさは軒はの梅の花やみさらん
 雖_二其興候。非_二本意_一候歟。
 なにかあらぬ春も昔の袖の上に梅かゝにはふ古郷の月
 初句。あまりにめつらしくや候覽。

玉_五山のははそこともみえぬ夕暮に霞て出る春のよの月
^{續古}あすか風河音更てたなやめの袖にかすめる春のよの月
 聞渡る長柄の橋の跡ふりて芹間にかすみ春のよの月
 春のよのかすめる空をけふりとてすこさぬあまたかこつ月影

第四句。先々申上候。結構之舩歟。

こきまする柳櫻もなかりけり錦のうらの春のあけほの
浦名雖_ニ珍重候。花柳失_ニ本意候歟。

いひしらぬつらさそふらし鴈金_の今_はと歸春の明ほの
東雲の霞の衣きぬ_にうらみ_て歸る春のかりかれ
前大納言基良續後撰歌。立わかれてや歸る鴈かれ。いくほと
かはらす候歟。

棹姫の春の衣のせきもあすたつや霞にかへるかりかれ
都をは住うしとてやひとやりの道ならなくにかりの行らん
松ならぬ柳か枝も玉かけてきなれの里にはるさめそふる
上句。雲面_雲様候哉。短慮難_レ罩候。

春雨は降にけらしなとなつらのおと川柳ふかみとりなり
是又あと川柳。或人詠之時此事廢忘之。至愚難_レ罩之由。亡父
中候き。

古郷の池のつゝみの柳原さすかに春はわすれさりけり
健雖_レ不_ニ覺悟。近年此偉見及候やらん。以_ニ此等_一過愚點憚之
隙と存候。

今_こふる若木の櫻花さかば此春よりやひとのまたれん
音羽山花咲ぬらし逢坂の關のこなたに匂ふはるかぜ
毎句。花麗かくこそ有難候へ。珍重に候。

ひとかたに恨やはせん散らぬ間の花の香さそふ春の山風
櫻さくあなしの山のやまかつら檜原を掛けて匂ふはる風
影うつす汀の櫻ちらぬまも花をそよする池のさゝ波
嶺ならて草葉にかゝる白雲や野中の杜の櫻なるらん
初五字草葉の雲も耳に立候哉。

櫻色に雲の衣もうつろひて霞の袖は花の香そする
常盤木にましりてさける山櫻うつろふ色をいつならひけん
花さかぬ常盤の山の峯にたに櫻をみせてかゝるしら雲
いたつらに軒端の櫻うつろひぬ獨さひしき詠せしまに
新古今。式子内親王。風より先にとふ人もかなとかや。
かきすておるたにおしき櫻花大宮人はいとまなくとも
哀けに見せもきかせず花盛人まつ宿の鶯のこゑ
初五文字不_ニ幽玄_一候也。

哀しる心ありてやあたらしの月と花とに鴈のなくらん
雪とふる花をこしちの雲と見てしはしはとまれ春の鴈金
歸かり霞のそこに音をたえてさそふ嵐の花をみしとや
終句つよく聞候歟。

いかにせん嵐のさそふ花の山しはしとなかてかへるかりかれ
うかりける花にいつより馴そめてちるはることに物思ふらん
散を見て更に我身の悔しきはさくらにそめし心なりけり
ちりぬればとふ人もなし山里は庭の櫻のおしきのみかは
常盤なる松にもおなし春風のいかにふけはか花の散らん
ときはなる物にしあらねば山櫻哀あなうと散をみる哉
末は雲もとには雪と散花のなくれ先たつはるの山かせ
あかすみる人もはかなきあたしよにおしまれんとや花の散關
以上二首故不_レ申_ニ子綱_一候。

吉野川岩間吹こす春風におられぬ波のはなも散けり
櫻色の衣ふきかへす春風に夢となり行花のおもかけ
殿守の心ある花の百敷にあさきよめするにはの春かせ

かきりあれば日数は残る春風に別をいそく山櫻かな
嵐ふくたかれの木末雲消えて花の跡もる在明の月
咲散てつらさもしらぬわたつ海の波の花ふく春の浦風
山吹はいはての里の春よりやくちなし染のはなに咲らん
飛鳥川ゆきゝの人のかさすらん岡へのつゝし今さかりなり
終句。近代満耳目二候。

花さそふ風の便をしらへにて跡なきかたに春そ暮行
驚は物うかるれにうらふれてのかみの方にはるそくれ行
第四句。不優候歟。

とゝまらぬことをあまたにしたへとや春の別を歸るかり金
くれかゝる今日は彌生の末の松夕波こえてはるや行らん

夏三十首

雲のある遠山鳥の遅櫻心なかくものこるいろかな
春イ
委詞。尤珍重候。但山鳥の尾と存候。非本意二候歟。

空にみし霞の衣はる過て今はかきれにさらす卯花
はイ
あけぬとも猶影のこせ白妙の卯花山にみしか夜の月

待侘て今宵も明ぬ時鳥たかつれなさに音をならひけん
後拾
人ならば侘つゝやれん時鳥いとゝまたるゝよはのむらさめ

尋てもいかに待みん時鳥はつれなき三わのやまもと
野橋古
逢坂の關のとやまの時鳥あくる雲井に初音なくなり

いとゝまた夢てふ物をたのめと思ひれになくほとゝきす哉
この頃をいつとさためて時鳥なのか五月もつれなかるらむ

とり啼て明行よはの時鳥なとか八聲をならはさるらん
るイ

早苗とるあへの田面の村雨にさかこえてなく郭公かな
坂こえてあへの田面。近代耳なれたるやうに候へとも、此鵲
はさなへも面白くとりなされて候歟。

荒はつるあすかの郷の時鳥都なとをみ音をやなくらん
橋のかけなき山の時鳥宿かりかれてれなやなくらん
第二句。又結構の心仕候て猶隙と存候。

しほたるゝ音をや鳴らん時鳥とはたの浦の五月雨の空
浦人のとるや早苗もたゆむらんひちきのなたの五月雨の頃
第二句。いとみなれても覺えず候。名所から非幽玄之境二候
歟。

水まさるにふの川瀬の五月雨の杳人しらぬ模なかるめり
是も妖艶の姿にては候はれ共。けにもさ社候はんと覺え候。

露にたにみかさといひし宮城のゝ木の本くらき五月雨の比
野干
殊勝珍重候。

ほに出ぬまのゝ入江のしの薄かれて波こす五月雨の比
汐のみつ入江の松の木間よりみらくすくなきみしかよの月
村雲のうつれはかはる詠かな夕立しつるやまのはのつき

是は。さしたる難にては候はれとも。次に言上候。哀はあは
れなる事。なかめは詠る事と詠へし。哀といふ物。なかめと
いふもの。別にあるやうには不可詠之由。亡父正しく申
き。又第四句。つよくきこえ候にや。

いつくにか宿なもからん有間山いなのゝ原のゆふたちの空
せはくともわらやのきに立よらん夕立向ふ逢坂のせき
初句第四句。非幽玄之体二候歟。

妻木こるしつはた帯の夕すゝみかたふきかふる谷の下風

妻木ころしつはた帯は定而候寛。旗帯いか、候寛と存候。
如し此事。雖下不_レ知_二子細_一候。萬葉集しつはた帯。按旗帯に
かきて候。しにや。俊賴朝臣。賤はた帯のかた結びと詠し候にも。若賤
かはたに付たる帯に候歟。

打なひく野嶋の時の夏草に夕波かけて浦風そふく
身を秋としつか山路にいりもせんことは夏の、茂き世中
故不_レ申_二是非_一候。

夏草のしけみか下の忘水たえく見えて行螢かな
健雖_二覺悟_一候。上下近年多見給及候。

たえく_二に數をはみせてあすか井のみまくさかくれ飛螢かな
かけるふの岩かきふちの草かくれあるかなきかに飛螢かな
上句。不_レ優候歟。

夏ふがき澤の螢も飛あしの一夜ふたよに秋やきぬらん
水上に誰かみそきをしかま川海に出たるあさの夕して
此しかま川。又近年毎_レ人詠候。此あさのゆふして。海に出。
水上のみそきをしる心殊珍重。同事もかくはなと人は仕候
はぬやらんと存候。

秋七十首

このれぬ朝露かけて玉たれのこすの大野に秋は來にけり
詞た_二くみ_一に目出見え候へとも尙隙候歟。

今朝みれば露そ隙なき芦のやのこやの一夜に秋の來ぬらん
みなと風涼しくなりて水くきの岡の朝けに秋やきぬらん
寂しさはさらてもたえぬ山里もいかにせよとか秋のきぬらん

今よりの哀ないかにしのはましとやまの庵のあきのはつかせ
うた、れのときの秋風吹そめてまた一重なる袖を露けき
更ゆけは月さへいりぬあまの川あさせ白波そそたとるらん
たかよ、り身にしむものと成にけん秋の夕の萩の上かせ
とけそむる千種の花の下ひもを結びかへたる秋のしら露
とへかしなまかきのはきの花さかり朝なく露の消やらぬ間を
名にめて、おる人もなし女郎花とはれぬ庭の秋の夕くれ
心詞。毎句珍重。返々難_二有_一鉢に候歟。

故郷のみかきか原のふしはかまたかぬきかけし匂ひなるらん
泪には秋の夕も告なくに哀しらする袖のつゆかな
草も木も露そこほる、大かたの秋の哀や泪なるらむ
我身いかに秋のならひの泪にはことはり過てぬる、袖哉
初句。少耳立候歟。

秋はきの花の笛のあれしより同野原と鹿やなくらむ
月草のはなたの帯のゆふは山たえぬる妻を鹿やこふらん
無_レ何おもしろく珍重候へとも。老心みたれ不_レ得_二心候_一。
秋霧のふかきみやまになつしかも思ひつきせぬ音や鳴らむ
大方に秋はかなしき風の音も夕そわきて袖はぬれつ、
第四句。又不_二覺悟_一候。近代定多候歟。

かりほさすしつくの田井に露ちりておはな吹しく秋の夕風
此田井。疎遠候之間。難_二申_二是非_一候。

かりにたにとふ人もなき深草の野邊なはかれす秋風そ吹
色かはる野へよりも猶閑しきは朽木の柚の秋の夕くれ
寂蓮法師。さひしさはその色としもなかりけり横たつ山の
秋の夕暮と仕候同鉢候歟。

遠さかる蟹の小舟も哀なり由良の湊の秋のゆふ暮
おり／＼に詠はすれときひしきのことにもあるか秋の夕暮
よしやたと思ひもいれし是もまたつもらは老の秋の夕くれ
雲までもあはれにたへぬけしき哉秋の夕の村雨の空
是も次に申上候。氣色といふこと。たゞに不可レ詠由亡父申
候き。

初かりも鳴てきにけり浮ことと思ひつらぬる秋のゆふくれ
秋風に草葉色つく片岡の向の峰にかりはきにけり
とやまなる横の葉をよく夕暮に初鴈鳴て秋風を吹
あらち山鴈かれ寒みやたのゝに淺茅色つく秋かせそふく
はつかりの峯飛こゆるおほひはに霜置あまる秋のよの月
昔建保之比。此おほひ羽よみたる人候しかは。おそろしと云
事にて候しかとも。この比はさならぬ事も多く候うへ。これ
は面影あまりて。面白見え候にや。

白雲の跡なき峯に出にけり月のみふれも風を便に
にの字。あまた差合候歟。小野小町。花の色はうつりにけり
な徒に我みよにふる詠せしまに。殊秀逸候へは何事候哉。
天の川月のみふれのものほりせにみかくはかりやわたす玉はし
のほりせ。大井川よりもやさしくらすや候寛。かやうの事
は。一旦はおもしろく候ことも。誠しきことには。いかゝと
存候。

新後廣

雲拂ふ夕風わたるさゝの葉のみ山さやかに出る月かけ
たいかやうに。やさしくうつくしうこそ。ありたく候へ。
一本の松はくもりもなかりけりみのゝ山のおきの夜の月

鶺鴒なくのへのあさちの露のうへにとこをならへて月を宿れる
第四句。もとめたるやうにや候寛猶隙と存候。
中々に木葉かくれも哀なりあきのけしきの杜の月影
是また隙候歟。

津の國の生田の森に入はこて月にこと吹よはの秋かせ
山鳥のをたえの橋にかゝみかけなきよ渡る秋の月かけ
山鳥のをの事。以前申候了。是又妄詞つゝきたくみに殊勝に
は候歟。

岩たかきしほたの川に船うけてさしのほりたる月を見る哉
是は。ことはなくみに力ある様歟。

舟出するあかしのと波霧暗て嶋かくれなる月をみるかな
舟出して今こそみつれたまのうらははなれ小嶋の秋のよの月
鴈のくる沙ちの末をみわたせば月に横きるあまのつりふれ
以上三艘隙候歟。

さゝ波やしかつのうらはは荒果てひとりや月の宮木もろらん
いとまなきなたの蟹人秋のよはやすくもれすて月をみる哉
第四句。やすらかならず候歟。

いつまてか立る煙を恨げんある、鹽やのあきのよの月
うらみつる煙もうすく成にけりあまのとまやのあけ方の月
さそなうきすまの關守名のみしてとゝめぬ月の在明の空
在明のつれなき峯に住鹿も月に別の音をやなくらん
うき雲をとやまのすそに分過て嶺に別る、秋の村さめ
けしき面白く見へ候へとも。其機不分明一候間暫卷過候。

我からの袖とやあまのしほるらん玉も刈浦の秋の村雨
八重とつる葎の門をふき明て野分そやとの道はみせける

第三句不候候。

露結ふ田つらの庵の月影にをしれ色つく秋かせそふく
いかばかりよ寒なるらん故郷に獨ある人の袖のあき風
續後撰に。烏羽玉の夜風を寒み故郷にひとりある人の衣う
つらしと候歟。

いつみ川かは風寒し今よりや國の宮古はころもうつらん
眞菰散遠里をの、秋風にはなすり衣今やうつらむ
家居してたか住ならしたましまの此川上に衣うつこゑ
よはにふく浦風寒みあしきたの野さかの里は衣うつ也
以上二首隙と存候。

立田山時雨ぬさきの秋風にまつうつろふは心なりけり
小初瀬の山の木の葉染つらん伏見のくれに時雨ふる也
時雨つる紅葉の山は雲晴て夕日うつろふみれの秋風
みなふちのはそ川山を時雨なるまゆみの紅葉いまさかり也
山の名。ささしからす候也。

武士のやしほにみゆる紅葉々やまゆみの闇の梢なるらん
啼鹿の聲きく時の山里を紅葉ふみ分とふ人もかな
露ふかき尾花かもとのきりくすさと思ひある音をや鳴らん
なかきよの竹田か原のきりくすきふし茂き音をや鳴らん
眞葛原また霜をかぬ秋かせにまつうらかる、松虫のこゑ
誰もまたくれ行秋は悲しきを己れ獨と虫のなくらん
くれて行秋はとまらぬ夕風にかへりやすきはへのくす原
久堅の天の岩戸の關路にもとまらて秋の今や行らん
此岩戸の關も。新勅撰以後。満耳目候歟。尙珍重候。

冬三十首

常盤山冬に成ぬと時雨めりとなき山邊に雲のかゝれる
秋の色を木にも草にも染はて、竹の葉をよきふる時雨哉
うき雲ははれぬる跡の月影にしくれのこれる峯の松かせ
藻鹽やく煙を雲の便にて時雨をいそくすまのうら風
しくるへきけしきをみする山風に先さきたちてふる木は哉

氣色以前言上候。

積りてはふちとやならんみな山川におつる峯の紅葉々
さそひ行木葉をやかてせきとめて氷をよめぬるたに川の氷
菊の咲筈や山とみえつらんくれにし秋の色のやとれる
さひしさは身にそふ物となりけり秋より後の夕暮の空
是もまた夕はまたし權のかれはの上におけるあさしも
以上二首。聊憚存言候歟。

日影さす枯野の眞葛霜とけて過にし秋にかへる露哉
霜こほるあしまの月の寒るよに聲うらかれて千鳥鳴也
こまやまのあらしや寒き泉川わたりを遠み千鳥鳴也
あへしまの岩うつ浪のよるさえて住ともきかぬとりなく也
むろの浦の汐ひのかたのさよ千鳥なきしまかけてせと渡る也
以上三首隙と存候。

故郷の河原の千鳥うらふれてさほ風寒し在明の月
河原千鳥。無念候歟。

袖とる大宮人の袖の上にやたひ霜をく在あけの月
わきもすか袖にみたる、玉かつら夕風さえて微ふる也
雪はたかことのはなればふるまゝに頼めぬ人の猶またらん

ひま寒き庵のさしかきうつもれて一夜の程に雪を積れる
 さらてたに閑しく見えし一本のなる尾の松に雪ふりにけり
 波かくるむこの浦風音たえてあはしましるく雪をつもれる
 白と申事。又亡父申旨候き。

吹おろすあそ山おろし今朝さえて冬野をひろみ雪をつもれる

白雪のとこしく峯の菩提松のみとりはいろ^{冬かな}かはるらん

よもすからこりにし柴をおりたきて雪にそあかす大原の里
 花とみる小松かくれの白雪を日影やさそふあらしなるらむ

以上四首。隙と存候て罷過候。

まさきのやにつもれる雪やとけぬらん雨にしられぬ軒の玉水
 またさかぬ冬木の梅の花の枝にかつ色見えてつもる白雪
 雪のうちにすみやく山や富士の根に立もかはらぬ煙なるらん
 霞より霜よに月を詠きてつもれば老とくるゝ年かな

戀七十首

昨日みし人の心にかゝるかな是やおもひのはしめなるらん
 上句。あまりに詞にてや候覽。

戀をむるからあるの衣の色に出て深き心をしらせてし哉
 紅のはつ花染の下衣人こそしらねふかきこゝろを
 中々によそにも見しと思ふこそ人めを忍ふ餘也けり
 是又上句うちとけて候やらん。

忍ふ山心のおくに立雲の晴ぬ思ひはしるひともし
 人しれぬ忍ふの山に鳴鹿も音に立てこそ妻をこふらめ
 ほのかにもみてを戀はやしの薄逢坂山の名はしらすとも
 思ふともいはての杜のみしめ繩くるしや何と忍ひ初けん

打もれす忍ふ思ひのあらはれてしらぬ枕を猶やかこたん
 ねすしらぬ。集巻にも多く候得とも。無には劣候歟。
 下もえのあまのたくもの夕煙末こそしらね心よはさに
 物おもふみしまかくれを行舟のほにこそ見えぬ浦風を吹
 敷ならぬみしまかくれのと新勅撰に詠し候歟。

とにかくにこかれて物を思ふ哉しほやく浦の蟹の釣舟
 こととはん鹽やの里に住あまもわかことからき物やおもふと
 消かへりくゆる思ひになからへてはては煙の夕暮そうき

聊存候旨候。

下燃にたえぬ煙の末よりや戀すてふ名の空に立らん
 人しれすこやにたく火の下煙いかなる隙にうき名立らん
 またあはぬつらさも悲し人の身をならはし物と誰かいひけん
 祈りみん鵬のみあれの詣かつらかけても人にあふひあれやと
 いかにしてよそにもみはと思ひしはつらきに馴ぬ心成けり
 さりとともひとつなさを頼かなつらき心を岩木ならねは
 なかしと思ひ果ぬるあはてのみ獨月みる秋のよなゝ
 庭つとりかけのたれをの折はへてなかきよすから亂てと思ふ
 やま鳥のをろのはつかに見し人の影をとゝむるかたみ成せは
 ここのはのあとなき末を尋てもあはての森のこからしのかせ

續古

時雨にもつれなき松はある物を泪にたへぬそての色かな
 袖に餘る泪の露やしるからん秋のならひといひはなすとも
 無指要文字餘事。強不可好之由。亡父同申候し。御事同
 事由言上候。

ほし侘る袖のためしよ何ならん草葉も秋そ露は置ける

柄にけり袖や昔の袖ならぬつゝむなみたそもとのみにして
廣ぜかはあききは人の契にて袖つく波はほす隙もなし
あちなや人の心のうきにさへたゝ我からと身を恨つゝ
哀なる身の思ひかな偽の人の契をなくさめにして
むすひ置し契よいか岩代の松にむなしきよなかさねらん
中々にたのめぬよはそまたれる人の心のかはるならひに
ふけすともまたてやれなん月にたにこさりし物をよひの村雨
雨ふらは恨さらましこぬ人の心見え成よはの月かな
第四句。不_レ優候歟。

幾秋の泪の露をはらひかれ物思ふ袖に月をみつらむ
物おもふ我がらくもる月影を泪のとかに何うらむらん
いのちすよふふしてかけしかたそきの行あひ遠き契なれとは
有明を何つれなしと思けんよふかき月になきわかれつゝ
曉はものうきそともいにしへのたか別より恨そめけん
曉はうきときなればあふ坂の夕つけ鳥も音をや鳴らん
曉は恨てのみや歸るらむ別路におふるくすの下かぜ
くれなはと契ても猶かなしきは定なきよの曉のそら
存_レ旨候間罷過候。

忘れしといひて別し曉もなにのつらさに袖のぬれけん
なきぬとて鳥より先にいそきしや忘らるゝ身の初成けん
以上二首。又隙と存候。

有しよの形見と何を詠まし月に別ぬわかみなりせは
別しと契らざりせは兼てより思ひしまゝの憂身ならまし
おもわすよれくたれかみのそのまゝに亂て人をこひん物とは
かつらきや久米の岩橋神かけて契し中のいつ絶にけん

うたゝれに頼はかりの夢も哉戀てふことのなくさめにせん
夢の中に行てやみましかへすてふよはの衣の浦のはつしま
みる夢の名残もつらし今はたゝかへさてねなんよはのき衣
第三句無念候歟。

もろこしも夢にみしかはとはかりをな／＼毎に頼はかなさ
玉はこの道行人。郭公なくやき月とは可_レ詠。櫻散木の下風
なとは不_レ可_レ詠之由。亡父申候き。

恨侘かへす衣の關すへて思ひたえぬる夢のかよひ路
夢にたに逢みんことをたえれとやぬるひまもなき思ひ成らん
思ひ餘りくるればたのむ夢路にもたへゆる中はあふ隙もなし
已上二首又隙と存候。

しらざりき我玉のをはなからへて逢みし中のたえぬ物とは
わたつ海の底の玉ものみかくれに亂てそ思ふ逢よしをなみ
詠古

逢事はなたの汐瀬に行舟のいさ遠さかる中そかなしき
あふことも今は空しきうつせみの羽にをく露の消やはてなん
あふ事はなすのゆりかれいつまでか碎けて戀に沈みはつへき
忘るなよ身のうき雲は隔ともよな／＼なれし袖の月かけ
身をあきの袖の月かけ更にけりかはる契りの末のなみたに
已上又隙と存候。

なく露も色こそかはれあた人のわれをふるせる秋の袂に
うつろはし色かはれとや契置し憂身しりける袖の露かな
あたに散花よりも猶はかなきはうつろふ人の心なりけり
うつり行人の心のはなかつら後世かけて何たのむらむ
また隙候歟。

國後拾

逢坂の關路におふるされかつら枯にし後はくる人もなし
恨ても里をはかれぬくすかつらくるしき物と誰をまつらん

讀古

眞葛原うらみしころの秋風やかれくに成はしめ成らん

雜三十首

歸りこん月日へたつな立別いなはの山の嶺のしらくも
故郷のさかひはるかになるみかた汐みちぬれば行人もなし

讀古

いかにれて夢も結はん草枕あらし吹よのさよの中山
月影に今宵は山の嶺こえて誰か野原に枕ゆふらむ
其心不分明候之間隙と存候。

岩代の松の下れのくさ枕さても結はぬ夢そかなしき

讀古

さ、枕いくのゝ末に結びきぬ一夜はかりの露の契りを
旅衣尾花が露を片敷て野邊にも波のうきねしてけり
景氣殊勝候。但僧正通昭風舩や過候はん。

さゝのやのかりれの枕夢たえて袖もよ寒の秋風そふく
故郷は遠津の濱の磯枕やまこゑてこそ波になれぬれ
是又なるかなるこゝろまとひて不分明候。暫卷過候。

うき枕またふしなれぬさゝ嶋のいそうつ波の音のはけし
河の名もことゝふ鳥もあらはれて住絶ぬるは都也けり
立歸りみてこそゆかめ富士の根のめつらしけなき煙なれ共

讀古

見渡せば鹽風あらし姫嶋の小松かうへにかゝるしらなみ
ほし佐る袖師の浦のあま人と人も汀にもしほなれつゝ

出てみる向の岡のかゝみ草露にみかける月のかけかな
以上また念して罷過候。

垣の苔瓦の松のふかみとりとしふりにける宿と見えつる
賤かすむ外やまの松のふかみとりうすきや里の煙なるらん

都人とはぬもよしや山里はさひしきにこそ心すみけり
きゝ馴れ松の風もかれてより思ひしまゝのみやまへの里
深山邊里。ふく嵐哉。不レ可レ詠之由。亡父たしかに申候き。仍
随分加三制止一候。

山里は軒はにたてるそなれ松馴ても風の音のさひしき
前はうみうしろは山の松風にひとかたならぬ波の音かな
一かた不三幽玄一候歟。

數嶋や大和嶋れの外までも渡せばわたす夢のうき橋
夢の内に猶みる夢や世中のほがなく過しむかし成らん
徒にあすかの川のせなはやみ過る月日のしからみもかな
濱千鳥昔の跡を尋ても猶道しらぬわかのうらなみ
凡中々兎も角も不レ能三言上一候。

千年山これや昔のさゝれ石岩ほにふかき苔の色かな
此山少似三大嘗會歌一候歟。

讀古

住吉のうらはの松のふかみとり久しかれとや神もうへけん
千代ふへき大内山の峯の松いよとしのはに色まさるらん
百敷やあまてる神のます鏡さみか御影をさそ守らん
鎌倉殿御詠事。申入候之處。先日如三被レ仰候。御所存之旨。具
可レ令レ注申給候條。尤可レ有之由。御氣色候哉。恐惶謹言。

十月六日

宮内卿資平奉

大納言入道殿

此一巻。給て見まいらせ候。大かた心も詞も不レ及候。末代には歌もありかたく成候ぬと存候へるに。かくやすらかに出來候御事。世のためものしく。道も今更さかへとぬと覺候。本歌とりなされて候。面白もたくみに候。中々短き詞。なろかなる心に申のへかたく候。定家は八十一に成とし。俊成に四十餘年そひて候ひしかは。申ことを承候けん。融覺は八十まで候し。定家に四十餘年うちそひて申事も時々承候き。書て候ものも。今にひき見しにも。かやうのすちにそ。歌はよむへきやうに申候しか。身こそ不堪申計候はれとも。庭のおしへ計は。體に承置て候へとも。年老候後は。心もうせたるやうに罷成て。年もわなふき人の様にも候はれとも。このめつらしく目出られ候御事存候旨。可レ申之由被レ仰下候に。何事も覺候て。かやうに申候き。かへすくかたはらいたく思おほえ給候。此度勅撰には力つき候ぬと覺候。自移し候まゝに。點もおほく成候。時にいそき候て。罷過候得共。猶力及候はぬよしな。御心得申させおはしますへく候。あなかしこく。此由を申候へは。かやうに被レ申候し上に。めてたく候鎌倉殿の御歌。おかしきやうなる御事にて候はんと。思ひまいらせ候に。左様の御事にて。わたらせおはしまし候はん。返すく目出度覺候。かやうにまことに申され候。御文とも。あの御所にゆかしき御事に候。時にまいらせられ候はんするに。まことに候哉らん。

以三朱書一之者。九條前内府被レ注レ之。

此御歌。先年書寫之所。爲レ人被レ借失一候間。尋ニ謄本一書レ之畢。

右三百首以屋代弘賢本按合

頓

阿

七夕七十首

從三位藤原爲理

七夕天

たなはたの心のうちのあらはれて人ましかほに見ゆる空哉

七夕日

七夕はあかすや猶もいそくらんくれやすき日も心つくしに

七夕月

たなはたのなとはつ秋と契りけん月のよさむの比をわすれて

七夕霞

織女のとほきわたりのあさかすみはれぬ思ひの名にや立らん

七夕風

七夕のまちこしよひもちかつきて萩のうら葉に風わたる也

七夕雲

あふ事のさはりやせんと七夕の心さはかす宵のむらくも

七夕雨

たなはたのなみたほすへきこよひたに猶袖ぬらす秋の村雨

七夕露

棚機の秋の契りは草の葉の露と、もにやむすひなきけん

七夕霧

逢ことのまれなる中もかはられは心へたつなあまの川霧

七夕煙

久かたのあまつ星あひにたむくれはげにそら焼の煙とそ見む

七夕河

涙こそあまのかはともなりぬらめあふを稀なる中に流て

諸後拾

逢坂の關路におふるされかつら枯にし後はくる人もなし
 恨ても里をはかれぬくすかつらくるしき物と誰をまつらん

讀古

眞葛原うらみしころの秋風やかれくに成はしめ成らん

雜三十首

歸りこん月日へたつな立別いなはの山の嶺のしらくも
 故郷のさかひはるかになるみかた汐みちぬれば行人もなし

讀古

いかにれて夢も結はん草枕あらし吹よのさよの中山
 月影に今宵は山の嶺こえて誰か野原に枕ゆふらむ
 其心不分明候之間隙と存候。

岩代の松の下れのくさ枕さても結はぬ夢そかなしき

讀古

さゝ枕いくのゝ末に結びきぬ一夜はかりの露の契りを
 旅衣尾花が露を片敷て野邊にも波のうきねしてけり
 景氣殊勝候。但僧正通昭風躰や過候はん。

さゝのやのかりれの枕夢たえて袖もよ寒の秋風そふく
 故郷は遠津の濱の磯枕やまこゑてこそ波になれぬれ
 是又なろかなるこゝろまとひて不分明候。暫卷過候。

うき枕またふしなれぬさゝ嶋のいそうつ波の音のはけし
 河の名もことゝふ鳥もあらはれて住絶ぬるは都也けり

立歸りみてこそゆかめ富士の根のめつらしけなき煙なれ共
 するかなる富士の白雪消る日はあれとも煙たゝぬ日はなし

讀古

見渡せば鹽風あらし姫嶋の小松かうへにかゝるしらなみ
 ほし佐る袖師の浦のあま人と人も汀にもしはたれつゝ

出てみる向の岡のかゝみ草露にみかける月のかけかな
 以上また念して罷過候。

垣の苔瓦の松のふかみとりとしふりにける宿と見えつる
 賤かすむ外やまの松のふかみとりうすきや里の煙なるらん

都人とはぬもよしや山里はさひしきにこそ心すみけり
 きゝ馴ぬ松の風もかれてより思ひしまゝのみやまへの里

深山邊里。ふく嵐哉。不_レ可_レ詠之由。亡父たしかに申候き。仍
 隨分加_二制止_一候。

山里は軒はにたてるそなれ松馴ても風の音のさひしき
 前はうみうしろは山の松風にひとかたならぬ波の音かな

一かた不_二幽多_一候歟。

敷嶋や大和嶋れの外までも渡せばわたす夢のうき橋
 夢の内に猶みる夢や世中のほがなく過しむかし成らん
 徒にあすかの川のせなはやみ過る月日のしからみもかな
 濱千鳥昔の跡を尋ても猶道しらぬわかのうらなみ

凡中々鬼も角も不_レ能_二言上_一候。

千年山これや昔のさゝれ石岩ほにふかき苔の色かな
 此山少似_二大嘗會歌_一候歟。

讀後

住吉のうらはの松のふかみとり久しかれとや神もうへけん
 千代ふへき大内山の峯の松いよとしのはに色まさるらん
 百敷やあまてる神のます鏡きみが御影なさを守らん
 鎌倉殿御詠事。申入候之處。先日如_二被_レ仰候_一。御所存之旨。具
 可_レ令_レ注申給候條。尤可_レ有之由。御氣色候哉。恐惶謹言。

十月六日

宮内卿資平奉

大納言入道殿

此一巻。給て見まいらせ候。大かた心も詞も不_レ及候。末代には歌もありかた_レく成候ぬと存候へるに。かくやすらかに出來候御事。世のためものしく。道も今更さかへとぬと覺候。本歌とりなされて候。面白もたくみに候。中々短き詞。なろかなる心に申のへかた_レく候。定家は八十一に成とし。俊成に四十餘年そひて候ひしかは。申ことを承候けん。融覺は八十まで候し。定家に四十餘年うちそひて申事も時々承候き。書て候ものも。今にひき見しにも。かやうのすちにそ。歌はよむへきやうに申候しか。身こそ不堪申計候はれとも。庭のおしへ計は。庭に承置て候へとも。年老候後は。心もうせたるやうに罷成て。年もわな_レき人の様にも候はれとも。このめつらしく目出られ候御事存候旨。可_レ申之由被_レ仰下_二候に。何事も覺候て。かやうに申候き。かへす_レかたはらいたと思おほえ給候。此度勅撰には力つき候ぬと覺候。自移し候まゝに。點もおほく成候時にいそき候て。罷過候得共。猶力及候はぬよしな。御心得申させおはしますへく候。あなかしこ_レ。此由を申候へは。かやうに被_レ申候し上に。めてたく候鎌倉殿の御歌。おかしきやうなる御事にてそ候はんと。思ひまいらせ候に。左様の御事にて。わたらせおはしまし候はん。返す_レ目出度覺候。かやうにまことに申され候。御文とん。あの御所にゆかしき御事にて候。時にまいらせられ候はんするに。まことにて候哉らん。

以_二朱書_一之者。九條前内府被_レ注_レ之。

此御歌。先年書寫之所。爲_レ人被_レ借失_一候間。尋_二證本_一書_レ之畢。

右三百首以屋代弘賢本按合

頓 阿

七夕七十首

從三位藤原爲理

七夕天

七夕日

たなはたの心のうちのあらはれて人まぢかほに見ゆる空哉

七夕月

七夕はあかすや猶もいそくらんくれやすき日も心つくしに

七夕霞

たなはたのなとはつ秋と契りけん月のよさむの比なわすれて

七夕風

織女のとほきわたりのあさかすみはれぬ思ひの名にや立らん

七夕雲

七夕のまちこしよひもちかつきて萩のうら葉に風わたる也

七夕雨

あふ事のさはりやせんと七夕の心さはかす宵のむらくも

七夕露

たなはたのなみたほすへきこよひたに猶袖ぬらす秋の村雨

七夕霧

桐機の秋の契りは草の葉の露と、もにやむすひなきけん

七夕煙

逢ことのまれなる中もかはられは心へたつなあまの川霧

七夕河

久かたのあまつ星あひにたむくれはけにそら焼の煙とそ見む

七夕河原

さよふくる天の河原のいは枕かさぬる袖も涼しかるらん

七夕瀬

銀河こそあさせやたのむらんかはらぬ中の心ならひに

七夕渡

七夕のなにたのみけんあふ事はやすのわたりの名のみ也けり

七夕磯

ゆくすゑは又こそ年をこゆるきのいそかてたのめけふの星合

七夕津

波たては八十のふな津に舟とめてやすらふ程に夜や更ぬらん

七夕岸

すみのえのたれにはあらて天の河わすれぬ草や岸になふらん

七夕波

あすよりはあまのかは波こしかたに又立かへり物やおもはん

七夕宿

七夕もやとりやすらむ久かたの中なる里の名をたのみつゝ

七夕床

七夕の今宵ばかりやちりつもるゆかのあたりなうち拂ふらん

七夕橋

織女のこゝろなからのはし／＼あらたまる世もなき契かな

七夕陰草

なみこゆる水かけ草の末葉こそみらく少なきたくひなるらめ

七夕梶

けふなまつ心をとへはかちの葉に我思ふ事をまつかゝれける

七夕鶴

まちわたるあふせそとなき鶴の羽をならふる契りなれとも

七夕鶴

袖うすきまたはつ秋の星合にかすともうけし鶴の毛衣

七夕鶏

あけぬともしはしはみまぐ星合の空にきこえぬ鳥の音もかな

七夕舟

あし分るみちとはきかすこよひたにさはらてわたせ天の川舟

七夕口

かちの音ほのかにきこゆひこほしの斐むかへ舟今かくらし

七夕賀伊

こくふれのかひのしつくもしるきまで袖に露をく星あひの空

七夕棹

あかてこそ立かへるらめさす棹のしづくににこる天の川なみ

七夕機

七夕の五百機たてゝおりしもあれおなし秋まつ虫の聲かな

七夕絲

秋をへてけふかす糸のひとすちにたえぬをなかき契とそ見る

七夕布

たなはたのうすき衣にたちぬはむけふの細布今日をまちえて

七夕衣

まとをなるあまのは衣しるらめや鹽やくうらにたくひ有とは

七夕袖

織女のひと夜はかりの契ゆへうきになれゆく袖の秋風

七夕領巾

こよひまつ七夕つめのあまつひれふりさけみればふくる空哉

七夕裳

いこほしにこよひあはんと七夕のあかもたれ引時は來にけり

七夕紐

下ひものつけてぬる夜のなきまゝにあかてやたえぬ星合の空

七夕鬘

秋をまつ七夕つめのたまかつら思ひもたえしかけもはなれす

七夕挿頭

棚機のおかぬなみたなかけそへてかさしにあまる露の白玉

七夕鞍廊

七夕のあはぬ月日はおほぬさのひくてあまたにならぬ計そ

七夕琴

七夕にたむくることのしらへさへ秋の聲にやこよひあふらん

七夕渡守

天河かへさのふねはわたし守やすらひにこそやすへかりけれ

七夕別

たなはたの又こむとは遠けれと頼みありてや起わかるらん

七夕涙

天の河わたす紅葉のくれなゐに涙もさこそ色かはるらめ

寄七夕初戀

七夕の雲のよそなるかけはかりほのかにみてもそふ思ひかな

寄七夕忍戀

人しれぬ心はかさしたなはたのしのはいと、物やおもはん

寄七夕不逢戀

いかにせむわか身はせめて七夕のひさしきほととの契たになし

寄七夕尋戀

銀漢たなはたつめにこと、はむあふよかたの、つらき渡りを

寄七夕祈戀

たなはたの心のうちやかよふとて我おもふことを祈りつる哉

寄七夕誓戀

七夕の長きためしにちかはすはしはしまこと、頼まれやせん

寄七夕契戀

七夕をかけてはいはし逢ことのたえぬ計はたのみなれとも

寄七夕待戀

牽牛のゆきあふ空をよそにみて我まつかたは更にける哉

寄七夕逢戀

今宵とて身にはいとす七夕の久しきほともならひなければ

寄七夕後朝戀

七夕のわかるゝ空のきぬ／＼はたか、たにかる涙なるらん

寄七夕稀戀

あふといへと今宵はかりの契りにて又一とせのすゑ久しき

寄七夕久戀

七夕は稀にあふよもたのむらん心なさは我そまされる

寄七夕絶戀

うき中は思ひたえてもあられけりなと七夕をよそにみつらん

寄七夕忘戀

うき人もおもひいつやとまたれつる契よそなるほしあひの空

寄七夕恨戀

七夕は行すゑまでも頼むらんたとあたし世になさけのこさぬ

禁中七夕

雲の上は星の宿りのちかければおもかけかよふ庭のとし火

旅宿七夕

草枕たひれ露けき袖のうへにみやこにゝたる星合の空

出家七夕

たなはたも逢よになりぬ今よりのみ山の秋にいかてたへまし

野亭七夕

野風ふくかり庵さむし七夕の秋さり衣我にかさなむ

海邊七夕

天河かよふみちとはきかれともしほせのあまも舟やかすらん

寄七夕懷舊

ほし合を雲井になれてみし秋はなほと近きこゝちせしかな

寄七夕懷舊

ほしあひの影をはいかてうつさましさのみしつめる水の鏡に

寄七夕釋教

七夕のまれの契りは名のみしてつきぬまことのさとりとぞ聞

寄七夕神祇

世をてらす神の御代よりたえしとを契りやをきし天津七夕

寄七夕祝

世中にたえぬためしをたつねれば我君か代にほしあひの空

右七夕七十首以長鹽信行本一揆了

大和田五月
知念武雄
小林正直

校

昭和四年八月十日印刷
昭和四年八月十五日發行

不許
複製

發行者

太田藤四郎

東京府西巢鴨町大字巢鴨二千五百七十番地
續群書類從完成會代表者

印刷者

高橋赤次郎

東京市京橋區新湊町五丁目一番地

印刷所

續群書類從完成會工場

東京市京橋區新湊町五丁目一番地

發行所

續群書類從完成會

東京府西巢鴨町大字巢鴨二千五百七十番地

振替東京六二六〇七電話大塚〇七一八

EAST-ASIAN LIB. UNIVERSITY OF TORONTO



3 1761 02964 7799